

神奈川県鎌倉市

おおくらばくふしゅうへんいせきぐん

大倉幕府周辺遺跡群発掘調査報告書

一雪ノ下三丁目 660 番 3 外 9 筆、660 番 3 先地点一

2024年3月

株式会社 齊藤建設

例 言

1. 本書は、神奈川県鎌倉市雪ノ下三丁目 660 番 3 外 9 筆、神奈川県鎌倉市雪ノ下三丁目 660 番 3 先に所在する大倉幕府周辺遺跡群（鎌倉市 No.49）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、西御門川雨水幹線改修工事に伴う事前の埋蔵文化財記録保存調査として、鎌倉市都市整備部下水道河川課の委託を受け、株式会社斉藤建設文化財調査部が実施したものである。調査面積は、令和 4 年度が 516.9㎡、令和 5 年度が 123.6㎡である。
3. 発掘調査から報告書刊行までの期間は、次のとおりである。
発掘調査期間 令和 4（2022）年 2 月 7 日～令和 5（2023）年 9 月 5 日
報告書刊行作業期間 令和 5（2023）年 9 月 6 日～令和 6（2024）年 3 月 31 日
4. 発掘調査および出土品等整理・報告書刊行作業は継 実が担当し、出土品整理事業では齋木秀雄、中村若江、今泉あかね、加藤千尋、鎌田恵子、栗谷彩子、鈴木拓美の協力を得た。また、出土遺物のうち、土器・陶磁器の実測・トレースにあたっては、株式会社博通・通玄橋考古学研究所の協力を得た。
5. 出土遺物及び調査・整理作業に係る各種資料は、一括して鎌倉市教育委員会が保存している。調査資料や遺物ラベル・注記に記載する遺跡名については、鎌倉市教育委員会が定めた遺跡略号「OBS2176」を使用した。
6. 遺構番号は遺構種別に 1 から始まる算用数字を割り当て、整地面ごとに振り直した。また、遺構の断面形については形態を下表の 6 種に分類し、これに準拠して表記した。

断面形の分類				断面形	
台形状	箱 状	階段状	漏斗状	台形状	底部に平坦面をもち、緩やか～急角度に立ち上がるもの
				箱 状	底部に平坦面をもち、ほぼ垂直に立ち上がるもの
				弧 状	底部に平坦面をもたない皿状で、緩やかに立ち上がるもの
				半円状	底部に平坦面をもたない碗状で、急斜度で立ち上がるもの
				U 字状	平面規模よりも深さの値が大きく、ほぼ垂直に立ち上がるもの
				階段状	階段状の立ち上がりをもつもの
				漏斗状	下部が U 字状、上部が V 字状の二段構造からなるもの

遺構の形態と名称

7. 調査編成は以下のとおりである。
調査担当：継 実
調査員：森健一郎
作業員：始良雅之、相良芳光、阿部裕子、井内清、井上斉、今泉あかね、岩沢幸保、梅垣卓、太田慎一、岡田秀生、鹿島保宏、片山直文、鎌田恵子、楠木健朗、栗谷彩子、鈴木健義、鈴木拓美、高松忠政、田島節男、田中君弘、出町真喜子、内藤紀枝子、長沢大輔、中村和弘、西山則子、根岸正和、野間征一、野村規子、平田尚美、藤田賢慈、丸山覚志、丸山進、山本美幸、山本喜士朗、横山雅代（（株）斉藤建設発掘作業員）
現場代理人：森 孝 重機オペレーター：伊藤洋一、中原清勝、若宮司
8. 本書の執筆は、第 2 章を森健一郎、第 5 章を中村若江、第 1・3・4・7 章を継 実が執筆した。自然化学分析は株式会社パレオ・ラボに委託し、第 6 章に分析結果を掲載した。編集は継が行った。
9. 本書に掲載した図版の縮尺については、図版中もしくはキャプションに記載した。また、トーンを掛けた部分については図版中に説明を記載した。
10. 発掘作業および出土品整理事業にあたっては、次の諸氏・諸機関からご指導・ご協力を賜った（敬称略）。
飯村均 池谷初恵（伊豆の国市教育委員会）稲本悠一（兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部）上本進二 立原遼平（神奈川県教育委員会）館内魁生（東北大学埋蔵文化財調査室）松吉里永子 馬淵和雄 水口由紀子（さきたま史跡の博物館）百瀬正恒 八重樫忠郎（岩手県立平泉世界遺産ガイドダンスセンター所長）

目 次

本文目次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の諸環境	2
第1節 遺跡の立地と歴史的環境	2
第2節 周辺の遺跡	4
第3章 調査の概要	6
第1節 グリッド・調査区の設定	6
第2節 調査経過	6
第3節 基本土層	7
第4章 検出した遺構と遺物	15
第1節 近代の暗渠	15
第2節 上段（1・2区、2区南）の遺構と遺物	16
第3節 下段（4・5・6区）の遺構と遺物	45
第5章 大倉幕府周辺遺跡出土骨角器・動物遺体について（中村若江）	96
第6章 大倉幕府周辺遺跡の自然科学分析（株式会社 パレオ・ラボ）	128
第7章 まとめ	138
第1節 検出遺構	138
第2節 出土遺物	140
第3節 各面の時期	146
第4節 5区6b面の遺構群と幕府域の関連について	150

第1～4章 挿図目次

図 1 遺跡の位置	3	図 23 2区南6面SX1	24
図 2 調査地点周辺図	5	図 24 6面上出土遺物	24
図 3 調査区分割図	6	図 25 6面整地土出土遺物	24
図 4 2区南 南壁土層図	8	図 26 1・2区・2区南7面全体図	25
図 5 1・2区西壁土層図	9	図 27 1・2区7面SD1	26
図 6 4区西壁土層図	11	図 28 2区南7面SX1	26
図 7 5区南壁土層図	13	図 29 7面出土遺物（面上／SD1／SK1／整地土）	27
図 8 6区東壁土層図	13	図 30 1・2区・2区南8面全体図	28
図 9 2区南1～4面全体図	17	図 31 2区南8面SK1	29
図 10 2区南1面上出土遺物	18	図 32 2区南8面SK1 出土遺物	29
図 11 2区南1面SD1・SD2	18	図 33 8面整地土出土遺物	30
図 12 2区南1面整地土出土遺物	18	図 34 2区南9面全体図	30
図 13 2区南1面整地土出土遺物	19	図 35 2区南9面SD1	31
図 14 2区南3面SK1	19	図 36 2区南9面整地土出土遺物	31
図 15 2区南3面整地土出土遺物	20	図 37 1・2区・2区南	32
図 16 2区南4面SD1	20	図 38 1・2区10面トレンチ土層図	33
図 17 2区南4面杭1	20	図 39 1・2区10面トレンチ土層図	34
図 18 2区南4面SD1／4面整地土出土遺物	20	図 40 1・2区10面トレンチ土層図	34
図 19 2区南5面全体図	21	図 41 1・2区10面トレンチ土層図	34
図 20 2区南5面SD1	21	図 42 1・2区10面トレンチ土層図	35
図 21 2区南5面SD1／5面整地土／6面SX1	22	図 43 2区10面SK1 出土遺物	35
図 22 1・2区・2区南6面全体図	23	図 44 10面整地土出土遺物1	36

図 45 10 面整地土出土遺物 2	37	図 85 6 区 6a 面 P1-P6	67
図 46 1・2 区・2 区南 11 面全体図	38	図 86 5・6 区 6a 面上出土遺物	68
図 47 11 面上出土遺物	39	図 87 5・6 区 6a 面整地土出土遺物 1	70
図 48 1 区 11 面 P1	39	図 88 5・6 区 6a 面整地土出土遺物 2	71
図 49 1 区 11 面大型木材	39	図 89 5 区 H41 東西トレンチ 5・6 面土層図	72
図 50 11 面整地土出土遺物	39	図 90 5 区 6b 面出土遺物（面上／道路構成土）	72
図 51 1・2 区・2 区南 12 面全体図	40	図 91 5・6 区 6b 面全体図	73
図 52 12 面上出土遺物	41	図 92 5 区 6b 面 SKP1-5 1	76
図 53 1 区 12 面 P01	41	図 93 5 区 6b 面 SKP1-5 2	76
図 54 1 区 12 面 P02	41	図 94 5 区 6b 面 SA1-5 立面図	78
図 55 2 区 12 面 SA1	42	図 95 5 区 6b 面柱穴 1	80
図 56 1・2 区 12 面 SD1	42	図 96 5 区 6b 面柱穴 2	81
図 57 1・2 区 12 面 P02／SD1 出土遺物	43	図 97 5 区 6b 面出土遺物（P／SK／SKP）	83
図 58 12 面整地土出土遺物	44	図 98 5 区 6b 面 SD1 出土遺物	84
図 59 2 区南 13 面全体図	45	図 99 5 区 6b 面 SK1-3／SX1	85
図 60 2 区南 13 面 SK1	45	図 100 4-6 区 7 面全体図	86
図 61 2 区南 13 面 SK1 出土遺物	46	図 101 4-6 区 8 面全体図	87
図 62 5 区 4 面上堆積土出土遺物	46	図 102 4 区 8 面石列／SD1	88
図 63 4-6 区 4 面全体図	47	図 103 4 区 8 面上出土遺物	88
図 64 5 区 4 面 SD1	48	図 104 4 区 8 面 SD1 出土遺物	89
図 65 5 区 4 面出土遺物（面上／SD1）	48	図 105 6 区 8 面 P／SD	89
図 66 5 区 4 面道路構成土出土遺物	49	図 106 6 区 8 面基盤層／4-6 区 10 面上出土遺物	90
図 67 5 区 4 面整地土出土遺物	50	図 107 4-6 区 9 面全体図	91
図 68 4-6 区 5 面全体図	52	図 108 4-6 区 10 面全体図	92
図 69 5 区 5 面上出土遺物	53	図 109 4 区 10 面下全体図 （中世以前の流路・弥生土器出土位置）	94
図 70 5 区 5 面道路構成土出土遺物	53	図 110 4 区 10 面下 SR1・SR2 土層図	95
図 71 5・6 区 5 面整地土出土遺物 1	54	図 111 4 区 10 面下 SR1 出土遺物	95
図 72 5・6 区 5 面整地土出土遺物 2	55	図 112 本調査地点と周辺遺跡の道路・溝・柱穴列方位	139
図 73 4-6 区 6a 面全体図	56	図 113 周辺遺跡の中世基盤層標高	140
図 74 4-6 区 6b 面全体図	57	図 114 上段／下段出土遺物内訳	140
図 75 4 区 6 面 SA1	58	図 115 1・2 区・2 区南中世土器類出土割合	141
図 76 4 区 6 面 SX1	58	図 116 4-6 区中世土器類出土割合	142
図 77 4 区 6 面 SX1 出土遺物 1	59	図 117 1・2 区・2 区南常滑焼製品機種別出土割合	143
図 78 4 区 6 面 SX1 出土遺物 2	60	図 118 4-6 区常滑焼製品機種別出土割合	143
図 79 4 区 6 面 SX1 出土遺物 3	61	図 119 かわらけ T 種・R 種出土割合	144
図 80 4 区 6 面 SX1 出土遺物 4	62	図 120 4 区 6 面 SX1 かわらけ法量分布	145
図 81 4 区 6 面 SX2	63	図 121 5 区 6a 面かわらけ法量分布	145
図 82 4 区 6 面 SX2 出土遺物 1	64	図 122 4 区 6 面 SX1 遺物出土割合	146
図 83 4 区 6 面 SX2 出土遺物 2	65		
図 84 4 区 6 面整地土出土遺物	66		

第1～4章 表目次

1 表 5 区 6b 面柱穴観察表	82	出土遺物観察表 10 土器・陶磁器 10	161
2 表 上段整地面と出土遺物型式	147	出土遺物観察表 11 土器・陶磁器 11	162
3 表 上段整地面と出土遺物型式	149	出土遺物観察表 12 土器・陶磁器 12	163
出土遺物観察表 1 土器・陶磁器 1	152	出土遺物観察表 13 土器・陶磁器 13	164
出土遺物観察表 2 土器・陶磁器 2	153	出土遺物観察表 14 土器・陶磁器 14	165
出土遺物観察表 3 土器・陶磁器 3	154	出土遺物観察表 15 土器・陶磁器 15	166
出土遺物観察表 4 土器・陶磁器 4	155	出土遺物観察表 16 石製品・鉄製品	167
出土遺物観察表 5 土器・陶磁器 5	156	出土遺物観察表 17 銭貨 1	167
出土遺物観察表 6 土器・陶磁器 6	157	出土遺物観察表 18 銭貨 2	168
出土遺物観察表 7 土器・陶磁器 7	158	出土遺物観察表 19 木製品 1	168
出土遺物観察表 8 土器・陶磁器 8	159	出土遺物観察表 20 木製品 2	169
出土遺物観察表 9 土器・陶磁器 9	160		

第5章 挿図・表・図版目次

第1図 調査区全体図	96	第9-2表 下段魚類・鳥類・哺乳類出土一覧表（下段-2）...	110
第2図 エリア別貝類組成グラフ	102	第9-3表 下段魚類・鳥類・哺乳類出土一覧表（下段-3）...	111
第3図 魚類組成グラフ	115	第9-4表 下段魚類・鳥類・哺乳類出土一覧表（下段-4）...	112
第4-1図 哺乳類組成グラフ（エリア別）	116	第9-5表 下段魚類・鳥類・哺乳類出土一覧表（下段-5）...	113
第4-2図 哺乳類組成グラフ（全体）	117	第9-6表 下段魚類・鳥類・哺乳類出土一覧表（下段-6）...	114
第1表 出土貝類種名表	98	第10表 下段魚類集計表	114
第2-1表 上段貝類出土一覧表（上段-1）	99	第11表 鳥類集計表	115
第2-2表 上段貝類出土一覧表（上段-2）	100	第12表 哺乳類集計表	116
第3-1表 下段貝類出土一覧表（下段-1）	101	第13表 ウマの歯のサイズと年齢	117
第3-2表 下段貝類出土一覧表（下段-2）	102	図版1 貝類1（巻貝）	120
第4表 貝類集計表	103	図版2 貝類2 （二枚貝・器や道具・素材として使用された貝類）...	121
第5表 出土魚類種名表	104	図版3 魚類	122
第6表 出土鳥類種名表	104	図版4 鳥類・哺乳類（1）	123
第7表 出土哺乳類種名表	106	図版5 哺乳類（2）	124
第8-1表 上段魚類・鳥類・哺乳類出土一覧表（上段-1）...	107	図版6 哺乳類（3）ウマ遊離骨・哺乳類（4）海生哺乳類 ..	125
第8-2表 上段魚類・鳥類・哺乳類出土一覧表（上段-2）...	108	図版7 骨角器・種実類	126
第8-3表 上段魚類・鳥類・哺乳類出土一覧表（上段-3）...	109	図版8 ウマ出土状況	127
第9-1表 下段魚類・鳥類・哺乳類出土一覧表（下段-1）...	109		

第6章 挿図・表目次

放射性炭素年代測定		大倉幕府周辺遺跡群（鎌倉市 No.49）のプラント・オパール分析	
表1 測定試料および処理	128	表1 分析試料一覧	133
表2 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果	129	表2 試料1g当たりのプラント・オパール個数	134
図1 暦年校正結果	130	図1 植物珪酸体分布図	136
木材の樹種同定		図版1 H63の7層から産出した植物珪酸体	137
表1 樹種同定結果	131		
図版1 木材の光学顕微鏡写真	132		

写真図版目次

PL.1 5区6b面全景・題箋軸木簡	PL.19 5・6区6a面
PL.2 遺跡近景	PL.20 5・6区6a面
PL.3 調査前の状況／検出した暗渠／2区南1面	PL.21 6区6a面／5区6b面
PL.4 2区南2・3・4面	PL.22 5区6b面／5区南壁堆積土層
PL.5 2区南4・5面／1・2区6面	PL.23 5・6区6b面
PL.6 2区・2区南6面／1・2区7面	PL.24 5区6b面
PL.7 2区・2区南7面／1・2区8面	PL.25 5区6b面
PL.8 降雨により水没した調査区／2区南8・9面	PL.26 5区6b面
PL.9 2区南9面／1・2区10面	PL.27 5区6b面
PL.10 2区10面／2区南10面／1・2区11面	PL.28 5区6b面
PL.11 1区・2区南11面／1・2区12面	PL.29 5区6b面／6区7面／4区8面
PL.12 2区12面	PL.30 4・6区8面
PL.13 2区12面	PL.31 6区8・9面／4区南側10面／4区南側近世後半 自然流路土層断面
PL.14 2区12面／2区南端西壁堆積土層／2区南12・ 13面／作業風景	PL.32 4-6区10面／降雨により水没した調査区
PL.15 2区南13面／2区南南壁堆積土層／4-6区調査前の 状況／4区で検出した暗渠／5区4面	PL.33 出土遺物1
PL.16 5区4・5面	PL.34 出土遺物2
PL.17 作業風景／4区6面	PL.35 出土遺物3
PL.18 4区6面／5区6a面／見学に訪れた市内小学生	PL.36 出土遺物4
	PL.37 出土遺物5

PL.38 出土遺物 6
PL.39 出土遺物 7
PL.40 出土遺物 8
PL.41 出土遺物 9
PL.42 出土遺物 10
PL.43 出土遺物 11
PL.44 出土遺物 12
PL.45 出土遺物 13
PL.46 出土遺物 14
PL.47 出土遺物 15

PL.48 出土遺物 16
PL.49 出土遺物 17
PL.50 出土遺物 18
PL.51 出土遺物 19
PL.52 出土遺物 20
PL.53 出土遺物 21
PL.54 出土遺物 22
PL.55 出土遺物 23
PL.56 出土遺物 24
PL.57 出土遺物 25

第 1 章 調査に至る経緯

本調査地は、鎌倉市雪ノ下三丁目 660 番 3 外 9 筆、鎌倉市雪ノ下三丁目 660 番 3 先に所在し、鎌倉市 No.49「大倉幕府周辺」遺跡群の範囲に位置する。本発掘調査は、横浜国立大学附属鎌倉小中学校地（以下、校地）内を流れる西御門川暗渠の老朽化による改修工事に伴う調査であり、以下に調査に至る経緯を述べる。

当該地における河川改修工事が鎌倉市都市整備部下水道河川課（以下、下水道河川課）によって計画され、それを受けた鎌倉市教育委員会（以下、市教委）は、2020 年 10 月 5 日から 11 月 5 日にかけて暗渠東側 5 箇所を試掘確認調査を行った。その結果、多い所では 10 面もの鎌倉時代初期から南北朝時代の整地層と多数の遺物が出土し、『神奈川県内における開発事業に伴う埋蔵文化財の取扱基準』に基づく記録保存のための発掘調査が必要と判断された。

下水道河川課から「西御門川雨水幹線埋蔵文化財発掘調査業務委託」を受託した株式会社斉藤建設は、2022 年 2 月 7 日～2023 年 3 月 31 日、2023 年 4 月 1 日～9 月 5 日の 2 年度にわたって発掘調査を実施した。調査総面積は 640.5㎡である。調査中は、整地層毎に調査を終えた段階で鎌倉市教育委員会文化財課立ち会いの下、部分完了確認を受け、調査が終了した 9 月 5 日に最終確認を受けている。遺跡の略記号は「OBS2176」である。

届出関係書類一覧表					
文書種別・内容	文書番号	日付	発信者	受信者	備考
文化財保護法94条第1項に基づく土木工事の提出					
土木工事の届出	—		鎌倉市	神奈川県教育委員会教育長	鎌倉市教委を經由
発掘指示の通知			神奈川県教育委員会教育長	鎌倉市	鎌倉市教委を經由
文化財保護法92条に基づく発掘調査の届出（2021年度）					
発掘調査の届出		2022年1月24日	株式会社 斉藤建設	神奈川県教育委員会教育長	鎌倉市教委を經由
発掘調査届の受理通知	文遺第50059号	2022年2月1日	神奈川県教育委員会教育長	株式会社 斉藤建設	鎌倉市教委を經由
文化財保護法92条に基づく発掘調査の届出（2022年度）					
発掘調査の届出		2023年2月9日	株式会社 斉藤建設	神奈川県教育委員会教育長	鎌倉市教委を經由
発掘調査届の受理通知	文遺第50057号	2023年3月7日	神奈川県教育委員会教育長	株式会社 斉藤建設	鎌倉市教委を經由
出土品の手続き（2022年度）					
埋蔵物の発見届		2023年4月5日	株式会社 斉藤建設	鎌倉警察署長	
埋蔵文化財保管証の提出		2023年4月5日	株式会社 斉藤建設	神奈川県教育委員会教育長	鎌倉市教委を經由
文化財認定と県帰属の通知		2023年4月21日	神奈川県教育委員会教育長	株式会社 斉藤建設	鎌倉市教委を經由
出土品の手続き（2023年度）					
埋蔵物の発見届		2023年9月12日	株式会社 斉藤建設	鎌倉警察署長	
埋蔵文化財保管証の提出		2023年9月12日	株式会社 斉藤建設	神奈川県教育委員会教育長	鎌倉市教委を經由
文化財認定と県帰属の通知		2023年9月25日	神奈川県教育委員会教育長	株式会社 斉藤建設	鎌倉市教委を經由

第2章 遺跡の諸環境

第1節 遺跡の立地と歴史的環境

本調査地点は、JR 鎌倉駅の北東約 1km、鶴岡八幡宮の東側に隣接する横浜国立大学附属小中学校地内に位置する。地番は鎌倉市雪ノ下三丁目 660 番 3 外 9 筆、鎌倉市雪ノ下三丁目 660 番 3 先である。地勢としては、南向きに開口する比較的奥の深い谷の開口部に位置しており、西御門川が校地の中央を流下する。現地表の標高は北端が 14.2 m、南端で 12.1 m と、南に向かって緩く下降する。いくつかの小谷を内包するこの谷を埋め尽くすように現在では個人住宅が建ち並ぶが、鎌倉時代には報恩寺・保寿院・高松寺・来迎寺、尼寺の太平寺など複数の寺院があったというから（貫・川副 1980）、谷の開発は早い段階から行われていたことがわかる。寺院に関しては、その後の廃絶や移動によって、現在は来迎寺のみが残る。一方、調査地点の南側には、朝比奈峠を源とする滑川が相模湾に向かって南流する。流域に形成された河岸段丘面では、縄文時代の比較的早い段階から人間活動が始まり、弥生時代中期には集落が形成されるようになる。

『吾妻鏡』によれば、1180（治承 4）年 10 月 6 日に鎌倉入りした源頼朝は、大倉郷の地に新邸を造営する。頼朝は当初、現在の寿福寺付近にあった父・義朝の旧邸跡に新邸を造営しようとしたものの、三浦一族の岡崎義実によって義朝の菩提を弔う堂が建てられていたことや、土地が狭小であったことから計画を変更したようである。大倉の新邸は、大庭景義を普請奉行として 2 か月後の 12 月 12 日に完成し、「移徙之儀」が行われたが、当初の建物は山ノ内荘の知家事兼道邸宅を移築したものであったという。1181（養和元）年 6 月には新御所が完成している記事がみえ、頼朝の居住後も整備は順次進められていたことがわかる。1191（建久 2）年、1213（建保元）年 6 月の和田合戦と、御所は 2 度の火災に見舞われるが、その都度復興し、1225（嘉禄元）年の北条泰時による幕府移転まで源氏 3 代にわたる政務がここで執り行われた。

1959（昭和 34）年に刊行した『鎌倉市史』総説編は、1180（治承 4）年に鎌倉入りした源頼朝が最初に設けた幕府（大倉幕府）の範囲を、南北約二町×東西二丁半として、その西端を校地東に隣接する道路までとした（高柳 1959）。鎌倉市遺跡台帳には、この範囲が「大倉幕府跡」という遺跡名で登録されている。歴史地理学者の山村亜希は、1997 年に発表した論文の中で、明治期の雪ノ下村地籍図を基に大倉幕府の範囲を検討し、西端を西御門川までとした（山村 1997・2009）。いずれも推測の域を出るものではないが、現在は、後者の範囲に幕府域を想定する向きが多い。今回、発掘調査を実施した地点は、上に述べた「大倉幕府跡」の西隣にあることから、「大倉幕府周辺遺跡群（鎌倉市 No.49）」という遺跡名で登録されている範囲に所属する。

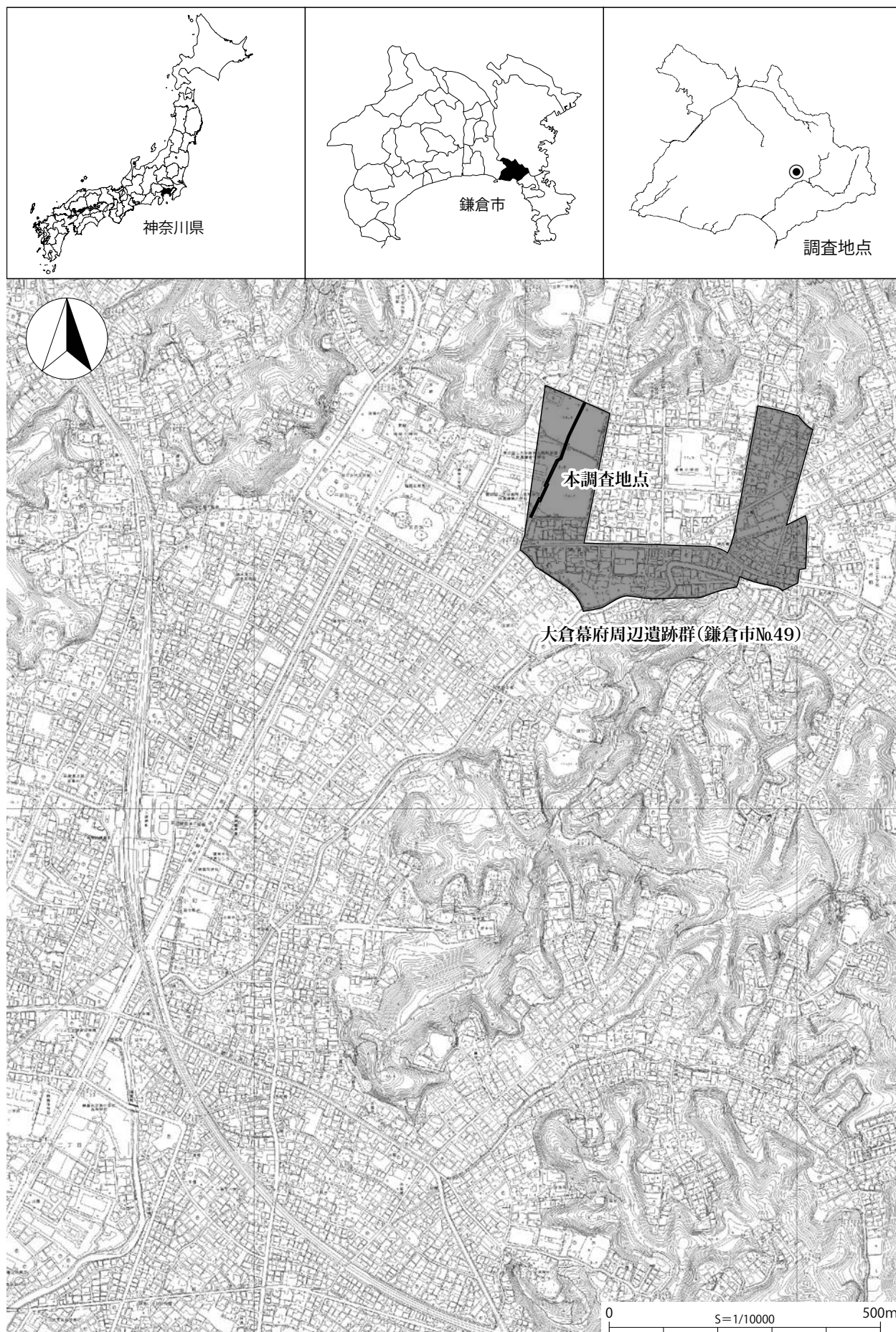


図1 遺跡の位置

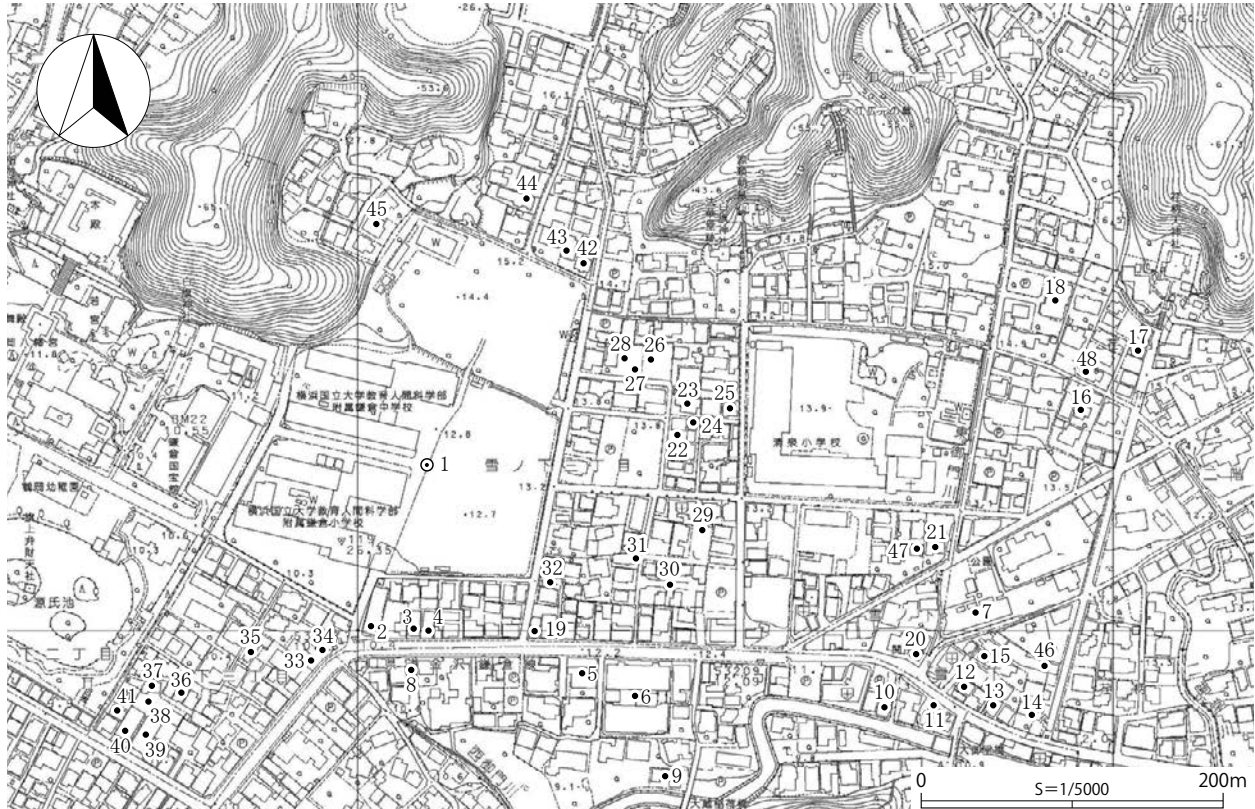
第 2 節 周辺の遺跡

大倉幕府周辺遺跡群を中心に、「大倉幕府跡」「政所跡」「西御門遺跡」「保寿院跡」といった周辺の遺跡に属する既報告の遺跡を図 2 に掲げた。この一帯では、現在の六浦道に面した範囲、政所跡で括られた範囲内、大倉幕府跡で括られた範囲のうち清泉小学校西側の 3 箇所で多くの調査が行われている。六浦道沿いでは、図 2-2 ～ 4 で本遺跡とほぼ同じ方位に設けられた 13 世紀初頭～中葉の大溝と柵列、六浦道に並行する 13 世紀後葉～15 世紀末葉の大溝といった区画に伴う遺構群や、礎石建物・井戸・土坑などの生活遺構を検出している。これより東側の 19 でも V 字断面の大溝とその南側に道路面を検出しているが、間に位置する 4 では、大溝が通るべき場所に一辺 1 m 前後の大型柱穴群が発見されている。六浦道を隔てた南側、6 の地点では 12 世紀後葉～16 世紀代（もしくは近世）にかかる 3 面の生活面を検出し、13 世紀初頭以前の V 字断面南北大溝をはじめ、井戸、土坑、建物の頻繁な立て替えを示す無数の柱穴など多くの遺構を検出している。この地点では、このほかにも中世以前の東西南北を基軸とする方形区画の水田、弥生時代後期の竪穴住居や方形周溝墓、溝などを検出している。これに先行して 5 の地点で行われた調査でも、六浦道南側に並行する V 字断面大溝や布掘状の柱穴列をはじめとする中世の遺構群と、弥生時代中期後半の集落を検出している。

二階堂大路との分岐点に位置する 12 ～ 15 のうち、12 地点では、二階堂大路に並行する溝を検出している。7 では、二階堂大路に並行する溝や柱穴列、東御門川旧流路とそれに並行する溝と道路状遺構、床面積 200㎡を超える大型建物をはじめとする掘立柱建物群を検出している。20 では、中世後期～近世の礎石建物や南北溝、7 世紀頃に埋没した流路を検出している。幕府中心域にあたる 22 ～ 24 では、13 世紀初頭～15 世紀前半にかかる 11 面の生活面と、掘立柱建物をはじめとする多種多様な遺構群を検出している。幕府北側周縁部に位置する 16 ～ 18 でも 12 世紀末もしくは 13 世紀初頭から開発が行われ、複数の生活面と建物をはじめとする遺構群を検出している。

政所跡で括られる範囲のうち、本調査地点近隣に位置する 33・34 地点では、大溝を伴う 14 世紀代の小町大路や、12 世紀末から 13 世紀前半の南北溝を検出している。

西御門遺跡で括られる範囲では、幕府推定域の北端に面して 42 ～ 44 の地点で調査が行われ、掘立柱建物を伴う複数の生活面を検出している。特に 44 地点では、12 世紀末～15 世紀にわたる 13 面もの生活面を検出しており、精力的な開発が行われていたことが窺える。保寿院跡に属する 45 地点でも同様の活動痕跡が確認でき、13 世紀初頭～15 世紀代にかけて泥岩による 10 面の生活面と建物の一部を検出している。



大倉幕府周辺遺跡群

1. 本調査地点
2. 雪ノ下三丁目606番1『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9 平成4年度発掘調査報告(第3分冊)』鎌倉市教育委員会,1993
3. 雪ノ下三丁目607番外『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10 平成5年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会,1994
4. 雪ノ下三丁目607番1『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20 平成15年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会,2004
5. 雪ノ下四丁目620番5『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14 平成9年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会,1998
- 『神奈川県鎌倉市 大倉幕府周辺遺跡群 雪ノ下四丁目620番5地点発掘調査報告』大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団,1999
6. 雪ノ下四丁目581番5地点『大倉幕府周辺遺跡発掘調査報告書一雪ノ下四丁目581番5地点一』有限会社 鎌倉遺跡調査会,2007
7. 二階堂字佐柄38番1『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9 平成4年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会,1993
8. 雪ノ下四丁目608番4『大倉幕府周辺遺跡群 (No.49) 発掘調査報告書 鎌倉市雪ノ下四丁目608番4地点』株式会社 博通,2018
9. 雪ノ下四丁目580番10外『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17 平成12年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会,2001
10. 雪ノ下三丁目570番1『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書30 平成25年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会,2014
11. 雪ノ下四丁目567番7『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20 平成15年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会,2004
12. 雪ノ下大倉耕地562番16『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17 平成12年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会,2001
13. 雪ノ下天神前562番29『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12 平成7年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会,1996
14. 雪ノ下大倉耕地565番4『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7 平成2年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会,1990
15. 雪ノ下天神前562番30『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書32 平成27年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会,2016
16. 二階堂字佐柄27番3『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書22 平成17年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会,2006
17. 二階堂字佐柄76番8『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書30 平成25年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会,2014
18. 二階堂字佐柄58番4外『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18 平成13年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会,2002
46. 二階堂字佐柄3番6外『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書35 平成30年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会,2019
48. 二階堂字佐柄76番4『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書35 平成30年度発掘調査報告(第3分冊)』鎌倉市教育委員会,2019

大倉幕府跡

19. 雪ノ下三丁目618番4『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18 平成13年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会,2002
20. 雪ノ下大倉耕地569番1『大倉幕府周辺遺跡群 雪ノ下大倉耕地569番1地点発掘報告書』大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団,1990
21. 雪ノ下三丁目637番4『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書27 平成22年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会,2011
22. 雪ノ下三丁目701番14『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21 平成16年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会,2005
23. 雪ノ下三丁目701番3『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21 平成16年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会,2005
24. 雪ノ下三丁目701番1『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21 平成16年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会,2005
25. 雪ノ下三丁目704番3外『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書27 平成22年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会,2011
26. 雪ノ下三丁目694番18『大倉幕府跡 (No.253) 発掘調査報告書 鎌倉市雪ノ下三丁目694番18地点』株式会社 博通,2013
27. 雪ノ下三丁目693番1『大倉幕府跡 (No.253) 発掘調査報告書 鎌倉市雪ノ下三丁目693番1地点』株式会社 博通,2013
28. 雪ノ下三丁目693番8『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書31 平成26年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会,2015
29. 雪ノ下三丁目648番8『大倉幕府跡発掘調査報告書(雪ノ下三丁目648番8地点)』有限会社 鎌倉遺跡調査会,2015
30. 雪ノ下三丁目629番1『大倉幕府跡 (No.253) 発掘調査報告書 鎌倉市雪ノ下三丁目629番1地点』株式会社 博通,2011
31. 雪ノ下三丁目651番8外『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15 平成10年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会,1999
32. 雪ノ下三丁目618番8,653番9『大倉幕府跡 (No.253) 発掘調査報告書 鎌倉市雪ノ下三丁目618番8・653番9地点』株式会社 博通,2017
47. 雪ノ下三丁目637番6外『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書34 平成29年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会,2018

政所跡

33. 雪ノ下三丁目966番1『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書8 平成3年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会,1992
34. 雪ノ下三丁目965番『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書8 平成3年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会,1992
35. 雪ノ下三丁目970番2外『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15 平成10年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会,1999
36. 雪ノ下三丁目973番15『政所跡(鎌倉市No.247遺跡) 発掘調査報告書 鎌倉市雪ノ下三丁目973番15地点』株式会社 博通,2023
37. 雪ノ下三丁目977番1,976番の各一部『政所跡(No.247) 発掘調査報告書 雪ノ下三丁目977番1、976番の各一部地点』株式会社 博通,2019
38. 雪ノ下三丁目976番,977番の各一部『政所跡(鎌倉市No.247遺跡) 発掘調査報告書 鎌倉市雪ノ下三丁目976番、977番の各一部地点』株式会社 博通,2023
39. 雪ノ下三丁目987番1,2『政所跡』政所跡発掘調査団,1991
40. 雪ノ下三丁目988番『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9 平成4年度発掘調査報告(第3分冊)』鎌倉市教育委員会,1993
41. 雪ノ下三丁目989番4『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17 平成12年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会,2001

西御門遺跡

42. 西御門一丁目11番14『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書32 平成27年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会,2016
43. 西御門一丁目681番1『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書32 平成27年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会,2016
44. 西御門一丁目910番5『西御門遺跡 (No.325) 発掘調査報告書 鎌倉市西御門一丁目910番5地点』株式会社 博通,2020

保寿院跡

45. 西御門一丁目922番4『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23 平成18年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会,2007

図2 調査地点周辺図

第3章 調査の概要

第1節 グリッド・調査区の設定（図3）

調査にあたっては、国土座標に合わせる形で10m四方を一単位とするグリッドを設定した。調査範囲が南北220mと長大なことや基礎工事との兼ね合いから、調査範囲を6分割して区画毎に調査を行うこととし、調査を終えた区画は基礎工事に着手できるようにした。各調査区は北側から算用数字を付し、1区から順に調査を行った。調査区東西壁には崩落防止材の矢板を保持するH鋼が2m前後の間隔で打たれており、調査を開始してみるとH鋼がグリッドの代用になることがわかり、遺構や遺物の位置についてはH鋼番号で把握することとした。番号は、調査区上段、下段それぞれ北端のH鋼を起点に算用数字を割り当て、調査区名と組み合わせて「1区H1」などと表した。国土座標と調査区の関わりについては、国土地理院のホームページにある都市再生街区基本調査及び都市部官民境界基本調査の成果の提供システムで公開されている近隣の補助点3A069（X=-75006.642,Y=-24994.371）、3A070（X=-75080.685,Y=-25072.495）を用いて調査区内に測量用基準点K1,K2を設置した。調査区の移動にあたっては、K1,K2を基にその都度測量基準点を増設し、対応した。

第2節 調査経過

2022（令和3）年2月1日付けで神奈川県教育委員会から発掘調査届の受理通知を受け、同月7日より発掘調査に着手した。校地は南北2段の雛壇状に造成されており、上段（北側）のグラウンドを事務所や機材、残土置き場などの用地に充てた。

調査区の環境整備、調査機材の搬入、調査事務所の設営といった事前準備は調査開始に先立って1月下旬から始めており、調査開始日は朝から重機による表土掘削を行ったが、鉄骨・鉄板を含む大規模な旧校舎基礎という想定外の支障物があり、調査の開始が遅れることとなった。

調査は3月1日に再開した。旧校舎基礎の撤去作業に伴い、上段部分（1・2区）の旧暗渠がすべて露呈したので、同3日にJT空撮により航空写真の撮影を行った。撮影後、暗渠の撤去や調査区壁崩落対策として矢板の設置などを行い、3月23日より1区の発掘調査に着手した。調査区が水路内に位置することから、まとまった降水がある度に大型ポンプでも円滑な排水ができない量の流水に見舞われてしまって数日間調査が止まってしまうことも多く、調査期間を通じて水対策に追われる日々であったが、上段の調査は2022年8月1日に、同年秋から開始した下段の調査は翌2023（令和5）年9月5日にそれぞれ調査を終了した。なお、上段と下段の境界に位置する3区

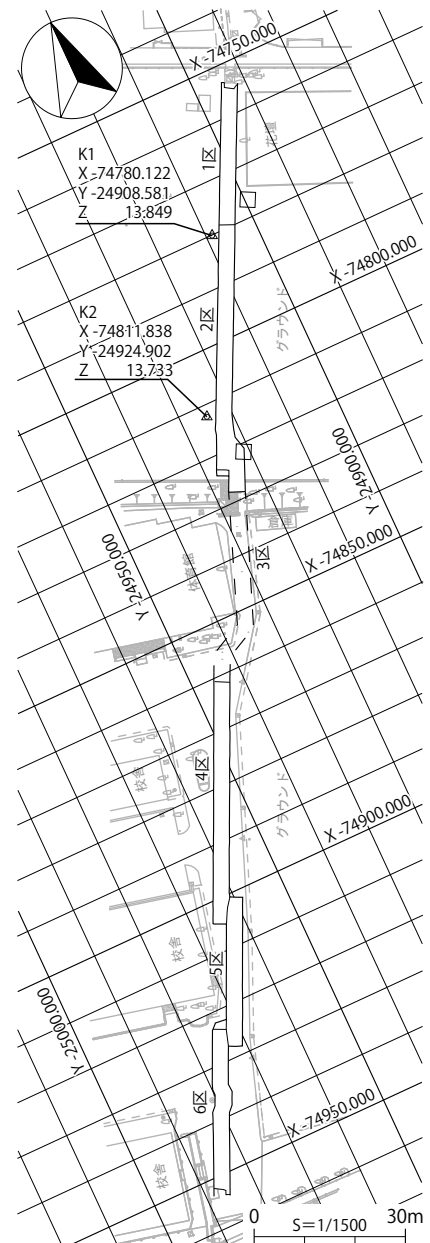


図3 調査区分割図

については、暗渠が校舎下を通っており、安全を確保した上での調査が不可能であることから、神奈川県教育委員会・市教委・下水道河川課・斉藤建設の4者で現地確認を行い、3区を調査範囲から除外することとした。

なお、調査中には2022（令和4）年7月23日、2023（令和5）年2月18日、7月8日の3回にわたり遺跡見学会を開催したほか、要望のあった鎌倉市内の小・中学校による見学会も数度行い、多数の参加者を得た。また、調査中の2023年8月19日に開催された鎌倉市遺跡調査研究発表会でも、調査成果の一部を発表・公開した。

現地調査後は、速やかに報告書刊行に向けた作業を開始した。作業は、斉藤建設埋蔵文化財調査部整理事務所で行った。

第3節 基本土層

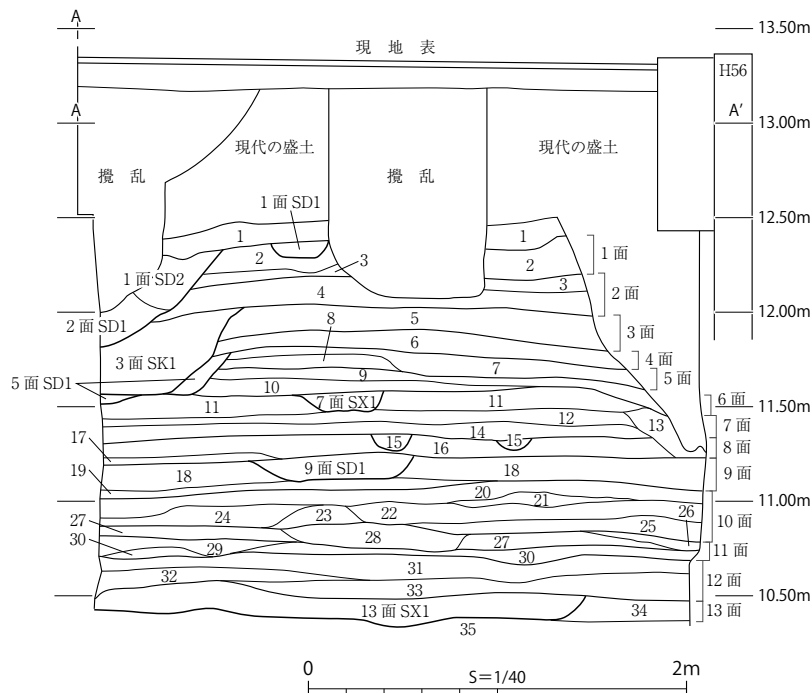
上段から下段の4区にかけて検出した中世の生活面は、すべて人為的な整地層である。6区の調査で検出した6b面以下の土層については、土壌の均一さや混入する遺物の少なさなどから、沖積性の自然堆積土と判断した。生活面と土層については4章で詳しく説明することにして、ここでは概略を述べる。

上段（1・2区）（図4,5）

1・2区では、西壁沿いのわずかな部分しか遺跡が残存しておらず、土層の観察・記録を行えたのは西壁のみである。整地土は直径30cmを超える大型の泥岩塊を主体とするもので、柱穴や井戸、土坑といった生活遺構が皆無に近い状況であることを考え合わせ、道路ではないかと推測している。一方、上段最南端に位置する2区南調査区では、暗渠による破壊を免れた13面もの中世整地層を検出した。溝状の遺構が調査区東壁際にあることで、土層の観察・記録を良好な状態で行えたのは調査区南壁のみであったが、小型の泥岩塊や粘質土による整地土を盛土した整地面は1・2区よりも整然としており、生活面の一部と考えている。

下段（4～6区）（図6-8）

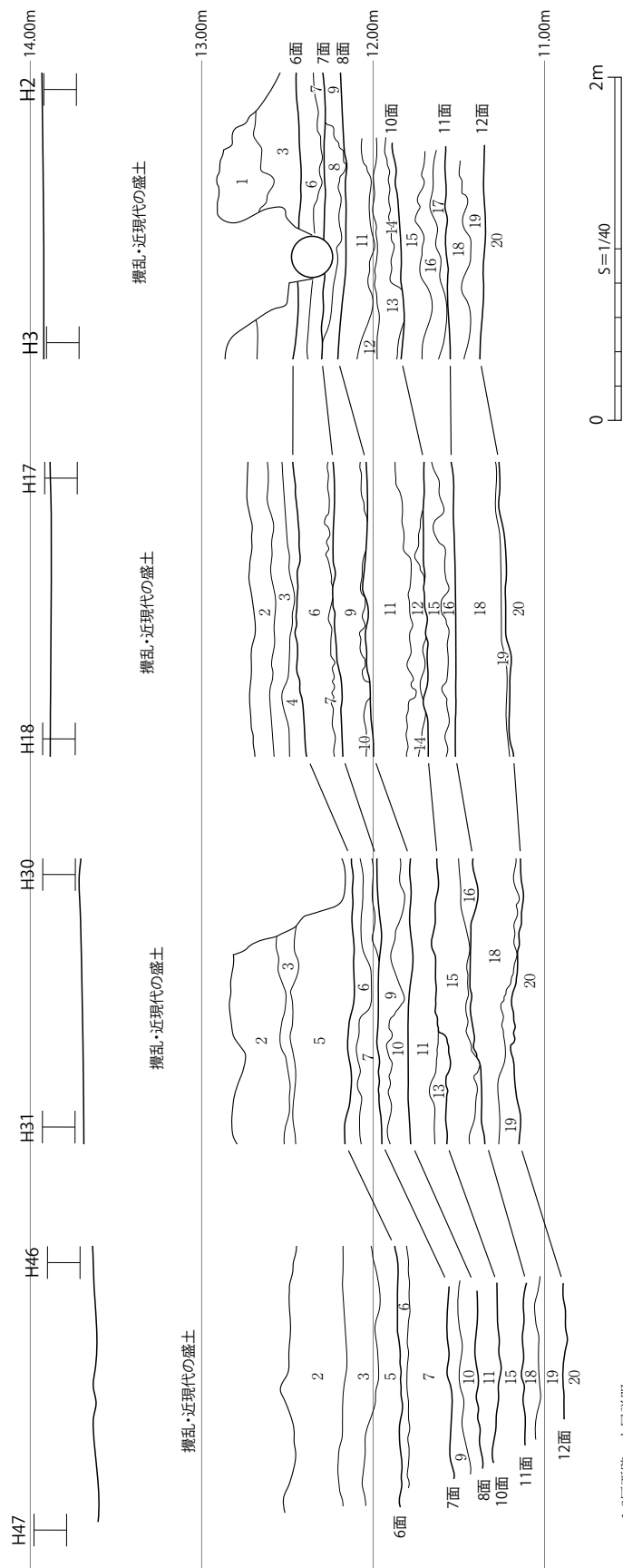
4区では調査区内全域が暗渠や近世の流路による攪乱を受けているだけでなく、唯一土層が確認できる西壁も多くの部分で近現代の攪乱や盛土が深いところまで及んでいるだけでなく、西壁沿いで検出した池や庭園の一部と推測する大型の不整形土坑や溝、石列などの埋土が大半を占めており、検出した遺構と整地面との関連を十分に理解することができなかった。5区では道路と側溝（あるいは生活面）、柱穴列など多くの遺構を検出したが、良好な形で土層の観察・記録を行えたのは南壁のみであった。6区では西壁が近現代の攪乱や盛土の影響を受けて土層の確認ができなかった一方、東壁では6b面以下の土層が残存しており、こちらで土層の観察・記録を行った。



上段2区南 調査区南壁 土層説明

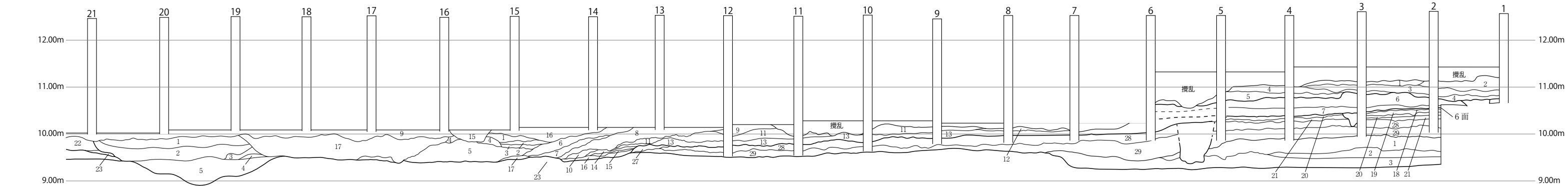
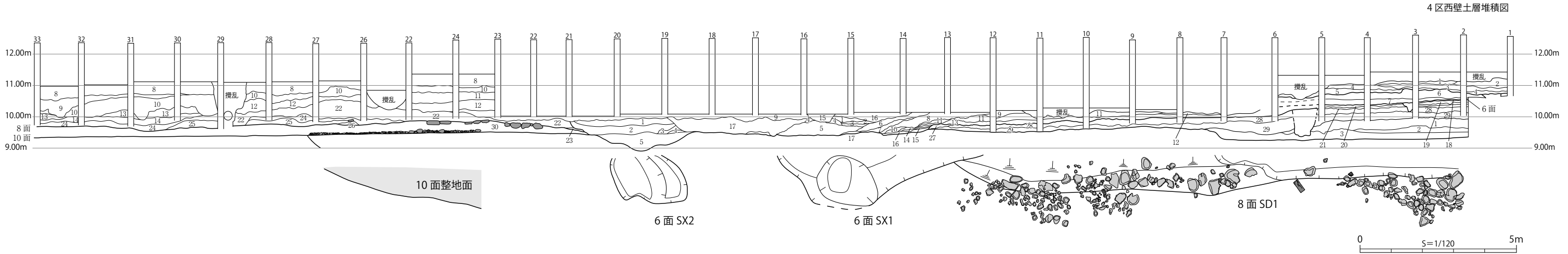
1. 黄灰褐色土 直径2cm以下の泥岩塊、粒子状炭化物をやや多く含む。しまりやや弱。粘性弱。
2. 黄灰褐色粘質土 粒子状泥岩、直径1～20cmの泥岩塊を多量、粒子状炭化物を少量含む。しまり強。粘性やや強。
3. 黄灰褐色土 直径2cm以下の泥岩塊、粒子状炭化物を少量含む。しまり弱、粘性やや弱。
4. 黄灰褐色粘質土 粒子状泥岩、直径1～10cmの泥岩塊を多量、粒子状炭化物を少量含む。しまり強。粘性やや強。
5. 黄灰褐色粘質土 粒子状泥岩、直径5cm以下の泥岩塊をやや多く、粒子状炭化物を微量含む。しまり強。粘性やや強。
6. 黄灰褐色粘質土 直径1～10cmの泥岩塊をやや多く、粒子状炭化物を微量含む。しまり強。粘性やや強。
7. 黄灰褐色粘質土 直径1～5cmの泥岩塊をやや多く、粒子状炭化物を微量含む。しまり強。粘性やや強。
8. 黄灰褐色砂質土 直径2cm以下の泥岩塊、粒子状炭化物を微量含む。しまり、粘性弱。
9. 黄灰褐色砂質土 直径1～10cmの泥岩塊をやや多く、粒子状炭化物を微量含む。しまり、粘性弱。
10. 黄灰褐色粘質土 直径5cm以下の泥岩塊をやや多く、粒子状炭化物を少量含む。しまり、粘性やや強。
11. 黄灰褐色粘質土 直径1～20cmの泥岩塊を多量含む。しまり強。粘性やや強。
1・2区では、直径30cm以上の大型泥岩塊を主体とする。
12. 黄灰褐色土 直径2cm以下の泥岩塊を少量、粒子状炭化物を微量含む。しまり強。粘性弱。
13. 灰褐色粘質土 直径1cm以下の泥岩塊を少量、粒子状炭化物を微量含む。しまり、粘性やや強。
14. 灰褐色土 直径3cm以下の泥岩塊をやや多く、粒子状炭化物を少量含む。しまり強。粘性弱。
15. 灰褐色粘質土 直径2cm以下の泥岩塊を少量、貝殻碎片・木片を少量含む。しまり弱。粘性やや強。
16. 灰褐色粘質土 直径1～15cmの泥岩塊をやや多く、貝殻碎片を少量含む。しまり、粘性やや強。
1・2区では、直径2～50cmの泥岩塊と土壌化した泥岩を主体とする。
17. 灰褐色粘質土 直径2cm以下の泥岩塊を多量、貝殻碎片を微量含む。しまり強。粘性やや強。
18. 灰褐色粘質土 直径2～30cmの泥岩塊をやや多く、貝殻碎片を少量含む。しまり強。粘性やや強。
19. 灰褐色粘質土 直径5cm以下の泥岩塊をやや多く、貝殻碎片を微量含む。しまり、粘性やや強。
20. 灰褐色粘質土 直径1～20cmの泥岩塊を多量、貝殻碎片を微量含む。しまりやや強。粘性強。
21. 灰褐色土 直径1cm以下の泥岩塊を少量、貝殻碎片を微量含む。しまりやや強。粘性弱。
22. 暗灰褐色土 直径1～15cmの泥岩塊を多量、貝殻碎片を微量含む。しまりやや強。粘性やや弱。
23. 暗灰褐色土 直径1～10cmの泥岩塊をやや多く、貝殻碎片を微量含む。しまりやや強。粘性やや弱。
24. 暗灰褐色土 直径2cm以下の泥岩塊を少量含む。しまりやや強。粘性やや弱。
25. 暗灰褐色粘質土 直径5cm以下の泥岩塊をやや多く、貝殻碎片を微量含む。しまり、粘性やや強。
26. 暗灰褐色粘質土 直径3cm以下の泥岩塊を少量含む。しまりやや強。粘性強。
27. 灰褐色土 直径1～5cmの泥岩塊を多量、貝殻碎片を微量含む。しまり強。粘性弱。
1・2区では直径30cm以上の泥岩塊を多量含む。
28. 灰褐色土 直径3cm以下の泥岩塊をやや多く、貝殻碎片を微量含む。しまり強。粘性弱。
29. 黒灰色粘質土 直径1cm以下の泥岩塊を少量含む。しまりやや弱。粘性やや強。
30. 灰褐色粘質土 直径5cm以下の泥岩塊をやや多く、粒子状炭化物・貝殻碎片を微量含む。しまりやや強。粘性弱。
31. 灰褐色粘質土 直径1～10cmの泥岩塊を多量、貝殻碎片を微量含む。しまり強。粘性弱。
1・2区では直径30cmの泥岩塊を主体とする。
32. 黒灰色粘質土 直径1cm以下の泥岩塊、粒子状炭化物を少量含む。しまり、粘性やや強。
33. 黒灰色粘質土 直径0.5～10cmの泥岩塊、粒子状炭化物を少量含む。しまり強。粘性やや強。
34. 暗灰褐色粘質土 直径3～30cmの泥岩塊を多量含む。しまりやや強。粘性強。
35. 黒灰色粘質土 粒子状泥岩、直径1～10cmの泥岩塊をやや多く含む。腐植・貝殻碎片を微量含む。しまりあり。粘性やや強。

図4 2区南南壁土層図



- 1・2区西壁 土層説明
1. 灰褐色粘質土 粒子状泥岩、直径5～40cmの泥岩塊を多量含む。しまりやや弱。粘性やや強。
 2. 灰褐色粘質土 粒子状泥岩、直径3cm以下の泥岩塊を少量含む。しまりやや弱。粘性やや強。
 3. 灰褐色粘質土 粒子状泥岩、直径1～5cmの泥岩塊を少量含む。しまりやや弱。粘性やや強。
 4. 灰褐色粘質土 粒子状泥岩、直径1～5cmの泥岩塊をやや多く含む。しまりやや弱。粘性やや強。
 5. 暗灰褐色粘質土 粒子状泥岩を少量、直径5～30cmの泥岩塊をやや多く含む。しまり、粘性やや強。
 6. 黄灰褐色粘質土 直径10～30cmの泥岩塊を主体とする。6面整地土。
 7. 暗灰褐色粘質土 粒子状泥岩を少量含む。しまり弱。粘性やや強。7面上堆積土。
 8. 暗灰褐色粘質土 粒子状泥岩を少量含む。しまり弱。粘性やや強。7面上堆積土。
 9. 灰褐色粘質土 直径5～40cmの泥岩塊を主体とする。7面整地土。
 10. 灰褐色粘質土 粒子状泥岩を少量、直径10cm以下の泥岩塊を多量含む。しまりやや弱。粘性やや強。7面整地土。
 11. 灰褐色粘質土 直径2～30cmの泥岩塊を主体とする。8面整地土。
 12. 暗灰褐色粘質土 粒子状泥岩を微量含む。しまり、粘性やや強。8面整地土。
 13. 灰褐色粘質土 直径5～20cmの泥岩塊を多量含む。しまりやや弱。粘性やや強。8面整地土。
 14. 暗灰褐色粘質土 粒子状泥岩をやや多く含む。しまりやや弱。粘性やや強。10面整地土。
 15. 灰褐色粘質土 直径5～30cmの泥岩塊を主体とする。10面整地土。
 16. 暗灰褐色粘質土 直径5cm以下の泥岩塊、砂粒をやや多く含む。しまり、粘性やや強。10面整地土。
 17. 暗灰褐色粘質土 直径3cm以下の泥岩塊を少量含む。しまり、粘性やや強。11面整地土。
 18. 灰褐色粘質土 直径2～50cmの泥岩塊を主体とする。粒子状泥岩をやや多く含む。11面整地土。
 19. 灰褐色粘質土 粒子状泥岩、砂粒をやや多く、直径10cm以下の泥岩塊を少量含む。しまりやや弱。粘性強。11面整地土。
 20. 灰褐色粘質土 直径5～30cmの泥岩塊を主体とする。12面整地土。

図5 1・2区西壁土層図



4区西壁 土層説明

1. 暗灰褐色土 粒子状泥岩、直径3cm以下の泥岩塊を少量含む。しまり、粘性やや弱。
2. 暗灰褐色土 粒子状泥岩、直径3cm以下の泥岩塊をやや多く含む。しまり、粘性やや弱。
3. 暗灰褐色土 粒子状泥岩、直径3cm以下の泥岩塊を少量含む。しまり、粘性やや強。
4. 暗灰褐色土 粒子状泥岩を少量含む。しまり、粘性やや弱。
5. 灰褐色粘質土 粒子状泥岩、直径5cm以下の泥岩塊を多量含む。しまりやや強。粘性やや強。
6. 黄褐色粘質土 粒子状泥岩、直径5cm以下の泥岩塊を主体とする。しまりやや強。粘性強。
7. 灰褐色粘質土 粒子状泥岩を少量、直径2～20cmの泥岩塊を多量含む。しまり、粘性やや強。
8. 灰褐色粘質土 粒子状泥岩、直径1～5cmの泥岩塊をやや多く含む。しまり、粘性やや強。
9. 灰褐色粘質土 粒子状泥岩、直径5～40cmの泥岩塊を多量含む。しまり弱。粘性やや強。
10. 灰褐色粘質土 粒子状泥岩、直径1～5cmの泥岩塊を多量含む。しまり、粘性やや強。
11. 灰褐色粘質土 粒子状泥岩、直径1cm以下の泥岩塊を少量含む。しまり、粘性やや強。
12. 灰褐色粘質土 粒子状泥岩、直径1cm以下の泥岩塊をやや多く含む。しまり、粘性やや強。
13. 灰褐色粘質土 粒子状泥岩を少量含む。しまり、粘性やや強。
14. 灰褐色粘質土 粒子状泥岩を微量含む。しまりやや強。粘性強。
15. 灰褐色砂質土 直径3～10cmの泥岩塊を多量含む。しまり、粘性弱。
16. 灰褐色粘質土 粒子状泥岩、直径5cm以下の泥岩塊を少量含む。しまりやや弱。粘性やや強。
17. 灰褐色土 直径5～40cmの泥岩塊を主体とする。粒子状泥岩、粒子状炭化物をやや多く含む。しまり弱。粘性やや強。
18. 灰褐色粘質土と粉砕泥岩の混成土 粒子状泥岩、直径1～5cmの泥岩塊を少量含む。しまりやや弱。粘性やや強。
19. 灰褐色土 粒子状泥岩、砂粒、直径1～5cmの泥岩塊を多量含む。しまりやや弱。粘性やや強。
20. 灰黑色砂質土 直径2cm以下の泥岩塊を少量含む。しまりやや弱。粘性やや強。
21. 暗灰褐色粘質土 粒子状泥岩、粒子状炭化物、直径1～10cmの泥岩塊を多量含む。しまり、粘性やや強。
22. 暗灰褐色砂質土 粒子状泥岩、直径3～20cmの泥岩塊を多量、貝殻碎片を少量含む。しまりやや弱。粘性やや強。
23. 黒灰色粘質土 粒子状泥岩、直径1cm以下の泥岩塊を微量含む。しまり弱。粘性強。
24. 灰褐色砂質土 直径1～10cmの泥岩塊を多量含む。しまりやや弱。粘性やや強。
25. 灰褐色粘質土 粒子状泥岩、直径3cm以下の泥岩塊を主体とする。しまりやや弱。粘性やや強。
26. 灰褐色砂質土 粒子状泥岩、砂粒、直径2cm以下の泥岩塊を多量含む。しまり弱。粘性やや強。
27. 灰褐色粘質土 粒子状泥岩を少量、直径1cm以下の泥岩塊を微量含む。しまりやや弱。粘性強。
28. 灰褐色粘質土 粒子状泥岩、砂粒、直径5cm以下の泥岩塊を多量含む。しまりやや弱。粘性やや強。
29. 灰褐色粘質土 粒子状泥岩、砂粒、直径1cm以下の泥岩塊をやや多く含む。しまりやや弱。粘性強。
30. 灰黑色土 粒子状泥岩、直径5～30cmの泥岩塊を多量含む。しまりやや弱。粘性やや強。

4 区 8 面 SD1 土層説明

1. 暗灰褐色粘質土 粒子状泥岩、砂粒、直径 5cm 以下の泥岩塊をやや多く含む。しまりやや弱。粘性やや強。
2. 暗灰褐色砂質土 粒子状泥岩、砂粒を多量、直径 2cm 以下の泥岩塊、を少量含む。しまり弱。粘性やや強。
3. 灰黑色土 粒子状泥岩、砂粒、直径 2 ～ 10cm の泥岩塊を多量、貝殻碎片を少量含む。しまり弱。粘性強。

4 区 6 面 SX1 土層説明

1. 暗灰褐色土 粒子状泥岩、直径 1cm 以下の泥岩塊、木片を主体とする遺物をやや多く含む。しまり、粘性弱。
2. 暗灰褐色土 粒子状泥岩、直径 1cm 以下の泥岩塊、木片を主体とする遺物を少量含む。しまり、粘性やや弱。
3. 灰色砂と粒子状貝殻の混成層 薄板状木片を主体とする遺物破片を少量含む。
4. 暗灰褐色粘質土 粒子状泥岩、粒子状貝殻を少量、直径 2cm 以下の泥岩塊をやや多く含む。しまり弱。粘性やや強。
5. 灰黑色土 薄板状木片・箸状木製品・かわらけなど遺物破片を主体とする。粒子状泥岩、粒子状貝殻をやや多く含む。しまり、粘性弱。
6. 暗灰褐色粘質土 粒子状泥岩、粒子状炭化物、直径 3cm 以下の泥岩塊、木片・かわらけを主体とする遺物を少量含む。しまりやや弱。粘性やや強。
7. 灰褐色粘質土 粘土化した泥岩を主体とする。粒子状泥岩、直径 3cm 以下の泥岩塊、木片・かわらけを主体とする遺物をやや多く含む。しまりやや弱。粘性強。
8. 灰褐色砂質土 薄板状木片・かわらけを主体とする遺物破片、直径 3cm 以下の泥岩塊、粒子状貝殻、砂粒、木炭を多量含む。しまり、粘性弱。
9. 灰褐色砂質土 薄板状木片を主体とする木製品の破片を多量含む。しまり、粘性弱。
10. 暗灰褐色砂質土 粒子状泥岩、粒子状貝殻、木片を少量含む。しまり弱。粘性強。
11. 灰褐色粘質土 粒子状泥岩、直径 5cm 以下の泥岩塊を少量含む。しまりやや弱。粘性やや強。
12. 灰黑色粘質土 粒子状泥岩、直径 2cm 以下の泥岩塊を少量含む。しまりやや弱。粘性やや強。
13. 暗灰褐色粘質土 粒子状泥岩、粒子状炭化物、直径 1 ～ 10cm の泥岩塊を多量含む。しまり、粘性やや強。
14. 暗灰褐色粘質土 粒子状泥岩を少量含む。しまり弱。粘性やや強。
15. 灰黑色砂質土 粒子状泥岩を少量含む。しまり弱。粘性やや強。
16. 灰黑色砂質土と粘土化した泥岩の混成土 粒子状貝殻を微量含む。しまりやや弱。粘性やや強。
17. 暗茶褐色腐植層 直径 1cm 以下の泥岩塊を少量含む。しまり弱。粘性強。

4 区 6 面 SX2 土層説明

1. 灰褐色土 粒子状泥岩、砂粒、直径5～10cmの泥岩塊を多量含む。しまりやや弱。粘性やや強。
2. 灰褐色砂質土 粒子状泥岩、砂粒、貝殻碎片、直径2～20cmの泥岩塊を多量含む。しまり弱。粘性やや弱。
3. 直径5～15cmの泥岩塊を主体とする。粒子状泥岩、砂粒、貝殻碎片を多量含む。しまり、粘性弱。
4. 黒灰色粘質土 直径1cm以下の泥岩塊を少量含む。しまり弱。粘性強。
5. 灰褐色砂質土 直径 10cm 以下の灰黑色粘質土塊、直径 5 ～ 40cm の泥岩塊、粒子状泥岩、砂粒、貝殻碎片の混成土。しまり、粘性弱。

図 6 4 区西壁土層図

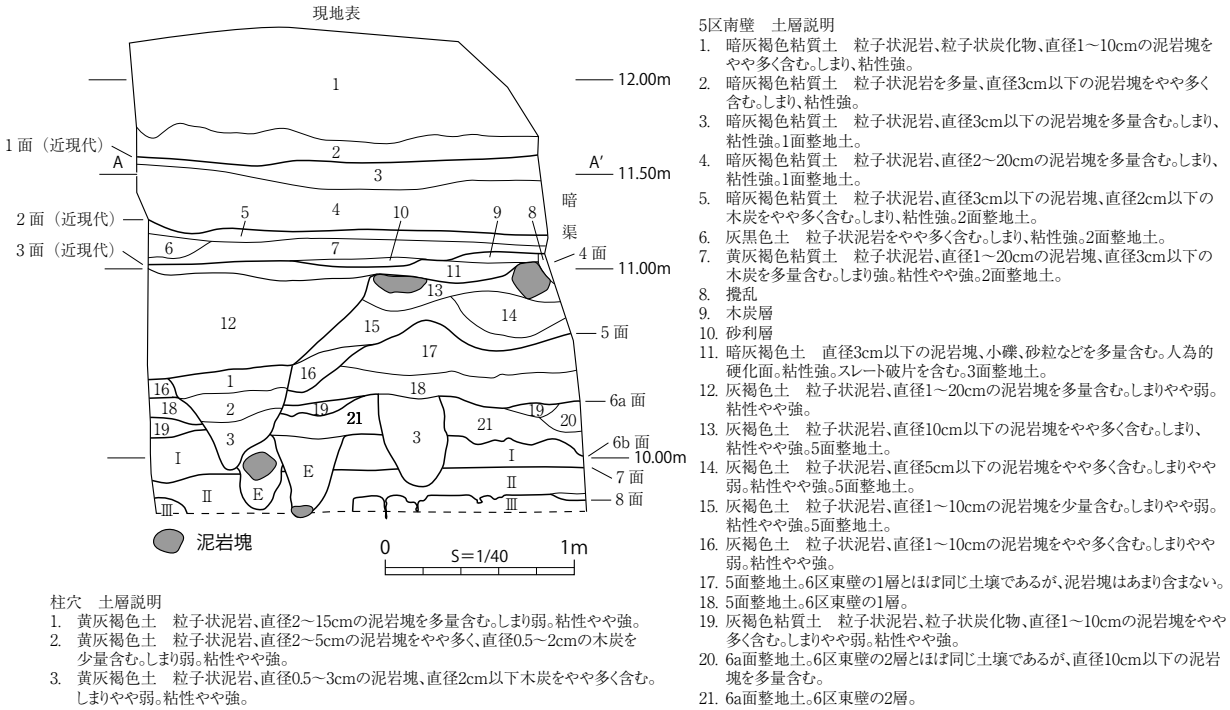


図 7 5区南壁土層図

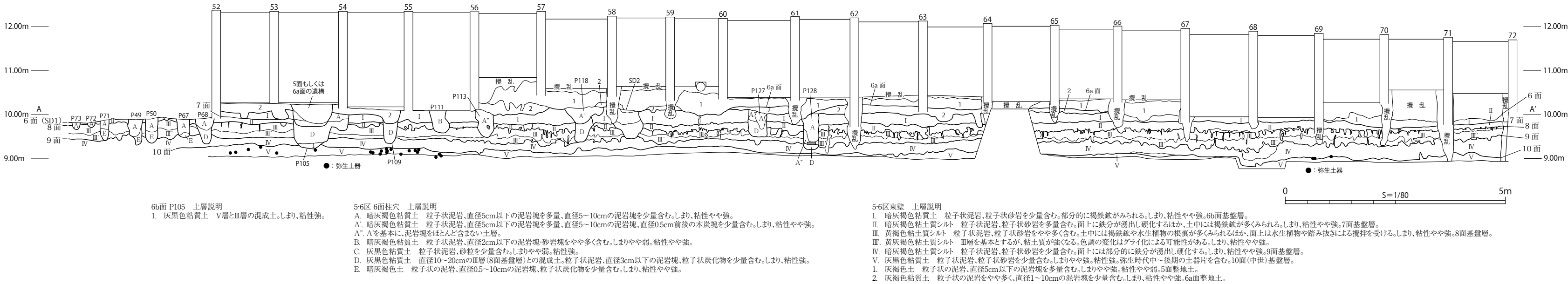


図 8 6区東壁土層図

第4章 検出した遺構と遺物

調査では、上段（1・2区）、下段（4・5・6区）ともに複数の整地層を検出した。調査範囲の大部分は暗渠と近世の自然流路によって中世の整地層が失われていたが、現暗渠の東側に新暗渠を敷設することになった2区南端部分と5区では、鎌倉時代初頭から室町時代に及ぶ最大13面の整地層を検出した。また、6区では弥生時代後期の遺物包含層を検出した。今回の調査原因となった明治～大正時代に敷設した暗渠については、本来の調査対象ではないものの、構造や材料の規格などについて観察することができたため、本章の内容に含めた。中世の遺構と遺物については上・下段に分け、整地層毎に詳述する。図版に掲載しなかった出土遺物については、本文中で概略を述べ、出土量については巻末に一覧表とグラフで掲載した。かわらけについては、手づくね成形のものを「T種」、ロクロ成形のものを「R種」、判別不能のものを「不明」と記述した。出土遺物のうち、中世陶磁器の年代観については、瀬戸窯製品・山茶碗は[藤澤 2008]、渥美・常滑窯製品は[中野・安井ほか 2012]、[中野 2013]、舶載陶磁器については[山本 2000]など、既存の編年観に準拠した。また、木製品の分類については[奈良国立文化財研究所 1985]に準拠して記載した。

第1節 近代の暗渠

記録がなく正確な構築年代はわからないが、1896（明治29）年発行の「相模国鎌倉名所及江之嶋全図」には、筋違橋から西御門に向かう道路の西側に開渠として描かれており、少なくとも明治時代後半以降の構築であることがわかる。この絵図には横浜国立大学附属鎌倉小中学の前身である神奈川県師範学校も描かれているが、学校用地は開渠より西側となっている。絵図の描写が正しいければ、これ以降に学校用地も拡大するということになるが、そうした記録は確認できず、真偽不明である。神奈川県師範学校は1923（大正12）年の関東大震災で全壊しており、震災からの復旧を機に西御門川が暗渠化されたのではないかと推測する。

暗渠は、砂利を敷いた上にアスファルトを敷設して基礎とし、側壁、天板には長方形に切り出した鎌倉石を用いる。天板の支持のため、中央に鎌倉石を積んでおり、「日」の字を横にしたような断面形をもつ。側壁や中央壁は5段、天板は2枚一組で切石を積む。水量調整のため、中央壁は所々、直径約1m煉瓦積の半円孔で抜かれている。近世後半の流路上に設けてい



暗渠断面形（4区）



側壁の石積（1・2区）

ることもあって、基礎の下には常時、流水があり、これによって砂利やアスファルトが流されて切石が落ち込んでしまっている部分が所々にみられる。側壁外側には 30cm 以上の幅で掘り方があり、側壁との間に灰黒色粘質土を充填するが、人為的に突き固めた様子は窺えない。暗渠底の標高は、調査区北端で 12.15 m、南端で 9.2 m 前後を測る。勾配は、校地上段部分で約 4.3°、下段部分で約 3°、規模は幅約 180cm、底から天板までの高さは約 110cm を測る。



中央壁の半円孔（1・2 区）

切石の寸法は長辺 85cm × 短辺 35cm × 厚さ 25cm 前後のものが主体的であるが、側壁では下段に厚さ 16 ～ 20cm のものが目立ったり、中段に長辺が 1 m を超えるものがあったりと、規格性はあまり高くない。一方、天板は上に記した寸法のもので揃えている。側壁は段毎に交互に継ぎ目をずらして積んでおり、切石の隙間には漆喰を充填する。

第 2 節 上段（1・2 区、2 区南）の遺構と遺物

1 面（図 9-12・遺物観察表表 1・PL.3）

1 面は、2 区南の現地表下 1.2 m 前後で検出した。1 ～ 5 面は 2 区南のみに残存しており、1・2 区で整地層を確認できるのは 6 面からとなる。よって、1 ～ 5 面については、2 区南のみを全体図に示す。

学校グラウンド盛土や近現代の攪乱直下で検出したこともあって、整地面は部分的に地下埋設管やゴミ穴によって失われている。整地面上には部分的に整地層が残存しており、青磁、瀬戸焼製品、常滑焼製品、かわらけ（T・R 種）、弥生土器などの破片が少量出土している。図 10-1 は龍泉窯系青磁碗で、内底面に幾何学花文スタンプを施す。

1 面の標高は、北端で 12.45 m、南端で 11.35 m と、南に向かってわずかに下降する。整地土は直径 1 ～ 20cm の泥岩塊や粒子状の泥岩を多く含む灰褐色粘質土と、黄灰褐色粘質土の上下 2 層に分かれる。その下層、2 面上に乗る暗褐色粘質土は厚さ 3cm 前後と薄く、2 面使用時に堆積した可能性がある。遺構は、調査区中央と東壁際で南北方向の溝 2 条（SD1・2）を検出した。

SD1（図 11・PL.3）

2 区南 H51-57 で検出した南北方向の溝で、南側は調査区外に延伸する。北側は攪乱によって失われており、延長部分の様相は不明である。遺構方位は N - 26° - E を指し、規模は長さ 590cm 以上、幅 30 ～ 35cm、深さ約 10cm、断面形は台形状を呈する。溝底の標高は北端で 12.3 m、南端で 12.28 m と、ほぼ水平である。埋土は灰褐色粘質土の単層である。遺物は、青磁、瀬戸焼（皿・瓶子）、常滑焼（破片転用磨具・片口鉢その他）、かわらけ R 種、古代の須恵器坏、鉄釘、砥石などが少量出土しているが、図示できる破片はない。

SD2（図 11・PL.3,4）

2 区南 H52-57 東壁際で検出した遺構で、大半は調査区外にある。遺構の形態から溝と判断した。遺構方位は N - 27° - E を指し、規模は長さ 480cm 以上、幅 50cm 以上、深さ約 30cm、断面形は

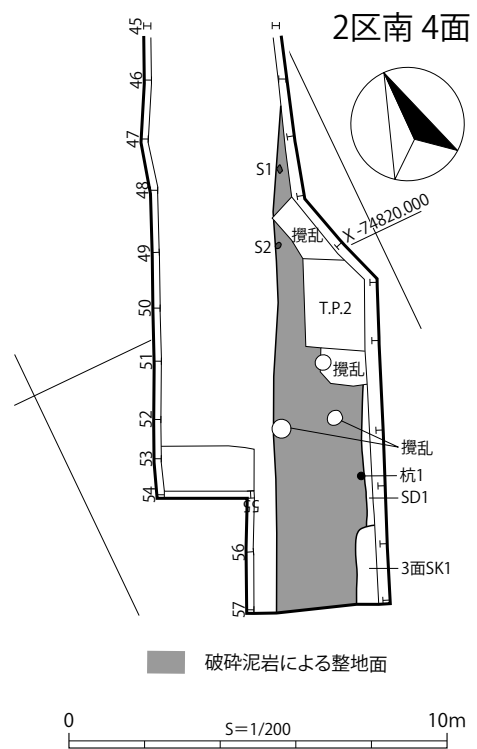
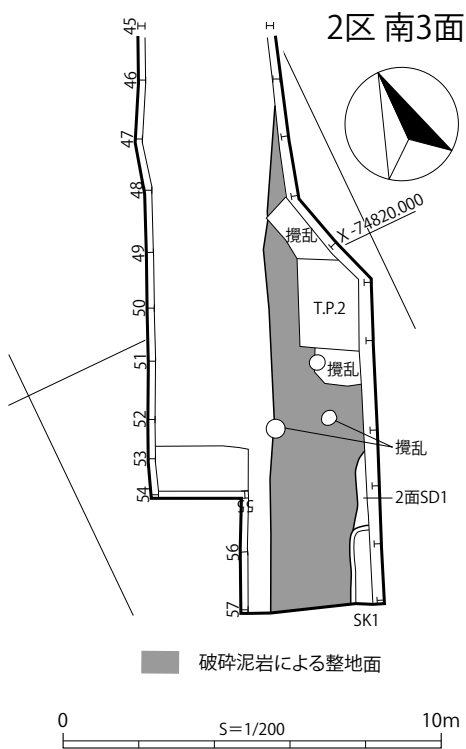
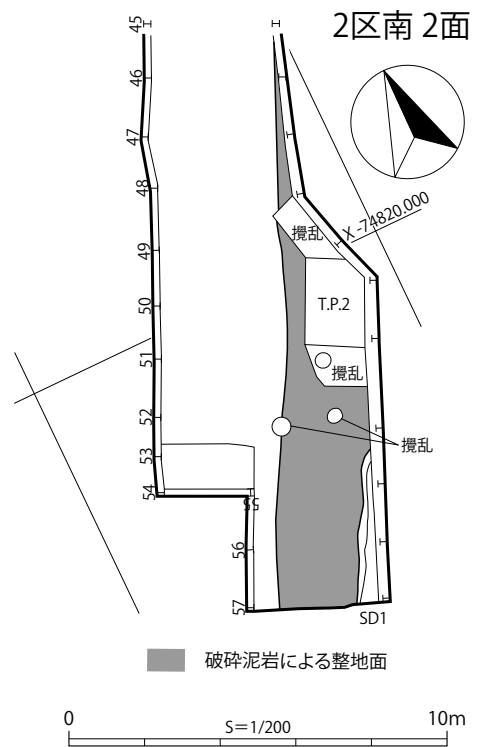
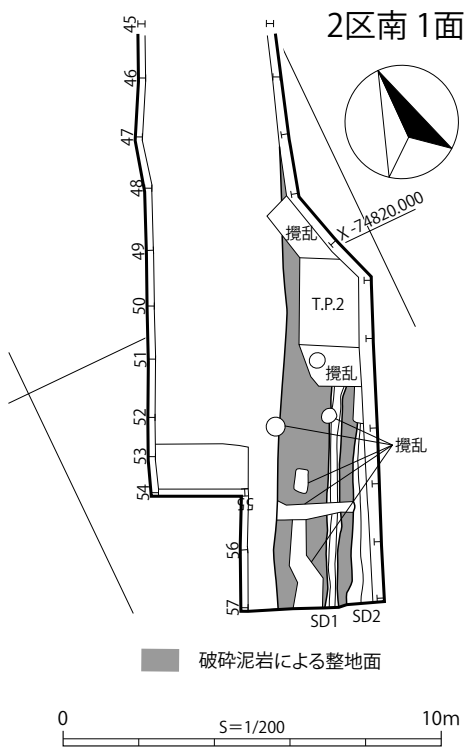


図9 2区南1～4面全体図

半円または台形状と推定する。溝底の標高は北端で 12.35 m、南端で 12.00 m と、南に向かって下降する。埋土は当初、直径 0.5cm 前後の泥岩粒子を多く含む灰褐色粘質土と泥岩粒子を含まない灰褐色粘質土の上下 2 層と捉えていたが、その後の観察で、下層は 2 面に伴う溝の埋土と判断した。遺物は、青磁、常滑焼甕、かわらけ R 種などの破片が少量出土しているが、埋土の項で述べた経緯から、2 面 SD1 出土遺物が混ざってしまっている。いずれも細片であり、図示できる破片はない。

1 面整地土からは、青白磁梅瓶、白磁、青磁（皿・碗ほか）、瀬戸焼（瓶子ほか）、常滑焼（片口鉢・甕）、山茶碗片口鉢、かわらけ（T 種・R 種）、瓦質土器火鉢、産地不明の播鉢、平瓦、砥石、貝殻（アカニシ）などが出土している。図 12-1 は瀬戸焼瓶子である。口縁部内外面には淡緑色の釉が薄く掛かる。2 は常滑焼甕で、口縁部の縁帯は胴部に密着する。3 は常滑焼片口鉢である。口縁部を内外に引き出し、平

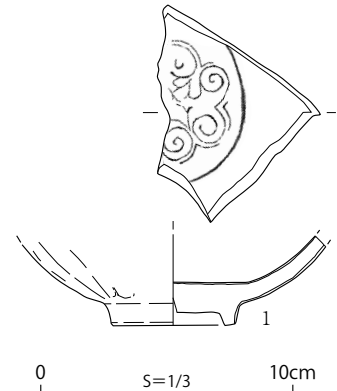


図 10 2 区南 1 面上出土遺物

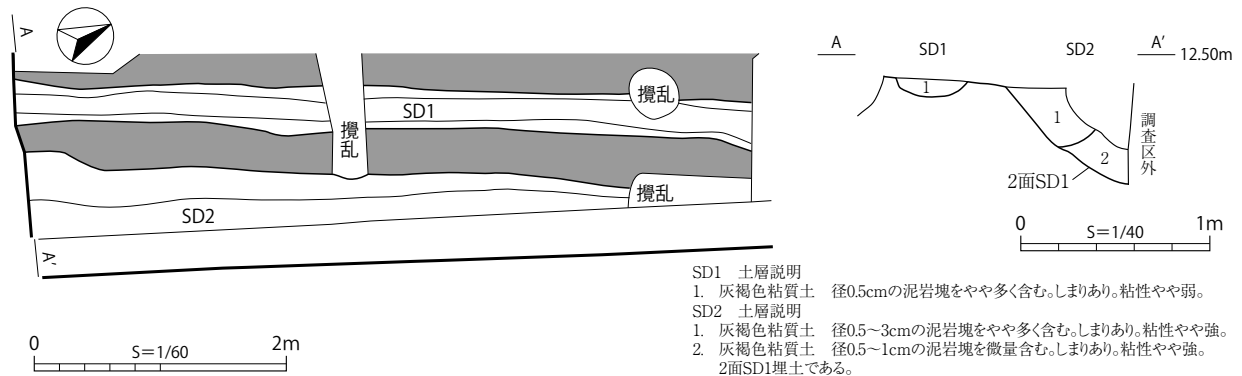


図 11 2 区南 1 面 SD1・SD2

坦面を作出する 7-8 型式頃の所産と思われる。4 は瓦質土器火鉢である。外面口縁部直下に巴文と円形浮文を施し、上下を沈線で区画する。

2 面（図 9,11,13・表 1,19・PL.4）

2 面は、3 面上に粒子状の泥岩、直径 1 ～ 10cm の泥岩塊を多く含む黄灰褐色粘質土を 20cm ほど盛土した整地層である。整地面の標高は北端で 12.25 m、南端で 12.20 m と、南に向かってわずかに下降する。大径の泥岩塊を含まないため、整地面は平坦である。遺構は 1 面 SD2 と同位置に溝 1 条を検出した（SD1）。

SD1（図 11・PL.4）

2 区南 H53-57 東壁際で検出した。1 面 SD2 の断面観察で、2 面とほぼ同じ高さで遺構断面と埋土の内容が変化する事を確認し、2 面に伴う溝と判断した。南側は調査区外に延伸する。北端は H52-53 間で検出したが、遺構の東側

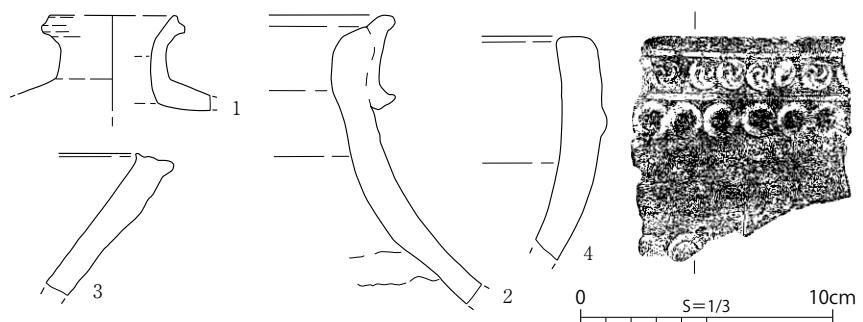


図 12 2 区南 1 面整地土出土遺物

は調査区外にあるため、本来の端部か否か不明である。遺構方位はN-28°-Eを指し、規模は長さ405cm以上、幅50cm以上、深さ約30cm、断面形は半円または台形状と推定する。溝底の標高は北端で12.02m、南端で11.80mと、南に向かって下降する。埋土は、泥岩粒子をほとんど含まない灰褐色粘質土の単層である。遺物は、前述したように、1面SD2に伴う遺物と分別できていない。

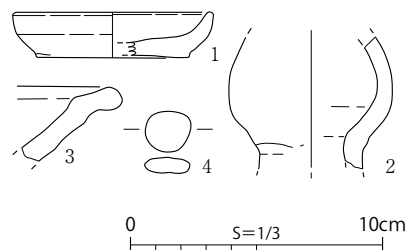


図13 2区南2面整地土出土遺物

2面整地土からは、青白磁（梅瓶ほか）、白磁（口禿皿・皿）、青磁（碗・坏）、輸入陶器褐釉壺、瀬戸焼（瓶子・壺・卸皿・折縁中皿・皿・仏花瓶）、常滑焼（破片転用磨具、壺・片口鉢・甕）、魚住焼甕、山茶碗片口鉢、かわらけ（T種・R種）、瓦質土器火鉢、平瓦、弥生時代の土器、砥石、基石の可能性がある黒色凝灰岩、石英などが出土している。図13-1はかわらけR種、2・3は瀬戸焼である。2の仏花瓶は外面体部に褐釉を施し、底部付近は露胎である。3は折縁中皿で、内外面に淡緑色の釉が薄く掛かる。いずれも古瀬戸中・後期の製品と思われる。4は無加工と思われる黒色凝灰岩で、規模は径1.8×1.6cm、厚さ0.6cmである。円形の扁平礫で基石の可能性がある。

3面（図9,14・表1・PL.4）

3面は、4面上に直径5cm以下の泥岩塊をやや多く含む黄灰褐色粘質土を10～20cmほど盛土した整地層である。整地面の標高は北端で12.20m、南端で12.05mと、南に向かって緩やかに下降する。大径の泥岩塊を含まないため、整地面は平坦である。遺構は、2区南H55-57で方形土坑1基（SK1）を検出した。

SK1（図14・PL.4）

2区南H55-57で検出した土坑である。遺構の大半が調査区外にあることから、内容については不明な点が多い。長軸方位はN-25°-E、規模は南北210cm以上、東西50cm以上、深さ45cm（底面標高11.55m）、平面形は方形、断面形は台形状を呈する。埋土は灰褐色粘質土の水平堆積で、5層に分層できる。遺物は、瀬戸焼皿、山茶碗片口鉢、常滑焼甕、かわらけ（T種・R種）などが埋土から出土しているが、図示できるものはない。

3面整地土からは、青白磁梅瓶、白磁（壺・口禿皿）、青磁（碗ほか）、瀬戸焼（瓶子・折縁皿・皿・碗）、常滑焼（壺・片口鉢・甕）、山茶碗片口鉢、かわらけ（T種・R種）、瓦質土器、瓦器、滑石製品（温石・石鍋）、動物骨（ニホンジカ）などが出土している。図15-1はかわらけR種、2は古瀬戸中4期の製品と思われる瀬戸焼折縁深皿である。内外面に淡緑色の釉を施す。3～6は常滑焼である。3は5型式頃の甕か広口壺、4は7-8型式の甕である。5・6は片口鉢で、5はⅡ類7型式前後の製品である。

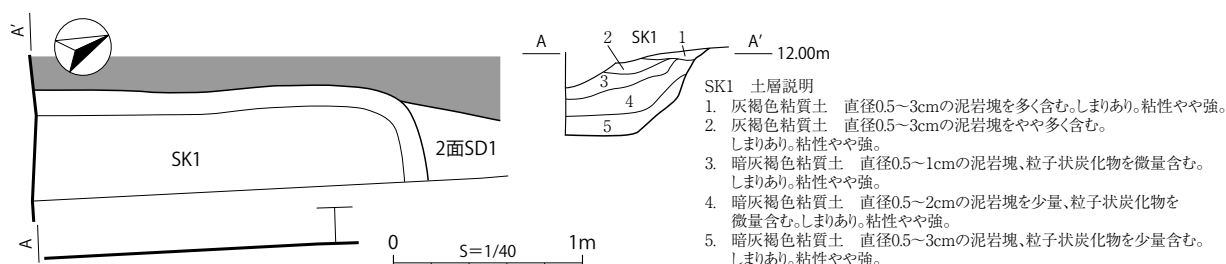


図14 2区南3面SK1

4面（図9,16-18・表1,20・PL.4,5）

4面は、5面上に直径1～10cmの泥岩塊をやや多く含む灰褐色粘質土を5～20cmほど盛土した整地層である。整地面の標高は北端で12.00m、南端で11.90mと、南に向かってわずかに下降する。大径の泥岩塊を含まないため、整地面は平坦である。遺構は、2区南H51-55で南北方向の溝1条（SD1）、H47-48で自然礫2個（石列1）、H53で杭1本を検出した。

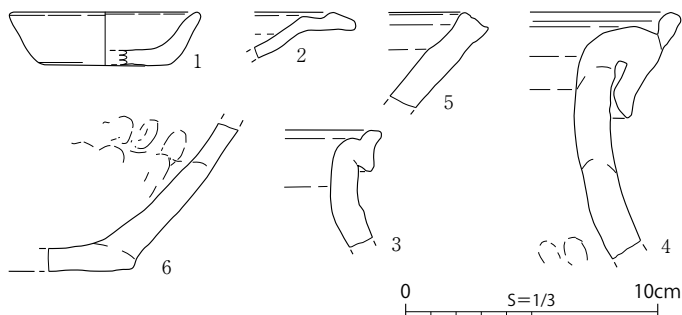


図15 2区南3面整地土出土遺物

SD1（図16,18・表1・PL.4）

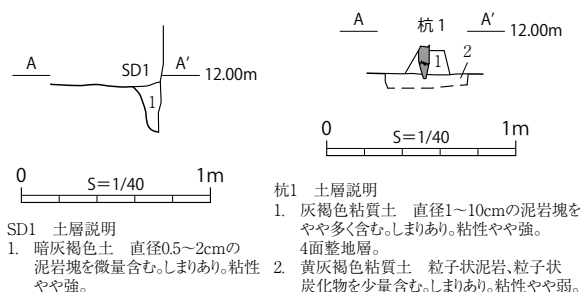
2区南H51-55東壁際で検出した溝である。北側は攪乱に、南側は3面SK1に切られる。遺構の大半は調査区外にあり、内容については不明な点が多い。遺構方位はN-23°-Eを指し、規模は長さ375cm以上、幅25cm以上、深さ5～20cm、溝底標高や断面形は不明であるが、調査区東壁では、南に向かって下降する様相を確認できる。遺物は、青白磁、青磁碗、常滑焼甕・甕片転用磨具、山茶碗片口鉢、かわらけT種・R種、瓦質土器火鉢、動物骨（小獣）などが出土しているが、図示できるものは図18-1の常滑焼甕片転用磨具のみである。平面三角形の甕片で、側面はすべて使用により磨耗する。

杭1（図17・PL.5）

2区南H53で、長さ20cm以上、幅6cm角の杭1本を検出した。整地面より高い部分は乱雑に折ったような形で失われており、3面の整地時に切除した可能性がある。

石列1（図9・PL.5）

2区南H47-48で、4面に下半部が埋まった自然礫2個を検出した。礫2個を結んだ方位はN-26°-E、間隔は200cm、上面の高さはS1が12.04m、S2が12.08mを測る。石材はいずれも硬質凝灰岩と思われ、大きさは一辺15～20cm、厚さ約25cmを測る。S1は上面を平坦に研って平坦に仕上げているが、S2は母岩を無造作に打ち割っており、礎石の可能性は低いと考えている。4面以降の整地層に伴う柱穴の根石であろうか。



SD1 土層説明
1. 暗灰褐色土 直径0.5～2cmの泥岩塊を微量含む。しまりあり。粘性やや強。

杭1 土層説明

1. 灰褐色粘質土 直径1～10cmの泥岩塊をやや多く含む。しまりあり。粘性やや強。4面整地層。
2. 黄灰褐色粘質土 粒子状泥岩、粒子状炭化物を少量含む。しまりあり。粘性やや弱。

図16 2区南4面SD1 図17 2区南4面杭1

4面整地土からは、青白磁（梅瓶・合子）、青磁（碗・坏ほか）、輸入陶器、瀬戸焼（四耳壺・入子・皿・折縁深皿・縁釉皿・碗ほか）、渥美焼壺、常滑焼（片口鉢・甕）、山茶碗（碗・片口鉢）、白かわらけ、かわらけ（T種・R種）、備前焼播鉢、瓦質土器火鉢、平瓦、石製品、輸入銭貨、動物骨（ウマ・イルカ類・オキゴンドウ）、貝殻（アカニシ）などが出土している。図18-2～4はかわらけR種で、いずれも小型品である。5・6は瀬戸焼で、5は入子である。口縁端部の一部を

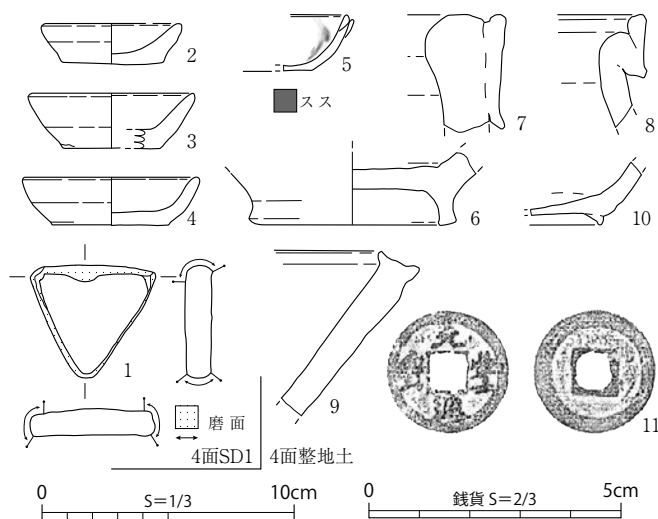


図18 2区南4面SD1 / 4面整地土出土遺物

片口状に引き出しており、内面の一部にはススの付着がみられる。6 は四耳壺の底部である。7 ～ 9 は常滑焼である。7 は、縁帯が口縁部に接する 9-10 型式頃の甕である。8 は広口壺と思われる口縁部で、6a 型式頃の製品か。9 は片口鉢Ⅱ類で、内面は使用による磨耗が進む。口縁端部が内外に引き出される 7-8 型式頃の製品と思われる。10 は砂礫を含まない精良な胎土を用いた東濃型山茶碗の底部である。高台畳付けに靱殻圧痕がみられる。11 は元豊通宝（北宋 1078 年初鑄）である。

5 面（図 19-21・表 1・PL.5）

5 面は、6 面上に黄灰褐色粘質土 2 層を 10 ～ 15cm ほど盛土した整地層である。上層の整地土は、直径 1 ～ 5cm の泥岩塊をやや多く含む。整地面の標高は北端で 11.85 m、南端で 11.75 m と、南に向かって緩やかに下降する。大径の泥岩塊を含まないため、整地面は平坦である。遺構は、2 区南 H51-57 で南北方向の溝 1 条（SD1）を検出した。

SD1（図 20,21・表 1・PL.5）

2 区南 H51 - 57 東壁際で検出した南北方向の溝で、遺構内の一部を 3 面 SK1 に切られる。遺構方位は N - 30° - E を指し、規模は長さ 560cm 以上、幅 80cm 以上、深さ約 30cm、断面形は台形状を呈する。溝底の標高は北端で 11.57 m、南端で 11.50 m と、南に向かって下降する。埋土は、灰褐色・灰茶褐色粘質土が上下 2 層に水平堆積する。遺物は、青磁（坏・碗）、瀬戸焼（瓶子・皿）、常滑焼甕、山茶碗片口鉢、かわらけ（T 種・R 種）、瓦質土器火鉢、モモ種子、ウマ臼歯、動物骨（イヌ・ウマ）、貝殻（レイシ・ウラシマガイ）などが出土している。図 21-1 は、13 世紀中頃～ 14 世紀初頭の青磁折縁盤である。口縁部を水平に折り曲げ、更に端部を上方に折り曲げる。

5 面整地土からは、青白磁（合子カ）、白磁（口禿皿・皿ほか）、青磁（皿・碗ほか）、輸入陶器、瀬戸焼（水注・褐釉壺・瓶子・入子・皿・縁釉皿・卸皿・折縁深皿・碗・播鉢）、渥美焼（壺・甕）、常滑焼（転用磨具・玉縁壺・片口鉢・甕ほか）、備前焼播鉢、山茶碗（碗・片口鉢）、かわらけ（T 種・R 種）、瓦質土器火鉢、丸瓦、須恵器（山茶碗カ）、動物骨（イヌ・ウマ）、貝殻（アカニシ）などが出土している。図 21-2 はかわらけ T 種、3 ～ 5 はかわらけ R 種である。3 は体部中位に強い稜をもって立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。6 は白磁壺である。7・8 は瀬戸焼である。7 は柄付の瓶類であろうか、胴部の屈曲をみると須恵器平瓶や横瓶のような形態が想像できる。特注品であろうか。8 は瓶子である。9 は常滑焼玉縁壺である。折り返した口縁は頸部と一体化している。10 は常滑焼片口鉢Ⅱ類である。8 型式頃の製品か。11 は丸瓦で、凸面は縄目、凹面は布目である。

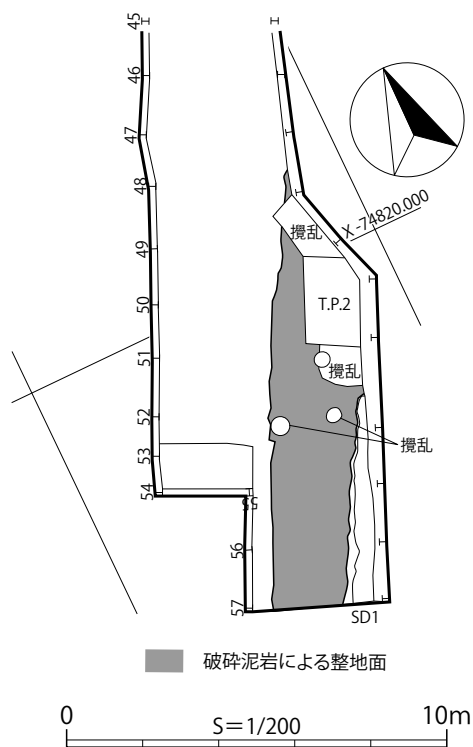


図 19 2 区南 5 面全体図

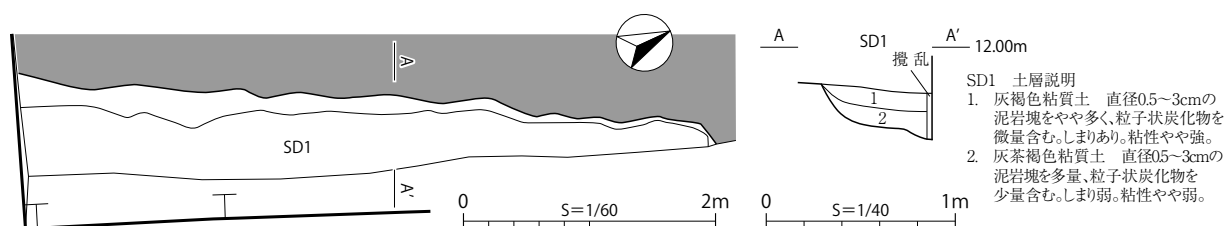


図 20 2 区南 5 面 SD1

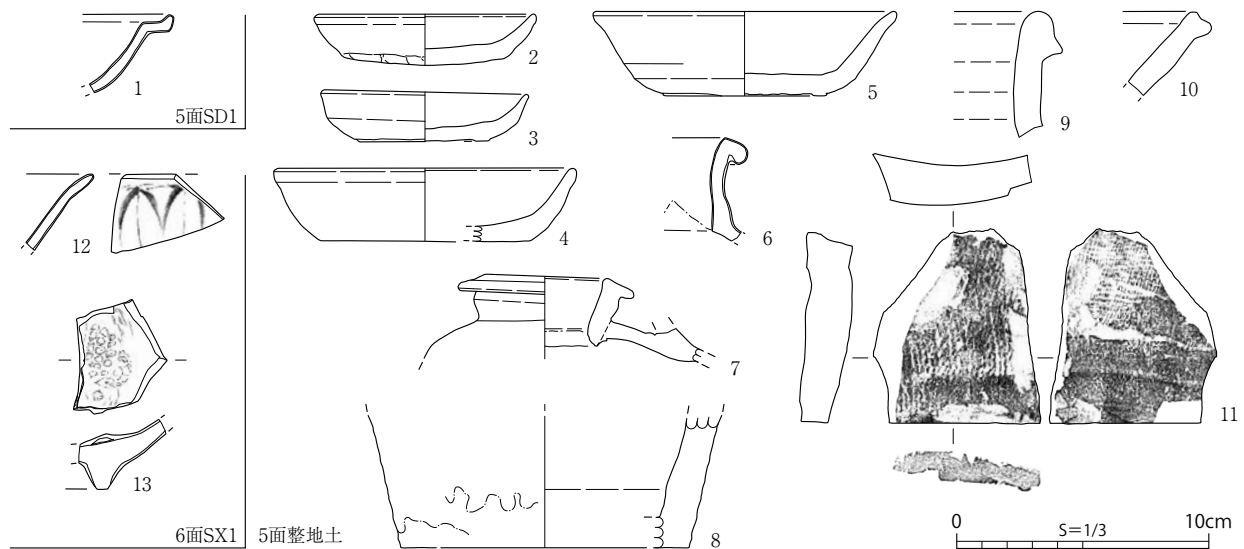
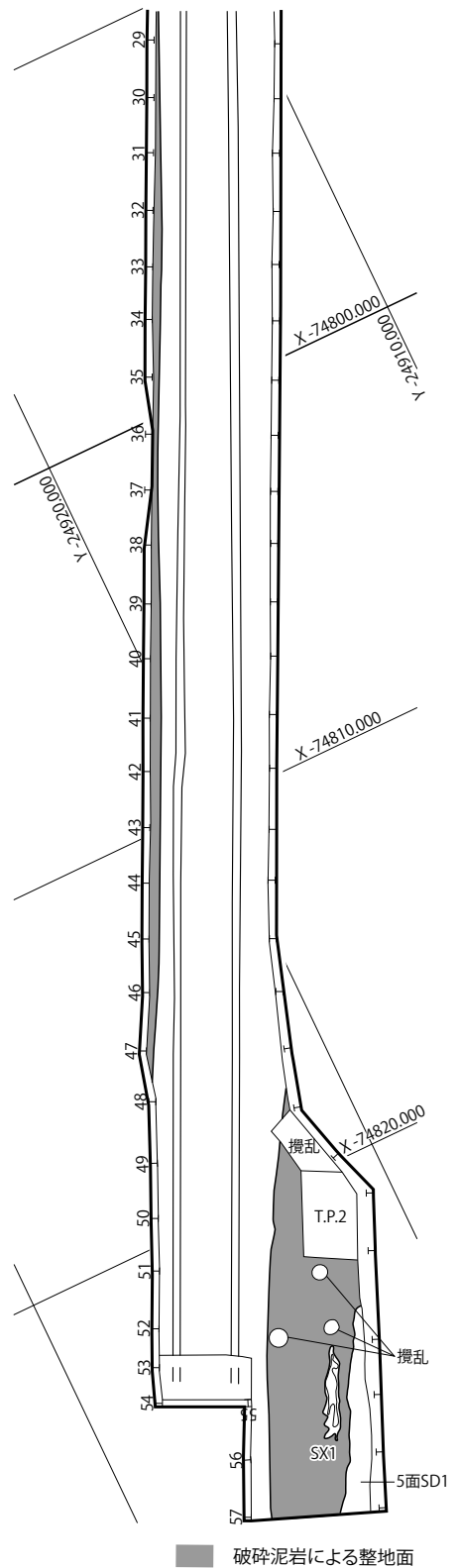
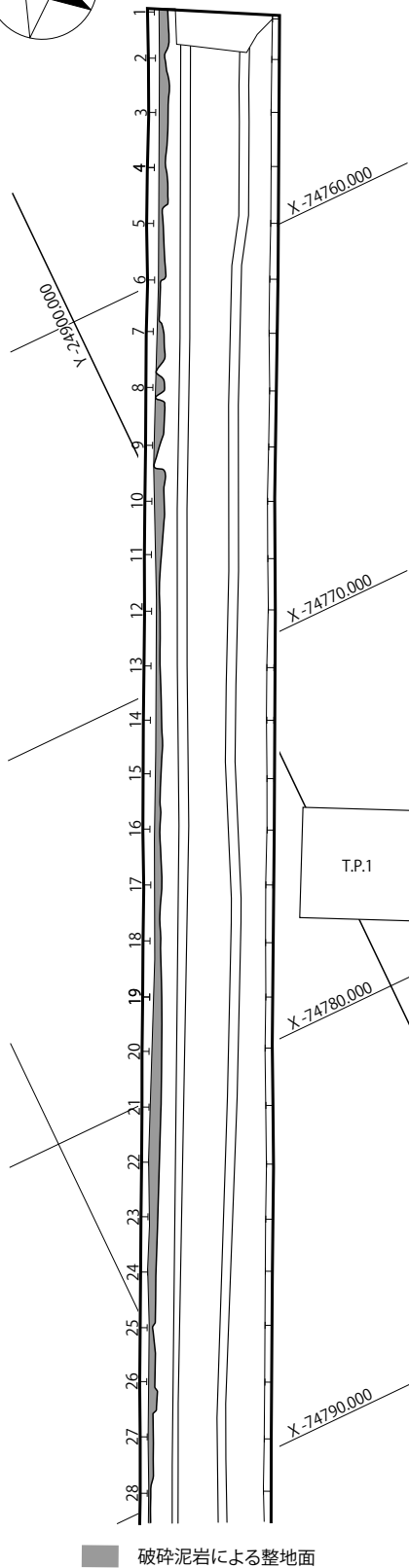
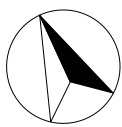


図 21 2 区南 5 面 SD1 / 5 面整地土 / 6 面 SX1 出土遺物

6 面（図 22-25・表 2.20・PL.5,6）

6 面は、現地表下 1～1.5 m で検出した。1・2 区では、本面から整地層が残存するが、調査区内の大半を暗渠とその裏込めが占めており、6～8 面を確認できたのは暗渠西側裏込めの外側約 30cm とわずかな範囲である。整地面の標高は北端で 12.5 m、南端で 11.65 m と、南に向かって緩やかに下降する。整地層は、1・2 区では直径 10～30cm の泥岩塊を用いており、整地面が石畳状を呈する一方、暗渠の東側にあたる 2 区南では直径 1～10cm の泥岩塊と黄灰褐色粘質土を用いており、1・2 区とは整地層の様相が異なる。2 区南では、南北 255cm、東西 35cm、深さ最大 10cm の規模をもつ不整形の落ち込み（SX1）を検出した。埋土は貝殻碎片を多く含む灰褐色粘質土の単層で、突き固められたようなしまりがある。こうした特徴から、SX1 は整地層の補修部分と判断した。

6 面整地土からは、青白磁（梅瓶蓋・合子蓋（カ））、白磁（壺・口禿皿・皿・碗）、青磁（皿・碗・坏ほか）、瀬戸焼（壺・卸皿・折縁深皿・縁釉皿・鉢・筒型香炉ほか）、渥美焼甕、常滑焼（転用磨具・壺・片口鉢・甕）、山茶碗（碗・片口鉢）、かわらけ（T 種・R 種）、瓦質土器火鉢、平瓦、木製品（草履芯・篋）、動物骨（イヌ・ウマ・イノシシ）、貝殻（サザエ・アカニシ）などが出土した。このほかに、6 面上でも少量の遺物が出土している。図 24 は 6 面上出土遺物である。1 はかわらけ R 種である。2・3 は瀬戸焼で、2 は小坏か小鉢、3 は柄付片口と思われる破片である。いずれも内外面に淡緑色の釉が掛かる。4～8 は常滑焼で、4～6 は片口鉢Ⅱ類である。4 は 7 型式、5 は 5～6a 型式前後か。7・8 は甕胴部片を使った転用磨具である。側縁だけでなく、表裏面も使用している。図 21, 25 は、6 面整地土から出土した遺物である。図 21-12・13 は SX1 から出土した青磁碗と鉢である。鉢は内底面に陽刻が確認できるが、意匠は不明である。図 25 は 6 面整地土出土遺物で、1・2 は小型のかわらけ R 種である。3 は青磁碗、4 は折縁盤、5 は坏である。3 の碗も含め、13 世紀中頃～14 世紀初頭頃の製品と思われる。6 は輸入陶器盤である。内外面には透明感のある濃緑色釉が掛かる。7～10 は瀬戸焼製品である。8 は折縁深皿、9 は筒型香炉、10 は折返し口縁の壺である。9 は古瀬戸最終末（15 世紀後半）の製品と思われる。11 は渥美焼甕、12～15 は常滑焼で、12～14 は甕である。口縁端部を上下に引き出して縁帯を形成するが、幅はあまり広くなく、6 型式頃の製品と思われる。15 は片口鉢Ⅰ類である。16 は唐銭の開元通宝（621 年初鑄）である。



0 S=1/200 10m

図 22 1・2 区・2 区南 6 面全体図

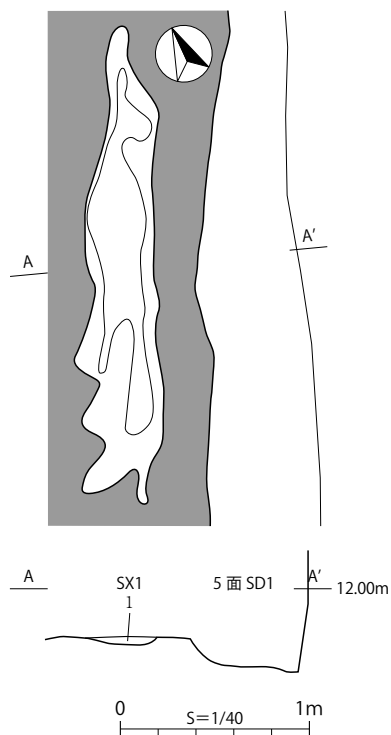
7面（図26-29・表2・PL.6,7）

7面は、8面上に15～20cmほど盛土した整地層である。整地面の標高は北端で12.2m、南端で11.55mと、南に向かって穏やかに下降する。2区南では、下から灰褐色粘質土、黄灰褐色粘質土、直径1～20cmの泥岩塊を多く含む黄灰褐色粘質土の3層で整地を行うのに対し、1・2区では直径30cm以上の大型泥岩塊を主体とする整地土を用いており、整地面は石畳状を呈する。7面上では、青白磁梅瓶、白磁（壺・皿）、青磁（碗ほか）、瀬戸焼（瓶子ほか）、常滑焼（壺・片口鉢・甕）、亀山焼甕、山茶碗（片口鉢・碗）、かわらけ（T種・R種）、滑石製鍋、種子（モモ）、動物骨などの破片が出土している。特に動物骨は、2区南H55-57で集中範囲を2箇所検出している。図29-1は青磁蓮弁文碗である。外面体部に蓮弁文を施す。2は常滑焼甕である。縁帯は下方への張り出しが強くなりつつある6a～6b頃の製品である。

遺構は2区H32-33で溝1条（SD1）、2区南で南北に細長い不整形の浅い落ち込み（SX1）を1条、検出した。

SD1（図27,29・表2・PL.7）

2区H32-33で検出した東西方向の溝で、暗渠によって遺構の上部は失われている。遺構方位はN-62°-Wを指し、規模は長さ320cm以上、幅1.3m、深さ約70cm、断面形は歪な箱状を呈



SX1 土層説明
1. 灰褐色粘質土 直径0.5～2cmの泥岩塊、粒子状炭化物を少量、貝殻碎片を多量含む。しり強。粘性弱。

図23 2区南6面SX1

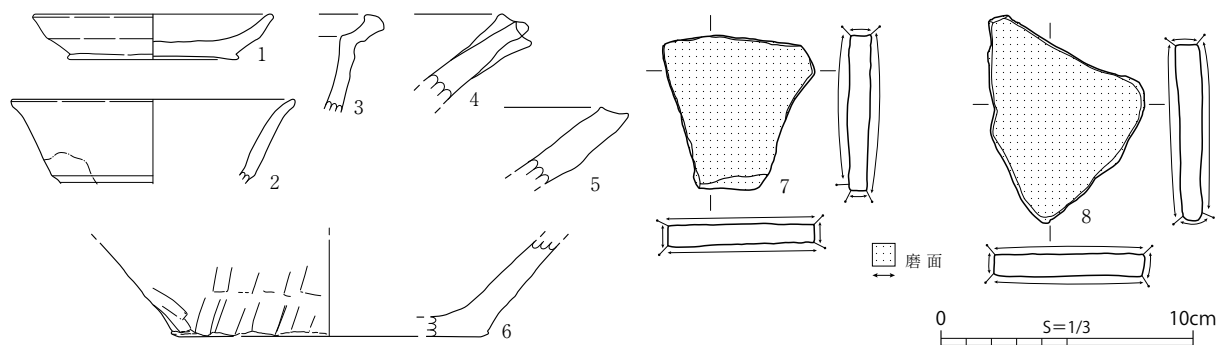


図24 6面上出土遺物

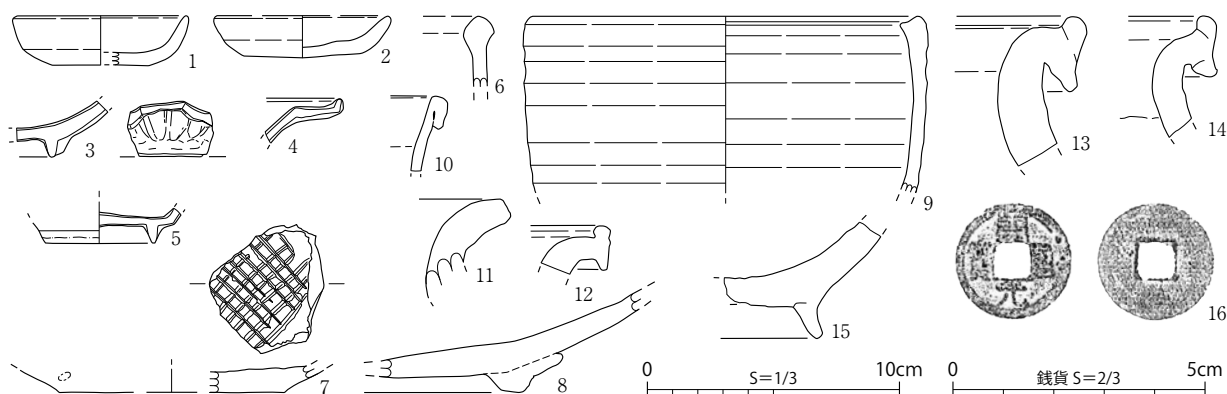


図25 6面整地土出土遺物

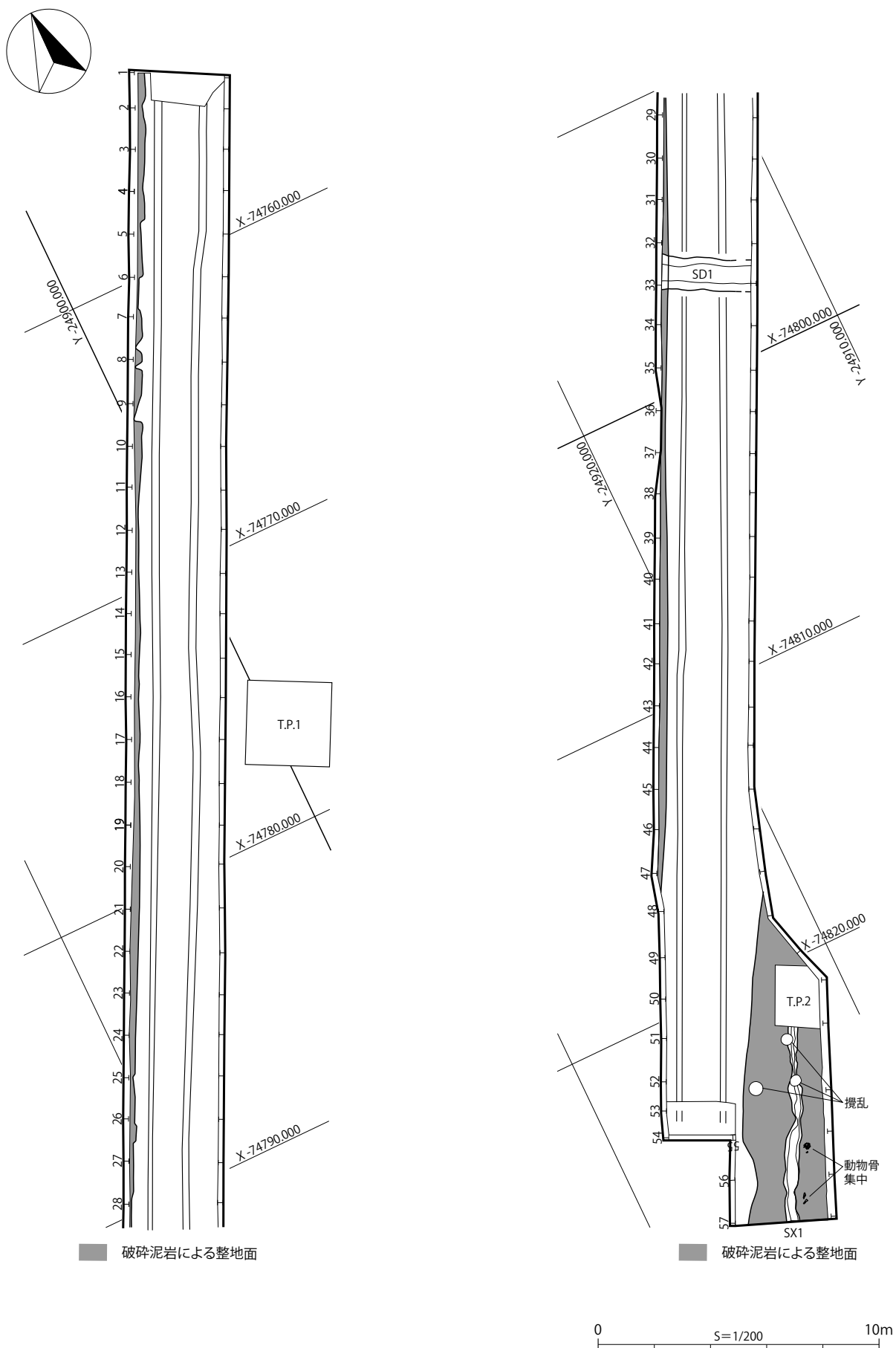


図 26 1・2区・2区南7面全体図

する。溝底の標高は 11.0 m 前後でほぼ水平である。埋土は水平堆積で、8 層に分層できる。溝底に堆積する 8 層は、溝底に沈殿した木片や木葉などを多く含む腐植土層である。4～7 層は暗灰褐色砂質土を基本とし、粒子状の泥岩や貝殻碎片、直径 2cm 以下の泥岩塊などを含む。いずれもしまりは弱い。3 層は 6 面整地層である。遺物は、常滑焼（甕）、かわらけ（T 種・R 種）、瓦（丸・平）、木製品（箸・篋・球ほか）などが出土している。図 29-3 はかわらけ T 種である。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は内湾する。4 は 5-6 型式頃の常滑焼広口壺である。5 は丸瓦である。凸面はタタキ→ヘラナデ、凹面は布目である。

SX1（図 28,29・表 2・PL.7）

2 区南 H50-57 で検出した。平面・断面とも不整形を呈する溝状の落ち込みで、幅 10～50cm、深さ 5cm 前後の規模をもつ。南側は調査区外に延伸するが、北側は試掘坑 T.P.2 以北に延伸しない。埋土は泥岩塊を含まない灰褐色粘質土の単層で、泥岩塊の有無以外は整地土とほぼ同じ土壌である。6 面 SX1 の突き固めたような強固な埋土ではないが、遺構形状も加味して整地層の補修部分と判断した。遺物は、白磁、青磁、常滑焼（片口鉢・甕）、かわらけ（T 種・R 種）、瓦質土器、貝殻（ダンベイキサゴ・バイガイ・イガイ）などが出土している。図 29-6 はかわらけ R 種である。

7 面整地土からは、青白磁（梅瓶ほか）、白磁（口禿皿・皿）、青磁（皿・碗・坏ほか）、輸入陶器（壺ほか）、瀬戸焼（瓶子ほか）、渥美焼（甕ほか）、常滑焼（壺・片口鉢・甕）、山茶碗（片口鉢ほか）、かわらけ（T 種・R 種）、瓦質土器火鉢、平瓦、古代の須恵器甕、弥生時代後期の土器、鉄製品釘、木製品、動物骨（テン・イヌ・ウマ・ニホンジカ）、貝殻（クボガイ・イボキサゴ・ダンベイキサゴ・スガイ・アカニシ・バイガイ・レイシ・バテイラ・サザエ蓋）などが出土している。図 29-7・8 は常滑焼甕である。口縁端部を上下に引き出し縁帯を形成するが幅は狭く、5 型式頃の製品と思われる。9 は瓦質土器火鉢、10 は平瓦である。

8 面（図 30-33・表 2,3,20,21・PL.7,8）

8 面は、9 面上に 2 区 H30 以南と 2 区南では 15cm ほど、2 区 H30 以北では 20～25cm ほど盛土した整地層である。整地面の標高は、北端で 12.1 m、南端で 11.35 m と、南に向かって緩やかに下降する。1・

SD1 土層説明

1. 現代の盛土層
2. 灰褐色砂質土 粒子状泥岩を少量、砂粒を多量含む。しまり弱。粘性やや強。
3. 灰褐色砂質土 直径5～30cmの泥岩塊を主体とする。6面整地土。
4. 灰褐色砂質土 粒子状泥岩を少量含む。しまりやや弱。粘性やや強。
5. 灰褐色砂質土 粒子状泥岩、貝殻碎片をやや多く含む。しまり、粘性弱。
6. 暗灰褐色砂質土 直径2～20cmの泥岩塊、貝殻碎片を多量含む。しまり弱。粘性やや強。
7. 暗灰褐色砂質土 粒子状泥岩、直径1～2cmの泥岩塊をやや多く含む。しまり弱。粘性やや強。
8. 暗茶色腐植土+砂利 直径2～3cmの泥岩塊を少量含む。しまり弱。粘性やや強。

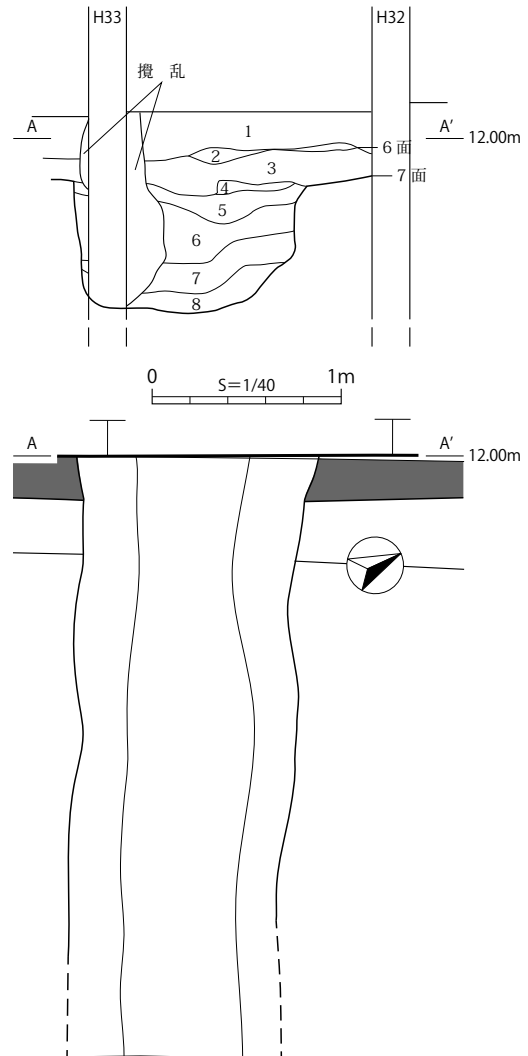
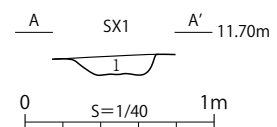


図 27 1・2 区 7 面 SD1



SX1 土層説明

1. 黄灰褐色粘質土 粒子状泥岩塊を少量含む。しまり強、粘性やや強。

図 28 2 区南 7 面 SX1

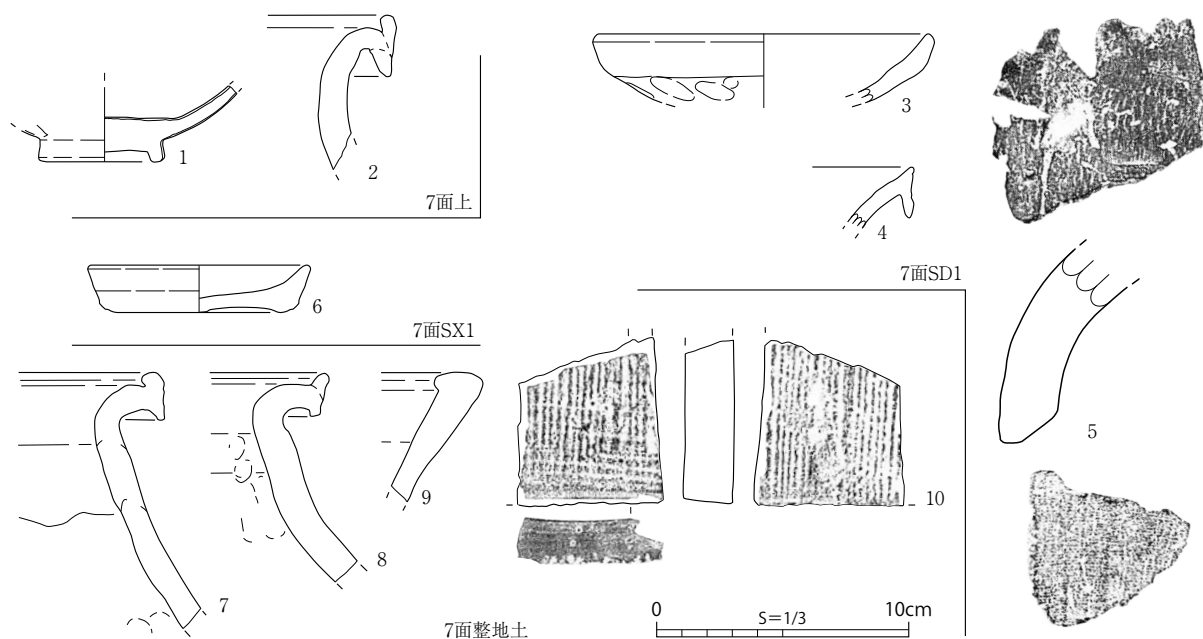


図 29 7 面出土遺物（面上／SD1／SK1／整地土）

2 区では直径 2 ～ 50cm の泥岩塊を用いて整地を行い、整地面は石畳状を呈するのに対し、2 区南では直径 1 ～ 15cm の泥岩塊をやや多く含む灰褐色粘質土を用いており、整地層や整地面の様相が大きく異なる。遺構は、2 区南 H53-56 で方形土坑 1 基（SK1）を検出した。

SX1（図 31・表 2・PL.8）

2 区南 H53-56 で検出した土坑である。平面形は隅丸方形もしくは不整形、断面形は台形状を呈する。遺構規模は南北 270cm 以上、東西 175cm 以上、深さ約 45cm を測り、東側は調査区外に延伸する。埋土は灰褐色砂質土、暗灰褐色砂質土、暗茶褐色砂質土の水平堆積で、5 層に分層できる。5 層は木製品や自然木片をやや多く含むしまりの弱い砂質土である。層厚は 20cm 前後あり、人為的な埋土と考えているが、洪水性堆積土の可能性も否定できない。また、1 層は直径 5 ～ 20cm の泥岩塊を多く含んでおり、8 面使用中に埋められた可能性がある。遺物は、青磁（坏・碗）、常滑焼（甕・広口壺・片口鉢）、かわらけ（T 種・R 種）といった中世陶磁器のほか、古代の須恵器破片、木製品（草履芯・箸・糸巻き（カ）ほか）、骨製品（筭）、動物骨（イヌ・ウマ）、貝殻（イボキサゴ・ダンベイキサゴ・サザエ・サザエ蓋・スガイ・ツメタガイ・アカニシ・サルボウ・バイガイ・アワビ類・クボガイ・ハマグリ）などが出土している。図 32-1・2 はかわらけ T 種、3・4 は同 R 種である。いずれもやや肉厚な造りで、口縁部は丸みをもつ。5 は銭文が不明瞭であるが、篆書体の元祐通宝（北宋・1086 年初鑄）と思われる。このほかに、筭を第 5 章に掲載した。

8 面整地土からは、白磁口禿皿、青磁（碗ほか）、瀬戸焼（天目碗・碗・縁釉皿ほか）、渥美焼甕、常滑焼（転用磨具・片口鉢・甕ほか）、山茶碗（碗ほか）、かわらけ（T 種・R 種）、瓦質土器、須恵器甕（古墳時代カ）、古代の土師器坏、鉄製品釘、木製品（箸・草履芯・矢板・篋・板材ほか）、漆器（皿・碗）、動物骨（ウマ・イルカ）、貝殻（イボキサゴ・ダンベイキサゴ・ハマグリ・サザエ・サザエ蓋・アワビ類・スガイ・アカニシ・バイガイ）などが出土している。図 33-1 はかわらけ T 種、2 ～ 5 は同 R 種である。5 は体部が直線的に立ち上がり、側面観が逆台形を呈する。6 ～ 8 は常滑焼片口鉢で、すべてⅡ類である。6・7 は 7 型式前後の製品か。9 は常滑焼甕片転用磨具である。周縁部 2 面を使用する。10 は漆器皿である。木取りは柾目取りで、わずかな高さの高台を削り出す。内外面とも黒漆を塗布し、内底面には朱漆で草花を描く。

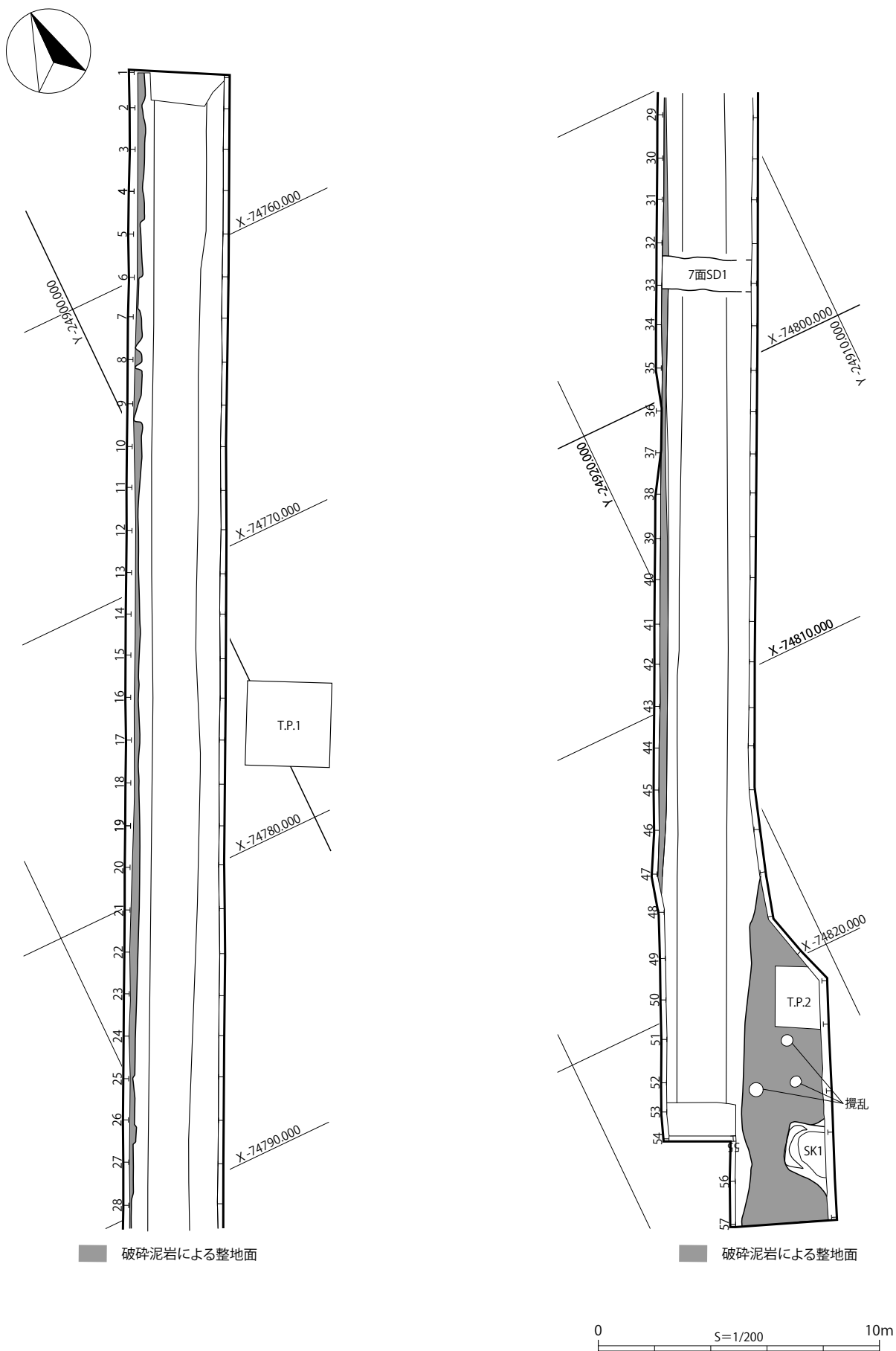


図 30 1・2区・2区南8面全体図

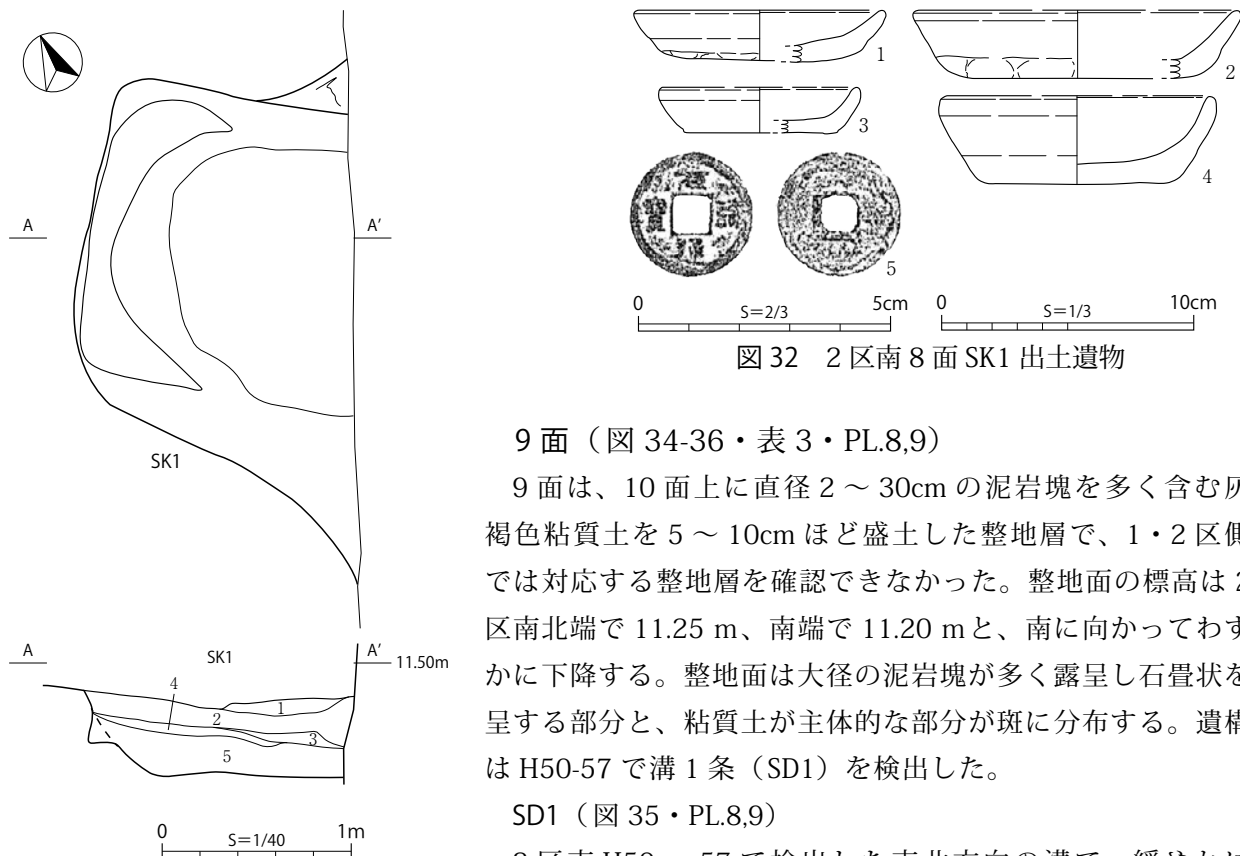


図 32 2 区南 8 面 SK1 出土遺物

9 面 (図 34-36・表 3・PL.8,9)

9 面は、10 面上に直径 2 ～ 30cm の泥岩塊を多く含む灰褐色粘質土を 5 ～ 10cm ほど盛土した整地層で、1・2 区側では対応する整地層を確認できなかった。整地面の標高は 2 区南北端で 11.25 m、南端で 11.20 m と、南に向かってわずかに下降する。整地面は大径の泥岩塊が多く露呈し石畳状を呈する部分と、粘質土が主体的な部分が斑に分布する。遺構は H50-57 で溝 1 条 (SD1) を検出した。

SD1 (図 35・PL.8,9)

2 区南 H50 - 57 で検出した南北方向の溝で、緩やかに屈曲しながら南側は調査区外に延伸し、北側は近世の自然流路によって失われる。近世流路以西の状況は、2 区西壁側が 10 面上まで現代の攪乱で失われているため確認できない。遺構方位は N - 11° - E を指し、規模は長さ 750cm 以上、幅 0.25 ～ 0.9 m、深さ約 5cm、断面形は弧状を呈する。溝底の標高は北端で 11.17 m、南端で 11.10 m を測り、南

- SK1 土層説明
1. 暗灰褐色砂質土 直径 1 ～ 5cm の泥岩塊を少量含む。しまり強。粘性やや弱。
 2. 灰褐色砂質土 直径 3 ～ 15cm の泥岩塊を多量、貝殻碎片、粒子状炭化物を少量含む。しまり強。粘性やや弱。
 3. 灰褐色砂質土 直径 3cm 以下の泥岩塊を少量、貝殻碎片、粒子状炭化物を微量含む。しまり、粘性やや弱。
 4. 暗灰褐色砂質土 直径 1cm 以下の泥岩塊、貝殻碎片を少量、粒子状炭化物を多量含む。しまり弱。粘性やや強。
 5. 暗茶褐色砂質土 木片・腐植を主体とする。直径 1cm 以下の泥岩塊、貝殻碎片を少量、粒子状炭化物を微量含む。しまり弱。粘性強。

図 31 2 区南 8 面 SK1

に向かってわずかに下降する。埋土は直径 5cm 以下の泥岩塊を多量に含む灰褐色粘質土の単層で、H54 以北では粒子状の炭化物や灰、貝殻碎片などを多く含む。泥岩塊を多く含んでおり、9 面使用中に役割を終えて埋められたものと考えている。遺物は、青磁碗、常滑焼 (甕か壺)、かわらけ (R 種)、貝殻などの破片が出土しているが、数点とわずかである。

9 面整地土からは、白磁碗、輸入陶器黄釉鉄絵盤、瀬戸焼皿、亀山焼甕、常滑焼 (壺・甕)、山茶碗、かわらけ (T 種・R 種)、土師器坏、木製品 (草履芯・板材ほか)、動物骨 (コハクチョウ)、貝殻 (イボキサゴ・ダンベイキサゴ・スガイ・ハマグリ・クボガイ・アカニシ・サザエ・バイガイ・バテイラ) などが出土している。図 36-1 ～ 4 はかわらけで、1・2 は R 種、3・4 は T 種である。3 は体部下端にヘラ状具によるナデ調整が加わる。5 は輸入陶器黄釉鉄絵盤である。内面の絵柄は草花文で、淡緑色の釉が掛かる。6・7 は常滑焼である。6 は 5 型式頃の甕、7 は片口鉢 II 類で、内面はよく使われて器面の磨耗が進む。8 は体部の成形はヨコナデによるが、底部は残存部分がほとんどなく、判断できない。ロクロ成形のかわらけか、古代の土師器坏と思われる。本遺跡では弥生時代中期から平安時代の土器片が出土しているが、古代のものは非常に少なく、この 1 点以外に図示できる破片は出土していない。

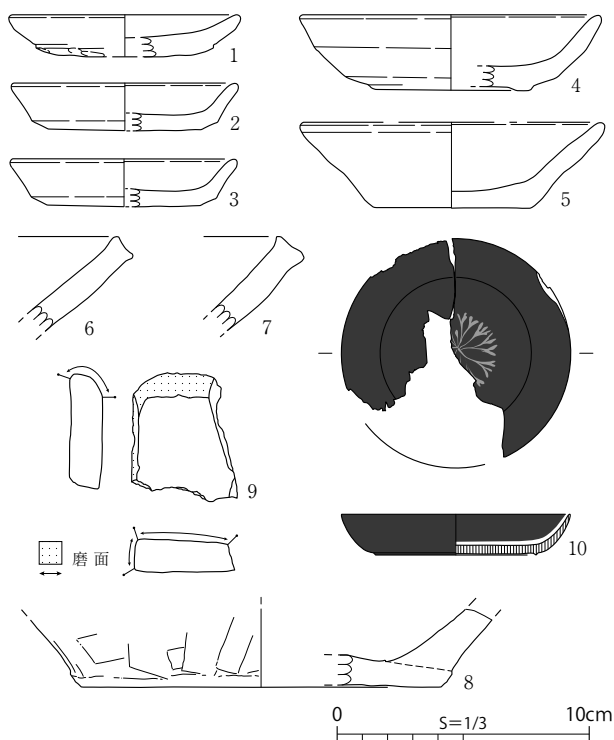


図 33 8面整地土出土遺物

と布目が確認できる。

10面の遺構は、2区 H22-23 で土坑 1 基 (SK1)、H23 で炉跡状の被熱範囲 1 箇所 (SX1)、H31-32 で柱穴 1 口 (P1) を検出した。

P1 (図 40・PL.9)

2区 H31-32 で検出した円形の柱穴である。規模は南北 35cm、東西 30cm、深さ 25cm (底面標高 11.25 m) を測り、断面形は U 字状を呈する。埋土は暗灰褐色粘質土の単層である。遺物は出土していない。

SK1 (図 41,43・表 3・PL.9,10)

2区 H22-23 で検出した土坑である。平面形はやや歪な隅丸方形、断面形は箱状を呈する。遺構の規模は、長さ 180cm 以上、幅 90cm、深さ約 30cm を測り、西側は調査区外に延伸する。底面はほぼ平坦に設けており、標高 11.38 ~ 11.44 m と、西側に向かってやや低くなる。埋土は灰褐色粘質土の単層で、泥岩塊・木製品破片・貝殻破片・動物骨破片などを含む。遺物は、白磁壺、青磁碗、瀬戸焼 (碗ほか)、常滑焼 (甕・片口鉢)、山茶碗、かわらけ (T 種・R 種)、土師質土器火鉢、平瓦、鉄釘、漆器皿、木製品 (板材・折敷・箸・杭ほか)、動物骨 (ニホンジカ・ウシ・小獣)、貝殻 (サザエ・アカニシ・イガイ・メガイアワビ・ハマグリ) などの破片が出土している。図 43-1 はかわらけ R 種である。小型の製品で、体部中位にやや強い稜をもつ。2・3 は青磁碗である。2 は鎬蓮弁文、3 は外面無文で内面体部に片彫文の一部が確認できる。4・5 は壺と鉢 (風呂か) と思われるが、同一個体の可能性も考えられる。素地

10面 (図 37-45・表 3,4,19・PL.9,10)

10面は、11面上に暗灰褐色粘質土を 10 ~ 20cm 盛土し、表層には直径 1 ~ 20cm の泥岩塊を主体とする灰褐色粘質土を盛土した整地層で、1・2区では 30cm 以上の大型の泥岩塊が整地土の主体をなす。1・2区、2区南とも整地面は泥岩塊によって石畳状を呈する。2区 H40 以北では、整地層が暗渠基礎よりも深い位置となり残存範囲が拡大したが、近世後期 (瀬戸焼磁器出現以降か) の自然流路によって調査区東半部分を中心に影響を受ける。整地面の標高は、北端で 11.7 m、南端で 11.1 m と、南に向かって緩やかに下降する。図 39 は、10面上で出土した遺物である。1 ~ 4 はかわらけ、5 は 12 世紀中頃 ~ 13 世紀前半の青磁碗である。内底面には片彫りの花文を配する。6 は平瓦である。凸面は格子目のタタキ、凹面は格子目のタタキ

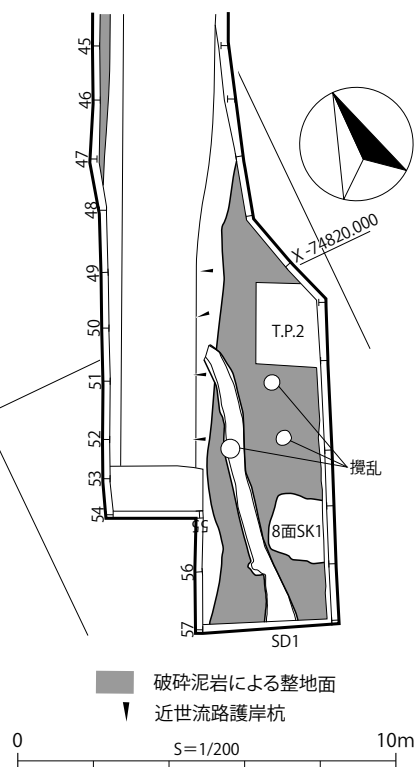
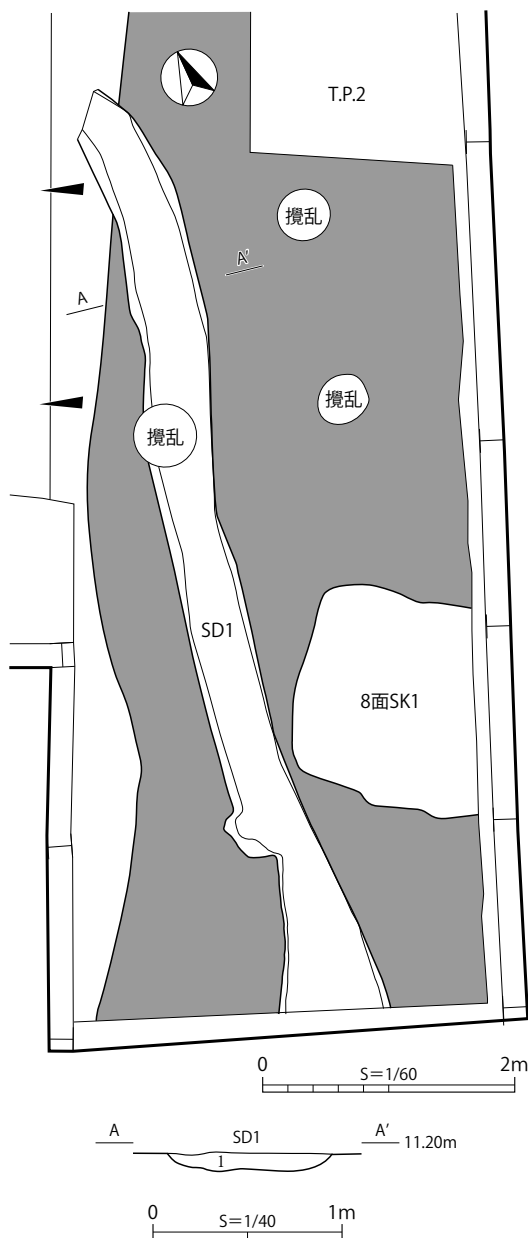


図 34 2区南 9面全体図



SD1 土層説明

1. 灰褐色粘質土 直径0.5~5cmの泥岩塊、粒子状炭化物を多量、貝殻碎片をやや多、灰を少量含む。しまり強、粘性やや強。

図35 2区南9面SD1

ダンベイキサゴ・サザエ・サザエ蓋・スガイ・アカニシ・サルボウ・アワビ類・イガイ・クボガイ・バイ・ボウシュウボラ・レイシ・ハマグリ・チョウセンハマグリ・マガキ・カワニナ) など多種・多様な遺物が出土している。図44-1~17はかわらけT種、18~25は同R種である。7・13・21は灯明皿として使用した時期があり、口縁部にススが附着する。7は体部最下位の調整にヘラ状具を用いる。15は体部調整の終わりに、指頭を斜め後方に引き上げた痕跡が

の特徴から瀬戸焼と考えているが、器面の装飾に突帯を施す製品は瀬戸焼に普遍的な装飾ではないため、輸入陶器の可能性も考えている。外面と内面の一部には赤褐色と黄褐色の釉が掛かる。釉薬はややメタリックな光沢をもち、被熱によって変質している可能性がある。5の外面にみられる露胎部分は突帯の剝離痕跡か。

SX1 (図42・PL.9)

2区H23で検出した。南北40cm、東西45cmの範囲が被熱によって赤化し、炭化物や灰が堆積する。範囲内はわずかに凹んでいるが、人為的な掘り込みではなく整地面の起伏である。炭化物中から釘1本を内包する鉄滓(162g)が1点、出土しており、鍛冶行為を行った可能性がある。ほかに遺物は出土していない。

10面整地土からは、青白磁(梅瓶ほか)、白磁(四耳壺・皿・碗)、青磁(皿・碗・坏ほか)、輸入陶器(盤ほか)、瀬戸焼(転用磨具・壺・茶入れ・皿・卸皿・折縁皿・碗ほか)、渥美焼(甕ほか)、常滑焼(転用磨具・壺・片口鉢・甕)、産地不明陶磁器(壺・鉢・擂鉢)、山茶碗(皿・碗・片口鉢)、白かわらけ、かわらけ(T種・R種)、伊勢系土鍋、土師質土器(火鉢カ)、轆羽口、瓦質土器(火鉢・香炉(カ))、瓦(軒丸・丸・平)、相模型甕、古墳時代~古代の須恵器、銭貨(北宋銭)、鉄製品(鏝・釘ほか)、砥石、木製品(円盤・杭・折敷・栓・草履芯・箸・刀形・篋・矢板ほか)、貝殻(イボキサゴ・

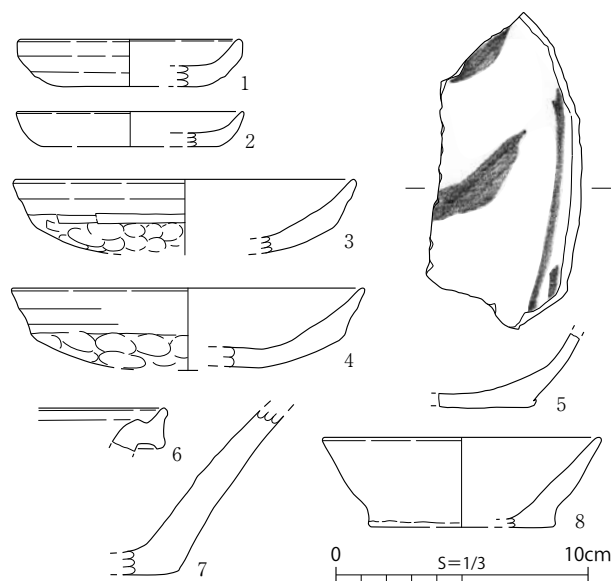
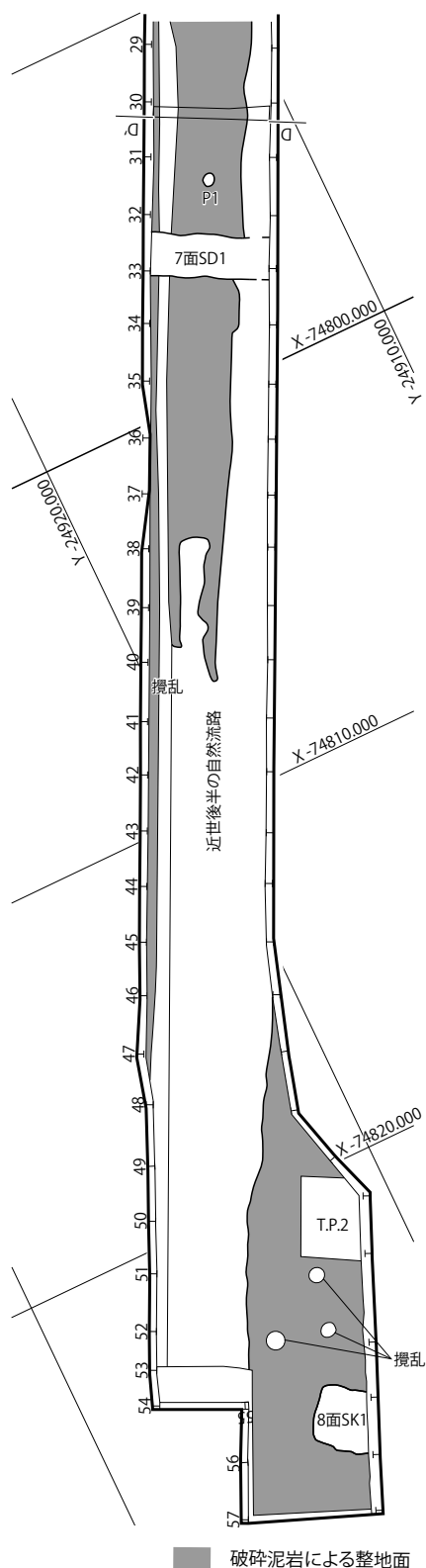
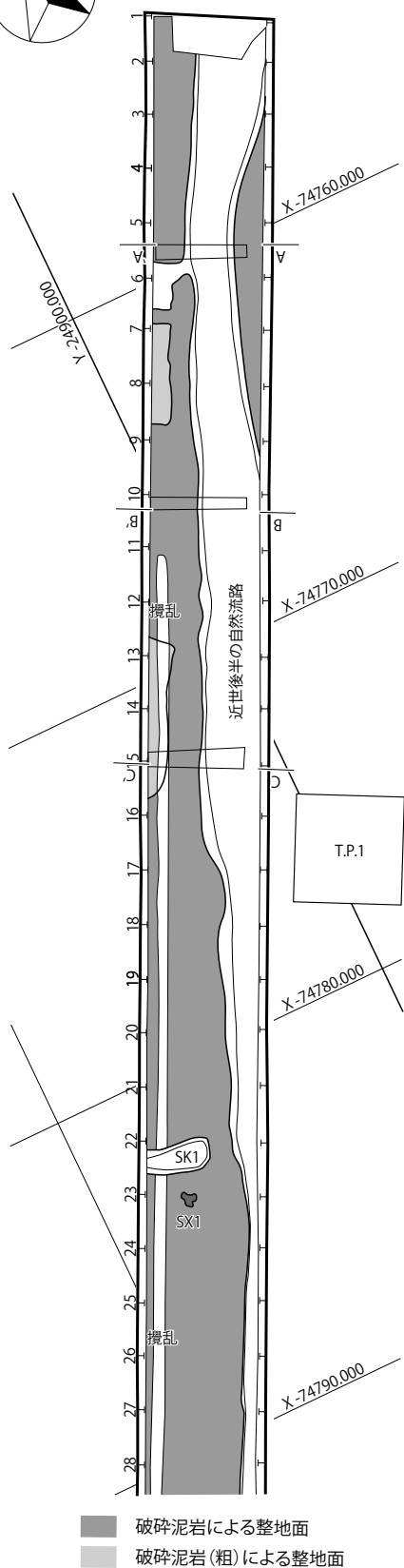
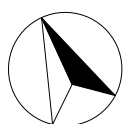


図36 2区南9面整地土出土遺物



0 10m
S=1/200

図 37 1・2区・2区南10面全体図

明瞭に確認できる。26は白磁碗である。27～30は12世紀中頃～後半の青磁碗で、内面には片彫花文や櫛描点描文を施す。31・32は輸入陶器盤である。31は黄色釉、32は緑色釉を施す。32内面の装飾は、鉄絵ではなく線彫文である。33は白磁小壺と思われる製品である。内外面には透明釉が掛かる。34は渥美焼甕、35～45は常滑焼である。35は、口縁端部を上方に引き出す5型式頃の広口壺である。36は甕である。37～45は片口鉢で、39・41・44・45はⅠ類、その他はⅡ類である。3～6型式前後と幅広い時期の製品が混在する。46は渥美焼片口鉢である。47～49は山茶碗である。47は東遠江、48は渥美・湖西、49は東濃型の製品と思われる。49は外底面に平仮名か記号か判然としない墨書がある。50は外面に型押しによる簾状文を施す土師質土器で、香炉か風炉と思われる。図45-51～53は白磁（12世紀前半、八重樫忠郎ご教示による）・常滑焼・瓦などの破片を転用した磨具である。いずれも周縁部を磨面とする。54・55は平瓦である。いずれも凸面は縄目、凹面は布目である。56は仕上砥で、石材は凝灰岩である。57～59は釘である。59は先端が屈折する。

11面（図46-50・表4.5・PL.10,11）

11面は、12面上に1・2区では灰黒色粘質土、2区南では灰褐色土を盛土し、表層には10面同様、泥岩塊を主体とする灰褐～暗灰褐色土を盛土して石畳状に整地する。1・2区では直径30cm以上の大型泥岩塊が目立ち、荒れて河原のような様相を呈する部分がある。2区南の整地面は比較的滑らかである。1・2区の中央を10面で検出

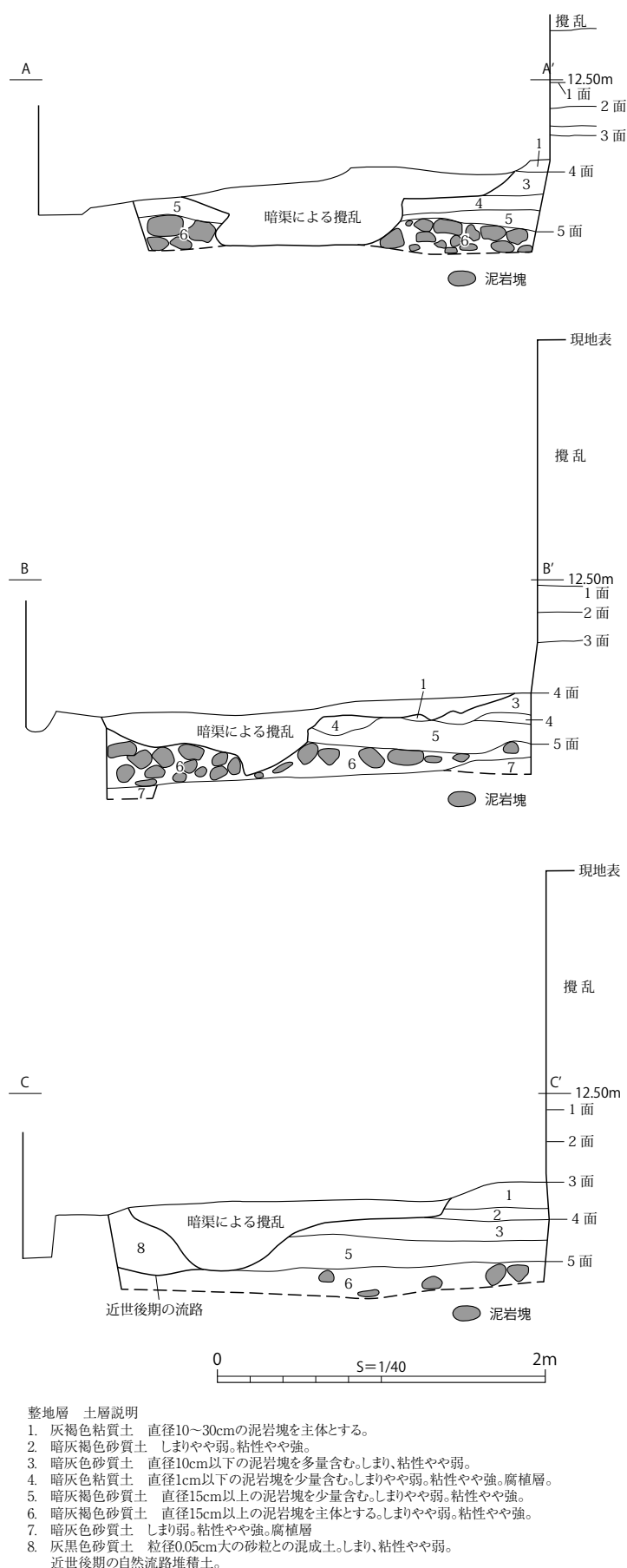


図38 1・2区10面トレンチ土層図

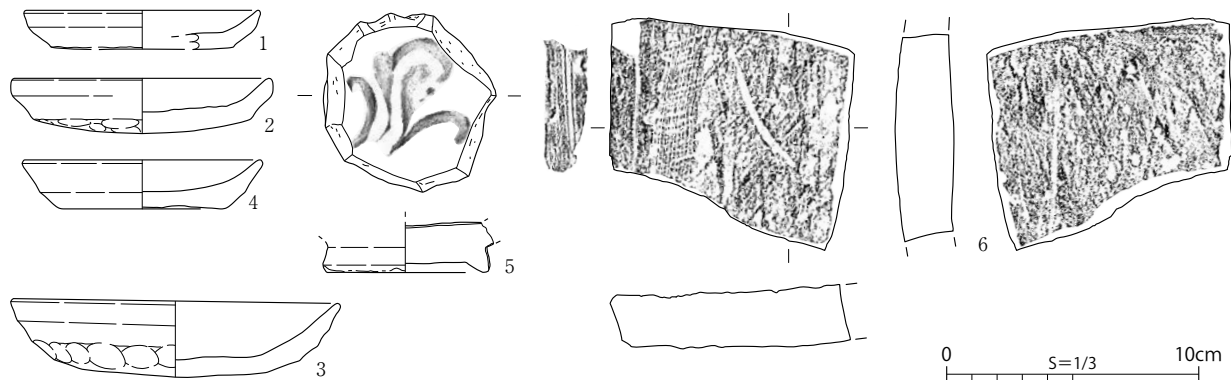


図 39 10 面上出土遺物

した自然流路が緩く蛇行しながら南流する。整地面の標高は、北端で 11.45 m、南端で 11.05 m と、南に向かってわずかに下降する。図 47 は 11 面上で出土した遺物である。1～4 はかわらけ T 種である。3 は皿状を呈する。5 は外面に櫛目文、内面に横位の沈線と花文を施す青磁碗で、12 世紀中頃～後半の同安窯系の製品である。このほかに、鞍の可能性のある筒状の鹿角製品が出土している（第 5 章参照）。

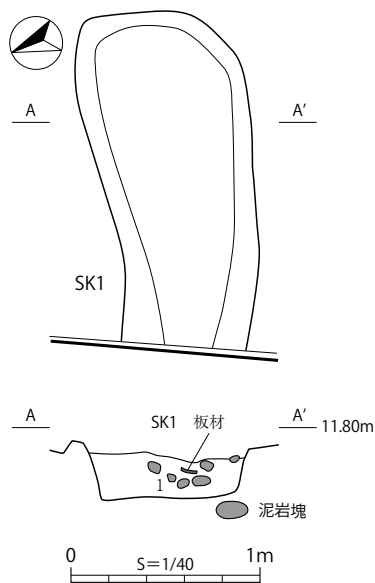
11 面の遺構は、1 区 H5-6 で柱穴 1 口（P1）、H12 で整地面に据えられた大型板材を検出した。

P1（図 48・PL.10）

1 区 H5-6 で検出したやや歪な円形を呈する柱穴である。規模は南北 23cm、東西 28cm、深さ約 30cm（底面標高 11.2 m）を測り、断面形は U 字状を呈する。埋土は、直径 3～10cm の泥岩塊を少量含む暗灰褐色粘質土の単層である。遺物はかわらけ T 種の小片が 9 点、出土している。

大型板材（図 49・PL.11）

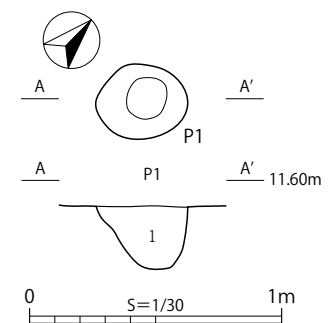
1 区 11 面の検出作業中に出土した。11 面に埋め込む形で長さ 82cm、幅 12×12cm の面取り八角材を敷き、その上に東西方向に設置している。西側は調査区外に延伸する。板材の大きさは、長さ 76.5cm 以上、幅 71cm、厚さ 6.0cm と、非常に厚みのある板材である。木取りは柂目取りで、側面は丸みをつけて仕上げている。虫食いによるものか、全体に腐蝕が進んでおり、取り上げ時に分解してしまった。枕木に使用されている材は、丁寧に面取りされており、建物柱材の二次利用と思われる。板材の長辺が西側に延伸することや、枕木と組み合わせる構造をもつことから、橋や木道といった構造物の一部ではないかと考えている。



SK1 土層説明

1. 灰褐色砂質土。直径 5～15cm の泥岩塊を少量、木器破片、貝殻破片、獣骨破片などを少量含む。しまりやや弱、粘性やや強。

図 41 2 区 10 面 SK1



P1 土層説明

1. 暗灰褐色粘質土。直径 2cm 以下の泥岩塊を少量含む。しまりやや弱、粘性やや強。

図 40 2 区 10 面 P1

11 面整地土からは、白磁（壺・皿・碗ほか）、青磁（皿・碗ほか）、輸入陶器（褐釉壺ほか）、瀬戸焼（壺・入子・卸皿・皿・碗ほか）、渥美焼（壺・甕）、常滑焼（転用磨具・壺・片口鉢・甕）、山茶碗（碗・片口鉢）、かわらけ（T 種・R 種）、瓦（丸・平）、瓦質土器、古墳時代から古代の土師器（壺・甕・甑・坏）、古代の須恵器（有台坏・甕）、鞆羽口、銭貨（北宋銭）、鉄製品釘、石製品、骨製品筭、木製品（曲物・櫛・杭・折敷・草履芯・箸・刀形・連歯下駄ほか）、動物骨（イヌ・ウマ・ニホ

ンジカ・コハクチョウ)、貝殻(イボキサゴ・ダンベイキサゴ・アカニシ・サザエ・ハマグリ・メカイアワビ・マダカアワビ・アワビ類・レイシ・クボガイ・バテイラ・コシダカガンガラ・ホソヤツメタ・ハナマルユキ・イシダタミ・サルボウ)などが出土している。図 50-1 ~ 10 はかわらけである。3 は外面調整に一部、ヘラナデを施す。9 は低速で糸切りを行っている。11 は白磁壺である。口縁部を外側に折り曲げ、縁帯に成形する。12・13 は青磁碗である。12 は 12 世紀中頃～後半の製品で、内面体部に片彫蓮花文を施す。14 ~ 16 は常滑焼である。14 はⅡ類、15 はⅠ類の片口鉢で、4-5 型式頃の製品である。17・18 は東遠型山茶碗と思われる製品であるが、17 は O-53 窯式の灰釉陶器の可能性はある。

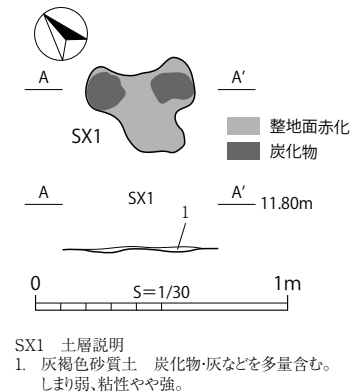


図 42 2 区 10 面 SX1

12 面 (図 51-58・表 5,16,19・PL.11-14)

12 面は、11 面同様、泥岩塊を主体とする灰褐～暗灰褐色土を盛土して石畳状に整地する。2 区南では、泥岩塊と 13 面の間に黒灰色粘質土の盛土を確認した。表層には直径 30cm 以上の大型泥岩塊が多く、1・2 区の自然流路周辺では整地面が荒れて河原のような様相を呈する部分がみられるほか、10・11 面の西壁際でみられる泥岩塊が少ない部分が散在する。整地面の標高は、北端で 11.35 m、南端で 10.75 m と、南に向かって緩やかに下降する。図 52 は 12 面上で出土した遺物である。1 は瀬戸焼仏花瓶で、外面に褐釉を施す。外底面には「メ」字形のへう描きがみられる。2 は常滑焼甕である。口縁端部の形状から、2 型式頃の製品と思われる。3・4 は釘である。4 は「コ」字形に屈曲する。5 は頑強な作りの差歯下駄で、木取りは柂目取りである。このほか、2 区 H34-37 では面上で少量の動物・魚骨(ウマ・マダイ)を検出している。

12 面の遺構は、H13-14・2 区 H34-35 で柱穴各 1 口(P01・P02)、2 区 H28-32 で柱穴列 1 組(SA1)、1 区 H19-2 区 H21 で東西溝 1 条(SD1)、2 区 H26-31 で溝状の浅い落ち込み 1 条(SX1)を検出した。

P01 (図 53・PL.11)

1 区 H13-14 で検出した隅丸方形を呈する柱穴である。規模は一辺約 35cm、深さ約 30cm(底面標高 10.95 m)を測り、断面形は U 字状を呈する。埋土は、直径 3 ~ 5cm の泥岩塊を含む灰褐色粘質土の単層である。遺物は出土していない。

P02 (図 54,57・表 5・PL.11,12)

2 区 H34-35 で検出した隅丸方形を呈する柱穴である。規模は南北 50cm、東西 45cm、深さ約 55cm(底面標高 10.45 m)を測り、断面形は南側に段をもつ階段状を呈する。埋土は、直径 3 ~ 5cm の泥岩塊を含む暗灰褐色粘質土で、3 層に分層できる。3 層中には一辺 30cm 前後の泥岩切石

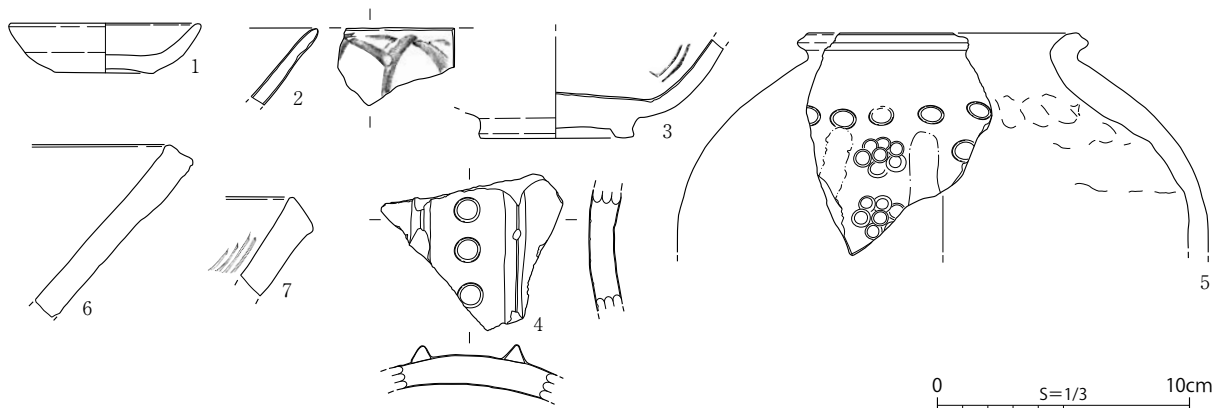


図 43 2 区 10 面 SX1 出土遺物

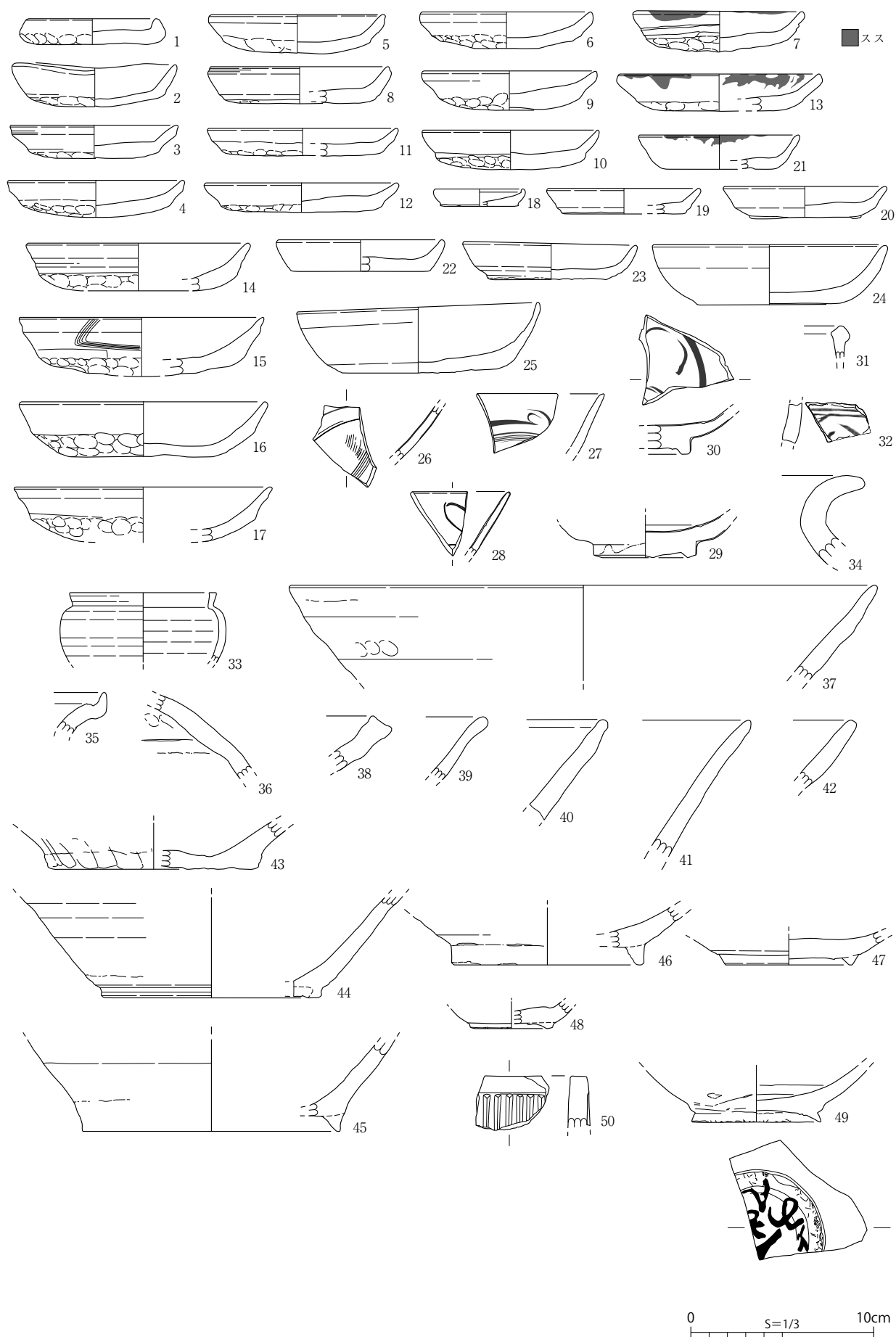


図 44 10 面整地土出土遺物 1

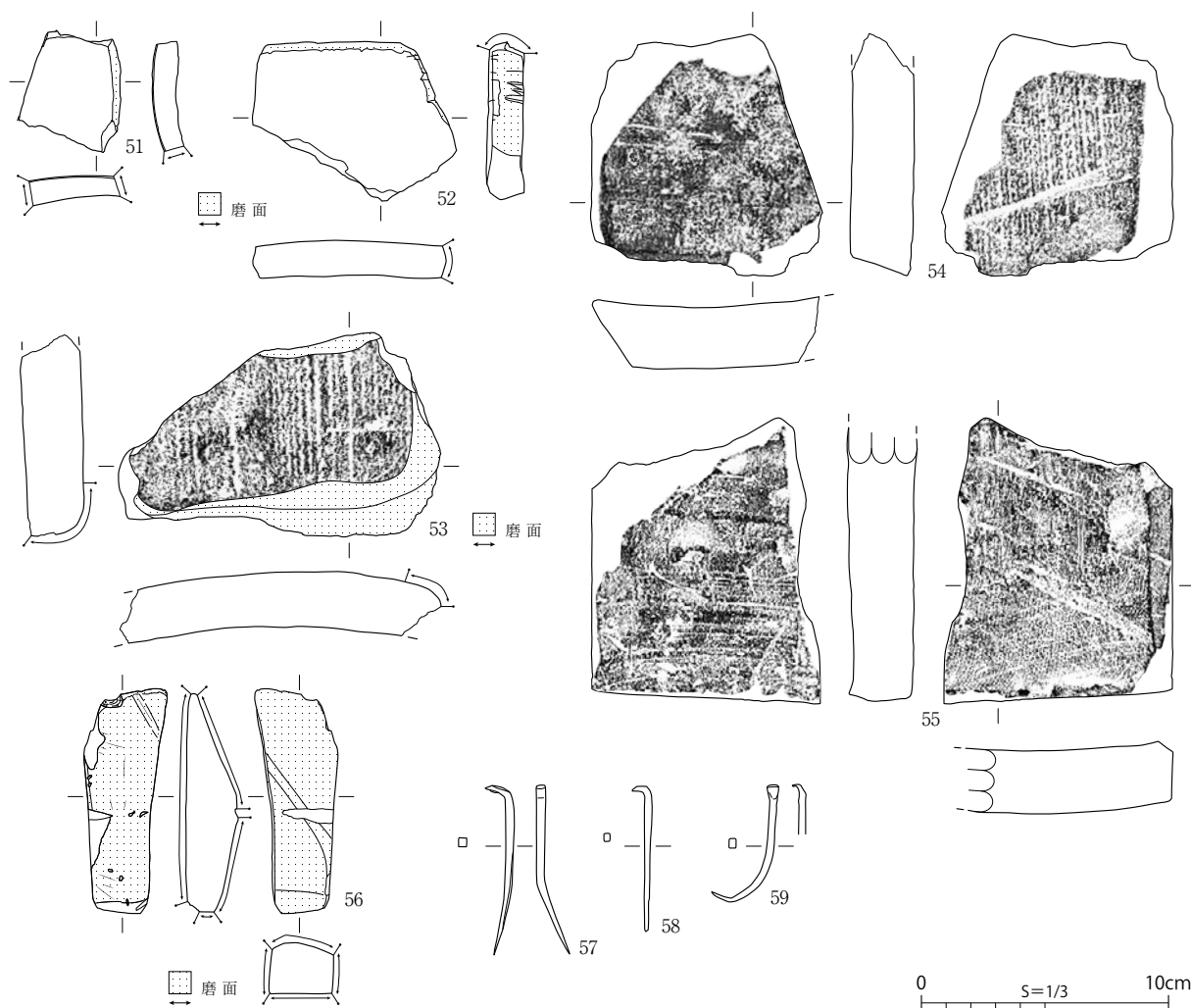
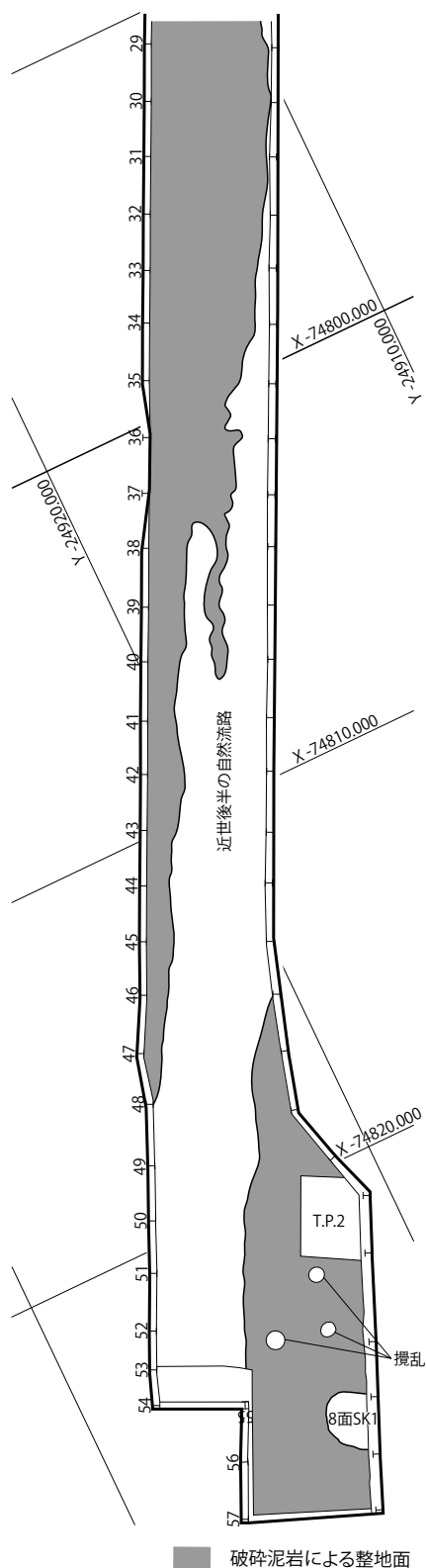
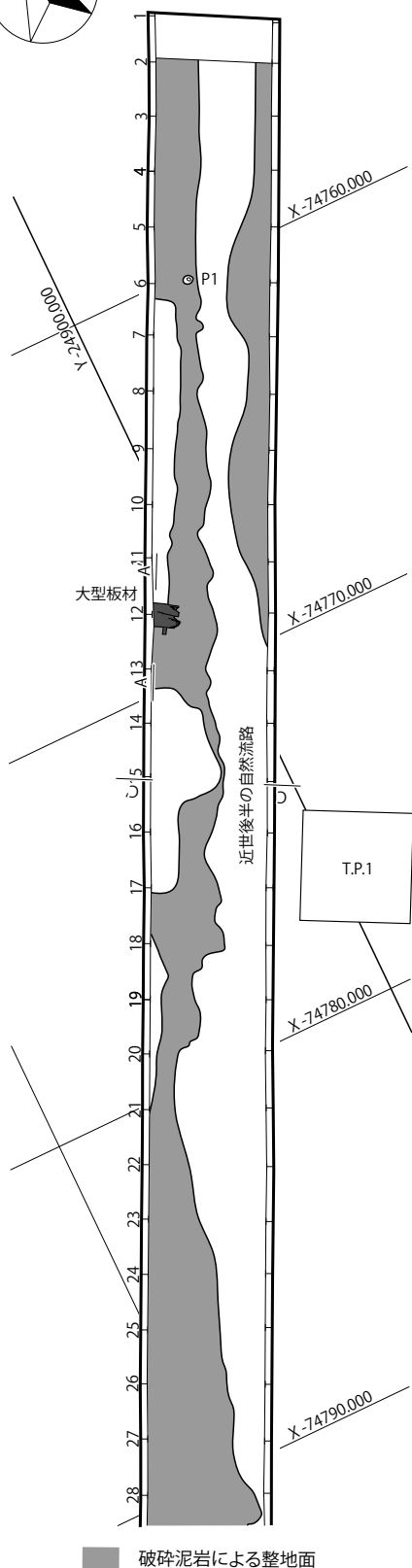
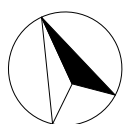


図 45 10面整地土出土遺物 2

が上下 2 個含まれており、当初は柱穴に伴う根石とみていたが、土層のしまりが弱いことや切石間に埋土が狭在することから、切石は柱穴を埋め戻す際に廃棄されたものと考えている。泥岩は方形に切り出されたものが、風化によって角が取れ、丸味を帯びている。遺物は、山茶碗皿、かわらけ（T 種・R 種）、土師器甕（古代か）、動物骨（ニワトリ）などの破片が出土している。図 57-1・2 はかわらけ R 種である。体部中位にやや強い稜をもつ。3 は山茶碗である。高台の形状から、12 世紀後半の東遠型と思われる。

SA1（図 55・PL.12）

2 区 H28-32 で検出した柱穴列で、北から南に向かって 320cm-260cm の間隔で柱穴 3 口を直線的に配置する。軸方位は N - 27° - E を指す。柱穴の平面形は円形もしくは隅丸方形、断面形は U 字状を呈する。規模は P1 が直径 35cm、深さ 25cm（底面標高 10.91 m）、P2 が直径 30cm、深さ 25cm（底面標高 10.88 m）、P3 が直径 25cm、深さ 25cm（底面標高 10.83 m）を測る。埋土は、3 口とも直径 3cm 前後の泥岩塊を含む暗灰褐色粘質土で、P2・P3 は 2 層に分層できる。いずれも上層は人為的な埋土であるが、下層は柱穴中に充填していた土層の可能性もある。遺物は P1 からかわらけ T 種小片 2 点、P2 から土師器甕（古代か）小片 2 点、P3 からかわらけ T 種小片 7 点、土師器甕（古代か）小片 1 点が出土しているが、図示できるものはない。



0 10m
S=1/200

図 46 1・2区・2区南11面全体図

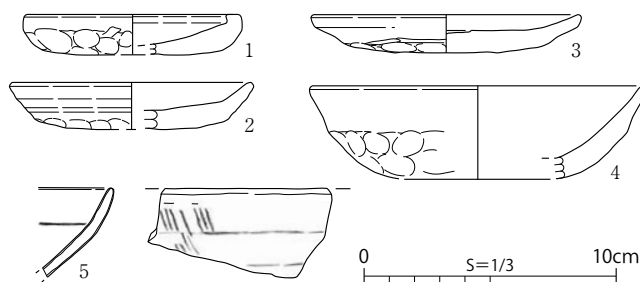
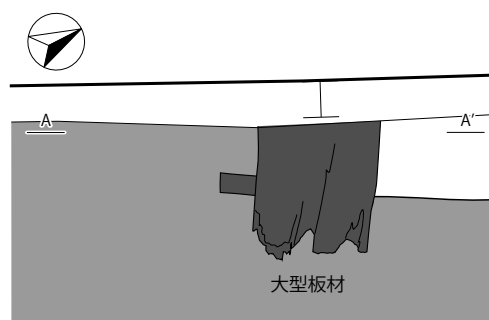
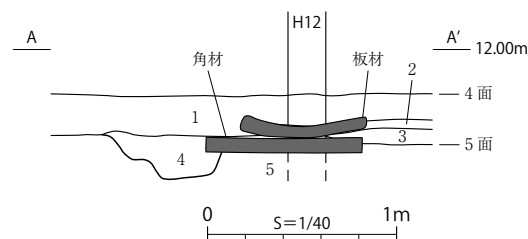


図 47 11 面上出土遺物



P1 土層説明
1. 暗灰褐色粘質土 直径3~10cmの泥岩塊を少量含む。しまりやや弱。粘性強。

図 48 1 区 11 面 P1



土層説明
1. 灰褐色粘質土 直径5~40cmの泥岩塊を主体とする。10面整地層。
2. 灰黒色粘質土 腐植を多量含む。しまり弱。粘性やや強。
3. 暗茶褐色腐植層 しまりなし。粘性やや強。
4. 暗灰褐色粘質土 直径5cm以下の泥岩塊を多量、砂粒を少含む。しまり弱。粘性やや強。
5. 青灰褐色土 直径10~40cmの泥岩塊を主体とする。11面整地層。

図 49 1 区 11 面大型木材

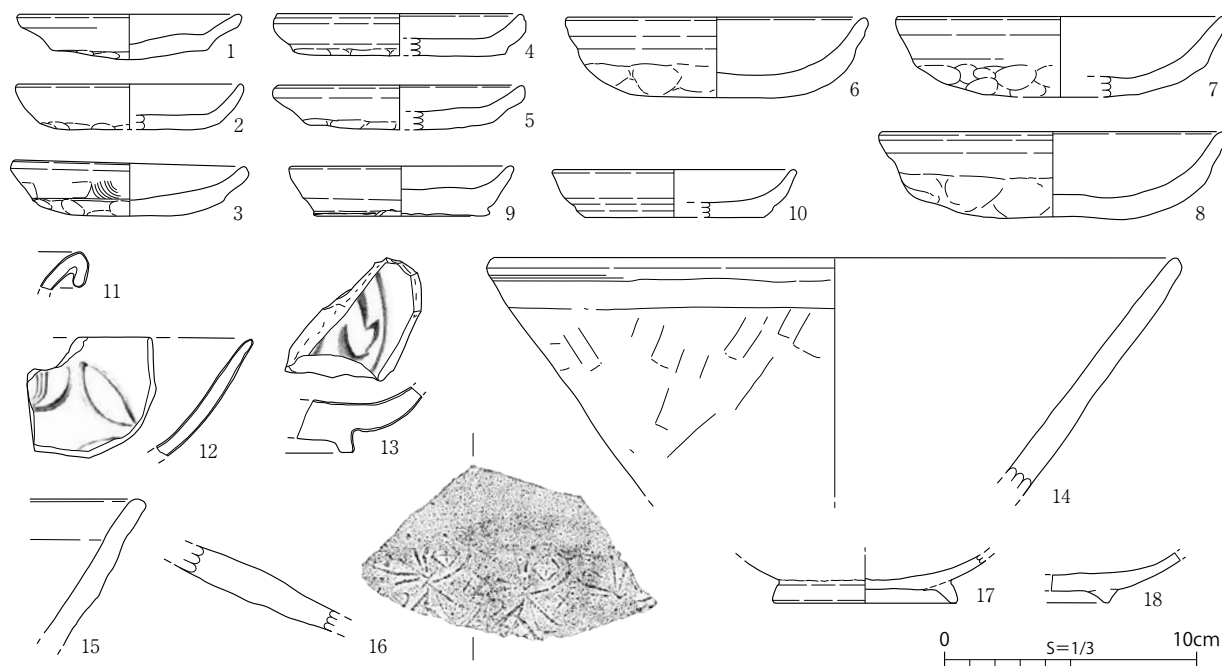
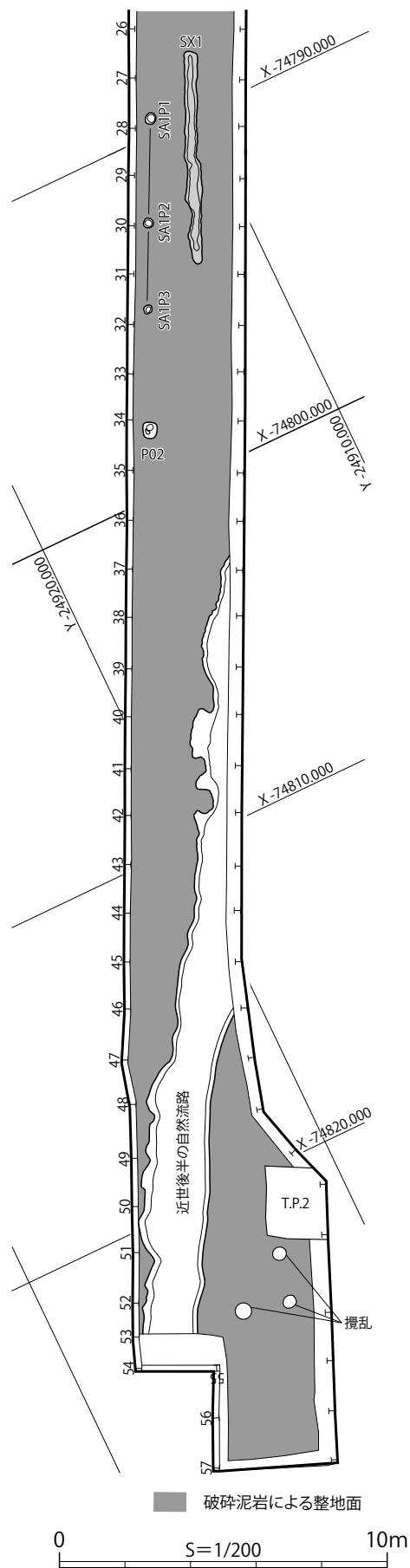
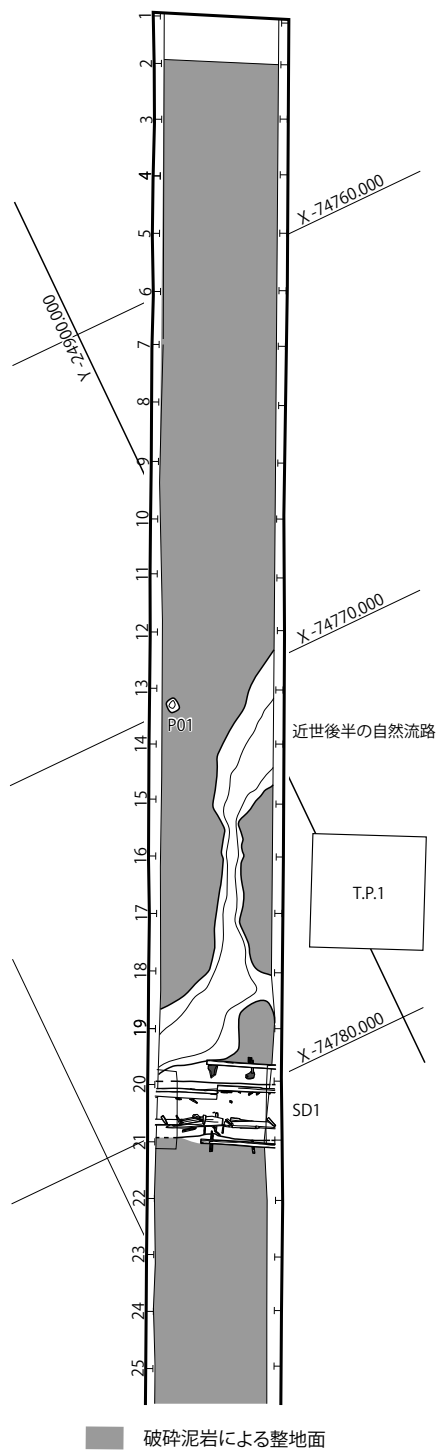
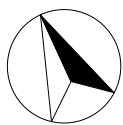


図 50 11 面整地土出土遺物

SD1 (図 56,57・表 5,19・PL.12-14)

1 区 H19-2 区 H21 で検出した側板を有する東西方向の溝で、両外側に角材を伴う。遺構方位は N-62°-W を指し、規模は長さ 320cm 以上、幅は掘り方で 1.55 m、深さ約 60cm、断面形は台形状を呈する。溝底の標高は調査区東壁際で 10.40 m、西壁際で 10.67 m と、東に向かって下降する。前述したように、本溝は両側面を杭留めの板材で覆う構造をもつ。使用する材はすべて建築部材の



0 S=1/200 10m

図 51 1・2 区・2 区南 12 面全体図

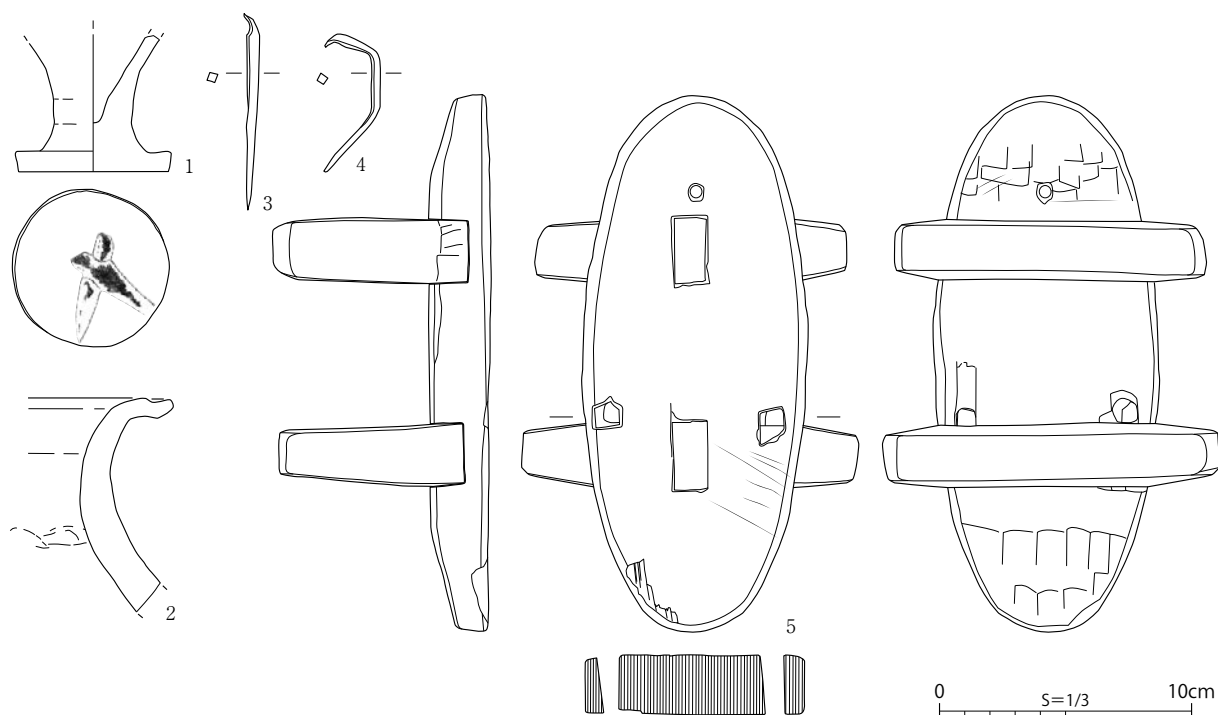


図 52 12 面上出土遺物

二次利用とみられ、杭には柱、側板には 11 面で検出したものと同じく 4～6cm 厚の大型板材を二次加工して使用する。側板は、断面形が台形状になるように設置され、杭も大半は側板に密着するように斜めに打設する。裏込めが存在することから、当初は幅 80cm 前後の箱断面であった可能性がある。また、底板は材も痕跡も確認できず、当初から存在しなかったと考えている。埋土は水平堆積で、12 層に分層できる。溝底に堆積する 8 層は、木製品や不明木材を

はじめとする遺物や腐植物を多く含む粘質土で、溝底に自然堆積した土層と考えている。1・2 層は 11 面整地土で、直径 5～20cm の泥岩塊を多く含む。

3～7 層は人為的な埋土と考えている灰褐色粘質土で、直径 3cm 以下の泥岩塊や砂粒をやや多く含む。10～12 層は側板の裏込めにあたる堆積土で、11 層は直径 3～20cm の泥岩塊を主体とする。西壁側に主に確認できる 9 層は、直径 5cm 以下の泥岩塊や粒径の大きな砂粒を主体とする土層である。8 層とは異なる土質であるが、やはり溝底の自然堆積土と考えている。

本溝では、掘り方の外側で枕木や礎石の上に設置した八角材を検出した。これらは溝の両外側で対になっており、南側は掘り方の外側 5～15cm、北側は掘り方の外側 30cm 前後の位置に溝と平行に設置する。材の寸法は一辺 12cm 前後、長さは南側のものが 199cm 以上、北側のものが 188cm 以上を測り、柱用に製材した材を用いたか、柱材を二次利用した可能性がある。用途についてはよくわからないが、橋の

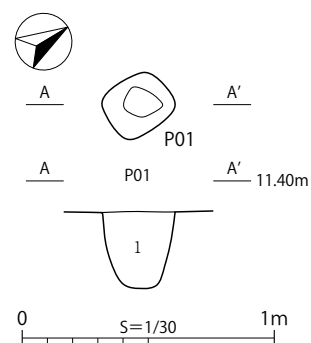


図 53 1 区 12 面 P01

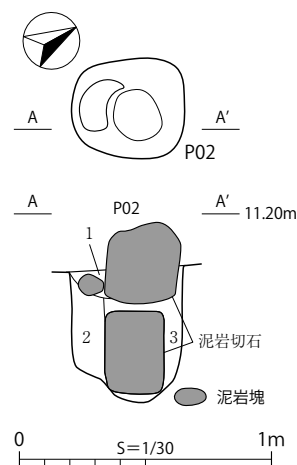


図 54 2 区 12 面 P02

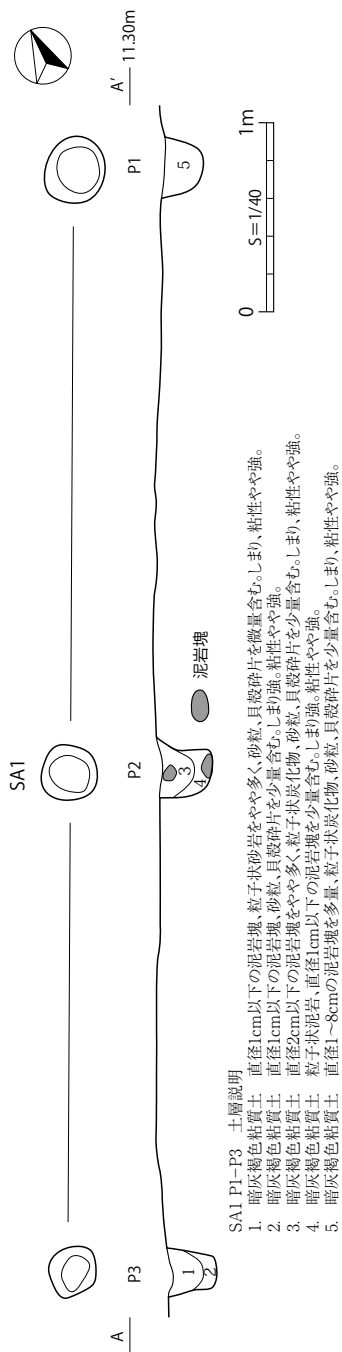


図55 2区12面SA1

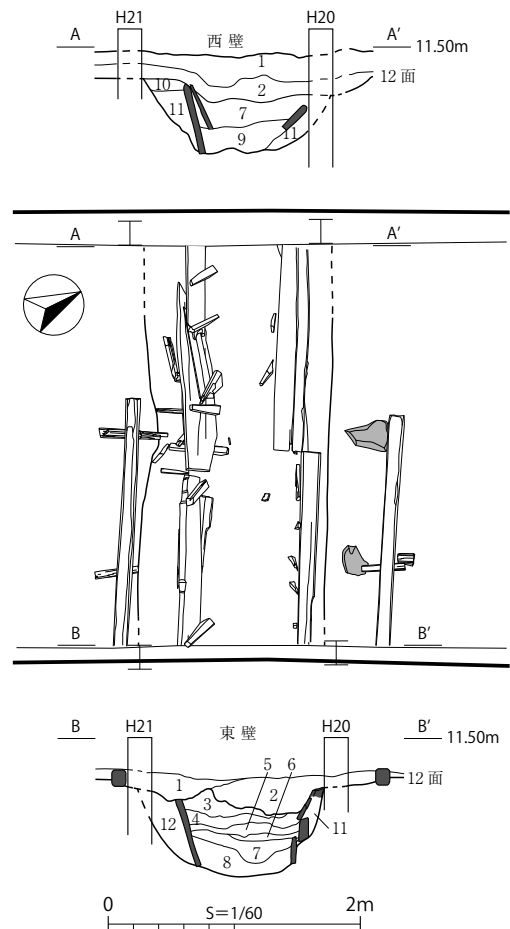


図56 1・2区12面SD1

基礎ではないかと推測する。

遺物は、白磁皿、青磁碗、常滑焼（甕・片口鉢）、かわらけ（T種・R種）、瓦（丸・平）、貝殻、漆器（皿・碗）、木製品（舟形・刀形・陽物・齋串・箸・曲物・篋・杓子・下駄・草履芯・建築部材ほか）、貝殻（イボキサゴ・サザエ）などが出土している。出土遺物の主体は木製品で、齋串や形代は底面で出土している。図57-4～9はかわらけである。大型品はT種・R種とも口縁部付近の面取りや断面形などが近似しており、ほぼ同じ形態を呈する。10は青磁碗である。内外面に櫛目文や櫛描点描文などを施す同安窯系の製品である。11は平瓦で、凸面は縄目、凹面は布目である。

12は漆器皿である。木取りは柾目取りで、内外面には黒漆を塗布する。内面には繊細なタッチで竹を描く。13は舟形と考えられる製品で、材はタケである。14は陽物と思われる。15は斉串である。小孔が1口確認できるが、虫食い穴であろうか。16は篋状製品である。17は杓子で、先端が一部、剥離する。

SX1 (図 51・PL.12)

2区 H26-32 で検出した。平面・断面とも不整形を呈する溝状の落ち込みで、遺構の方位はN－25°－E、遺構の規模は全長約 650cm、幅 20～45cm、深さ 5cm 前後を測る。11 面整地時に埋められており、12 面使用時に生じた破損部分と判断した。

12 面整地土からは、白磁壺、青磁 (碗ほか)、瀬戸焼 (碗・皿)、渥美焼 (壺・甕)、常滑焼 (壺・片口鉢・甕)、山茶碗 (碗・片口鉢)、かわらけ (T 種・R 種)、瓦質土器、瓦 (丸・平)、古墳時代の土師器坏、弥生時代後期の土器 (高坏・壺・甕)、鉄製品 (釘・釘飾カ)、砥石、木製品 (曲物・

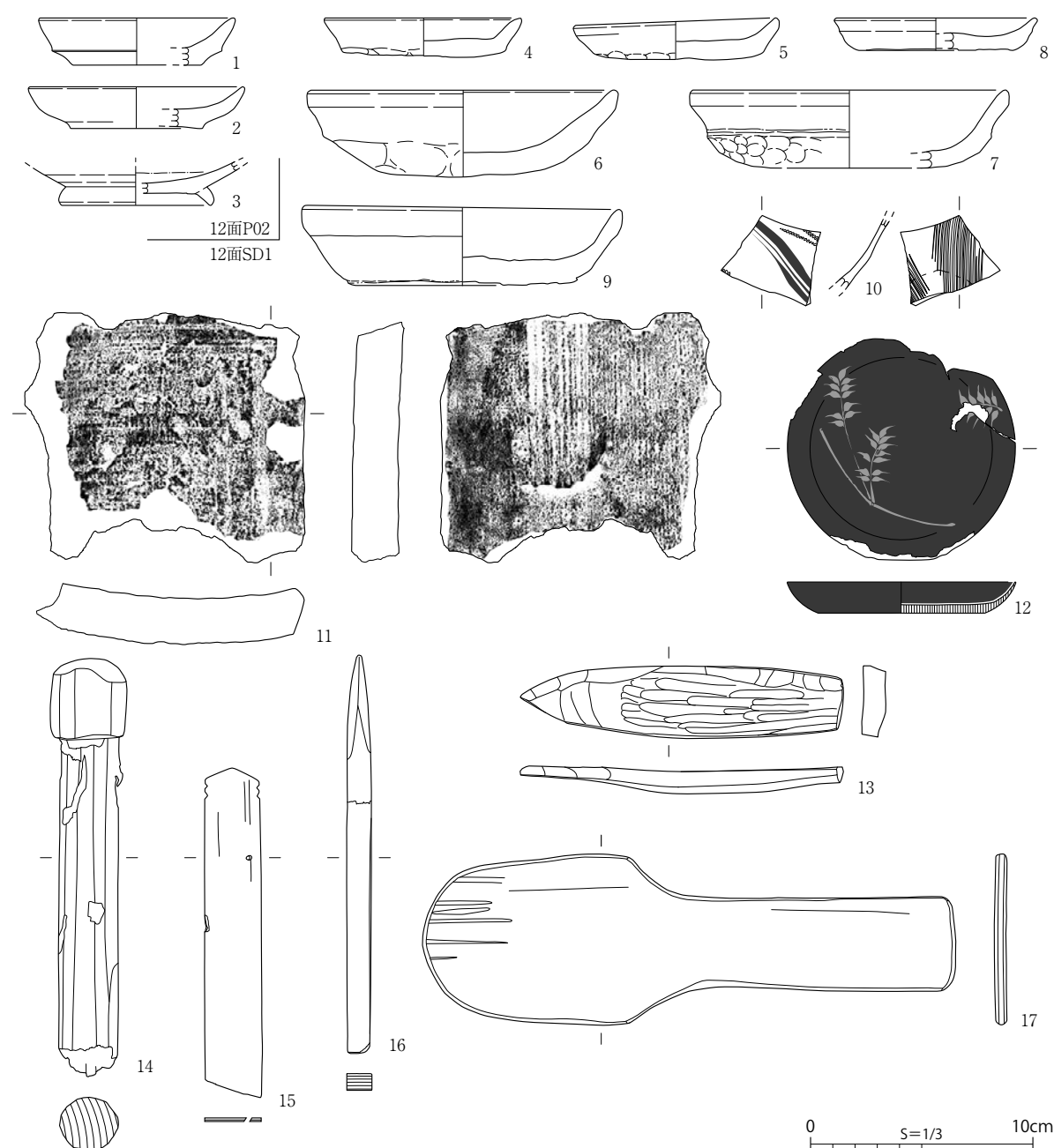


図 57 1・2 区 12 面 P02 / SD1 出土遺物

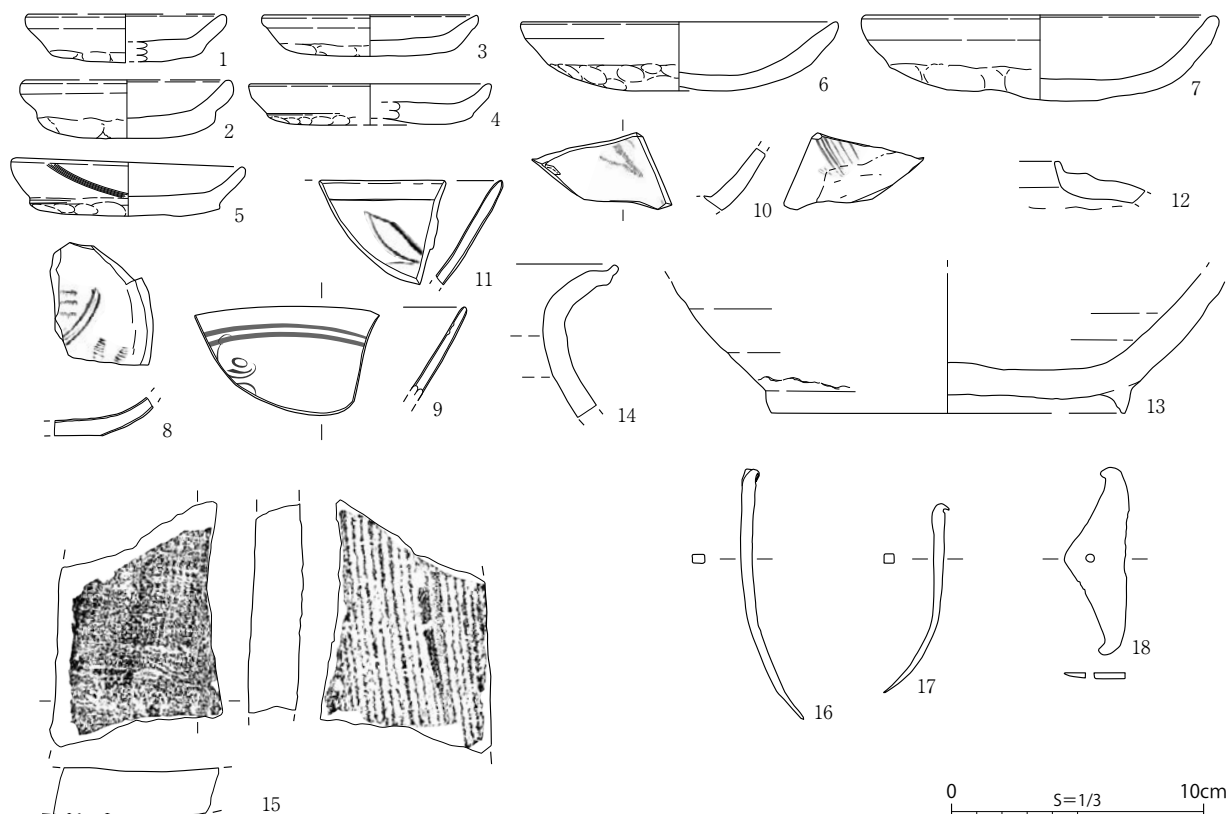


図 58 12 面整地土出土遺物

竈ほか)、動物骨(イヌ・ウマ・ニワトリ)、貝殻(ダンベイキサゴ・バイガイ・ハマグリ・チョウセンハマグリ・バテイラ・サザエ蓋・スガイ・レイシ)などが出土している。図 58-1～7 はかわらけで、図示できたのはすべて T 種である。ちなみに、12 面整地土に含まれるかわらけ R 種は、小片を含めても T 種の一割程度と少ない。5 は体部調整の終わりに指頭を斜め上方に引き上げた痕跡が明瞭に残る。8～11 は青磁碗である。いずれも 12 世紀中頃～後半の製品で、内外面に楕円描点描文や花文を施す。12・13 は渥美焼で、12 は短頸壺、13 は片口鉢である。14 は常滑焼甕である。渥美焼・常滑焼とも 12 世紀中・後葉の製品である。15 は平瓦で、凸面は縄目、凹面は縄目か目の粗い布目である。16・17 は釘で先端は屈曲する。18 は火打金である。火打ち面は、中央部が使用により磨耗する。

13 面 (図 59-61・表 5・PL.14)

2 区南で検出した、黒灰色粘質土上に直径 3～30cm の泥岩塊を主体とする暗灰褐色土を盛土した整地層である。整地面の大部分は泥岩塊によって石畳状を呈するが、泥岩塊をほとんど含まない部分も散在する。開発深度による調査制限と近現代の攪乱の影響で、2 区では整地層の状態はよくわからないが、12 面 P02 調査時に掘削した小トレンチ断面で延長部分と思われる整地層を確認している。遺構は、2 区南 H53－57 で大型土坑 1 基 (SK1) を検出した。

SK1 (図 60,61・表 5・PL.14)

2 区南 H53－57 で検出した土坑である。平面形は不整形、断面形は皿状を呈する。遺構の規模は、南北 380cm 以上、東西 220cm 以上、深さ約 5～10cm (底面) を測り、南側・東側は調査区外に延伸する。底面は標高 10.35 m で、ほぼ平坦に設けている。埋土は暗灰褐色粘質土の単層で、直径 5cm 以下の泥岩塊・砂粒・貝殻碎片などを含む。遺物は、白磁、青磁 (皿・碗)、瀬戸焼皿、渥美焼 (壺・甕)、常滑焼甕、山茶碗、かわらけ (T 種・R 種)、平瓦、鉄釘、古代の須恵器、動物・魚骨 (ウマ・

タイ類)、貝殻(クボガイ・コシダカガンガラ・アカニシ・ハマグリ)などの破片が少量、出土している。図 61-1 は口縁端部が外側に屈曲する白磁碗で、12 世紀中頃～後半の製品である。2 は同時期の青磁碗で、輪花状の口縁部をもつ。内面には分割線を施す。3 は丸瓦、4 は平瓦である。いずれも凹面は布目、4 の凸面は格子目である。5～7 は釘である。本遺跡で出土した釘の大半は中程～先端が屈曲しており、回収目的で木材から抜き取った可能性が窺える。8 は編針であろうか。

第 3 節 下段(4・5・6 区)の遺構と遺物

1～3 面(図 7・表 5,6)

1～3 面は、暗渠新設部分である 5 区で検出した。1 面はグラウンド下瓦礫層直下(標高 11.75～11.60 m)、2 面は標高 11.45～11.2 m、3 面は標高 11.30～11.05 m で検出した。いずれも中世遺物を多量含む整地層であったが、わずかな量のスレートタイルやガラス片が出土したことと、整地面が機械的な転圧を掛けたようなしまりをもつことから、旧校舎に伴う整地層と判断した。図 62 は 4 面道路東側の溝もしくは面上の堆積土から出土した遺物である。1～9 はかわらけ R 種である。1 以外は概ね肉厚で粗雑な作りである。10 は青磁碗で、内面に片彫花文を配する。11 は常滑焼甕である。縁帯が胴部に密着する 9 型式頃の製品である。図示したもの以外にも、青白磁(器種不明)、白磁(口禿皿・壺・皿・碗)、青磁(坏・鉢)、輸入陶器(器種不明)、瀬戸焼(瓶子・入子・壺・卸皿・皿・縁釉皿・天目碗・茶入・碗ほか)、渥美焼壺、常滑焼(壺・片口鉢・甕片転用磨具)、山茶碗(片口鉢・碗・皿)、かわらけ(T 種・R 種)、瓦質土器(火鉢・鍋)、瓦(丸・平)、土師質土器(火鉢カ)、伊勢系鍔釜、鉄釘、石製品(砥石・鉢)、動物骨(イヌ・ウマ・イノシシ・イルカ・メジロザメ科)などが出土している。

4 面(図 63-67・表 6,7,16,17・PL.15,16)

4 面は現地表下 1～1.2 m で検出した整地層で、5 区以外では旧校舎の開発に伴う盛土や攪乱で失われている。整地面の標高は北端で 11.1 m、南端で 10.80 m と、南に向かって緩やかに下降する。整地層は、直

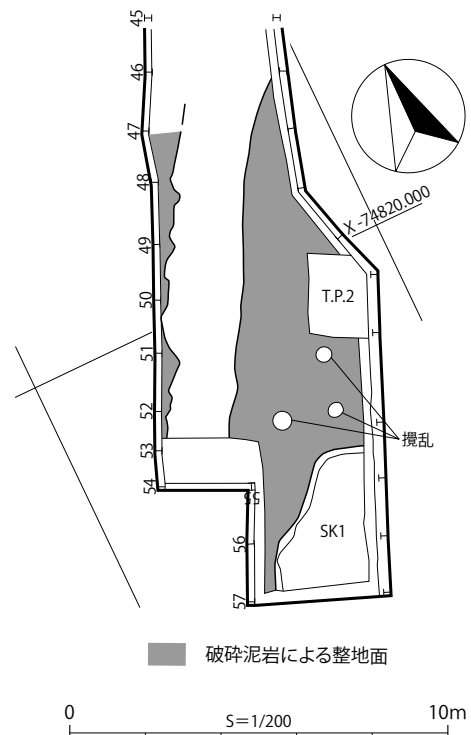
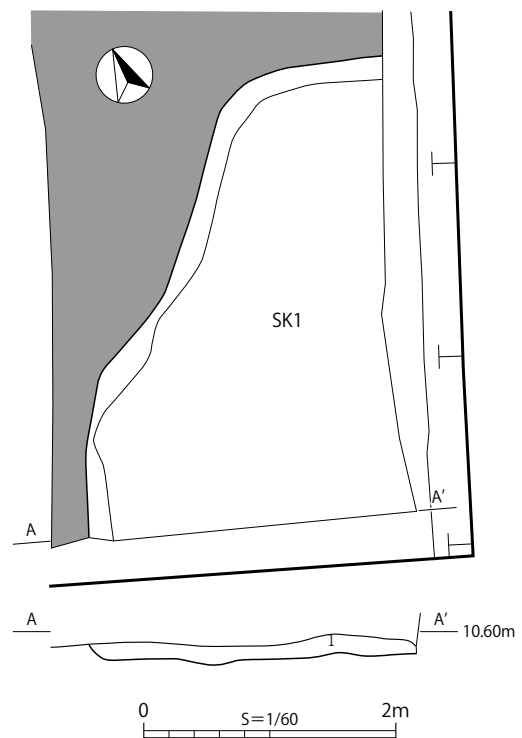


図 59 2 区南 13 面全体図



SK1 土層説明

1. 暗灰褐色粘質土 直径5cm以下の泥岩塊、砂粒をやや多く、貝殻破片を少量含む。しまり、粘性やや強。

図 60 2 区南 13 面 SK1

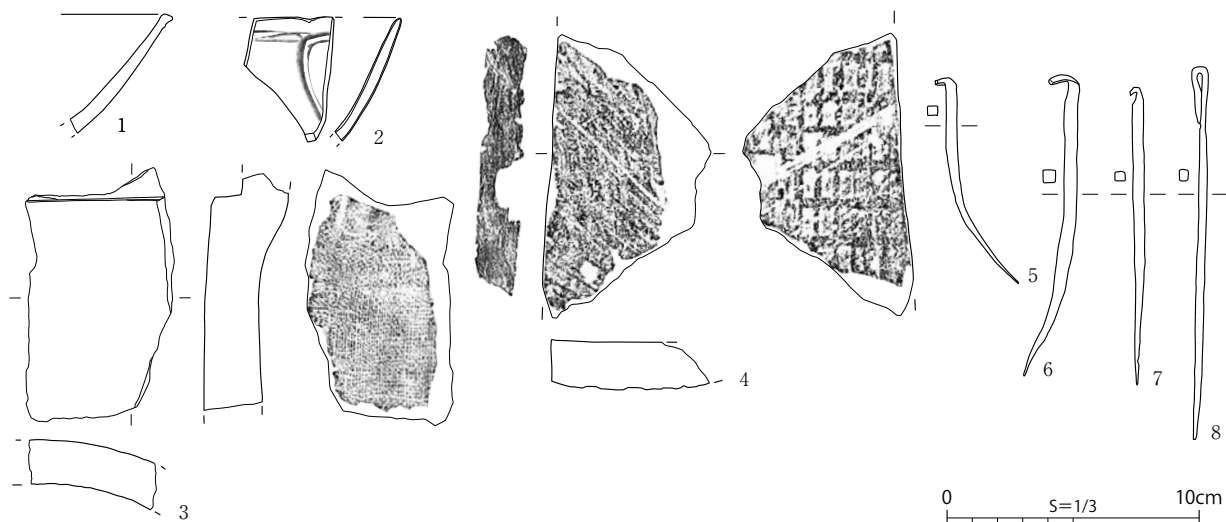


図 61 2区南 13 面 SK1 出土遺物

径 0.5 ～ 30cm の泥岩塊や粉碎泥岩を主体とする黄灰褐色土を用いており、整地面は石畳状を呈する。調査区南端部では一辺 30 ～ 50cm に切り出した方形泥岩塊を縦列に並べており、検出当初は石垣や基壇といった構造物の可能性も考慮して作業を行ったが、最終的に道路基礎と結論付け、4 面整地層は道路の可能性が高いと判断した。道路の方位は $N - 28.2^\circ - E$ を指し、北東－南西方向に延伸する。中央部は前述の方形泥岩を除き、泥岩をほとんど含まない範囲が帯状に広がる。この範囲では、調査区北側に全長 630cm、幅 60cm、深さ約 10cm の溝状落ち込み（SD1, 図 63・64）を検出したが、2 区南 6・7 面で検出したものと同様、道路（整地面）の使用により生じた凹みと考えている。道路の東側には深さ 40cm ほど低い位置に面が広がるが、調査区東壁際の狭い範囲の検出であり、溝なのか生活面なのか判別できなかった。図 65 は 4 面上で出土した遺物である。1・2 はかわらけ R 種である。全体的に肉厚で粗雑な作りである。3 は鎬蓮弁文の青磁碗である。4 は常滑焼片口鉢Ⅱ類である。口縁端部が面取りされて角張る 7-8 型式頃の製品である。5 は瓦質土器香炉である。外面口縁部直下に型押しによる雷文帯を巡らせ、内外面には黒色処理を施す。図示したもののほかには、瀬戸焼（天目碗・碗ほか）、常滑焼（壺・甕）、かわらけ T 種、瓦質土器香炉、瓦、動物骨（イヌ）などが出土している。

4 面の遺構は、道路以外に確認できない。道路構成土からは、白磁（口禿皿・碗ほか）、青磁（碗・

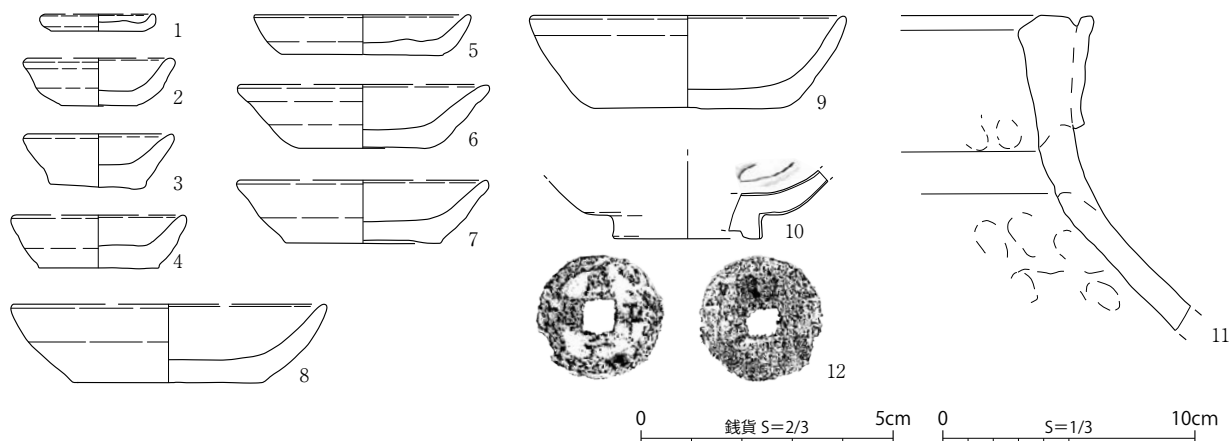


図 62 5 区 4 面上堆積土出土遺物

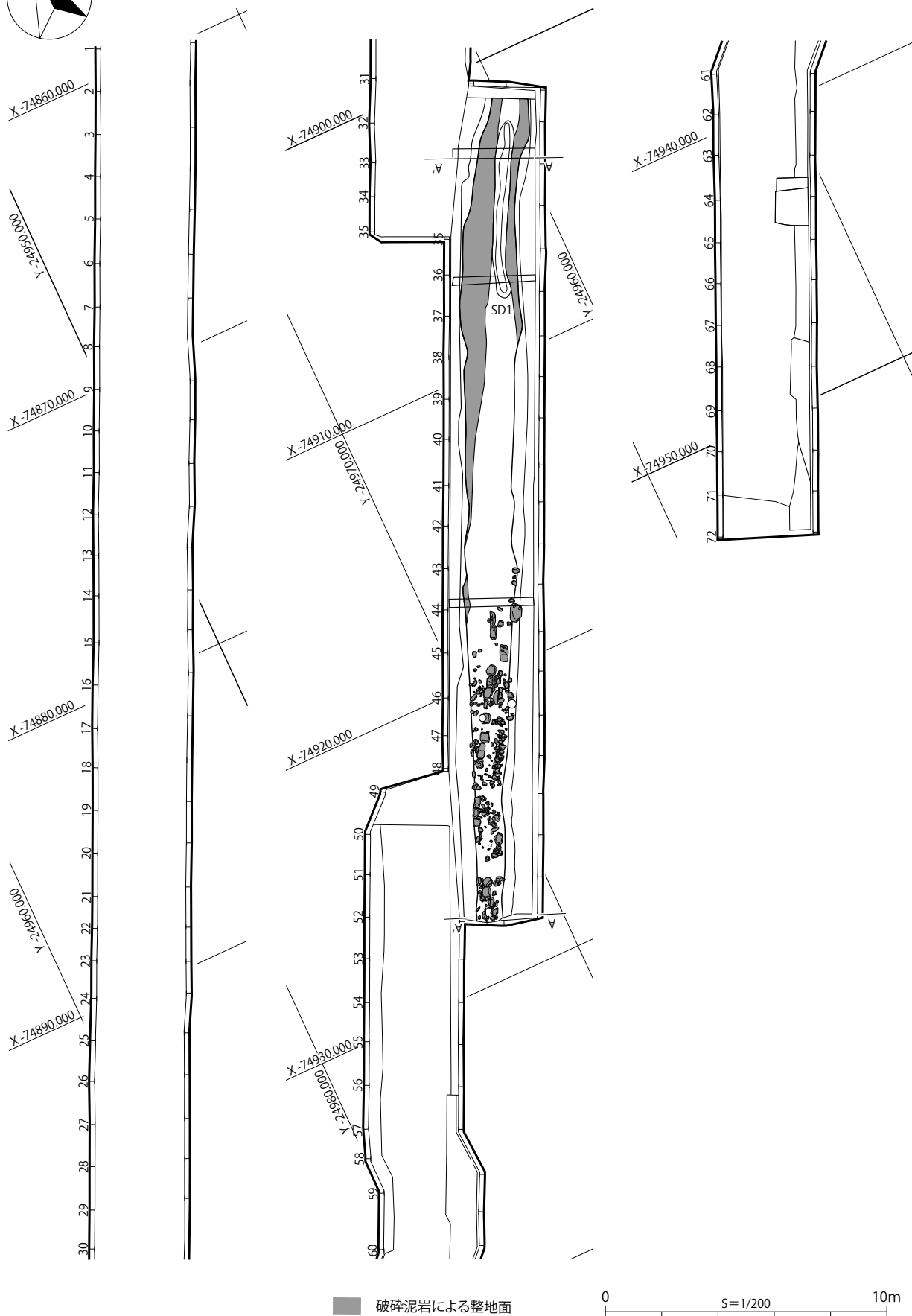
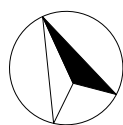
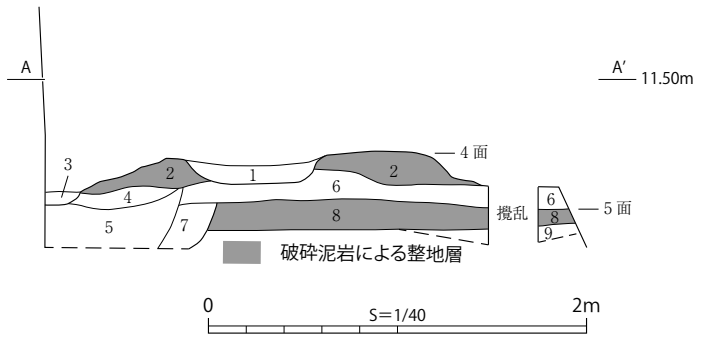


図 63 4-6 区 4 面全体図

折縁鉢ほか)、瀬戸焼(瓶子・水注・仏花瓶・壺・入子・卸皿・縁釉皿・折縁深皿・直縁大皿・碗ほか)、常滑焼(壺・片口鉢・甕ほか)、山茶碗(碗ほか)、かわらけ(T種・R種)、瓦質土器火鉢、瓦(丸・平)、土師質土器(皿・鍋ほか)、石製品(砥石・温石)、動物・魚骨(イヌ・小獣・イルカ・オキゴンドウ・メジロザメ科・マダイ)などが出土している。図 65-6・7 は道路中央の SD1 から出土したかわらけ R 種と青磁折縁盤である。図 66 は、4 面道路構成土から出土した遺物である。1 ～ 4 はかわらけである。R 種は全体に肉厚で粗雑な作りである。5 は白磁口禿皿である。6 ～ 8 は青磁碗である。8 は、幅の狭い蓮弁文を外面に配する 13 世紀中頃～ 14 世紀前半頃の製品である。



SD1・4～5面整地層 土層説明

1. 灰褐色土 粒子状泥岩、粒子状炭化物を少量、直径2cm以下の泥岩塊を微量含む。しまり強。粘性やや強。4面SD1埋土。
2. 黄褐色土 粒子状泥岩、直径3～30cmの泥岩塊を主体とする。しまり、粘性強固。
3. 灰褐色粘質土 粒子状泥岩、木炭小塊、直径5cm以下の泥岩塊をやや多く含む。しまり強。粘性やや強。
4. 灰褐色土 粒子状泥岩、直径3cm以下の泥岩塊を少量含む。しまりやや弱。粘性やや強。
5. 暗灰褐色粘質土 粒子状泥岩、直径5cm以下の泥岩塊、粒子状炭化物をやや多く含む。しまりやや弱。粘性やや強。
6. 灰褐色粘質土 粒子状泥岩、粒子状炭化物をやや多く、直径2cm以下の泥岩塊を少量含む。しまり強。粘性やや強。
7. 灰褐色粘質土 粒子状泥岩、直径2cm以下の泥岩塊、粒子状炭化物をやや多く含む。しまりやや弱。粘性やや強。
8. 暗灰褐色土 直径5～30cmの泥岩塊を主体とする。しまり、粘性強固。
9. 暗灰褐色粘質土 直径3cm以下の泥岩塊をやや多く、粒子状泥岩、粒子状炭化物、貝殻碎片を少量含む。しまりやや弱。粘性やや強。

図 64 5区4面SD1

9 ～ 12 は瀬戸焼である。9 は縁釉皿、10 は折縁深皿、11 は平碗、12 は外面に花文を配する瓶子である。11・12 は古瀬戸中期、9・10 は古瀬戸後期の製品と思われる。13 ～ 17 は常滑焼である。甕の縁帯は幅広であるが、胴部には接しない。14 は 5 ～ 6a 型式、13・15 は 7 型式頃の製品と思われる。17 は片口鉢Ⅱ類で、7-8 型式頃の製品と思われる。18 は軒平瓦である。瓦当には上向き剣頭文と「永」の文字を陽刻する。19 は仕上砥である。石材は細粒凝灰岩で、4 面を使用する。20 は直径 2cm 弱の黒色凝灰岩である。扁平な円礫で、基石に使用された可能性がある。21 は政和通宝(1111 年初鑄)、22 は紹聖元宝(1094 年初鑄)で、共に北宋銭である。

図 67 は 5 面道路東側の低位面に堆積する埋土から出土した遺物で、4 面整地に伴う埋土として扱った。

1 ～ 17 はかわらけである。図示したうちの 3 割弱は T 種であるが、全体の出土量としては R 種の 1 割程度と少ない。3 を典型として、丸みの強い形状をもつ。5・15 は灯明皿に使用された時期があり、口縁部にススが付着する。18・19 は青白磁梅瓶である。18 の蓋は、被熱により器面が変質する。頂部に配する陽刻は花文であろうか。20 は白磁口禿皿である。21 ～ 24 は青磁である。21 は束口(曲口)碗で、太宰府編年でⅠ類に分類される製品である。22 は外面に花卉形の凹面ケズリを施す碗で、14 世紀代の製品である。23 は内面に花文を施す碗で、Ⅰ類に分類される製品である。24 は折縁盤である。13 世紀中頃～ 14 世紀初頭の製品か。25 ～ 27 は瀬戸焼である。25・26 は入子、27 は卸目付大皿で、いずれも古瀬戸後期の製品である。28 ～ 43 は常滑焼である。28 ～ 33 は甕で、5 ～ 7 型式頃のものが混在する。34 ～ 43 は片口鉢である。Ⅰ・Ⅱ類とも 5-6a 型式頃の製品が主体をなす

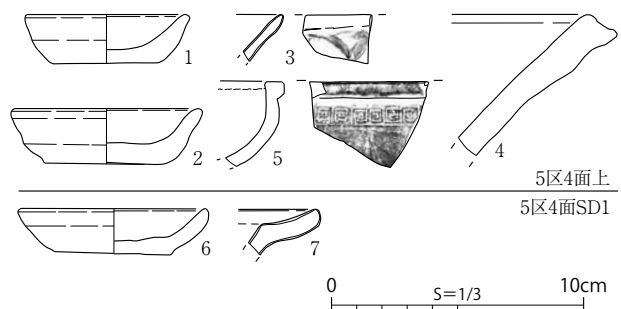


図 65 5区4面出土遺物(面上/SD1)

が、新しいものでは9型式以降のものが確認できる。44は備前の片口鉢である。素地そのものの性質か、焼締めによるものか、非常に硬質な製品である。45～47は瓦質土器火鉢で、内外面に黒色処理を施す。48は平瓦である。凸面は縄目、凹面はヘラナデか。凹面にはハナレ砂が付着する。49は上野産の中砥である。石材は凝灰岩で、4面を使用する。50はトンボ玉である。透明感のない淡青色と白色のガラスを練り合わせた製品で、直径は1.3cm、高さ1.1cm、孔径は0.3cmを測る。このほかには、白磁（壺・皿・小杯）、輸入陶器（器種不明）、瀬戸焼（壺・縁釉皿・大皿・卸皿・卸目付大皿・天目碗・播鉢ほか）、渥美焼（壺・片口鉢・甕ほか）、亀山焼（甕）、山茶碗（碗・片

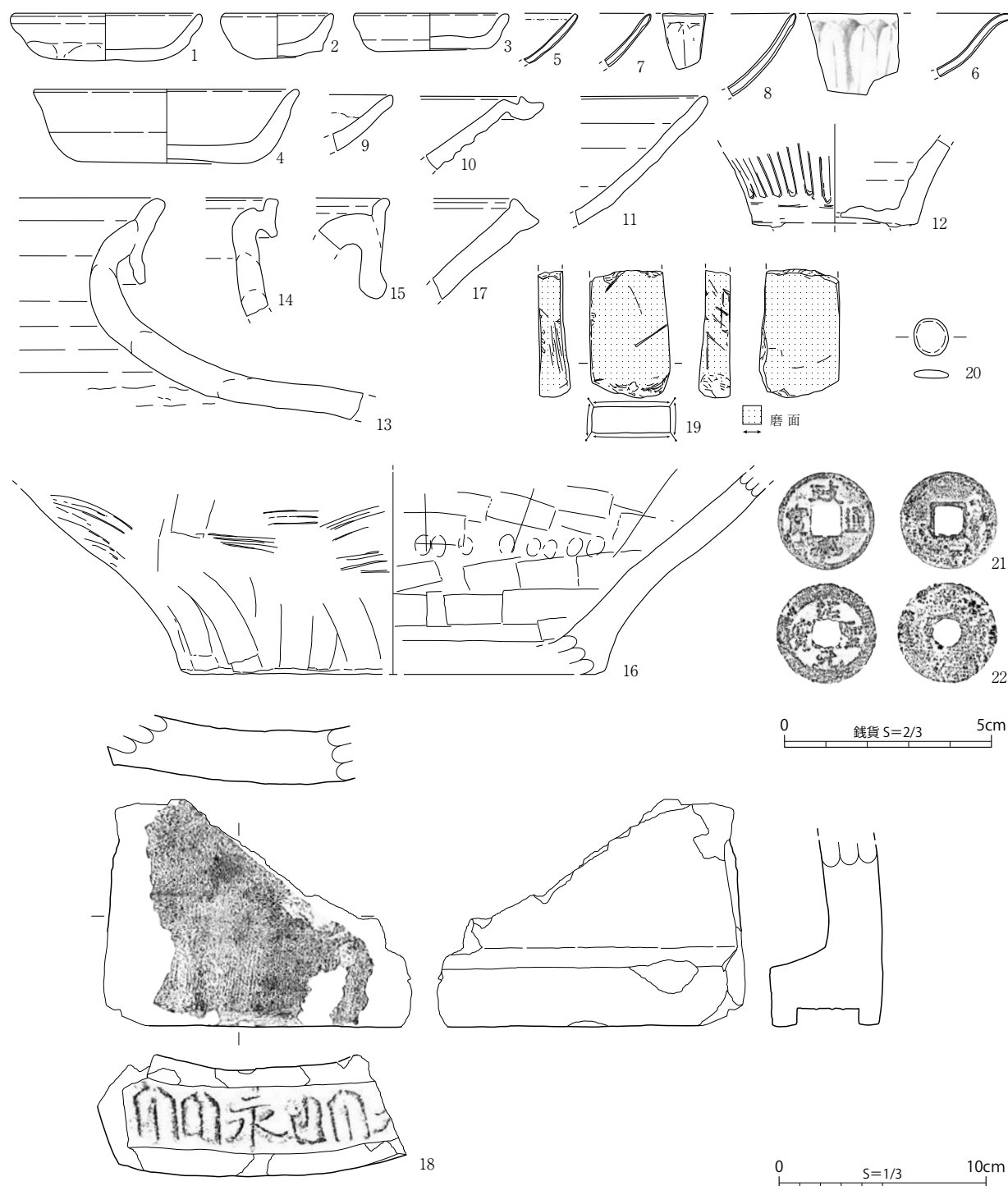


図 66 5 区 4 面道路構成土出土遺物

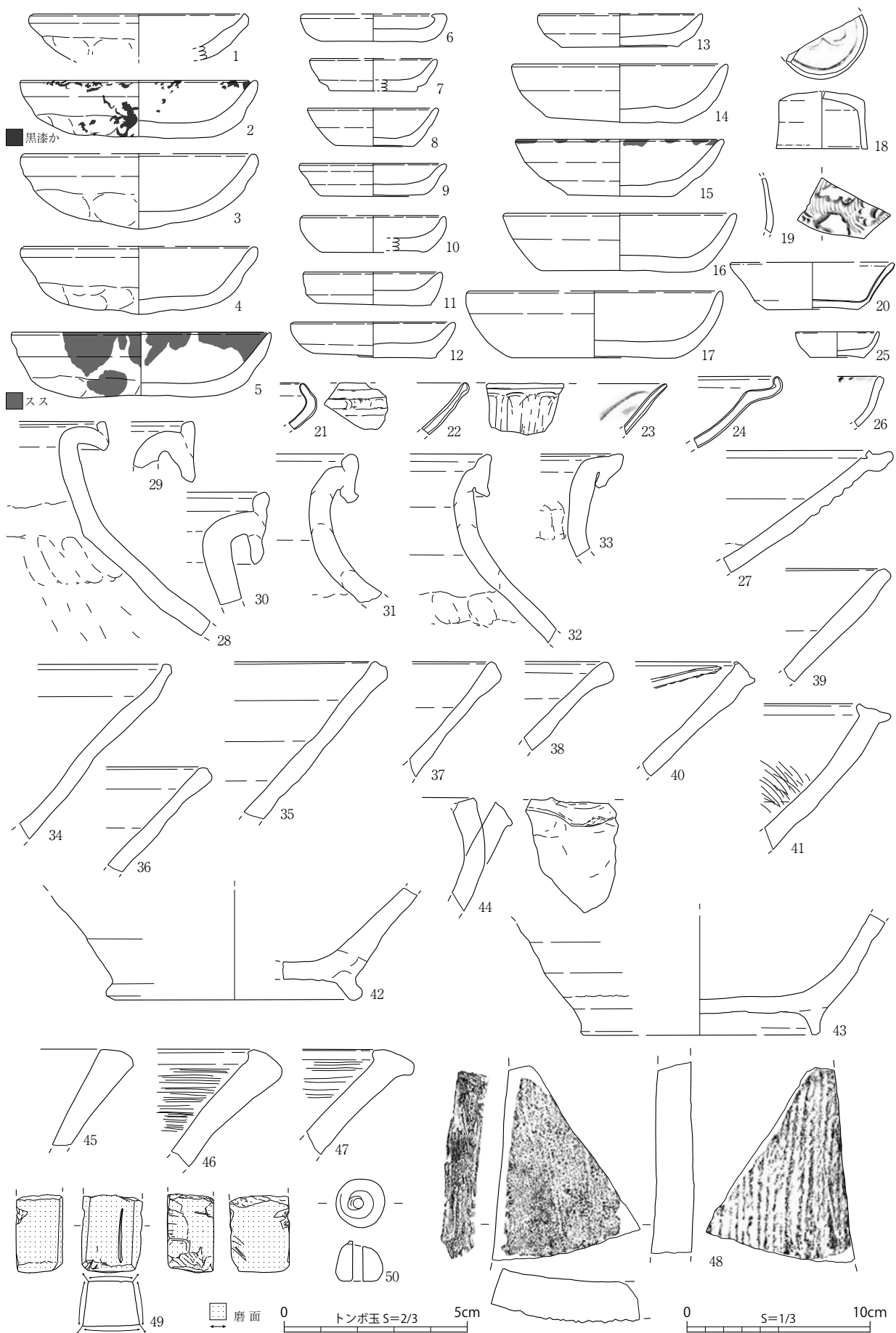


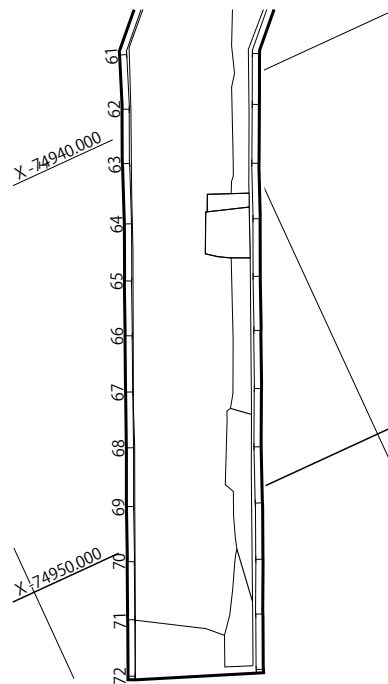
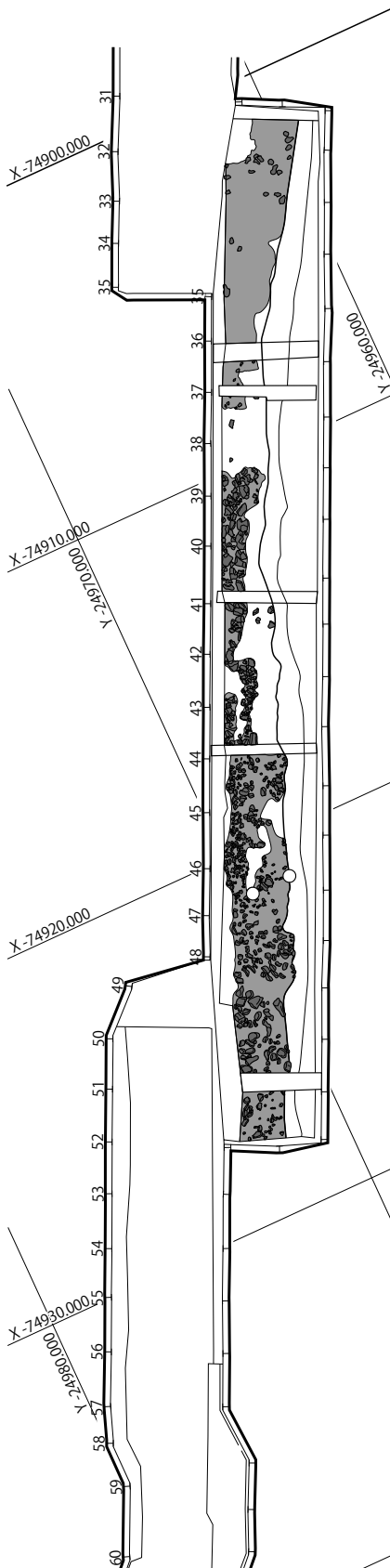
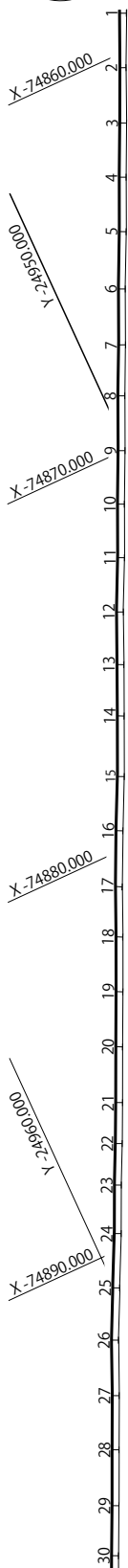
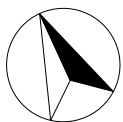
図 67 5 区 4 面整地土出土遺物

口鉢ほか)、白かわらけ、丸瓦、土師質土器坏、南伊勢系鍋・罍釜、土製品(轆羽口・土鍾)、古墳時代後期～古代の土師器甕、弥生時代中期の壺、後期の甕、滑石製鍋、石製品(硯・砥石)、鉄滓、石製品(鍋・硯)、動物・魚骨(イヌ・ウマ・ニホンジカ・ウシ・クジラ・イルカ・オキゴンドウ・メジロザメ科・マカジキ科・マグロ属)、貝殻(バイガイ)などが出土している。

5 面 (図 68・表 7,8,16,17・PL.16)

5 面は 5 区・6 区で検出した。5 区では、6 面上に泥岩小塊を多く含む暗黄褐色土を盛土した上に直径 2～40cm の泥岩塊を主体とする暗黄褐色土を盛土して整地層を造成しており、4 面と同じく道路と考えている。北半部分は粉碎泥岩が多く道路面は概ね平坦であるが、南半部分は使用により痩せてしまったのか泥岩塊が露呈して道路面が荒れている。道路面の標高は、北端で 10.85 m、南端で 10.60 m と、南に向かって緩やかに下降する。道路の方位は N-25.7°-E を指し、4 面と比べやや真北方向を向く。道路の東側には、4 面と同じく低位に面が広がる。道路面との比高は、北側では 40cm と明確な段差をもつが、南端部では 10～20cm と浅くなる。5 区では道路以外、遺構は確認できない。図 69 は 5 面上で出土した遺物である。1～4 はかわらけ R 種である。4 面で出土したものとは比べ、器壁の薄手化や形の鮮明化が窺える。1 は灯明皿に使用された時期があり、口縁部にススが付着する。5 は常滑焼甕である。口縁端部を上方に折り返す 5～6a 型式頃の製品である。6 は瓦質土器三足釜である。胎土は精良で、灰白色を呈する。口径は 4cm と小型の製品である。図 70 は 5 面道路構成土から出土した厚手のかわらけ R 種である。

5 面整地土からは、青白磁(梅瓶・合子蓋)、白磁(四耳壺・口禿皿・皿・碗ほか)、青磁(碗・坏ほか)、輸入陶器(黄釉盤・褐釉壺)、瀬戸焼(壺・入子・卸皿・皿・碗ほか)、渥美焼(壺・甕ほか)、常滑焼(鳶口壺・壺・片口鉢・甕・山茶碗)、備前焼(播鉢か)、産地不明陶磁器、山茶碗(碗・片口鉢)、白かわらけ、かわらけ(T 種・R 種)、瓦質土器(火鉢ほか)、瓦(丸・平)、中世土師器皿、中世須恵器(皿カ)、土師質土器(火鉢ほか)、古墳時代～古代の土師器(甕ほか)、弥生時代後期の土器(高坏・甕)、石製品(鍋・砥石ほか)、骨製品(筭)、動物・魚骨(イヌ・ウマ・ニホンジカ・キツネ・タヌキ・ネズミ・ウシ・イルカ・オキゴンドウ・小型哺乳類・メジロザメ科・マカジキ科・カジキ・マグロ属・マダイ・タイ科)、貝殻(イボキサゴ・ダンベイキサゴ・アワビ類・サザエ・アカニシ・ハマグリ・チョウセンハマグリ・アサリ・シオフキ・レイシ・クボガイ・バイガイ・クマノコガイ・ホソヤツメタ・イタボガキ)などが出土している。図 71-1～22 はかわらけである。図示できる T 種は 1 点のみである。5 面整地土から出土したかわらけ全体の出土量をみても、T 種は R 種の 1 割程度でしかない。小型の R 種は、体部が直線的に外反する器高の高いものと、体部が内湾するやや器高の低いものの 2 種類に大別できる。13・18 は、灯明皿に使用していた時期があり、口縁部にススが付着する。23 は青白磁梅瓶、24 は白磁口禿皿、25 は青磁坏、26～30 は青磁碗、31 は青磁坏である。26 は外面に恐らく櫛目文、内面に劃花文を配する同安窯系の製品と思われる。口禿皿と青磁坏は 13 世紀中頃～14 世紀前半頃の製品である。32 は輸入陶器耳壺である。外面には飛沫状の降灰、内面には透明釉が掛かる。33 は瀬戸焼の輪花型入子である。内面の一部に自然降灰がみられる。古瀬戸中期初め頃の製品か。34～47 は常滑焼である。34 は鳶口壺である。砂粒・小礫をやや多く含む素地を用いる。35～42 は甕である。口縁端部を上方に折り曲げる 5 型式からやや幅広の縁帯をもつ 7 型式頃のものが混在する。43～48 は片口鉢である。43・44・48 はⅡ類、45～47 はⅠ類で、Ⅱ類は 6-7 型式頃の製品と思われる。48 は信楽焼のように砂粒や小礫が器面に表出して、表面がゴツゴツする。49・50 は瓦質土器火鉢である。口縁部



■ 破碎泥岩による整地面

0 S=1/200 10m

図 68 4-6 区 5 面全体図

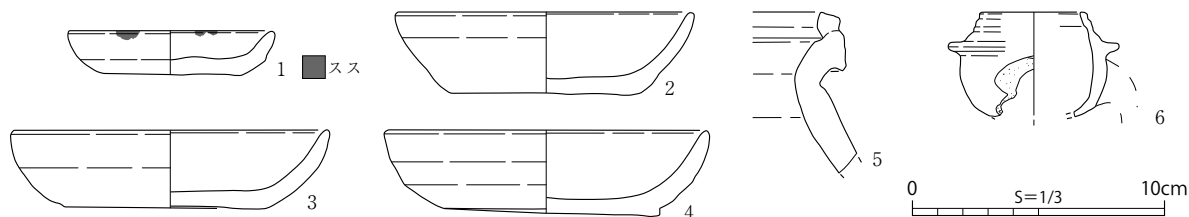


図 69 5区5面上出土遺物

付近に円孔を穿つが、49は未貫通である。器面は黒色処理を施す。51は仕上げ砥である。石材は細粒凝灰岩で、4面を使用する。図72-52～54は北宋銭で、52は祥符元宝（1008年初鑄）、53は元符通宝（1098年初鑄）である。54は政和通宝（1111年初鑄）か。このほかに、筭を第5章に掲載した。

6面（図73-96・表8-14,16-20・PL.17-29）

6面は4～6区で検出した。4区と5・6区は道路を隔てており、別の土地区画である可能性が高いが、調査区断面の土層観察では両者はほぼ同じ標高で整地層を設けており、6面として一括した。

4区では暗渠によって整地層は失われており、調査区壁面の土層観察で当該面に伴うと判断した大型の不整形遺構（SX1）最下部と、調査区北西端（H2-3）で検出した柱と礎板だけが残存する。一方、5区では、5面整地土を除去した段階で4・5面と同じく泥岩による道路面を検出した。道路の方位はN-32.5°-Eと、上面の道路よりも北東-南西方向に偏っており、H41付近で調査区外に抜けて行く。トレンチによる断面観察では、道路の東側には40cmほどの深さで溝状の落ち込みが認められたが、道路面と同じ高さで大型の円礫や完形のかかわらが散在する状況を検出したため、当該面を6a面、道路の東側に溝を伴う段階を6b面として調査を行うことにした。ここでは、4区と5・6区に分けて記述する。

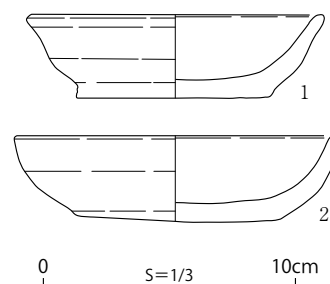


図 70 5区5面道路構成土出土遺物

4区の遺構

SA1（図74,75・PL.17）

6面整地土掘削中に、H2-3で柱2本を検出した。整地面との関係について明確な判断材料はないものの、検出層位から6面に伴う遺構と推定した。柱は南北方向に110cmの間隔をもち、柱2は上部に礎板を伴う。柱1の南側でも礎板が1枚出土しており、柱1上部から落下したものと思われる。調査時に柱穴を確認できなかったが、柱の下に整地面は見当たらず、これらは柱穴内にあったものと判断した。柱1は、一辺12cmの八角柱、2は一辺9cmの角柱である。

SX1（図74,76-80・表8-10,16,17,19,20・PL.17,18）

暗渠によって整地層は失われているが、H12-17で不整形の大型土坑（SX1）の底部を検出した。調査区西壁で確認できる土層を観察したところ、遺構はH5付近を北限に、南はH17付近で上方からの泥岩塊層で切られるところまでの南北1720cm、東西200cm以上の規模をもつ落ち込みであることが判明した。遺構の断面形は弧状を呈し、最下部の標高は9.2mを測る。埋土は16層に分層でき、特に5・8・11・12層は多量の遺物を含む。出土遺物の大半はかわらけと箸状木製品が占めており、饗宴に供された食器類を一括廃棄しているものとみられる。遺物はほかに、白かわらけ（T種・R種）、

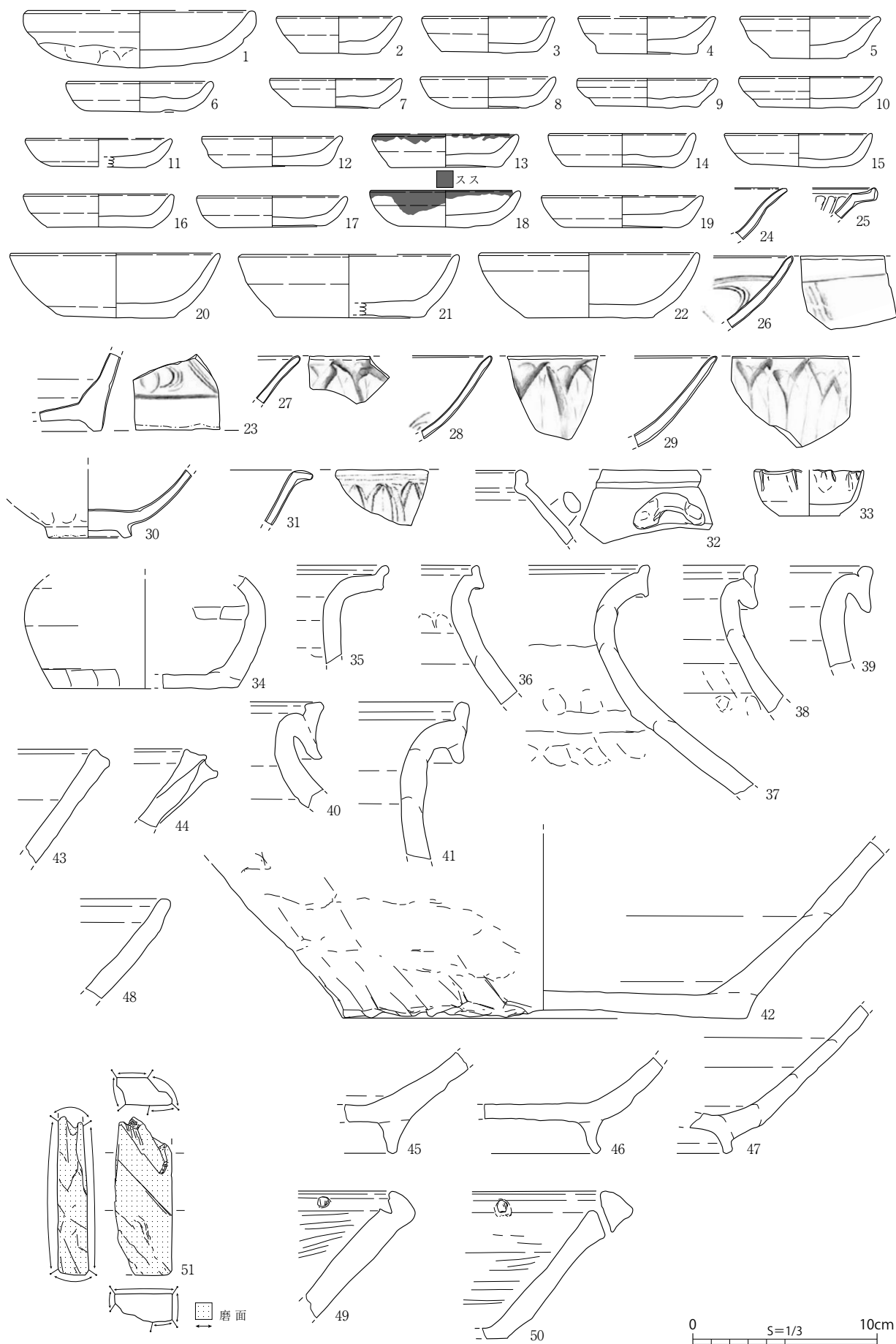


図 71 5・6区5面整地土出土遺物 1

白磁（合子・壺）、青磁（皿・碗）、輸入陶器（壺・瓶類）瀬戸焼（天目碗）、渥美焼（壺・甕）、常滑焼（壺・片口鉢・甕）、山茶碗（片口鉢）、瓦器碗、瓦質土器（火鉢）、瓦（丸・平）、銭貨、鉄製品（鎌・釘・飾金具カ）、石製品（硯・砥石）、漆器（皿）、木製品（題箋軸木簡・五輪塔形・木簡・杓子・櫛・箸・折敷・曲物・紡輪・篋・下駄・草履芯・曲物・刀子柄・用途不明部材）、種子（クルミ・モモ）、貝殻（ハマグリ・サザエ）、動物・魚骨（イヌ・ウマ・ニホンノウサギ・コハクチョウ・マダイ）、骨製品（筭）、ハマグリ貝殻加工品（碁石カ）、貝殻（イボキサゴ・ダンベイキサゴ・キサゴ・ハマグリ・チョウセンハマグリ・アサリ・クボガイ・スガイ・レイシガイ・マノコガイ・シオフキ・マガキ）などがある。かわらけや木製品には墨書があるものが少数みられるが、注目すべき遺物として

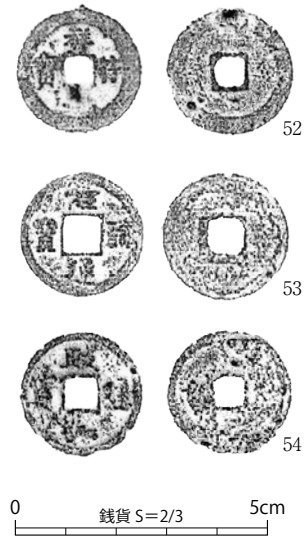


図 72 5・6区5面整地土出土遺物 2

年号を含む墨書が確認できる題箋軸木簡がある（図 78-104）。
 題箋軸というのは見出し（題箋）部分を外側に作り出した巻物の軸で、大量にまとまって出土した薄板の中に含まれていた。軸部分は欠損する。長六角形を呈する題箋部分には、「建保三年（1215年）」、もう一方には「葛（もしくは高）官物御返抄」と墨書が残存する。資料を実見した東京大学史料編纂所の高橋慎一郎氏からは、「（あくまでも可能性の一つでしかないが）建保三年に関わる年貢の領収書のようなものであろうか」との意見を頂戴している。図 77～80 は SX1 出土遺物である。1～75 には、大量に出土したかわらけのうち 1/2 以上が残存する個体をすべて図示した。1～55 は T 種、56～75 は R 種である。SX1 全体では、T 種が 7 割近くを占める。55・74・75 は灯明皿として使用した時期があり、口縁部にススが付着する。74 はスス付着部分の口縁を半円状に穿つ。76 はかわらけ T 種の破片で、内面体部に針状具による陰刻がみられる。77 は青白磁合子、78・79 は白磁四耳壺である。80 は青磁皿、81 は青磁碗である。いずれも内面体部に櫛描文や劃花文を配する、12 世紀中頃～後半の製品である。82 は渥美焼甕、83 の常滑焼甕は 4 型式頃の製品か。84 は瓦器碗で、底部はヘラ切りの後、なでる。備前の製品であろうというご教示を稲本悠一氏よりいただいた。85 は平瓦である。凸面は縄目、凹面は布目である。86 は常滑焼甕片を転用した磨具である。側縁だけでなく表裏面も使用する。87 は硯である。石材は頁岩で、表裏面とも使用する。88～96 はハマグリ
 の貝殻を加工した製品である。表面は削り取り、乳白色の部分丸みを強い形に仕上げている。88 のように円形のものがあり、碁や双六の駒として使用したのではないかと考えている。97 は元豊通宝（北宋・1078 年初鑄）、98 は淳熙元宝（南宋・1174 年初鑄）である。元豊通宝は 3 枚が固着するが、折損の恐れがあり分離作業は行わなかった。99～103 は金属製品である。99 は小型の鉄鎌で、中子は欠失する。100 は縁取りに使う金具であろうか。材質は鉛であろうか、柔軟性のある金属である。断面形は C 字形を呈する。101～103 は鉄釘である。104～199 は木製品である。104 は前述の題箋軸木簡である。高さ 5.6cm、幅 2.4cm、厚さ 0.35cm の板目取り材の表裏面に墨書がある。軸部分は幅 0.5cm 前後で欠失する。105 は五輪塔形である。106 は付札か。頂部に一對の切り欠きがある。107 は木器集成に倣って杓子形木器とした板目取りの製品で、槍砲のような形状をもつ。108 は円形容器の蓋か。両端に切り欠きと紐通し穴のような小径の円孔を穿つ。109 は刃物の柄である。分割した板目材で中子を挟む構造で、中央に打った小型の鉄楔が材を留める。110 は栓である。111 は用途不明の板材である。平面に同方向の擦痕が多数確認できる。112 は中央がドーナツ状に漆が擦れ、

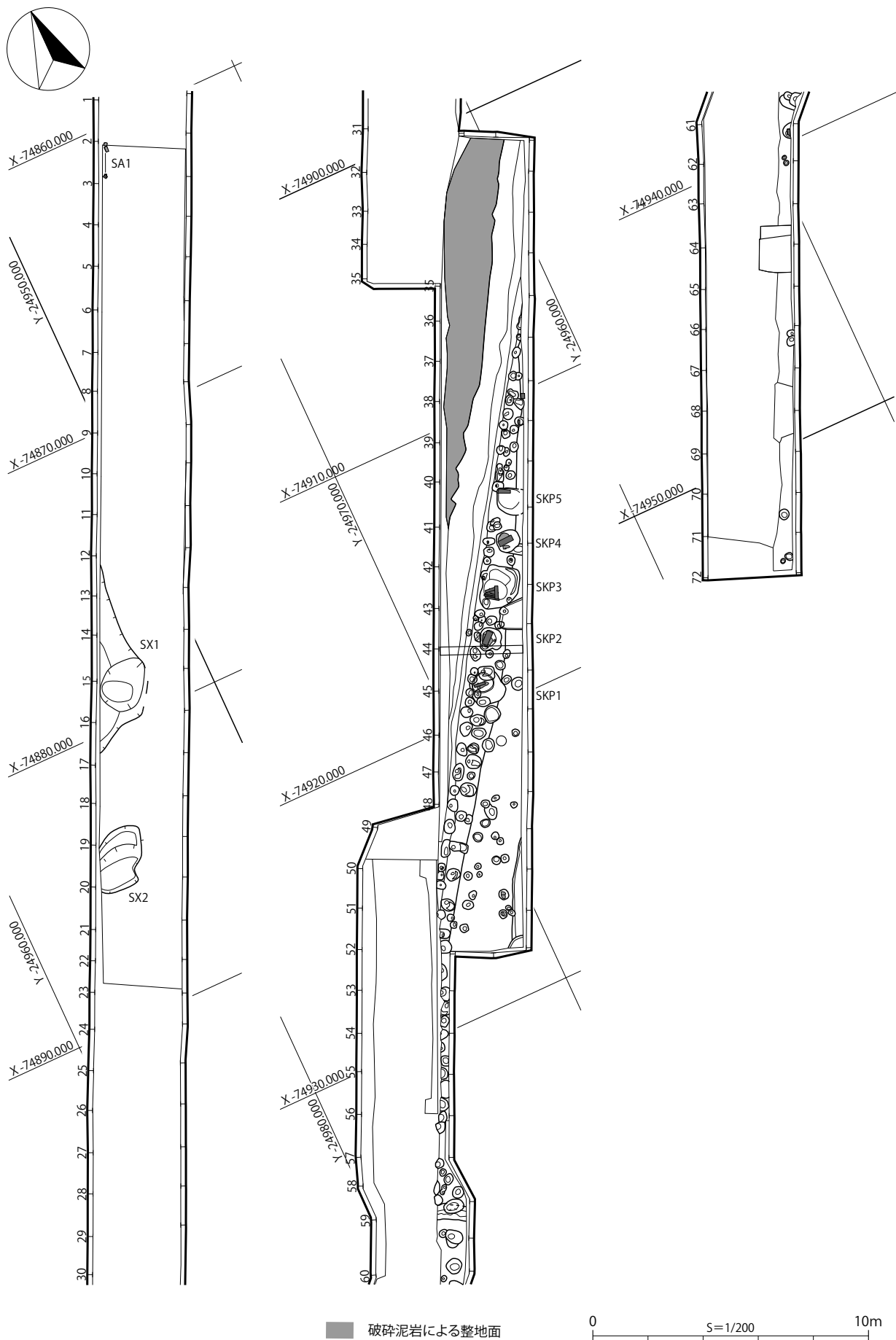


図 74 4-6 区 6b 面全体図

別の部品と接合していた痕跡がある。裏面は素地のままであり、台座ではないかと考えた。形状的には紡輪に似る。113は座金形木器である。六花形の製品で、木器集成では金属製の飾り板を製作するための型と推測する。中央に小孔を穿ち、表面には黒漆を塗布する。114は連歯下駄である。115は曲物底板である。木取りは柂目取りで、側面には木釘が入る円孔を数箇所穿っており、木釘が1本残存する。116～199は箸状木製品である。前述のと

おり、SX1からは大量の箸状木製品が出土したが、大半は先端が欠失するか中央で折損する。図版には全体が残っているものをすべて掲載した。このほかに、筭を第5章に掲載した。

SX2（図 74,81-83・表 10,11,17,18,20・PL.18）

H18-21で検出した平面不整形の土坑である。検出時の観察で8面の遺構と判断しており、埋土1～4層は別遺構と考えていたが、2層と5層は土壌の特徴が近似しており、資料整理時に6面の所属遺構に変更した。埋土からは、28枚と数多くの輸入銭貨が出土している。

遺構の規模は、南北335cm、東西155cm以上、深さ60cm（最深部標高8.90m）、断面形は階段状を呈する。埋土は直径1～3cmの泥岩小塊を主体に薄板状の木製品や貝殻破片が混入する暗灰色砂質土の単層で、しまり・粘性はない。底面付近では、28枚もの輸入銭貨が散在する状況で

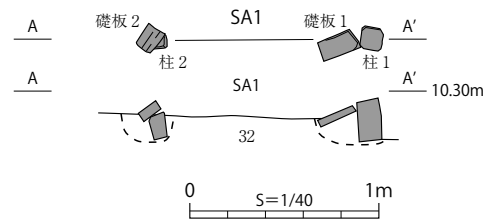
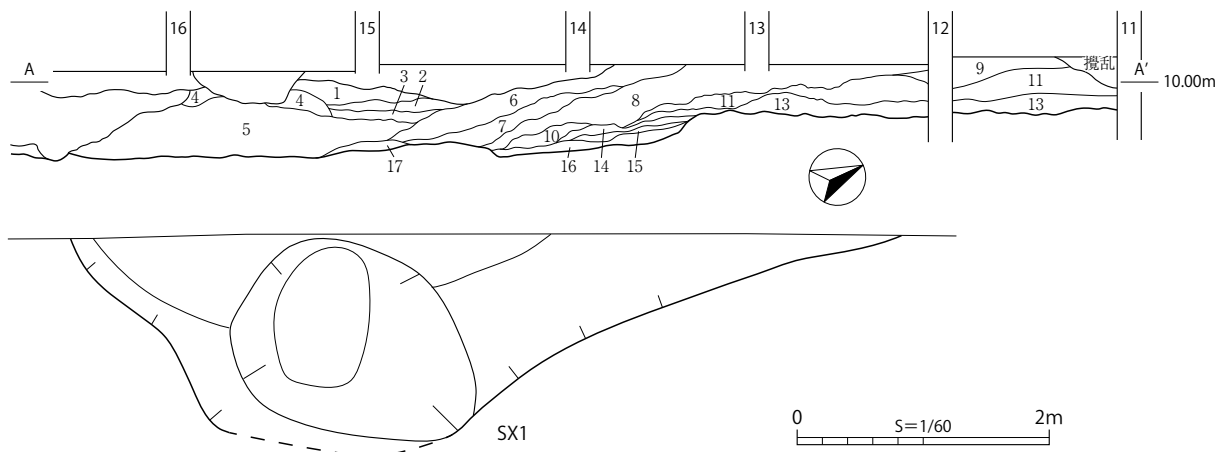


図 75 4区6面 SA1



4区6面 SX1 土層説明

1. 暗灰褐色土 粒子状泥岩、直径1cm以下の泥岩塊、木片を主体とする遺物をやや多く含む。しまり、粘性弱。
2. 暗灰褐色土 粒子状泥岩、直径1cm以下の泥岩塊、木片を主体とする遺物を少量含む。しまり、粘性やや弱。
3. 灰色砂と粒子状貝殻の混成層 薄板状木片を主体とする遺物破片を少量含む。
4. 暗灰褐色粘質土 粒子状泥岩、粒子状貝殻を少量、直径2cm以下の泥岩塊をやや多く含む。しまり弱。粘性やや強。
5. 灰黒色土 薄板状木片・箸状木製品・かわらけなど遺物破片を主体とする。粒子状泥岩、粒子状貝殻をやや多く含む。しまり、粘性弱。
6. 暗灰褐色粘質土 粒子状泥岩、粒子状炭化物、直径3cm以下の泥岩塊、木片・かわらけを主体とする遺物を少量含む。しまりやや弱。粘性やや強。
7. 灰褐色粘質土 粘土化した泥岩を主体とする。粒子状泥岩、直径3cm以下の泥岩塊、木片・かわらけを主体とする遺物をやや多く含む。しまりやや弱。粘性強。
8. 灰褐色砂質土 薄板状木片・かわらけを主体とする遺物破片、直径3cm以下の泥岩塊、粒子状貝殻、砂粒、木炭を多量含む。しまり、粘性弱。
9. 灰褐色砂質土 薄板状木片を主体とする木製品の破片を多量含む。しまり、粘性弱。
10. 暗灰褐色砂質土 粒子状泥岩、粒子状貝殻、木片を少量含む。しまり弱。粘性強。
11. 灰褐色粘質土 粒子状泥岩、直径5cm以下の泥岩塊を少量含む。しまりやや弱。粘性やや強。
12. 灰黒色粘質土 粒子状泥岩、直径2cm以下の泥岩塊を少量含む。しまりやや弱。粘性やや強。
13. 暗灰褐色粘質土 粒子状泥岩、粒子状炭化物、直径1～10cmの泥岩塊を多量含む。しまり、粘性やや強。
14. 暗灰褐色砂質土 粒子状泥岩を少量含む。しまり弱。粘性やや強。
15. 灰黒色砂質土 粒子状泥岩を少量含む。しまり弱。粘性やや強。
16. 灰黒色砂質土と粘土化した泥岩の混成土 粒子状貝殻を微量含む。しまりやや弱。粘性やや強。
17. 暗茶褐色腐植層 直径1cm以下の泥岩塊を少量含む。しまり弱。粘性強。

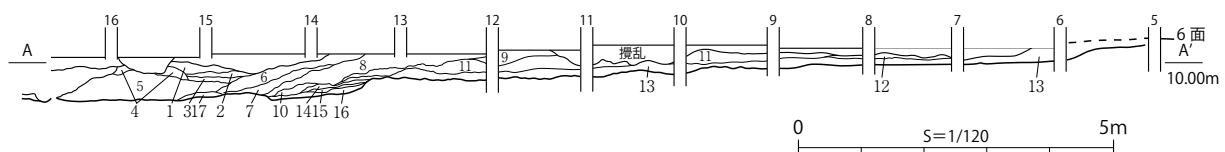


図 76 4区6面 SX1

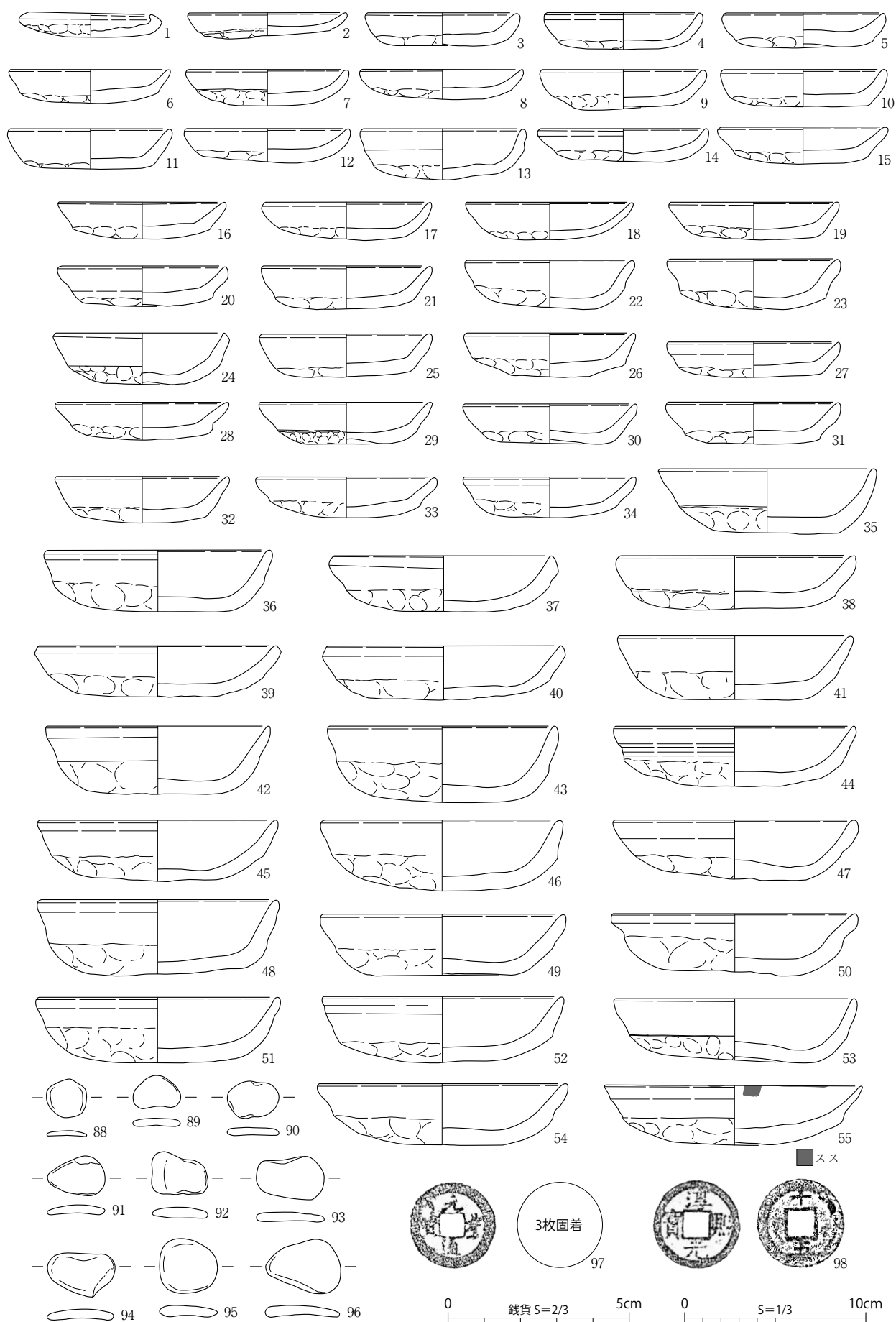


图 77 4 区 6 面 SX1 出土遺物 1

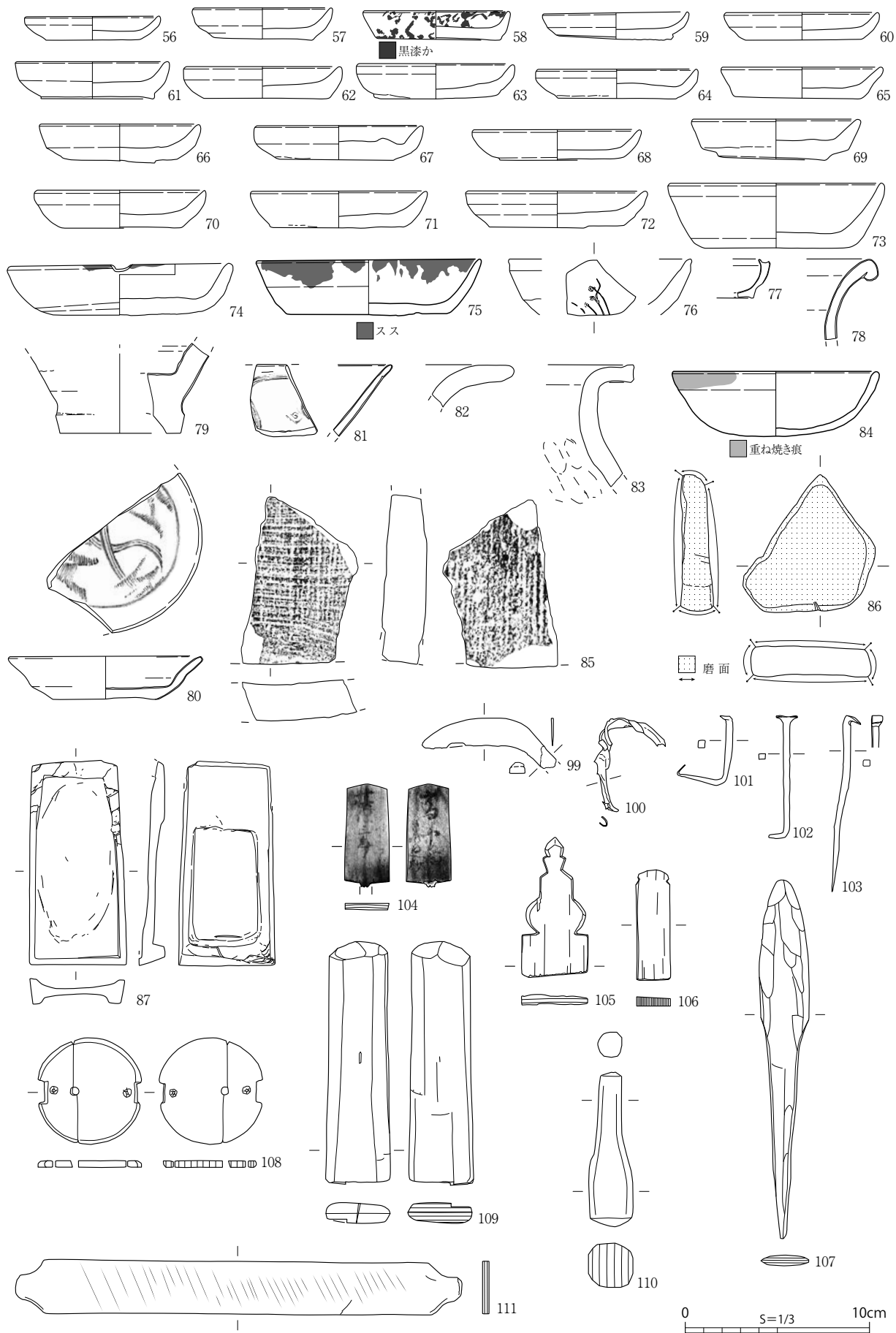


図 78 4区6面SX1 出土遺物 2

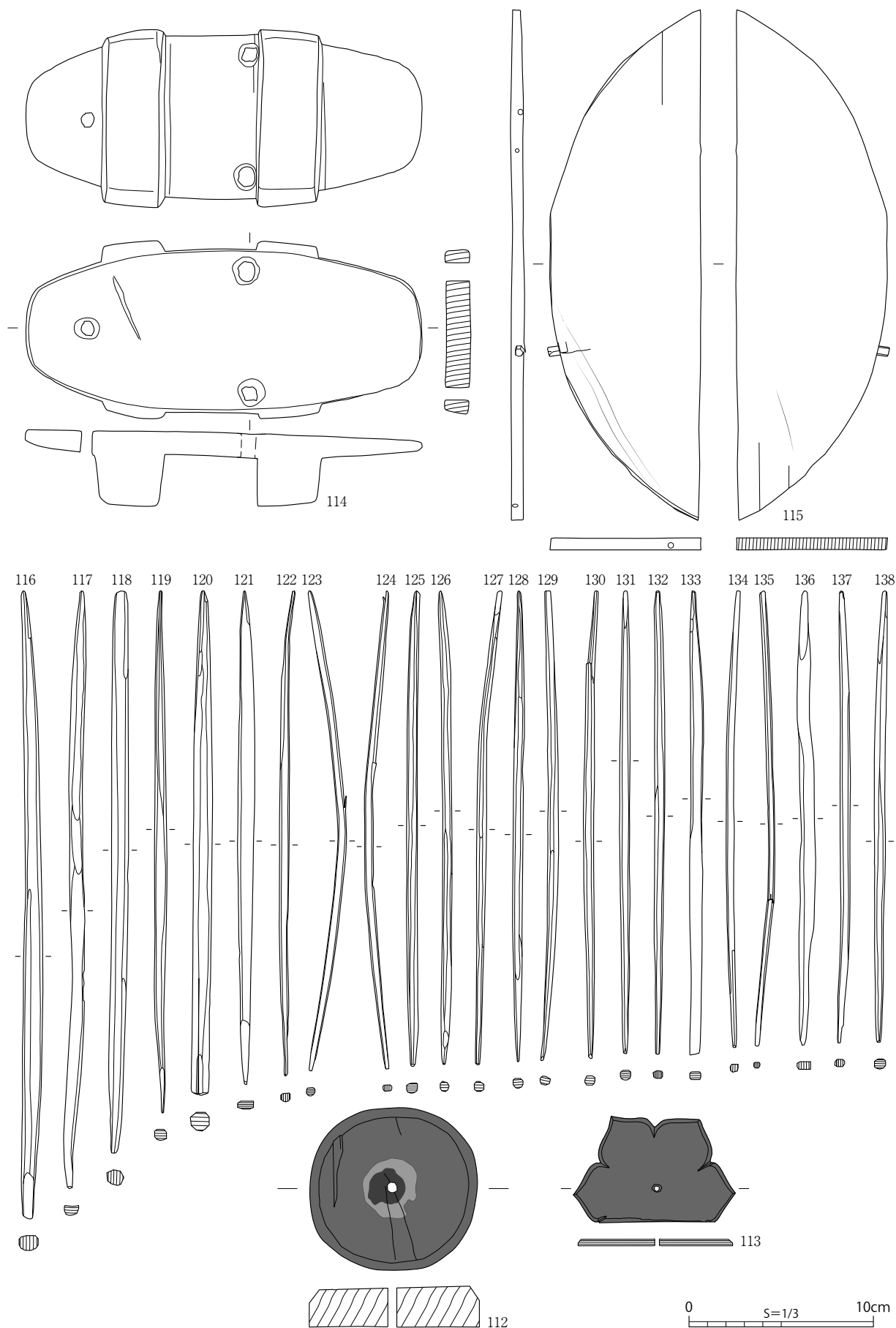


图 79 4 区 6 面 SX1 出土遺物 3

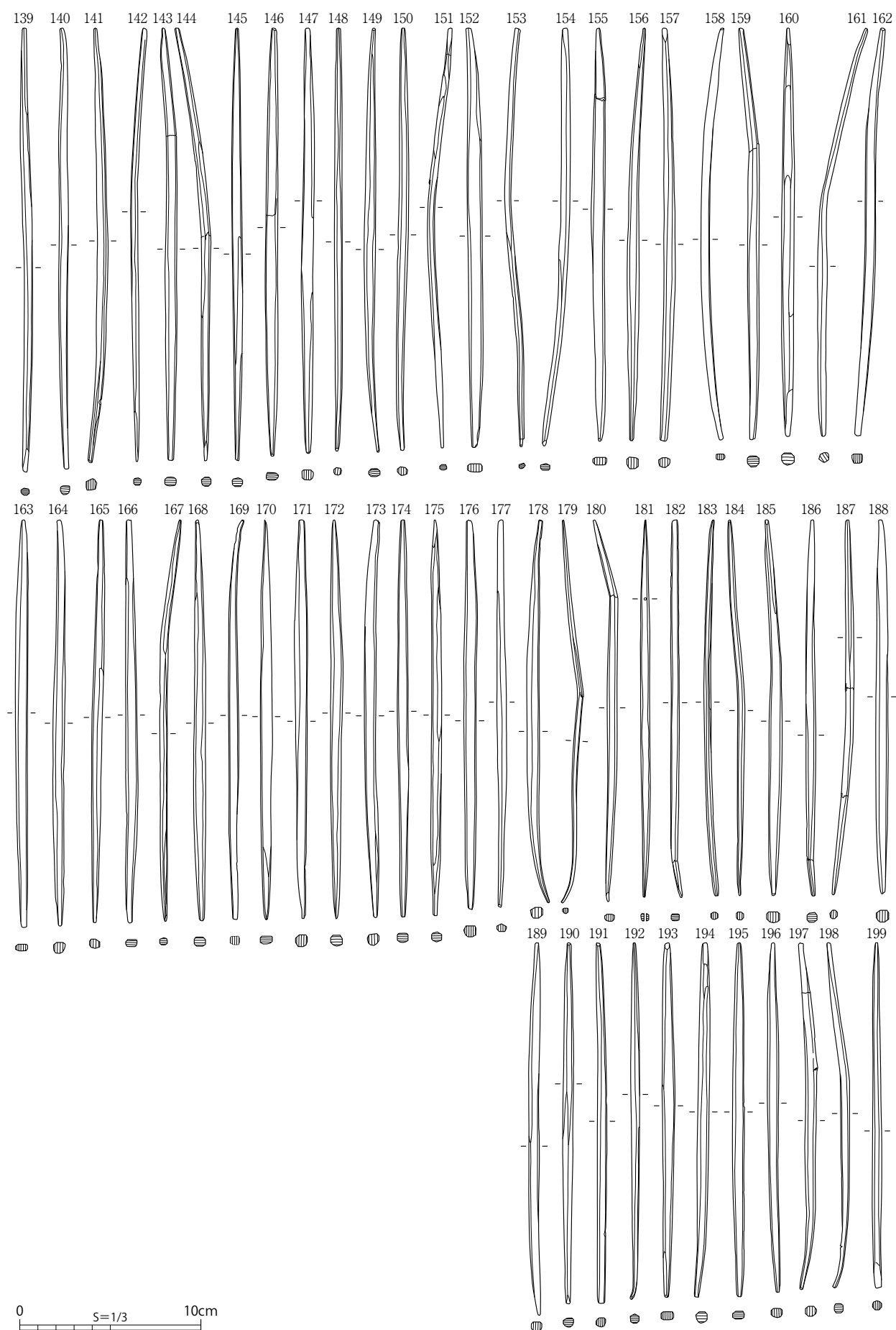
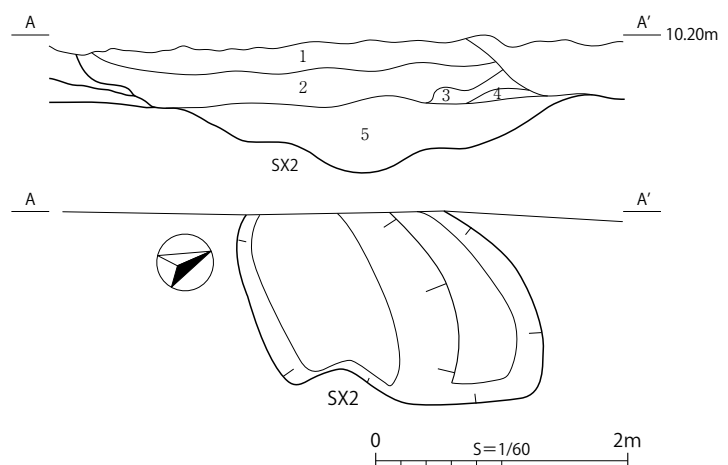


图 80 4区6面SX1 出土遺物 4

出土している。銭貨は大半が北宋銭で、銘文の判読ができるものはほかに唐銭 3 枚、南宋銭 1 枚がある。遺物は、白磁（皿ほか）、青磁碗、瀬戸焼（皿・碗）、渥美焼（甕ほか）、常滑焼（壺・片口鉢・甕）、山茶碗片口鉢、かわらけ（T 種・R 種）、瓦器碗、瓦質土器鉢、平瓦、弥生時代後期の土器（壺・甕）、輸入銭貨、鉄製品（釘・刀子）、石製品（硯・碾臼・砥石）、自然礫（基石カ）、貝殻、魚骨、魚骨加工品、動物・魚骨（イヌ・ウマ・ニホンノウサギ・ウシ・イルカ類・ニワトリ・マグロ）、貝殻（シオフキ・ハマグリ・チョウセンハマグリ・ツメタガイ）などが出土した。図 82-1 ～ 3 はかわらけ T 種、4 ～ 8 は同 R 種である。大型品には体部が急角度で立ち上がる形状のものがある。9 は鎬蓮弁文の青磁碗である。10 は瀬戸焼柄付片口の底部で、内面には淡緑色の釉が掛かる。11・19 は東遠型の山茶碗である。12 世紀前半の製品か。12 ～ 16 は常滑焼である。12・13 は甕である。縁帯の幅は 3cm 以下で、6a 型式頃の製品と思われる。14 ～ 16 は片口鉢である。I 類（15）と II 類（14・16）があり、15 は 4 型式、14・16 は 6 型式の製品である。17 は備前焼の鉢である。口縁端部は面取りする。18 は魚住窯の片口鉢で、12 世紀末～13 世紀初頭の製品と思われる。20 は平瓦で、凸面は縄目、凹面は布目である。21 は鳴滝産の仕上砥である。22 は碾き臼の下臼である。摺目は 10 条一単位で、6 分画と思われる。石材は安山岩である。23 は刀子である。先端と中子は欠失し、刃部は使用により磨耗する。24 は鉄釘である。先端部は屈曲する。図 82,83-25 ～ 72 は輸入銭貨である。25 ～ 27 は唐銭の開元通宝（621 年初鑄）で、26・27 は背面に三日月のような意匠を鑄出す。28 ～ 71 は北宋銭である。28 ～ 30 は咸平元宝（998 年初鑄）である。31 は景德元宝（1004 年初鑄）か。32・33 は天禧通宝（1017 年初鑄）、34 は天聖元宝（北宋・1023 年初鑄）、35 ～ 43 は皇宋通宝（北宋・1039 年初鑄）、44 は至和通宝（北宋 1054 年）、45 ～ 53 は熙寧元宝（1068 年初鑄）、54 ～ 62 は元豊通宝（1078 年初鑄）、63 ～ 65 は元祐通宝（1086 年初鑄）、66 は紹聖元宝（1094 年初鑄）、67 は元符通宝（1098 年初鑄）、68・69 は大觀通宝（1107 年初鑄）、70・71 は政和通宝（1111 年初鑄）である。72 は南宋銭の慶元通宝（1195 年初鑄）で、南宋銭はこの 1 枚のみである。図 82-73・74 は箸状木製品である。

4 区 6 面整地土からは、青白磁（梅瓶ほか）、白磁（壺・口禿皿）、青磁（碗・鉢）、瀬戸焼（入子・卸皿・皿・縁釉皿・天目碗・碗・鉢ほか）、渥美焼（壺・甕・片口鉢（カ））、常滑焼（壺・片口鉢・甕）、産地不明陶磁器、山茶碗（皿・碗・片口鉢）、白かわらけ、かわらけ（T 種・R 種）、墨書かわらけ、東播系須恵器碗（カ）、瓦器碗（カ）、瓦質土器鉢、瓦（丸・平）、須恵器か山茶碗（坏か碗）、弥生時代後期の土器（甕ほか）、銭貨（北宋・南宋銭）、鉄製品釘、石製品（罌釜、砥石）、木製品（曲物・篋・杭・草履芯・箸・櫛ほか）、動物・魚骨（イヌ・イルカ類・マダイ・クロダイ・種不明鳥類）、貝殻（ダンベイクサゴ・サザエ・ハマグリ・シオフキ）などが出土している。図 84-1 ～ 12 はかわらけである。1 は口縁部が内湾する。13 ～ 16 は青磁碗である。13・15・16 は外面に蓮弁文、14 は内面に分



4 区 6 面 SX2 土層説明

1. 灰褐色土 粒子状泥岩、砂粒、直径5～10cmの泥岩塊を多量含む。しまりやや弱。粘性やや強。
2. 灰褐色砂質土 粒子状泥岩、砂粒、貝殻碎片、直径2～20cmの泥岩塊を多量含む。しまり弱。粘性やや弱。
3. 直径5～15cmの泥岩塊を主体とする。粒子状泥岩、砂粒、貝殻碎片を多量含む。しまり、粘性弱。
4. 黒灰色粘質土 直径1cm以下の泥岩塊を少量含む。しまり弱。粘性強。
5. 灰褐色砂質土 直径10cm以下の灰黒色粘質土塊、直径5～40cmの泥岩塊、粒子状泥岩、砂粒、貝殻碎片の混成土。しまり、粘性弱。

図 81 4 区 6 面 SX2

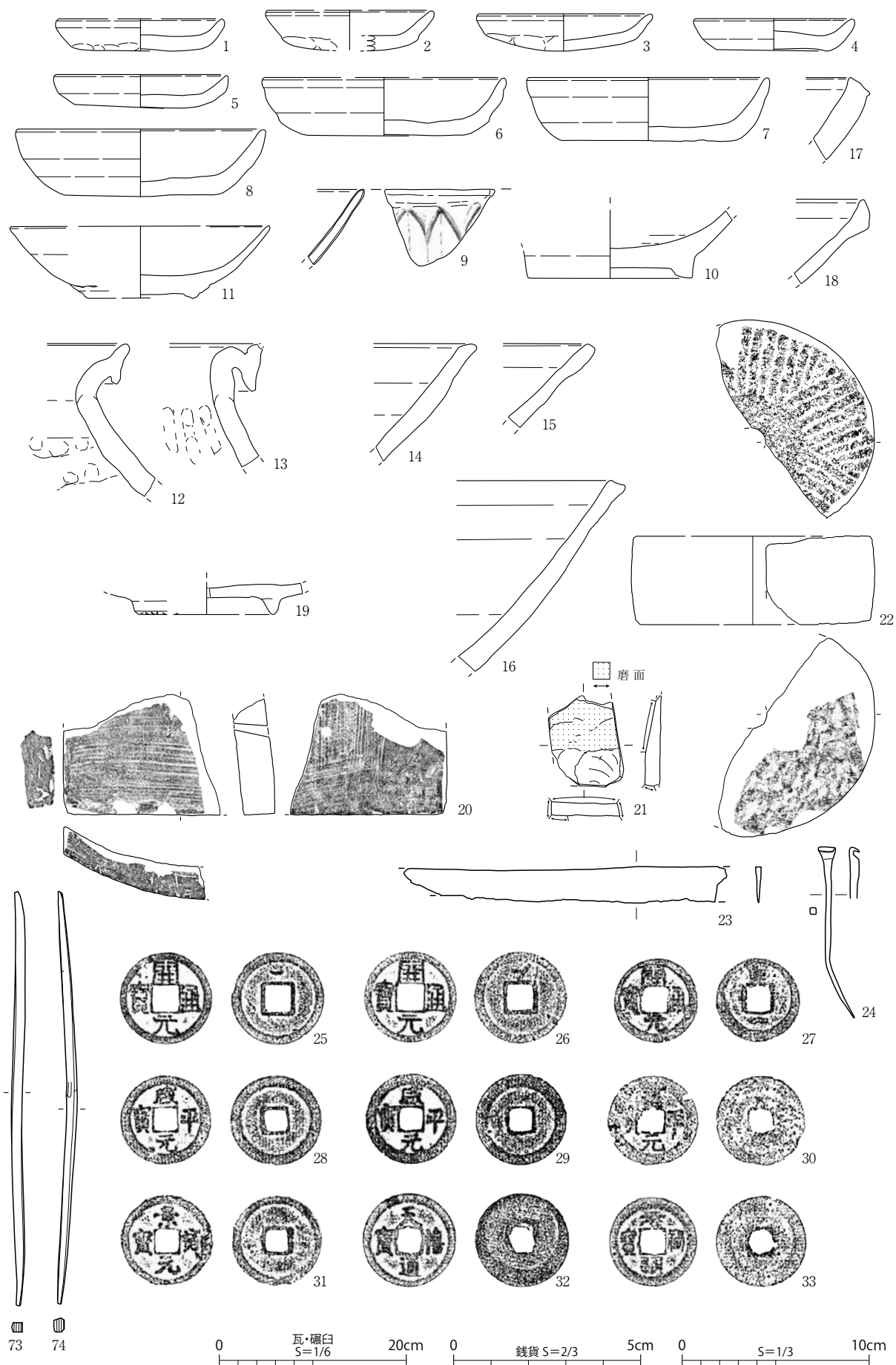


图 82 4 区 6 面 SX2 出土遺物 1

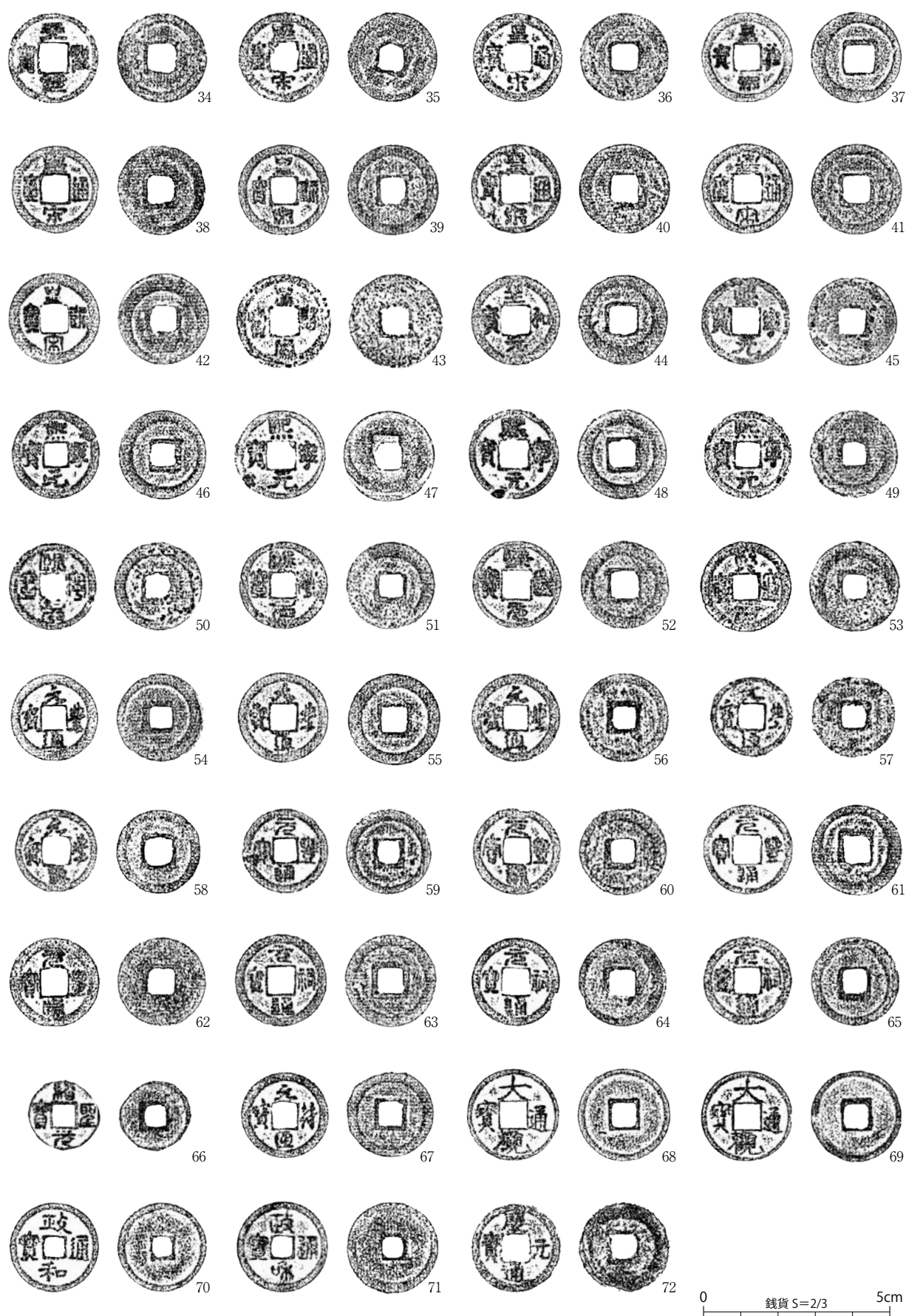


图 83 4 区 6 面 SX2 出土遺物 2

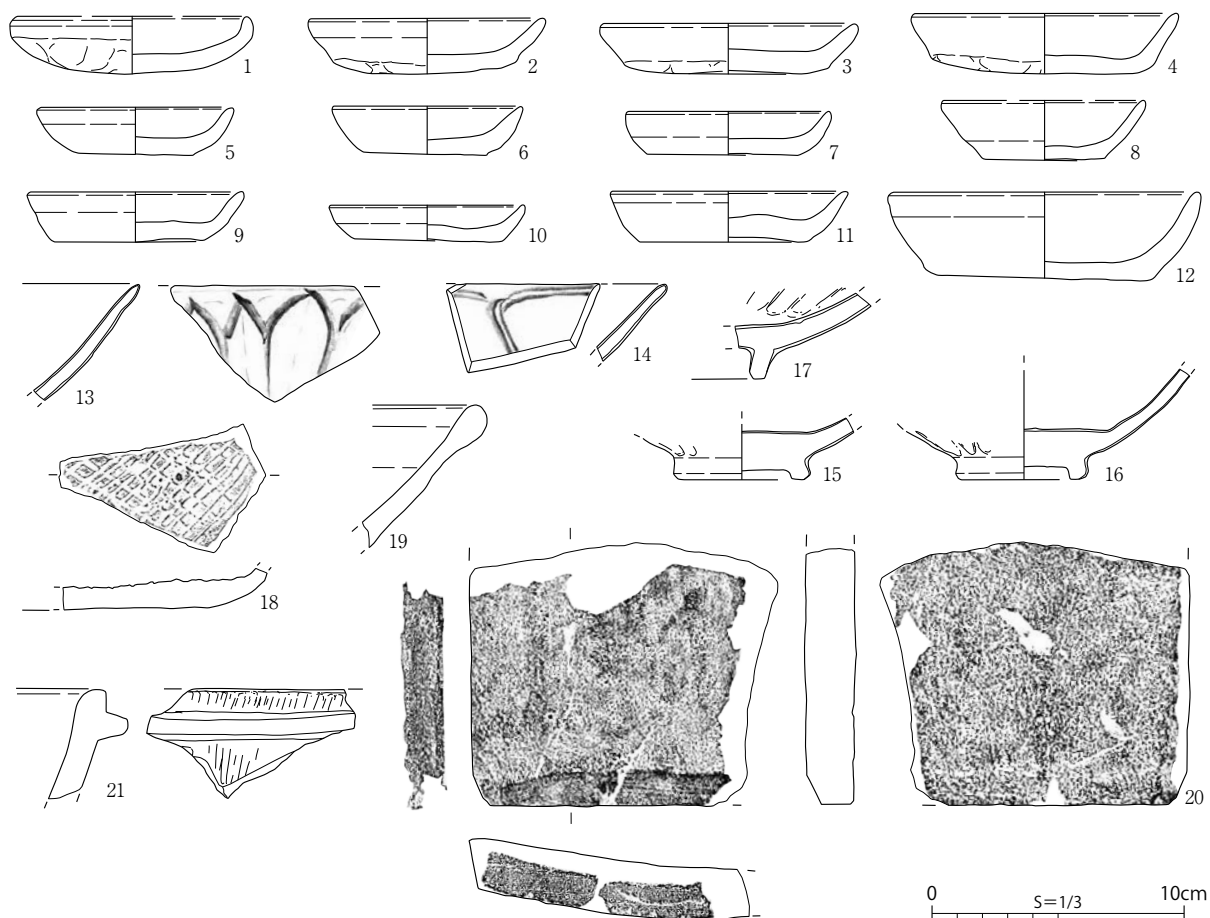


図84 4区6面整地土出土遺物

割線を配する。17は青磁盤で、内面体部に花文形の凹面ケズリを施す。18は瀬戸焼卸皿である。19は常滑焼片口鉢Ⅰ類である。20は平瓦である。凸面は縄目、凹面は布目で端部付近をヘラケズリする。21は滑石製の鍔釜である。

5・6区の遺構

6a面（図73,85-89・表11-13,18・PL.18-21）

5区で検出した整地面で、泥岩小塊を多く含む暗黄褐色土による整地層が道路東側に同じ高さで広がる。整地面の標高は、北端で10.60m、南端で10.35mと、南に向かって緩やかに下降する。H41-50の面上には完形のものを主体にかわらけが散在する。多くは天地逆の状態出土しており、意図的に「並べる」「重ねる」といった所為はみられないものの、整地面の廃絶時に儀礼的な行為を行った可能性がある。また、H43-51の東半部分では、直径20～50cmの安山岩や硬質凝灰岩が整地面上や整地層に半分埋まった状態で出土した。上屋を想定できるような配置はうかがえないため、廃棄物ではないかと考えている。6区では、現代の盛土や攪乱によって整地面自体は大部分で失われているが、H57-63で柱穴5基（P1-P5）、自然礫2個（S1・S2）を検出した。

P1（図73,85・PL.20）

6区H58-59で検出した円形を呈する柱穴である。規模は直径45cm、深さ約30cm（底面標高9.78m）を測り、断面形状は台形状を呈する。底面には根石として破砕安山岩（上面標高9.99m）が置かれている。埋土は、直径5cm以下の泥岩塊を少量、炭化物をやや多く含む暗灰褐色粘質土の単

層である。しまりは弱い。遺物は、かわらけ（T種・R種）、渥美焼と思われる胴部片などが数点出土しているが、図示できるものはない。

P2（図 73,85・PL.20）

2区 H59-60 で検出した楕円形を呈する柱穴である。規模は南北 30cm、東西 40cm、深さ約 10cm（底面標高 9.95 m）を測り、断面形は弧状を呈する。埋土は、粒子状の泥岩・炭化物を含む暗灰褐色粘質土の単層である。遺物は、かわらけ（R種）、常滑焼甕胴部片などが数点出土しているが、図示できるものはない。

P3（図 73,85・PL.20）

2区 H59-60 で検出した隅丸方形を呈する柱穴である。規模は一辺約 30cm、深さ約 15cm（底面標高 9.90 m）を測り、断面形は半円状を呈する。埋土は、粒子状の泥岩・炭化物を含む暗灰褐色粘質土の単層である。遺物は出土していない。

P4（図 73,85・PL.20,21）

6区 H59-60 で検出した円形を呈する柱穴で、東側に重複する P5 を切る。規模は直径 30cm、深さ約 10cm（底面標高 9.97 m）を測り、断面形は半円状を呈する。埋土は、粒子状の泥岩・炭化物を含む暗灰褐色粘質土の単層である。遺物は、かわらけ（T種）、常滑焼甕胴部片などが数点出土しているが、図示できるものはない。

P5（図 73,85・PL.20,21）

6区 H59-60 で検出した楕円形を呈する柱穴で、東西に重複する P4・P6 に切られる。規模は南北 30cm、東西 23cm、深さ約 15cm（底面標高 9.94 m）を測り、断面形は半円状を呈する。埋土は、粒子状の泥岩・炭化物を少量、直径 5cm 以下の泥岩塊を少量含む暗灰褐色粘質土の単層である。遺物は出土していない。

P6（図 73,85・PL.20,21）

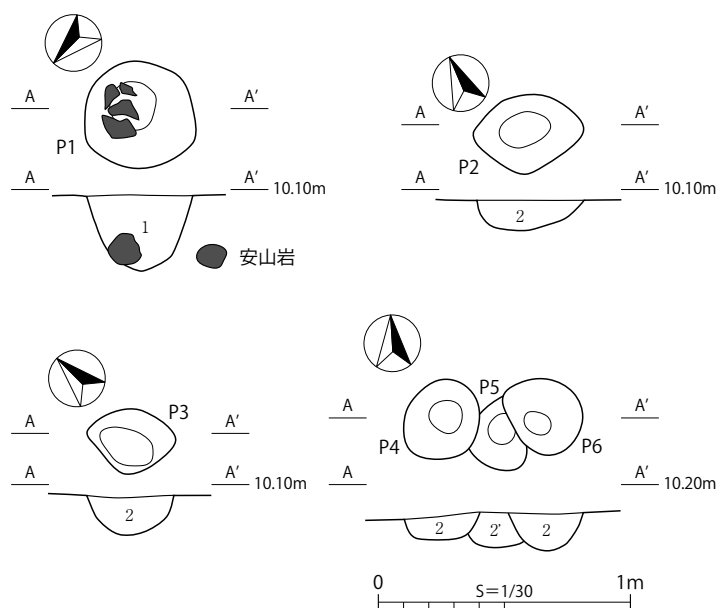
6区 H59-60 で検出した円形を呈する柱穴で、西側に重複する P5 を切る。規模は直径 30cm、深さ約 10cm（底面標高 9.94 m）を測り、断面形は半円状を呈する。埋土は、粒子状の泥岩・炭化物を含む暗灰褐色粘質土の単層で、中央に直径約 20cm の泥岩塊を 1 個含む。遺物は、T種を含むかわらけ小片が数点出土しているが、図示できるものはない。

S1（図 73・PL.20）

6区 H59-60 で検出した。一辺約 20cm、厚さ約 10cm を測る安山岩の破片で、上面は平坦である。礎石として何らかの構造物を支えていたか、上の整地層に伴う柱穴の根石ではないかと考えている。

S2（図 73・PL.20）

6区 H62-63 で整地層に下半部が



6区 5面 Pit 土層説明

1. 暗灰褐色粘質土 粒子状泥岩、直径5cm以下の泥岩塊を少量、直径1cm以下の木炭塊をやや多く含む。しまりやや弱。粘性やや強。
2. 暗灰褐色粘質土 粒子状泥岩、粒子状炭化物、直径2cm以下の泥岩塊・砂岩塊をやや多く含む。しまり、粘性やや強。
2. 暗灰褐色粘質土 粒子状泥岩、粒子状炭化物、直径5cm以下の泥岩塊を少量含む。しまり、粘性やや強。

図 85 6区 6a 面 P1-P6

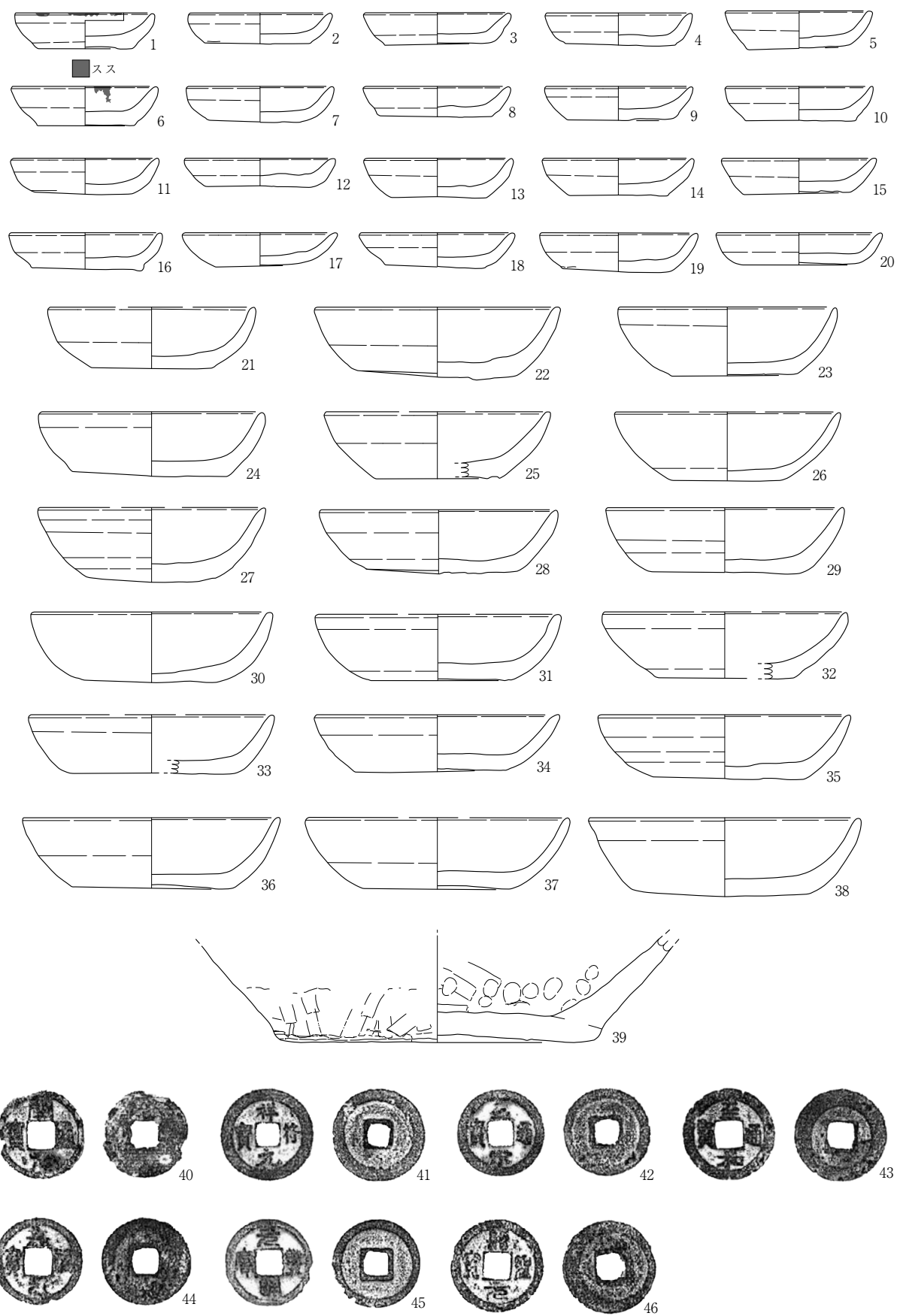


図 86 5・6区 6a 面上出土遺物

埋まった状態の安山岩を検出した。規模は一辺約 30cm、厚さ約 20cm を測り、上面は平坦である。柱の当たり跡は確認できないが、礎石として何らかの構造物を支えていたのではないかと考えている。

6a 面整地土からは、青白磁（梅瓶・合子）、白磁（壺・口禿皿・皿・碗ほか）、青磁（碗・坏・鉢）、輸入陶器（耳壺・壺・鉢・盤）、瀬戸焼（壺・卸皿ほか）、渥美焼（壺・甕ほか）、常滑焼（三筋壺・鳶口壺・壺・片口鉢・甕・山茶碗）、産地不明陶磁器、山茶碗（碗・片口鉢）、白かわらけ（T 種・R 種）、かわらけ（T 種・R 種）、土師質土器火鉢、中世須恵器、伊勢系土鍋・罌釜、瓦器碗、瓦質土器火鉢、瓦（丸・平）、土製品（輪羽口・円盤）、ガラス製品トンボ玉、古代の須恵器坏、古墳時代～古代の土師器（壺・甕）、弥生時代後期の土器（高坏・壺・甕）、銭貨（北宋銭）、鉄滓、滑石製品（温石・罌釜・鍋・砥石）、動物・魚骨（イヌ・ウマ・ニホンジカ・サル（カ）・小獣・イルカ類・マイルカ類・オキゴンドウ・ニワトリ・メジロザメ科・マカジキ科・メカジキ科・カジキ科・マグロ類）などが多量、出土している。図 86 は 6a 面上で出土した遺物で、1～38 はかわらけ R 種である。T 種は少量出土しているが、すべて破片である。1・6 は灯明皿として使用していた時期があり、口縁部に少量のススが付着する。39 は常滑焼甕である。40～46 は輸入銭貨で、40 の開元通宝（621 年初鑄）は唐銭、41 祥符元宝（1008 年初鑄）、42 皇宋通宝（1039 年初鑄）、43 至和通宝（1054 年初鑄）、44 嘉祐通宝（1056 年初鑄）、45 元豊通宝（1078 年初鑄）、46 紹聖元宝（1094 年初鑄）は北宋銭である。図 87,88 は 6a 面整地土から出土した遺物である。1～5 はかわらけ T 種、6～45 はかわらけ R 種である。図示できた T 種は R 種の 1 割程度で、破片を含めてもこの割合は変わらない。46・47 は白磁口禿皿である。48～57 は青磁である。48 は坏、49 は小碗、50・51 は坏で、共に 13 世紀中葉～14 世紀初頭の製品と思われる。52～54 はⅡ類の鎬蓮弁文碗、55 はⅢ類の蓮弁文碗である。56・57 青磁盤である。56 は劃花文、57 は花文形の凹面ケズリを体部内面に施す。58 は瀬戸焼四耳壺である。59～71 は常滑焼甕もしくは広口壺の口縁である。5～6a 型式頃の製品である。72～77 は常滑焼片口鉢である。72～75・78 はⅠ類、76・77 はⅡ類で、甕類と同じく 5～6a 型式頃の製品である。79 は常滑焼壺である。80 は軒平瓦である。瓦当には逆さ剣頭文を配する。凸面は指頭ナデとヘラナデ、凹面は布目である。81・82 は滑石製品である。81 は装身具であろうか。上部中央に直径 0.2cm の円孔を穿つ。82 は温石である。一辺 3.5～4cm を測る方形の製品で、中央に直径 1cm の円孔を穿つ。83 は鳴滝産の仕上砥である。4 面を使用する。84～89 は輸入銭貨である。残存状態は良くないが、84 は開元通宝（唐・621 年初鑄）、85 は皇宋通宝（北宋・1039 年初鑄）、86 は元祐通宝（北宋・1086 年初鑄）、87 は大観通宝（北宋・1107 年初鑄）、88～90 は政和通宝（北宋・1111 年初鑄）と思われる。

6b 面（図 74,89-99・表 14,18,20・PL.21-29）

道路東側に溝（SD1）を伴う段階を 6b 面とした。溝の調査中に底部で大小の柱穴列（SA1～5）を検出したため、2 時期（柱穴列の新旧を合わせると 3 時期）に分かれることが判明した。溝の東側には粒子状泥岩を少量含む暗灰褐色粘質土による整地面が 6 区にかけて広がっており、柱穴 135 口、溝 2 条（SD1・2）、土坑 3 基（SK1～3）、不整形遺構 1 基（SX1）を検出した。5・6 区では 6b 面以下、中世基盤層と考えている 10 面まで自然堆積土と考えられる均質な土質をもつ土壌が堆積しており、北側で整地層による生活面の開発を行っている段階でも、この付近は自然地形を整備して生活面を作出していたと考えている。整地面の標高は、5 区北端で 10.20 m、6 区南端

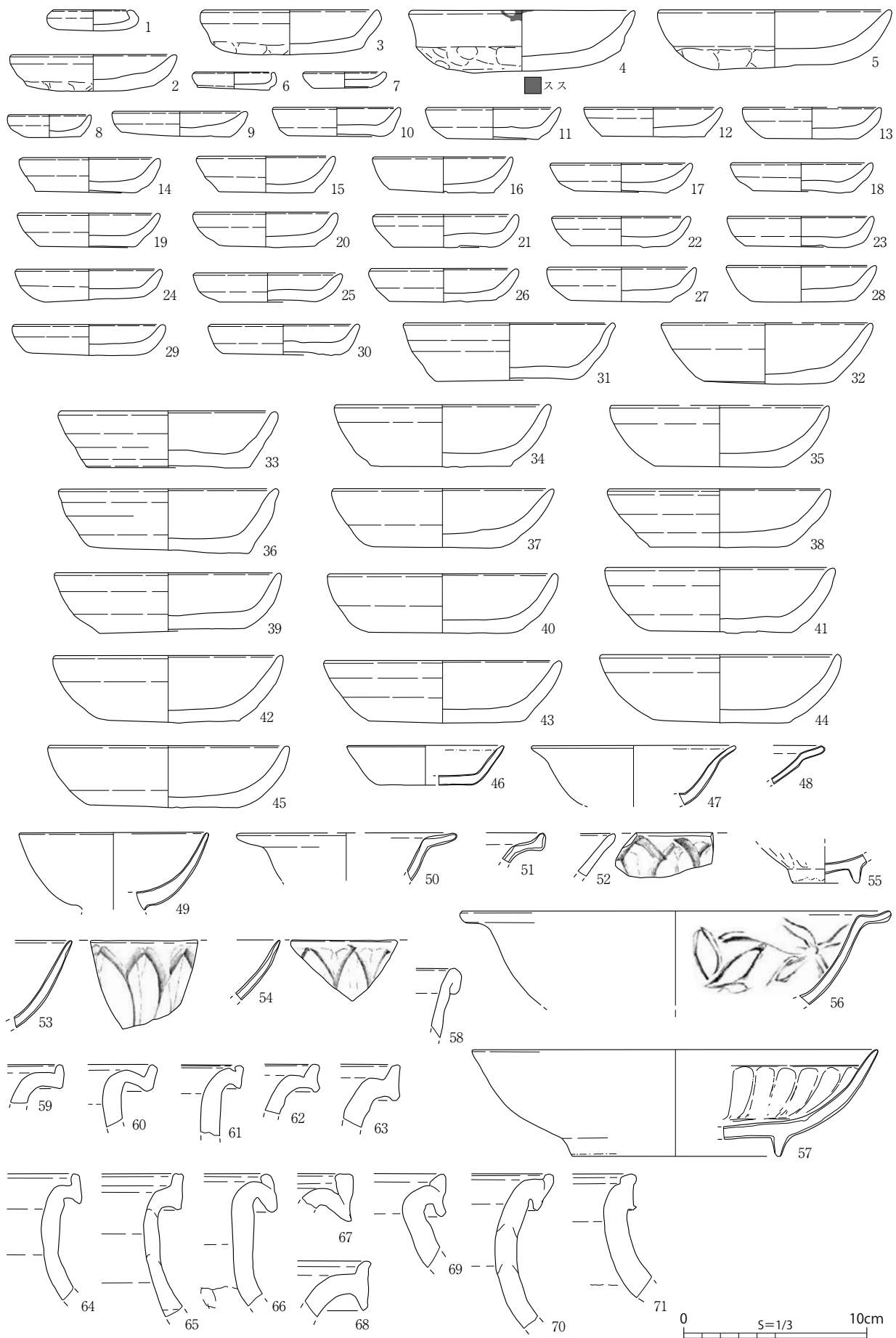
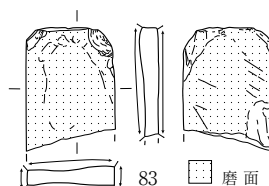
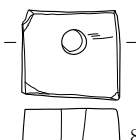
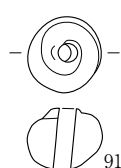
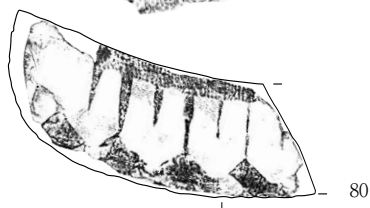
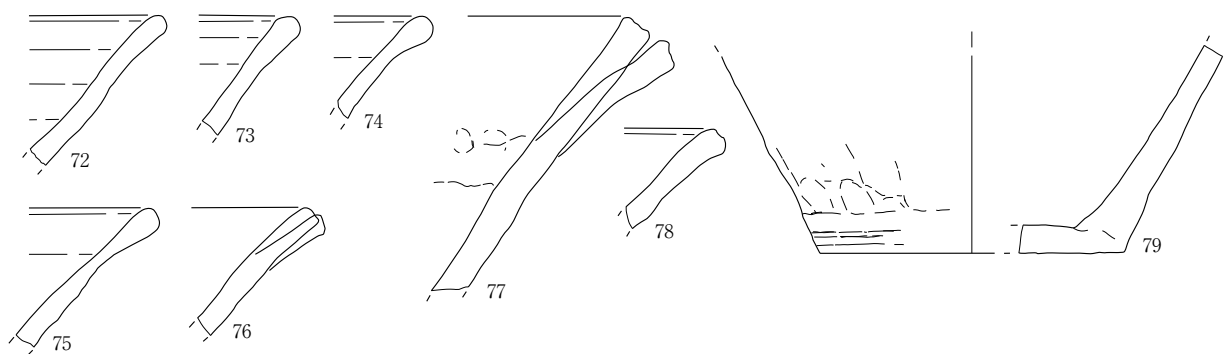


図 87 5・6区 6a 面整地土出土遺物 1



0 $S=1/3$ 10cm



0 錢貨・トンボ玉 $S=2/3$ 5cm

図 88 5・6区 6a 面整地土出土遺物 2

で 9.90 m と、南に向かってわずかに下降する。図 90-1・2 は 6b 面上で出土した常滑焼で、1 は 5 型式の甕、2 は 5 ～ 6a 型式頃の片口鉢 I 類である。3・4 は道路構成土から出土したかわらけ T 種と平瓦である。

柱穴列

SD1 底面で検出した。H40-45 で検出した大型柱穴 5 基は、当初、井戸や土坑と判断して個別に調査を行っていたが、底部付近で大型の礎板・根石が出土したことで大型柱穴列（SA1）とわかった。小型の柱穴には杭の抜跡もあり、柱間も含め規格性は高くない。調査後の検討で 4 列を抽出した（SA2 ～ 5）。

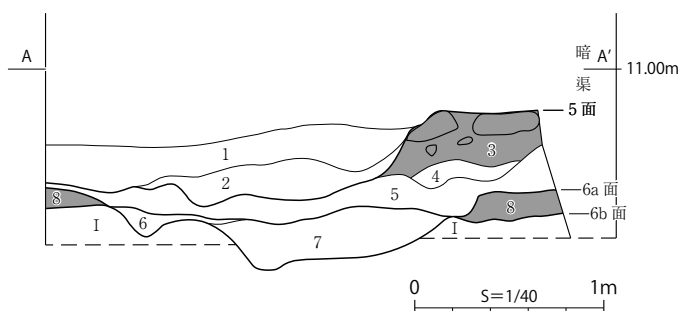
SA1（図 91-94SPB-B'97・1 表・

表 14,20・PL.23-25）

H40-46 間で検出した柱穴列で、大型の柱穴が SD1 と平行して 5 口並ぶ。柱間は、SKP1-2 間 166cm、SKP2-3 間 173cm、SKP3-4 間 195cm、SKP4-5 間 172cm を測り、SKP3-4 間が若干広く取られている。柱穴の平面形は円形もしくは隅丸方形、断面形は箱状を呈する。SKP1・3 では柱材の抜き取り時に変わってしまったものか、壁の一部が中位から段をもって広がっている。柱穴の規模は直径 80 ～ 160cm、深さ 90 ～ 100cm を測る。SKP1-5 すべてに礎板が残存しており、SKP5 以外は下敷きに根石が伴う。SKP3 では 7 枚の板材が敷かれるが、板材同士に接合関係が認められるため、構造物の重さによって分解した可能性がある。礎板・根石とも原位置を維持していると考えられているが、SKP5 は礎板の位置や埋土の堆積状況からみて動いてしまった可能性がある。埋土は泥岩塊を多く含む黄灰褐色土で、4 ～ 10 層に分層できる。薄層が複数堆積するものがあるが、SKP2 以外は人為的な埋土と考えている。SKP2 は 4 層が柱跡を示している可能性がある。

礎板は、2 ～ 4cm 厚の板材や一辺 10cm の角材といった頑強な木材を用いている。板材については建築材料を再利用しており、ホゾや楔状の切り欠きなどが確認できる。SKP2・SKP4 の礎板については樹種同定と放射性炭素年代測定を行い、樹種はスギ、伐採年代は SKP2 礎板が 9 世紀末～11 世紀前半、SKP4 礎板が 10 世紀後半～11 世紀前半という測定結果が示されている。

SA1 の性格については、柱穴や礎板・根石の規模から重量のある上屋構造が想定できる点と、5



H41東西トレンチ5・6面 土層説明

1. 暗灰褐色土 粒子状泥岩、直径0.5～5cmの泥岩塊を少量含む。しまり、粘性やや強。
2. 灰褐色粘質土 粒子状泥岩、直径0.5～5cmの泥岩塊をやや多く含む。しまりやや弱。粘性やや強。
3. 灰褐色土 粒子状の泥岩、直径5～30cmの泥岩塊を多量含む。しまり、粘性やや強。
4. 灰褐色粘質土 粒子状泥岩、直径2cm以下の砂岩塊をやや多く、直径2cm以下の泥岩塊を少量含む。しまり、粘性やや強。
5. 灰褐色粘質土 粒子状泥岩、直径1～5cmの泥岩塊をやや多く含む。しまり、粘性やや強。
6. 暗灰褐色粘質土 粒子状の泥岩、直径1～10cmの泥岩塊をやや多く含む。しまり、粘性やや強。6a面整地土。
7. 暗灰褐色土 粒子状の泥岩、直径3cm以下の泥岩塊をやや多く含む。しまり弱。粘性やや強。遺構埋土。
8. 灰褐色粘質土 粒子状の泥岩、直径1～10cmの泥岩塊をやや多く含む。しまり、粘性やや強。6a面整地土。

図 89 5 区 H41 東西トレンチ 5・6 面土層図

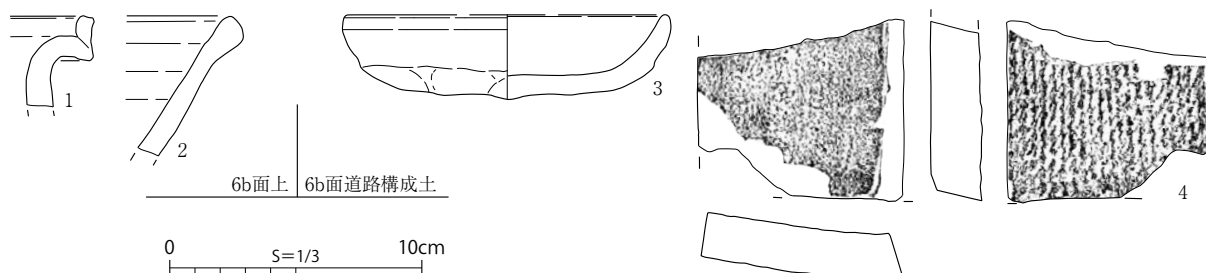


図 90 5 区 6b 面出土遺物（面上／道路構成土）

口以上の柱穴が組み合わさる可能性がない点、周辺に柵や塀といった区画に関わる構造物が存在する点などから判断して、門に関わる遺構と考えている。門であれば中央の柱は不要であるから、SA1 は作り替えが行われたと考えるのが自然であろう。中央の SKP3 は作り替えもしくは 2 基が重複するような形状をしており、SKP1・2・3・4 で構成される時期と SKP2・3・4・5 で構成される時期があるのではないかと推察する。

遺物は、埋土中から青白磁（梅瓶カ）、青磁碗、輸入陶器盤、瀬戸焼瓶子、渥美焼（壺・甕）、常滑焼（壺・片口鉢・甕）、山茶碗片口鉢、かわらけ（T 種・R 種）、伊勢系土鍋、滑石製鍋、弥生時代後期の土器（壺・甕）、動物骨、貝殻（アカニシ・ダンベイキサゴ・ハマグリ・チョウセンハマグリ・アワビ類）などが出土している。図 97-1 ～ 7 は SKP1 から出土したかわらけである。2 ～ 7 は R 種で、小型品は器高が低く皿に近い形状を呈する。8 ～ 14 は SKP3 から出土した遺物である。8 ～ 10 はかわらけ R 種である。10 は灯明皿として使っている時期があり、口縁部にススが付着する。11・12 は常滑焼である。11 は瓶子型の壺か。12 は I 類の片口鉢で、4 ～ 5 型式頃の製品である。13・14 は SKP4 から出土した輸入陶器盤と礎盤である。14 は長さ 55cm、幅 24.5cm、厚さ 4cm の柵目取り材で、四方に矩形の切り欠きがあることから建築部材の転用と思われる。表面には製材時のチョウナ痕が残る。上面中央は、円形のわずかな凹みが確認できる。凹みの直径は 18cm 前後で、柱のアタリ痕と思われる。15 は SKP5 の礎盤である。長さ 50.2cm、幅 21.6cm、厚さ 2.5cm の板目取り材で、上端にホゾをもつことから 14 同様、建築部材の転用と思われる。

SA2（図 91,94SPA-A',95-97・1 表・表 14・PL.21,25,26）

H35-51 で検出した柱穴列で、南北それぞれ調査区外に延伸する。SKP1・SKP2 を切る形で門の前面（道路からみて）に展開しており、門を廃止した後に設けたことがわかる。柱穴の規模は、直径 5 ～ 20cm、柱間は 30 ～ 100cm とまちまちであるが、底面標高は H46 以北は 10.05 m、H46 以南は 9.95 m 前後に揃えているようである。柱は残存していないが、P62 では小型の杭が残存する。埋土は粒子状の泥岩や直径 5cm 以下の泥岩小塊を多く含む暗黄灰褐色土で、ほとんどが単層である。遺物は、渥美焼（甕）、常滑焼（壺・甕）、かわらけ（T 種・R 種）、瓦器皿、土師質土器、木炭、動物骨などの破片が出土している。図 97-16 は Pit3 から出土したかわらけ R 種、17 は Pit80 から出土したかわらけ T 種である。なお、Pit80 は SA4 にも伴う可能性がある。

SA3（図 91,94SPB-B',95-97・1 表・表 14・PL.21,25,26）

H41-53 で検出した柱穴列である。SA1 の南側延長に設けており、門と組み合わさる柵列の可能性が高い。東西方向に長いものや東西方向で別の柱穴と重複するものが多く、控え柱が伴う可能性が窺える。柱穴の規模は、直径 30 ～ 40cm、深さは 30 ～ 85cm を測るが、SA2 よりも遺構の規格性は高く、底面標高は 9.35 m 前後と SA1 構成柱穴に近い深さをもつ。柱間は 40 ～ 200cm とまちまちであるが、100cm 前後のものが多い。埋土は粒子状の泥岩や直径 5cm 以下の泥岩小塊を多く含む暗黄灰褐色土で、ほとんどが単層である。遺物は、瀬戸焼壺、渥美焼（壺・甕）、常滑焼甕、白かわらけ、かわらけ（T 種・R 種）、伊勢系鍔釜、瓦、土師質土器、古代の土師器、弥生時代後期の土器（壺・甕）などの破片が出土している。図 97-18 は Pit18 から出土したかわらけ R 種である。

SA4（図 91,94SPC-C',95-97・1 表・表 14・PL.21,25,26）

H39-42 で検出した杭や矢板の先端が残存するものを結んだ延長にあるものを抽出した。SA2 と同じく SA1 と無関係に展開しており、門を廃止した後に設けた柵列であろう。各柱穴の規模は、直径 60cm と大型のものもあるが、大半は 30 ～ 40cm で、底面標高は 9.7 m 前後に揃えているよ

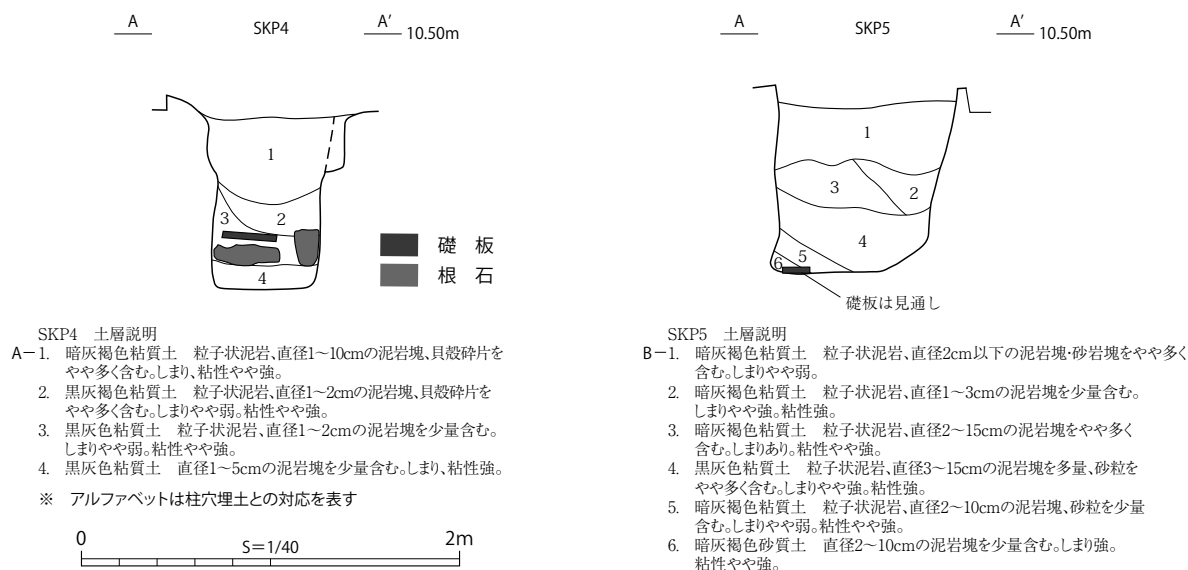


図 93 5 区 6b 面 SKP1-5 2

うである。柱間は 30 ~ 40cm のものが多く、比較的密に柱穴が並ぶ。埋土はすべて、粒子状の泥岩や直径 5cm 以下の泥岩小塊を多く含む暗黄灰褐色土の単層である。遺物は、常滑焼（壺・片口鉢・甕）、かわらけ（T 種・R 種）、伊勢系鍔釜、土師質土器、弥生時代後期の土器（高坏か器台・甕）、木炭、動物骨などの破片が出土している。図 97-19 は Pit63 から出土したかわらけ T 種である。灯明皿として使用していた時期があり、口縁部にススが付着する。

SA5（図 91,94SPD-D',95-97・1 表・表 14・PL.21,25,26）

SA1 の北側に展開する柱穴列として抽出した。南側にある SA3 と同規模の柱穴はなく、SA3 の延長もしくは対になる柱穴列は調査区外に存在するのかもしれない。

柱穴の規模は直径 30cm、深さ 50cm（底面標高 9.60 m）、柱間 100cm 前後と高い規格性で P81・77・92 が並ぶ。P92 は高い位置に礎板を伴うが、P92 とは無関係のものであろう。なお、この礎板は 90cm ほど北側の 6 面上で検出した礎板と同じ高さがあり、対になるものと考えられる。埋土は、粒子状の泥岩や直径 5cm 以下の泥岩小塊を多く含む暗黄灰褐色土の単層である。遺物は、渥美焼甕、かわらけ R 種などの破片が出土している。

その他の柱穴（（図 91,95-97・1 表・表 14・PL.21,25-28）

5 区 SD1 東側平坦面で 26 口、6 区で 36 口の柱穴を検出した。5 区東側平坦面で検出したものは、埋土は 5cm 以下の泥岩塊をやや多く含む暗黄褐色土の単層で、深さ 10cm・断面形は半円状もしくは弧状を呈するものが多く、建物が想定できる柱並びはない。一方、6 区では H52-62 にかけて直径 30cm 以上、深さ 30cm 以上のものが密集しており、特に H54 以南は 5 区で検出した柱穴列とは無関係の位置にあることから、建物の存在が窺える。図 97-20 は Pit17、21 は Pit23 から出土したかわらけ T 種である。

SD1（図 91,92,98・表 14,18・PL.22,24）

柵列や門が廃絶した後に掘削したとみられる溝で、規模は最大幅 230cm、道路面からの比高は約 60cm を測る。断面形は半円状で、底面から緩やかに壁が立ち上がる。埋土は粒子状の泥岩、直径 1 ~ 5cm の泥岩塊、炭化物などをやや多く含む黄灰褐色粘質土で、4 層に分層できる。遺物は、埋土中から白磁皿、青磁碗、輸入陶器、瀬戸焼（瓶子ほか）、渥美焼（片口鉢・甕）、常滑焼（壺・

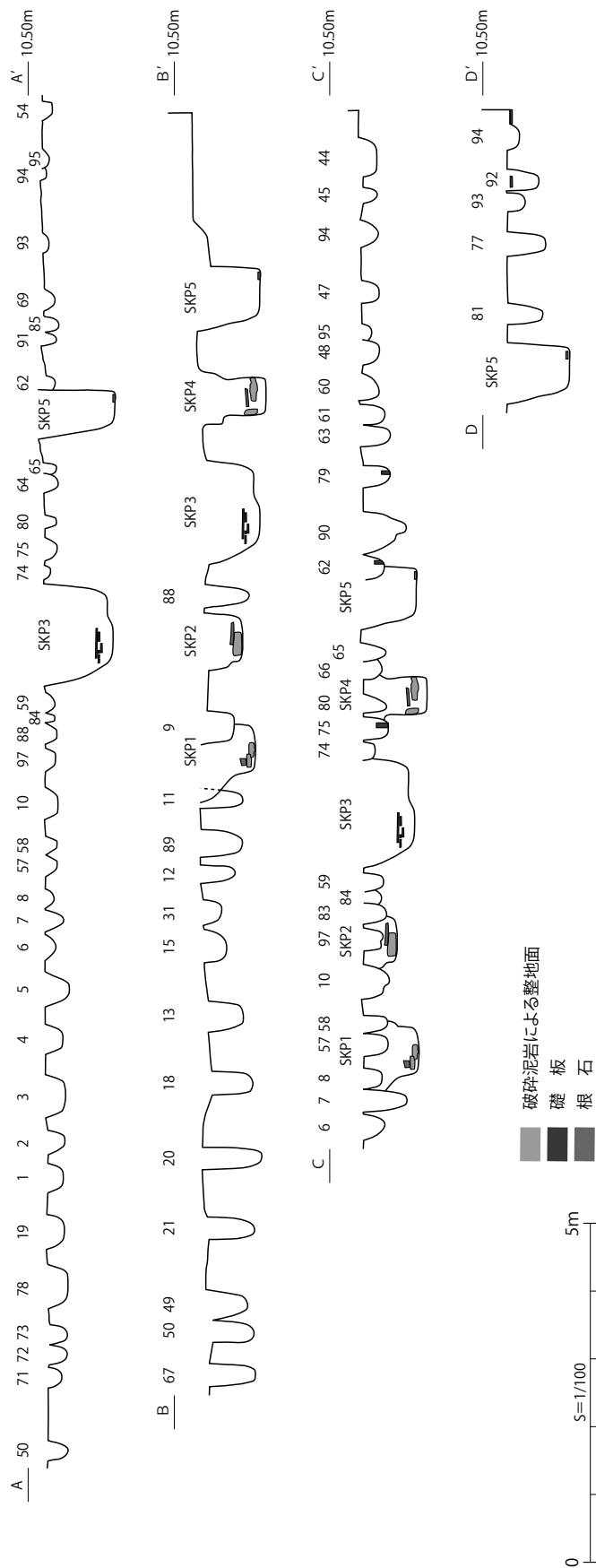
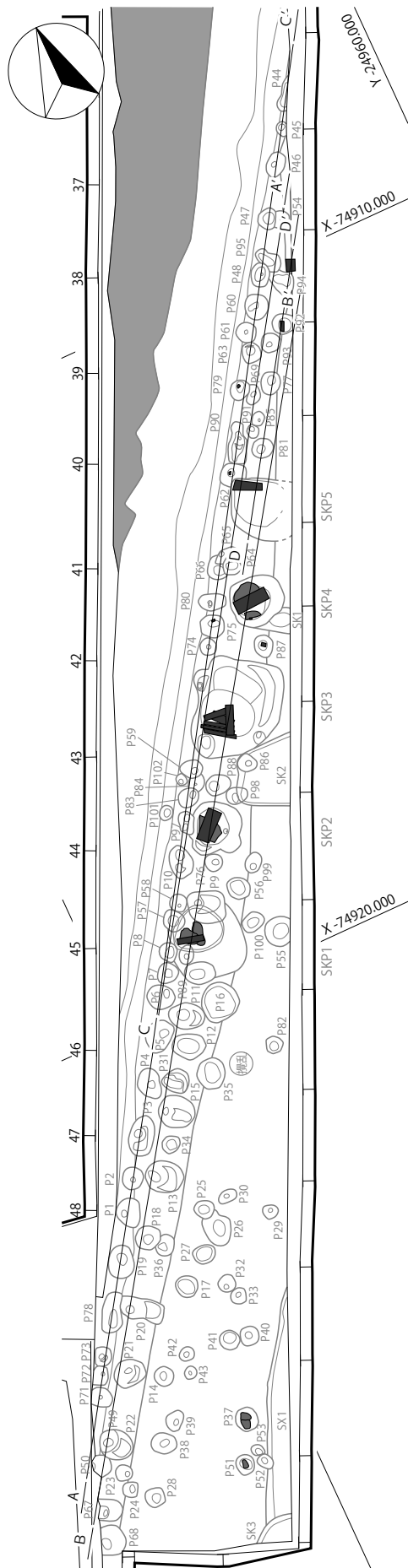


図 94 5 区 6b 面 SA1-5 立面図

片口鉢・甕・甕片転用磨具)、山茶碗(片口鉢ほか)、かわらけ(T種・R種・底部片転用円盤)、瓦質土器火鉢、丸瓦、伊勢系土鍋、黒色凝灰岩円礫(基石カ)、木炭、動物・魚骨(メジロザメ科ほか)などが出土している。図 98-1～11 はかわらけ R 種である。5・9 は灯明皿として使用していた時期があり、口縁部にススが付着する。9 は口縁の一部を半円状に打ち欠く。12・13 は常滑焼である。12 の甕は 6a 型式、13 の片口鉢Ⅱ類は 5 型式頃の製品と思われる。14 は伊勢系の土鍋である。器壁は薄く、口縁端部を内側に折り曲げる。15 は瓦質土器火鉢である。16 はかわらけ R 種の底部片を円盤状に加工した製品である。直径は 3.6cm を測る。17 は常滑焼の甕破片を転用した磨具で、外面周縁部を使用する。18～20 は北宋銭である。18 は元祐通宝(1086 年初鑄)、19 は元豊通宝(1078 年初鑄)、20 は政和通宝(1111 年初鑄)である。

SD2 (図 91,96・PL.28)

H58-59 で検出した。遺構の規模は、長さ 1 m 以上、幅 60cm 前後、深さ 25cm 前後を測り、方位は N-62°-W を指す。上段 7 面と 12 面で検出した溝が箱状を呈するのに対し、本溝の断面形は半円状を呈する。壁面は全体に凹凸があり、やや歪な造作である。底面標高は東端で 9.30 m、西端で 9.28 m とほぼ水平である。埋土は 6b 面基盤層由来の暗灰褐色粘質土、灰黒色粘質土、灰褐色砂質土の 3 層が水平堆積する。遺物は出土していない。

SK1 (図 91)

H41-42 で検出した土坑である。西側は SKP4 に切られ、東側は調査区外に延伸するため平面形は不明である。断面形は弧状を呈し、規模は南北 40cm、東西 58cm 以上、深さは 16cm (底面標高 10.0 m) を測る。埋土は泥岩をほとんど含まない暗黄褐色土の単層である。遺物は出土していない。

SK2 (図 91,99・PL.28)

H42-44 で検出した土坑で、P86 に切られ、SKP3・P98 を切る。東側は調査区外に延伸する。遺構の平面形は隅丸方形、断面形は箱状を呈し、規模は南北 115cm、東西 97cm 以上、深さは 25cm (底面標高 10.02 m) を測る。底面は凹凸もなく平坦である。埋土は粒子状泥岩、直径 1～10cm の泥岩塊を少量含む黄褐色土の単層である。遺物は、常滑焼甕、かわらけ(T種・R種)、弥生時代後期の甕などの破片が出土している。図 97-22 はかわらけ R 種である。体部中位に強い稜をもつ。

SK3 (図 91,99)

5 区南東端(H51-52)で検出した円形土坑と考えている遺構で、SX1 を切る。検出したのは北西側 1/4 程度で、大部分は調査区外に延伸する。遺構の断面形は弧状を呈し、規模は南北 45cm 以上、東西 60cm 以上、深さ 15cm (底面標高 9.85 m) を測る。埋土は粒子状泥岩、直径 1～5cm の泥岩塊をやや多く含む暗黄褐色土の単層である。遺物は、かわらけ(T種・R種)の小片が数点出土したが、図示できる破片ではない。

SX1 (図 91,97,99・Pl.29)

5 区南東端(H49-52)で検出した大型の遺構で、SK3 に切られる。大型の方形土坑や溝の可能性が窺えるが、検出したのは遺構西端部のわずかな部分であり、性格不明遺構として扱った。遺構の断面形は弧状を呈し、規模は南北 375cm 以上、東西 40cm 以上、深さ 5cm (底面標高 10.00 m) を測る。埋土は粒子状泥岩、直径 1～5cm の泥岩塊をやや多く含む暗黄褐色土の単層である。遺物は、常滑焼壺、かわらけ(T種・R種)、白かわらけ R 種、弥生時代中～後期の壺・甕などが出土している。図 97-23 はかわらけ R 種である。

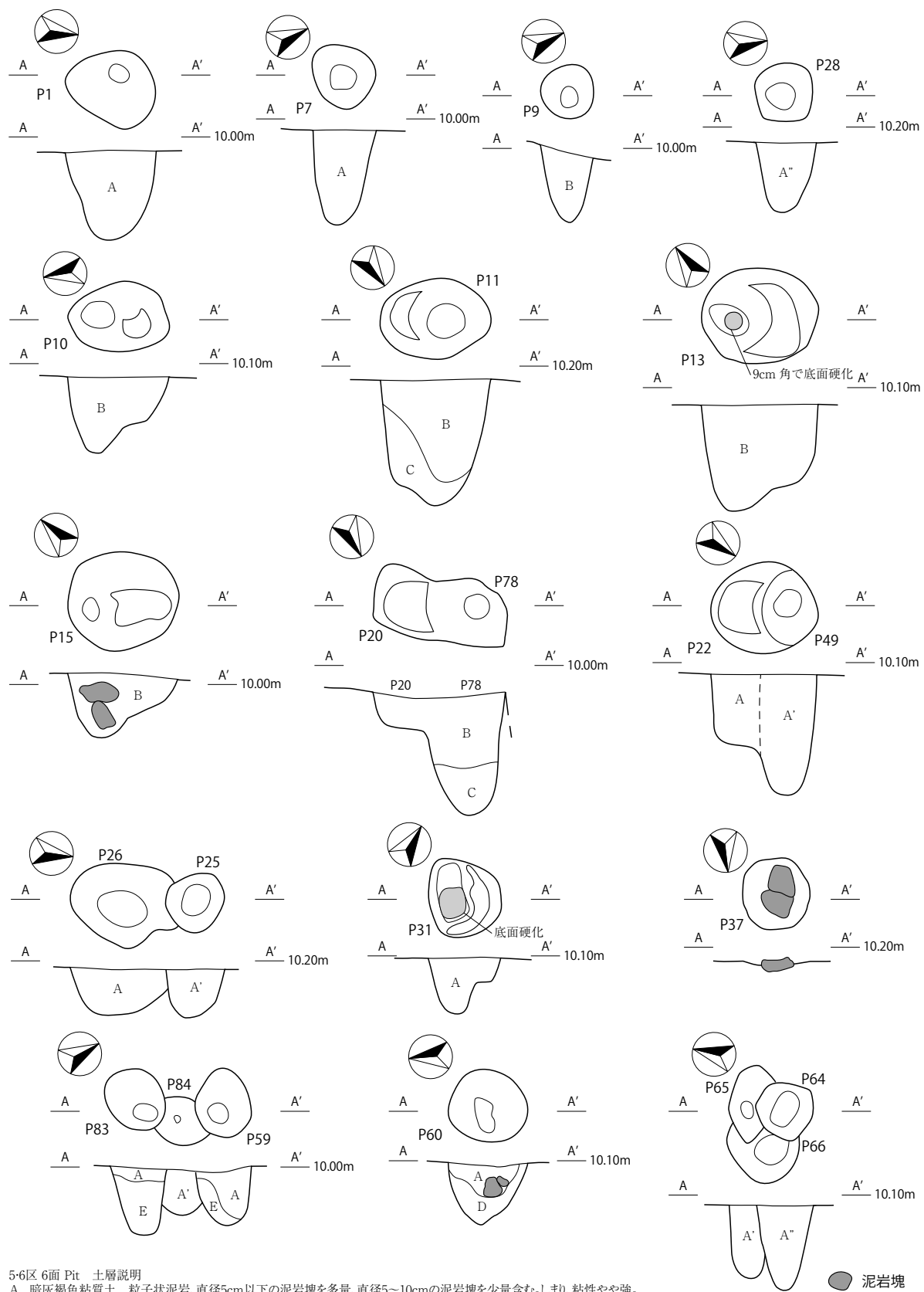
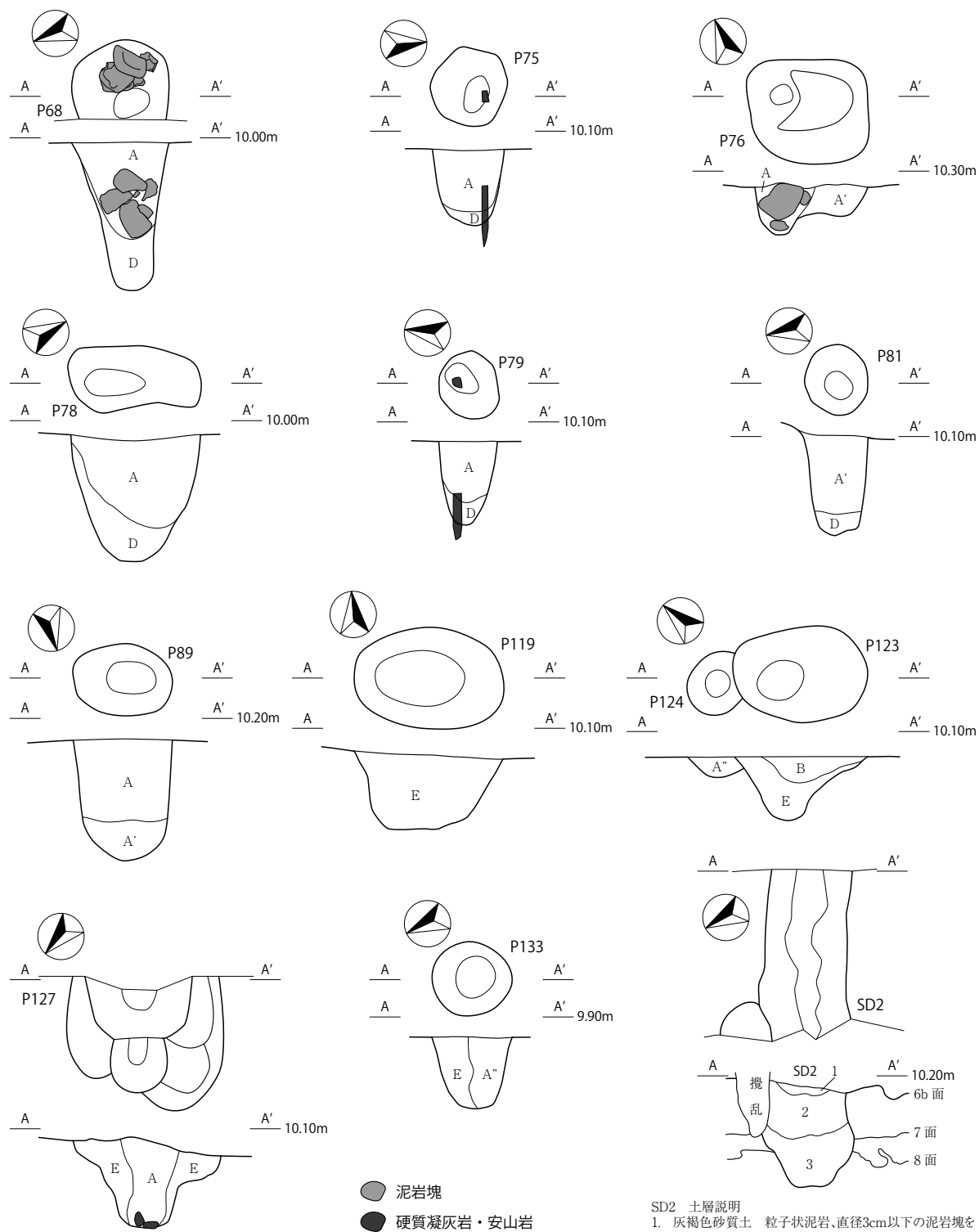


図 95 5 区 6b 面柱穴 1



5-6区 6面 Pit 土層説明

- A. 暗灰褐色粘質土 粒子状泥岩、直径5cm以下の泥岩塊を多量、直径5~10cmの泥岩塊を少量含む。しまり、粘性やや強。
A'. 暗灰褐色粘質土 粒子状泥岩、直径5cm以下の泥岩塊を多量、直径5~10cmの泥岩塊、直径0.5cm前後の木炭塊を少量含む。しまり、粘性やや強。
A''. Aを基本に、泥岩塊をほとんど含まない土層。
B. 暗灰褐色粘質土 粒子状泥岩、直径2cm以下の泥岩塊、砂岩塊をやや多く含む。しまりやや弱。粘性やや強。
C. 灰黒色粘質土 粒子状泥岩、砂粒を少量含む。しまりやや弱。粘性強。
D. 灰黒色粘質土 直径10~20cmの8層(8面基盤層)との混成土。粒子状泥岩、直径3cm以下の泥岩塊、粒子状炭化物を少量含む。しまり、粘性強。
E. 暗灰褐色土 粒子状の泥岩、直径0.5~10cmの泥岩塊、粒子状炭化物を少量含む。しまり、粘性やや強。

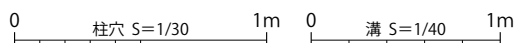


図 96 5区 6b面柱穴2

1表 5区 6b 面柱穴観察表

遺構 番号	平面形	断面形	規模 (cm)			底面 標高(m)	埋土	備 考	遺構 番号	平面形	断面形	規模 (cm)			底面 標高(m)	埋土	備 考
			長径	短径	深さ							長径	短径	深さ			
P1	円形	U字状	46	38	45	9.470	A		P71	円形	U字状	34	31	57	9.330	A	
P2	円形	U字状	35	33	49	9.420	A		P72	円形	半円状	30	24	53	9.340	A	
P3	楕円形	階段状	64	40	58	9.400	A		P73	円形	階段状	30	26	53	9.340	A	
P4	楕円形	半円状	47	38	54	9.460	A		P74	円形	半円状	27	26	18	9.837	A	
P5	円形	U字状	52	45	62	9.384	A		P75	円形	U字状	38	36	36	9.638	A, D	杭上端9.83m, 下端9.55m
P6	円形	半円状	44	38	32	9.680	A		P76	隅丸方形	階段状	60	50	24	9.994	A, A'	
P7	円形	半円状	33	33	54	9.460	A		P77	円形	U字状	36	30	66	9.585	A	
P8	円形	半円状	30	28	25	9.730	B		P78	楕円形	半円状	64	32	61	9.320	A, D	
P9	円形	U字状	28	27	40	9.625	B		P79	円形	U字状	31	30	40	9.600	A, D	P79>P69 杭上端9.75m, 下端9.50m
P10	楕円形	階段状	52	38	39	9.640	B		P80	楕円形	U字状	43	27	35	9.660	A, D	
P11	楕円形	階段状	57	41	64	9.484	B, C		P81	円形	箱状	34	31	51	9.625	A', D	
P12	楕円形	U字状	53	40	52	9.610	B		P82	円形	半円状	27	27	15	10.031	A	
P13	円形	階段状	60	50	54	9.480	B	角柱圧痕9cm角	P83	円形	U字状	32	31	35	9.651	A, E	P83>P84
P14	円形	半円状	31	30	15	9.950	E		P84	円形	半円状	28	25	24	9.748	A'	P59>P84<P83
P15	円形	階段状	57	51	33	9.732	B		P85	円形	U字状	23	20	39	9.600	A	
P16	円形	箱状	64	60	19	9.970	A	底面硬化 範囲18x16cm	P86	円形	U字状	31	29	21	9.919	A, E	P86>SK2
P17	円形	半円状	35	34	11	9.980	A		P87	円形	U字状	35	29	54	9.630	A, E	杭上端9.85m, 下端9.75m
P18	円形	U字状	40	38	60	9.351	A	P18>P36	P88	円形	U字状	39	33	73	9.400	A, E	
P19	円形	半円状	52	40	54	9.430	A, C		P89	楕円形	U字状	49	35	59	9.515	A, A'	
P20	楕円形	階段状	69	44	86	9.230	B, C	P78と重複, 同一Pか	P90	不整形	階段状	66	29	64	9.370	A	
P21	円形	階段状	50	45	63	9.470	A	柱圧痕17x15cm	P91	円形	U字状	22	19	45	9.660	A	
P22	円形	箱状	52	48	37	9.670	A	P49>P22	P92	円形	半円状	33	32	46	9.690	A	礎板上端10.1m, 下端10.07m
P23	円形	U字状	27	25	26	9.730	A		P93	円形	半円状	31	30	20	9.881	A	SK2>P98
P24	円形	U字状	24	24	32	9.740	A		P94	不整形	半円状	41	34	19	9.962	A	P48>P95>P94
P25	円形	半円状	32	29	23	9.910	A	P25>P26	P95	不整形	半円状	40	37	20	9.887	A	P48>P95>P94
P26	不整形	半円状	56	43	24	9.878	A'	P25>P26	P96							欠番	
P27	円形	半円状	35	30	29	9.830	A'		P97	楕円形	半円状	36	25	30	9.700	A	南側下端9.74m
P28	円形	U字状	32	30	36	9.760	A"		P98	楕円形	半円状	34	26	48	9.603	A	
P29	円形	半円状	25	22	7	10.070	A"		P99	楕円形	弧状	32	26	19	10.017	A	
P30	楕円形	漏斗状	28	23	37	9.772	A"		P100	円形	弧状	35	32	21	10.001	A	
P31	円形	階段状	43	39	29	9.804	A	底面硬化 範囲21x18cm	P101	円形	半円状	24	21	23	9.742	A	
P32	円形	半円状	28	27	25	9.855	A		P102	円形	半円状	19	18	11	9.860	A	
P33	円形	半円状	25	24	26	9.930	A		P103	円形	箱状	62+	20+	51	9.357	A'	
P34	円形	半円状	28	28	10	9.930	A		P104	円形	U字状	51	31+	32	9.664	A'	
P35	円形	半円状	49	44	12	10.000	A		P105	円形	階段状	52	31+	55	9.283	A, D	
P36	円形	U字状	34	30	26	9.728	A	P18>P36	P106	隅丸方形	半円状	42	31+	40	9.457	A'	
P37	円形	弧状	38	36	2	10.110	E	泥岩根石上端10.13m	P107	円形	箱状	39+	27+	48	9.449	A'	
P38	円形	半円状	40	33	17	9.954	A		P108	円形	半円状	36	15+	23	9.687	A'	
P39	円形	半円状	33	28	13	9.980	A		P109	円形	U字状	37	29+	66	9.300	A'	
P40	円形	半円状	31	30	13	9.970	E		P110	円形	半円状	43	24+	24	9.756	A', D	
P41	円形	半円状	32	31	22	9.880	E		P111	円形	半円状	65	30+	41	9.587	A'	
P42	円形	半円状	24	22	7	10.010	E		P112	円形	U字状	50	31+	46	9.545	A"	
P43	円形	弧状	21	19	6	10.030	A		P113	隅丸方形	半円状	47	28+	35	9.690	A'	P114>P113
P44	不整形	半円状	56	18	24	9.807	A		P114	円形	U字状	41	32+	56	9.730	A'	P114>P113
P45	円形	半円状	24	16	22	9.813	A		P115	円形	U字状	37	30+	23	9.723	A'	
P46	楕円形	半円状	40	30	26	9.784	A		P116	円形	U字状	27	24	28	9.680	A'	
P47	円形	U字状	34	28	27	9.770	A	P47>P54	P117	円形	半円状	41	33	25	9.710	A"	
P48	円形	半円状	38	30	26	9.764	A	P48>P95>P94	P118	円形	半円状	42	41	23	9.780	A', D	
P49	円形	U字状	38	29	62	9.423	A'	P49>P22	P119	楕円形	半円状	73	52	38	9.610	A', D	
P50	円形	階段状	35	25+	59	9.322	A', D		P120	円形	半円状	20	20	16	9.800	A'	双子ビット(南側下端9.82m)
P51	円形	半円状	32	29	30	9.837	A	泥岩根石上端9.88m	P121	円形	不明	53	21+	55	9.450	A'	下端ナシ
P52	円形	半円状	25	23	28	9.860	A		P122	円形	不明	39	31+	44	9.500	A'	下端ナシ
P53	円形	半円状	22	17	20	9.930	A		P123	楕円形	U字状	62	51	31	9.670	E	P123>P124
P54	円形	U字状	27	24	28	9.804	A, A"	P47>P54	P124	円形	半円状	30	29	10	9.850	A'	P123>P124
P55	円形	半円状	47	40	18	10.084	A		P125	円形	箱状	57	56	52	9.500	A', D	
P56	円形	半円状	37	35	18	10.050	A		P126	円形	半円状	23	21	17	9.830	A, C	
P57	円形	半円状	35	34	33	9.650	A		P127	隅丸方形	階段状	80	80+	42	9.620	A', D	
P58	円形	U字状	28	27	35	9.640	A		P128	円形	U字状	58	31+	40	9.590	A', D	根石上端9.658m, 下端9.60m
P59	円形	半円状	36	29	28	9.700	A, E	P59>P84	P129	円形	半円状	16	16	7	9.901	A'	
P60	円形	半円状	40	37	30	9.770	A, D		P130	円形	半円状	19	19	7	9.910	A'	
P61	円形	U字状	32	32	32	9.690	A', C		P131	円形	半円状	27+	26+	17	9.750	A'	P132>P131
P62	円形	半円状	41	37	26	9.708	A	SKP5>P62	P132	円形	半円状	38	28+	12	9.790	A'	P132>P131
P63	円形	U字状	33	30	47	9.600	A	礎板上端9.84m, 下端9.75m	P133	円形	U字状	39	36	35	9.455	A, D	
P64	円形	U字状	30	29	43	9.612	A"	P64>P65>P66	P134	円形	半円状	29	29	7	9.780	B	
P65	円形	U字状	35	27	38	9.675	A'	P64>P65>P66	P135	円形	半円状	18	17	7	9.750	B	
P66	円形	半円状	38	33	29	9.732	A	P64>P65>P66	SKP1	隅丸方形	箱状	212	198	91	9.290		礎板上端9.52m
P67	円形	漏斗状	39	35	67	9.310	A, D		SKP2	円形	箱状	135	128	62	9.500		礎板上端9.68m
P68	円形	U字状	48	40	72	9.260	A, D	砂岩根石8個 上端9.85m, 下端9.58m	SKP3	隅丸方形	箱状	249	216	100	9.280		礎板上端9.46m
P69	円形	U字状	32	26	33	9.716	A', C	P79>P69	SKP4	円形	箱状	137	130	102	9.145		礎板上端9.44m
P70	円形	U字状	7	6	4	9.356		SKP2底面	SKP5	隅丸方形	箱状	162+	158	99	9.240		礎板上端9.27m

7面（図100・PL.29）

7面とした粒子状の泥岩をやや多く含む暗灰褐色粘質土上では遺構や遺物を検出しなかったが、面上は鉄分の湧出による強固なしまりをもっており、一定期間露呈していたものと考えて整地面とした。標高は6区北端・南端とも9.8mで水平である。なお、自然科学分析では、後述する8面以外にも、7・9面で水田あるいはイネ葉身が多く堆積する環境であったとの見解が示されている。

7面整地土からは、常滑焼甕、かわらけR種ほか、弥生時代の土器（甕ほか）などが出土してい

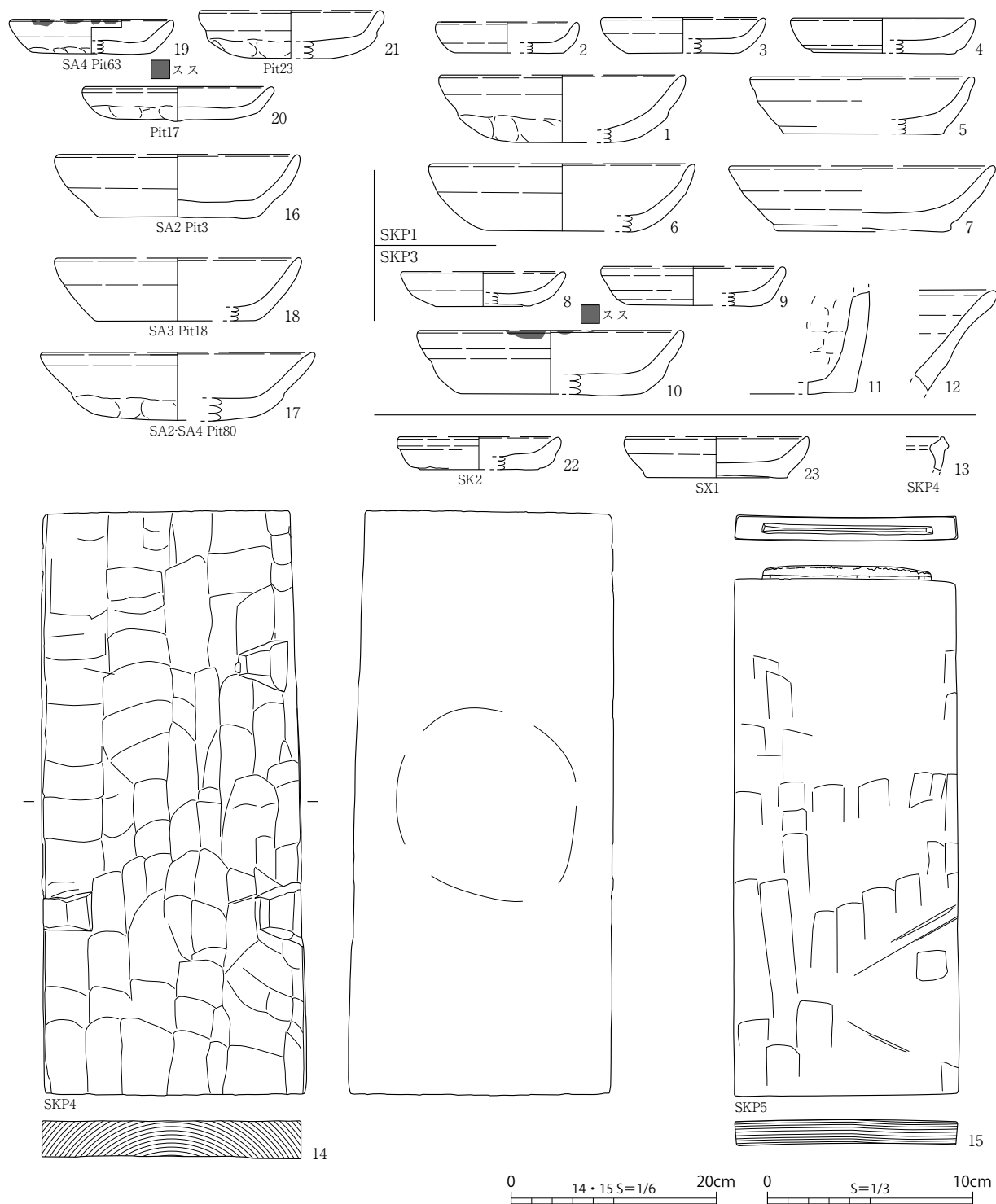


図97 5区6b面出土遺物（P／SK／SKP）

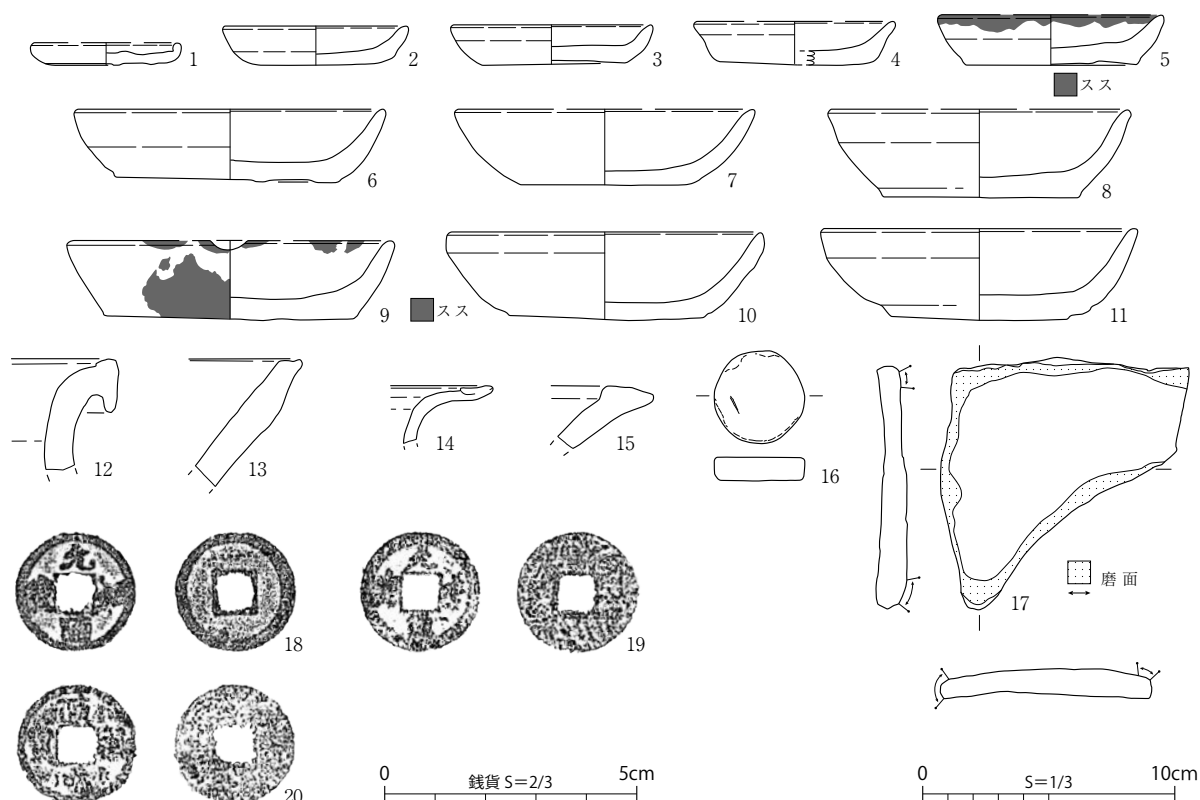


図 98 5 区 6b 面 SD1 出土遺物

るが、6 区のみとは言え総点数 10 点（109.1g）とわずかな量であり、人的活動の乏しさが窺える。

8 面（図 101-106・表 14-16・PL.29-31）

8 面は 4 区・6 区で検出した。両者を繋ぐ 5 区 6 面の遺構群が保存対象となり、6 面以下の土層堆積状況がまったくわからないため、整地面の標高を基に、上下の土層や遺構・遺物内容も加味して 4 区と 6 区の整地面を組み合わせてみた。4 区と 6 区では土層が大きく異なり、4 区が直径 0.5～2cm 前後の泥岩小塊を多量含む灰褐色砂質土を整地土に用いるのに対し、6 区では黄褐色粘土質シルトが基盤層となる。

整地面の標高は、4 区が北端で 9.88 m、H13 付近で 9.60 m を測るが、それより南側は暗渠によって失われている。調査区西壁の土層観察では、H22～25 にかけて石列の延長と考えられる礫が確認できる。石列は H2 からほぼ水平に続いており、断面を観察した限りでは、整地面もこの辺りまで標高 9.85 m 前後でほぼ水平に広がっている。H25 からは 4 区南端にかけてわずかに下りはじめ、南端部 H34 付近では 9.62 m まで下降する。6 区は北端の H50 付近で 9.75 m、南端で 9.75 m とほぼ水平である。遺構は、4 区で溝（SD1）、安山岩や硬質の凝灰岩自然礫による石列を、6 区では H64-65 で北西 - 南東方向の溝 1 条、H56-72 で柱穴 9 口、H56 以南で踏み抜きや水生植物の根による攪拌痕跡多数を検出した。図 103 は 4 区 8 面上で出土した遺物である。1・2 はかわらけ T 種、3 は上野産の中砥である。石材は凝灰岩で、4 面を使用する。

4 区の遺構

SD1（図 101,102,104・表 14,15・PL.29,30）

4 区北西端（H2-8）で検出した溝で、東縁に沿って後述する石列が組み合わさる。遺構方位は

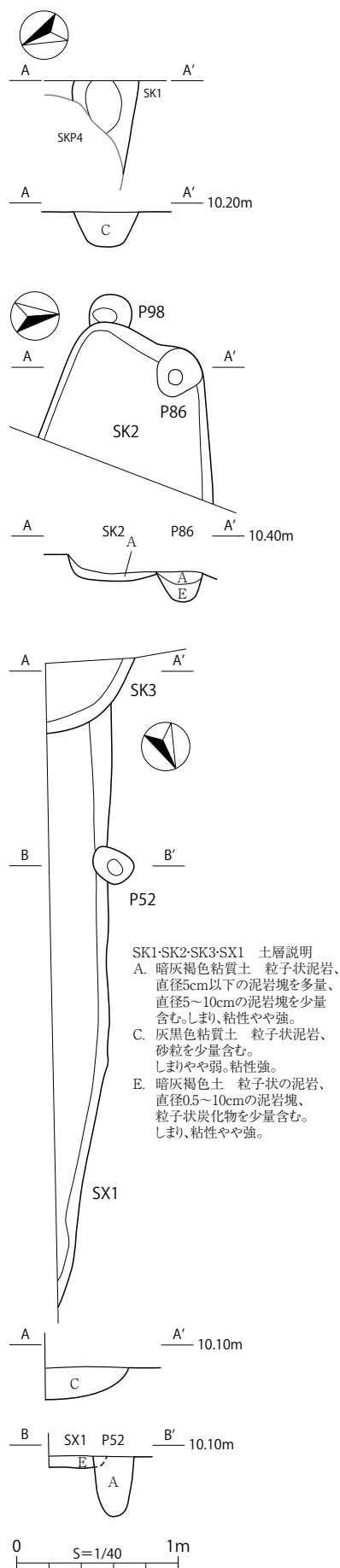


図99 5区6b面SK1-3 / SX1

N-24°-Eを指し、北側・西側は調査区外に延伸する。南端部はH7にあり、その南側は東縁に石列を伴ってH12まで凹み状の浅い落ち込みが続く。南端は6面SX1に切られる。SD1の規模は、長さ780cm（窪地含む長さ1515cm）以上、幅95cm以上、深さ約40cm、断面形は台形状を呈する。溝底の標高は9.26～9.43mと、北側が緩い段をもって高くなるが、勾配はなく、区画溝ではないかと考えている。埋土は砂粒を多量含む暗灰色砂質土と灰黒色土、砂をやや多く含む暗灰褐色粘質土の3層が水平堆積する。2・3層は砂を多量含むことから、自然堆積の可能性が高い。1層と2層の境には部分的に直径1～2cmの小礫が挟在しており、1層も洪水性堆積土の可能性はある。遺物は、白磁（皿・壺）、青磁碗、瀬戸焼（入子・卸皿・瓶類）、渥美焼（壺・甕）、常滑焼（壺・甕・片口鉢）、山茶碗（碗・片口鉢）、白かわらけ（T種・R種）、かわらけ（T種・R種）、瓦器碗、瓦（丸・平）、鞆羽口、輸入銭貨、石製品（砥石）、種子（モモ）、動物・魚骨（ウマ・ニホンノウサギ・イルカ類）、貝殻（ダンベイキサゴ・サザエ・マダカアワビ・アワビ類・アカニシ・シオフキ・ハマグリ・チョウセンハマグリ・アサリ・イタボガキ）などが出土している。図104-1～3はかわらけT種である。大型品は外面口縁部を面取りする。4・5は青磁碗である。4は分割線と花文、5は楕描花文を内面に施す。いずれも12世紀中頃～後半の製品と思われる。6は渥美焼の壺である。口縁端部は折り曲げる。7は常滑焼の壺である。8は山茶碗皿と思われる製品で、口縁部にはススが付着する。9は瓦器碗である。10は丸瓦である。凸面はヘラケズリ、凹面はヘラナデか。11は平瓦である。凸面は縄目で端部をヘラナデする。凹面は布目である。

石列（図101,102・PL.29,30）

SD1東縁に沿って安山岩・硬質の凝灰岩自然礫を並べた遺構である。石列の東側は、暗渠の基礎や江戸時代後期の自然流路によって部分的に失われた可能性がある。礫は直径10～50cm前後の比較的扁平なものをを用いており、整地面に下半部を埋める形で配置する。礫の中には、ボーリング・シェール（穿孔貝）が開けた小穴が多数みられる海由来のものも含まれている。礫上面の標高は9.85m前後で、周辺の整地面より5～10cmほど高い。

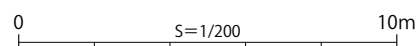
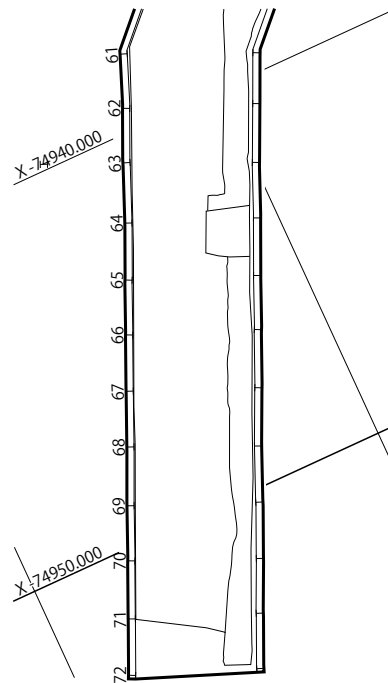
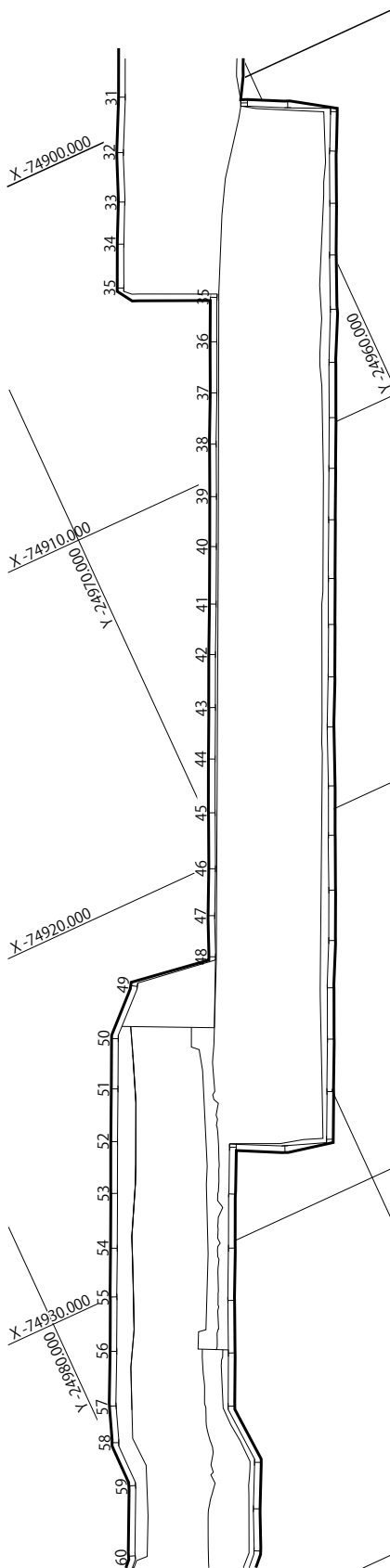
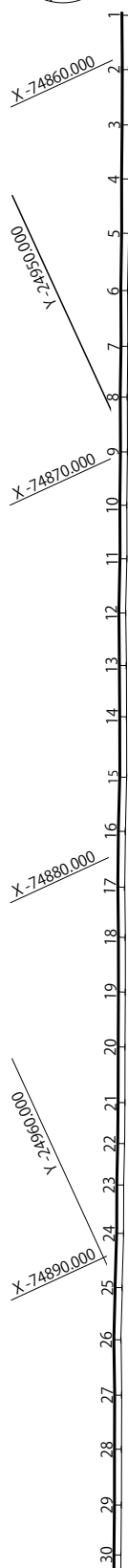
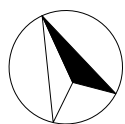


图 100 4-6 区 7 面全体图

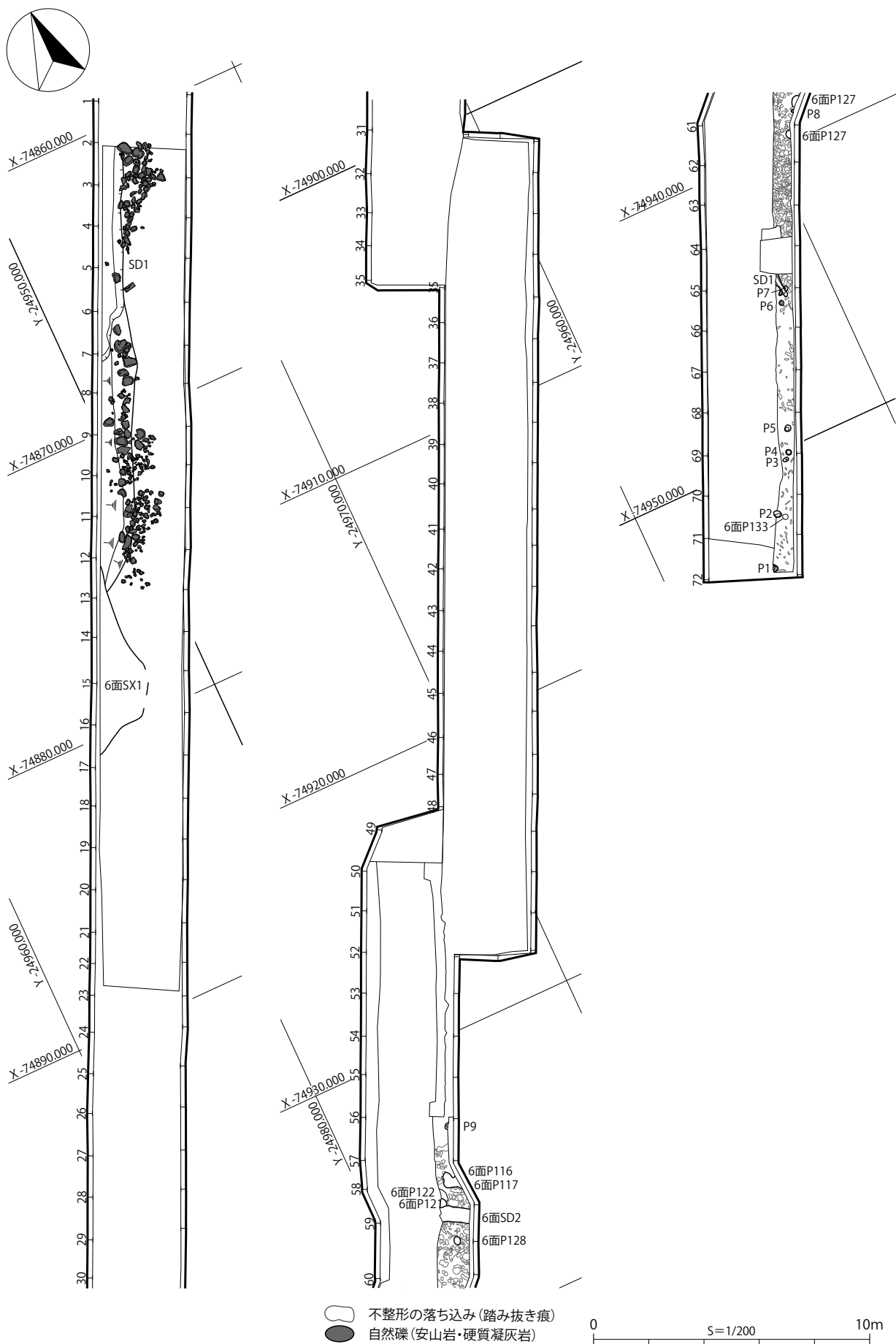


図 101 4-6 区 8 面全体図

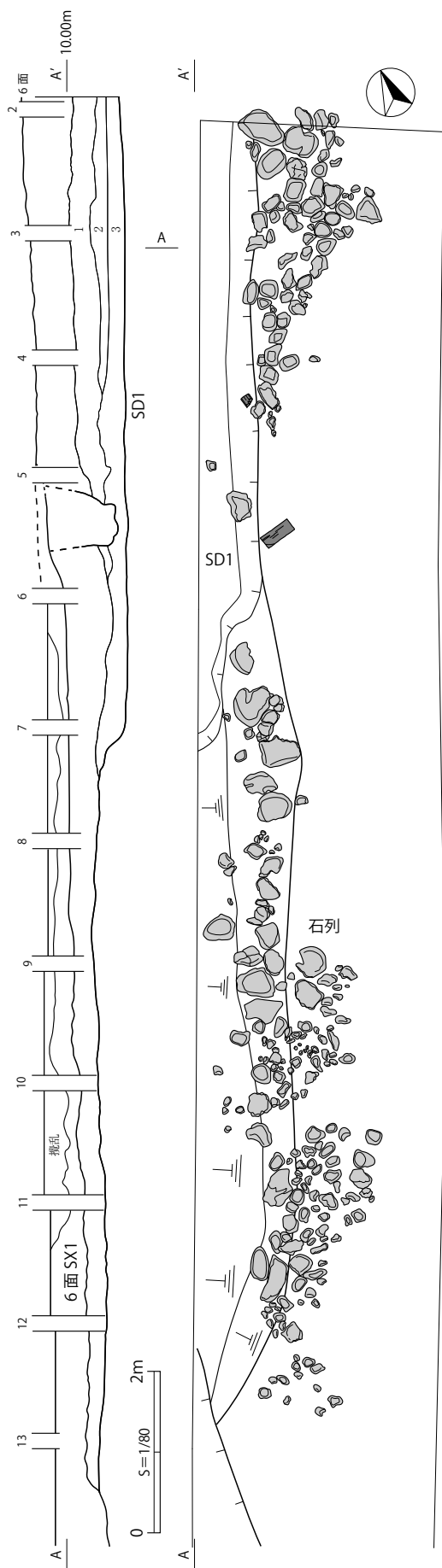
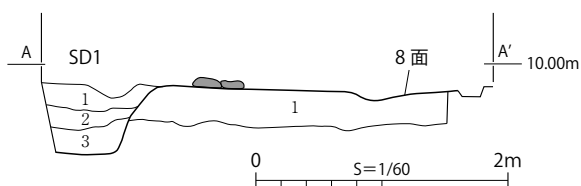


図 102 4区8面石列／SD1



4区8面 SD1 土層説明

1. 暗灰褐色粘質土 粒子状泥岩、砂粒、直径5cm以下の泥岩塊をやや多く含む。しまりやや弱。粘性やや強。
2. 暗灰色砂質土 粒子状泥岩、砂粒を多量、直径2cm以下の泥岩塊を少量含む。しまり弱。粘性やや強。
3. 灰黒色土 粒子状泥岩、砂粒、直径2～10cmの泥岩塊を多量、貝殻碎片を少量含む。しまり弱。粘性強。

4区8面整地層 土層説明

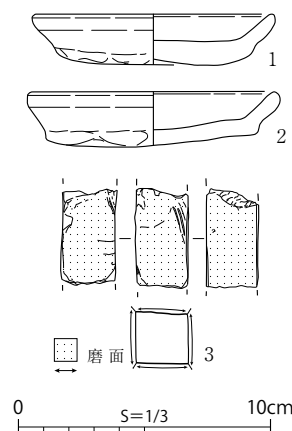
1. 灰褐色粘質土 粒子状泥岩、直径5～30cmの泥岩塊を主体とする。しまり、粘性やや強。

6区の遺構

柱穴

9口検出したが、建物を構成するものはないと考えている。埋土はいずれもⅡ層由来の暗灰褐色粘土質シルトの単層である。P1以外、遺物は出土していない。

P1 (図 101,105・PL30)



H71-72 で検出した。図 103 4区8面上出土遺物平面形は円形、断面形は階段状を呈するものと思われるが、西半部分を暗渠によって失っており、全容は不明である。規模は長径29cm、短径17cm、深さ28cm (標高9.29 m) を測る。遺物は、埋土中から弥生時代後期の土器細片2点が出土している。

P2 (図 101,105・PL30)

H70-71 で検出した。平面形は円形、断面形はU字状を呈する。規模は長径30cm、短径24cm、深さ56cm (標高8.95 m) を測る。

P3 (図 101,105・PL31)

H69-70 で検出した。平面形は円形、断面形はU字状を呈する。規模は長径21cm、短径14cm、深さ25cm (標高9.28 m) を測る。

P4 (図 101,105・PL31)

H68-69 で検出した。平面形は円形、断面形は箱状を呈する。規模は長径21cm、短径20cm、深さ21cm (標高9.34 m) を測る。

P5（図 101,105・PL.30）

H68-69 で検出した。平面形は円形、断面形はU字状を呈する。規模は長径 25cm、短径 21cm、深さ 20cm（標高 9.24 m）を測る。

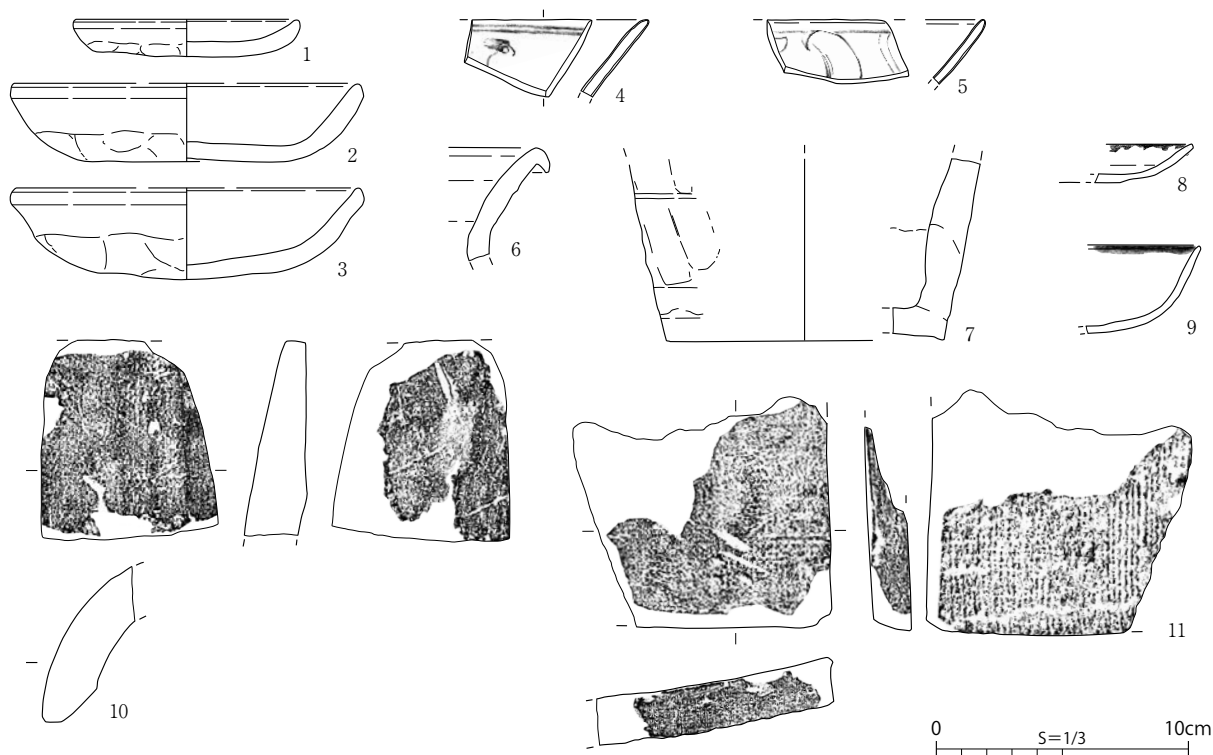


図 104 4区8面SD1出土遺物

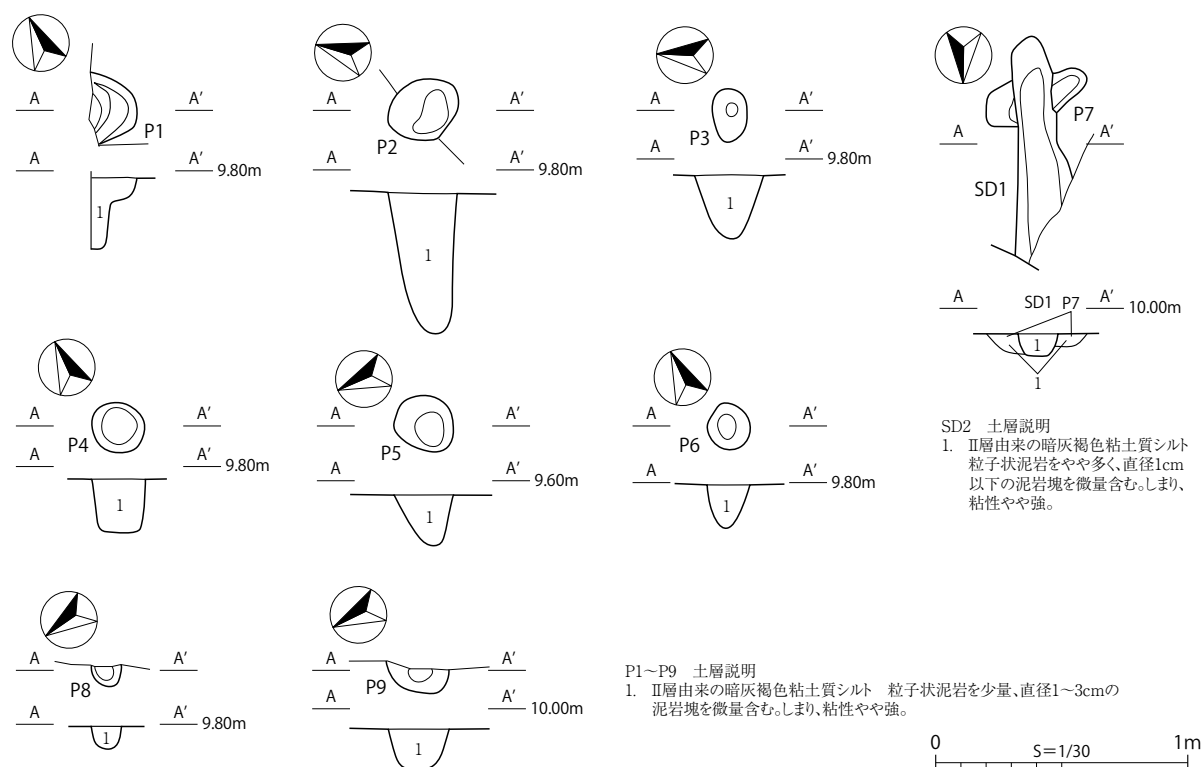


図 105 6区8面P／SD

P6 (図 101,105・PL.30)

H65-66 で検出した。平面形は円形、断面形はU字状を呈する。規模は長径 19cm、短径 17cm、深さ 17cm (標高 9.42 m) を測る。

P7 (図 101,105・PL.30)

H65 で検出した。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈する小溝状の遺構で、SD1 に切られる。全体に凹凸が多い歪な造作である。規模は長径 43cm、短径 18cm、深さ 8cm (標高 9.42 m) を測る。

P8 (図 101,105・PL.30)

H60-61 の調査区東壁際で検出した。平面形は円形、断面形は半円状を呈する。規模は長径 12cm、短径 9cm 以上、深さ 9cm (標高 9.49 m) を測る。

P9 (図 101,105・PL.30)

H56-57 の調査区東壁際で検出した。平面形は円形、断面形は半円状を呈する。規模は長径 25cm、短径 11cm 以上、深さ 16cm (標高 9.46 m) を測る。

SD1 (図 101,105・PL.31)

H64-65 で検出した溝で、P7 を切る。遺構の規模は、長さ 85cm 以上、幅最大 26cm、深さ最大 9cm 前後を測り、北に向かって (N-8°-W) 延伸する。断面形は台形状を呈する。全体に凹凸があり、造作は歪である。底面標高は南端で 9.46 m、西端で 9.49 m と、北に向かってわずかに下降する。埋土は灰黒色土の単層である。遺物は出土していない。

踏み抜き跡 (図 101・PL.30)

6 区 8 面上では、平面・断面とも不整形の落ち込みを多数、検出した。明確な人間の足跡は確認できなかったものの、踏み抜き痕のようなものや植物の根による攪拌痕、基盤層のシルトがめくれた痕などが確認できることから水田の可能性を考慮し、土壌の分析を(株)パレオ・ラボに依頼した。その結果、痕跡が密集する H57 付近では、水田の存在を十分に裏付ける量のプラント・オパールが土壌に含まれていることが判明した。6 区南端付近では、プラント・オパールの含有量は減少することから、水田域は小規模であった可能性が窺える。

4 区 8 面整地土からは、青白磁梅瓶、青磁皿か鉢、瀬戸焼 (入子・縁釉皿・皿)、常滑焼 (片口鉢・甕)、白かわらけ T 種、かわらけ T 種、動物骨 (イヌ・ウマ)、貝殻 (イボキサゴ・ダンベイキサゴ・バイガイ・アワビ類・アカニシ・シオフキ・ハマグリ・チョウセンハマグリ・ツメタガイ・マダカアワビ (加工)) などが出土している。

6 区 8 面基盤層中からは、かわらけのほかには弥生時代後期の土器 (高坏・壺・甕) が出土している。かわらけは図示できるものはないものの、小片約 90 点 (1250g) ほどが出土している。図 106 は 8 面基盤層から出土した弥生時代の土器である。1 は内面口縁部に竹管文で区画した縄文帯

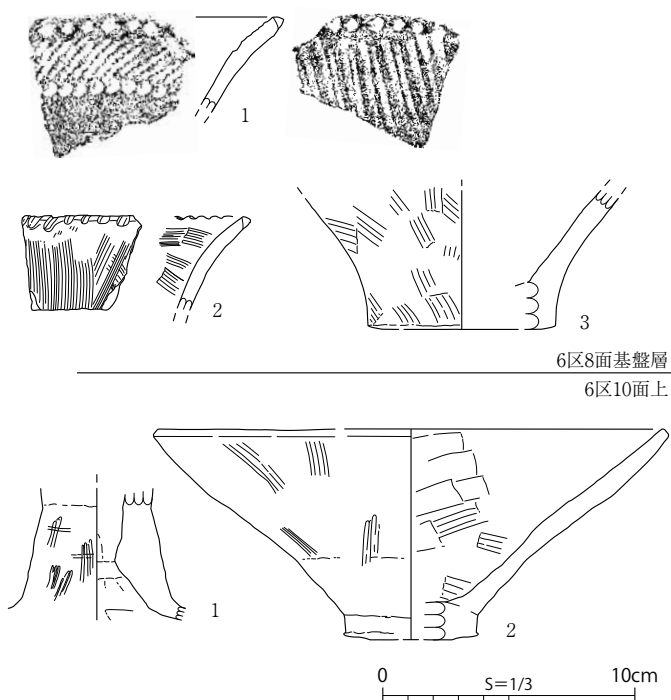


図 106 6 区 8 面基盤層／4-6 区 10 面上出土遺物

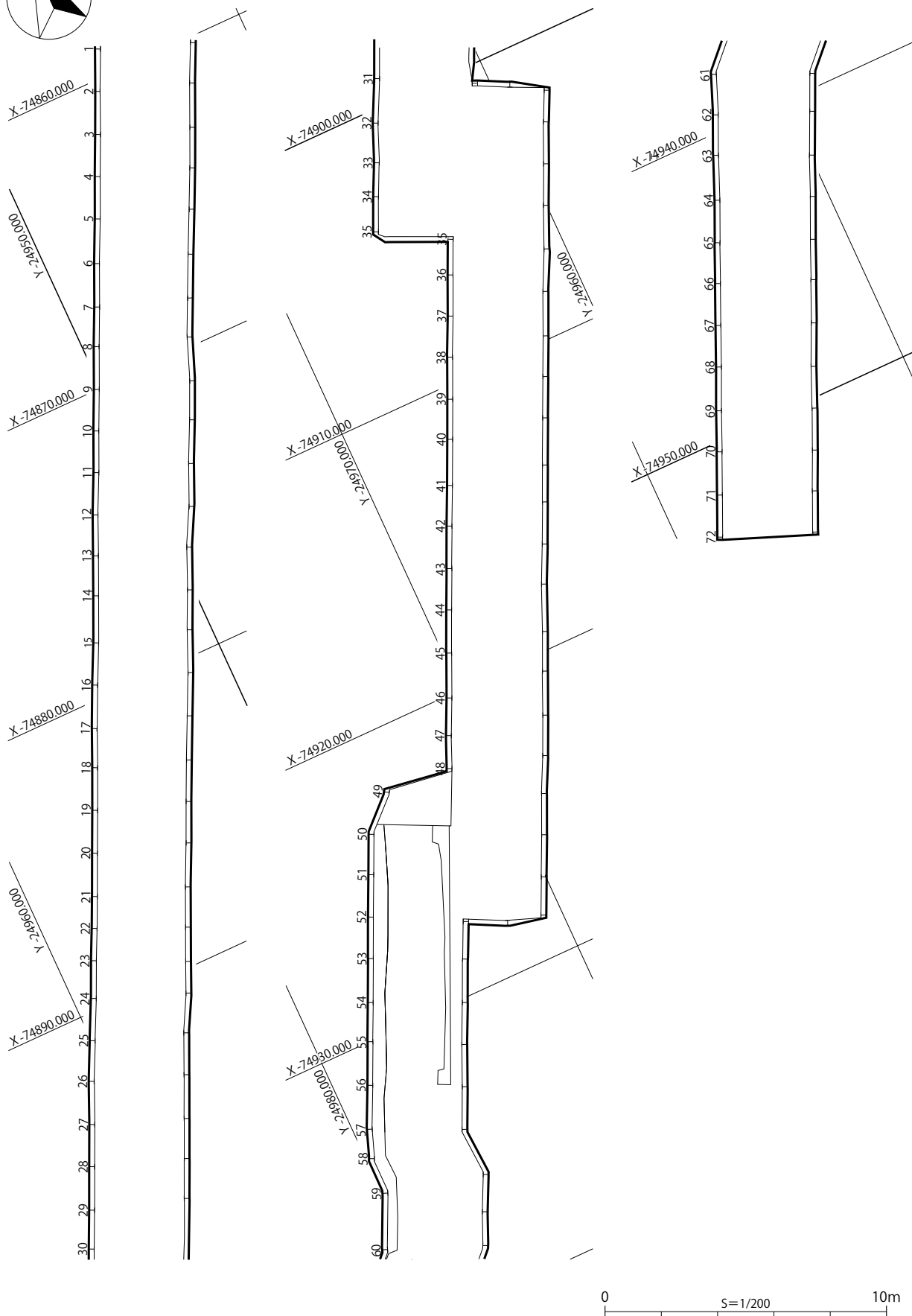
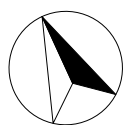
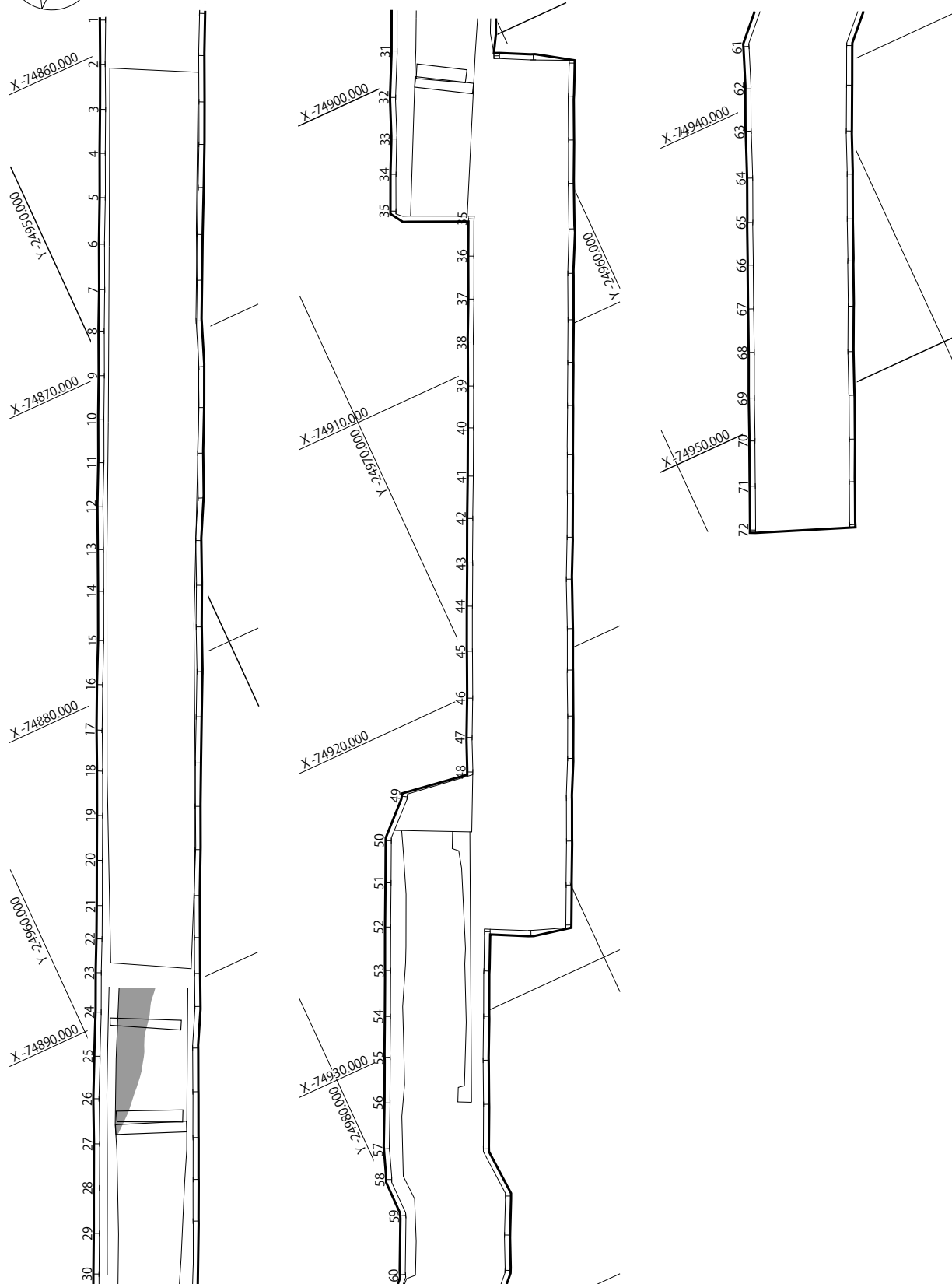
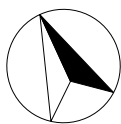


图 107 4-6 区 9 面全体图



■ 破碎泥岩による整地面

0 S=1/200 10m

図 108 4-6 区 10 面全体図

(単節 LR) を巡らせ、外面口縁端部にはキザミを入れる。外面の調整は目の粗いハケメか条痕文である。中期の甕と思われるが、内面の装飾からみて供献土器の可能性も考えられる。2 はハケ調整甕で、口縁端部にはキザミを入れる。3 は壺である。細身の形状を呈し、中期の製品と思われる。外底面には格子状の編物痕がみられる。

9 面 (図 107・PL.31)

6 区で検出したⅣ層上を 9 面とした。標高は、6 区北端で 9.45 m、南端で 9.5 m 前後と、ほぼ水平である。面上には 7 面のように鉄分が湧出し、硬化面が散在する。遺構はみられない。9 面基盤層からは、かわらけ (T 種・R 種)、弥生時代の土器 (壺・甕) がわずかに出土した。人的活動の痕跡は確認できないが、自然化学分析では 7・8 面同様、水田の存在か、イネ葉身が多く堆積する環境であったとの見解が示されている。

10 面 (図 106,108・表 15・PL.31,32)

4 区 H23 以南で検出した直径 5～30cm の泥岩塊を盛土した整地層である。整地層は中世以前の自然流路上に設けており、H27 付近で調査区外に延伸する。これより 6 区にかけては中世基盤層である灰黒色粘質土 (V 層) が同じ高さで確認でき、前述の自然流路もこの土層を切り込んでいる。泥岩整地層は H23 以北では暗渠の影響もあって平面的な検出ができなかっただけでなく、調査区西壁でも確認できないため、8 面造成時に失われたか、範囲を限って泥岩による整地を行った可能性がある。整地面の標高は 9.5 m 前後、V 層の標高は 4 区 H22 付近で 9.5 m、6 区北端で 9.3 m、南端で 9.05 m と、南に向かって緩やかに下降する。面上や層中からは弥生時代中～後期の土器 (壺・甕・供献土器) が出土しており、当該期の堆積土であることがわかる。図 106 は 6 区 10 面上で出土した弥生時代の土器である。1 は高坏か器台の脚部である。外面は細かいヘラミガキを施した後、赤彩する。内面調整は、ナデとヘラナデである。2 は鉢である。外面はハケメ調整の後、ヘラミガキを施す。

4 区 10 面上では、青磁坏、瀬戸焼 (皿・碗)、銭貨、五輪塔水輪、礪白が、泥岩中からはかわらけ T 種・R 種小片各 1 点が出土しているが、図示できるものはない。

中世以前の自然流路

4 区南側調査で新旧 2 時期 (SR1・SR2) の自然流路を検出した。

SR1 (図 109-111・表 20・PL.32)

4 区南 H23-30 で検出した方位 N-32.6°-E を指す自然流路で、10 面の泥岩整地層造成に際して埋めたと考えている。上層に堆積する腐植層と灰色粘土層の上下で断面形が異なっており、浚渫や掘り直しを行った可能性がある。これより下層の埋土は、灰色シルト・暗灰色粘質土・腐植などが水平堆積する。腐植層は数枚の薄層が確認でき、断続的に埋没しながら流れていたことがわかる。埋土からは田下駄が 1 点、出土したのみであり、时期的な詳細は不明である。図 111-1 は田下駄である。割材を小判形に加工した製品で、歯はない。鼻緒孔から先端にかけて欠失する。寸法は長さ 17cm 以上、幅 8cm、厚さ 0.8cm で、柂目取りである。後ろの鼻緒孔は側縁まで開放しており、下駄底を通した紐で足と固定する構造と考えられる。

SR2 (図 109,110・PL.32)

流路 1 の東側で検出した。確認できた覆土は灰色シルト層の単層であり、洪水で短時間のうちに埋没したか人為的に埋め戻したか両方の可能性がある。遺物は出土していない。

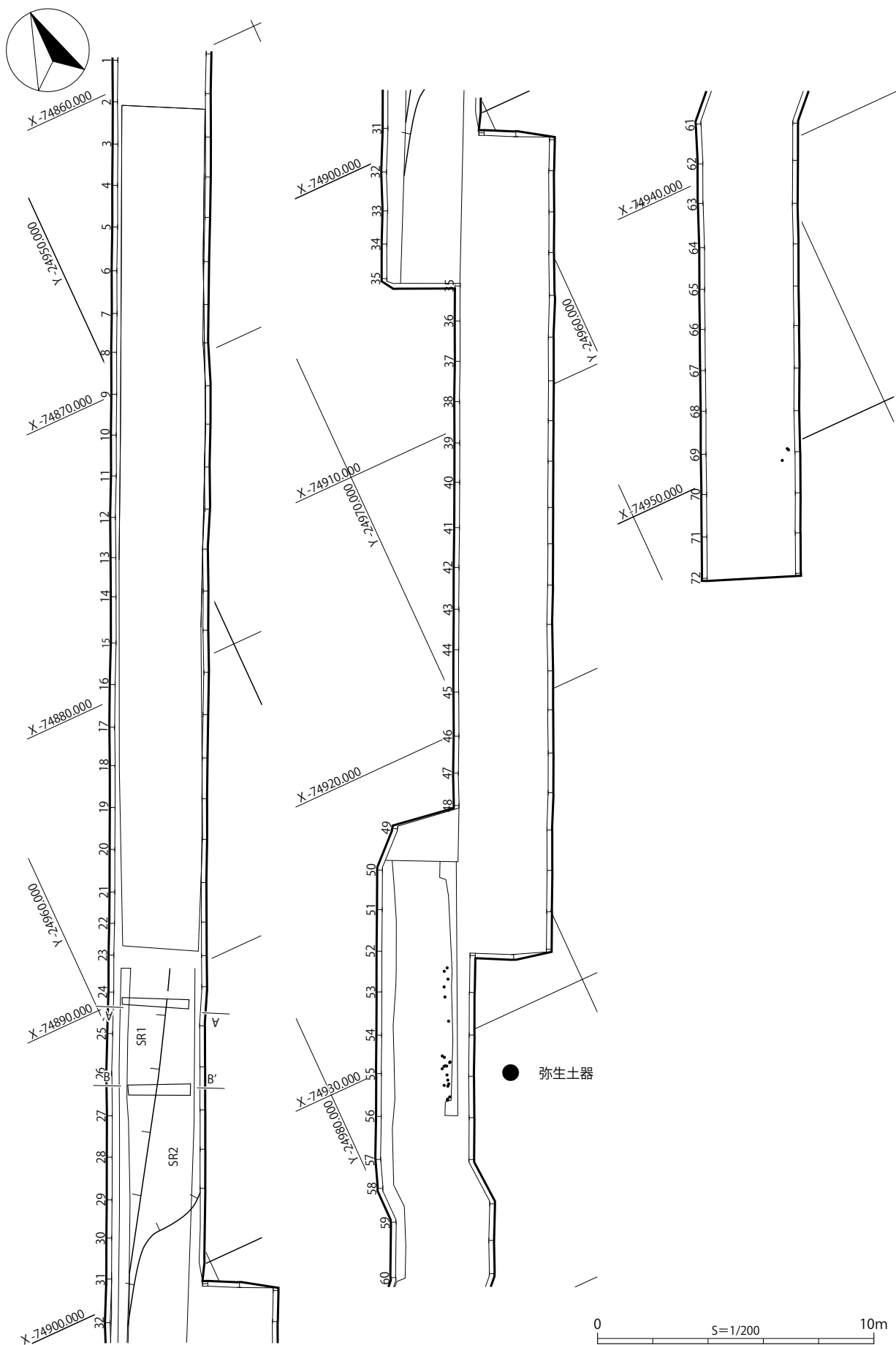


図 109 4-6 区 10 面下全体図 (中世以前の流路／弥生土器出土位置)

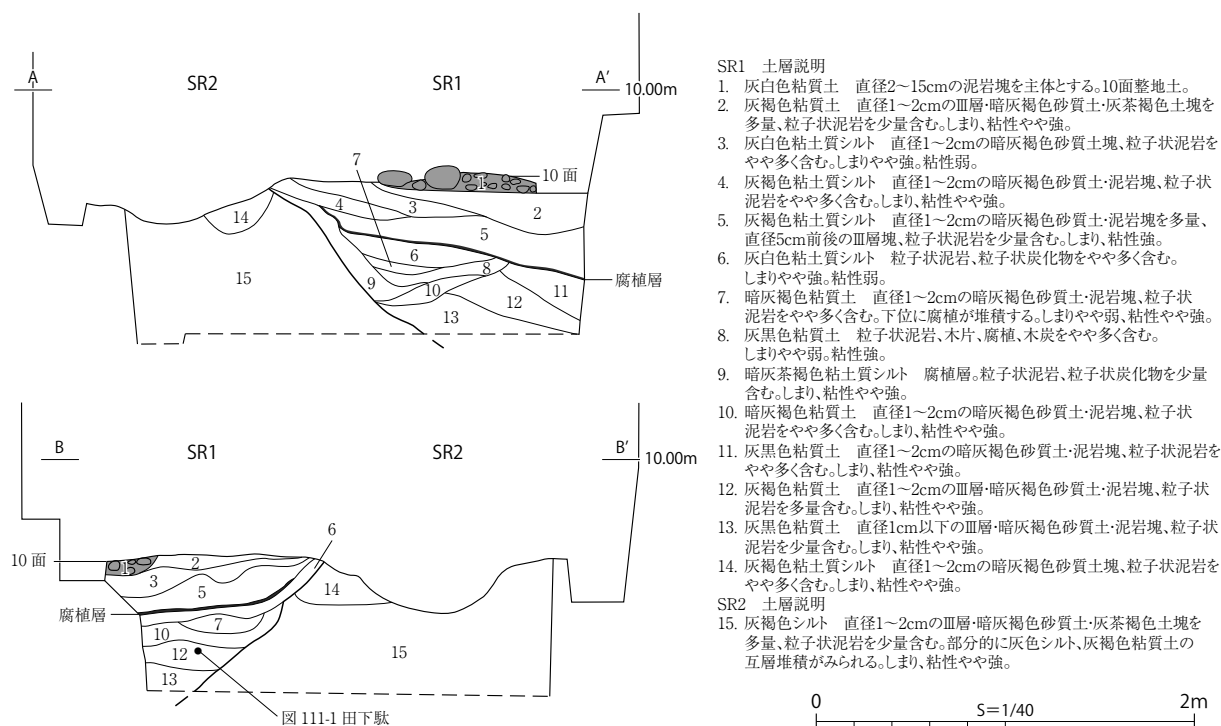


図 110 4区 10面下 SR1・SR2 土層図

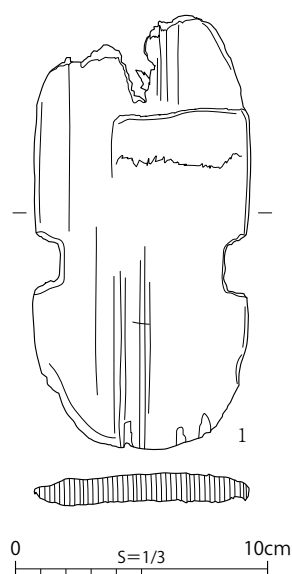


図 111 4区 10面下 SR1 出土遺物

第5章 大倉幕府周辺遺跡出土 骨角器・動物遺体について

中 村 若 枝

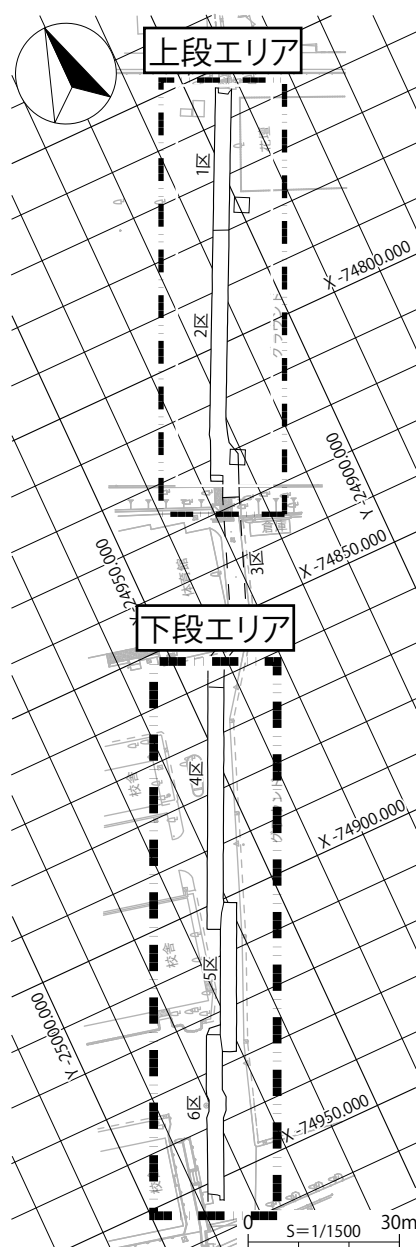
I はじめに

大倉幕府周辺遺跡（雪ノ下三丁目660番3他9筆、660番3先地点）の調査では、骨角器をはじめとし、ウマ・ウシなどの大型獣やイルカ類、魚類・鳥類・貝類など、多彩な内容の動物遺体が検出された。その量は、コンテナに隙間なく入れると14箱分あった。

本調査は、大正時代の構築と推測する鎌倉石を用いて埋設した暗渠の改修工事に伴い行われたものであることは、先に記されている通りである。そのため調査区は流路に沿い6区画に分け設定された。中間に2mを測る段差があり、これを境に生活面の様相が異なっていると推定されたため、北側を上段エリア、南側を下段エリアに分け、動物遺体もそれに準じて分析を行うこととした。上段エリアは1・2区、下段エリアは4～6区を指す（第1図参照）。この内、段差部分にかかる3区は、暗渠により大半が壊されていたことが確認されたため、分析対象サンプルに加えてはいない。本遺跡の時期は、13世紀初頭から15世紀後半に相当するということであった。

泥岩や沖積土により整地された面は、上段エリアでは13面、下段エリアでは10面確認された。全体に遺構が少なく、動物遺体も集中している箇所がいくつかみられたが、遺構から検出されたものはごくわずかであった。多くは整地土とした「運び込んだ泥岩を突き固め整地した層」から出土している。検出された骨の中には、5～6cm大に小さくカットした物が目についた。量としては、全体の10%程度は短くカットされた骨であった。解体に伴うカット痕にしては細かく、骨端部も切断されているものが多く、同定は困難であった。その要因はわからないが、解体時の痕跡ではなく、整地時に邪魔にならないよう細かくカットし骨を混和材として用いたのではないだろうかと推定してみたが、それを裏付ける事象は現時点では把握できなかった。

今回の調査区域は、暗渠の流路に限定されており、狭く長い調査区域という限られた状況の中で、分析結果から何かを推定することはかなり困難であった。一方で、安易な評価と推測は避けなければならない状況であることも確かである。この点に留意し、現段階ではどのようなものが出土したのかという事を中心に見ていきたいと考えている。



第1図 調査区全体図

Ⅱ 検出された動物遺体の概要

今回の調査では、貝類だけまとまって取り上げたサンプルがコンテナに 6 箱分あったため、貝類と魚・鳥。哺乳類に分け表を作成した。

1 貝類

貝類は分析対象総個体数 641 点を数え、16 科 30 種が検出された。30 種の内 70% 近くを巻貝が占めている。種類は多いが、検出数 1 点だけという種も 10 種あった。

最も多かったのはダンベイキサゴで、155 点 (24.2%) を占めた。相模湾はダンベイキサゴが多く、ほぼダンベイキサゴだけという事例もある (中村 2023)。次いで多いのはハマグリで、最小個体数 120 点 (18.7%) で、以下アカニシ 115 点 (17.9%)、イボキサゴ 87 点 (13.6%) と続く。二桁の出現率を占めるものは、この 4 種だけである。

エリア別の様相をみてみよう。上段は分析対象数個体数 363 点中アカニシが 80 点 (22%) を占め最も多い。次いで多いのはイボキサゴで 71 点 (19.6%)、ダンベイキサゴ 68 点 (18.2%) と上位 3 種の占有率は大きな差がない状態であった。これにハマグリ 47 点 (12.9%) が加わる。

下段は削平により上部が失われているため、残存していたのは 4 面からである。分析対象数個体数 278 点中、ダンベイキサゴが 84 点 (30.2%) 占め最も多い。次いで多いのはハマグリ 73 点 (26.3%) で、アカニシは 32 点 (12.6%) であった。これは、個数より算出された数値であるが、肉量という点ではアカニシが首位を占めていることは、言うまでもない。

また、アワビ類に関しては、貝殻を加熱容器として使用したり、螺鈿細工の素材などに利用した痕跡がみられ、残存する割合は限られてくる。職人の技の領域は詳らかにされていない部分が多いが、螺鈿細工の素材となる「うす貝」づくりも、例外ではないだろう。オニ皮をはずし真珠層部分だけにし、薄く磨ぎ上げる前段階と推定される長さ 4 ～ 5cm、巾 1cm 程の細片にカットした状態のものが、採集されたサンプル中にも含まれていた。あるいは、貝殻の平坦な部分を残した際の切り落としたものかもしれない。アワビの貝殻破片に限ったことではないが、様々な状況を経た結果残存していた個々の遺物である。今後もより一層注目していかなくてはならないだろう。

第 1 表 出土貝類種名表

軟体動物門 Phylum Mollusca	腹足綱 Class Gastropoda	原始腹足目 Order Archaeogastropoda	ミミガイ科	マダカアワビ
			Family Haliotidae	<i>Haliotis madaka</i>
				メカイアワビ
				<i>Haliotis gigantea</i>
				アワビ類
				<i>Haliotidae sp.</i>
			クボガイ科	クボガイ
			Family Tegulae	<i>Tegula rugata</i>
				クマノコガイ
				<i>Tegula xanthostigma</i>
				バテイラ
				<i>Omphalius pfeifferi pfeifferi</i>
				コンダカガンガラ
				<i>Omphalius rusticus</i>
			ニシキウスガイ科	イシダタミ
			Family Trochidae	<i>Monodonta confusa</i>
				イボキサゴ
				<i>Umbonium moniliferum</i>
				ダムベイキサゴ
				<i>Umbonium giganteum</i>
			リュウテン科	サザエ
			Family Turbinidae	<i>Turbo sazae</i>
				スガイ
				<i>Lunella coreensis</i>
		中腹足目 Order Mesogastropoda	カワニナ科	カワニナ
			Family leuroceridae coidea	<i>Semisulcospira libertina</i>
			タマガイ科	ツメタガイ
			Family Naticidae	<i>Glossaulax didyma</i>
				ホソヤツメタガイ
				<i>GGlossaulax didyma hosoyai</i>
			タカラガイ科	ハナマルユキ
			Family Cypraeidae	<i>Monetaria caputserpentis</i>
			フジツガイ科	ボウシュウボラ
			Family Ranellidae	<i>Charonia lampas sauliae</i>
			トウカムリ科	ウラシマガイ
			Family Eukarya - Opisthokonta	<i>Semicassis persimilis</i>
		新腹足目 Order Neogastropoda	アッキガイ科	アカニシ
			Family Muricidae	<i>Rapana venosa</i>
				レイシ
				<i>Reishia bronni</i>
			ムシロガイ科	アラムシロ
			Family Nassarius festivus	<i>Nassarius • festivus</i>
			エゾバイ科	バイ
			Family Buccinidae	<i>Babylonia japonica</i>
	二枚貝綱 Class Pelecypoda	フネガイ目 Order Mytiloida	フネガイ科	サルボウ
			Family Arcidae	<i>Anadara subcrenata</i>
		イガイ目 Order Mytilida	イガイ科	イガイ
			Family Mytilidae	<i>Mytilus coruscus</i>
		カキ目 Order Ostreida	イタボガキ科	マガキ
			Family Ostерidae	<i>Crassostrea gigas</i>
				イタボガキ
				<i>Ostrea denselamellosa</i>
		マルスダレガイ目 Order Veneroida	バカガイ科	シオフキ
			Family Mactridae	<i>Mactra veneriformis</i>
			マルスダレガイ科	アサリ
			Family Veneridae	<i>Ruditapes philippinarum</i>
				ハマグリ
				<i>Meretorx lusoria</i>
				チョウセンハマグリ
				<i>Meretorx lamarckii</i>
				オキシジミ
				<i>Cyclina sinensis</i>

第2-1表 上段貝類出土一覧表（上段-1）

面	区	遺構	N0	貝 類
1面	2区南	整地土	1509	アカニシ(3)
4面	2区南	整地土	1502	アカニシ(1)
5面	2区南	SD1	1542	レイシ(1)
			519	ウラシマガイ(1)
		整地土	1599	アカニシ(3)
6面	2区南	SX1	1510	バイ(1)
		整地土	1501	サザエ(1), アカニシ(2)
7面	2区南	SX1	1515	ダンベイキサゴ(1), バイ(1), イガイ(R1)
		整地土	1506	クボガイ(1), イボキサゴ(7), ダンベイキサゴ(2), スガイ(1), アカニシ(1), バイ(1)
			1507	アカニシ(1), レイシ(1)
			1514	バテイラ(1), サザエ(蓋1)
			1519	ダンベイキサゴ(1), スガイ(1)
8面	2区南	SK1	1499	アワビ類(1), クボガイ(1), イボキサゴ(1), サザエ(1), スガイ(2), アカニシ(3), ハマグリ(L6・R4)
		SX1	1503	イボキサゴ(4), ダンベイキサゴ(1), サザエ(1)
			1504	イボキサゴ(8), サザエ(蓋2), スガイ(5), ツメタガイ(1), アカニシ(4), サルボウ(R1)
			1505	イボキサゴ(14), ダンベイキサゴ(3), スガイ(4), アカニシ(4), バイ(1)
			1508	アワビ類(1), イボキサゴ(9), ダンベイキサゴ(3), スガイ(1), アカニシ(3)
			1594	イボキサゴ(4), ダンベイキサゴ(1), クボガイ(1), イボキサゴ(1),
			1597	イボキサゴ(2), ダンベイキサゴ(3), ハマグリ(L1)
		整地土	145	ダンベイキサゴ(1), ハマグリ(R1)
			150	ダンベイキサゴ(1)
			156	サザエ(1)
	1・2区	整地土	1500	アワビ類(1), イボキサゴ(4), ダンベイキサゴ(3), スガイ(5), アカニシ(1)
			1516	サザエ(蓋1)
9面	1・2区	整地土	1511	イボキサゴ(4), ダンベイキサゴ(1), スガイ(1), ハマグリ(R1)
			1608	クボガイ(1), イボキサゴ(2), ダンベイキサゴ(4), スガイ(1), アカニシ(3)
			1611	イボキサゴ(1), アカニシ(2), ハマグリ(L1・R1)
			1617	バテイラ(1), イボキサゴ(1)
	2区南	整地土	1612	サザエ(1), スガイ(1), バイ(1)
10面	1・2区	SK1	346	メガイアワビ(1), サザエ(1), アカニシ(1), イガイ(R1)
			723	アカニシ(3)
		整地土	132	アカニシ(3), サザエ(1), ハマグリ(L4), チョウセンハマグリ(L1・R1)
			137	アカニシ(1)
			158	アカニシ(1), ハマグリ(L2・R1)
			170	ダンベイキサゴ(1), サザエ(1), アカニシ(2), サルボウ(R1)
			172	ダンベイキサゴ(2), アカニシ(2), ハマグリ(R1)
			174	ダンベイキサゴ(1), サザエ(蓋1), レイシ(1)
			175	アワビ類(1), サザエ(1)
			176	ダンベイキサゴ(3)
			177	イボキサゴ(1), ハマグリ(R1)
			179	アカニシ(1)
			204	アワビ類(1), サザエ(1)
			355	アカニシ(1)
			356	アカニシ(2)
			726	カワニナ(1)
			205	ハマグリ(R1)
			206	ハマグリ(L1)
			207	アカニシ(3), ハマグリ(L3・R1)
			208	ダンベイキサゴ(1), サザエ(1), スガイ(2), アカニシ(4)
			209	アカニシ(2)
			210	アワビ類(3), クボガイ(1), イボキサゴ(1), ダンベイキサゴ(1) アカニシ(3), アサリ(L1), ハマグリ(L9・R7), チョウセンハマグリ(L1・R1)
			212	アカニシ(1)
			213	ダンベイキサゴ(2)
			214	バイ(1), ハマグリ(L3・R1)
			273	ボウシュウボラ(1)
			274	アワビ類(1) アカニシ(1), ハマグリ(R1), チョウセンハマグリ(L1・R1)

第 2-2 表 上段貝類出土一覧表（上段 -2）

面	区	遺構	NO	貝 類
10面	1・2区	整地土	275	ハマグリ (L1)
			329	ハマグリ (R1)
			415	アカニシ (1), ハマグリ (R1)
			416	アカニシ (1)
			417	ダンベイキサゴ (1)
			418	ダンベイキサゴ (1), アカニシ (3), マガキbR1),
			465	アカニシ (1)
			467	アカニシ (2), サザエ (2)
			468	クボガイ (1), イボキサゴ (1), アカニシ (1), イガイ (L1)
			471	イボキサゴ (1), ダンベイキサゴ (1), ハマグリ (L1)
			727	アカニシ (3)
	2区南	整地土	1615	イボキサゴ (1)
11面	1・2区	整地土	236	マダカアワビ (1), ダンベイキサゴ (1), アカニシ (1), ハマグリ (L1・R1)
			237	メカイアワビ (1), イボキサゴ (6), ダンベイキサゴ (2), ハマグリ (L1・R1)
			238	アカニシ (1), ハマグリ (R1)
			239	ダンベイキサゴ (1), アカニシ (2)
			240	アワビ類 (1), イボキサゴ (1), ダンベイキサゴ (1)
			241	アカニシ (1)
			243	ハマグリ (L1)
			245	ダンベイキサゴ (2), レイシ (1)
			246	クボガイ (1)
			248	サザエ (1),
			249	イボキサゴ (1)
			250	ダンベイキサゴ (4), ハマグリ (L1・R1)
			383	ハマグリ (L1)
			429	ダンベイキサゴ (1), アカニシ (1), レイシ (1)
			430	ダンベイキサゴ (1), ハナマルユキ (1), レイシ (1)
			432	ダンベイキサゴ (1), サザエ (1)
			436	ハマグリ (R2)
			439	ダンベイキサゴ (4)
			440	バテイラ (1), ダンベイキサゴ (1)
			462	コシダカガンガラ (1), ダンベイキサゴ (1)
			463	ハマグリ (L1)
			464	アカニシ (1)
			465	アカニシ (1)
			466	ダンベイキサゴ (1), ホソヤツメタ (1), アカニシ (3), サルボウ (L1)
			470	ダンベイキサゴ (1), アカニシ (1)
			523	ダンベイキサゴ (1), イシダタミ (1)
			1595	ダンベイキサゴ (1)
			1602	ダンベイキサゴ (1)
			1607	アカニシ (1)
			1614	ダンベイキサゴ (1), アカニシ (2)
			1609	ハマグリ (R1)
12面	1・2区	SD1	438	イボキサゴ (1), サザエ (1)
		整地土	1603	レイシ (1)
			1605	ダンベイキサゴ (3), チョウセンハマグリ (L1)
			1610	サザエ (蓋1), スガイ (2)
			1613	バイ (1), ハマグリ (L1)
			1616	バテイラ (1)
13面	1・2区	SX1	1604	クボガイ (1), コシダカガンガラ (1), アカニシ (1), ハマグリ (L1)

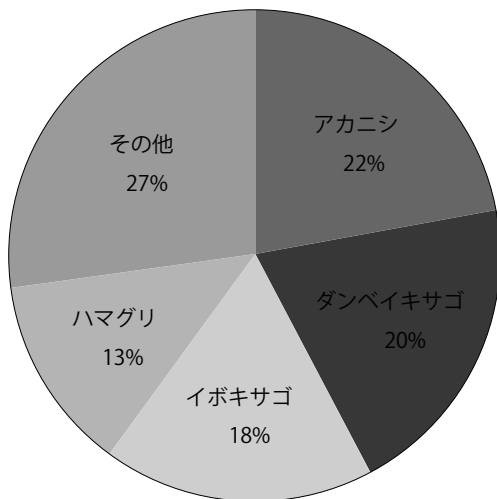
第3-1表 下段貝類出土一覧表(下段-1)

面	区	遺構	N0	貝 類
4面	5区	整地土	1274	バイ(2)
5面	5区	5面上	1681	サザエ(1)
		整地土	1351	イボキサゴ(4), ダンベイキサゴ(3), サザエ(1), アカニシ(8), ハマグリ(L4・R7)
			1346	ダンベイキサゴ(4)
			1344	アカニシ(1), ハマグリ(L1)
			1178	ダンベイキサゴ(1), サザエ(1), ハマグリ(L1)
			1179	ダンベイキサゴ(1), サザエ(1), ハマグリ(L1・R2)
			1180	イボキサゴ(2)
			1196	アワビ類(2), サザエ(1), アカニシ(1), シオフキ(L1), ハマグリ(L1), チョウセンハマグリ(R1)
			1198	イタボガキ(R1)
			1199	ダンベイキサゴ(4), レイシ(1), イタボガキ(L1)ハマグリ(L2・R6), チョウセンハマグリ(L1)
			1200	ダンベイキサゴ(3), ハマグリ(L1・R1)
			1201	アカニシ(1), アサリ(L1)
			1202	シオフキ(L1), ハマグリ(L2), チョウセンハマグリ(L1)
			1203	ダンベイキサゴ(2), アカニシ(1), ハマグリ(L2)
			1228	ダンベイキサゴ(1), サザエ(1), ハマグリ(L1・R1)
			1229	ダンベイキサゴ(4), サザエ(1), ハマグリ(R1)
			1233	ダンベイキサゴ(2), アサリ(L1), ハマグリ(R1)
			1252	クボガイ(1), クマノコガイ(1), イボキサゴ(1), ダンベイキサゴ(1), シオフキ(L1), ハマグリ(L1)
			1274	バイ(2)
			1340	イボキサゴ(2), ハマグリ(R1)
			1347	クボガイ(1), イボキサゴ(1), ダンベイキサゴ(6), サザエ(2), アカニシ(1), ハマグリ(L2)
			1600	ダンベイキサゴ(1), バイ(1)
			1677	イボキサゴ(1), ダンベイキサゴ(5), ホソヤツメタ(1), アカニシ(3), バイ(1)
6面	4区	6面SX1	1025	クボガイ(1), ダンベイキサゴ(3), レイシガイ(1), マガキ(L1), ハマグリ(L3), チョウセンハマグリ(L2・R1)
			1026	ダンベイキサゴ(2), ハマグリ(L1・R4), チョウセンハマグリ(L1・R1)
			1030	ハマグリ(L1・R1)
			1032	ダンベイキサゴ(1), ハマグリ(L1・R1)
			1034	クボガイ(1), イボキサゴ(4), ダンベイキサゴ(4), ハマグリ(L4)
			1035	スガイ(1), ハマグリ(R2)
			1039	クボガイ(4), スガイ(1), レイシガイ(1), ハマグリ(L2・R1)
			1040	ダンベイキサゴ(1), ハマグリ(L1・R1)
			1041	ダンベイキサゴ(1), ハマグリ(L1・R1),
			1042	レイシガイ(1)
			1044	ダンベイキサゴ(2), ハマグリ(L1)
			1199	ダンベイキサゴ(4), レイシ(1), アサリ(1), ハマグリ(L2・R6), チョウセンハマグリ(L1)
			1233	ダンベイキサゴ(2), アサリ(R1), ハマグリ(R1)
			1252	クボガイ(1), クマノコガイ(1), キサゴ(1), ダンベイキサゴ(1), シオフキ(L1), ハマグリ(L1)
		SX2	1202	シオフキ(L1), ハマグリ(L2・R6), チョウセンハマグリ(L1)
		整地土	992	ハマグリ(R2)
			996	ハマグリ(L1)
			1179	ダンベイキサゴ(1), サザエ(1), ハマグリ(L2・R2)
6b面	5区	SKP3	1491	アカニシ(1)
			1483	ダンベイキサゴ(1)
			1484	ハマグリ(L1・R1)
			1488	ハマグリ(L1・R1)
			1489	アワビ類(1)
		SKP4	1487	ダンベイキサゴ(3), ハマグリ(L1), チョウセンハマグリ(L1)
			1490	ダンベイキサゴ(4), ハマグリ(R1), チョウセンハマグリ(R1)
		Pit71	1675	クボガイ(1)
			1676	イボキサゴ(2), ダンベイキサゴ(1), アカニシ(1)tハマグリ(L3・R2)
8面	4区	8面上	988	ダンベイキサゴ(1),
		SD1	1028	アワビ類(1), ハマグリ(L2・R2), チョウセンハマグリ(L1)

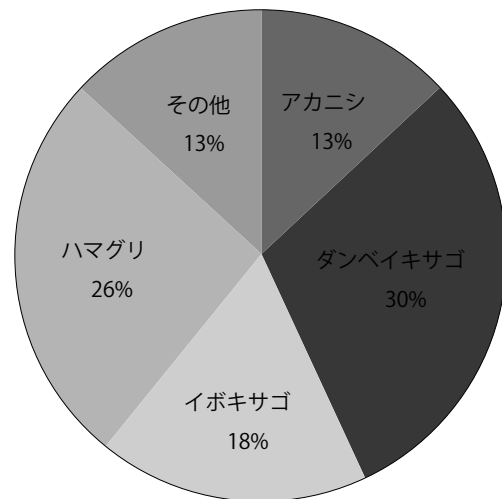
第 3-2 表 下段貝類出土一覧表（下段 -2）

面	区	遺構	NO	貝 類
8面	4区	SD1	1043	ダンベイキサゴ (1)
			1155	ダンベイキサゴ (3), シオフキ (L1)
			1178	ダンベイキサゴ (1), サザエ (1), ハマグリ (L1)
			1196	アワビ類 (3), ダンベイキサゴ (2), サザエ (1), アカニシ (1), シオフキ (L1), ハマグリ (L1・R1), チョウセンハマグリ (R1)
			1198	イタボガキ (R1)
			1201	アカニシ (1), アサリ (L1)
			1206	ダンベイキサゴ (2), サザエ (2), ハマグリ (R1)
			1228	マダカアワビ (1), ダンベイキサゴ (1), サザエ (1), ハマグリ (L2・R1)
			1229	ダンベイキサゴ (4), サザエ (1), ハマグリ (L1)
		整地土	1346	アワビ類 (1), アカニシ (1), パイ (1)
			1154	ダンベイキサゴ (2), ハマグリ (L9・R4)
			1156	マダカアワビ (加工)
			1340	イボキサゴ (2), ハマグリ (L1)
			1341	アカニシ (1), アサリ (L1)
			1353	ツメタガイ (1)
			1355	ダンベイキサゴ (1), パイ (2), ハマグリ (R1)

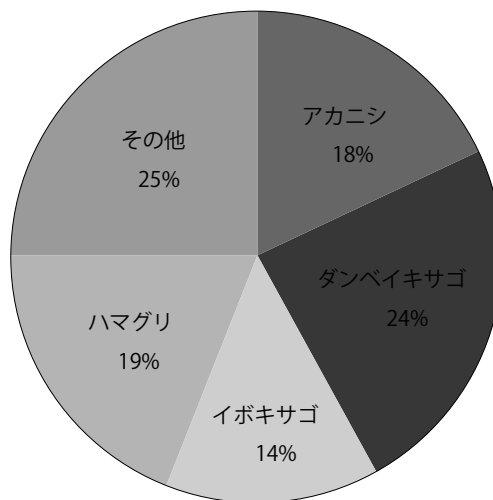
上 段 N = 363



下 段 N = 277



総 計 N = 641



第 2 図 エリア別貝類組成グラフ

第4表 貝類集計表

種 名	上段			下段			総計			
	個数	最小 個体数	%	個数	最小 個体数	%	計	%		
マダカアワビ				1	1	0.4%	1	0.2%		
メカイアワビ	1	1	0.3%				1	0.2%		
アワビ類	13	13	3.6%	6	6	2.2%	19	3.0%		
クボガイ	8	8	2.2%	4	4	1.4%	12	1.9%		
クマノコガイ				2	2	0.7%	2	0.3%		
バテイラ	5	5	1.4%	3	3	1.1%	8	1.2%		
コシダカガンガラ	2	2	0.6%				2	0.3%		
イシダタミ	1	1	0.3%				1	0.2%		
イボキサゴ	66	66	18.2%	21	21	7.6%	87	13.6%		
ダンバイキサゴ	71	71	19.6%	84	84	30.2%	155	24.2%		
サザエ	13(蓋)7	20	5.5%	13(蓋)1	14	5.0%	34	5.3%		
スガイ	24	24	6.6%	1	1	0.4%	25	3.9%		
カワニナ	1	1	0.3%				1	0.2%		
ツメタガイ				1	1	0.4%	1	0.2%		
ホソヤツメタ	2	2	0.6%	1	1	0.4%	3	0.5%		
ハナマルユキ	1	1	0.3%				1	0.2%		
ボウシュウボラ	1	1	0.3%				1	0.2%		
ウラシマガイ	1	1	0.3%				1	0.2%		
アカニシ	80	80	22.0%	35	35	12.6%	115	17.9%		
レイシ	6	6	1.7%	4	4	1.4%	10	1.6%		
アラムシロ				1	1	0.4%	1	0.2%		
バイ	5	5	1.4%	7	7	2.5%	12	1.9%		
	L	R		L	R					
サルボウ	1	2	2	0.6%				2	0.3%	
イガイ	1	1	1	0.3%	1	1	0.4%	2	0.3%	
マガキ		1	1	0.3%				1	0.2%	
イタボガキ				1	2	2	0.7%	2	0.3%	
シオフキ				4	2	4	1.4%	4	0.6%	
アサリ	1		1	0.3%	4	2	4	1.4%	5	0.8%
ハマグリ	47	33	47	12.9%	73	58	73	26.3%	120	18.7%
チョウセンハマグリ	3	3	0.8%	8	1	8	2.9%	11	1.7%	
オキシジミ				1	1	0.4%	1	0.2%		
計		363	100.0%		278	100.0%	641	100.0%		

2 魚類・鳥類・哺乳類

(1) 魚類

魚類は 119 点（部位の数）検出され、4 科 5 種確認された。ここでは同時に採取された種であっても、同一個体であることを確認することは困難であったため、最小個体数ではなく部位数でその概要を検討することとした。

魚類は、上段エリアから出土したのはマダイだけで、総数 119 点中 98% を占める 116 点は、下段エリアから出土するという顕著な傾向がみられた。最も多かったのはマカジキ科で、部位数 51 点で全体の 43% を占めていた。マカジキ科は部位としては椎骨が 42 点と多かったが、破損しやすく、完存するものはほとんどなかった。次に多かった部位は、下顎の吻端部である。吻端部の形状からしてクロカジキ (*Makaira mazara*) と推定される。当初鰐を思わせる形状に何かに使用したのではないかという事も考慮してみたが、使用痕は認められなかった。咬合面には細かい顆粒状の歯で埋め尽くされ、サンドペーパーのように使用されるという記事を読んだ記憶があるが、本遺跡の標本の中には、明確な使用痕は観察されなかった。下顎の吻端部は、5 区の 4 面・5 面だけに集中していた。また、上顎の吻端部が全く検出されなかった点も特記される。鋭く長い上顎は、運搬の邪魔にならないよう浜に引き上げた段階で除去されたのであろうか。

カジキ類は次いで多かったのは、メジロザメ科の一種で、35 点 29.4% を占め、マグロ属が 25 点 21% でこれに次ぐ。メジロザメ科で検出されたのは椎骨だけであるが、鎌倉の遺跡ではしばしば観察されるように、側面を削ぐなど加工痕や、使用痕らしきものがある（中村 2020）。ミシンのボビンという下糸を巻き付ける部品に形状が似ているので、その利点を利用した道具と推定されるが、具体的な手掛かりはまだ確認できていない。実際に道具として使ったものかどうかも含め、今後も注視していきたい。

第 5 表 出土魚類種名表

軟骨魚綱	メジロザメ目	メジロザメ科	
Class Chondrichthyes	Order Lamniformes	Family Carcharhiniformes	
硬骨魚綱	スズキ目	タイ科	クロダイ
Class Osteichthyes	Order Perciformes	Family Sparidae	<i>Acanthopagrus schlegelii</i>
			マダイ
			<i>Pagrus major</i>
		サバ科	マグロ属の一種
		Family Scombridae	<i>Thunnus et. sp. indet</i>
		マカジキ科	マカジキ科の一種
		Family Istiophoridae	<i>Istiophoridae et. sp. indet</i>

(2) 鳥類

鳥類は 8 点出土し、ニワトリとコハクチョウの 2 科 2 種が確認された。ニワトリは上腕骨 (L)・尺骨 (L)・脛足根骨が検出された。コハクチョウは、ロシアツンドラ地帯から飛来してきて、本州で越冬する冬鳥である。検出された部位は尺骨に限られる。これ以外にも骨端部分を欠損しており骨体部分だけの鳥骨もあったが、同定は困難であった。遺構から検出された試料はなかった。

第 6 表 出土鳥類種名表

鳥綱	キジ目	キジ科	ニワトリ
Class Aves	Order Galliformes	Family Phasianidae	<i>Gallus gallus domesticus</i>
	カモ目	カモ科	コハクチョウ
	Order Anseriformes	Family Anatidae	<i>Cygnus columbianus</i>

(3) 哺乳類

哺乳類は 254 点検出され、8 科 9 種類確認された。大半は散逸した状態で検出された。同一個体と推定される状態でまとまっていたのはイヌの幼体・ウマの歯などがあったが、遺構から検出されたものはなかった。本来であれば、同一部位の数を基に最小個体数を求め、比較検討する方法を基本としているが、魚類、鳥類で見えてきたように、全体に散逸している状態であり、最小個体数を求めることは困難であった。どの種が多かったのかを求める根拠として、同定可能標本数を集計しイメージを掌握してみた。

また、本遺跡に限ったことではなく、鎌倉ではしばしば観察される出土状態であるが、検出状態が廃棄時の状態を保っていたとは考えづらい。おそらく、拡散・散逸を繰り返した結果が残存状態として検出されたのであろう。

しかし攪乱という表現で括れる状況ではないように思われる。調査では、泥岩を敷詰めた生活面が複数検出されている。貝や骨は散逸状態であることは変わらないが、泥岩でパッキングされ、限定された時間中の中に納まっていたということは確かであろう。面を基準に集計することも有効と思われたが、調査区が段差を持ち南北に細長く、面を追うには難しい状況であったため、上段・下段というエリア内の比較に留まった。また、部位をカウントをする際、肋骨など、骨頭部分が残しているものはカウント対象となるが、大半は欠損していた

<上段エリア>

上段エリアでは、哺乳類は 63 点検出された。最も多かったのはウマで 29 点 (46%) であった。部位の中で目立ったのは遊離歯で、上下・左右併せて 14 点を数えた。上段の 2 区 6 面では、上顎右側の歯が 7 点まとまって検出された (写真図版 8 参照)。解剖学的位置は保ってはいなかったが、同一個体の可能性が高い。上顎遊離歯の下や周辺には骨が散在していた。頭蓋骨の破片と推定される。薄い骨は割れやすかったこともあり、細かく割れており、復元は困難であった。骨の中には、下顎骨の硬く厚い復縁部混じっていた。上からの圧力がかかり、割れたのではないかと推定された。西中川 (1991) により歯冠高より年齢を求めてみると、5～6 才位と推定される。残りの 7 点も 4～8 才という中ではあったが、5～6 才に集中していた。ウマとしては成獣として立派にぞだった段階である。人間にあてはめると 20 代中頃から後半に相当するようだ。

ウマの体高についても、四肢骨の全長値から推定体高を算出する方法 (林田・山内 1957) がある。しかし、多くの四肢骨は欠損しており、全長を計測できるものは限られていた。形状を留め残存していたのは橈骨・脛骨が目立っていた。2 区 7 面 NO.1426 橈骨 L は、全長 324mm を測り、体高は 135cm 弱と算出された。1・2 区の 11 面出土ウマの脛骨 (L) は、全長 324mm を測り、体高は 125cm と算定された。林田重幸氏が 1957 年鎌倉市材木座遺跡の馬の骨を観察・計測した結果得られた所見によれば、「推定体高の内 126～136cm が最も多い」とされている (林田 1978)。本遺跡の事例もほぼ範疇に納まっており、その中では大型の部類であった。この時林田氏は、材木座の事例を元に、中世日本馬を「鎌倉馬」と呼称することを提唱した。

<下段エリア>

下段エリアでは、191 点検出され、最も多かったのはイルカ類で 98 点 (38%) を数えた。イルカ類は、上段エリアでは全く検出されてない。出土部位の半分は、椎骨及び遊離した椎間板が占めていた。

2 番目に多かったのは、イヌで 39 点 (20%) を占めていた。多い部位は下顎骨で左 5 点右 6 点検出され、少なくとも 6 個体分あったことがわかった。3 番目に多かったのはウマで、29 点 (22%)

であった。部位の中で多かったのは中手骨で、左側が3点検出された。また5区4面で出土した上顎遊離歯 P4 の歯冠高は 49mmを測り年齢は 7 才、同区同面の上顎遊離歯 M²(L) は、歯冠高 60mm で 6 才と推定された。5 区 6 面下顎 P₄ 遊離歯 (R) は、歯冠高 69.5mmを測り萌出が完了しており 4 才位と推定された。

第 7 表 出土哺乳類種名表

哺乳類	ウサギ目	ウサギ科	ニホンノウサギ
Class Mammalia	Order Lagomorpha	Family Leporidae	<i>Lepus brachyurus</i>
	ネコ目	イヌ科	イヌ
	Order Carnivora	Family Canidae	<i>Canis lupus familiariss</i>
		イタチ科	テン
		Family Musteroidea	<i>Martes melampus</i>
	ウマ目	ウマ科	ウマ
	Order Perissodactyla	Family Equidae	<i>Equus ferus caballus</i>
	クジラ・ウシ目	イノシシ科	イノシシ
	Order Artiodactyl/Cetartiodactyla	Family Suidae	<i>Sus scrofa</i>
		シカ科	ニホンジカ
		Family Cervidae	<i>Cervus nippon</i>
		ウシ科	ウシ
		Family Bovidae	<i>Bos taurus</i>
		マイルカ科	オキゴンドウ
		Family Delphinidae	<i>Pseudorca crassidens</i>
			マイルカ科の一種
			<i>Delphinidae</i> sp.
			科・属 不明
			fam. et gen. indent

第 8-1 表 上段魚類・鳥類・哺乳類出土一覧表（上段-1）

GL=全長 Bp=近位端最大巾 Bd=遠位端最大巾（単位mm）

区	面	遺構	N0	魚 類	鳥 類	哺 乳 類
2区南	3面	整地土	1543			ニホンジカ:上腕骨R(1)近位端部
2区南	4面	SD1	1554			小獣:指骨(1)GL=20.4 Bp=7.5 Bd=6.3
		整地土	1524			オキゴンドウ:椎骨(4)GL=67.1
			1527			イルカ類:頸椎(1)
			1546			ウマ:耳骨L(1)
2区南	5面	SD1	1547			イヌ:踵骨R(1)GL=41.3 Bp=14.5 Bd=12.8
			1542			ウマ:上顎遊離歯P ⁴ L(1) 歯冠=(長)26.8×(巾)25.6 歯冠高=62.5
		整地土	1537			イヌ:肩甲骨R(1)
			1544			ウマ:下顎遊離歯M ₃ L(1) 歯冠=28.8×11.9 歯冠高=62.5
			1522			ウマ:上腕骨R(1)近位端欠 寛骨L・R(1)
2区南	6面	整地土	1521			イヌ:尺骨L(1)遠位端欠損 Bp=26.9 脛骨L(1)GL=146.0 Bp=26.7 Bd=28.7
			1545			イヌ:肋骨片(2)
			1419			ウマ:眼窩骨L(1)
			1410			ウマ:上顎遊離歯M ² L(1) 歯冠=23.9×23.7 歯冠高=56.8
			1418			ウマ:上顎遊離歯M ³ L(1) 歯冠=25.4×22.5 歯冠高=52.0
			1416			ウマ:上顎遊離歯P ³ R(1) 歯冠=23.6×24.2 歯高=59.5
			1409			ウマ:上顎遊離歯P ⁴ R(1) 歯冠=25.6×24.6 歯冠高=55.8
			1415			ウマ:上顎遊離歯M ¹ R(1) 歯冠=23.6×25.8 歯冠高=50.0
			1414			ウマ:上顎遊離歯M ² R(1) 歯冠=23.6×24.2 歯冠高=60.1
			1412			ウマ:上顎遊離歯M ³ R(1) 歯冠=24.8×21.3 歯冠高=52.6
			1407			イノシシ:環椎(1)破片
			1405			ウマ:橈骨(1)L 遠位端部
			1411			不明:歯根部(1)
			1424			ウマ:橈骨R(1)
			1536			ウマ:上顎遊離歯I ² R(1)
			744			ウマ:四肢骨片
			1416			ウマ:上顎遊離歯P ³ R(1) 歯冠=23.6×24.2 歯高=59.5
			1409			ウマ:上顎遊離歯P ⁴ R(1) 歯冠=25.6×24.6 歯冠高=55.8
			1414			ウマ:上顎遊離歯M ² R(1) 歯冠=23.6×24.2 歯冠高=60.1
			1415			ウマ:上顎遊離歯M ¹ R(1) 歯冠=23.6×25.8 歯冠高=50.0

第 8-2 表 上段魚類・鳥類・哺乳類出土一覧表（上段 -2）

GL=全長 Bp=近位端最大巾 Bd=遠位端最大巾（単位mm）

区	面	遺構	NO	魚 類	鳥 類	哺 乳 類
2区南	6面	整地土	1423			ウマ：肩甲骨L(1) Bd=81. 2
1・2区	7面	整地土	299			テン：下顎骨R(P ₃ P ₄ M ₁) (1)
			682			ウマ：下顎遊離歯P ₄ R(1) 歯冠=24. 5×16. 7 歯冠高=65. 6
2区南	7面	整地土	1426			ウマ：橈骨R(1) 近位端欠損 Bd=69. 2
			1427			ウマ：橈骨L(1) 完存 GL=324. 0 Bp=77. 1 Bd=63. 1
			1428			ウマ：肋骨 破片
			1528			ニホンジカ：鹿角先端部(1) 切落とし ウマ：肋骨(1) 破片
			1535			イヌ：大腿骨L(1) 近位端部 ウマ：上顎遊離歯I ³ L(1)
			1553			ウマ：下顎遊離歯P ₄ L(1) 歯冠=(長) 29. 3×(巾) 14. 8 歯冠高=45. 3
2区南	8面	SK1	1429			ウマ：上腕骨L(1)
			1430			ウマ：寛骨R(1)
			1525			イヌ：大腿骨L(1) 遠位端部 Bd=27. 3
			1530			イヌ：(幼) 脛骨L(1) GL=69. 0 Bp=17. 5 Bd=14. 4 ウマ：下顎遊離歯I ₃ R(1)
			1532			ウマ：後肢基節骨L(1) GL=82. 0 Bp=52. 4 Bd=47. 4
			1533			イヌ：頭蓋骨(1) 下顎骨R(M ₁ dim ₄) (1)
			1564			イヌ：(幼) 大腿骨L(1) Bd=24. 3 脛骨L(1)・R(2) イヌ：(成) 肩甲骨L(1)・R(2) 寛骨L・R(2) 頸椎(2) 踵骨(1) 肋骨(12) ウマ：肋骨片
			1572			ウマ：肋骨(2)
			1538			イヌ：側頭骨L(1)
			1576			ウマ：肋骨片
		整地土	1585			ウマ：下顎遊離歯M ₁ R(1) 歯冠=26. 1×19. 5 歯冠高=56. 1
			1590			イルカ類：歯(1)
2区南	9面	整地土	1529		コハクチョウ?：尺骨(L) 骨体部	
1・2区	10面	SK1	316			ニホンジカ：橈骨L(1) 近位端部 Bp=34. 4
			332			ウシ：上腕骨L(1) 骨体部
			334			ウシ：尺骨L(1) 骨体部
			533			小獣：肋骨
1・2区	11面	整地土	268			ニホンジカ：橈骨L(1) 近位端部
			425			ウマ：脛骨L(1) GL=32. 4
			515			ニホンジカ：橈骨R(1)
2区南	11面	整地土	1575			イヌ：下顎骨R(P ₄ M _{1, 2})
			1586		コハクチョウ：尺骨R(1) 近位端部	
1・2区	12面	Pit02	513		ニワトリ：上腕骨L(1) 遠位端部欠損 Bp=17. 2	
		H34-37	750			ウマ：頭蓋骨(1) 頭蓋部破片
		動物骨	754	マダイ：歯骨L(1) GL=28mm		
		集中	755	マダイ：尾椎(1) 切断痕		
		整地土	747			ウマ：中手骨R(1) GL=52. 1 Bp=76. 0 Bd=59. 0

第 8-3 表 上段魚類・鳥類・哺乳類出土一覧表（上段 -3）

GL=全長 Bp=近位端最大巾 Bd=遠位端最大巾（単位mm）

区	面	遺構	N0	魚 類	鳥 類	哺 乳 類
1・2区	12面	整地土	748			ウマ：橈骨R(1) GL=327.0 Bp=72.3 Bd=67.5 尺骨R(1) 橈骨から剥離
			749			ウマ：肋骨破片
			751			ウマ：尺骨R(1)
			752			ウマ：肋骨破片（打ち欠痕）
2区南	12面	整地土	1579			イヌ：肩甲骨R(1) 骨体部のみ
			1580			ウマ：下顎遊離歯M ₁ L(1) 歯冠=23.6×13.3 歯冠高=53.4
			1587		ニワトリ：尺骨L(1) GL=81.1 Bp=13.4 Bd=11.2	
			1562			ウマ：中足骨R(1) 完存 GL=267.0 Bp=44.3 Bd=45.3 小中足骨Ⅱ orⅣ(1) Bp=21.1
1・2区	13面	SK1	1569	タイ類：臀部棘(1)（骨折痕）		ウマ：下顎遊離歯M ₃ L(1) 歯冠高=44.5 腰椎破片 四肢骨片

第 9-1 表 下段魚類・鳥類・哺乳類出土一覧表（下段 -1）

GL=全長 Bp=近位端最大巾 Bd=遠位端最大巾（単位mm）

区	面	遺構	N0	魚 類	鳥 類	哺 乳 類
5区	4面上	整地土	1307			イルカ類：頸椎(1) 椎骨(1) カット痕 棘突起(2)
			1356			イヌ：胸椎(1)
			1368	メジロザメ科：椎骨(1)		イヌ：脛骨L(1) 近位端部 欠損
			1376			イノシシ：上顎骨R(犬歯C××) 欠損
			1391			ウマ：中手骨L(1) 完存 GL=219.0 Bp=49.8 Bd=47.0
			1393	メジロザメ科：椎骨(1)		
			1469			イルカ類：上顎骨(1) 破片
			1565			ウマ：肩甲骨片L/R (1)
			1655			イルカ類：椎間板(4)
5区	4面	4面上	1337			イヌ：下顎骨R C(1) 大腿骨R(1) 遠位端部
		道路 構成土	1306			オキゴンドウ：下顎骨R(1)
			1312	マダイ：上後頭骨(1)		イルカ類：椎骨(1) 解体半裁
			1326			イヌ：大腿骨(1) 近位端骨体部
			1331			イルカ類：椎骨(1) 半裁 切断骨
			1361	メジロザメ科：椎骨(6)		
			1363			イルカ類：胸椎(1) 椎間板外れ 腰椎(3) 椎間板外れ 尾椎(1)
			1385	メジロザメ科：椎骨(3)		小獣：脛骨L(1) 遠位端部 Bd=12.4
5区	4面	整地土	1272			イルカ類：椎間板(1) 小型 破片 椎間板(1) 大型 破片
			1273			ニホンジカ：大腿骨L(1) 近位端 イルカ類：胸椎(2) 大型1, 小型1 腰椎(1)
			1308			ニホンジカ?：四肢骨体部破片 カミ痕 イルカ類：頭蓋, 破片カット痕

第9-2表 下段魚類・鳥類・哺乳類出土一覧表（下段-2）

GL=全長 Bp=近位端最大巾 Bd=遠位端最大巾（単位mm）

面	区	遺構	NO	魚 類	鳥 類	哺 乳 類
5-6区	4面	整地土	1358			イルカ類:尾椎(1) 骨錘?
			1365	マグロ類:尾鰭条(3)		
			1366			ウマ:上顎遊離歯M ² L(1) ホホ側のみ残
			1369	メジロザメ科:椎骨片(1)		イルカ類:胸椎(1)
			1371	マカジキ科:椎骨片(1)		ウマ:肋骨片(1)
			1372			種不明:肋骨片他(4)
			1377			イヌ:大腿骨R(1) 遠位端部
			1379			イルカ類:椎体(1) 半裁
			1381	メジロサメ科:椎骨		イルカ類:椎骨2(小型) カット痕
			1382	マカジキ科:椎骨(1)		イルカ類:下顎骨L(1) 小型
			1398	マグロ類:尾椎(1)		イヌ:下顎R(M ₂ M ₂) m ² は歯根部のみ 脛骨R(1)遠位端部 イルカ類:胸椎(1) 小型
			1402	メジロサメ科:椎骨(1) マカジキ科:下顎吻端部 GL=67.0 椎骨(3)		
			1434			クジラ類:橈骨L(1) イルカ類:腹椎(3)
			1640			ウシ:橈骨L(1) 遠位端部 Bd=32.9 ウマ:上顎遊離歯M ² L(1) 歯冠=25.1×19.8 歯冠高=60.0 イルカ類:肋骨(1) 切痕
			1650	メジロザメ科:椎骨(2)		
			1651			ウマ:上顎遊離歯P ⁴ L(1) 歯冠=24.0×22.3 歯冠高=49.0 オキゴンドウ:下顎骨R(1)
			1665	マカジキ科:椎骨(1)		
			1578			イヌ:下顎骨L(1) 歯根部のみ残
5-6区	5面	整地土	1630	マグロ類:椎骨(1) カット痕		クジラ類:肋骨片(焼けている)
			1285	マカジキ科:下顎吻端部(1)		ウマ:上顎遊離歯I ² R(1) マイルカ類科:下顎骨L・R(1)
			1296			タヌキ:脛骨L(1) 近位端部のみ BP=19.2
			1313	メジロザメ科:椎骨(1)		イヌ:上腕骨R(1) 遠位端Pd=29.4 寛骨R(1) 寛骨臼部のみ イルカ類:胸椎(1)・腰椎(1) 小型 椎間板 外れ
			1315			イルカ類:椎間板(1)
			1316			イルカ類:下顎骨L(1)
			1317			オキゴンドウ:遊離歯(1)
			1319			小型哺乳類:仙骨(1)
			1320			イルカ類:上顎骨L(1)
			1321	マカジキ科:椎骨(3)		イヌ:肩甲骨L(1) 近位端部 イルカ類:胸椎(1) 小型椎間板外れ 椎間板(1) 大型 破片
			1322			ウマ:後頭骨R(1)
			1323	マグロ属:角骨(1) 終尾骨(1)		イヌ:尺骨L(1) 近位端部 短く分断
			1329			ウマ/ウシ:肋骨片(1)
			1330	メジロザメ科:椎骨(1) マカジキ科:椎骨(2)・棘 終尾骨(2)		
			1332			イルカ類:腰椎(1) 椎間板はずれ・切断痕

第 9-3 表 下段魚類・鳥類・哺乳類出土一覧表（下段 -3）

GL=全長 Bp=近位端最大巾 Bd=遠位端最大巾（単位mm）

面	区	遺構	N0	魚 類	鳥 類	哺 乳 類
5区	5面	整地土	1333	メジロザメ科:腰椎(1)		イヌ:上顎L(1) 犬歯 ウマ:中足骨L(1) イルカ類:肋骨(1)
			1334			ウマ:上腕骨L(1) 遠位端部
			1375	メジロザメ科:椎骨(1) マカジキ科:椎骨・鰭条		
			1387			種不明:骨片
			1392	マカジキ科:椎骨(2)		
			1395	マカジキ科:下顎吻端部		イヌ:頸椎(2) 脛骨L(1) 遠位端部のみ イルカ類:遊離椎間板(1)
			1396	マカジキ科:椎骨(1)		
			1399			イヌ:下顎骨L(1) 脛骨R(1) 遠位端部 Bd=19.8
			1399	マグロ属:尾椎(1)		イヌ:下顎R(M ₁ M ₂) m ₂ は歯根 部のみ 脛骨R(1) 遠位端部 イルカ類(小型):胸椎(1)
			1431	メジロザメ科:椎骨(1) マグロ類:終尾骨(1) マカジキ科:椎骨(1) 破片 終尾骨(1)		イヌ:下顎骨L・R(幼体)M ₁ 未崩出 ウマ:肋骨片 切痕 オキゴンドウ:上顎骨L(1) 頭部破片(3) イルカ類:尾椎(1) 椎間板(5)
			1433	マカジキ科:下顎吻端部		
			1436	メジロザメ科:椎骨(1) マグロ:歯骨R(1) 椎骨4(1) マカジキ:椎骨(1) 破片他		イヌ:下顎骨L(1) 踵骨R(1) オキゴンドウ:肋骨(1) イルカ類:椎間板(1)
			1437	メジロザメ科:椎骨(3) マカジキ:椎体(1)		
			1438			イルカ類:頭蓋骨片(1) 腰椎4
			1447			ニホンジカ:下顎骨R(1)
			1465			イルカ類:頸椎(1)
			1471			イルカ類:椎間板(1)
			1475	タイ科:鱗(粉碎)		
			1476	タイ科:鱗(粉碎)		ネズミ:下顎骨L(1)
			1567	メジロザメ科:椎骨(1)		イヌ:下顎骨(R・L(1)) 結合部分骨体のみ イルカ類:椎間板(1)
			1570	カジキ:椎骨(2)		キツネ:下顎枝部分(1) 破片 イヌ:軸椎(1)
			1574	マカジキ科:下顎吻端部(1)		
			1626			獣類:頭蓋片(1)
			1629	メジロザメ科:椎骨(2) マグロ:終尾骨片(1)・椎骨(2)		ウマ:肋骨片
			1633			イルカ類:下顎骨R(1) 肩甲骨L(1) 破片 腹椎(1)
			1636	マグロ:尾椎(1)		イノシシ:橈骨L(1) 近位端部 Bp=26.9 ニホンジカ:上腕骨L(1) 遠位 端部 欠損 橈骨R(1) 近位端部 Bp=41.4 ウシ:尺骨L(1) 滑車切痕部分 上腕骨R(1) 骨体部のみ ウマ:下顎遊離切歯 LI ₁ , I ₂ , I ₃ イルカ類:椎間板(3), 椎骨(2) イルカ類:胸椎(1)

第 9-4 表 下段魚類・鳥類・哺乳類出土一覧表（下段 -4）

GL=全長 Bp=近位端最大巾 Bd=遠位端最大巾（単位mm）

区	面	遺構	NO	魚 類	鳥 類	哺 乳 類
5区	5面	整地土	1634			イヌ：下顎骨R(M ₁ M ₂) イルカ類：環椎(1) 破片
			1637			イルカ類：上顎片(1) 椎骨(5)
			1638			ウシ：尺骨L(1) イルカ類：椎骨(1)
			1643			ウマ：肋骨(7)
			1644	カジキ：椎骨(2)		イルカ類：腰椎(3)
			1648	マカジキ科：椎骨(1)		
			1649			イルカ類：腰椎(1)
			1653			イルカ類：遊離歯(1)
			1661	マグロ：終尾椎(2)		オキゴンドウ：遊離歯(1) 椎間板(1)
			1664			イルカ類：椎体(1)
			1670	マダイ：歯骨L(1)		
4区	6面	SX1 5層	847	マダイ：尾椎(1)		
			879		コハクチョウ：尺骨R(1) 骨体部	
		SX1	1061	マダイ：前上顎骨L(1)		
			1046			ウマ：四肢骨(1)
			1048			ニホンノウサギ：脛骨L(1) GL=134.7 BP=26.6 Pd=15.3
			1059			イヌ(幼体)：大腿骨L(1) ウマ：中足骨L/R(1)
		整地土	784		種不明：脛足根骨 骨体部	
			795			イヌ：下顎骨(1) 破片
			805	マダイ：前鰓蓋骨L(1) 破片		イヌ：下顎骨R(P ₄ M ₁ M ₂ M ₃)
			807	クロダイ：上後頭骨(3)		
			1177			イルカ類：遊離椎間板(1) 大型 径=71.5
		SX2	1102	マグロ：尾椎(1) 椎長=58.0mm		イヌ：肋骨(1) ウマ?：肋骨R(1) 近位端欠 ウシ：脛骨R(1) 近位端欠損 Bd=62.2
			1114			ニホンノウサギ：大腿骨R(1) 遠位端部 イヌ：上腕骨L(1) 骨体部のみ
			1116		ニワトリ：脛足根骨L(1) GL=120.1 Bp=15.5 Bd=10.7	イルカ類：椎間板(1) 若い
5-6区	6a面	整地土	1314	マカジキ科：終尾骨(1)		
			1378			ウマ：寛骨L臼部破片(3)
			1390			ウマ：下顎遊離歯(R) P ₄ 5才位 歯冠=26.4×15.2 歯高=69.7 イルカ類：腰椎(1)
			1401	マカジキ類：椎骨(1)		イヌ：橈骨L(1) 近位端部 Bp=16.0 海獣類：打割痕(3)
			1423			ウマ：寛骨R(1) 肩甲骨L(1) Bd=81.2
			1425			ウマ：下顎骨R(1) 下顎体のみ
			1439	メジロザメ科：椎骨(2)		イヌ：肩甲骨L(1) イルカ類：環椎(1) 椎間板(1) 棘突起(5)
			1440	マグロ：椎骨(1)		イルカ類：腰椎(1) クジラ類：肋骨片(1)
			1441	メジロザメ科：椎骨(2) マグロ類：腰椎(1) マカジキ科：椎骨棘突起(8)他 腰椎(5)	ニワトリ：脛足根骨L(1) GL=120.1 Bp=15.5 Bd=10.7	イヌ：尺骨R近位端(1) ニホンジカ：下顎骨(1) 破片 イルカ類：椎間板(2)

第 9-5 表 下段魚類・鳥類・哺乳類出土一覧表（下段 -5）

GL=全長 Bp=近位端最大巾 Bd=遠位端最大巾（単位mm）

区	面	遺構	N0	魚 類	鳥 類	哺 乳 類
5区	6a面	整地土	1635	マカジキ類:下顎吻端部(1) 椎骨(9)		イルカ類:椎骨 小型 カット痕 ウマ:板状骨片 ウマ:肋骨片(3)
			1642	マグロ:下顎骨R(1) カジキ類:椎骨(1)		ウマ:大腿骨R(1) 骨体部 遠位端 寛骨R(1)
			1443			イヌ:橈骨(1)
			1444			不明:肋骨 破片(3)
			1445			イルカ類:下顎骨L(小1) イルカ類:椎骨(大1)半裁 (小)1/4裁 椎間板(8)
			1446			イルカ類:椎骨(2)(小型) カット痕
			1448	マグロ:下顎骨R(1)		
			1449	メジロザメ科:椎骨(2)		イルカ類:胸椎(1) 小型
			1450	マグロ:椎骨片		イヌ:尺骨R(1) 近位端部 イルカ類:椎間板(1)破片 椎骨(1) 椎骨棘突起(5)
			1454			不明:下顎骨L 破片
			1455	マカジキ科:椎骨(1)		マイルカ類:胸椎(3)
			1456			イルカ類:肋骨 破片 椎間板
			1459			イルカ類:椎間板(1)
			1462	メジロザメ科:椎骨(1)		不明:頭蓋骨片 四肢骨片(2)
			1467	メジロザメ科:椎骨		イルカ類(大型):椎間板(1)
			1478			小獣:犬歯(1)
			1481			イルカ類:歯(1)
			1628			イヌ:下顎骨L(1) オキゴンドウ:下顎骨R(1) イルカ類:椎間板(3)
			1632			イヌ:脛骨R 完存(1) GL=162.0 Bp=32.5 Bd=20.4 脛骨L(1) 遠位端欠損
			1635	マカジキ類:下顎吻端部(1) 椎骨(9)		ウマ?:板状骨片 イルカ類:椎骨(1) カット痕
			1641	マカジキ科:椎骨片(2)		ウマ:中手骨L(2)(遠位端) Bd=40.5 イルカ類:肋骨切痕, 腰椎(2) イルカ類:椎間板(大型1)
			1647	マカジキ:椎骨片		
			1652			不明:肋骨片他
			1658	メジロザメ科:椎骨(1)		
			1659			ウマ:肋骨片
			1662			ウマ:切歯破片
			1663			サル?:上顎R(1) イルカ類:椎間板(4)
			1668	マカジキ:椎体片		
5区	6b面	SD1	1464	メジロザメ科:椎骨(1) 不明:肋骨破片(3)		
			1666			不明:椎骨棘 切痕あり 不明:肩甲骨L
5区	6b面	Pit66	1451	マグロ:椎骨		ウマ:上顎遊離歯 I ² R(1) 不明:肋骨 不明:大腿骨L(1) 遠位端

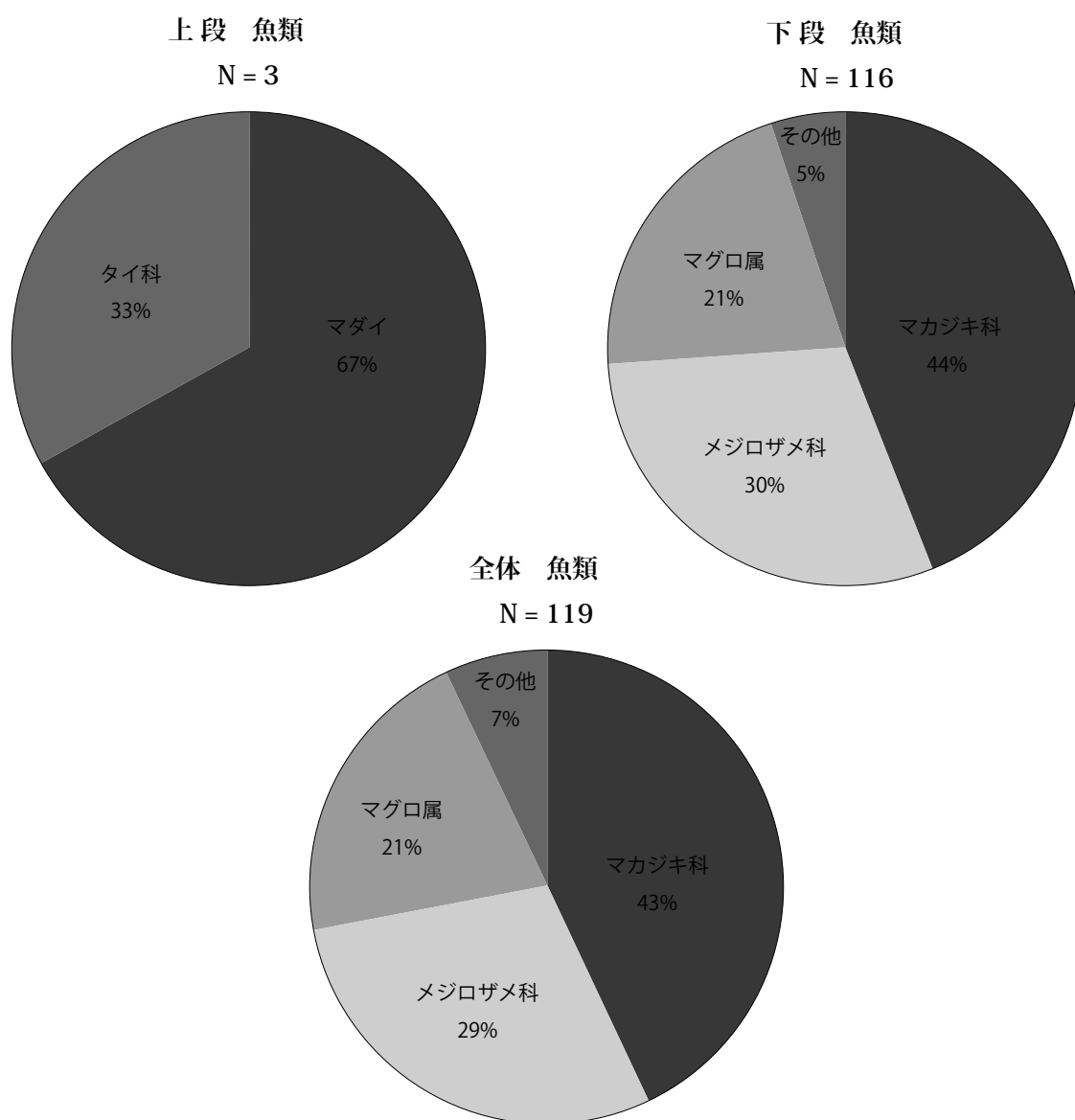
第9-6表 下段魚類・鳥類・哺乳類出土一覧表（下段-6）

GL=全長 Bp=近位端最大巾 Bd=遠位端最大巾（単位mm）

区	面	遺構	NO	魚 類	鳥 類	哺 乳 類
4区	8面	SD1	965			ニホンノウサギ:脛骨L(1) 遠位端部 Bd=13.8 ウマ:中手骨R(1) 完存 GL=227.0 Bp=51.1 Bd=49.7
			1050			不明:下顎骨L(1) 破片
			1311			イルカ類:椎間板(1)
			1336			イルカ類:椎骨(2)
		整地土	1184			イヌ:上顎骨L($\times \times \times P^4 M^1$)
			1208			イヌ:上顎骨R(1) ($M^1 M^2$) 頬骨R(1)
			1265			ウマ:頸椎(1)

第10表 魚類集計表

種 名	部位	上段			下段			総計	
		点数	小計	%	点数	小計	%	計	%
メジロザメ科の一種	椎骨				35	35	30.2%	35	29.4%
クロダイ	上後頭骨				1	1	0.9%	1	0.8%
マダイ	上後頭骨				1				
	前上顎骨	L			1				
	歯骨	L	1	2	66.7%	4	3.4%	6	5.0%
	前鰓蓋骨				1				
	椎骨		1		1				
タイ科	臀部鰭		1					1	0.8%
	ウロコ			1	33.3%	+			
マグロ属の一種	歯骨	R			1				
	下顎骨	R			2				
	角骨				1				
	椎骨				15	25	21.6%	25	21.0%
	終尾骨				3				
	尾鰭条				3				
マカジキ科の一種	下顎吻端部				5				
	椎骨				42	51	44.0%	51	42.9%
	終尾骨				4				
計			3		100.0%	116		119	100.0%



第 3 図 魚類組成グラフ

第 11 表 鳥類集計表

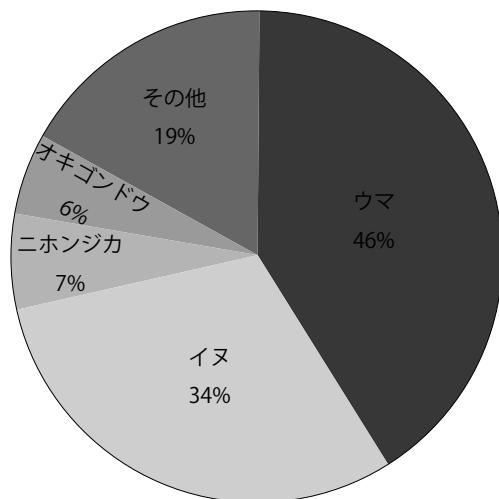
種 名	部位	上段			下段			総計	
		点数	小計	%	点数	小計	%	計	%
ニワトリ	上腕骨	L 1	4	66.7%		1	50.0%	5	62.5%
	尺骨	L 1							
	脛足根骨	L 2			L 1				
コハクチョウ	尺骨	L 1	2	33.3%		1	50.0%	3	37.5%
		R 1			R 1				
計			3	100.0%		116	100.0%	119	100.0%

第12表 哺乳類集計表

種名	部位	上段			下段			総計			種名	部位	上段			下段			総計													
		点数	小計	%	点数	小計	%	小計	計	%			点数	小計	%	点数	小計	%	小計	計	%											
ネズミ	下顎骨				L 1	1	0.5%	1	1	0.4%	ウマ	橈骨	L 2	29	15.2%		29	15.2%		2	58	22.8%										
ニホンノウサギ	大腿骨				R 1	3	1.6%	1	3	1.2%			R 2													2						
	脛骨				L 2			2												L 3							3					
キツネ	下顎骨				R 1	1	0.5%	1	1	0.4%			中手骨			R 1									R 1	2						
イヌ	軸椎					1	39	20.4%	1	61		24.0%				寛骨			L							L 1	1					
	椎骨	3				1			4										R 2								L 2	2				
	頭蓋骨	2				1			3											大腿骨							R 1	1	58			
	頬骨					L 2			2											脛骨			L 1					L 1	1			
						R 2			2														中足骨	L				L 2	2			
	上顎骨					L 1			1														R 1					R 1	2			
						R 2			2							踵骨	1					1										
	下顎骨	L				L 5			5							基節骨	1					1										
		R 2				R 6			8							イノシシ	環椎	1					1									
	結					結 1			1							上顎骨		1	1.0%	R 1	2	1.0%	1	3	1.2%							
	上腕骨	L	22	34.9%		L 1			1		39		20.4%	1	61	24.0%		橈骨					L 1	1								
	尺骨	L 1															L 1	2					ニホンジカ	鹿角	1					1		
		R 3															R 2	5					下顎骨					R 1	1			
	肩甲骨	L															L 2	2					上腕骨						L 1	1		
		R 1															R 1	2					橈骨	L 2	5	7.9%	L 1	6	3.1%	3	11	4.3%
	寛骨	L 1															L							R 1					R 1	2		
		R 2															R							尺骨	L 1					1		
大腿骨	L 2							L 1	3										大腿骨					L 2	2							
	R							R 3	3									ウシ	上腕骨	L 1	1	1.5%				1						
脛骨	L 1							L 3	4									尺骨							R 1	1						
	R 2							R 2	4									橈骨	L						L 1	1						
踵骨	R 2							R 1	3									脛骨								R 1	1					
タヌキ	脛骨							L 1	1	0.5%		1		1			0.4%	オキゴンドウ	遊離歯		4	6.3%			2		2					
ウマ	椎骨								2			2								上顎骨							L 1	6	3.1%	1	10	3.9%
	頭蓋骨	1										1								下顎骨							R 3	3				
	後頭骨								R 1			1								椎骨			4					4				
	耳石	L 1							L 1			2						イルカ類	環椎					2		2						
	眼窩骨	L 1						1				椎骨					46			46												
	下顎骨	L						1				頭骨					1			1												
	上顎遊離歯	L 3				L 3		6				遊離歯							3		3											
		R 6					1		7			上顎骨					L 3		98	51.3%	3	98	38.6%									
	下顎遊離歯	L 3						3				下顎骨							L 3		3											
		R 3					4		7										R 1		1											
	肩甲骨	L 1					2		3			肩甲骨							L 1		1											
	上腕骨	L				L 2		2				椎間板							38		38											
	上腕骨	R 1				R 1		2			計			63	100.0%				191		100.0%	254		100.0%								

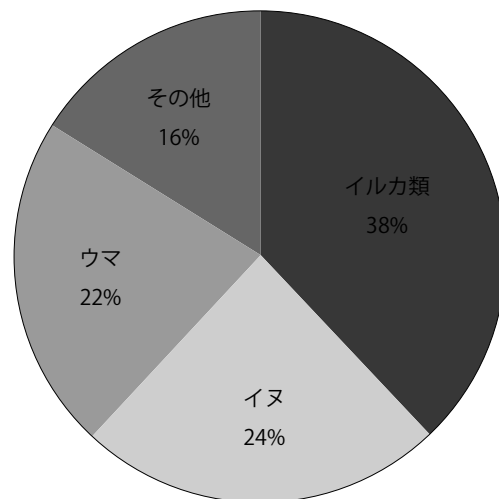
上段 哺乳類

N = 63



下段 哺乳類

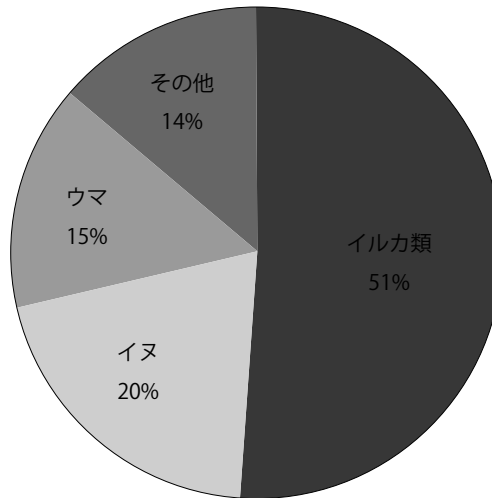
N = 191



第 4-1 図 哺乳類組成グラフ (エリア別)

全体 哺乳類

N = 254



第 4-2 図 哺乳類組成グラフ (全体)

第 13 表 ウマの歯のサイズと年齢 (西中川 1991 による)

	区	面	遺構	No.	部位	R/L	歯冠= 歯冠長×歯冠巾(mm)	歯冠高(mm)	年齢
【上段】	2区南	5面	SD1	1542	上顎遊離歯P ⁴	L	歯冠=26.8×25.6	歯冠高=62.5	5才
			整地土	1544	下顎遊離歯M ³	L	歯冠=28.8×11.9	歯冠高=62.5	5才
		6面	整地土	1418	上顎遊離歯M ³	L	歯冠=25.4×22.5	歯冠高=52.0	6才
				1410	上顎遊離歯M ²	L	歯冠=23.9×23.7	歯冠高=56.8	6才
				1412	上顎遊離歯M ³	R	歯冠=24.8×21.3	歯冠高=52.6	6才
				1414	上顎遊離歯M ²	R	歯冠=23.6×24.2	歯冠高=60.1	5才
				1415	上顎遊離歯M ¹	R	歯冠=23.6×25.8	歯冠高=50.0	6才
				1409	上顎遊離歯P ⁴	R	歯冠=25.6×24.6	歯冠高=55.8	6才
				1416	上顎遊離歯P ³	R	歯冠=23.6×24.2	歯冠高=59.5	5才
				1535	上顎遊離歯I ³	L	—	—	—
	1・2区	7面	整地土	1536	上顎遊離歯I ²	R	—	—	—
				682	下顎遊離歯P ₄	R	歯冠=24.5×16.7	歯冠高=65.6	5才
				1553	下顎遊離歯P ₄	L	歯冠=29.3×14.8	歯冠高=45.3	8才
		8面	SK1	1585	下顎遊離歯M ₁	R	歯冠=26.1×19.5	歯冠高=56.1	6才
【下段】	4区	4面	SD1	1285	上顎遊離歯I ²	R	—	—	—
	5区	4面	整地土	1366	上顎遊離歯M ²	L	頬側のみ残存	—	—
				1640	上顎遊離歯M ²	L	歯冠=25.1×19.8	歯冠=24.0×22.3	5才
				1651	上顎遊離歯P ⁴	L	歯冠=24.0×22.3	歯冠高=49.0	7才
		5面	整地土	1636	下顎遊離歯I _{1~3}	L	—	—	—
				1451	上顎遊離歯I ²	L	—	—	—
		6面	整地土	1390	下顎遊離歯P ₄	R	歯冠=26.4×15.2	歯冠高=69.7	4才

4 骨角器

(1) 馬具【鞍 しおで】

1区11面よりしおで(鞍)が1点出土した。全長51.6mm、幅20.1mm、厚さは、3.4～4.4mmを測る。素材である鹿角の表面の凹凸模様を生かし、黒漆を塗布し仕上げている。

「しおで」とは、前輪と後輪(しずわ)の左右につけるもので、鞍が落ちないように紐でつなぎとめる際、紐に通した管状のものである。紐にかかる荷重を分散しウマの体に負担をかけない目的があったのだろうか。平紐ないし皮紐を通した際、かかった荷重により、一部欠損していた。

本品の素材は鹿角であるが、金属製のものもあるようだ。鎌倉では見かけないが、金属は、身分の高い層のものであり、貴重なものであったため、壊れても鋳直して使うことが残存していない理由のひとつかもしれない。

素材は図版7に示したが、第3枝の骨幹部分を利用したと推定される(写真図版7参照)。角の枝分かれ状態より、6歳以上のシカの角を用いたことがわかった。

(2) 刀装具【筭 こうがい】

筭は5点検出されたがいづれも欠損しており、かろうじて筭の形状をとどめているものも含まれる。筭は、ウシ・シカ・ウマの中足骨を主な素材としている。本遺跡では、素材を確認できるほど残存状態は十分ではなかったが、形状を留めていた1点は、縦溝の幅より、ウシの中足骨ではないだろうか。筭が35点検出された材木座町屋遺跡(NO.261)では、溝巾のサイズより80%はウシの中足骨を素材としていたのではないかと推定された(中村2020)。

5 種実類

モモ(24点・半截13点)・クルミ(半截21点)・ウメ(5点)・扁平でまっすぐな胚のウリ科種子・雑穀の種子などが出土した。現在、目にするクルミはカシグルミで、ヨーロッパからアメリカを経由して明治時代に伝来したものであるという。古来より自生しているクルミは、オニグルミといい、核は固く、身も締まっている。日本では、縄文時代から食べていたことが分かっている。梅は、8世紀(奈良時代)に遣唐使によりもたらされたものであるという。中国でモモやウメは邪気を払う食べ物とされており、日本でも珍重されていた。また、ウメは梅干しという加工技術を伴って伝来してきており、薬膳として庶民の間にも浸透していた。クルミなど打ち欠いた痕跡は確認できず、食べた後の残滓というより、木から落下した実が、そのまま埋没し、調査で検出されたものではないだろうか。

III 小結

段差がある細長い調査区のため、上段と下段に分け動物遺体の出土状況を追ってみた。

貝類は、上段エリアではアカニシが最も多く、イボキサゴ、ダンベイキサゴの3種が主であった。下段は、ダンベイキサゴが主体で、ハマグリ、アカニシの順であった。またアワビ類は、検出された数は多くはなかったが、螺鈿細工の素材用として加工したり、加熱容器として利用することもあったと推定される。

魚類は、上段はマダイが少々検出された程度で、魚類全体の98%は下段から出土している。最も多かったのはカジキ類で、中でも下顎吻端部は、5区4・5面に集中していた。三浦半島周辺部

湾岸域に、大量に迷い込んできたのであろうか。上顎の吻端部は1本も検出されていない。鋭く尖った吻端は、船に穴があくほどである。当時の漁法については、わかっていない部分が多い。伊豆諸島の近世の事例を参考にすれば、「突きん棒漁」とある（橋口 2006）。カジキ漁は2月から5月に行われ、「北東の風の吹く日、潮の流れにさからって背鰭を海面に突き出して遊泳する習性がある」という。3mほどの檣の木の突き棒の先には、三叉の鉄製の離れ鉾がついている。伊豆諸島の新島の浮渡根遺跡（縄文時代後期）からは、離頭鉾頭が出土しており（川崎 1984）、漁法のルーツは縄文時代に遡る可能性もある。しかし今日に至る経緯は十分に検証されておらず、明瞭ではない。また、上顎吻端部については、内臓とともに即除去してから、運搬したようだ。80cmもある上顎吻端部は、運搬には支障があったことだろう。上顎の吻端部が全く出土しないという本遺跡の状態も、こうした事情が分かれば納得ができよう。

鳥類はわずかではあったが、ニワトリと渡り鳥のコハクチョウが確認された。

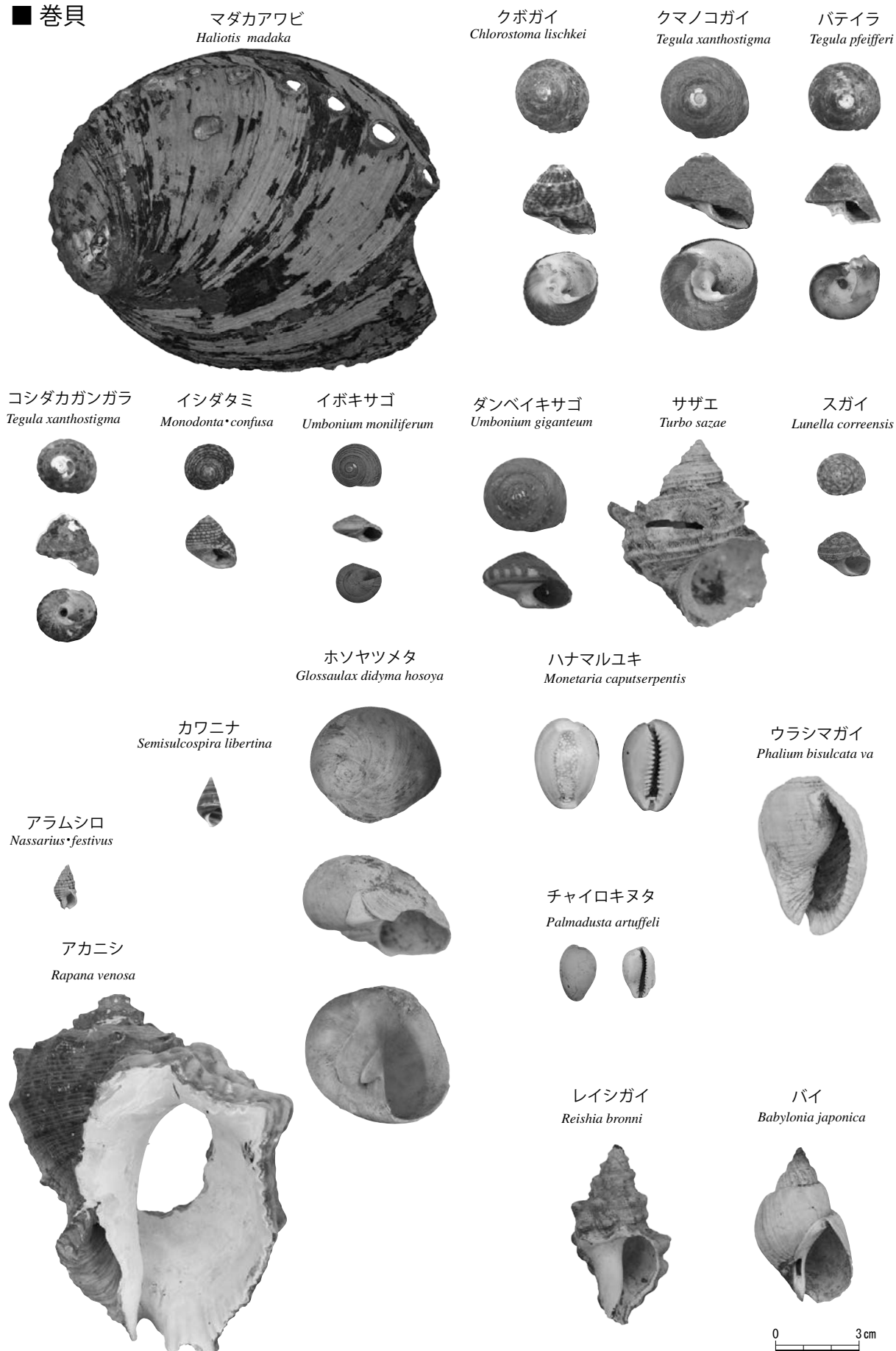
哺乳類は、まとまって検出されたものとしては、イヌ・ウマが目立っていた。上段エリアでは、ウマの遊離歯と、橈骨・脛骨が完存した状態で検出されが、埋葬形態は確認されていない。計測値から体高を求めると、135cm弱と算出された。1957年材木座の調査で林田重幸氏が「鎌倉馬」と命名し中世日本馬の推定体高126～136cmが最も多いとされた範疇に収まっており、その中では最も大型の部類であった。下段エリアでは、イルカ類の部位が最も多かった。頭蓋骨や四肢骨はなく、椎骨が多かった。

調査成果から上段は泥岩を敷き詰めてあったことから、建物周辺の道路部分と推定されている。下段は、石列やかかわらけだまりなど確認されたことにより、屋敷のある庭園や建物の周辺部分であった可能性が指摘されている。短くカットされた骨と、繰り返し行われた整地事業との関連性など、検出された動物遺体と周辺エリアの生活がどのように結びついていたのかについては、今後の課題であろう。

参考文献

- 川崎義雄 1984「渡浮根遺跡」『文化財の保護』16号 東京都教育委員会
- 東京国立博物館 2013『東京国立博物館所蔵 骨角器集成2 鹿角製刀剣装具篇』
- 中村若枝 2020「材木座町屋遺跡（材木座5丁目946-1番地）出土の骨角器と動物遺体」
『鎌倉市材木座町屋（NO.261）発掘調査報告書』 斎藤建設
- 中村若枝 2023「小和田池袋A遺跡（第2次調査）出土動物遺体について」『神奈川県茅ヶ崎市小和田池袋A遺跡第2次調査』株式会社 斎藤建設
- 西中川駿編 1991「古代遺跡出土骨から見たわが国の牛・馬の渡来時期とその経路に関する研究」平成2年度文部科学省科学研究費補助金（一般研究B）研究成果報
- 橋口尚武 2006『ものが語る歴史11 食の民族考古学』 同成社
- 林田重幸・山内忠平 1957「馬における骨長より体高の推定方法」『鹿児島大学農学部学術報告（6）』
- 林田重幸 1978『日本在来馬の系統に関する研究』 日本中央競馬

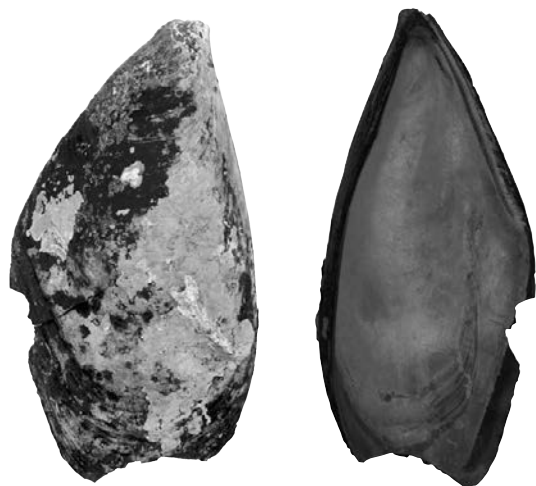
■ 巻貝



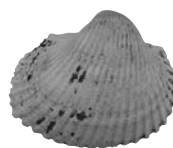
図版 1 貝類 1 (巻貝)

■二枚貝

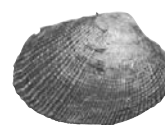
イガイ
Mytilus coruscus



サルボウ
Anadara subcrenata



アサリ
Ruditapes philippinarum



ハマグリ
Meretrix lusoria

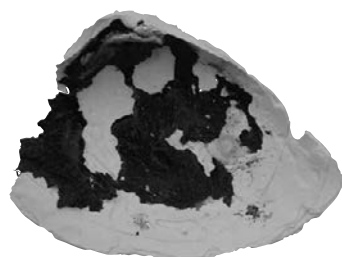


オキシジミ
Cyclina sinensis



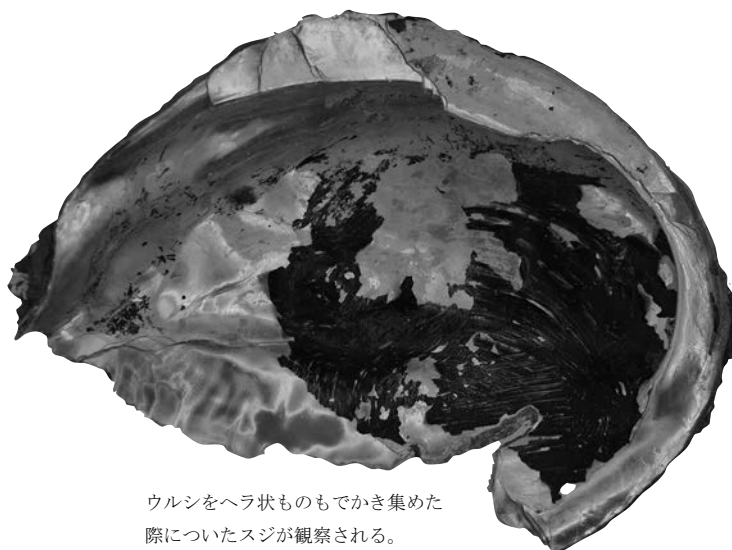
■器や道具・素材として使用された貝類

< 貝（ハマグリ）製ウルシのパレット >



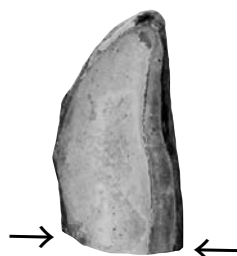
ハマグリ製のパレットの場合
このように貝殻が被熱により
風化が進んでいる場合がある。
ウルシを温める必要があった
のだろう。

< 貝（アワビ）製ウルシのパレット >



ウルシをヘラ状のものでかき集めた
際についたスジが観察される。

< イガイ製ヘラ >



縁辺部をカットしたものがある。
被熱したものもあり、ヘラとし
て使用したのであろうか。

< 螺鈿細工用うす貝づくりの破片 >



螺鈿細工にオニ皮をはずしパール質部分を取り出す
ために、細くカットしたと推定されるアワビ類の破片。
固い縁もあり切り落とした端材も混じっている。

切痕

0 3 cm

■ 魚類

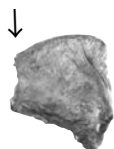
＜メジロザメ科の一種＞
Carcharhinidae gen.et.sp.indet



NO. 1457 椎骨

NO. 1385 椎骨

＜クロダイ＞
Acanthopagrus schlegelii



NO. 807 上後頭骨

＜マダイ＞
Pagrus major



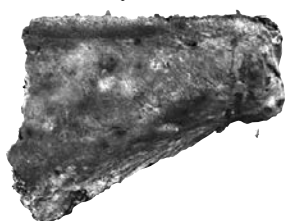
NO. 754 歯骨 L

＜タイ科の一種＞
Sparidae.et.sp.indet



NO. 755 尾椎

＜マグロ属の一種＞
Thunnus.et.sp.indet



NO. 1642 歯骨 (R)



↑
カット

NO. 1394 椎骨



NO. 1323 終尾骨

＜マカジキ科の一種＞
Istiophoridae.et.sp.indet



NO. 1402 下顎吻端部 (5 区 4 面)



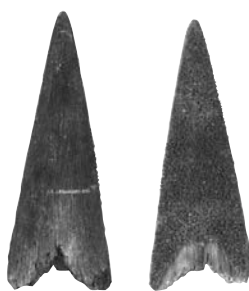
NO. 1285 下顎吻端部 (5 区 5 面)



NO. 1395 下顎吻端部 (5 区 5 面)



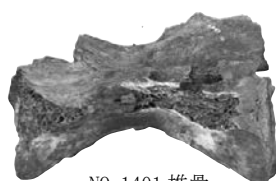
NO. 1574 下顎吻端部 (5 区 5 面)



NO. 1433 下顎吻端部 (5 区 5 面)



NO. 1635 下顎吻端部 (5 区 5 面)



NO. 1401 椎骨



NO. 1375 椎骨



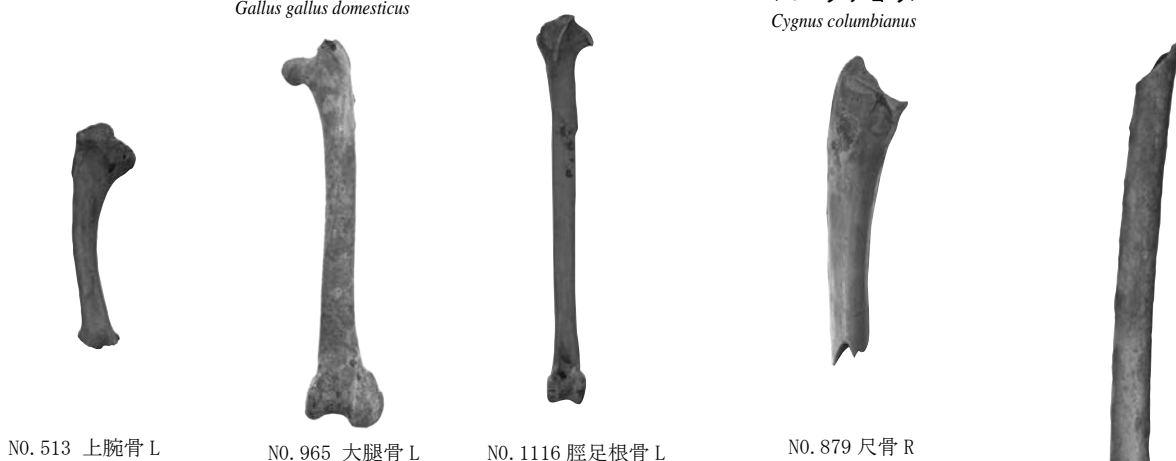
NO. 1330 椎骨棘

0 3 cm

■鳥類

<ニワトリ>
Gallus gallus domesticus

<コハクチョウ>
Cygnus columbianus



NO. 513 上腕骨 L

NO. 965 大腿骨 L

NO. 1116 脛足根骨 L

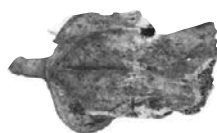
NO. 879 尺骨 R

■哺乳類 (1)

<イヌ>
Canis lupus familiaris



NO. 1575 下顎骨 L



NO. 1570 軸椎



NO. 1368 胸椎

NO. 1529 尺骨 R



NO. 1401 橈骨 L

NO. 1368 脛骨 L



NO. 1395 脛骨 R



NO. 1535 大腿骨 R

NO. 1525 大腿骨 R

<テン>
Martes melampus



NO. 299 下顎骨 L

<タヌキ>
Nyctereutes procyonoides



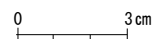
NO. 1296 脛骨 L



NO. 1399 下顎骨 L 細かく割れていた顎



NO. 1401 短くカットされたイヌの骨の一例



■哺乳類(2)

<イノシシ>

Sus scrofa



NO. 1376 上顎骨 R (下面観)



NO. 1636 橈骨 R

<ニホンジカ>

Cervus nippon



NO. 1528 鹿角



NO. 1636 橈骨 R



NO. 316 橈骨 L



<ウシ>

Corbicula japonica



NO. 334 尺骨 R



NO. 1102 脛骨 L

<ウマ>

Equus caballus



暗渠下 下顎骨 R+結合部



NO. 1429 上腕骨 R



NO. 748 橈骨 R



NO. 1423 肩甲骨 L



NO. 1430 寛骨 R



NO. 425 脛骨 L



図版 5 哺乳類 (2)

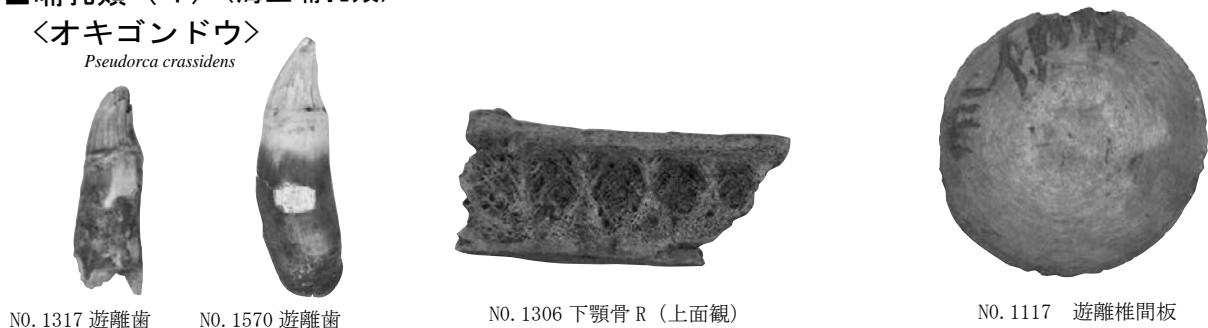
■哺乳類（3）（ウマ遊離歯）



■哺乳類（4）（海生哺乳類）

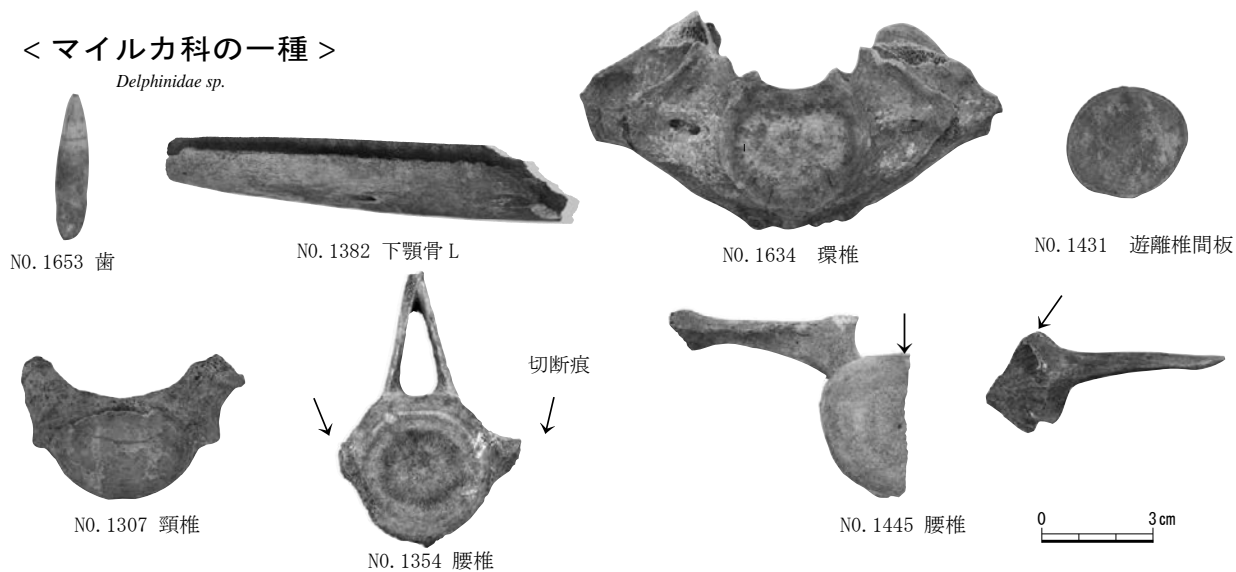
＜オキゴンドウ＞

Pseudorca crassidens



＜マイルカ科の一種＞

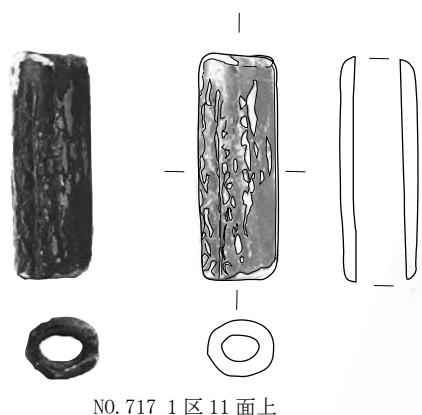
Delphinidae sp.



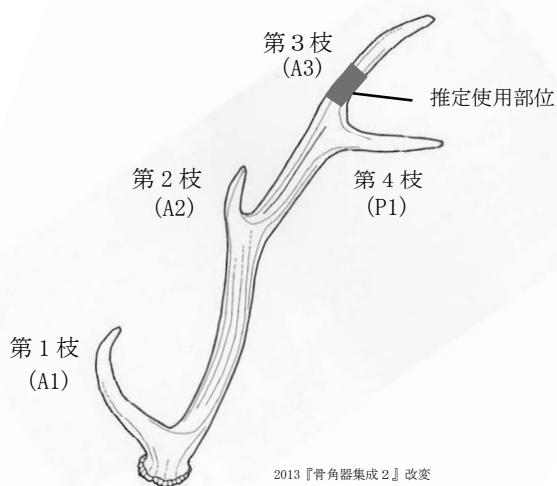
図版 6 哺乳類（3） ウマ遊離骨・哺乳類（4） 海生哺乳類

■骨角器

●馬具〈鞍 しおで〉

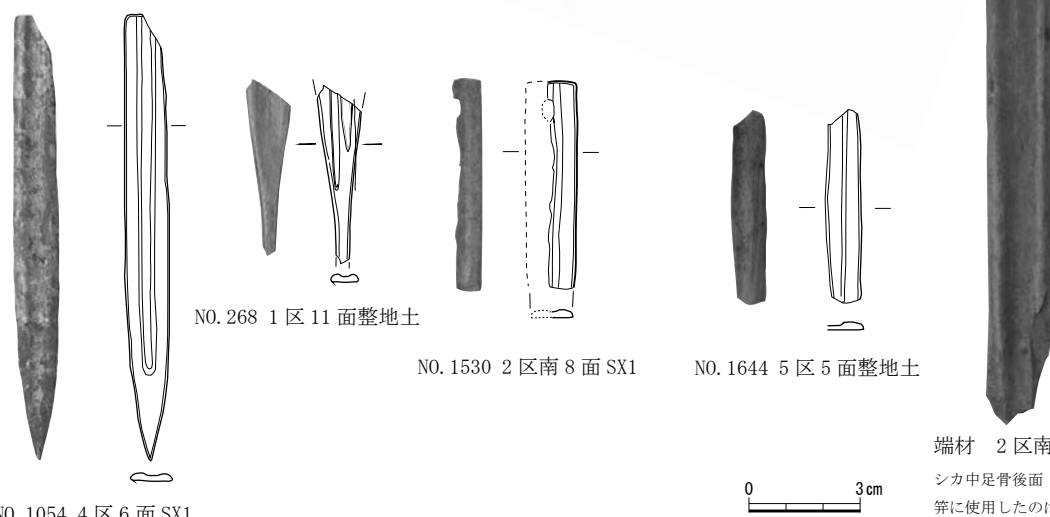


NO. 717 1区11面上



2013『骨角器集成2』改変

●刀装具〈筭 こうがい〉



NO. 1054 4区6面SX1

NO. 268 1区11面整地土

NO. 1530 2区南8面SX1

NO. 1644 5区5面整地土

端材 2区南8面
シカ中足骨後面
筭に使用したのは前面



■種実類

〈オニグルミ（核）〉

ブナ目クルミ科クルミ属
Juglans mandshurica var. *sieboldiana*



〈ウリ科の一種〉 原寸



〈モモ（核）〉

バラ科スモモ属
Prunus persica

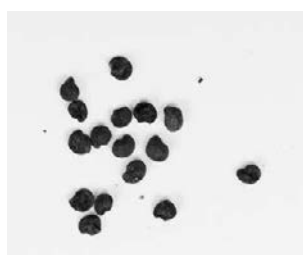


〈ウメ（核）〉

バラ目バラ科サクラ属
Prunus mume



〈雑穀類〉 原寸



■ウマ検出状況



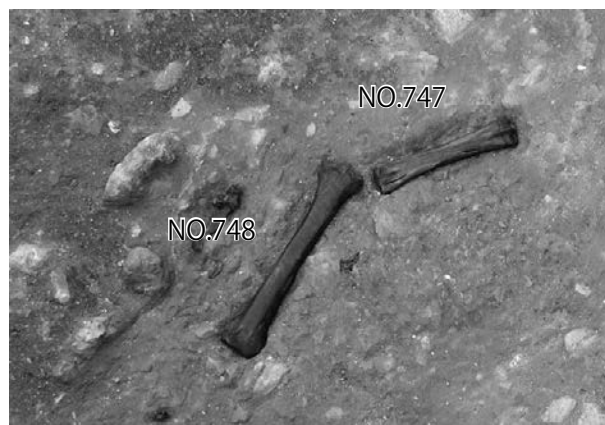
2区南7面上 NO.1424 脛骨 L



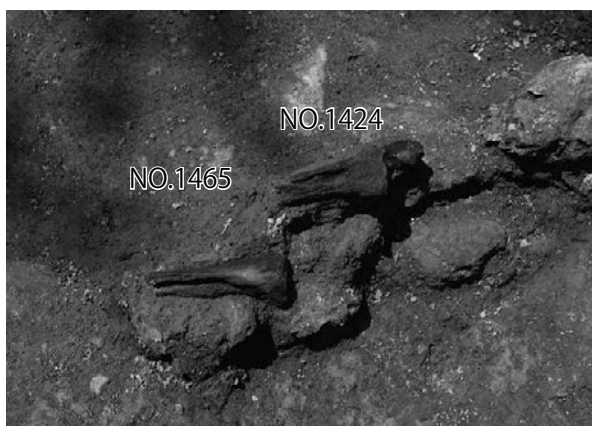
2区南7面上 上顎遊離歯集中出土状態
NO.1409～1418 (1411・1413・1417を除く)



1・2区6面下包含層 NO.682 下顎遊離歯 P4 (R)



1・2区12面上 NO.748 橈骨 R・尺骨 R
NO.747 中手骨 R(第Ⅱ中手骨欠)



2区南7面上 NO.1465 橈骨 L 近位端部
NO.1424 橈骨・尺骨 R 近位端部



4区 暗渠下 下顎骨 (L Rは結合部のみ残)

第 6 章 大倉幕府周辺遺跡群の自然科学分析

株式会社 パレオ・ラボ

放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadze・黒沼保子

1. はじめに

鎌倉市に位置する大倉幕府周辺遺跡群（鎌倉市 No.49）より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

試料は、SA1 の SKP2 と SKP4 から出土した礎盤が各 1 点の、合計 2 点である。試料は、2 点とも最終形成年輪が残存しておらず、部位不明であった。

測定試料の情報、調製データは表 1 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-50875	遺構：SKP4	種類：生材（スギ） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 器種：礎板 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-50876	遺構：SKP2	種類：生材（スギ） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 器種：礎板 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）

3. 結果

表 2 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、図 1 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1 \sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る

確率が 68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（ ^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.4（較正曲線データ：IntCal20）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.27% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.45% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-50875	-23.32 ± 0.24	1044 ± 19	1045 ± 20	994– 997 cal AD (8.80%) 1001–1021 cal AD (59.47%)	979– 983 cal AD (1.12%) 989–1029 cal AD (94.33%)
PLD-50876	-24.91 ± 0.21	1082 ± 19	1080 ± 20	899– 918 cal AD (23.88%) 959– 966 cal AD (6.11%) 974– 994 cal AD (36.62%) 1008–1010 cal AD (1.65%)	894– 927 cal AD (30.61%) 946– 996 cal AD (54.95%) 1003–1020 cal AD (9.89%)

4. 考察

以下、各試料の暦年較正結果のうち 2σ 暦年代範囲（確率 95.45%）に着目して結果を整理する。

SKP4 出土の礎盤（PLD-50875）は、979– 983 cal AD (1.12%) および 989–1029 cal AD (94.33%) の暦年代範囲を示した。これは 10 世紀後半～ 11 世紀前半で、平安時代中期から後期に相当する。

SKP2 出土の礎盤（PLD-50876）は、894– 927 cal AD (30.61%)、946– 996 cal AD (54.95%)、1003–1020 cal AD (9.89%) の暦年代範囲を示した。これは 9 世紀末～ 11 世紀前半で、平安時代前期から中期に相当する。

木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料は、2 点とも最終形成年輪が残存しておらず、残存している最外年輪のさらに外側にも年輪が存在していたはずである。したがって、木が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果の年代よりもやや新しい時期であったと考えられる。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337–360.
- 中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」：3–20，日本第四紀学会．
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen,

K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

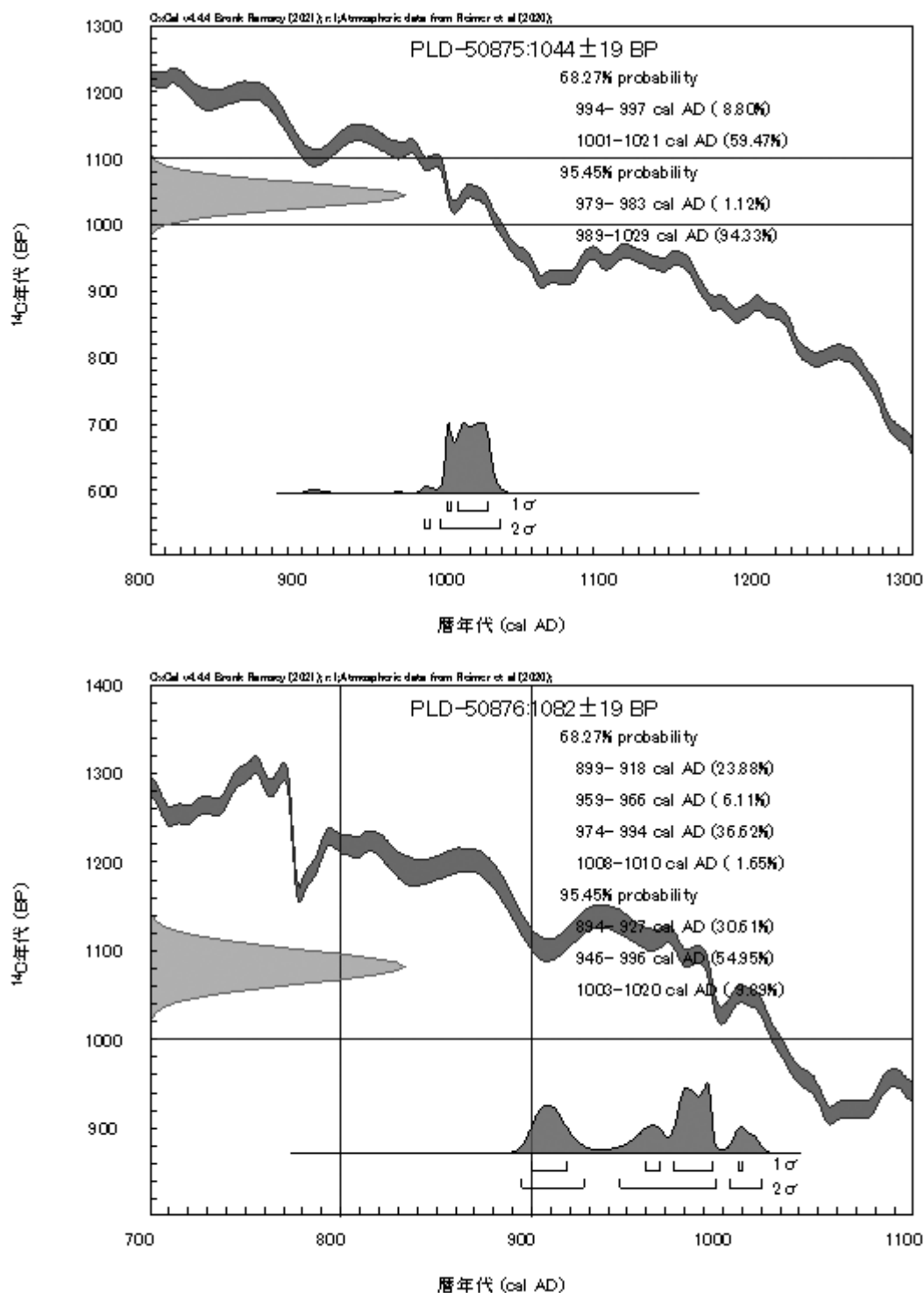


圖 1 曆年較正結果

木材の樹種同定

黒沼保子（パレオ・ラボ）

1. はじめに

鎌倉市の大倉幕府周辺遺跡群（鎌倉市 No.49）から出土した木材 2 点について樹種同定を行った。なお、同じ試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

2. 試料と方法

試料は、SA1 の SKP4 と SKP2 から出土した礎板が各 1 点の、合計 2 点である。

これらの試料から、剃刀を用いて 3 断面（横断面・接線断面・放射断面）の切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察および同定し、写真撮影を行った。

3. 結果

樹種同定の結果、2 点とも針葉樹のスギであった。結果を表 1 に示す。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を図版に示す。

・スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don ヒノキ科 図版 1 1a-1c（分析 No.1）、2a-2c（分析 No.2）

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔は大型のスギ型で、1 分野に通常 2 個並ぶ。

スギは暖帯から温帯下部に生育する常緑高木である。材は比較的軽軟で、切削加工は容易であり、割裂性は大きい。

表1 樹種同定結果

分析No.	遺構	器種	樹種	木取り	年代測定番号
1	SA1SKP4	礎板	スギ	板目	PLD-50875
2	SA1SKP2	礎板	スギ	板目	PLD-50876

4. 考察

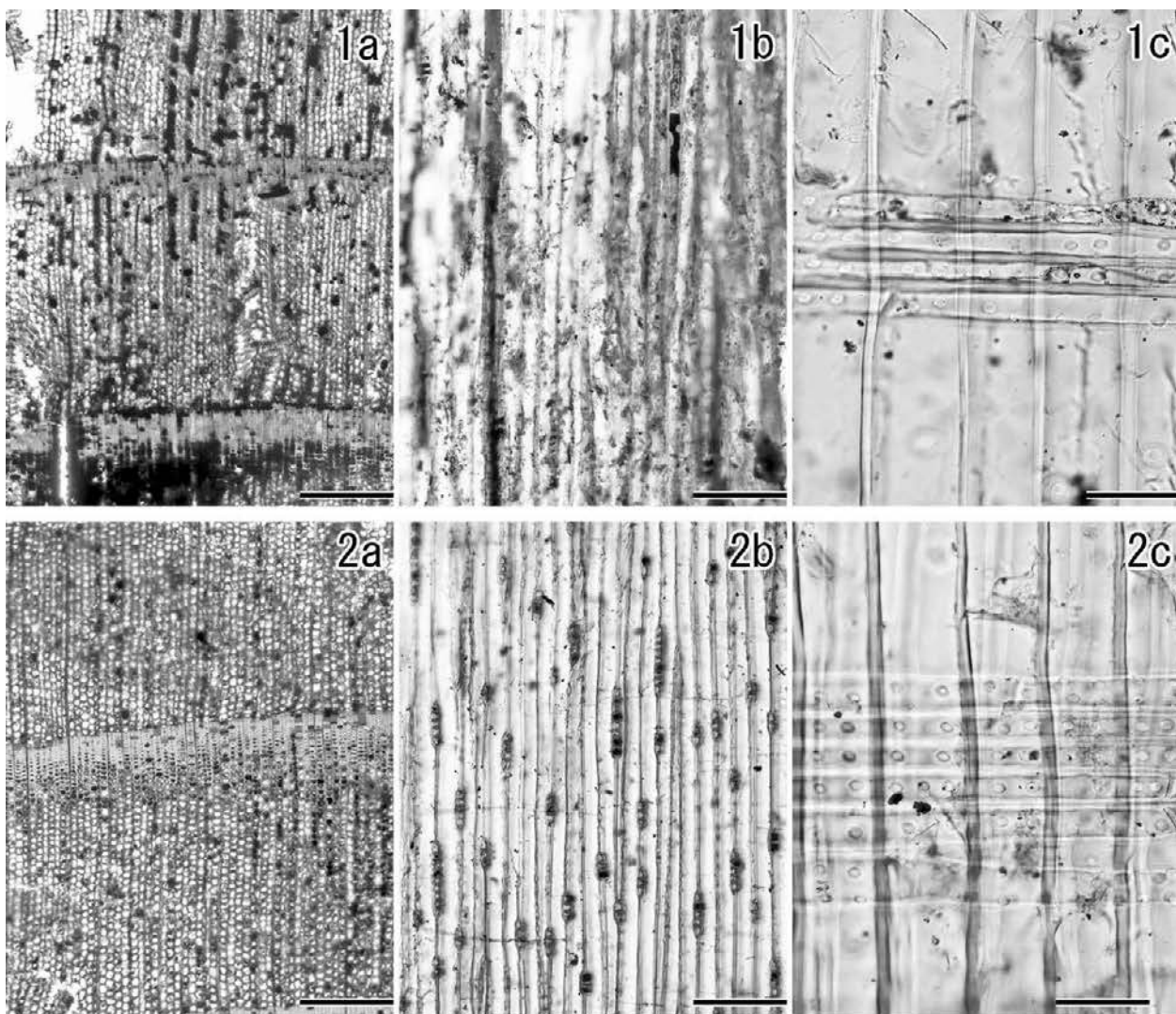
SA1 の SKP4 と SKP2 出土の礎板はどちらもスギで、木取りは板目であった。スギの材は、軽軟で割裂性も大きく、加工や製材が容易である（平井，1996）。中世の鎌倉周辺では、建築部材や井戸材にスギを多用する傾向がみられており（伊東・山田編，2012）、今回の結果も周辺地域の木材利用傾向と一致している。

引用・参考文献

平井信二（1996）木の大百科．394p，朝倉書店．

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌．238p，海青社．

伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学－出土木製品用材データベース－．449p，海青社．



図版1 木材の光学顕微鏡写真

1a-1c. スギ (分析No. 1) 、2a-2c. スギ (分析No. 2)

a : 横断面 (スケール=500 μ m) 、b : 接線断面 (スケール=200 μ m) 、c : 放射断面 (スケール=50 μ m)

大倉幕府周辺遺跡群（鎌倉市№.49）のプラント・オパール分析

森 将志・鈴木 茂（パレオ・ラボ）

1. はじめに

大倉幕府周辺遺跡群（鎌倉市№.49）では、水田層の検討を目的として、堆積物試料が採取された。以下では、試料について行ったプラント・オパール分析の結果を示し、水田層と遺跡周辺の当時のイネ科植物相について検討した。

2. 試料と方法

分析試料は、6区南東壁セクションの H57 から採取された 5 試料（Ⅱ～Ⅴ層）と、6区南東壁セクションの H63 から採取された 4 試料（Ⅱ～Ⅳ層）の、計 9 試料である（表 1）。このうち、Ⅲ層にはアメーバ状の落ち込みが多数確認されており、踏み抜き痕の可能性が考えられている。これらの試料について、以下の処理を施し、分析を行った。

秤量した試料を乾燥後、再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約 1g（秤量）をトールビーカーにとり、約 0.02g のガラスビーズ（直径約 0.04mm）を加える。これに 30% の過酸化水素水を約 20 ～ 30cc 加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波洗浄機による試料の分散後、沈降法により 0.01mm 以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体由来するプラント・オパールについて、ガラスビーズが 300 個に達するまで行った。また、植物珪酸体の写真を撮り、図版 1 に載せた。

表1 分析試料一覧

調査区・セクション	位置	層位	時期	岩質
6区南東壁セクションの	H57	Ⅱ層	-	黒褐色（10YR3/2）シルト
		Ⅲ層		暗褐色（10YR3/3）シルト
		Ⅲ'層		黒褐色（7.5YR3/2）粘土質シルト
		Ⅳ層		黒褐色（10YR2/2）粘土質シルト
		Ⅴ層	弥生時代後期	黒色（10YR2/1）粘土質シルト
	H63	Ⅱ層	-	黒褐色（10YR2/2）シルト
		Ⅲ層		黒褐色（10YR3/2）シルト
		Ⅲ'層		黒褐色（10YR3/2）粘土質シルト
		Ⅳ層		黒褐色（10YR2/2）粘土質シルト

3. 結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料 1g 当りの各プラント・オパール個数を求め（表 2）、分布図に示した（図 1）。

9 試料を検鏡した結果、イネ機動細胞珪酸体とネザサ節型機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞珪酸体、タケ亜科機動細胞珪酸体、ヨシ属機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体、ジュズダマ属機動細胞珪酸体の 8 種類の産出が確認できた。このうち、イネ機動細胞珪酸体に注目すると、H63 のⅣ層以外の試料で検出されており、H63 のⅡ～Ⅲ'層では 2,600 ～ 7,800 個 /g、H57 のⅡ～Ⅴ層では 1,600 ～ 19,600 個 /g の産出量を示す。

表2 試料1g当りのプラント・オパール個数

	イネ (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	ササ属型 (個/g)	タケ亜科 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	ジュズダマ属 (個/g)	不明 (個/g)
H57 II層	10,400	111,300	11,700	10,400	10,400	25,900	37,500	0	5,200
H57 III層	11,100	181,800	12,500	22,200	4,200	20,800	58,300	0	11,100
H57 III'層	16,300	197,100	13,300	17,800	4,400	28,200	47,400	0	11,900
H57 IV層	19,600	167,300	18,100	13,600	6,000	7,500	49,700	1,500	4,500
H57 V層	1,600	172,200	11,100	7,900	26,900	15,800	71,100	0	26,900
H63 II層	7,800	65,200	6,500	6,500	3,900	6,500	48,200	0	3,900
H63 III層	2,600	97,400	3,900	6,600	0	11,800	46,100	0	7,900
H63 III'層	4,200	81,800	2,800	5,600	2,800	7,100	53,600	0	2,800
H63 IV層	0	29,800	1,600	1,600	3,100	7,900	36,100	0	4,700

4. 考察

以下では、分析結果を下位層準から見ていく。弥生時代後期とされる H57 の V 層では、ネザサ節型機動細胞珪酸体が最も多く産出しており、次いで、ウシクサ族機動細胞珪酸体、ヨシ属機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞珪酸体が産出している。これらの分類群から考えると、V 層堆積時には、主にネザサ節型のササ類が分布を広げており、ウシクサ族やキビ族、ササ属型のササ類が生育していた可能性がある。また、湿地的環境には抽水植物のヨシ属も生育していたと考えられる。さらに、イネ機動細胞珪酸体も検出されており、何らかの要因でイネの葉身も堆積していたと考えられる。

その上位の IV 層では、H57 と H63 の両地点で植物珪酸体を得られた。両地点の産出量に注目すると、H63 の方が全体的に少ない。IV 層以上の層準においても、H63 の方が産出量が少ない傾向にある。このような傾向を示す要因として、H57 と H63 周辺のイネ科植物の分布が異なっていた可能性や、堆積物への植物珪酸体の取り込まれ方（タフオノミー）が H57 と H63 で異なっていた可能性などがある。

また、H57 の IV 層ではイネ機動細胞珪酸体が検出された。イネ機動細胞珪酸体の産出量については、試料 1g 当り 5,000 個以上検出された地点の分布範囲と、実際の発掘調査で検出された水田址の分布がよく対応する結果が得られており（藤原，1984）、試料 1g 当り 5,000 個が水田土壌か否かを判断する目安とされている。H57 の IV 層では 19,600 個/g の産出量を示しており、水田土壌の目安を大幅に上回る。よって、IV 層堆積時には水田が存在していた可能性がある。さらに、ヨシ属機動細胞珪酸体が減少している点を合わせて考えると、ヨシ属が生育していた湿地的環境を開拓して水田稲作が営まれていた可能性がある。ただし、H63 の IV 層ではイネ機動細胞珪酸体は検出されていない。地点間でイネ機動細胞珪酸体の産出量に大幅な相違があるため、水田の分布が限られていた可能性や、水田とは別の要因で H57 の IV 層にイネの葉身が堆積していた可能性などが考えられる。

その他では、産出量に違いがあるものの、両地点ともにネザサ節型機動細胞珪酸体やウシクサ族機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞珪酸体などが検出されており、これらの分類群が周辺に分布していたと考えられる。

III' ～ II 層では、両地点ともにイネ機動細胞珪酸体が検出されている。踏み抜き痕と考えられている構造が確認されている III 層に注目すると、H57 では水田土壌の目安を上回り、水田の存在を指摘できるが、H63 では水田土壌の目安を下回る。ただし、H63 は植物珪酸体の産出量が全体

的に少ない傾向を示す点を考慮すると、H63 のⅢ層でも水田が存在していた可能性は高い。また、両地点ともにⅢ'層とⅡ層のイネ機動細胞珪酸体が水田土壌の目安を上回るか、それに近い産出量を示しているため、Ⅲ'層とⅡ層の堆積時期においても水田が存在していたか、イネの葉身が多く堆積する環境であったと考えられる。

その他では、両地点ともにネザサ節型機動細胞珪酸体やウシクサ族機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞珪酸体などが検出されており、これらの分類群が生育していたと考えられるが、産出量が大きく変動するのがネザサ節型機動細胞珪酸体である。H63 では、Ⅳ層からⅢ'層にかけて大幅に産出量が増加しているため、Ⅲ'層堆積時の H63 周辺にはネザサ節型のササ類が分布を広げていたと考えられる。一方で H57 では、Ⅲ層からⅡ層にかけて減少している。ヨシ属機動細胞珪酸体が増加している点と合わせて考えると、H57 周辺では、ネザサ節型のササ類が生育していた場所が何らかの要因により湿潤化し、ヨシ属が生育するようになった可能性がある。

引用文献

藤原宏志（1984）プラント・オパール分析法とその応用－先史時代の水田址探査－．考古学ジャーナル，227，2-7

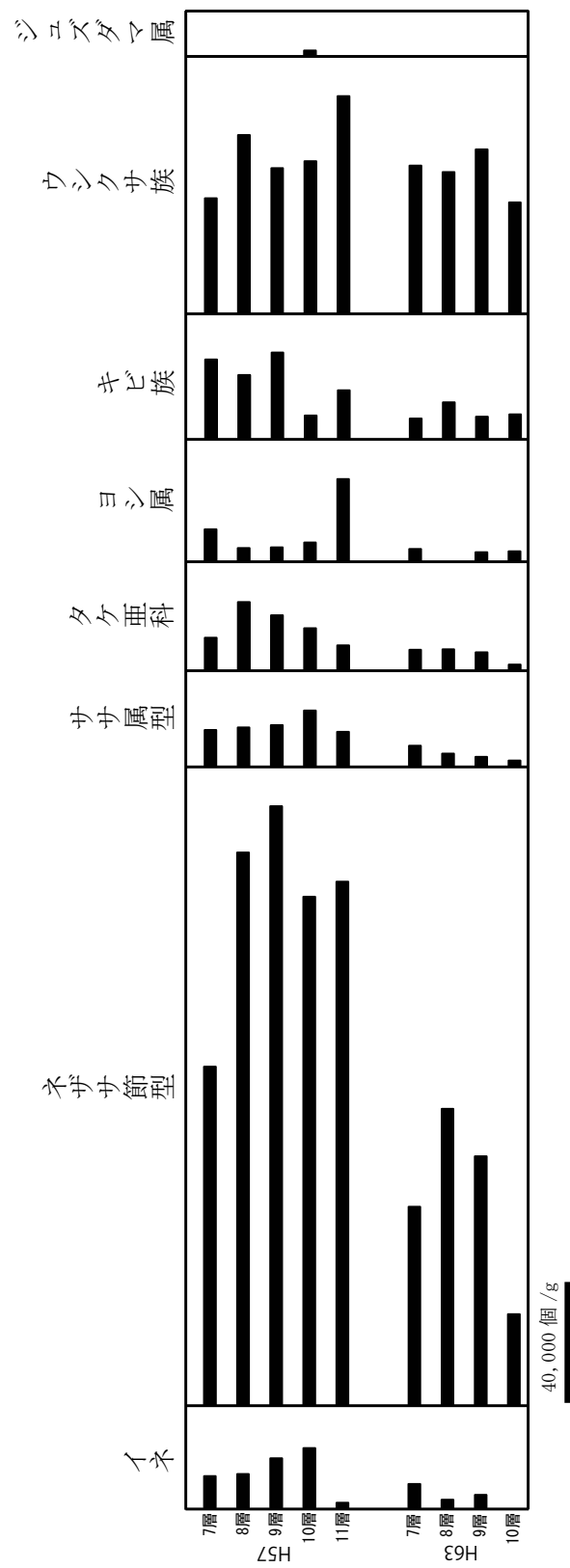
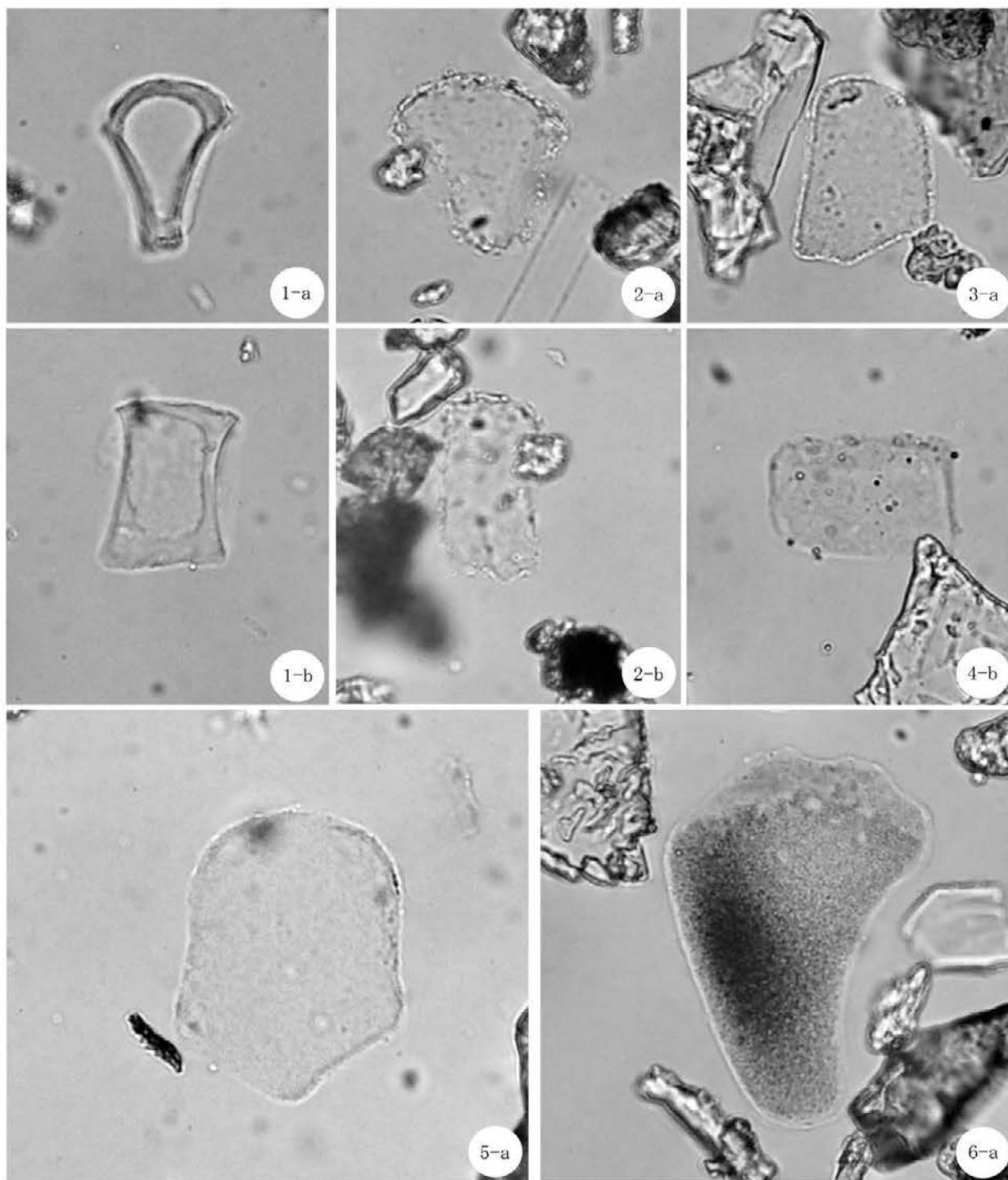


図 1 植物珪酸体分布図



0.03mm

図版1 H63の7層から産出した植物珪酸体

- | | | |
|---------------|-----------------|-----------------|
| 1. イネ機動細胞珪酸体 | 2. ネザサ節型機動細胞珪酸体 | 3. ササ属型機動細胞珪酸体 |
| 4. キビ族機動細胞珪酸体 | 5. ヨシ属機動細胞珪酸体 | 6. ウシクサ族機動細胞珪酸体 |
- a:断面 b:側面

第7章 まとめ

今回の調査では、上段13面、下段7面の生活面を検出した。これらの大半は大小の泥岩塊を整地層に用いて生活面を構築しているが、6区7面以下は自然堆積土を削平して生活面を作出していると考えている。調査着手前は、現在の校地と同じく雛壇状に生活面を構築しているものと推測していたが、実際には4章で述べたように、整地面はすべて南に向かってわずかに下降していた。1・2区西壁で観察した12面の傾斜をみると、南に向かって約2°の勾配をもつことが確認でき、これを延長すると4区6面に接続する。5区では調査区西側で道路を検出しており、まっすぐに北東に延伸すると仮定した場合、上段と下段は道路を挟んだ別の区画ということになるが、出土遺物の時期や活発な遺構造営など特徴が共通しており、上段12面と下段6面は同一時期の所産と判断した。

第1節 検出遺構

検出した遺構は、上段19基、下段166基と、調査面積からみて非常に少ない。特に上段1・2区は7面と12面の東西溝以外に目立った遺構がなく、整地面の状況と考え合わせて基本的には道路か屋敷内の空閑地と考えている。1・2区整地面は当初、整地層の状況から道路の可能性が高いと考えていたが、後に5区で道路を検出したことや、4区6・8面で検出した遺構の存在を考えると、屋敷の空閑地と考えた方が合理的なのかもしれない。下段では、4区6・8面で庭園の存在を思わせる大型土坑・石列を、5区6面では道路に面した柵列・門といった区画に伴う遺構を集中的に検出した。

5区6b面の柱穴列

SA1については、門であろうと考えている。柱穴の数と、中央のSKP3の形状から判断して作り替えを行っているのであろう。SKP5は礎板が動いている可能性があるもののSKP2-3とSKP4-5はほぼ同じ間隔をもっており、この並びが廃絶時の姿ではないかと推測する。開口部の幅は、どのような組み合わせでも2mを超えることはない。SA1に伴うと考えているSA3やSA5は深い柱穴が主体的であるが、SA2とSA4は規模や間隔、深さなどあらゆる点で不揃いであり、SA1廃止後に粗末な柵を巡らせたものと推測する。

4区6面の大型土坑

SX1とした不整形の大型土坑は、南北方向に17m以上という巨大な土坑である。詳しくは遺物の項で述べるが、遺物の出土量はかわらけと箸状木製品が突出しており、これらは饗宴後の一括廃棄物と思われる。遺構の規模からみて、池ではないかと考えている。

4区8面の石列

南北20m以上にわたって検出した安山岩や硬質凝灰岩を用いた石列で、北側では溝と重複する。両者の関係はよくわからないが、基本的には溝の東縁に沿う形で石を置いている。溝より南側では面が西に向かってわずかに下降しており、池の汀線に置いたのではないかと推測する。なお、調査区西壁では8面SX1以南に同種同寸法の石列が確認でき、石列の延長ではないかと考えている。

遺構方位について

検出遺構の方位について、上段は2区南で検出した溝の一部を除き、N-28°-E（もしくはその直交方向）前後、下段は8面石列と溝がやはりN-28°-E前後、5区の道路と溝は4面がN28.2°-E、5面がN-25.7°-E、6b面がN-35.2°-Eと、北北東-南南西方向を基軸としている。10面下で検出

したSR1が方位N-32.6°-Eを指すことから、検出した遺構は西御門川を方位基準として展開しているものとみられる。周辺の調査地点で近似する方位で遺構を設けているのは、図2-2地点と政所跡に属する各地点、鶴岡八幡宮境内研修道場用地の発掘調査で検出した土塁状遺構や建物の一部などで、本調査地点の西・南側にその範囲が広がるようである。一方、大倉幕府跡に属する地点やその東側の各地点では、真北-真南か東御門川を方位基準として遺構を展開しているようであり、これは東御門川から離れた図2-27・28地点でも変わらない。

ところで、政所跡に属する図2-33・34・40では、横大路とそれに直交する南北の大溝と道路の一部が検出されている。図112に本調査地点5区6b面の遺構群と図2-2,33地点の全体図を合成してみたが、5区で検出した道路と政所跡で検出された南北方向の道路に直接関連はないようである。図113には本調査地点周辺の中世基盤層標高を載せてみたが、これをみると現在の六浦道に沿って滑川による自然堤防が形成されているようである。2地点を境に西側は急激に落ち込んでおり、当該期の西御門川は調査地点の西側を流下して自然堤防が途切れる2地点の西側で大きく向きを変え、滑川に合流していたものと推測する。ちょうどこの辺りで政所跡の南北溝・道路と六浦道の東西溝・道路が接続するようであり、本調査地点で検出した道路は現在と同じくそこから派生するのであろう。

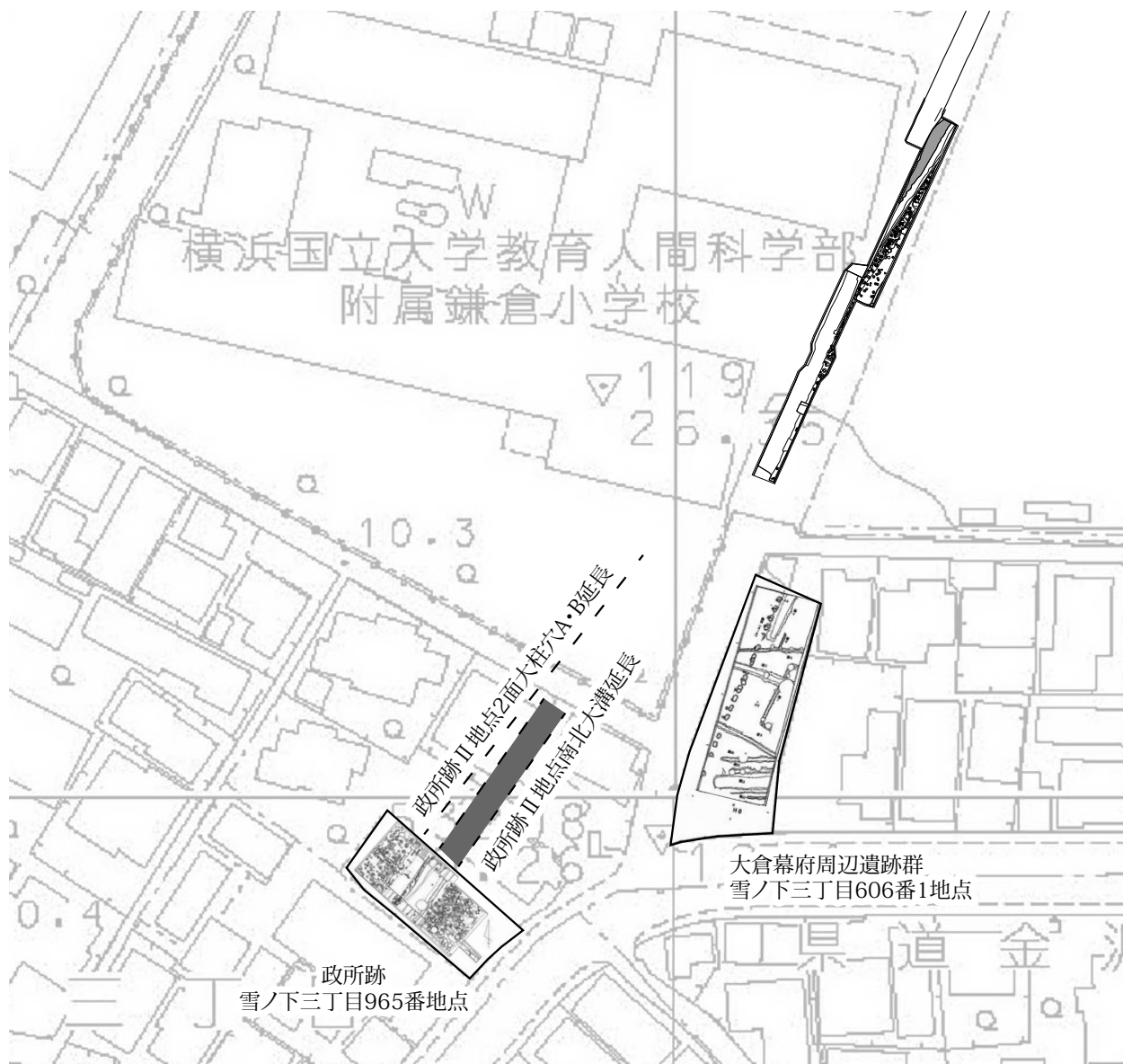


図112 本調査地点と周辺遺跡の道路・溝・柱穴列方位

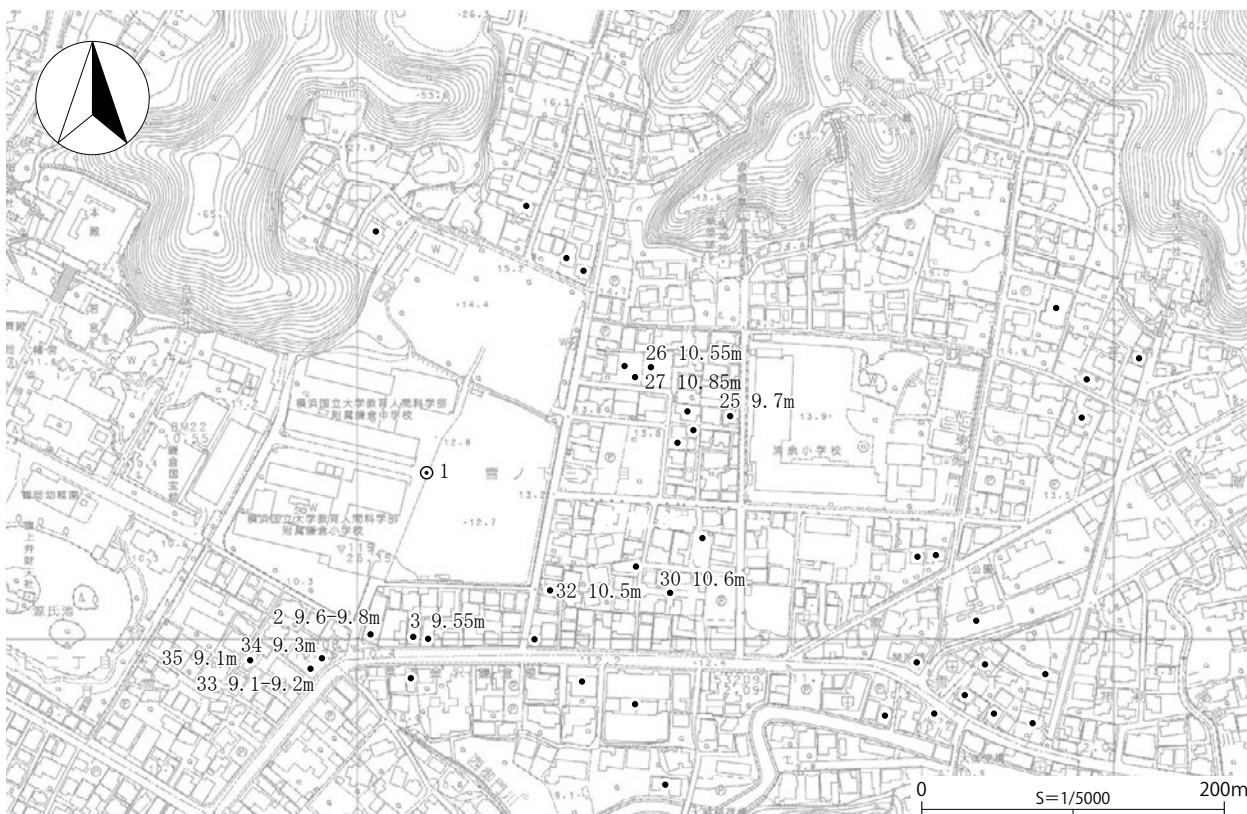


図 113 周辺遺跡の中世基盤層標高

6 区の土地利用について

6 区 8 面では黄褐色粘土質シルト層上で人為的な踏み抜きや水生植物の根痕などがほぼ全面で確認でき、H57 付近では水田の存在を裏付けるに十分な量のプラント・オパールを検出した。分析報告では、同様に多量のプラント・オパールを検出した 7・9 面と共に水田が存在したか、イネの葉身が多く堆積する環境であったらうという、当該地における中世初期の地理的環境に関わる興味深い見解が示されている。また、V 層堆積段階に対する II～IV 層堆積段階での土壌湿潤化も指摘されており、少なくとも中世における屋敷地の開発が始まった頃には、水田に適した湿地環境が存在していたものと推測する。

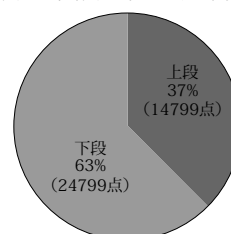
第 2 節 出土遺物

出土遺物は土器・陶磁器類、金属製品、銭貨、石製品、木製品、自然遺物など約 4 万点、遺物収納用コンテナ約 190 箱分である。出土遺物の 8 割弱を土器・陶磁器類が占め、次いで木製品が 2 割弱となる（図 114）。上段（1・2 区）、下段（4-6 区）の割合は 6：4 で、遺構を多く検出した下段の方が多い。

土器・陶磁器類の出土割合

図 115,116 に整地面毎の土器・陶磁器出土割合を示した。多くの面で出土量が 7 割を超えるかわらけと常滑焼が全体の 9 割近くを占め、次に輸入陶磁器が続く

上段・下段の出土遺物量比



出土遺物の内訳

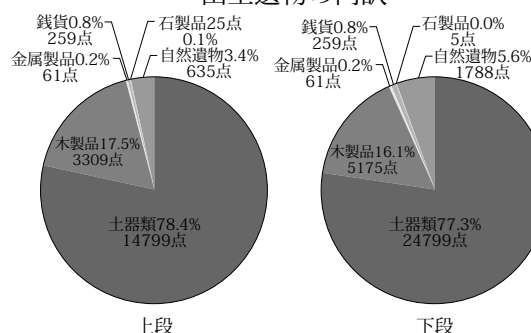


図 114 上段／下段出土遺物内訳

1 面上堆積土 (94 点／ 1702.2g)	1 輸入陶磁器 3.2% (3 点／ 74.6g) 2 瀬戸 2.1% (2 点／ 24.2g) 3 常滑 10.6% (10 点／ 494.1g) 4 かわけ 83% (78 点／ 1009.7g)	5 瓦 1.1% (1 点／ 99.6g)
1 面 (315 点／ 4166.6g)	1 輸入陶磁器 3.4% (11 点／ 61.6g) 2 瀬戸 1.5% (5 点／ 79.9g) 3 常滑 21% (69 点／ 2217.6g) 4 かわけ 70.1% (230 点／ 1807.5g)	5 瓦 0.6% (2 点／ 75.8g) 6 瓦質土器 1.5% (5 点／ 292.0g) 7 山茶碗 1.5% (5 点／ 113.7g) 8 産地不明陶器 0.3% (1 点／ 20.7g)
2 面 (485 点／ 7122.5g)	1 輸入陶磁器 3.7% (18 点／ 128.3g) 2 瀬戸 1.4% (7 点／ 162.3g) 3 常滑 16.7% (81 点／ 2987.7g) 4 かわけ 74.8% (363 点／ 3121.5g)	5 瓦 0.4% (2 点／ 367.6g) 6 瓦質土器 0.2% (1 点／ 39.0g) 7 山茶碗 2.5% (12 点／ 305.1g) 8 魚住 0.2% (1 点／ 11.0g)
3 面 (243 点／ 5083.0g)	1 輸入陶磁器 4.5% (11 点／ 85.4g) 2 瀬戸 2.1% (5 点／ 106.2g) 3 常滑 40.3% (98 点／ 3615.3g) 4 かわけ 49.8% (121 点／ 1017.9g)	5 瓦質土器 0.4% (1 点／ 7.6g) 6 瓦器 0.4% (1 点／ 26.4g) 7 山茶碗 2.5% (6 点／ 224.2g)
4 面 (371 点／ 6827.3g)	1 輸入陶磁器 3.0% (11 点／ 82.9g) 2 瀬戸 3.0% (11 点／ 201.4g) 3 常滑 31.8% (118 点／ 4104.6g) 4 かわけ 55.3% (205 点／ 1686.3g) 5 瓦 0.5% (2 点／ 214.2g)	6 瓦質土器 1.1% (4 点／ 87.5g) 7 山茶碗 4.9% (18 点／ 420.1g) 8 渥美 0.3% (1 点／ 18.1g) 9 備前 0.3% (1 点／ 12.2g)
5 面 (836 点／ 7703g)	1 輸入陶磁器 5.4% (45 点／ 234.5g) 2 瀬戸 3.0% (25 点／ 481.3g) 3 常滑 23.3% (195 点／ 1677.6g) 4 かわけ 64.6% (540 点／ 4557.2g) 5 瓦 0.2% (2 点／ 212.5g)	6 瓦質土器 0.8% (7 点／ 133.1g) 7 山茶碗 1.8% (15 点／ 199.5g) 8 渥美 0.6% (5 点／ 183.8g) 9 備前 0.2% (2 点／ 23.5g)
6 面 (1099 点／ 17359.1g)	1 輸入陶磁器 5.4% (59 点／ 430.3g) 2 瀬戸 2.1% (23 点／ 397.8g) 3 常滑 25.2% (277 点／ 9680.2g) 4 かわけ 64.3% (707 点／ 5681.9g) 5 瓦 0.3% (3 点／ 116.0g)	6 瓦質土器 0.8% (9 点／ 419.4g) 7 山茶碗 1.5% (16 点／ 358.7g) 8 渥美 0.3% (3 点／ 103.7g) 9 土師質土器 0.2% (2 点／ 71.1g)
7 面 (740 点／ 12210.9g)	1 輸入陶磁器 7.4% (55 点／ 381.4g) 2 瀬戸 0.5% (4 点／ 40.6g) 3 常滑 45.3% (335 点／ 8489.0g) 4 かわけ 42.6% (315 点／ 2174.3g) 5 瓦 0.5% (4 点／ 568.7g)	6 瓦質土器 0.5% (4 点／ 116.0g) 7 山茶碗 1.8% (13 点／ 112.0g) 8 渥美 1.1% (8 点／ 260.3g) 9 亀山 0.3% (2 点／ 68.6g)
8 面 (846 点／ 10979.6g)	1 輸入陶磁器 0.9% (8 点／ 73.7g) 2 瀬戸 0.8% (7 点／ 77.1g) 3 常滑 17.4% (147 点／ 4771.5g) 4 かわけ 79.0% (668 点／ 5659.7g)	5 瓦質土器 0.4% (3 点／ 54.1g) 6 山茶碗 0.7% (6 点／ 97.6g) 7 渥美 0.7% (6 点／ 238.0g) 8 産地不明陶器 0.1% (1 点／ 7.9g)
9 面 (256 点／ 3369.9g)	1 輸入陶磁器 1.2% (3 点／ 107.3g) 2 瀬戸 0.4% (1 点／ 7.2g) 3 常滑 9.4% (24 点／ 1081.8g) 4 かわけ 87.9% (225 点／ 1686.2g)	5 山茶碗 0.4% (1 点／ 8.1g) 6 渥美 0.4% (1 点／ 447.1g) 7 亀山 0.4% (1 点／ 32.2g)
10 面 (5074 点／ 60264.0g)	1 輸入陶磁器 0.8% (73 点／ 790.1g) 2 瀬戸 0.5% (14 点／ 244.4g) 3 常滑 8.3% (420 点／ 14182.7g) 4 かわけ 42.6% (4476 点／ 38376.3g) 5 瓦 0.7% (33 点／ 4183.5g) 6 瓦質土器 0.2% (8 点／ 113.0g) 7 瓦器 0.0% (1 点／ 5.7g)	8 山茶碗 1.2% (60 点／ 1573.6g) 9 渥美 0.1% (7 点／ 479.9g) 10 備前 0.0% (1 点／ 45.8g) 11 亀山 0.0% (2 点／ 99.7g) 12 土師質土器 0.1% (4 点／ 79.3g) 13 伊勢系鍋 0.0% (1 点／ 5.6g) 14 産地不明陶器 0.1% (4 点／ 84.4g)
11 面 (2562 点／ 34253.6g)	1 輸入陶磁器 1.8% (47 点／ 583.7g) 2 瀬戸 0.5% (12 点／ 166.6g) 3 常滑 8.6% (221 点／ 8649.5g) 4 かわけ 86.9% (2226 点／ 22093.6g)	5 瓦 0.5% (12 点／ 1284.0g) 6 瓦質土器 0.0% (1 点／ 9.5g) 7 山茶碗 0.8% (21 点／ 435.0g) 8 渥美 0.9% (22 点／ 1031.7g)
12 面 (1625 点／ 16486.2g)	1 輸入陶磁器 1.2% (20 点／ 255.7g) 2 瀬戸 0.2% (4 点／ 154.9g) 3 常滑 4.7% (77 点／ 3544.4g) 4 かわけ 91.4% (1486 点／ 10766.4g)	5 瓦 0.7% (11 点／ 1160.1g) 6 瓦質土器 0.1% (2 点／ 44.9g) 7 山茶碗 0.6% (10 点／ 151.2g) 8 渥美 0.9% (15 点／ 408.6g)
13 面 (SX1) (94 点／ 1636.2g)	1 輸入陶磁器 8.5% (8 点／ 76.7g) 2 瀬戸 2.1% (2 点／ 67.7g) 3 常滑 5.3% (5 点／ 142.5g) 4 かわけ 74.5% (70 点／ 791.5g)	5 瓦 2.1% (2 点／ 275.0g) 6 山茶碗 1.1% (1 点／ 27.7g) 7 渥美 5.3% (5 点／ 243.0g) 8 産地不明陶器 1.1% (1 点／ 12.1g)

図 115 1・2 区・2 区南中世土器類出土割合

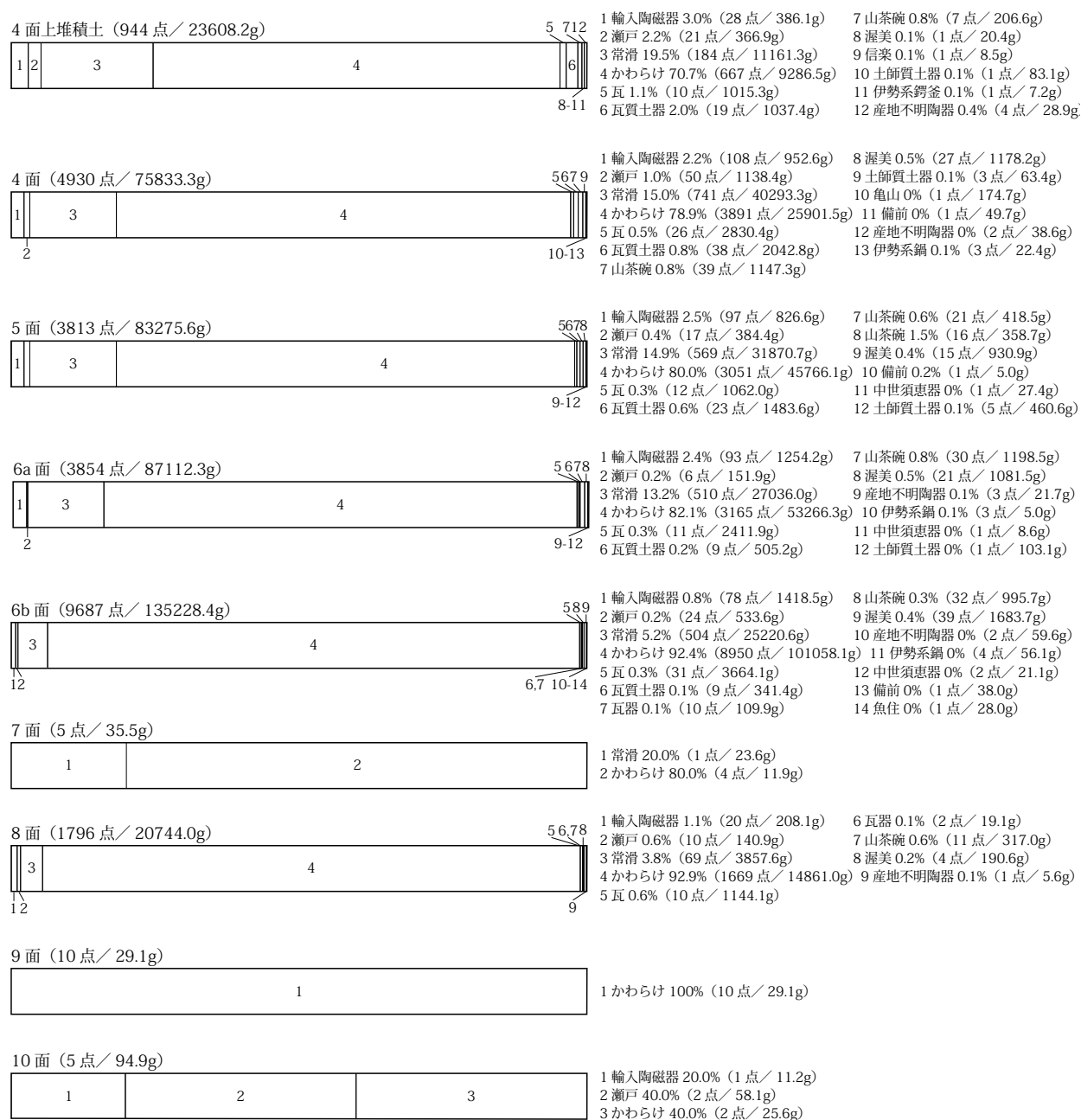


図 116 4-6 区中世土器類出土割合

が、出土量は少ない。

輸入陶磁器は青磁が 5 ～ 8 割、白磁が 1 ～ 2 割を占め、青白磁・陶器が少量出土する。青磁は碗を主体に杯・鉢・皿がある。同安窯系の製品は非常に少ないが、龍泉窯系の製品はⅠ～Ⅲ期にわたって一定量出土している。白磁の主体は口禿皿で、ほかに碗・皿・四耳壺などが少量確認できる。青白磁の大半は梅瓶で、合子も確認できる。陶器は小片が多く機種不明な破片が多いが、盤と耳壺が確認できる。

輸入陶磁器に比べ瀬戸焼製品の出土量は全体に僅少で、最も出土量が多い 5 区 4 面でも破片数は 50 点 (約 1kg) 程度である。器種は瓶子・壺・水注・皿類・碗類・仏花瓶・香炉など多様に渡るが、出土量に偏りは認められない。時期的には古瀬戸中期以降が主体的で、前期のものは少ない。ちなみに、瀬戸焼製品に関しては近世流路や暗渠裏込めから当該期の染付碗・皿が多量、出土している。

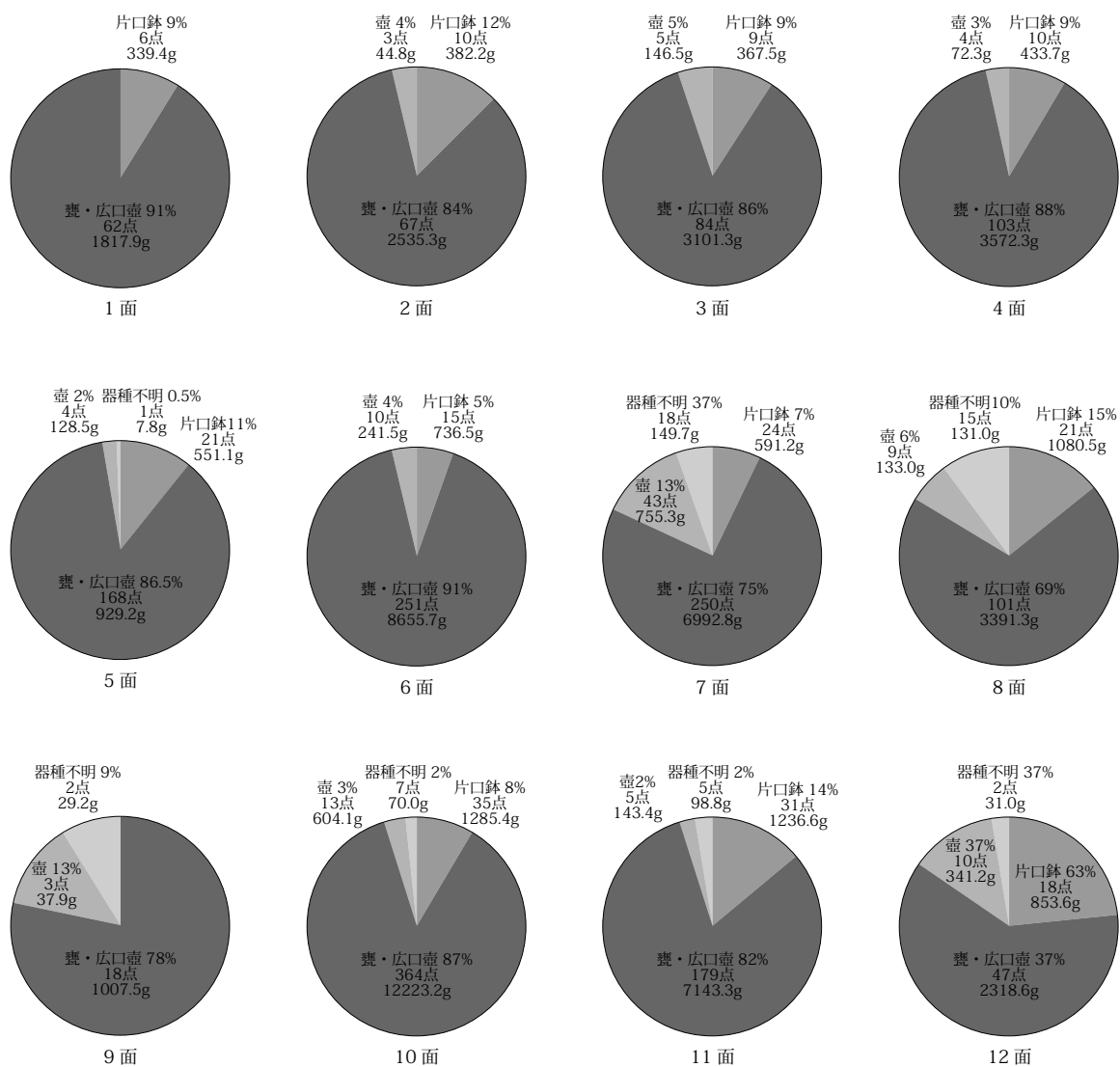


図 117 1・2区・2区南常滑焼製品器種別出土割合

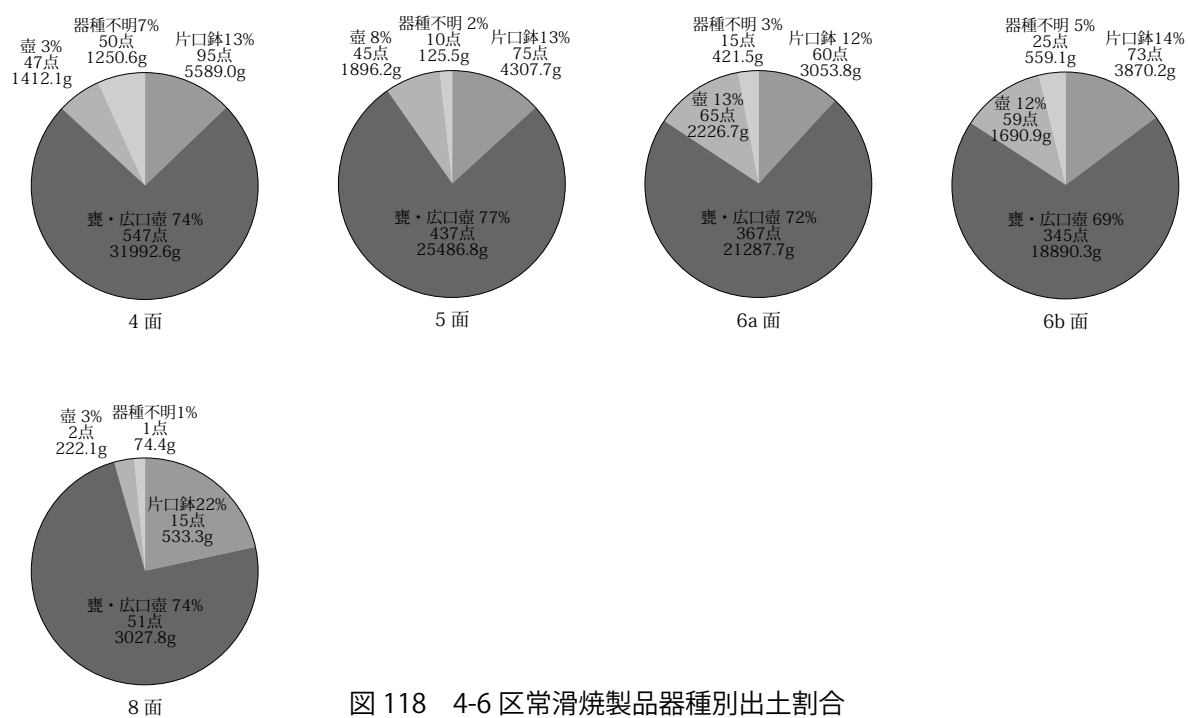


図 118 4-6区常滑焼製品器種別出土割合

1 面上堆積土

T 種	R 種
T 種 17% (10 点 / 124.2g) R 種 83% (48 点 / 757.9g)	

1 面

T 種	R 種
T 種 10% (12 点 / 158.8g) R 種 90% (106 点 / 1063.1)	

2 面

T 種	R 種
T 種 7% (16 点 / 192.7g) R 種 93 (206 点 / 2114.3g)	

3 面

T 種	R 種
T 種 10% (8 点 / 81.7g) R 種 90% (75 点 / 717.4g)	

4 面

T 種	R 種
T 種 37% (52 点 / 395.9g) R 種 63% (90 点 / 917.4g)	

5 面

T 種	R 種
T 種 19% (67 点 / 914.5g) R 種 81% (277 点 / 2603.8g)	

6 面

T	R 種
T 種 3% (17 点 / 190.3g) R 種 97% (488 点 / 4449.2g)	

7 面

T 種	R 種
T 種 44% (109 点 / 769.9g) R 種 56% (139 点 / 1062.7g)	

8 面

T 種	R 種
T 種 24% (107 点 / 1077.1g) R 種 76% (340 点 / 3488.3g)	

9 面

T 種	R 種
T 種 55% (73 点 / 697.4g) R 種 45% (60 点 / 605.8g)	

10 面

T 種	R 種
T 種 88% (3768 点 / 32440.3g) R 種 12% (505 点 / 4882.1g)	

11 面

T 種	R 種
T 種 91% (1824 点 / 19340.2g) R 種 9% (171 点 / 1596.9g)	

12 面

T 種	R 種
T 種 92% (1290 点 / 8517.2g) R 種 8% (119 点 / 1799.0g)	

13 面 SX1

T 種	R 種
T 種 89% (57 点 / 677.4g) R 種 11% (7 点 / 74.5g)	

4 面上堆積土

T	R 種
T 種 2% (9 点 / 142.9g) R 種 98% (419 点 / 7151.9g)	

4 面

T 種	R 種
T 種 7% (144 点 / 1915.2g) R 種 93% (1963 点 / 15864.2g)	

5 面

T 種	R 種
T 種 9% (187 点 / 2382.9g) R 種 91% (1916 点 / 34853.1g)	

6a 面

T 種	R 種
T 種 9% (207 点 / 3647.6g) R 種 91% (1973 点 / 42010.8g)	

6b 面

T 種	R 種
T 種 70% (4955 点 / 58277.5g) R 種 30% (2233 点 / 33295.7g)	

6b 面 SX1

T 種	R 種
T 種 82% (3077 点 / 48003.0g) R 種 18% (655 点 / 11535.7g)	

8 面

T 種	R 種
T 種 86% (1362 点 / 10846.8g) R 種 14% (223 点 / 3562.9g)	

図 119 かわらけ T 種・R 種出土割合

かわらけに次いで出土量が多い常滑焼の機種別出土割合を図 117,118 に示す。出土量の多寡に関係なく出土割合はほぼ一定で、各面とも甕・広口壺が 7 割以上を占める。片口鉢は調査中によく目に付く遺物であったが、思っていたほど出土量は多くなかった。時期的には 5 ～ 6b 型式を主体としており、4 型式以前の製品は少ない。

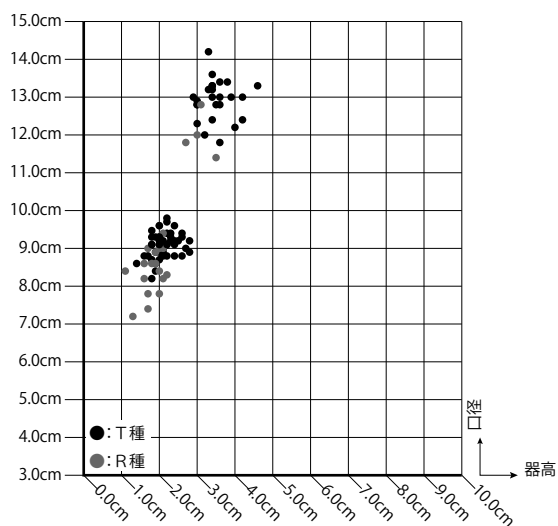
かわらけは手づくね成形品とロクロ成形品の出土割合を図 119 に示す。各面とも分類できない破片が一定量存在するが、グラフの作成にあたっては出土割合を明瞭にするため除外した。上段では 6 面、下段では 6a 面を境に手づくね成形品とロクロ成形品の出土割合が逆転する。転換の様相は、上段では 9 面から 4 面にかけて漸位的に割合が変化していくのに対し、下段では 6b 面から 6a 面への移行に伴い入れ替わるように手づくね成形品とロクロ成形品の比率が逆転しており、6b 面から 6a 面への移行期に本調査地点及び周辺地の土地利用に大きな変化が生じたのではないかと推測する。

かわらけの法量について

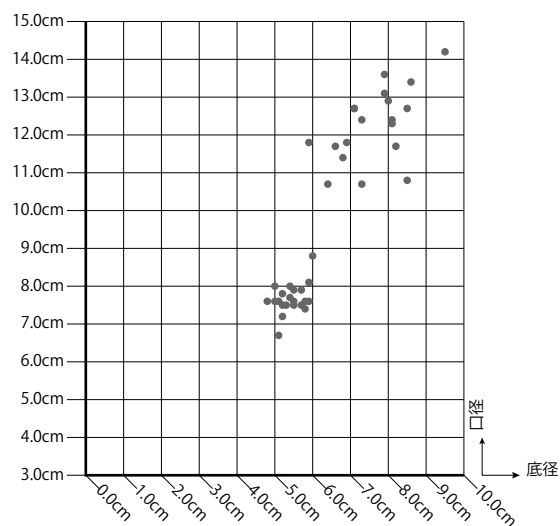
4区6面SX1と5区6a面上ではまとまった量のかわらけが出土した。いずれも良好な残存状態の個体が多く出土しており、手づくね成形品を主体とする前者は口径／器高、ロクロ成形品のみで構成される後者は口径／底径を用いて法量分布図を作成した（図120,121）。

4区6面SX1の法量分布をみると、手づくね成形品は口径8.2～9.7cmの小型品と口径11.8～14.2cmの大型品、ロクロ成形品は口径8cm台／底径6cm台を基本的な法量とする小型品と口径11.4～12.8cm／底径8cm台の大型品があることがわかる。規格の違いによるものなのか製作方法の違いに起因する誤差なのか、判断できないが、大型／小型ともロクロ成形品の方が若干、小ぶりである。

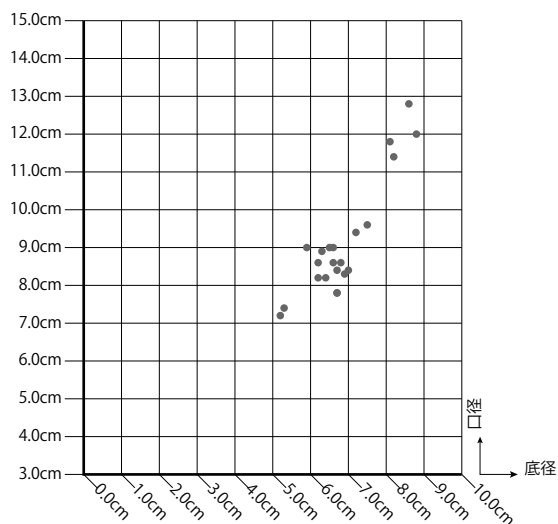
5区6a面上出土品については、グラフの作成にあたって6a面整地土中から出土した製品との比較を行ってみた。計測対象となるかわらけは全点、ロクロ成形品である。小型品は口径7cm台／底径5cm台を基本的な法量としているようであるが、大型品は口径10.7～14.2cm／底径5.9～9.5cmと大きさにばらつきがみられる。一方、整地土から出土したものは口径7cm台／底径5cm台の小型品、口径11～12cm台／底径7～8cm台の大型品に加え、口径4cm台／底径3cm台の極小製品が存在する。4区6面SX1と比較すると、小型品に1cm前後の小型化が確認できる。



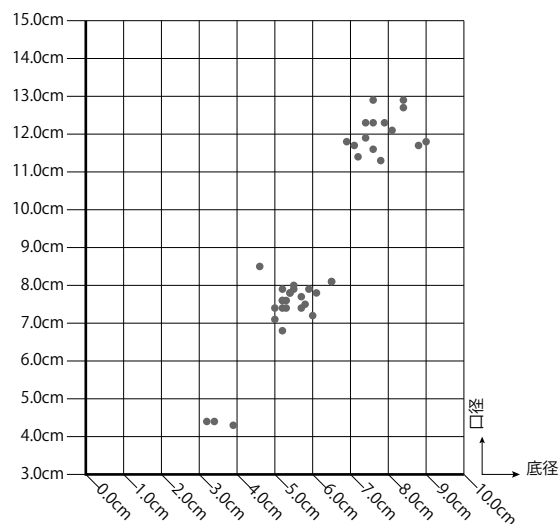
4区6面SX1出土かわらけT種・R種 口径／器高法量分布



5区6a面上出土かわらけR種 口径／底径法量分布



4区6面SX1出土かわらけR種 口径／底径法量分布



5区6a面整地土出土かわらけR種 口径／底径法量分布

図120 4区6面SX1かわらけ法量分布

図121 5区6a面かわらけ法量分布

4 区 6 面 SX1 出土遺物

4 区 6 面 SX1 では、多量に廃棄されたかわらけのほかに木製品も多く出土しており、ほかは 1 割にも満たない（図 122）。第 4 章でも述べたように木製品の半数近くを箸状製品が占めるほか、不明部材とした木片の中には分解した折敷と思われる薄板状のものが多量に含まれており、こうした点から SX1 には饗宴に供された食膳具を一括して廃棄したと判断した。非常に貴重な記年銘資料と評価できる題箋軸木簡も本遺構から出土しているが、残念ながらほかの木片と共に一括して取り上げており、詳細な出土位置はわからない。高橋慎一郎氏の見立てによれば、題箋部分には「建保三年」（1215 年）の年号と共に、「年貢の領収書のようなものではないか」との内容が記されているとのことである。記された年号は巻かれた書物の内容であって、遺物の年代を正確に示すものではないのが少々残念ではあるが、書物の内容を考えれば非常に重要な遺物であることに変わりはない。

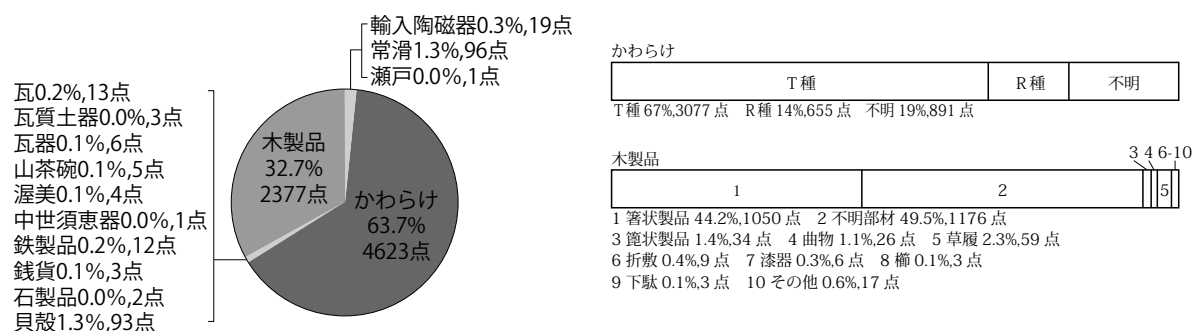


図 122 4 区 6 面 SX1 遺物出土割合

第 3 節 各面の時期

最後に各生活面の時期について考える。2,3 表は、各面から出土した陶磁器の生産地（輸入陶磁器は太宰府）における編年型式の一覧表である。出土遺物の主体を占めるかわらけについては、鎌倉における編年の統一が未だ成されていないことや、執筆者自身がかわらけの属性と時間軸の関係を十分に理解できていないことから、ここでは陶磁器の編年を主体的に用いることにして、かわらけについては最も後出の宗臺秀明氏による編年を援用資料に用いた。なお、中世基盤層まで調査を行えたのは 6 区と 4 区南側の一部のみであり、本調査地点における中世最古の生活面や遺物の実態は不詳であるという点を承知されたい。

1. 上 段

1 面上堆積土から出土した遺物は少ないが、図 10 に掲載した青磁碗Ⅱc 類と、9-10 型式の常滑焼甕が確認でき、15 世紀後半の年代が与えられる。1 面上及び整地土から出土した遺物にも年代がわかるものは少ないが、常滑焼に 9 型式の甕と片口鉢Ⅱ類が確認でき、これらを基に 15 世紀前半から中葉頃と考えた。2 面では白磁皿Ⅸ類（口禿皿）、常滑焼では 5・6a 型式の片口鉢Ⅰ類、古瀬戸中・後期の皿・仏花瓶が確認でき、14 世紀代の遺物が全体に目立つが、3・4 面に 15 世紀に下る可能性がある常滑焼が確認できるため、2 面は 1 面とあまり変わらない時期ではないかと推測する。

3 面では白磁皿Ⅸ類、5～8 型式の常滑焼、尾張型 8～9 型式の山茶碗片口鉢など 14 世紀代の製品が確認できるが、4 面から縁帯が胴部に密着する常滑焼甕が出土しており、15 世紀前半頃と推測する。4 面では先に述べた 9 型式頃の常滑焼甕と片口鉢、東濃型 5 型式と尾張型 8 型式の山茶碗片口鉢が確認できる。時期的に目立つのは 13～14 世紀代の製品であるが、9 型式の常滑焼

を下限に 15 世紀前葉頃と考えた。なお、3 面・4 面では宗臺編年のかわけ I sJ 類に比定できる製品が確認でき、时期的にも問題なく当てはまる。

5 面になると遺物の出土量が大きく増加する。上段では、12 面から 5 面まで遺物の出土量が多く、この頃が本地点における人的活動の最盛期と考えられる。5 面では龍泉窯系青磁碗Ⅱ類、同坏Ⅲ類、白磁皿Ⅸ類、常滑焼 5-6b・8 型式の甕・片口鉢、古瀬戸中・後期の瓶類・壺・皿、尾張型 8 型式頃と思われる山茶碗片口鉢などが確認できる。かわらけには宗臺が 15 世紀の指標に挙げる I 1K 類が確認できる。こうした様相から、5 面の時期は 4 面よりわずかに遡る 14 世紀後葉から 15 世紀前葉と考える。6 面で出土した陶磁器の年代と種類は 5 面とほぼ同じである。図 24-1 は宗臺編年 I sD 類、図 25-1,2 は I sD, I sG 類であろうか。6 面は古瀬戸製品の年代から、14 世紀中葉頃と考えた。

7 面では同安窯系青磁碗Ⅰ類、龍泉窯系青磁碗Ⅱ類、白磁皿Ⅸ類、常滑焼 5・6a・6b 型式の製品が確認できる。これらのうち白磁皿Ⅸ類と常滑焼 6b 型式の年代から、7 面は 13 世紀末から 14 世紀前半頃と考えた。8 面からは図示できるかわらけが増加する。陶磁器で年代を確認できるものは、白磁皿Ⅸ類と図 33 に掲載した 7 型式の常滑焼片口鉢Ⅱ類くらいしか見あたらない。かわらけは宗

2 表 上段整地面と出土遺物型式

	輸入陶磁器	常滑	瀬戸	渥美・山茶碗など
1面上 堆積土 15c後半	龍泉窯系青磁碗Ⅱ類(13c初頭-前半)	9-10型式 (15c1/2-15c2/2)		
1面 15c前～ 中葉		6a型式(13c3/4) 7-8型式(14c1/2-2/2) 9型式(15c1/2)	古瀬戸前期(12c末-13c末)	
2面 15c前～ 中葉	白磁皿Ⅸ類(13c後半-14c前半)	5型式(13c2/4) 6a型式(13c3/4)	古瀬戸中期(13c後葉-14c中葉)カ 古瀬戸中・後期(13c後葉-15c中葉)	
3面 15c前半 カ	白磁皿Ⅸ類(13c後半-14c前半)	5型式(13c2/4) 7型式(14c1/2) 8型式(14c2/2)	古瀬戸中Ⅳ期(14c中葉)	尾張型8-9型式(13c後葉-14c後葉)カ
4面 15c前葉		5-6a型式カ(13c2/4-3/4) 7-8型式(14c1/2-2/2) 9型式(15c1/2)	古瀬戸前期(12c末-13c末)	東濃型5型式(12c後葉-13c前葉) 尾張型8型式(13c後葉-14c前葉)カ
5面 14c後葉～ 15c前葉	龍泉窯系青磁碗Ⅱ類(13c初頭-前半) 龍泉窯系青磁碗Ⅲ類(13c中頃-14c初頭) 白磁皿Ⅸ類(13c後半-14c前半)	5型式(13c2/4) 6a-6b型式(13c3/4-4/4) 8型式(14c2/2)	古瀬戸中期(13c後葉-14c中葉)頃 古瀬戸後期(14c後葉-15c中葉)	尾張型7-8型式(13c中葉-14c前葉) 東遠型(12c後半カ)
6面 14c中葉	龍泉窯系青磁碗Ⅱ類(13c初頭-前半) 龍泉窯系青磁碗Ⅲ類(13c中頃-14c初頭) 龍泉窯系青磁碗Ⅳ類(13c中頃-14c初頭) 白磁皿Ⅸ類(13c後半-14c前半)	5型式(13c2/4) 6a型式(13c3/4) 6b型式(13c4/4)	古瀬戸中Ⅱ期(14c前葉)頃 古瀬戸後期(14c後半-15c中葉)カ	尾張型8型式(13c後葉-14c前葉)カ
7面 14c前半 頃	同安窯系青磁碗Ⅰ類(12c中頃-後半) 龍泉窯系青磁碗Ⅱ類(13c初頭-前半) 白磁皿Ⅸ類(13c後半-14c前半)	5型式(13c2/4) 6a型式(13c3/4) 6b型式(13c4/4)		
8面 14c前葉	白磁皿Ⅸ類(13c後半-14c前半)	7型式(14c1/2)カ		
9面 13c後半	黄釉鉄絵盤(11c後半-12c前半カ)	5型式(13c2/4)		
10面 13c後半	白磁碗Ⅴ類(12c中頃-後半) 龍泉窯系青磁碗Ⅰ類(12c中葉-後半) 龍泉窯系青磁碗Ⅱ類(13c初頭-前半) 龍泉窯系青磁碗Ⅲ類(13c中頃-14c初頭)	3型式(12c末) 4型式(12c末-13c初頭) 5-6a型式(13c中葉) 6b型式(13c4/4)	古瀬戸中期(13c後葉-14c中葉)頃	東濃型4-5型式(12c中葉-13c前葉) 東濃型5型式(12c後葉-13c前葉) 尾張型7-8型式(13c2/2)
11面 13c前半	同安窯系青磁碗Ⅰ類(12c中頃-後半) 龍泉窯系青磁碗Ⅰ類(12c中葉-後半)	3-4型式(12c4/4-13c初頭) 5型式(13c前葉)		東遠型(12c後半)カ
12面 13c前半	同安窯系青磁碗Ⅰ類(12c中頃-後半) 龍泉窯系青磁碗Ⅰ類(12c中葉-後半)	1b型式(12c2/4)カ 4型式(12c末-13c初頭) 5型式(13c2/4)		東濃型4型式(12c中葉) 東遠型(12c後半)カ
13面 12c末～ 13c初頭	白磁碗Ⅴ-4類カⅧ-1,3類(12c中頃-後半) 龍泉窯系青磁碗Ⅰ類(12c中頃-12c後半)			

臺編年ⅠE・G類であろうか。図32-4はこの段階から現れるという中型品である。8面の年代は常滑焼から判断して、14世紀前葉と考える。9面でも年代がわかる陶磁器の出土は少ない。図36に掲載した常滑焼甕は5型式頃の製品であろう。かわらけは、9面あたりまで手づくね成形品がロクロ成形品を凌駕する。図36-3,4は、宗臺編年ⅡIC類の製品、1,2の小型ロクロ成形品はⅠsC類であろうか。宗臺は、手づくね成形品が14世紀を待たずに消失するだろうと考えており、かわらけの属性や年代観からみても9面の年代は13世紀後半が妥当であろう。

10面になると、かわらけは完全に手づくね成形品が主体となる。年代が確認できる陶磁器には、白磁碗Ⅴ類、龍泉窯系青磁碗Ⅰ・Ⅱ類、同坏Ⅲ類、常滑焼3・4・5～6a・6b型式の片口鉢Ⅰ・Ⅱ類、古瀬戸中期の皿・鍋、東濃型4～5型式、尾張型7～8型式の山茶碗片口鉢などが多様な製品があり、量的にも上段で最も多い5000点強（約60kg）が出土した。かわらけは、宗臺編年ⅠD・E類、ⅡB・C類などが確認できる。10面の年代は6b型式の常滑焼やかわらけ、9面の年代などを勘案して13世紀後葉としておく。

11面では同安窯系青磁碗Ⅰ類、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、常滑焼3～4・5型式の片口鉢Ⅰ・Ⅱ類、12世紀後半の東遠型と思われる山茶碗が確認できる。かわらけはⅡB類が目につくようになる。常滑焼に6型式の製品が見られなくなることから、11面は13世紀前半と考える。12面では同安窯系青磁碗Ⅰ類、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、常滑焼1b型式の片口鉢、4・5型式の甕、12世紀後半の東遠型と思われる山茶碗が確認できる。かわらけは宗臺編年Ⅱ類AからCまでの製品が確認できる。11面よりも確実に古くなる要素は確認できず、時期的には11面と同じ13世紀前半と考える。

13面で出土した遺物は、すべて2区南SK1からのものである。遺物量は少なく、時期が確認できるのはⅤ-4類かⅧ-1,3類と思われる白磁碗と龍泉窯系青磁碗Ⅰ類しかない。12面よりも下層に位置することを勘案して、13面は12世紀末から13世紀初頭頃と考えたい。

2. 下 段

4面上堆積土では、幅広い時期の陶磁器が出土した。堆積土の下限時期を示すのは常滑焼10型式の甕と古瀬戸後期の縁釉小皿で、15世紀後半に位置付けた。図示したかわらけには宗臺編年ⅠK類が含まれており、16世紀まで下る可能性も考えられる。

4面では幅広い時期の陶磁器が出土しているが、下限を示すものとしては泉窯系青磁碗Ⅳ類、白磁皿Ⅸ類、常滑焼9-10型式の甕・片口鉢Ⅱ類、古瀬戸後Ⅳ期古段階の折縁深皿などが確認できる。かわらけは、4面上や道路構成土から出土したものに宗臺編年ⅠJ類が目立つ反面、4面構成土から出土したものはⅠE,G類が一定量含まれており、4面は14世紀後葉頃に成立し、15世紀中葉頃まで存続したと考えたい。

5面では4面同様、幅広い時期の陶磁器が出土しているが、15世紀に下る製品は確認できない。輸入陶磁器は龍泉窯系青磁坏Ⅲ類と白磁皿Ⅸ類、常滑焼では6b～7型式頃の甕・片口鉢Ⅱ類、尾張型8～9型式の山茶碗片口鉢などが5面の下限時期を示すものとして確認できる。かわらけは宗臺編年ⅠE,G類が主体的であり、時期的に陶磁器類と齟齬は生じない。こうした点から、5面の時期は14世紀後半と考える。

手づくね／ロクロ成形かわらけの出土割合で述べたように、5区6a面と6b面では大きな逆転現象が起きている。遺構も道路東側に柵列や門をはじめとする多数の遺構を精力的に構築していた段階から打って変わって、6a面では道路と東側の溝もしくは低位の生活面だけという閑散とした風景に変わってしまう。6a面では龍泉窯系青磁坏Ⅲ類と白磁皿Ⅸ類、常滑焼は7型式の甕・片口

鉢Ⅱ類、尾張型 7～8 型式の山茶碗片口鉢などが下限時期を示す遺物として確認できる。かわらけは宗臺編年Ⅰ D,E,G 類が主体を成すが、整地土中にはⅡ b 類であろうか、体部と底部の境に稜をもたない手づくね成形品で、口径に対して器高が高い碗形のものも確認できる。こうした点から、6a 面の時期は 14 世紀前半と考える。

6b 面は本調査地点では人的活動の最盛期にあたる生活面である。本章冒頭で述べたように、上段 12 面と接続する生活面と考えている。5 区 6b 面では、まず門とそれに伴う柵列を設ける時期があり、その後、門を伴わない柵列のみの時期を挟んで最後は道路側溝のみとなる時期と、3 時期にわたって使用している。溝から出土した遺物は少ないが、白磁皿Ⅸ類、龍泉窯系青磁碗Ⅲ類、5～6a 型式の常滑焼甕・片口鉢Ⅱ類、古瀬戸中期以降の褐釉瓶子、13 世紀中葉と思われる伊勢系の土鍋などが確認でき、これらの遺物から 13 世紀後葉と考える。門や柵列を構成する柱穴から出土した遺物も少ないが、4-5 型式の常滑焼片口鉢Ⅰ類、宗臺編年Ⅱ B,C 類、Ⅰ D,E 類などが確認できる。6b 面上では常滑焼 5 型式の甕、5～6a 型式の片口鉢Ⅰ類が確認できる。少ない内容で精度に欠けるきらいがあるが、5 区 6b 面は門や柵列を伴う時期が 13 世紀前葉から中葉、これらが廃絶し、道路東側に側溝のみとなる時期が 13 世紀後葉から末葉に位置付けたい。

4 区 SX1 からは、かわらけを主体とする多量の遺物が出土した。かわらけの主体は宗臺編年Ⅱ A,B,C 類と、皿状のロクロ成形品で、陶磁器には白磁Ⅲ -1・2 類、龍泉窯系青磁碗Ⅰ -4 類、龍泉窯系青磁皿Ⅰ -2b 類、常滑焼 4 型式の甕、3～5 型式の片口鉢Ⅰ類、渥美焼 2b 型式の甕、東濃型 5 型式の山茶碗片口鉢などが確認できる。陶磁器類及び題箋軸木簡の年代から考え、SX1 が廃絶するのは 13 世紀前半と考える。

3 表 下段整地面と出土遺物型式

	輸入陶磁器	常滑	瀬戸	渥美・山茶碗など
4面上 堆積土 15c後半	龍泉窯系青磁碗Ⅰ類(12c中頃-後半) 龍泉窯系青磁碗Ⅲ-2C類(13c中頃-14c初頭) 白磁皿Ⅸ類(13c後半-14c前半)	4型式(12c末-13c初頭) 6a型式(13c3/4) 7型式(14c1/2) 10型式(15c2/2)	古瀬戸後期(14c後葉-15c後葉)	尾張型8型式(13c後葉-14c前葉)
4面 14c後葉 ～ 15c中葉	龍泉窯系青磁碗Ⅰ類(12c中頃-後半) 龍泉窯系青磁碗Ⅱ類(13c初頭-前半) 龍泉窯系青磁碗Ⅲ類(13c中頃-14c初頭) 龍泉窯系青磁碗Ⅳ類(14c初頭-後半)カ 白磁皿Ⅸ類(13c後半-14c前半)	5-6a型式(13c2/4-3/4) 6b-7型式(13c4/4-14c1/2) 7-8型式(14c代) 9-10型式(15c代)	古瀬戸中期(13c後葉-14c前葉)カ 古瀬戸後Ⅰ期(14c後葉)以前 古瀬戸後Ⅱ期(14c末-15c初頭) 古瀬戸後Ⅲ-Ⅳ期(15c前-中葉) 古瀬戸後Ⅳ期古(15c中葉)	
5面 14c後半	同安窯系青磁碗Ⅰ類(12c中頃-後半) 龍泉窯系青磁碗Ⅱ類(13c初頭-前半) 龍泉窯系青磁碗Ⅲ類(13c中頃-14c初頭) 白磁皿Ⅸ類(13c後半-14c前半)	3型式(12c4/4) 5型式(13c2/4) 6a型式(13c3/4) 6b-7型式(13c4/4-14c1/2) 8型式(14c2/2)	古瀬戸中Ⅰ期(13c末-14c初頭)頃カ	尾張型6-7型式(13世紀前-中葉) 尾張型8-9型式(13c後葉-14c後葉)
6a面 14c前半	龍泉窯系青磁碗Ⅱ類(13c初頭-前半) 龍泉窯系青磁碗Ⅲ類(13c中頃-14c初頭) 龍泉窯系青磁碗Ⅳ類(13c中頃-14c初頭) 白磁皿Ⅸ類(13c後半-14c前半)	4型式(12c末-13c1/4) 5型式(13c2/4) 6a-b型式(13c3/4-4/4) 7型式(14c1/2)	古瀬戸前Ⅱ期(13c2/4)	尾張型7-8型式(13c中葉-14c前葉)
6b面 13c前葉 ～ 13c末	白磁壺Ⅲ-1類(11c後半-12c後半)カ 白磁壺Ⅲ-2類(13c前半)カ 龍泉窯系青磁碗Ⅰ類(12c中頃-後半) 龍泉窯系青磁碗Ⅲ類(13c中頃-14c初頭) 白磁皿Ⅸ類(13c後半-14c前半)	1b型式(12c1/2)前後 3型式(12c4/4)頃 4型式(12c末-13c初頭)頃 5型式(13c2/4) 6a型式(13c3/4) 6b型式(13c4/4)	古瀬戸中期(13c中葉)以降※褐釉 古瀬戸中Ⅰ-Ⅱ期(13c前葉)	渥美2型式(12c3/4)カ 渥美2b型式(12c末-13c前葉) 渥美3a型式(13c前葉)カ 東濃型(12c前半) 尾張型7型式(13c中葉) 魚住第Ⅱ期第2段階(12c末葉-13c初頭)
7面 不明				
8面 12c末～ 13c前葉	龍泉窯系青磁碗Ⅰ類(12c中頃-後半)	3型式(12c4/4) 4型式(12c末-13c初頭)		渥美2b型式(12c末-13c前葉)頃 東濃型5型式(12c後葉-13c前葉)
9面 不明				
10面 12c末				

7面では遺物が出土しなかったため、時期は不明である。8面では、4区8面上から常滑焼3型式の片口鉢Ⅰ類、4区SD1から龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4a類、常滑焼三筋壺、渥美焼2b型式頃の壺、東濃型5型式の山茶碗片口鉢、4区8面整地土から常滑焼4型式の片口鉢Ⅰ類などが出土している。直上で検出した4区6面の年代を加味し、8面の年代は12世紀末から13世紀前葉に位置付ける。

9面以下では時期を確認できる遺物は出土しなかった。4区10面では、蓮弁文の青磁碗、瀬戸焼皿・碗などが出土したが、いずれも小片であり、詳細な時期を確認することは不可能であった。一応、8面との関連から、12世紀末と推測する。

第4節 5区6b面の遺構群と幕府域の関連について

第2章で述べたように、西御門川を大倉幕府域の西端と推測する向きは多く、かかる場所に門や柵列、道路といった土地区画に関わる遺構群が発見された意義は大きい。大倉の地に幕府を構えていた時期は、1180（治承4）年から1219（承久元年）年までの39年間、あるいは1225年（嘉禄元年）年までの45年間と考えられている。区画に関わる遺構群を検出した5区6b面の時期は、出土遺物の年代から13世紀前葉～13世紀末と判断しており、造営当初の道路・門・柵列を構えた段階から、その後、門が廃止され道路と柵列となる段階、最後は柵列もなくなり道路と溝の組み合わせとなる3段階の変遷をたどる。整地面の造営はその後が続くが、6面だけは一旦、平坦面となる時期があり（6a面）、面上にはかわらけを散布するなど、当該地に何らかの画期が訪れた可能性がある。5区・6区では6b面以前に泥岩を用いた整地は行っておらず、大倉幕府に伴う遺構群と考えたい。ただ、幕府の門としては小規模な感は否めず、門前の道路にしても、4区で検出した遺構範囲から推測して約3～4mと小規模なものである。門や柵列は規模や構造が砦的であり、防御的な性格を重視してあえて小規模なものとしているのだろうか。

引用・参考文献

輸入陶磁器

山本信夫 2000『太宰府条坊跡X V－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第 49 集 太宰府市教育委員会

森田勉 1982「Ⅱ 14 ～ 16 世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会

渥美焼・常滑焼

中野晴久 2013『中世常滑窯の研究』愛知学院大学

安井俊則・中野晴久ほか 2012『愛知県史 別編 窯業 3 中世・近世 常滑系』愛知県史編さん委員会

瀬戸焼・山茶碗

藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院

木製品

奈良国立文化財研究所 1985『木器集成図録 近畿古代篇』奈良国立文化財研究所 史料 第 27 冊

備前焼

乗岡実 2005「備前」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』シンポジウム実行委員会

土製煮沸具

伊藤裕偉 2005「“かたち”と“わざ”～中世の土製煮沸具から～」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』シンポジウム実行委員会

東播系須恵器

森田稔 1995「8. 中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

瓦質土器

立石堅志 1995「10. 瓦質土器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

かわらけ

宗臺秀明 2018『鎌倉出土かわらけの系譜と編年－東国社会の変質と中世の成立(前編)』

宗臺秀明 2018『鎌倉出土かわらけの系譜と編年－東国社会の変質と中世の成立(後編)』

題箋軸

後藤健 2022「若宮大路周辺遺跡群 (No.242)」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』38 第 1 分冊 鎌倉市教育委員会
遺跡の諸環境

高柳光寿 1959『鎌倉市史』総説編 p.162 鎌倉市

山村亜希 1997「中世鎌倉の都市空間構造」『史林』第 80 巻第 2 号 史学研究会

山村亜希 2009「第一章 東国の中世都市の形成過程」『中世都市の空間構造』吉川弘文館

白井永二 編 1992『鎌倉事典』東京堂出版

三浦勝男 編 2005『鎌倉の地名由来辞典』東京堂出版

貫達人・川副武胤 1980『鎌倉廃寺事典』有隣堂

調整・文様には、特徴的な事項のみ記載した。
胎土中の鉱物の略号は以下の通り 長石：長、石英：石、砂粒：砂、角閃石：角、白色粒石：白、黑色粒石：黒、小礫：礫、橙色粒子：橙、海綿状骨針：骨、泥岩塊：泥

出土遺物観察表 1 土器・陶磁器 1

図版番号	器 種	法量 (cm)		残存率	外 面	調整・文様	内 面	板状 圧痕	胎 土	色調	備 考
		口径	底径								
上段 (1・2区)											
図10 1面上包含層											
10 1	青磁碗	不明	(4.8)	(3.6)	体-底部1/2	底部幾何学花文スタンプ	-	緻密			龍泉窯系青磁碗Ⅱc類 (13c初頭-前半)
図12 1面整地土											
12 1	瀬戸瓶子	(5.0)	不明	(3.8)	口縁部小片		-	精良, 砂			古瀬戸前期 (12c末-13c中葉)
12 2	常滑甕	不明	不明	不明	口縁部小片		-	長, 白, 砂			外面, 内面口縁部自然降灰, 9型式 (15c1/2)
12 3	常滑片口鉢	不明	不明	不明	口縁-体部小片		-	白, 砂			Ⅱ類, 7-8型式 (14c1/2-2/2)
12 4	瓦質土器火鉢	不明	不明	不明	口縁-体部破片		-	白, 砂, 礫, 長			
図13 2面整地土											
13 1	かわらけR種	(7.7)	(6.0)	1.8	1/5個体	体部クロコナデ→底部ナデ	有	骨, 砂		灰白色	
13 2	瀬戸仏花瓶	不明	不明	不明	体部小片		-	白, 砂			花瓶Ⅰ類, 古瀬戸後期 (14c後葉-15c中葉)
13 3	瀬戸折縁深皿	不明	不明	不明	口縁部小片		-	白, 砂			古瀬戸中期 (13c末-14c中葉)
図15 3面整地土											
15 1	かわらけR種	(7.3)	(5.1)	2.1	1/5個体	体部クロコナデ→底部ナデ	有	骨, 砂, 礫		黄灰色	
15 2	瀬戸折縁深皿	不明	不明	不明	口縁部小片		-	白, 砂			古瀬戸中Ⅳ期 (14c中葉)
15 3	常滑甕か広口壺	不明	不明	不明	口縁部小片		-	白, 砂			5型式 (13c2/4) カ
15 4	常滑甕	不明	不明	不明	口縁部小片		-	長, 白, 砂			7-8型式 (14c1/2-2/2)
15 5	常滑片口鉢	不明	不明	不明	口縁部小片		-	長, 白, 砂			Ⅱ類, 7型式 (14c1/2)
15 6	常滑片口鉢	不明	不明	不明	底部小片		-	長, 白, 砂			
図18 4面SD1											
18 1	常滑甕片貼用磨具	長さ5.0	短径4.5	厚1.0	破片		-	白, 長, 砂			側縁3面使用
図18 4面整地土											
18 2	かわらけR種	(5.3)	(4.0)	1.6	1/6個体	体部クロコナデ→底部ナデ	不明	骨, 砂		橙色	
18 3	かわらけR種	(6.4)	(3.8)	2.2	1/5個体	体部クロコナデ→底部ナデ	不明	骨, 砂		橙色	
18 4	かわらけR種	(6.8)	(4.6)	1.9	2/5個体	体部クロコナデ→底部ナデ	有	骨, 砂		灰白色	
18 5	瀬戸入子	(7.2)	(4.8)	2.3	1/5個体		-	緻密			口縁部片口状に張り出す, 内面ス付着
18 6	瀬戸四耳壺	不明	(8.1)	(2.9)	底部1/2		-	砂, 白			古瀬戸前期 (12c末-13c中葉)
18 7	常滑甕	不明	不明	不明	口縁部小片		-	長, 白, 砂, 礫			9型式 (15c1/2)
18 8	常滑広口壺	不明	不明	(4.5)	口縁部小片		-	長, 白, 砂			6a型式 (13c3/4) カ
18 9	常滑片口鉢	不明	不明	(6.5)	口縁部小片		-	長, 白, 砂			Ⅱ類, 7-8型式 (14c1/2-2/2)
18 10	山茶碗	不明	(5.8)	(2.5)	底部1/4	体部ナデ→底部ナデ	有	精良, 白			東濃型, 高台量付けに粉焼圧痕
図21 5面SD1											
21 1	青磁折縁盤	不明	不明	不明	口縁-体部小片	無文	-	緻密			龍泉窯系青磁
図21 5面整地土											
21 2	かわらけR種	(8.5)	-	2.0	1/4個体	体部ヨコナデ	無	砂		黄灰色	
21 3	かわらけR種	8.0	5.0	1.9-2.1	1/2個体	体部クロコナデ→底部ナデ	有	角, 砂		橙色	砂粒多量→特徴的な胎土
21 4	かわらけR種	(11.7)	(8.3)	3.1	1/4個体	体部クロコナデ→底部ナデ	有	骨, 砂, 礫		橙色	
21 5	かわらけR種	(11.8)	(6.4)	3.3	1/4個体	体部クロコナデ→底部ナデ	無	粉質, 長, 骨, 礫		橙色	
21 6	白磁甕	(11.0)	不明	不明	口縁部1/8	口縁-頸部施釉	-	精良, 黒			
21 7	瀬戸柄付瓶類	6.9	4.9	(3.4)	口縁部破片	一部施釉 (鉄釉)	-	緻密		淡褐色	特注品カ, 古瀬戸中期以降 (13c末以降)
21 8	瀬戸瓶子	不明	(11.4)	(5.3)	底部1/5		-	精良, 白			瓶子Ⅱ類
21 9	常滑玉縁壺	不明	不明	不明	口縁部小片		-	長, 白, 砂			6a-6b型式 (13c3/4-4/4) カ
21 10	常滑片口鉢	不明	不明	不明	口縁部小片		-	長, 白, 砂			Ⅱ類, 8型式 (14c2/2)
21 11	丸瓦	(7.7)	(6.0)	2.1	破片	凹面布目	-	精良, 白, 黒			
図21 6面SX1											
21 12	青磁碗	不明	不明	不明	口縁部小片	無文	-	緻密			龍泉窯系青磁碗Ⅱ-b類 (13c初頭-前半)
21 13	青磁鉢	不明	不明	不明	底部小片	底部魚文	-	緻密			龍泉窯系青磁碗Ⅲ類 (13c中頃-14c初頭) 併行
図24 6面上											
24 1	かわらけR種	(9.4)	(6.8)	1.8	1/4個体	体部クロコナデ→底部ナデ	有	長, 砂		黄灰色	
24 2	瀬戸灰釉小坏小鉢	(11.0)	不明	(3.4)	1/6個体		-	緻密			古瀬戸後期 (14c後葉-15c中葉)

調整・文様には、特徴的な事項のみ記載した。

出土遺物観察表 2 土器・陶磁器 2

胎土中の鉱物の略号は以下の通り 長石：長、石英：石、砂粒：砂、角閃石：角、白色粒子：白、黒色粒子：黒、小礫：礫、橙色粒子：橙、海綿状骨針：骨、泥岩塊：泥

図版番号	器 種	法量 (cm)		残存率	調整・文様		内 面	板状 圧痕	胎 土	色調	備 考
		口径	底径		外 面	内 面					
図24 6面上											
24 3	瀬戸柄付片口鉢	不明	不明	不明	小片	施釉	施釉	-	白		
24 4	常滑片口鉢	不明	不明	不明	口縁部小片			-	長、白、砂		Ⅱ類、7型式(14c1/2)前後
24 5	常滑片口鉢	不明	不明	不明	口縁部小片			-	長、砂		Ⅱ類、5-6a型式(13c2/4-3/4)
24 6	常滑片口鉢	不明	(12.4)	(3.7)	底部小片			-	長、砂、礫		Ⅱ類
24 7	常滑甕片転用磨具	長6.3	短6.0	厚0.9	破片			-	白、長		器面すべて使用
24 8	常滑甕片転用磨具	長8.3	短7.1	厚1.0	破片			-	白、長		器面すべて使用
図25 6面整地土											
25 1	かわらけR種	(6.7)	(4.0)	2.0	1/5個体		体部口口コナデ→底部ナデ	不明	砂	黄灰色	
25 2	かわらけR種	(6.8)	(4.9)	1.6	1/4個体		体部口口コナデ→底部ナデ	有	骨、砂、橙	橙色	スス付着
25 3	青磁碗	不明	(3.4)	不明	底部1/5	蓮弁文、高台量付露胎	無文	-	緻密		龍泉窯系青磁碗Ⅲ-2類(13c中頃-14c初頃)
25 4	青磁折縁盤	不明	不明	不明	口縁部小片	無文	無文	-	緻密		龍泉窯系青磁
25 5	青磁杯	不明	4.2	(1.4)	底部1/2	無文、量付露胎	無文	-	緻密		器面被熱、龍泉窯系青磁杯Ⅲ-1類(13c中頃-14c初頃)
25 6	緑釉盤	不明	不明	不明	口縁部小片	施釉(緑釉)	施釉(緑釉)	-	礫		輸入陶器
25 7	瀬戸倒皿	不明	(9.0)	(1.0)	底部破片		底部即目	-	白、礫		古瀬戸中期(13c後葉-14c中葉)カ
25 8	瀬戸折縁深皿	不明	不明	不明	底部小片		底部即目→施釉	-	精良、礫		古瀬戸後期(14c後半-15c中葉)カ
25 9	瀬戸筒型香炉	(15.0)	不明	(7.0)	口縁-体部小片	施釉(灰釉)	施釉(灰釉)	-	砂、礫		古瀬戸後期(14c後半-15c中葉)カ
25 10	瀬戸壺	不明	不明	不明	口縁部小片			-	精良、白		
25 11	酒美焼カ甕	不明	不明	不明	口縁部破片			-	黒、白、砂		西日本産須恵器甕カ
25 12	常滑甕	不明	不明	不明	口縁部小片			-	長、白、砂		外面自然降灰、6a型式(13c3/4)
25 13	常滑甕	不明	不明	不明	口縁部小片			-	白、砂		6b型式(13c4/4)
25 14	常滑甕	不明	不明	不明	口縁部小片			-	長、白、砂、礫		内外面自然降灰、6a型式(13c3/4)
25 15	常滑片口鉢	不明	(15.4)	(4.5)	底部1/5	回転ヘラケズリ→高台貼付		-	長、白、砂		Ⅰ類、5型式(13c2/4)
図29 7面上											
29 1	青磁碗	不明	4.8	(3.0)	底部破片	蓮弁文	無文	-	緻密		龍泉窯系青磁碗Ⅰ・Ⅱ類(12c中頃-13c前半)
29 2	常滑甕	不明	不明	(6.2)	口縁部小片			-	長、白、砂		6a-6b型式(13c3/4-4/4)
図29 7面SD1											
29 3	かわらけT種	(13.0)	-	2.8	1/6個体		底部ナデ→体部ヨコナデ	無	砂、長	橙色	
29 4	常滑広口壺	不明	不明	不明	破片			-	白、砂		5-6a型式(13c2/4-3/4)
29 5	丸瓦	不明	不明	不明	破片	凸面タタキマ→ヘラナデカ	凹面布目	-	白、黒		
図29 7面SK1											
29 6	かわらけR種	(8.6)	(7.6)	1.9	1/5個体		底部ナデ	有	骨、砂、砂	橙色	
図29 7面整地土											
29 7	常滑甕	不明	不明	(10.1)	口縁-体部破片			-	長、白、砂		外面自然降灰、5型式(13c2/4)
29 8	常滑甕	不明	不明	(8.2)	口縁-体部破片			-	長、白、砂		外面自然降灰、5型式(13c2/4)
29 9	瓦質土器火鉢	不明	不明	(5.1)	口縁部小片			-	白、砂		
29 10	平瓦	(6.6)	(5.8)	2.0	破片	凹面縄文	端部ヘラナデ、面取り、凸面縄文	-	白、砂		
図32 8面SK1											
32 1	かわらけT種	(9.7)	-	2.0	1/4個体		体部ナデ→底部ナデ	無	骨、砂	黄灰色	
32 2	かわらけT種	(12.2)	-	3.2	1/8個体		体部ナデ→底部ナデ	不明	骨、砂、橙	灰白色	
32 3	かわらけR種	(7.7)	(5.2)	1.8	1/6個体		体部ナデ→底部ナデ	有	砂、橙	橙色	
32 4	かわらけR種	(10.5)	(7.4)	3.5	1/4個体		体部ナデ→底部ナデ	有	骨、砂	黄灰色	
図33 8面整地土											
33 1	かわらけT種	(9.0)	-	(1.8)	1/4個体		底部ナデ→体部ナデ	無	粉質、骨、砂、長	橙色	
33 2	かわらけR種	(7.7)	(5.4)	1.8	1/5個体		体部ナデ→底部ナデ	有	骨、砂、橙	灰白色	
33 3	かわらけR種	(8.8)	(6.2)	1.8	2/5個体		体部ナデ→底部ナデ	有	骨、砂	橙色	
33 4	かわらけR種	(11.7)	(6.4)	3.0	1/5個体		体部ナデ→底部ナデ	無	骨、砂	橙色	
33 5	かわらけR種	(11.8)	(6.3)	3.6	1/4個体		体部ナデ→底部ナデ	有	骨、砂、橙	黄灰色	
33 6	常滑片口鉢	不明	不明	不明	口縁部小片			-	長、白、砂		Ⅱ類、7型式(14c1/2)カ
33 7	常滑片口鉢	不明	不明	不明	口縁部小片			-	白、砂、長		Ⅱ類、7型式(14c1/2)カ

調整・文様には、特徴的な事項のみ記載した。

出土遺物観察表 3 土器・陶磁器 3

胎土中の鉱物の略号は以下の通り 長石：長、石英：石、砂粒：砂、角閃石：角、白色粒子：白、黒色粒子：黒、小礫：礫、橙色粒子：橙、海綿状骨針：骨、泥岩塊：泥

図版番号	器 種	法量 (cm)		残存率	調整・文様		板状 圧痕	胎 土	色調	備 考
		口径	底径		高さ	外 面				
33 8	常滑片口鉢	不明	(14.2)	不明	破片	ヘラナデ	-	長、白、砂	Ⅱ類、内面使用による摩耗	
33 9	常滑甕片転用磨具	長径4.3	短径4.1	厚1.4	破片	ヘラナデ	-	白、砂、礫	側縁2面使用	
図36 9面整地土										
36 1	かわらけR種	(8.7)	(6.1)	1.9	1/6個体	体部クロコナデ→底部ナデ	無	骨、砂	灰白色	
36 2	かわらけR種	(9.0)	(7.2)	1.4	1/3個体	体部クロコナデ→底部ナデ	無	砂、角、砂	黄灰色	
36 3	かわらけT種	(13.4)	-	(2.9)	1/8個体	体部ヨコナデ→底部ナデ	無	角、砂	黄灰色	
36 4	かわらけT種	(13.8)	-	3.2	1/3個体	体部ヨコナデ→底部ナデ	無	骨、砂	橙色	
36 5	黄釉鉄絵盤	不明	(28.0)	(3.0)	底部1/5	鉄絵草花文→施軸(灰釉)	-	白、砂	輸入陶器	
36 6	常滑甕	不明	不明	不明	口縁部小片	ナデカ	-	長、白、砂	5型式(13c2/4)	
36 7	常滑片口鉢	不明	不明	不明	底部破片	ナデカ	-	長、白、礫	Ⅱ類、内面使用による摩耗	
36 8	土師器坏	(11.0)	(7.0)	3.6	1/4個体	ナデカ	無	骨、砂、泥	かわらけR種か古代の土師器坏	
図39 10面土										
39 1	かわらけT種	(9.2)	-	1.6	1/8個体	体部ヨコナデ	無	精良、砂	橙色	
39 2	かわらけT種	(10.0)	-	2.2	2/3個体	体部ヨコナデ→底部ナデ	無	砂	黄灰色	
39 3	かわらけT種	12.8	-	2.9-3.1	ほぼ完形	底部ナデ→体部ヨコナデ	無	精良、骨、砂	褐色	
39 4	かわらけR種	(9.4)	(6.2)	1.9	1/2個体	体部クロコナデ→底部ナデ	有	精良、骨、橙、砂	褐色	
39 5	青磁碗	不明	4.2	不明	高台量付け→底部露胎	片彫花文	-	緻密	龍泉窯系青磁碗Ⅰ・Ⅱ類(12c中頃-13c前半)	
39 6	平瓦	不明	不明	(1.8-2.3)	破片	凸面格子目タタキ	-	砂、礫		
図43 10面SK1										
43 1	かわらけR種	(7.4)	(4.0)	2.0	1/2個体	体部クロコナデ→底部ナデ	有	骨、砂	褐色	
43 2	青磁碗	不明	不明	不明	口縁部小片	無文	-	精良、黒		龍泉窯系青磁碗Ⅱ-b類(13c初頃-前半)
43 3	青磁碗	不明	6.0	不明	底部破片	高台量付→底部露胎、無文	-	緻密		龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4類(12c中頃-後半)
43 4	瀬戸短頸壺	不明	不明	不明	胴部小片	凸帯貼付、竹管文スタンプ→施軸	-	精良、砂	被熱による器面変質、特注品もしくは輸入陶器カ	
43 5	瀬戸鉢・風炉カ	(10.8)	不明	不明	口縁部小片	竹管文スタンプ→施軸	-	精良、白、砂	4と同一個体カ、4区暗渠下出土、特注品もしくは輸入陶器カ	
43 6	常滑片口鉢	不明	不明	不明	口縁-体部小片		-	長、白、砂	Ⅱ類、6b型式(13c4/4)	
43 7	備前擂鉢	不明	不明	不明	口縁部小片	スリメ(粗)	-	白、砂		
図44・45 10面整地土										
44 1	かわらけT種	(7.0)	-	1.4	1/8個体	体部ヨコナデ→底部ナデ	無	精良、砂、砂	褐色	
44 2	かわらけT種	8.8	-	2.0-2.5	完形	底部ナデ→体部ヨコナデ	無	角、砂	褐色	
44 3	かわらけT種	(9.0)	-	1.8	1/3個体	底部ナデ→体部ヨコナデ	無	砂、礫	黄灰色	
44 4	かわらけT種	(9.4)	-	2.0	1/2個体	底部ナデ→体部ヨコナデ	無	角、砂、泥	褐色	
44 5	かわらけT種	9.8	-	2.1	1/2個体	体部ヨコナデ→底部ナデ	無	骨、砂	灰白色	
44 6	かわらけT種	(9.2)	-	2.0	1/4個体	底部ナデ→体部ヨコナデ	無	精良、砂	黄灰色	
44 7	かわらけT種	9.1	-	3.2	完形	体部ヨコナデ→底部ナデ	無	砂、長	褐色	口縁部スス付着
44 8	かわらけT種	(9.8)	-	2.0	1/8個体	底部ナデ→体部ヨコナデ	無	砂	黄灰色	
44 9	かわらけT種	(9.4)	-	2.1	1/3個体	底部ナデ→体部ヨコナデ	無	精良、砂、砂	褐色	
44 10	かわらけT種	(9.5)	-	2.1	1/2個体	体部ヨコナデ→底部ナデ	無	精良、砂	褐灰色	
44 11	かわらけT種	(10.2)	-	1.5	1/2個体	底部ナデ→体部ヨコナデ	無	砂	褐色	
44 12	かわらけT種	(10.4)	-	1.6	1/5個体	底部ナデ→体部ヨコナデ	無	砂、砂	褐色	
44 13	かわらけT種	(11.0)	-	2.0	1/6個体	体部ヨコナデ→底部ナデ	無	骨、砂、砂	褐色	口縁部スス付着、灯明皿
44 14	かわらけT種	(12.0)	-	(2.6)	1/6個体	体部ヨコナデ	無	砂	灰褐色	
44 15	かわらけT種	(13.0)	-	3.2	1/3個体	体部ヨコナデ→底部ナデ	無	精良、砂	褐色	
44 16	かわらけT種	(13.4)	-	3.0	1/4個体	底部ナデ→体部ヨコナデ	無	砂、砂	黄灰色	
44 17	かわらけT種	(13.8)	-	(3.0)	1/4個体	体部ヨコナデ	無	砂	褐色	
44 18	内折れかわらけR種	(4.8)	4.2	1.0	1/3個体	体部クロコナデ→底部ナデ	有	精良、砂	黄灰色	
44 19	かわらけR種	(8.2)	(6.4)	1.4	1/6個体	体部クロコナデ	有	砂	褐色	
44 20	かわらけR種	(8.8)	(6.0)	1.8	1/4個体	体部クロコナデ→底部ナデ	無	長、砂	褐色	
44 21	かわらけR種	(8.8)	(6.4)	1.8	1/4個体	体部クロコナデ→底部ナデ	無	骨、白	黄灰色	口縁部スス付着、灯明皿
44 22	かわらけR種	(9.0)	(7.6)	1.7	1/5個体	体部クロコナデ→底部ナデ	有	長、角、砂	黄灰色	

調整・文様には、特徴的な事項のみ記載した。
胎土中の鉱物の略号は以下の通り 長石：長、石英：石、石英：石、砂粒：砂、角閃石：角、白色粒子：白、黑色粒子：黒、小礫：礫、橙色粒子：橙、海綿状骨針：骨、泥岩塊：泥

出土遺物観察表 4 土器・陶磁器 4

図版番号	器 種	法 量 (cm)			残存率	調 整 ・ 文 様		胎 土	色 調	板 状 圧 痕		備 考
		口径	底径	高さ		外 面	内 面			有 砂	有 骨, 砂	
44 23	かわらけH種	9.3	6.5	1.9-2.1	ほぼ完形		体部クロコナデ→底部ナデ	有 砂	橙色			
44 24	かわらけR種	12.6	8.1	3.3	完形		体部クロコナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	黄灰色			
44 25	かわらけR種	13.0	8.9	3.3-3.8	3/4個体		体部クロコナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	橙色			
44 26	白磁碗	不明	不明	不明	体部ハ片	無文, 体部下位露胎	櫛描点描文	- 黒				白磁碗V類(11c後半-12c後半)カ
44 27	青磁碗	不明	不明	不明	口縁部ハ片	無文	片影花文	- 緑密				龍泉窯系青磁碗 I-3類(12c中頃-後半)
44 28	青磁碗	不明	不明	不明	口縁部ハ片	無文	片影花文	- 緑密				龍泉窯系青磁碗 I 類(12c中頃-後半)
44 29	青磁碗	不明	5.4	(2.4)	底部破片	無文, 高台の一部→底面露胎	無文	- 精良, 黒				龍泉窯系青磁碗 I-1a類(12c中頃-後半)
44 30	青磁碗	不明	(5.8)	(2.5)	底部1/5	無文, 皿付→底面露胎	片影花文	- 緑密				龍泉窯系青磁碗 I 類(12c中頃-後半)
44 31	黄釉甕	不明	不明	不明	口縁部ハ片	体部ナデ, 口縁内側面取り		- 白, 砂				輸入陶器
44 32	緑釉甕	不明	不明	不明	体部ハ片	施釉, 緑影文	露胎	- 緑密				輸入陶器
44 33	白磁小壺	(8.0)	不明	(3.7)	口縁→体部破片			- 砂				
44 34	瀬美焼壺	(40.0)	不明	不明	口縁部ハ片			- 砂, 礫				口縁部内面自然降灰
44 35	常滑広口壺	不明	不明	不明	口縁部ハ片			- 白, 長				5型式(13c2/4)
44 36	常滑甕	不明	不明	不明	胴部ハ片			- 長, 白, 礫				
44 37	常滑片口鉢	(32.0)	不明	(0.5)	体部ハ片			- 白, 砂, 礫				I 類, 4型式(12c末-13c初頭)頃
44 38	常滑片口鉢	不明	不明	不明	口縁部ハ片			- 長, 砂				II 類
44 39	常滑片口鉢	不明	不明	不明	口縁部ハ片			- 砂, 礫				I 類, 4-5型式(12c末-13c2/4-)
44 40	常滑片口鉢	不明	不明	(5.5)	口縁部ハ片			- 長, 白, 砂				I 類, 4型式(12c末-13c初頭)
44 41	常滑片口鉢	不明	不明	不明	口縁→体部ハ片			- 長, 白, 砂				I 類
44 42	常滑片口鉢	不明	不明	不明	口縁部ハ片			- 長, 白				II 類, 5-6a型式(13c2/4-3/4)
44 43	常滑片口鉢	不明	(11.0)	(2.6)	底部ハ片			- 長, 砂				II 類
44 44	常滑片口鉢	(11.6)	不明	(5.5)	体部→底部破片			- 長, 白				I 類, 内面使用による摩耗
44 45	常滑片口鉢	(14.0)	不明	(5.0)	体部→底部破片	器面剥離		- 砂, 白				I 類, 4型式(12c末-13c初頭)
44 46	瀬美片口鉢	(10.2)	不明	(3.2)	底部1/8	底部回転→ラケズリ→高台貼付		- 白, 砂				13c, 内面使用による摩耗
44 47	山茶碗	不明	(7.0)	(1.9)	底部1/4個体	体部クロコナデ→底部ナデ		- 白, 砂				東遠型
44 48	山茶碗	不明	(4.6)	(1.5)	1/4個体	底部回転系切り→高台貼付	体部クロコナデ→底部ナデ	- 白, 黒				瀬美湖西型, 高台皿付に靱殻圧痕
44 49	山菜碗	不明	(7.0)	(3.1)	底部1/4個体	高台皿付に靱殻圧痕		- 白				東濃型4-5型式, 内面使用による摩耗, 外底面に墨書
44 50	土師質土器香炉	不明	不明	不明	口縁部ハ片	型押しによる襷状文		- 白, 黒				風炉カ
44 51	白磁甕片転用磨具	長径4.8	短径4.1	厚1.0	破片			- 精良, 白, 砂				側縁1面使用, 12c前半頃の白磁
45 52	常滑甕片転用磨具	長径7.8	短径6.4	厚1.4	破片			- 長, 白, 礫				側縁2面使用, うち1面刃部によるV字状の磨耗
45 53	平瓦転用磨具	(8.2)	(13.0)	2.3	破片	凹面縄目	凸面格子状タタキ	- 白, 長				凹面端部摩耗
45 54	平瓦	(9.8)	(9.3)	2.6	破片	凹面布目	凸面縄目	白, 礫				内外面炭素吸着
45 55	平瓦	(11.6)	(8.2)	2.6	破片	凹面布目	凸面縄目	- 長, 砂、泥				
図47 11面上												
47 1	内折れかわらけH種	(8.4)	-	(1.6)	1/4個体		体部ヨコナデ	無 精良	黄灰色			
47 2	かわらけH種	(9.4)	-	1.9	1/4個体		体部ヨコナデ→底部ナデ	無 角, 砂	橙色			
47 3	かわらけH種	(10.4)	-	1.5	1/6個体		底部ナデ→体部ヨコナデ	無 精良, 砂	暗灰色			
47 4	かわらけH種	(13.0)	-	(3.7)	1/8個体		体部ヨコナデ→底部ナデ	無 長, 砂	橙色			
47 5	青磁碗	(16.0)	不明	(3.6)	口縁→体部ハ片	縦位縄目文		- 緑密				同安窯系青磁碗 I-b類(12c中頃-後半)
図50 11面整地土												
50 1	かわらけH種	(8.8)	-	1.8	1/4個体		体部ヨコナデ→底部ナデ	無 砂	橙色			
50 2	かわらけH種	(8.8)	-	1.9	1/4個体		底部ナデ→体部ヨコナデ	無 長, 砂	橙色			
50 3	かわらけH種	9.0	-	1.5-2.2	完形	ナデ部分下端に一部ヘラナデ	体部ヨコナデ→底部ナデ	無 砂	褐灰色			
50 4	かわらけH種	(9.6)	-	1.6	1/3個体		底部ナデ→体部ヨコナデ	有 骨, 砂	黄灰色			
50 5	かわらけH種	(9.6)	-	1.7	1/3個体		底部ナデ→体部ヨコナデ	無 骨, 砂	橙色			
50 6	かわらけH種	(11.7)	-	3.2	3/5個体		体部クロコナデ→底部ナデ	無 骨, 砂	灰白色			
50 7	かわらけH種	(13.0)	-	(3.2)	1/5個体		体部ヨコナデ→底部ナデ	無 砂	橙色			
50 8	かわらけH種	13.5	-	3.5	4/5個体		底部ナデ→体部ヨコナデ	無 骨, 砂	灰白色			
50 9	かわらけH種	8.6	6.8	2.0	ほぼ完形	底部回転系切り(低速)	体部クロコナデ→底部ナデ	無 砂質, 礫, 砂	橙色			

調整・文様には、特徴的な事項のみ記載した。

出土遺物観察表 5 土器・陶磁器 5

胎土中の鉱物の略号は以下の通り 長石：長、石英：石、砂粒：砂、角閃石：角、白色粒子：白、黒色粒子：黒、小礫：礫、橙色粒子：橙、海綿状骨針：骨、泥岩塊：泥

図版番号	器 種	法量 (cm)		残存率	調整・文様		胎 土	色調	備 考
		口径	底径		外 面	内 面			
50 10	かわらけR種	(9.6)	(7.0)	1/3個体		体部クロナデ→底部ナデ		橙色	
50 11	白磁甕	不明	不明	口縁部小片	施釉、折り返し口縁	施釉	有 砂		
50 12	青磁碗	不明	不明	口縁-体部小片	無文	片形蓮花文	- 緻密		龍泉窯系青磁碗 I - 2a類 (12c中頃-後半)
50 13	青磁碗	不明	不明	底部小片	無文、底部露胎	底部に片彫文様 (意匠不明)	- 緻密		龍泉窯系青磁碗 I・II類 (12c中頃-13c前半)
50 14	常滑片口鉢	(27.0)	不明	体部1/5個体			- 長、礫、砂		II類, 5型式 (13c前葉), 器面磨耗
50 15	常滑片口鉢	不明	不明	口縁-体部小片			- 長、白、砂		内面自然焼灰, I類, 3-4型式 (12c4/4-13c初頭)
50 16	常滑甕	不明	不明	胴部小片	花文スタンブ		- 長、砂、礫		
50 17	山茶碗	不明	(7.2)	1/4個体	底部回転系切り→高台貼付		- 白、黒		東濃型, 0-53以降の灰軸陶器か東遠型山茶碗
50 18	山茶碗	不明	不明	底部小片			無		東遠型カ
図52 12面上									
52 1	瀬戸仏花瓶	不明	6.0	(5.3)			- 精良, 砂		外底面に「メ」字状ヘラ描き記号
52 2	常滑甕	不明	不明	口縁部1/8			- 長、白、砂、礫		2型式 (12c3/4)
図57 12面P02									
57 1	かわらけR種	(8.6)	(5.8)	2.1	1/5個体	体部クロナデ→底部ナデ	無 砂質、骨、砂	褐色	
57 2	かわらけR種	(9.5)	6.0	1.9	1/6個体	体部クロナデ→底部ナデ	無 骨、砂、長	黄灰色	
57 3	灰軸陶器皿か碗	不明	(6.7)	(2.0)	底部静止系切り→高台貼付	体部クロナデ→底部ナデ	- 黒		0-53葉期 (11cft)
図57 12面SD1									
57 4	かわらけT種	8.7	-	1.4	完形	体部ヨコナデ→底部ナデ	無 骨、砂	橙色	
57 5	かわらけT種	9.0	1.5-1.9	3/4個体		底部ナデ→体部ヨコナデ	無 砂、砂	灰褐色	
57 6	かわらけT種	13.7	-	4/5個体		体部ヨコナデ→底部ナデ	有 骨、砂	黄灰色	
57 7	かわらけT種	(14.0)	-	1/8個体		体部ヨコナデ	無 粉質、砂	灰褐色	
57 8	かわらけR種	(9.0)	6.8	1/2個体		体部クロナデ→底部ナデ	有 砂	褐色	
57 9	かわらけR種	14.2	10.2	3.4-3.7	完形	体部クロナデ→底部ナデ	有 白、砂	灰褐色	
57 10	青磁碗	不明	不明	体部小片	縦位欄目文、体部下位露胎	片形花文、櫛描点描文	- 精良、黒		同安窯系青磁碗 I - 1b類 (12c中頃-後半)
57 11	平瓦	(11.2)	(12.5)	破片	凹面布目	凸面襷目	- 礫、砂		被熱による亀裂
図58 12面整地土									
58 1	かわらけT種	(7.7)	-	1/4個体		体部ヨコナデ	不明 骨、	灰白色	
58 2	かわらけT種	(8.1)	-	1/3個体		体部ヨコナデ→底部ナデ	有 骨、砂	黄灰色	
58 3	かわらけT種	(8.3)	-	1/3個体		体部ヨコナデ→底部ナデ	無 骨、砂	灰白色	
58 4	かわらけT種	(9.4)	-	1/4個体		底部ナデ→体部ヨコナデ	無 砂	褐色	
58 5	かわらけT種	9.2-9.8	-	1.9-2.4	完形	体部ヨコナデ→底部ナデ	無 骨、砂、長	褐色	
58 6	かわらけT種	(12.4)	-	2.7	1/4個体	体部ヨコナデ→底部ナデ	無 砂、長	黄灰色	
58 7	かわらけT種	13.8	-	3.4	4/5個体	体部ヨコナデ→底部ナデ	無 骨、砂	黄灰色	
58 8	青磁皿	不明	(5.8)	(1.5)	底部1/4	劃花文、櫛描点描文	- 緻密		同安窯系青磁皿 I - 2b類 (12c中頃-12c後半)
58 9	青磁碗	不明	不明	口縁部小片	無文	片形花文、分割線	- 緻密		龍泉窯系青磁碗 I - 4a類 (12c中頃-後半)
58 10	青磁碗	不明	不明	体部小片	櫛描文、体部一部露胎	櫛描点描文	- 緻密		同安窯系青磁碗 (12c中頃-12c後半)
58 11	青磁碗	不明	不明	口縁-体部小片	無文	劃花文	- 緻密		龍泉窯系青磁碗 I類 (12c中頃-12c後半)
58 12	瀬美短頸甕	不明	不明	口縁部小片	施釉	露胎	- 砂		2a型式 (12c後葉) 頃
58 13	瀬美片口鉢	不明	(14.0)	(5.5)	底部回転ヘラケズリ→高台貼付		- 白、砂、長		12c中葉頃
58 14	常滑甕	不明	不明	(5.4)			- 長、白、砂		2型式 (12c3/4)
58 15	平瓦	(9.7)	(6.9)	1.5	破片	凹面襷目カ	- 長、砂		
図61 13面SK1									
61 1	白磁碗	不明	不明	口縁-体部破片	無文、体部下位露胎	無文	- 精良、白、黒		白磁碗 V-4類かIII-1, 3類 (12c中頃-後半)
61 2	青磁輪花碗	不明	不明	口縁-体部破片	無文	分割線、花文	- 緻密		龍泉窯系青磁碗 I - 4b類 (12c中頃-後半)
61 3	丸瓦	(10.1)	(5.8)	1.8	破片	凹面布目	- 長、白、砂		尾張産
61 4	平瓦	(11.2)	(6.7)	1.9	破片	凸面襷目	- 長、砂		
下段 (4-6区)									
図62 4面上堆積土									
62 1	内折れかわらけR種	(4.3)	(3.8)	1.2	3/5個体	体部クロナデ→底部ナデ	有 砂	黄灰色	
62 2	かわらけR種	(5.8)	(3.0)	1.9	1/2個体	体部クロナデ→底部ナデ	不明 骨、砂	褐色	

調整・文様には、特徴的な事項のみ記載した。
胎土中の鉱物の略号は以下の通り 長石：長、石英：石、砂粒：砂、角閃石：角、白色粒石：白、黑色粒石：黒、小礫：礫、橙色粒石：橙、海綿状骨針：骨、泥岩塊：泥

出土遺物観察表 6 土器・陶磁器 6

図版番号	器 種	法 量 (cm)		残 存 率	調 整 ・ 文 様		胎 土	色 調	備 考
		口径	底径		外 面	内 面			
62 3	かわらけR種	5.9	3.7	2.2	無	体部クロナデ→底部ナデ	骨, 砂	橙色	
62 4	かわらけR種	(6.7)	(4.8)	3/5個体	無	体部クロナデ→底部ナデ	骨, 砂	橙色	
62 5	かわらけR種	8.4	6.4	1.6	完形	体部クロナデ→底部ナデ	骨, 砂	灰白色	
62 6	かわらけR種	(9.8)	(5.3)	2.5	1/2個体	体部クロナデ→底部ナデ	骨, 砂	黄灰色	
62 7	かわらけR種	(9.8)	(6.2)	2.5	3/5個体	体部クロナデ→底部ナデ	無 砂	橙色	
62 8	かわらけR種	11.3	7.6	3.1	3/5個体	体部クロナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	黄灰色	
62 9	かわらけR種	12.3	7.6	3.7	3/5個体	体部クロナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	黄灰色	
62 10	青磁碗	不明	(5.8)	不明	無文, 高台量付→底部露胎	体→底部花文	- 精良, 白, 黒	龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2類 (12c中頃-後半)	
62 11	常滑甕	不明	不明	不明	口縁部小片		-	10型式 (15c代)	
図65 4面土									
65 1	かわらけR種	6.4	4.3	1.9	完形	体部クロナデ→底部ナデ	有 骨, 砂, 橙	橙色	
65 2	かわらけR種	7.4	4.9	2.2	完形	体部クロナデ→底部ナデ	有 骨, 砂, 橙	橙色	
65 3	青磁碗	不明	不明	不明	口縁部小片	無文	- 緻密	龍泉窯系青磁碗Ⅱ類 (13c初頃-前半)	
65 4	常滑片口鉢	不明	不明	不明	口縁部1/8		- 長, 白, 砂	Ⅱ類, 7-8型式 (14c1/2-2/2)	
65 5	瓦質土器香炉	(11.6)	-	-	口縁-体部1/8		- 精良, 白, 黒	内外面灰素吸着	
図65 4面SD1									
65 6	かわらけR種	7.8	4.7	1.8	3/5個体	体部クロナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	灰白色	
65 7	青磁盤	不明	不明	不明	口縁部小片	無文	- 精良, 黒	龍泉窯系青磁碗Ⅲ類 (13c中頃-14c初頃)併行	
図66 4面道路構成土									
66 1	かわらけT種	8.9	-	2.3		体部ヨコナデ→底部ナデ	無 骨, 砂	灰白色	
66 2	かわらけR種	5.2	4.2	2.2	4/5個体	体部クロナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	橙色	
66 3	かわらけR種	7.8	5.3	1.8	完形	体部クロナデ→底部ナデ	有 骨, 砂, 橙	黄灰色	
66 4	かわらけR種	12.5	7.6	3.6	4/5個体	体部クロナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	橙色	
66 5	白磁口禿皿	不明	不明	不明	口縁-体部小片	無文	- 緻密	白磁Ⅸ類 (13c後半-14c前半)	
66 6	青磁碗	不明	不明	不明	口縁-体部小片	底部に文様	- 緻密	龍泉窯系青磁碗Ⅳ類 (14c初頃-後半)カ	
66 7	青磁碗	不明	不明	不明	口縁-体部小片	無文	- 緻密	被熱により器面変質, 龍泉窯系青磁碗Ⅱ類 (13c初頃-前半)	
66 8	青磁碗	不明	不明	不明	口縁-体部小片	無文	- 精良, 白	龍泉窯系青磁碗Ⅲ-2類 (13c中葉-15c中葉)	
66 9	瀬戸縁細皿	不明	不明	不明	口縁-体部小片	体部施釉	- 精良, 白, 黒	古瀬戸後期 (14c後葉-15c中葉)	
66 10	瀬戸折縁深皿	不明	不明	不明	口縁-体部小片	施釉	- 精良, 白, 砂	古瀬戸後Ⅲ-Ⅳ期 (14c前-中葉)	
66 11	瀬戸平碗	不明	不明	不明	口縁-体部小片	施釉, 体部下位露胎	- 白, 砂, 礫	古瀬戸中Ⅳ-後Ⅰ期 (14c中葉)頃	
66 12	瀬戸瓶子	不明	(8.0)	(4.2)	底部1/3	花文→施釉, 底部露胎	- 精良, 白, 砂	古瀬戸中期 (13c後葉-14c前葉)カ	
66 13	常滑甕	不明	不明	不明	口縁部小片		- 長, 白, 砂, 礫	外面自然焼灰, 7型式 (14c1/2)	
66 14	常滑甕	不明	不明	不明	口縁部小片		- 長, 白, 砂	5-6a型式 (13c2/4-3/4)	
66 15	常滑甕	不明	不明	不明	口縁部小片		- 長, 白, 砂	7型式 (14c1/2)	
66 16	常滑甕	不明	(20.4)	(9.8)	底部1/5個体		- 長, 白, 砂		
66 17	常滑片口鉢	不明	不明	不明	口縁部小片		- 長, 白, 砂	Ⅱ類, 7-8型式 (14c1/2-2/2)	
66 18	軒平瓦	(10.9)	(14.8)	2.6	破片	凸面ヘラナデ	- 礫, 砂	瓦当に銅頭文+「米」	
図67 4面整地土									
67 1	かわらけT種	(11.6)	-	不明	1/8個体	体部ヨコナデ	不明 砂	黄灰色	
67 2	かわらけT種	12.7	-	3.1	9/10個体	体部ヨコナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	灰白色	内外面に黒漆 (カ) 付着
67 3	かわらけT種	(12.5)	-	4.1	3/5個体	体部ヨコナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	灰白色	
67 4	かわらけT種	(12.6)	-	3.7	1/4個体	体部ヨコナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	黄灰色	
67 5	かわらけT種	14.0	-	3.5	9/10個体	体部ヨコナデ→底部ナデ	無 骨, 砂	灰白色	スス付着
67 6	内折れかわらけR種	(7.8)	(5.9)	1.5	1/3個体	体部クロナデ→底部ナデ	有	灰白色	
67 7	かわらけR種	(6.7)	(4.7)	1.7	1/3個体	体部クロナデ→底部ナデ	無 骨, 砂	黄灰色	
67 8	かわらけR種	6.9	4.2	2.1	3/5個体	体部クロナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	橙色	
67 9	かわらけR種	7.8	5.8	2.3	4/5個体	体部クロナデ→底部ナデ	有 骨,	灰白色	
67 10	かわらけR種	(7.8)	(5.7)	2.0	1/4個体	体部クロナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	灰白色	
67 11	かわらけR種	7.9	6.3	1.8	4/5個体	体部クロナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	黄灰色	
67 12	かわらけR種	8.7	6.8	2.0	4/5個体	体部クロナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	橙色	

調整・文様には、特徴的な事項のみ記載した。

出土遺物観察表 7 土器・陶磁器 7

調整・文様には、特徴的な事項のみ記載した。
胎土中の鉱物の略号は以下の通り 長石：長、石英：石、砂粒：砂、角閃石：角、白色粒子：白、黒色粒子：黒、小礫：礫、橙色粒子：橙、海綿状骨針：骨、泥岩塊：泥

図版番号	器 種	法量 (cm)		残存率	調整・文様	外 面	内 面		板状 圧痕	胎 土	色調	備 考
		口径	高さ									
67 13	かわらけR種	(8.8)	(6.4)	1/2個体			体部クロナデ→底部ナデ		有		灰白色	
67 14	かわらけR種	(10.6)	7.6	3/5個体			体部クロナデ→底部ナデ		有	骨, 泥, 砂	黄灰色	
67 15	かわらけR種	11.2	5.9	2/3個体			体部クロナデ→底部ナデ		無	砂, 橙	黄灰色	スス付着, 灯明皿
67 16	かわらけR種	12.5	7.9	4/5個体			体部クロナデ→底部ナデ		有	骨, 砂, 橙	橙色	
67 17	かわらけR種	(13.7)	(9.0)	4/5個体			体部クロナデ→底部ナデ		有	砂, 橙	橙色	
67 18	青白磁梅瓶蓋	(5.0)	-	1/2個体		頂部花文カ, 縁部露胎	露胎		-	縹密		被熱により器面変質
67 19	青白磁梅瓶	不明	不明	体部小片		花文カ			-	縹密		
67 20	白磁口禿皿	(8.8)	(5.0)	1/5個体		無文, 体部下半～底部露胎	無文, 口縁部露胎		-	縹密		白磁皿X類(13c後半-14c前半)
67 21	青磁束口碗	不明	不明	口縁部小片		無文	無文		-	縹密		龍泉窯系青磁曲口碗Ⅰ類
67 22	青磁碗	不明	不明	口縁-体部小片		体部花弁形に凹面ケズリ	無文		-	縹密		龍泉窯系青磁碗Ⅳ類(14c初頭-後半)カ
67 23	青磁碗	不明	不明	口縁-体部小片		無文	花文		-	精良, 黒		龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2類(12c中頃-後半)
67 24	青磁折縁盤	不明	不明	口縁-体部小片		無文	無文		-	精良, 白		坏III-3b類(13c中頃-14c初頭)併行
67 25	瀬戸入子	(4.4)	(3.0)	1/3個体					-	縹密		古瀬戸後Ⅰ期(14c後葉)以前
67 26	瀬戸入子	(9.4)	不明	口縁-体部1/5					-	長, 白		古瀬戸後Ⅰ期(14c後葉)以前
67 27	瀬戸御目付大皿	(33.0)	不明	口縁-体部1/8		口縁～体部中位施軸	口縁～体部中位施軸		-	縹密		古瀬戸後Ⅱ期(14c末-15c初頭)
67 28	常滑甕	(21.8)	不明	口縁部1/8					-	長, 白, 砂		5型式(1220-1250年頃)
67 29	常滑甕	不明	不明	口縁部小片					-	長, 白, 砂		6b-7型式(13c3/4-14c1/2)
67 30	常滑甕	不明	不明	口縁部小片					-	長, 白, 砂		6b-7型式(13c3/4-14c1/2)
67 31	常滑甕	不明	不明	口縁-体部小片					-	長, 白, 砂		外面胴部自然隆灰, 6a型式(13c3/4)
67 32	常滑甕	不明	不明	口縁-体部小片					-	長, 白, 砂		6b型式(13c3/4)
67 33	常滑広口壺	不明	不明	口縁部小片					-	長, 白, 砂, 礫		9型式(15c1/2)
67 34	常滑片口鉢	不明	不明	口縁部小片					-	長, 白, 砂		Ⅱ類, 3型式(12c4/4)カ
67 35	常滑片口鉢	不明	不明	口縁-体部小片					-	長, 白, 砂		内面自然隆灰, Ⅱ類, 5-7型式(13c2/4-14c1/2)
67 36	常滑片口鉢	不明	不明	口縁-体部小片					-	長, 白, 砂		内面自然隆灰, Ⅰ類, 5-6a型式(13c2/4-13c3/4)
67 37	常滑片口鉢	不明	不明	口縁部小片					-	長, 白, 砂		Ⅰ類, 5-6a型式(13c2/4-13c3/4)
67 38	常滑片口鉢	不明	不明	口縁-体部小片					-	長, 白, 砂		Ⅰ類, 5-6a型式(13c2/4-13c3/4)
67 39	常滑片口鉢	不明	不明	口縁-体部破片					-	長, 白, 砂		Ⅱ類, 5型式(13c2/4)
67 40	常滑片口鉢	不明	不明	口縁-体部小片			口縁部付近にヘラ描丸線		-	長, 白, 砂		Ⅱ類, 7-8型式(14c代)
67 41	常滑片口鉢	不明	不明	口縁-体部小片		口縁部施軸	施軸		-	長, 白, 砂		Ⅱ類, 9型式(15c1/2)以降
67 42	常滑片口鉢	不明	(14.6)	底部1/5		底部ヘラケズリ→高台貼付			-	長, 白, 砂, 礫		Ⅰ類
67 43	常滑片口鉢	不明	(12.8)	体-底部1/4		底部無調整→高台貼付	体部ヨコナデ→底部ヘラナデカ		-	長, 白, 砂, 礫		Ⅰ類
67 44	備前灌鉢	不明	不明	口縁部小片			描目		-	白, 砂		内外面炭素吸着
67 45	瓦質土器火鉢	不明	不明	口縁部小片					-	白, 砂		内外面炭素吸着
67 46	瓦質土器火鉢	不明	不明	口縁部小片					-	白, 砂		内外面炭素吸着
67 47	瓦質土器火鉢	不明	不明	口縁-体部破片					-	白, 砂		内外面炭素吸着
67 48	平瓦	(10.5)	(8.0)	2.0		ヘラナデ, ハナレ砂	凸面襷目		-	長, 白, 砂		
図69 5面上												
69 1	かわらけR種	8.0	5.5	1.8			体部クロナデ→底部ナデ		有	骨, 砂	黄灰色	口縁部スス付着, 灯明皿
69 2	かわらけR種	11.6	7.5	3.3			体部クロナデ→底部ナデ		有	骨, 砂	黄灰色	
69 3	かわらけR種	12.4	8.1	3.1			体部クロナデ→底部ナデ		有	骨, 砂, 橙	黄灰色	
69 4	かわらけR種	12.6	8.5	3.4			体部クロナデ→底部ナデ		有	骨, 砂, 橙	橙色	
69 5	常滑甕	不明	不明	不明			口縁部小片		-	長, 白		外面自然隆灰, 5-6a型式(13c2/4-3/4)
69 6	瓦質土器三足釜	(4.0)	不明	(4.1)		ナデ, 手づくね	口縁-体部1/3		-	精良, 黒		13-8と同一カ
図70 5面道路構成土												
70 1	かわらけR種	11.5	7.7	3.3			体部クロナデ→底部ナデ		有	骨, 砂	橙色	
70 2	かわらけR種	12.5	8.3	3.4			体部クロナデ→底部ナデ		無	骨, 砂, 橙	黄灰色	
図71・72 5面整地土												
71 1	かわらけT種	(12.7)	-	3.1			体部ヨコナデ→底部ナデ		有	骨, 砂	黄灰色	
71 2	かわらけR種	6.6	4.2	2.0			体部クロナデ→底部ナデ		有	骨, 砂	橙色	
71 3	かわらけR種	6.9	5.1	2.0			体部クロナデ→底部ナデ		有	砂	黄灰色	

調整・文様には、特徴的な事項のみ記載した。
胎土中の鉱物の略号は以下の通り 長石：長、石英：石、砂粒：砂、角閃石：角、白色粒石：白、黑色粒石：黒、小礫・礫、橙色粒石：橙、海綿状骨針：骨、泥岩塊：泥

出土遺物観察表 8 土器・陶磁器 8

図版番号	器 種	法量 (cm)		残存率	調整・文様		胎 土	色調	板状 圧痕		備 考
		口径	底径	高さ	外 面	内 面					
71 4	かわらけR種	(7.2)		2.0		底部クロコナダ→底部ナダ	有 砂	黄灰色			
71 5	かわらけR種	7.4	4.2	2.3	完形	底部クロコナダ→底部ナダ	有 骨,	橙色			
71 6	かわらけR種	7.0	4.8	1.6		底部クロコナダ→底部ナダ	有 砂	黄灰色			
71 7	かわらけR種	6.6	4.2	2.2		底部クロコナダ→底部ナダ	有 砂	黄灰色			
71 8	かわらけR種	7.5	5.5	1.6		底部クロコナダ→底部ナダ	有 砂	黄灰色			
71 9	かわらけR種	7.5	5.5	1.7		底部クロコナダ→底部ナダ	有 骨, 砂	黄灰色			
71 10	かわらけR種	7.7	5.4	1.6		底部クロコナダ→底部ナダ	有 骨,	黄灰色			
71 11	かわらけR種	(7.7)	(5.2)	1.6		底部クロコナダ→底部ナダ	不明 砂	黄灰色			
71 12	かわらけR種	7.8	5.6	1.7		底部クロコナダ→底部ナダ	有 骨, 砂, 橙	黄灰色			
71 13	かわらけR種	(7.7)	(6.0)	1.8		底部クロコナダ→底部ナダ	有 砂	灰白色			口縁部スス付着, 灯明皿
71 14	かわらけR種	7.8	6.0	1.8	完形	底部クロコナダ→底部ナダ	無 骨,	黄灰色			
71 15	かわらけR種	7.8	5.4	1.9	2/3個体	底部クロコナダ→底部ナダ	有 砂	黄灰色			
71 16	かわらけR種	7.9	5.8	1.8	9/10個体	底部クロコナダ→底部ナダ	有 骨, 砂, 橙	黄灰色			
71 17	かわらけR種	8.0	6.0	1.7	完形	底部クロコナダ→底部ナダ	有 骨,	灰白色			
71 18	かわらけR種	8.0	5.0	21.0	9/10個体	底部クロコナダ→底部ナダ	有 骨, 砂	黄灰色			外底面礫状の圧痕, 口縁部スス付着, 灯明皿
71 19	かわらけR種	(8.6)	(6.3)	1.7	1/2個体	底部クロコナダ→底部ナダ	無	橙色			
71 20	かわらけR種	11.2	6.3	3.5	3/5個体	底部クロコナダ→底部ナダ	有 砂	黄灰色			
71 21	かわらけR種	(11.8)	(8.1)	3.4	1/2個体	底部クロコナダ→底部ナダ	有 骨, 砂, 橙	橙色			
71 22	かわらけR種	11.8	7.0	3.5	3/5個体	底部クロコナダ→底部ナダ	有 骨, 砂, 橙	橙色			
71 23	青白磁梅瓶	不明	(10.0)	不明	施釉	施釉	- 精良, 白				
71 24	白磁口壳皿	(12.2)	不明	(3.2)	口縁-体部1/5	無文, 口縁部露胎	- 緻密				口壳, 皿X類(13c後半-14c前半)
71 25	青磁坏	不明	不明	不明	口縁部小片	無文	- 緻密				龍泉窯系青磁坏Ⅲ-3b類(13c中頃-14c初頃)
71 26	青磁碗	不明	不明	不明	口縁部小片	縮描文カ	- 緻密				同安窯系青磁碗Ⅰ-c類(12c中頃-12c後半)
71 27	青磁碗	不明	不明	不明	口縁部小片	縮連弁文	- 緻密				龍泉窯系青磁碗Ⅱ-c類(13c初頃-前半)
71 28	青磁碗	不明	不明	不明	口縁-体部小片	縮連弁文	- 緻密				龍泉窯系青磁碗Ⅱ-b類(13c初頃-前半)
71 29	青磁碗	不明	不明	不明	口縁-体部小片	縮連弁文	- 緻密				龍泉窯系青磁碗Ⅱ-c類(13c初頃-前半)
71 30	青磁坏	不明	4.6	(3.7)	体-底部破片	縮連弁文	- 緻密				龍泉窯系青磁碗Ⅱ類(13c初頃-前半)
71 31	青磁坏	不明	不明	不明	口縁-体部小片	縮連弁文, 墨付～底面露胎	- 精良, 黒				龍泉窯系青磁坏Ⅲ-4b類(13c中頃-14c初頃)併行
71 32	耳壺	(11.2)	不明	不明	口縁部小片	無文	- 精良, 白, 橙				輸入陶器, 外面飛沫状の降灰, 内面透明釉
71 33	瀬戸入子	(5.8)	(3.2)	2.5	1/3個体	ユビオサエ(輪花), 底部ヘラナダ	- 精良, 白, 黒				内面一部自然降灰, 古瀬戸中Ⅰ期(13c末-14c初頃)頃カ
71 34	常滑蔵口壺	不明	(10.0)	(6.0)	体-底部1/3	- 砂	- 砂				内底面自然降灰
71 35	常滑甕	不明	不明	不明	口縁部小片		- 長, 白, 砂, 礫				5型式(13c2/4)
71 36	常滑甕	不明	不明	不明	口縁部小片		- 長, 白, 砂, 礫				5型式(13c2/4)
71 37	常滑甕	(36.6)	不明	不明	口縁部小片		- 長, 白, 砂, 礫				外面胴部自然降灰, 5-6a型式(13c2/4-3/4)
71 38	常滑甕	不明	不明	不明	口縁部小片		- 長, 白, 砂				6a型式(13c3/4)
71 39	常滑甕	不明	不明	不明	口縁部小片		- 長, 白, 砂, 礫				6a-6b型式(13c3/4-4/4)
71 40	常滑甕	不明	不明	不明	口縁部小片		- 長, 白, 砂				6b-7型式(13c4/4-14c1/2)
71 41	常滑甕	不明	不明	不明	口縁部1/8		- 長, 白, 砂				内外面自然降灰, 6b-7型式(13c4/4-14c1/2)
71 42	常滑甕	不明	(22.0)	(9.6)	胴部-底部1/4	底部無調整	- 長, 白, 礫				Ⅱ類(6b型式(13c4/4)
71 43	常滑片口鉢	不明	不明	不明	口縁-体部小片		- 長, 白, 砂				Ⅱ類, 6b-7型式(13c4/4-14c1/2)
71 44	常滑片口鉢	不明	不明	不明	口縁-体部小片		- 長, 白, 砂				Ⅰ類
71 45	常滑片口鉢	不明	(13.6)	不明	底部1/5	底部無調整→高台貼付	- 長, 白, 砂				内面体部自然降灰, Ⅰ類
71 46	常滑片口鉢	不明	不明	不明	底部小片	底部無調整→高台貼付	- 長, 白, 砂, 礫				
71 47	常滑片口鉢	不明	不明	不明	体-底部破片	高台貼付	- 長, 白, 砂				Ⅰ類
71 48	常滑片口鉢	不明	不明	不明	口縁部小片		- 白, 黒, 砂, 礫				Ⅱ類, 内面自然降灰, 信楽焼のように砂・礫が器面に表出
71 49	瓦質土器火鉢	不明	不明	不明	口縁部小片		- 白, 黒				口縁部穿孔未貫通
71 50	瓦質土器火鉢	不明	不明	不明	1/9個体		- 黒, 砂				内外面炭素吸着, 口縁部付近焼成前穿孔
図77-80 4区6面SX1											
77 1	内折れかわらけR種	6.8	-	1.2-1.4	1/2個体	底部ナダ→体部ヨコナダ	有 骨, 砂	灰白色			
77 2	かわらけR種	8.6	-	1.4	完形	体部ヨコナダ→底部ナダ	無 骨, 砂	灰白色			

出土遺物観察表 9 土器・陶磁器 9

調整・文様には、特徴的な事項のみ記載した。
胎土中の鉱物の略号は以下の通り 長石：長、石英：石、砂粒：砂、角閃石：角、白色粒子：白、黑色粒子：黒、小礫：礫、橙色粒子：橙、海綿状骨針：骨、泥岩塊：泥

図版番号	器 種	法量 (cm)		残存率	調整・文様		胎 土	色調	備 考
		口径	高さ		外 面	内 面			
77 3	かわらけ種	8.2	-	完形		体部ヨコナデ→底部ナデ	骨, 砂	灰白色	
77 4	かわらけ種	8.4	-	3/5個体		底部ナデ→体部ヨコナデ	骨, 砂	黄灰色	
77 5	かわらけ種	8.6	-	3/5個体		体部ヨコナデ→底部ナデ	骨, 砂	灰白色	
77 6	かわらけ種	8.7	-	ほぼ完形		体部ヨコナデ→底部ナデ	無 砂, 橙	灰白色	
77 7	かわらけ種	8.7	-	4/5個体		底部ナデ→体部ヨコナデ	無 骨, 砂, 橙	黄灰色	
77 8	かわらけ種	8.8	-	4/5個体		体部ヨコナデ→底部ナデ	無 砂	灰白色	
77 9	かわらけ種	8.9	-	完形		体部ヨコナデ→底部ナデ	無 骨, 砂, 橙	黄灰色	
77 10	かわらけ種	8.7-9.0	-	完形		底部ナデ→体部ヨコナデ	有 骨, 砂	橙色	
77 11	かわらけ種	8.8	-	2/3個体		体部ヨコナデ→底部ナデ	無 骨, 砂, 橙	橙色	
77 12	かわらけ種	8.9	-	完形		体部ヨコナデ→底部ナデ	無 骨, 砂	橙色	
77 13	かわらけ種	8.9	-	4/5個体	体部2段ナデ	底部ナデ→体部ヨコナデ	有 骨, 砂	灰白色	
77 14	かわらけ種	9.1	-	1/2個体		底部ナデ→体部ヨコナデ	無 骨, 砂	灰白色	
77 15	かわらけ種	9.2	-	3/4個体		底部ナデ→体部ヨコナデ	無 骨, 砂	灰白色	
77 16	かわらけ種	9.0	-	4/5個体		体部ヨコナデ→底部ナデ	無 骨, 砂	灰白色	
77 17	かわらけ種	9.0	-	1/2個体		体部ヨコナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	灰白色	
77 18	かわらけ種	9.1	-	2/3個体		底部ナデ→体部ヨコナデ	無 砂	灰白色	
77 19	かわらけ種	9.1	-	4/5個体		体部ヨコナデ→底部ナデ	無 砂	黄灰色	
77 20	かわらけ種	9.1	-	2.2 8/10個体		体部ヨコナデ→底部ナデ	無 骨, 砂	灰白色	
77 21	かわらけ種	9.1	-	完形		体部ヨコナデ→底部ナデ	無 骨, 砂	橙色	
77 22	かわらけ種	9.0	-	1/2個体		体部ヨコナデ→底部ナデ	無 骨, 砂	灰白色	
77 23	かわらけ種	9.2	-	2.3 完形		体部ヨコナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	橙色	
77 24	かわらけ種	9.2	-	2.7-2.9 4/5個体		体部ヨコナデ→底部ナデ	無 骨, 砂	灰白色	
77 25	かわらけ種	9.2	-	2.4 4/5個体		底部ナデ→体部ヨコナデ	無 骨, 砂	黄灰色	
77 26	かわらけ種	9.2	-	2.5 完形		体部ヨコナデ→底部ナデ	有 砂	黄灰色	
77 27	かわらけ種	9.3	-	1/2個体		底部ナデ→体部ヨコナデ	無 骨, 砂, 橙	灰白色	
77 28	かわらけ種	9.2	-	3/4個体		底部ナデ→体部ヨコナデ	無 骨, 砂, 橙	灰白色	
77 29	かわらけ種	9.3	-	2.3 4/5個体		底部ナデ→体部ヨコナデ	無 砂	灰白色	
77 30	かわらけ種	9.4	-	2.2 3/4個体		底部ナデ→体部ヨコナデ	無 骨, 砂, 橙	灰白色	
77 31	かわらけ種	9.4	-	2.3 4/5個体		底部ナデ→体部ヨコナデ	無 骨,	灰白色	
77 32	かわらけ種	9.4	-	2.6 完形		体部ヨコナデ→底部ナデ	無 骨, 砂	灰白色	
77 33	かわらけ種	9.7	-	2.2 5/6個体		体部ヨコナデ→底部ナデ	無 骨, 砂	灰白色	
77 34	かわらけ種	9.8	-	2.2 4/5個体		底部ナデ→体部ヨコナデ	無 骨,	灰白色	
77 35	かわらけ種	11.8	-	3.6 3/5個体		体部ヨコナデ→底部ナデ	無 骨, 砂	灰白色	
77 36	かわらけ種	12.4	-	3.4 4/5個体		体部ヨコナデ→底部ナデ	無 骨, 砂	黄灰色	
77 37	かわらけ種	12.3	-	2.9-3.1 4/5個体		底部ナデ→体部ヨコナデ	無 骨, 砂	灰白色	
77 38	かわらけ種	12.8	-	3.0 9/10個体		体部ヨコナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	橙色	
77 39	かわらけ種	12.9	-	3.0 4/5個体		体部ヨコナデ→底部ナデ	無 骨, 砂	灰白色	
77 40	かわらけ種	12.8	-	2.9-3.1 3/5個体		体部ヨコナデ→底部ナデ	無 骨, 砂	橙色	
77 41	かわらけ種	12.8	-	3.5 3/5個体		体部ヨコナデ→底部ナデ	無 砂	灰白色	
77 42	かわらけ種	12.2	-	3.6-4.3 4/5個体		体部ヨコナデ→底部ナデ	無 骨, 砂, 橙	灰白色	
77 43	かわらけ種	12.4	-	4.2 完形		体部ヨコナデ→底部ナデ	有 砂	灰白色	
77 44	かわらけ種	13.0	-	3.4 完形		底部ナデ→体部ヨコナデ	無 骨, 砂	灰白色	
77 45	かわらけ種	13.0	-	3.6 9/10個体		体部ヨコナデ→底部ナデ	無 骨, 砂	黄灰色	
77 46	かわらけ種	13.0	-	3.9 4/5個体		体部ヨコナデ→底部ナデ	無 骨, 砂, 橙	黄灰色	
77 47	かわらけ種	13.2	-	3.3 4/5個体	体部2段ナデ	体部ヨコナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	橙色	
77 48	かわらけ種	13.0	-	4.2 完形		体部ヨコナデ→底部ナデ	有 橙	灰白色	
77 49	かわらけ種	13.3	-	3.4 4/5個体		体部ヨコナデ→底部ナデ	無 骨, 砂	灰白色	
77 50	かわらけ種	13.3	-	3.4 9/10個体	体部2段ナデ	体部ヨコナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	橙色	
77 51	かわらけ種	13.3	-	4.6 2/3個体		体部ヨコナデ→底部ナデ	無 骨, 砂	黄灰色	
77 52	かわらけ種	13.4	-	3.6 完形		体部ヨコナデ→底部ナデ	無 骨, 砂	黄灰色	

調整・文様には、特徴的な事項のみ記載した。

出土遺物観察表 10 土器・陶磁器 10

胎土中の鉱物の略号は以下の通り 長石：長、石英：石、砂粒：砂、角閃石：角、白色粒石：白、黑色粒石：黒、小礫：礫、橙色粒石：橙、海綿状骨針：骨、泥岩塊：泥

図版番号	器 種	法量 (cm)			残存率	調整・文様		坂状 圧痕	胎 土	色調	備 考
		口径	底径	高さ		外 面	内 面				
77 53	かわらけI種	13.2	-	3.0-3.8	4/5個体		体部ヨコナデ→底部ナデ	有	骨, 砂	橙色	
77 54	かわらけI種	13.6	-	3.4	4/5個体		体部ヨコナデ→底部ナデ	無	骨, 砂	黄灰色	
77 55	かわらけI種	14.2	-	3.3	3/4個体		体部ヨコナデ→底部ナデ	無	骨, 砂	橙色	灯明皿カ、口縁部にスス付着・半円状に打ち欠け
78 56	かわらけI種	7.2	5.2	1.3	4/5個体		体部クロナデ→底部ナデ	有	骨, 砂	橙色	
78 57	かわらけI種	7.4	5.3	1.7	完形		体部クロナデ→底部ナデ	有	骨, 砂, 橙	橙色	
78 58	かわらけI種	7.8	6.7	2.0	9/10個体		体部クロナデ→底部ナデ	有	骨, 砂	灰白色	内外面に黒漆 (カ) 付着
78 59	かわらけI種	7.8	6.7	1.3-2.1	4/5個体		体部クロナデ→底部ナデ	有	泥, 砂	黄灰色	
78 60	かわらけI種	8.2	6.4	1.6	3/4個体		体部クロナデ→底部ナデ	無	骨, 砂	黄灰色	
78 61	かわらけI種	8.2	6.2	2.1	完形		体部クロナデ→底部ナデ	有	骨, 砂	黄灰色	
78 62	かわらけI種	8.3	6.9	2.2	2/3個体		体部クロナデ→底部ナデ	無	骨, 砂	橙色	
78 63	かわらけI種	8.4	6.7	2.0	4/5個体		体部クロナデ→底部ナデ	有	骨, 砂	橙色	
78 64	かわらけI種	8.6	6.6	1.6	4/5個体		体部クロナデ→底部ナデ	有	骨, 砂, 橙	灰白色	
78 65	かわらけI種	8.6	6.8	1.8	4/5個体		体部クロナデ→底部ナデ	有	骨, 砂, 橙	黄灰色	
78 66	かわらけI種	8.6	6.2	1.8-2.1	完形		体部クロナデ→底部ナデ	有	骨, 砂	灰白色	
78 67	かわらけI種	8.9	6.3	1.9	ほぼ完形		体部→底部クロナデ	無	砂	黄灰色	
78 68	かわらけI種	9.0	6.5	1.7	4/5個体		体部クロナデ→底部ナデ	無	骨, 砂	橙色	
78 69	かわらけI種	9.0	5.9	2.1	完形		体部クロナデ→底部ナデ	有	骨, 砂, 橙	橙色	
78 70	かわらけI種	9.0	6.6	2.0	4/5個体		体部クロナデ→底部ナデ	有	骨,	灰白色	
78 71	かわらけI種	9.4	7.2	2.1	9/10個体		体部クロナデ→底部ナデ	有	骨, 砂	灰白色	
78 72	かわらけI種	9.6	7.5	2.0	4/5個体		体部クロナデ→底部ナデ	有	骨, 砂	灰白色	
78 73	かわらけI種	11.4	8.2	3.5	4/5個体		体部クロナデ→底部ナデ	有	砂, 橙	橙色	
78 74	かわらけI種	11.8	8.1	2.6-2.8	4/5個体		体部クロナデ→底部ナデ	有	砂, 橙	黄灰色	灯明皿カ、口縁部にスス付着・半円状に打ち欠け
78 75	かわらけI種	12.0	8.8	2.9-3.1	完形		体部クロナデ→底部ナデ	有	骨,	灰白色	口縁部にスス付着
78 76	かわらけI種	-	-	-	破片		体部ヨコナデ	無	骨, 砂	灰白色	内面体部に針状具による線刻
78 77	青白磁合子(身)	(7.6)	(5.8)	2.1	1/4個体	施軸、底部露胎	施軸	-	精良, 白		
78 78	白磁四耳壺	不明	不明	不明	口縁部小片			-	精良, 白, 砂		白磁壺Ⅲ-1類 (11c後半-12c後半) カ
78 79	白磁四耳壺	不明	(6.6)	(4.9)	底部1/3	底部露胎	内面露胎	-	精良, 白, 砂		白磁壺Ⅲ-2類 (13c前半) カ
78 80	青磁皿	(11.4)	(5.8)	2.3	1/3個体	無文、底部露胎	底部輪描文、花文	-	緻密		同安窯系青磁皿 I - 1b類 (12c中頃-後半)
78 81	青磁碗	不明	不明	不明	口縁-体部小片	無文	分割線、花文	-	緻密		龍泉窯系青磁碗 I - 4a類 (12c中頃-後半)
78 82	瀬美薬	不明	不明	不明	口縁部小片			-	長, 白, 砂		13c以前
78 83	常滑甕	(19.6)	不明	(6.6)	口縁部1/6			-	長, 白, 砂		外面自然降灰, 4型式 (12c末-13c初頭)
78 84	瓦器碗	(10.4)	(4.8)	3.5	1/2個体	底部へラ切り (右回転) →ナデ		無	緻密		備前, 13c前半
78 85	平瓦	(9.0)	(6.2)	2.1	破片	凹面布目	凸面縄目	-	砂		
78 86	常滑甕片転用磨具	長径7.5	短径7.2	厚1.7	破片			-	長, 白, 砂		表裏面, 側縁1面使用
図82・83 4区6面SX2											
82 1	かわらけI種	(8.8)	-	1.7	1/3個体		底部ナデ→体部ヨコナデ	無	骨, 砂	灰黄色	
82 2	かわらけI種	(8.8)	-	2.2	1/4個体		体部ヨコナデ	不明	骨, 砂, 橙	灰白色	
82 3	かわらけI種	9.2	-	2.0	9/10個体		底部ナデ→体部ヨコナデ	無	骨, 砂	灰白色	
82 4	かわらけI種	8.4	6.0	1.7	9/10個体		体部→底部クロナデ	無	骨, 砂	灰白色	
82 5	かわらけI種	9.1	6.7	2.3	4/5個体		体部クロナデ→底部ナデ	有	骨, 砂,	灰黄色	
82 6	かわらけI種	(12.8)	(8.7)	3.1	1/3個体		体部クロナデ→底部ナデ	有	骨, 砂,	橙色	スス付着
82 7	かわらけI種	(12.7)	(9.7)	3.4	1/2個体		体部クロナデ→底部ナデ	無	骨, 砂	灰黄色	
82 8	かわらけI種	13.6	8.3	3.6	4/5個体		体部クロナデ→底部ナデ	有	砂	橙色	
82 9	青磁碗	不明	不明	(4.0)	口縁-体部1/6	縄連弁文	無文	-	緻密		
82 10	瀬戸柄付片口	不明	(11.8)	(2.9)	底部1/3		施軸	-	砂		古瀬戸中 I - II 期 (13c前半)
82 11	瀬美山茶碗	(13.1)	(5.4)	3.8	1/5個体	底部回転糸切り→高台貼付		-	白, 砂	3a型式 (13c前半) カ	
82 12	常滑薬	不明	不明	不明	口縁部小片			-	長, 白, 砂		内外面自然降灰, 6a型式 (13c3/4)
82 13	常滑薬	不明	不明	不明	口縁部小片			-	長, 白, 砂, 礫		6a型式 (13c3/4)
82 14	常滑片口鉢	不明	不明	不明	口縁部小片			-	長, 白, 砂		内面自然降灰, II 類 6a-b型式 (13c3/4-4/4)
82 15	常滑片口鉢	不明	不明	(4.5)	口縁部小片			-	礫, 長, 白		内外面自然降灰, II 類, 4型式 (13c初頭)

出土遺物観察表 11 土器・陶磁器 11

胎土中の鉱物の略号は以下の通り 長石：長、石英：石、砂粒：砂、角閃石：角、白色粒子：白、黒色粒子：黒、小礫：礫、橙色粒子：橙、海綿状骨針：骨、泥岩塊：泥

図版番号	器 種	法量 (cm)		残存率	調整・文様		板状 圧痕	胎 土	色調	備 考
		口径	底径		外 面	内 面				
82 16	常滑片口鉢	40mm*	不明	口縁部小片			-	長, 白, 砂, 礫	Ⅱ 類, 5-6a型式 (13c2/4-3/4)	
82 17	備前鉢	不明	不明	口縁部小片			-	白, 砂		
82 18	魚住片口鉢	不明	不明	口縁部小片			-	白, 砂	第Ⅱ期第2段階 (12c末葉-13c初頭)	
82 19	山来碗	不明	(7.2)	底部1/3	底部回転糸切り→高台貼付		-	長, 砂	東渡型, 12c前半	
82 20	平瓦	(12.9)	(16.7)	破片	凹面布目		-	長, 白, 砂	凸面から凹面に9mmの穿孔	
図84 4区6面整地土										
84 1	かわらけT種	(9.1)	-	1/4個体	底部ナデ→体部ヨコナデ		無 砂		橙色	
84 2	かわらけT種	9.2	-	完形	底部ナデ→体部ヨコナデ		無 骨, 砂		黄灰色	
84 3	かわらけT種	10.0	-	2/3個体	底部ナデ→体部ヨコナデ		無 骨, 砂		黄灰色	
84 4	かわらけT種	10.4	-	3/5個体	底部ナデ→体部ヨコナデ		無 骨, 砂		灰白色	
84 5	かわらけR種	7.5	4.6	4/5個体	体部クロナデ→底部ナデ		無 骨, 砂		黄灰色	
84 6	かわらけR種	7.8	4.8	完形	体部クロナデ→底部ナデ		有 骨, 砂		黄灰色	
84 7	かわらけR種	7.9	6.1	ほぼ完形	体部クロナデ→底部ナデ		有 骨, 砂		橙色	
84 8	かわらけR種	(7.9)	(4.9)	3/4個体	体部クロナデ→底部ナデ		有 骨, 砂		黄灰色	
84 9	かわらけR種	8.3	6.0	完形	体部クロナデ→底部ナデ		有 骨, 砂		黄灰色	
84 10	かわらけR種	8.5	6.8	1.5	体部クロナデ→底部ナデ		有 骨, 砂		橙色	
84 11	かわらけR種	9.3	6.6	2.0	体部クロナデ→底部ナデ		有 骨, 砂		橙色	
84 12	かわらけR種	11.1	8.4	3.5	体部クロナデ→底部ナデ		有 骨, 砂		橙色	
84 13	青磁碗	(15.8)	不明	口縁-体部1/5	無文		- 緻密			
84 14	青磁碗	不明	不明	口縁-体部小片	分刻線		- 精良, 黒		龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4a類 (12c中頃-後半)	
84 15	青磁碗	不明	(2.4)	底部破片	蓮弁文, 底部・墨付露胎		- 緻密		龍泉窯系青磁碗Ⅰ・Ⅱ類 (12c中頃-13c前半)	
84 16	青磁碗	不明	(4.3)	底部破片	蓮弁文, 底部・墨付露胎		- 緻密		龍泉窯系青磁碗Ⅰ・Ⅱ類 (12c中頃-13c前半)	
84 17	青磁盤	不明	不明	体-底部小片	無文, 墨付露胎	体部花弁形に凹面ケズリ	- 緻密			
84 18	瀬戸御皿	不明	不明	底部小片	体部クロナデ→施軸	底部御目	- 精良, 白, 砂		古瀬戸中期 (13c末-14c中葉) カ	
84 19	常滑片口鉢	(25.4)	不明	口縁部小片			-	長, 白, 砂, 礫	Ⅰ 類, 5-6a型式 (13c2/4-3/4)	
84 20	平瓦	(10.4)	(12.3)	破片	凹面布目, 端部ヘラケズリ		-	白, 長, 砂		
図86 5・6区6a面上										
86 1	かわらけR種	6.7	5.1	1.9	体部クロナデ→底部ナデ		有 骨, 砂		灰白色	口縁部スス付着, 灯明皿
86 2	かわらけR種	7.4	5.8	1.6	体部クロナデ→底部ナデ		有 骨, 砂		灰白色	
86 3	かわらけR種	7.5	5.3	1.7	体部クロナデ→底部ナデ		有 骨, 砂		灰白色	
86 4	かわらけR種	7.5	5.7	1.7	体部クロナデ→底部ナデ		有 骨, 砂		灰白色	
86 5	かわらけR種	7.5	5.5	2.0	体部クロナデ→底部ナデ		有 砂, 橙		黄灰色	
86 6	かわらけR種	7.5	5.2	2.1	体部クロナデ→底部ナデ		有 骨, 砂		黄灰色	口縁部スス付着, 灯明皿
86 7	かわらけR種	7.6	4.8	1.6	体部クロナデ→底部ナデ		有 骨,		橙色	
86 8	かわらけR種	7.6	5.9	1.6	体部クロナデ→底部ナデ		有 骨, 砂, 橙		黄灰色	
86 9	かわらけR種	7.6	5.5	1.7	体部クロナデ→底部ナデ		有 骨, 砂		黄灰色	
86 10	かわらけR種	7.6	5.8	1.8	体部クロナデ→底部ナデ		有 骨, 砂		灰白色	
86 11	かわらけR種	7.6	5.1	1.9	体部クロナデ→底部ナデ		有 骨, 砂		灰白色	
86 12	かわらけR種	7.7	5.4	1.5	体部クロナデ→底部ナデ		有 骨, 砂		黄灰色	
86 13	かわらけR種	7.6	5.0	2.1	体部クロナデ→底部ナデ		有 骨, 砂		灰白色	
86 14	かわらけR種	7.8	5.2	2.0	体部クロナデ→底部ナデ		有 骨, 砂, 橙		黄灰色	
86 15	かわらけR種	7.9	5.5	1.9	体部クロナデ→底部ナデ		有 骨, 砂		黄灰色	
86 16	かわらけR種	7.9	5.7	2.0	体部クロナデ→底部ナデ		有 骨, 砂, 橙		黄灰色	
86 17	かわらけR種	8.0	5.0	1.8	体部クロナデ→底部ナデ		有 骨, 砂		橙色	
86 18	かわらけR種	8.0	5.4	1.9	体部クロナデ→底部ナデ		有 骨,		灰白色	
86 19	かわらけR種	8.1	5.9	2.1	体部クロナデ→底部ナデ		有 骨, 砂, 橙		黄灰色	
86 20	かわらけR種	8.8	6.0	2.0	体部クロナデ→底部ナデ		有 骨,		黄灰色	
86 21	かわらけR種	(10.7)	(6.4)	3.2	体部クロナデ→底部ナデ		有 砂		黄灰色	

調整・文様には、特徴的な事項のみ記載した。

出土遺物観察表 12 土器・陶磁器 12

胎土中の鉱物の略号は以下の通り 長石：長、石英：石、砂粒：砂、角閃石：角、白色粒：白、黒色粒：黒、小礫：礫、橙色粒：橙、海綿状骨針：骨、泥岩塊：泥

図版番号	器 種	法量 (cm)			残存率	調整・文様		胎 土	色調	坂状 圧痕		備 考
		口径	底径	高さ		外 面	内 面					
86 22	かわらけR種	10.8	8.5	3.4	4/5個体		体部クロナデ→底部ナデ	有 骨, 砂, 橙	橙色			
86 23	かわらけR種	11.4	6.8	3.6	3/5個体		体部クロナデ→底部ナデ	有 骨,	黄灰色			
86 24	かわらけR種	11.7	8.2	3.4	4/5個体		体部クロナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	黄灰色			
86 25	かわらけR種	(11.7)	(6.6)	3.5	1/4個体		体部クロナデ→底部ナデ	不明 骨, 砂	黄灰色			
86 26	かわらけR種	(11.8)	(5.9)	3.6	1/3個体		体部クロナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	黄灰色			
86 27	かわらけR種	(11.8)	(6.9)	3.9	3/5個体		体部クロナデ→底部ナデ	無	黄灰色			
86 28	かわらけR種	12.3	8.1	3.4	完形		体部クロナデ→底部ナデ	有 骨, 砂, 橙	橙色			
86 29	かわらけR種	12.4	8.1	3.5	完形		体部クロナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	橙色			
86 30	かわらけR種	12.4	7.3	3.7	3/4個体		体部クロナデ→底部ナデ	有 骨,	灰白色			
86 31	かわらけR種	(12.7)	(7.1)	3.5	3/5個体		体部クロナデ→底部ナデ	有 砂	灰白色			
86 32	かわらけR種	(12.7)	(7.1)	3.5	1/4個体		体部クロナデ→底部ナデ	不明 砂, 橙	橙色			
86 33	かわらけR種	(12.7)	(8.5)	3.6	1/2個体		体部クロナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	橙色			
86 34	かわらけR種	12.9	8.0	3.1	9/10個体		体部クロナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	灰白色			
86 35	かわらけR種	13.1	7.9	3.4	完形		体部クロナデ→底部ナデ	有 砂	黄灰色			
86 36	かわらけR種	13.4	8.6	3.8	完形		体部クロナデ→底部ナデ	有 砂	黄灰色			
86 37	かわらけR種	(13.6)	(7.9)	3.7	3/5個体		体部クロナデ→底部ナデ	有 砂	黄灰色			
86 38	かわらけR種	14.2	9.5	4.1	4/5個体		体部クロナデ→底部ナデ	有 骨, 砂, 橙	橙色			
86 39	常滑薬	不明	(16.4)	(5.7)	底部1/3個体			- 長, 砂, 白				
図87・88 5・6区6a面整地土												
87 1	内折れ白かわらけR種	(4.2)	-	1.65	1/4個体		底部ナデ→体部ヨコナデ	有 骨, 泥, 砂, 橙	黄灰色			
87 2	かわらけT種	8.8	-	2.0	4/5個体		底部ナデ→体部ヨコナデ	有 骨, 砂	黄灰色			
87 3	かわらけT種	9.5	-	2.5	3/4個体		底部ナデ→体部クロナデ	無 骨, 砂	橙色			
87 4	かわらけT種	12.2	-	3.4	2/3個体		底部ヨコナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	橙色			口縁部スス付着, 灯明皿
87 5	かわらけT種	12.5	-	3.3	3/5個体		底部ナデ→体部ヨコナデ	有 骨, 砂	灰白色			
87 6	内折れかわらけR種	4.3	3.9	1.0	2/3個体		体部クロナデ→底部ナデ	有 砂	黄灰色			
87 7	かわらけR種	4.4	3.4	0.9	完形		体部クロナデ→底部ナデ	有 砂	黄灰色			
87 8	かわらけR種	4.4	3.2	1.3	完形		体部クロナデ→底部ナデ	無 砂	黄灰色			
87 9	かわらけR種	7.2	6.0	1.5	3/5個体		体部クロナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	黄灰色			
87 10	かわらけR種	(6.8)	(5.2)	1.6	1/3個体		体部クロナデ→底部ナデ	無 骨, 砂	黄灰色			
87 11	かわらけR種	7.1	5.0	1.7	完形		体部クロナデ→底部ナデ	無 骨, 砂	黄灰色			
87 12	かわらけR種	7.4	5.7	1.6	9/10個体		体部クロナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	黄灰色			
87 13	かわらけR種	7.4	5.0	1.7	2/3個体		体部クロナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	黄灰色			
87 14	かわらけR種	7.4	5.2	1.9	3/5個体		体部クロナデ→底部ナデ	有 骨, 砂, 橙	橙色			
87 15	かわらけR種	7.4	5.3	2.0	3/4個体		体部クロナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	黄灰色			
87 16	かわらけR種	7.5	5.8	2.0	4/5個体		体部クロナデ→底部ナデ	有 砂	灰白色			
87 17	かわらけR種	7.6	5.2	1.6	4/5個体		体部クロナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	黄灰色			
87 18	かわらけR種	7.6	5.5	1.6	1/3個体		体部クロナデ→底部ナデ	無 砂	黄灰色			
87 19	かわらけR種	7.6	5.2	1.8	3/5個体		体部クロナデ→底部ナデ	有 骨,	灰白色			
87 20	かわらけR種	7.6	5.3	1.9	4/5個体		体部クロナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	黄灰色			
87 21	かわらけR種	7.7	5.7	1.8	4/5個体		体部クロナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	橙色			
87 22	かわらけR種	7.8	5.4	1.7	完形		体部クロナデ→底部ナデ	有 骨, 砂, 橙	橙色			
87 23	かわらけR種	7.8	6.1	1.7	完形		体部クロナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	灰白色			
87 24	かわらけR種	7.8	5.4	1.8	3/5個体		体部クロナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	黄灰色			
87 25	かわらけR種	7.9	5.2	1.6	4/5個体		体部クロナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	灰白色			
87 26	かわらけR種	7.9	5.9	1.8	完形		体部クロナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	黄灰色			
87 27	かわらけR種	7.9	5.5	1.9	9/10個体		体部クロナデ→底部ナデ	有 骨, 泥, 砂	灰白色			
87 28	かわらけR種	8.0	5.5	2.0	完形		体部クロナデ→底部ナデ	有 砂	黄灰色			
87 29	かわらけR種	8.1	6.5	1.7	4/5個体		体部クロナデ→底部ナデ	有 骨, 砂	黄灰色			
87 30	かわらけR種	8.1	6.5	1.7	完形		体部クロナデ→底部ナデ	有 砂	黄灰色			
87 31	かわらけR種	11.3	7.8	3.2	9/10個体		体部クロナデ→底部ナデ	有 砂	灰白色			

調整・文様には、特徴的な事項のみ記載した。

出土遺物観察表 13 土器・陶磁器 13

胎土中の鉱物の略号は以下の通り 長石：長、石英：石、砂粒：砂、角閃石：角、白色粒子：白、黒色粒子：黒、小礫：礫、橙色粒子：橙、海綿状骨針：骨、泥岩塊：泥

図版番号	器 種	法量 (cm)		残存率	調整・文様		板状 圧痕	胎 土	色調	備 考
		口径	底径		外 面	内 面				
87 32	かわらけR種	(11.4)	(7.2)	3.4		体部クロロナデ→底部ナデ	無 骨,		橙色	
87 33	かわらけR種	(11.8)	(9.0)	3.1		体部クロロナデ→底部ナデ	有 骨,砂,橙		橙色	
87 34	かわらけR種	11.6	7.6	3.4		体部クロロナデ→底部ナデ	有 砂		橙色	
87 35	かわらけR種	(11.7)	(7.1)	3.3		体部クロロナデ→底部ナデ	有 骨,砂		灰白色	
87 36	かわらけR種	11.7	8.8	3.5		体部クロロナデ→底部ナデ	有 骨,砂		橙色	
87 37	かわらけR種	11.8	6.9	3.2		体部クロロナデ→底部ナデ	有 骨,砂		灰白色	
87 38	かわらけR種	11.9	7.4	3.2		体部クロロナデ→底部ナデ	有 骨,砂		橙色	
87 39	かわらけR種	12.1	8.1	3.3		体部クロロナデ→底部ナデ	有 骨,砂		橙色	
87 40	かわらけR種	12.3	7.9	3.2		体部クロロナデ→底部ナデ	有 骨,砂		黄灰色	
87 41	かわらけR種	12.3	7.6	3.5		体部クロロナデ→底部ナデ	有 骨,砂,橙		黄灰色	
87 42	かわらけR種	12.3	7.4	3.7		体部クロロナデ→底部ナデ	有 骨,砂		橙色	
87 43	かわらけR種	12.7	8.4	3.4		体部クロロナデ→底部ナデ	有 骨,砂,橙		橙色	
87 44	かわらけR種	12.9	7.6	3.2		体部クロロナデ→底部ナデ	無 骨,砂		橙色	
87 45	かわらけR種	12.9	8.4	3.4		体部クロロナデ→底部ナデ	有 骨,砂,橙		橙色	外底面に擦痕(刃物)磨具に使用々
87 46	白磁口禿皿	(8.4)	(5.2)	2.2		施釉,口縁端部露胎	- 精良,黒		口禿,皿IX類(13c後半-14c前半)	
87 47	白磁口禿皿	(11.0)	不明	不明		無文,胎部下半→底部露胎	- 精良,白,黒		口禿,皿IX類(13c後半-14c前半)	
87 48	青磁坏	不明	不明	不明		口縁部小片 無文	- 緻密		龍泉窯系青磁坏III-2類(13c中頃-14c初頃)	
87 49	青磁小碗	(10.2)	(3.4)	(4.3)		口縁-体部1/4 無文	- 緻密		龍泉窯系青磁小碗III-1ab類(13c中葉-14c初頃)	
87 50	青磁坏	(11.6)	不明	(2.6)		口縁部1/6 無文	- 緻密		器面被熱,龍泉窯系青磁坏III-2類(13c中頃-14c初頃)	
87 51	青磁坏	不明	不明	不明		口縁部小片 無文	- 緻密		龍泉窯系青磁坏III-3b類(13c中頃-14c初頃)	
87 52	青磁碗	不明	不明	不明		口縁部小片 筋連弁文	- 緻密		龍泉窯系青磁碗II-b類(13c初頃-前半)	
87 53	青磁碗	不明	不明	不明		口縁-体部小片 筋連弁文	- 精良,白,黒		龍泉窯系青磁碗II-b類(13c初頃-前半)	
87 54	青磁碗	不明	不明	不明		口縁-体部小片 筋連弁文	- 緻密		龍泉窯系青磁碗II-b類(13c初頃-前半)	
87 55	青磁碗	不明	3.6	(1.9)		底部破片 蓮弁文,施釉→墨付露胎	- 緻密		龍泉窯系青磁碗III類(13c中頃-14c初頃)	
87 56	青磁折縁盤	(23.4)	不明	(5.2)		口縁-体部1/3 無文	- 緻密			
87 57	青磁盤	(22.0)	(11.4)	5.8		無文,施釉→墨付露胎	- 緻密			
87 58	瀬戸四耳壺	不明	不明	不明		口縁部小片 施釉	- 白		古瀬戸前II期(13c2/4)頃	
87 59	常滑甕	不明	不明	不明		口縁部小片	- 白,砂		5型式(13c2/4)	
87 60	常滑広口壺	不明	不明	不明		口縁部小片	- 長,白,砂		5型式(13c2/4)	
87 61	常滑甕か広口壺	不明	不明	不明		口縁部小片	- 長,白		5型式(13c2/4)	
87 62	常滑甕	不明	不明	不明		口縁部小片	- 白,砂		5型式(13c2/4)	
87 63	常滑広口壺	不明	不明	不明		口縁部小片	- 長,白,砂		外面自然隆沢,5型式(13c2/4)	
87 64	常滑甕	不明	不明	不明		口縁部小片	- 長,白		5型式(13c2/4)	
87 65	常滑甕	(26.4)	不明	(7.7)		口縁部1/5	- 長,白,砂		5型式(13c2/4)	
87 66	常滑甕	不明	不明	不明		口縁部小片	- 長,白,砂		6a型式(13c3/4)	
87 67	常滑甕	不明	不明	不明		口縁部小片	- 長,白		内外面自然隆沢,6a型式(13c3/4)	
87 68	常滑甕	不明	不明	不明		口縁部小片	- 長,白,砂,礫		6a型式(13c3/4)	
87 69	常滑甕	不明	不明	不明		口縁部小片	- 長,白,砂		6a型式(13c3/4)	
87 70	常滑甕	不明	不明	不明		口縁部小片	- 長,白,砂,礫		内外面自然隆沢,6a型式(13c3/4),広口蓋々	
87 71	常滑広口壺	不明	不明	不明		口縁部小片	- 長,白,砂		広口蓋5型式(13c2/4)	
87 72	常滑片口鉢	不明	不明	不明		口縁-体部小片	- 長,白,砂		I類,5型式(13c2/4)	
87 73	常滑片口鉢	不明	不明	不明		口縁-体部小片	- 長,白,砂		I類,5-6a型式(13c2/4-3/4)	
87 74	常滑片口鉢	不明	不明	不明		口縁-体部小片	- 白,砂		I類,5-6a型式(13c2/4-3/4)	
87 75	常滑片口鉢	不明	不明	不明		口縁-体部小片	- 長,白,砂		I類,5-6a型式(13c2/4-3/4)	
87 76	常滑片口鉢	不明	不明	不明		口縁部小片	- 長,白		外面自然隆沢,II類,5-6a型式(13c2/4-3/4)	
87 77	常滑片口鉢	不明	不明	不明		口縁-体部小片	- 長,白,砂		II類,5-6a型式(13c2/4-3/4)	
87 78	常滑片口鉢	不明	不明	不明		口縁部小片	- 長,白,砂		I類,5-6a型式(13c2/4-3/4)	
87 79	常滑甕	不明	(12.0)	(8.2)		体部-底部1/4	- 長,白,砂,礫			
88 80	軒平瓦	(18.5)	(17.5)	3.0		剣頭文,凹面布目	- 長,白			

出土遺物観察表 14 土器・陶磁器 14 調整・文様には、特徴的な事項のみ記載した。

胎土中の鉱物の略号は以下の通り 長石：長、石英：石、砂粒：砂、角閃石：角、白色粒石：白、黒色粒石：黒、小礫：礫、橙色粒石：橙、海綿状骨針：骨、泥岩塊：泥

図版番号	器 種	法量 (cm)		残存率	調整・文様		胎 土	色調	備 考		
		口径	底径		高さ	外 面			内 面	板状 瓦痕	
図90 5・6区6b面上											
90 1	常滑甕	不明	不明	不明			-	長、白、砂、礫		5型式(13c2/4)	
90 2	常滑片口鉢	不明	不明	不明			-	長、白、砂		I 類、5-6a型式(13c2/4-3/4)	
図90 5・6区6b面道路構成土											
90 3	かわらけT種	(12.6)	-	3.4		体部ヨコナデ→底部ナデ	有	骨、砂	灰白色		
90 4	平瓦	(7.2)	(8.1)	2.0		凸面縄目	-	長、白	灰白色		
図97 6b面柱穴											
97 1	かわらけT種	(11.7)	-	3.3		体部ヨコナデ→底部ナデ	不明 骨		黄灰色		
97 2	かわらけR種	(6.7)	(5.3)	1.5		体部ロクロナデ→底部ナデ	不明 骨、砂		灰白色		
97 3	かわらけR種	(7.8)	(5.1)	1.7		体部ロクロナデ→底部ナデ	有 骨、砂		灰白色		
97 4	かわらけR種	(8.7)	(6.9)	1.7		体部ロクロナデ→底部ナデ	有 骨、砂		灰白色		
97 5	かわらけR種	(10.7)	(7.8)	2.8		体部ロクロナデ→底部ナデ	不明 骨、砂、橙		橙色		
97 6	かわらけR種	(12.8)	(7.1)	3.2		体部ロクロナデ→底部ナデ	不明 骨、橙		黄灰色		
97 7	かわらけR種	(12.8)	(8.4)	3.2		体部ロクロナデ→底部ナデ	有 骨、砂		橙色		
97 8	かわらけR種	(7.8)	(4.7)	1.7		体部ロクロナデ→底部ナデ	不明 骨、砂		黄灰色		
97 9	かわらけR種	(8.7)	(6.7)	1.9		体部ロクロナデ→底部ナデ	有 骨、砂		橙色		
97 10	かわらけR種	(12.7)	(9.1)	3.1		体部ロクロナデ→底部ナデ	有 骨、砂		黄灰色		
97 11	常滑壺	不明	(7.8)	不明	体-底部1/4		-	長、白、砂	スス付着		
97 12	常滑片口鉢	不明	不明	不明	口縁部小片		-	長、白、砂、礫	瓶子型		
97 13	黄釉甕	不明	不明	不明	施釉		-	白、黒	I 類、4-5型式(12c末-13c2/4)		
97 16	かわらけR種	(11.7)	(7.8)	3.1		体部ロクロナデ→底部ナデ	無 骨、砂		黄灰色		
97 17	かわらけT種	(13.1)	-	3.4		体部ヨコナデ→底部ナデ	有 骨、砂		灰白色		
97 18	かわらけR種	(11.7)	(7.9)	3.1		体部ロクロナデ→底部ナデ	不明 砂、橙		橙色		
97 19	かわらけT種	(7.8)	-	1.7		底部ナデ→体部ヨコナデ	無 砂、橙		黄灰色	スス付着	
97 20	かわらけT種	9.1	-	1.7		体部ヨコナデ→底部ナデ	有 骨、砂		灰白色		
97 21	かわらけT種	(8.8)	-	2.4		体部ヨコナデ→底部ナデ	無 骨、砂		橙色		
97 22	かわらけR種	(7.7)	(5.8)	1.6		体部ロクロナデ→底部ナデ	無 骨、砂		灰白色		
97 23	かわらけR種	(18.7)	(6.8)	2.0		体部ロクロナデ→底部ナデ	有 骨、砂、橙		橙色		
図98 5区6b面SD1											
98 1	内折れかわらけR種	(5.7)	(4.9)	0.8		体部ロクロナデ→底部ナデ	有 砂		黄灰色		
98 2	かわらけR種	7.1	5.1	1.6		体部ロクロナデ→底部ナデ	有 骨、		灰白色		
98 3	かわらけR種	7.8	5.8	1.6		体部ロクロナデ→底部ナデ	無 骨、砂		橙色		
98 4	かわらけR種	(7.9)	(6.2)	1.5		体部ロクロナデ→底部ナデ	有 骨、橙		黄灰色		
98 5	かわらけR種	(8.7)	(6.8)	2.0		体部ロクロナデ→底部ナデ	有 砂		黄灰色	灯明皿、口縁部にスス付着	
98 6	かわらけR種	11.1	8.9	2.9		体部ロクロナデ→底部ナデ	有 骨、砂		黄灰色		
98 7	かわらけR種	(11.7)	(6.8)	3.0		体部ロクロナデ→底部ナデ	有 骨、砂		灰白色		
98 8	かわらけR種	(11.7)	(7.8)	3.5		体部ロクロナデ→底部ナデ	有 骨、砂、橙		灰白色		
98 9	かわらけR種	(12.7)	(9.7)	3.1		体部ロクロナデ→底部ナデ	有 骨、砂		黄灰色	灯明皿、口縁部にスス付着・半円状に打ち欠け	
98 10	かわらけR種	12.3	7.8	3.6		体部ロクロナデ→底部ナデ	有 骨、砂		黄灰色		
98 11	かわらけR種	12.3	7.0	3.5		体部ロクロナデ→底部ナデ	無 骨、砂		黄灰色		
98 12	常滑甕	不明	不明	不明	口縁部小片		-	長、白、砂	6a型式(13c3/4)		
98 13	常滑片口鉢	不明	不明	不明	口縁部小片		-	長、白、砂	II 類、5型式(13c2/4)前後		
98 14	南伊勢系鍋	不明	不明	不明	口縁部小片	口縁部内側に折返し	-	長、白、砂	外面スス付着、13c中葉		
98 15	瓦質土器火鉢	不明	不明	不明	口縁部小片		-	長、白			
98 16	円盤状土製品	3.6	3.6	0.9	回転糸切り		無	砂	R種かわらけ転用		
98 17	常滑甕片転用磨具	長径10.0	短径9.8	厚1.0	破片		-	長、白、砂	側縁3面使用		
図102 4区8面上											
102 1	かわらけT種	9.3	-	2.0		体部ヨコナデ→底部ナデ	無 骨、砂		黄灰色		
102 2	かわらけT種	9.6	-	2.2		底部ナデ→体部ヨコナデ	無 骨、砂		黄灰色		

出土遺物観察表 15 土器・陶磁器 15 調整・文様には、特徴的な事項のみ記載した。

胎土中の鉱物の略号は以下の通り 長石：長、石英：石、砂粒：砂、角閃石：角、白色粒子：白、黑色粒子：黒、小礫：礫、橙色粒子：橙、海綿状骨針：骨、泥岩塊：泥

図版番号	器 種	法量 (cm)		残存率	調整・文様		板状 圧痕	胎 土	色調	備 考
		口径	底径		高さ	外 面				
図104 4区8面SD1										
104 1	かわらけT種	8.7	-	2/3個体		体部ヨコナデ→底部ナデ	無	骨, 砂	橙色	
104 2	かわらけT種	(13.5)	-	1/2個体		底部ナデ→体部ヨコナデ	無	骨, 砂, 橙	黄灰色	
104 3	かわらけT種	(13.6)	-	1/3個体		体部ヨコナデ→底部ナデ	有	骨, 砂, 橙	黄灰色	
104 4	青磁碗	不明	不明	口縁-体部小片	無文	分割線, 花文	-	精良, 黒		龍泉窯系青磁碗 I-4a類(12c中頃-後半)
104 5	青磁碗	不明	不明	口縁-体部小片	無文	櫛描花文	-	緻密		龍泉窯系青磁碗 I-2類(12c中頃-後半)
104 6	福美壺	(10.6)	不明	口頸部1/3			-	長, 白, 砂	13c以前	
104 7	常滑壺	不明	(11.0)	底部1/3	ヘラケズリ→横位沈線		-	長, 白, 砂	外面体部・内面底部自然隆灰, 5型式以前の三筋蓋カ	
104 8	山茶碗カ	(10.2)	(4.2)	1.5			無	砂	口縁部スス付着, 東濃型5型式 (12c末-13c初頭) カ	
104 9	瓦器碗	(10.6)	(3.6)	1/6個体	底部ヘラケズリ		-	砂	備前	
104 10	丸瓦	(7.9)	(7.0)	破片	凸面ヘラケズリカ	凹面ヘラナデカ	-	白, 砂		
104 11	平瓦	(9.1)	(10.2)	破片	凹面布目	凸面漣目, 端部ヘラナデ	-	砂, 白		
図106 8面整地土										
106 1	弥生土器甕	不明	不明	口縁部小片	口縁端部キザミ, 胴部条痕文	口縁部単筋漣文LR, 竹筒状具刺突文	-	長, 砂		弥生時代中期
106 2	弥生土器甕	不明	不明	口縁部小片	ハケメ, 口縁端部キザミ	ハケメ	-	長, 砂		弥生時代後期
106 3	弥生土器蓋	不明	(7.4)	底部1/5	ナデ, ハケメ, 底部網代状圧痕	ナデ	-	長, 砂		弥生時代中期カ
図106 10面上										
106 1	弥生土器器台か高坏	不明	不明	脚台1/2	ナデ, ハケメ→ヘラミガキ→赤彩	ナデ, ヘラナデ	-	礫, 砂		弥生時代後期
106 2	弥生土器鉢	(20.0)	(5.2)	1/9個体	ハケメ→ヘラミガキ	ヘラナデ, ハケメ	-	長, 砂, 角		弥生時代後期

出土遺物観察表 16 石製品・鉄製品

図版番号		器 種	状 態	法量 (cm)			重 量		備 考
				長さ	幅	厚さ			
図13 2面整地土									
13	4	自然礫	完形	1.80	1.60	0.60	3.21g	石材：黒色凝灰岩，基石カ	
図45 10面下包含層									
45	56	砥石	一部欠失	9.10	3.40	2.10	78.60g	石材：凝灰岩，仕上砥	
45	57	釘	完形	6.80	0.35	0.35	4.50g	先端から0.28cm上方で屈曲	
45	58	釘	完形	5.80	0.30	0.20	2.70g		
45	59	釘	完形	6.80	0.35	0.25	2.90g	先端1cm程屈曲	
図52 12面上									
52	3	釘	完形	7.80	0.35	0.30	5.30g		
52	4	釘	完形	7.00	0.25	0.25	4.00g	先端から0.3cm，0.5cm上方で屈曲	
図58 12面整地土									
58	16	釘	完形	10.40	0.45	0.35	7.67g	弓なりに屈曲	
58	17	釘	完形	8.20	0.40	0.35	3.89g	先端部3cm程屈曲	
58	18	火打ち金	完形	2.40	7.40	0.20-0.25	20.19g	直径0.3cmの円孔，火打ち面中央使用による摩耗	
図61 13面SK1									
61	5	釘	完形	8.80	0.45	0.35	7.74g	弓なりに屈曲	
61	6	釘	完形	11.90	0.50	0.50	15.10g	中央から先端緩く屈曲	
61	7	釘	完形	11.80	0.40	0.35	9.87g		
61	8	針状鉄製品	完形	14.80	0.35	0.40	8.29g	端部折返し，縫い針カ	
図66 4面道路構成土									
66	19	砥石	破片	(6.2)	3.8	1.5	58.50g	石材：細粒凝灰岩，仕上砥，上下面・側面2面使用	
66	20	自然礫	完形	1.80	1.65	0.40	2.47g	石材：黒色凝灰岩，基石カ	
図67 4面整地土									
67	49	砥石	破片	(4.2)	3.2	2.5	60.60g	石材：凝灰岩，上野産中砥，上下面・側面3面使用	
67	50	トンボ玉	完形	1.30	1.30	1.10	2.97g	白/青マール，孔径0.3cm	
図71 5面整地土									
71	51	砥石	破片	(8.6)	3.1	1.6	61.80g	石材：細粒凝灰岩，仕上砥，上面・側面4面使用	
図77-80 4区6面SX1									
77	88	貝殻加工物	完形	2.20	2.20	0.30	2.60	ハマグリ貝殻を全面ミガキ，基石カ	
77	89	貝殻加工物	完形	1.80	2.60	0.40	3.10g	ハマグリ貝殻を全面ミガキ，基石カ	
77	90	貝殻加工物	完形	2.10	2.85	0.40	4.40g	ハマグリ貝殻を全面ミガキ，基石カ	
77	91	貝殻加工物	完形	2.20	3.20	0.40	3.40g	ハマグリ貝殻を全面ミガキ，基石カ	
77	92	貝殻加工物	完形	2.40	3.05	0.60	6.40g	ハマグリ貝殻を全面ミガキ，基石カ	
77	93	貝殻加工物	完形	2.40	3.70	0.50	7.70g	ハマグリ貝殻を全面ミガキ，基石カ	
77	94	貝殻加工物	完形	2.30	3.70	0.50	7.20g	ハマグリ貝殻を全面ミガキ，基石カ	
77	95	貝殻加工物	完形	3.05	3.15	0.60	8.90g	ハマグリ貝殻を全面ミガキ，基石カ	
77	96	貝殻加工物	完形	3.00	4.20	0.60	6.70g	ハマグリ貝殻を全面ミガキ，基石カ	
78	87	石製硯	一部欠失	11.1	5.3	1.3	101.40g	石材：頁岩，表裏面使用	
78	99	鉄鎌	破片	4.30	1.50	(1.70)	7.86g	中子部分欠失	
78	100	縁飾り金具カ	破片	(8.10)	1.00	0.10	5.60g	幅1cm程の板をC字状に曲げたもの，鉛カ	
78	101	釘	完形	6.50	0.40	0.40	3.50g	頭から3.3cmで屈曲，更に先端0.6cm屈曲	
78	102	釘	完形	6.50	0.35	0.30	4.30g	先端部屈曲	
78	103	釘	完形	9.50	0.35	0.30	6.00g	頭部から3cm以下は屈曲	
図82・83 4区8面SX1									
82	21	砥石	破片	(4.8)	3.6	0.9	21.10g	石材：泥岩，鳴滝産仕上砥，上下面・側面2面使用	
82	22	礫臼(下臼)	破片	(26.0)	-	9.5	4000.00g	石材：安山岩(粗粒)，孔径(3.0cm)，摺り合わせ部分10条一単位の溝(6分角カ)	
82	23	刀子	破片	(17.00)	(1.90)	0.30	43.72g		
82	24	釘	完形	8.80	0.30	0.35	5.73g	先端部3cm程屈曲	
図84 4区6面整地土									
84	21	石製鏝釜	破片	不明	不明	(4.3)	79.90g	石材：滑石，内外面スス付着	
図88 5・6区6a面整地土									
88	81	装身具	破片	(4.10)	1.90	0.40	6.40g	石材：滑石，表裏面に擦痕，孔径0.2cm	
88	82	温石	完形	3.55	3.90	1.35	43.00g	石材：滑石，孔径1.0cm，一部欠損	
88	83	砥石	破片	(4.8)	3.5	0.8	19.70g	石材：泥岩，鳴滝産仕上砥，上下面・側面2面使用	
88	92	トンボ玉	完形	1.50	1.50	1.25	5.04g	不透明な青緑色、孔径0.35cm	
図102 4区8面上									
102	3	砥石	破片	(4.0)	2.1	2.0	32.00g	石材：凝灰岩，上野産中砥，上下面・側面4面使用	

出土遺物観察表 17 銭貨 1

図版番号		銭貨名	書体	王朝	初鑄年	重量	備 考	
図18 4面整地土								
18	11	元豊通宝	行書	北宋	1078年	3.28g		
図25 6面整地土								
25	16	開元通宝	隸書	唐	621年	2.59g		
図32 8面SK1								
32	5	元祐通宝	篆書	北宋	1086年	3.42g		
図62 3面整地土								
62	12	咸平元宝	真書	北宋	998年	2.69g		
図66 4面道路構成土								
66	21	政和通宝	隸・真	北宋	1111年	3.01g		
66	22	紹聖元宝	行書	北宋	1094年	2.78g		
図71・72 5面整地土								
72	52	祥符元宝	真書	北宋	1008年	3.37g		
72	53	元符通宝	篆書	北宋	1098年	3.10g		

図版番号		銭貨名	書体	王朝	初鑄年	重量	備 考	
72	54	政和通宝力	真書	北宋	1111年	3.47g		
図77-80 4区6面SX1								
77	97	元豊通宝力	行書	北宋	1078年	6.96g	2枚固着(2枚目銘文不明)	
77	98	淳熙元宝	真書	南宋	1174年	3.76g	裏面に「十五」	
図82・83 4区6面SX2								
82	25	開元通宝	隸書	唐	621年	3.81g	裏面上位に三日月	
82	26	開元通宝	隸書	唐	621年	3.15g	裏面上位に三日月	
82	27	開元通宝	隸書	唐	621年	2.72g		
82	28	咸平元宝	真書	北宋	998年	3.77g		
82	29	咸平元宝	真書	北宋	998年	3.32g		
82	30	咸平元宝	真書	北宋	998年	3.59g		
82	31	景德元宝	真書	北宋	1004年	3.62g		
82	32	天禧通宝	真書	北宋	1017年	3.12g		
82	33	天禧通宝	篆書	北宋	1017年	3.36g		

出土遺物観察表 18 銭貨 2

図版番号	銭貨名	書体	王朝	初鋳年	重量	備 考
83 34	天聖元宝	篆書	北宋	1023年	3.10g	
83 35	皇宋通宝	真書	北宋	1039年	3.85g	
83 36	皇宋通宝	真書	北宋	1039年	2.65g	
83 37	皇宋通宝	真書	北宋	1039年	2.92g	
83 38	皇宋通宝	真書	北宋	1039年	3.24g	
83 39	皇宋通宝	篆書	北宋	1039年	3.62g	
83 40	皇宋通宝	真書	北宋	1039年	3.29g	
83 41	皇宋通宝	篆書	北宋	1039年	2.81g	
83 42	皇宋通宝	篆書	北宋	1039年	3.92g	
83 43	皇宋通宝	篆書	北宋	820年	3.33g	
83 44	至和通宝	真書	北宋	834年	3.44g	
83 45	熙寧元宝	真書	北宋	1068年	3.70g	
83 46	熙寧元宝	真書	北宋	1068年	3.82g	
83 47	熙寧元宝	真書	北宋	1068年	4.30g	
83 48	熙寧元宝	真書	北宋	1068年	4.28g	
83 49	熙寧元宝	真書	北宋	1068年	4.31g	
83 50	熙寧元宝	篆書	北宋	1068年	3.43g	
83 51	熙寧元宝	篆書	北宋	1068年	3.14g	
83 52	熙寧元宝	篆書	北宋	1068年	3.64g	
83 53	熙寧元宝カ	篆書	北宋	1068年	4.14g	
83 54	元豐通宝	行書	北宋	1078年	4.06g	
83 55	元豐通宝	行書	北宋	1078年	4.05g	
83 56	元豐通宝	行書	北宋	1078年	3.93g	
83 57	元豐通宝	行書	北宋	1078年	3.01g	
83 58	元豐通宝	行書	北宋	1078年	2.76g	
83 59	元豐通宝	篆書	北宋	1078年	3.93g	
83 60	元豐通宝	篆書	北宋	1078年	4.10g	
83 61	元豐通宝	篆書	北宋	1078年	3.49g	
83 62	元豐通宝	篆書	北宋	1078年	3.47g	
83 63	元祐通宝	篆書	北宋	1086年	3.19g	

図版番号	銭貨名	書体	王朝	初鋳年	重量	備 考
83 64	元祐通宝	篆書	北宋	1086年	3.63g	
83 65	元祐通宝	篆書	北宋	1086年	4.50g	
83 66	紹聖元宝	篆書	北宋	1094年	2.04g	
83 67	元符通宝	行書	北宋	1098年	3.86g	
83 68	大觀通宝	真書	北宋	1107年	3.95g	
83 69	大觀通宝	真書	北宋	1107年	3.50g	
83 70	政和通宝	隸・真	北宋	1111年	3.38g	
83 71	政和通宝	篆書	北宋	1111年	4.04g	
83 72	慶元通宝	真書	南宋	1195年	4.35g	
図86 5・6区6a面上						
86 40	開元通宝	隸書	唐	621年	3.48g	
86 41	祥符元宝	真書	北宋	1008年	3.40g	
86 42	皇宋通宝	真書	北宋	1039年	3.12g	
86 43	至和通宝	真書	北宋	1054年	3.48g	
86 44	嘉祐通宝	真書	北宋	1056年	3.04g	
86 45	元豐通宝	篆書	北宋	1078年	3.75g	
86 46	紹聖元宝	篆書	北宋	1094年	3.10g	
図87・88 5・6区6a面整地土						
88 84	開元通宝カ	隸書	唐	621年	2.95g	
88 85	皇宋通宝カ	真書	北宋	1039年	3.76g	
88 86	元祐通宝	行書	北宋	1086年	3.64g	
88 87	大觀通宝	真書	北宋	1107年	3.19g	
88 88	政和通宝	隸・真	北宋	1111年	3.01g	
88 89	政和通宝カ	隸・真	北宋	1111年	3.99g	
88 90	政和通宝	篆書	北宋	1111年	3.79g	
図98 5区6b面SD1						
98 18	元祐通宝カ	行書	北宋	1086年	3.12g	
98 19	元豐通宝	行書	北宋	1078年	3.53g	
98 20	政和通宝	篆書	北宋	1111年	2.65g	

出土遺物観察表 19 木製品 1

図版番号	器 種	状 態	木取り	法量 (cm)			備 考
				長さ	幅	厚さ	
図33 8面整地土							
33 10	漆器皿	一部欠損	柁目	(10.20)	(7.60)	1.40	内外面に黒漆→内面に絵柄 (草花)
図52 12面上							
52 5	差し歯下駄	完形	柁目	21.80	9.00	9.00	ホゾによる接合
図57 12面SD1							
57 12	漆器皿	3/4個体	柁目	9.80	9.80	0.25	内外面に黒漆→内面に絵柄 (竹)
57 13	舟形	完形	板目	14.30	3.15	0.65	木材：タケ
57 14	陽物	破片	－	(18.80)	4.20	3.30	
57 15	甕串	完形	板目	14.80	2.65	0.20	直径0.1cmの円孔，虫食い穴カ
57 16	籠状木製品	完形	板目	18.00	1.20	0.80	
57 17	杓子	完形	板目	23.80	7.50	0.75	
図77-80 4区6面SX1							
78 104	題箋軸木簡	軸部欠失	板目	(5.60)	2.40	0.35	「健保三年」ほか墨書有り
78 105	五輪塔形	完形	板目	7.40	3.40	0.45	
78 106	付札	完形	板目	5.90	1.60	0.50	
78 107	杓子形木器	完形	板目	19.30	2.50	0.60	
78 108	容器蓋カ	完形	柁目	5.50	5.50	0.25	両端に切り欠き，脇に小孔
78 109	刀子の柄	完形	板目	12.90	3.30	1.20	分割式，楔状の留め具
78 110	栓	完形	－	7.90	2.20	2.20	
78 111	部材	完形	板目	23.70	2.70	0.40	片面にケビキ線か擦痕
79 112	蓋カ	完形	柁目	9.10	－	1.00	表側のみ黒漆塗布，中央ドーナツ状にスレ (ツマミの痕跡カ)
79 113	座金形木器	破片	板目	8.90	(5.50)	0.30	表面黒漆 (六花形)，金属製飾り板製作用の型カ
79 114	連歯下駄	完形	柁目	21.80	9.00	3.50	
79 115	曲物底板	破片	柁目	27.60	(8.00)	0.65	側面に木釘孔，一部木釘残存
79 116	箸	完形	－	34.40	1.10	0.80	
79 117	箸	完形	－	32.40	0.80	0.55	
79 118	箸	完形	－	30.50	0.90	0.85	
79 119	箸	完形	－	28.60	0.70	0.60	
79 120	箸	完形	－	27.30	1.00	1.00	棒状製品カ
79 121	箸	完形	－	26.90	0.90	0.45	
79 122	箸	完形	－	26.30	0.50	0.50	
79 123	箸	完形	－	26.60	0.50	0.45	
79 124	箸	完形	－	26.10	0.50	0.35	
79 125	箸	完形	－	25.80	0.60	0.55	
79 126	箸	完形	－	26.00	0.60	0.50	
79 127	箸	完形	－	25.90	0.50	0.50	
79 128	箸	完形	－	25.50	0.55	0.50	
79 129	箸	完形	－	25.90	0.55	0.50	
79 130	箸	完形	－	25.50	0.60	0.50	
79 131	箸	完形	－	25.10	0.55	0.50	
79 132	箸	完形	－	25.10	0.50	0.40	

出土遺物観察表 20 木製品 2

図版番号	器 種	状 態	木取り	法量（cm）			備 考
				長さ	幅	厚さ	
79 133	箸	完形	－	25.20	0.60	0.45	
79 134	箸	完形	－	24.80	0.40	0.40	
79 135	箸	完形	－	24.75	0.35	0.30	
79 136	箸	完形	－	24.70	0.70	0.40	
79 137	箸	完形	－	24.50	0.50	0.40	
79 138	箸	完形	－	24.50	0.60	0.55	
80 139	箸	完形	－	24.50	0.45	0.40	
80 140	箸	完形	－	24.40	0.50	0.50	
80 141	箸	完形	－	23.95	0.60	0.60	
80 142	箸	完形	－	24.05	0.40	0.40	
80 143	箸	完形	－	23.90	0.65	0.50	
80 144	箸	完形	－	24.20	0.50	0.50	
80 145	箸	完形	－	23.90	0.60	0.50	
80 146	箸	完形	－	23.90	0.70	0.40	
80 147	箸	完形	－	23.50	0.60	0.55	
80 148	箸	完形	－	23.65	0.40	0.40	
80 149	箸	完形	－	23.75	0.60	0.45	
80 150	箸	完形	－	23.30	0.60	0.50	
80 151	箸	完形	－	23.30	0.40	0.30	
80 152	箸	完形	－	23.15	0.80	0.45	
80 153	箸	完形	－	23.10	0.35	0.30	
80 154	箸	完形	－	23.10	0.50	0.35	
80 155	箸	完形	－	22.80	0.80	0.40	
80 156	箸	完形	－	22.70	0.65	0.60	
80 157	箸	完形	－	22.80	0.60	0.55	
80 158	箸	完形	－	23.10	0.50	0.30	
80 159	箸	完形	－	23.00	0.65	0.60	
80 160	箸	完形	－	22.50	0.70	0.70	
80 161	箸	完形	－	22.90	0.55	0.55	
80 162	箸	完形	－	22.50	0.60	0.50	
80 163	箸	完形	－	22.50	0.70	0.40	
80 164	箸	完形	－	22.40	0.60	0.60	
80 165	箸	完形	－	22.20	0.55	0.50	
80 166	箸	完形	－	22.25	0.60	0.40	
80 167	箸	完形	－	22.30	0.40	0.40	
80 168	箸	完形	－	22.10	0.60	0.50	
80 169	箸	完形	－	21.50	0.55	0.50	
80 170	箸	完形	－	22.05	0.70	0.40	
80 171	箸	完形	－	22.00	0.65	0.65	
80 172	箸	完形	－	22.00	0.65	0.60	
80 173	箸	完形	－	21.95	0.65	0.65	
80 174	箸	完形	－	22.55	0.60	0.50	
80 175	箸	完形	－	21.80	0.55	0.55	
80 176	箸	完形	－	21.50	0.70	0.60	
80 177	箸	完形	－	21.40	0.50	0.40	
80 178	箸	完形	－	21.10	0.70	0.60	
80 179	箸	完形	－	21.70	0.30	0.30	
80 180	箸	完形	－	21.20	0.55	0.40	
80 181	箸	完形	－	21.00	0.45	0.40	中央に0.1cm以下の円孔（虫食い穴カ）
80 182	箸	完形	－	21.00	0.45	0.40	
80 183	箸	完形	－	20.70	0.40	0.40	
80 184	箸	完形	－	20.90	0.45	0.40	
80 185	箸	完形	－	20.70	0.70	0.60	
80 186	箸	完形	－	21.00	0.55	0.55	
80 187	箸	完形	－	21.05	0.50	0.40	
80 188	箸	完形	－	20.60	0.70	0.65	
80 189	箸	完形	－	20.60	0.60	0.50	
80 190	箸	完形	－	19.90	0.55	0.50	
80 191	箸	完形	－	19.90	0.50	0.50	
80 192	箸	完形	－	19.70	0.50	0.50	
80 193	箸	完形	－	19.60	0.70	0.45	
80 194	箸	完形	－	19.60	0.60	0.60	
80 195	箸	完形	－	19.50	0.65	0.40	
80 196	箸	完形	－	19.30	0.60	0.50	
80 197	箸	完形	－	19.15	0.60	0.55	
80 198	箸	完形	－	19.30	0.50	0.50	
80 199	箸	完形	－	19.05	0.50	0.50	
図82・83 4区6面SX2							
83 73	箸	完形	－	22.00	0.75	0.55	
83 74	箸	完形	－	21.10	0.55	0.50	
図97 6b面柱穴							
97 14	礎板	完形	板目	55.00	24.50	4.00	直径18cm前後の柱アタリ痕，方形の切り欠き，転用材
97 15	礎板	完形	板目	50.20	21.60	2.50	端部にホゾ，転用材
図112 10面下中世流路							
112 1	田下駄	破片	柁目	(17.00)	8.00	0.80	後ろの鼻緒孔は側縁まで開放

写真図版



1. 5区6b面全景（南から）



2. 題箋軸木簡（赤外線写真）



1. 遺跡近景（北から）



2. 遺跡近景（西から）



1. 調査前の状況 (1・2区 南から)



2. 検出した暗渠 (1・2区 南東から)



3. 検出した暗渠 (1区 南東から)



4. 検出した暗渠 (1区 東から)



5. 2区南1面全景 (南から)



6. 2区南1面全景 (北から)



7. 2区南1面 SD1 土層断面 (南から)



8. 2区南1面 SD1・SD2 (北から)



1. 2区南2面全景（南から）



2. 2区南2面全景（北西から）



3. 2区南1面SD2・2面SD1 土層断面（北から）



4. 2区南3面全景（南から）



5. 2区南3面全景（北から）



6. 2区南3面SK1（西から）



7. 2区南4面全景（南から）



8. 2区南4面全景（北西から）



1. 2区南4面 S1・S2 (南西から)



2. 2区南4面杭1断面 (西から)



3. 2区南5面全景 (南から)



4. 2区南5面 SD1 (北から)



5. 2区南5面 SD1 土層断面 (南から)



6. 2区南5面 SD1 (南西から)



7. 1区6面 (南東から)



8. 2区6面 (南東から)

PL.6



1. 2区6面（東から）



2. 2区南6面全景（南から）



3. 2区南6面全景（北西から）



4. 2区南6面SX1土層断面（北から）



5. 2区南6面SX1（北から）



6. 2区南6面全景（南東から）



7. 1区7面（南東から）



8. 2区7面（北東から）



1. 2区7面SD1土層断面（東から）



2. 2区7面SD1（東から）



3. 2区南7面全景（北西から）



4. 2区南7面全景（北から）



5. 2区南7面SX1（北東から）



6. 2区南7面動物骨出土状況（東から）



7. 1区8面と西壁堆積土層（南東から）



8. 2区8面（北から）



1. 降雨により水没した調査区 (1区 北から)



2. 2区南8面全景 (南から)



3. 2区南8面全景 (北西から)



4. 2区南8面SK1土層断面 (北から)



5. 2区南8面SK1 (西から)



6. 2区南8面SK1 (南から)



7. 2区南9面全景 (南から)



8. 2区南9面SD1土層断面 (南から)



1. 2区南9面SD1（南から）



2. 2区南9面SD1（北西から）



3. 1区10面（南から）



4. 2区10面（南から）



5. 1区H10 10面Bトレンチ土層断面（北から）



6. 2区10面P1（東から）



7. 2区10面SX1（東から）



8. 2区10面SK1土層断面（西から）



1. 2区10面SK1（南から）



2. 2区10面SK1（東から）



3. 2区南10面全景（南から）



4. 2区南10面と近世後半の自然流路（北から）



5. 1区11面（北から）



6. 2区11面（北から）



7. 2区11面と近世後期の自然流路（北から）



8. 1区11面P1（西から）



1. 1区11面大型板材（北東から）



2. 1区11面大型板材と枕木（南東から）



3. 2区南11面全景（南から）



4. 2区南11面全景（北西から）



5. 1区12面（南から）



6. 1区12面整地面の状態（東から）



7. 1区12面P01（東から）



8. 2区12面P02 泥岩切石出土状況（東から）



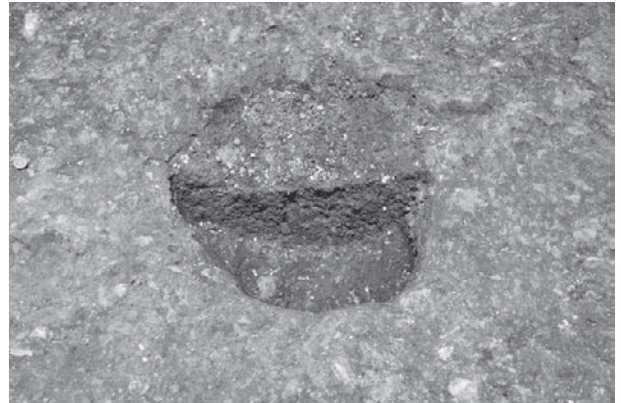
1. 2区12面P02（東から）



2. 2区12面SA1-P1土層断面（東から）



3. 2区12面SA1-P2土層断面（東から）



4. 2区12面SA1-P3土層断面（東から）



5. 2区12面SA1とSX1（東から）



6. 2区12面SD1側板検出状況（東から）



7. 2区12面SD1土層断面（東から）



8. 2区12面SD1土層断面（西から）



1. 2区12面SD1側板（北から）



2. SD1側板に転用された大型板材（北から）



3. 2区12面SD1側板（南から）



4. SD1北側の角材（橋の基礎カ 南から）



5. SD1北側角材と枕木（北から）



6. SD1側板下角材検出状況（東から）



7. SD1掘り方（東から）



8. SD1出土遺物（かわらけ 南から）



1. SD1 出土遺物（漆器皿 南から）



2. SD1 出土遺物（舟形 南から）



3. 2区南端西壁堆積土層（東から）



4. 2区南12面全景（南から）



5. 2区南12面全景（北西から）



6. 作業風景（1区 北から）



7. 2区南13面全景（南東から）



8. 2区南13面全景（北から）



1. 2区南 13面 SK1 (南西から)



2. 2区南 南壁堆積土層 (北から)



3. 調査前の状況 (4-6区 南から)



4. 4区で検出した暗渠 (北東から)



5. 5区4面全景 (南から)



6. 5区4面全景 (北から)



1. 5区4面道路基礎検出状況（東から）



2. 4面道路構成土出土遺物（平瓦瓦当 南西から）



3. 5区5面全景（南から）



4. 5区5面道路（北から）



5. 5面道路東側溝出土遺物（かわらけ 南西から）



1. 作業風景（5区 南から）



2. 4区6面 SA1（東から）



3. 4区6面 SX1（南東から）



4. SX1 遺物出土状況（5層 南東から）



5. SX1 遺物出土状況（東から）



6. SX1 遺物出土状況（8層 北東から）



7. SX1 遺物出土状況（8層 東から）



8. SX1 遺物出土状況（南東から）



1. SX1 遺物出土状況 (5層 南東から)



2. SX1 土層断面 (北東から)



3. 4区6面SX2 (北東から)



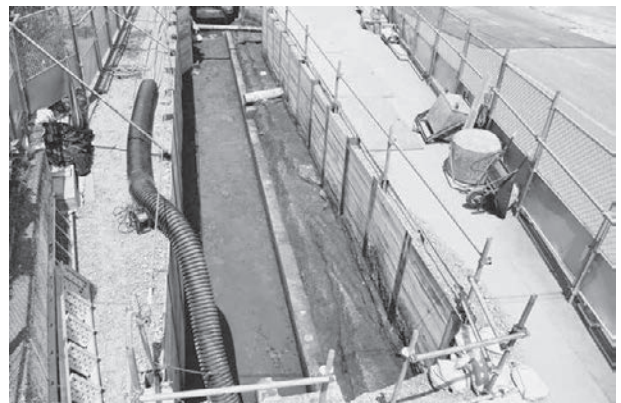
4. SX2 土層断面 (南東から)



6. 5区6a面全景 (南から)



5. 見学に訪れた市内小学生 (4区6面調査時)



7. 6区6a面全景 (南西から)



3. 5区6a面全景（北から）



2. 6区6a面全景（北西から）



4. 6区6a面（南西から）



5. 5区6a面かわらけ出土状況（南から）



6. 5区6a面（北から）



7. 6a面上かわらけ出土状況（西から）



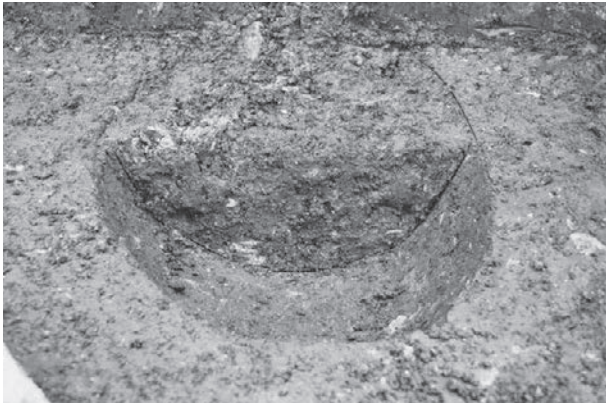
8. 6a面上かわらけ出土状況（北西から）



1. 6a 面上かわらけ出土状況（北西から）



2. 5 区 6a 面道路（南から）



3. 6 区 6a 面 P1 土層断面（西から）



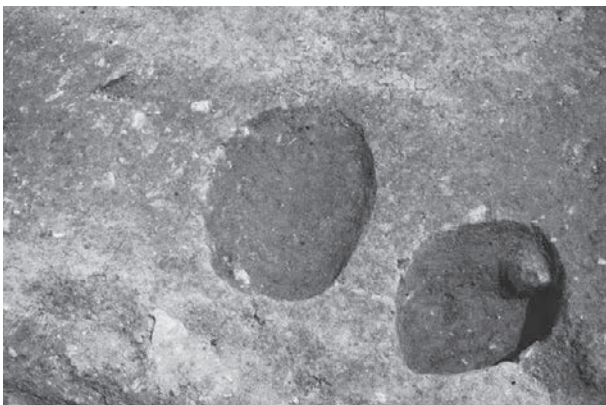
4. 6 区 6a 面 P1 と S1（南西から）



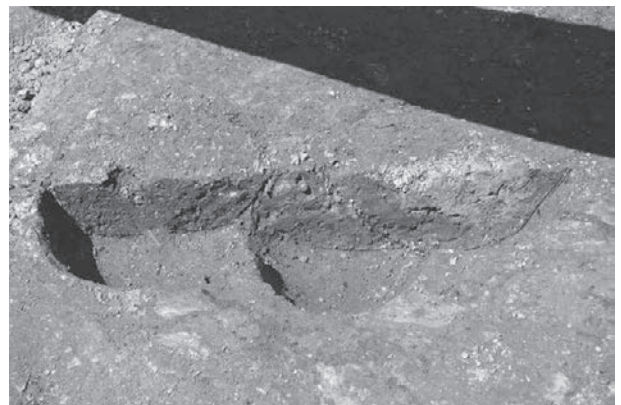
5. 6 区 6a 面 P2 土層断面（西から）



6. 6 区 6a 面 P3 土層断面（西から）



7. 6 区 6a 面 P2・P3（西から）



8. 6 区 6a 面 P4>5<6 土層断面（南西から）



1. 6区6a面P4・5・6（南から）



2. 6区6a面S2（北西から）



3. 5区6b面全景（北から）



4. 5区6b面全景（南から）



5. 6b面道路と東側溝（南東から）



6. 5区H41土層断面（5・6a・6b面 北から）



1. 5区6b面柱穴列南側延長（北東から）



2. 5区南壁東半部分堆積土層（4-8面 北から）



3. 5区南壁西半部分堆積土層（4-8面 北から）



4. 6b面柱穴列（5区南側 北東から）



5. 6b面と柱穴列（南から）



1. 6区6b面（西から）



2. 6区6b面（南西から）



3. 5区6b面柱穴列検出状況（北から）



4. 5区6b面大型柱穴列（東から）



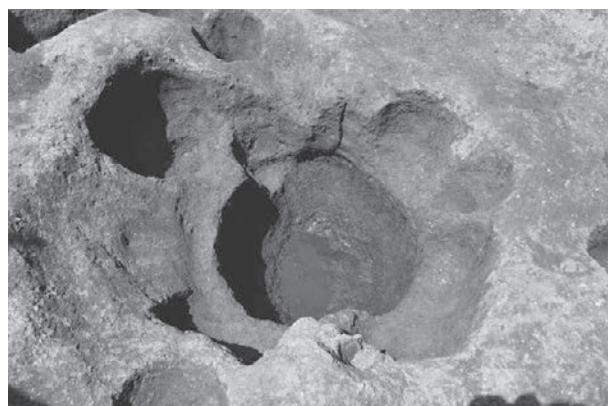
5. 大型柱穴列 SKP1 上位土層断面（北から）



6. 大型柱穴列 SKP1 下位土層断面（南から）



7. 大型柱穴列 SKP1 礎板・根石（北から）



8. 大型柱穴列 SKP1 完掘（北東から）



1. 大型柱穴列 SKP2<SD1 土層断面（北から）



2. 大型柱穴列 SKP2<SD1 土層断面（北から）



3. 大型柱穴列 SKP2 礎板・根石（東から）



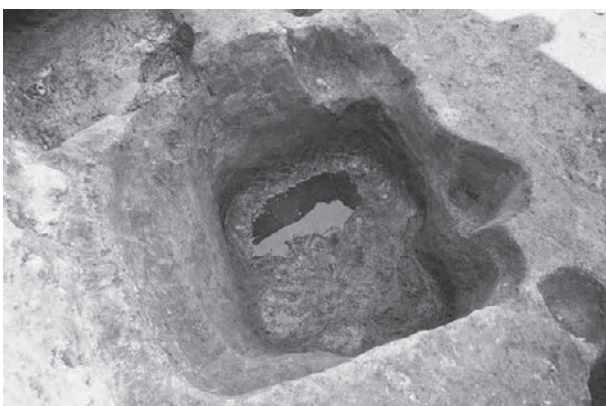
4. 大型柱穴列 SKP2 完掘（西から）



5. 大型柱穴列 SKP3 土層断面（南から）



6. 大型柱穴列 SKP3 礎板（北東から）



7. 大型柱穴列 SKP3 完掘（北から）



8. 大型柱穴列 SKP4 下位土層断面（西から）



1. 大型柱穴列 SKP4 礎板・根石（西から）



2. 大型柱穴列 SKP4 完掘（西から）



3. 大型柱穴列 SKP5 土層断面（北から）



4. 大型柱穴列 SKP5 礎板（東から）



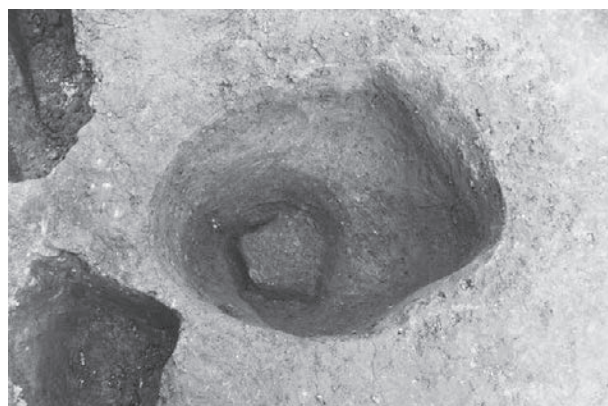
5. 大型柱穴列 SKP5 完掘（東から）



6. 5区東壁 SD1 > 柱穴土層断面（西から）



7. 5区6b面 P1 土層断面（北東から）



8. 5区6b面 P13 柱圧痕（南から）



1. 5区6b面P15土層断面（東から）



2. 5区6b面P31土層断面（東から）



3. 5区6b面P60土層断面（西から）



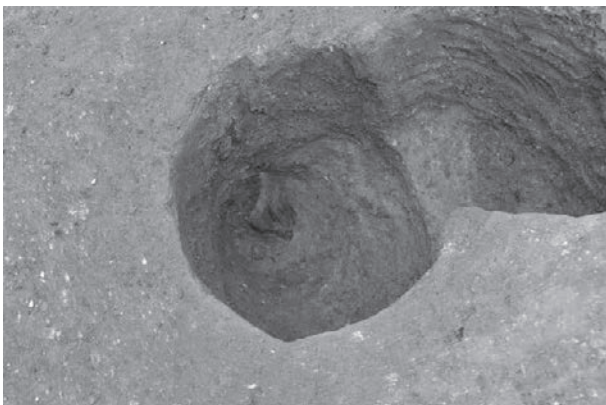
4. 5区H49-51 6b面柱穴土層断面（西から）



5. 5区6b面P68土層断面（西から）



6. 5区6b面P76土層断面（南から）



7. 5区6b面P79と杭（南西から）



8. 6区6b面P113土層断面（西から）



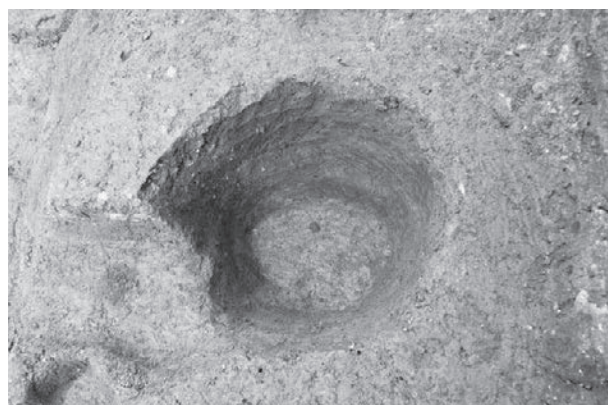
1. 6区6b面 P115-117,120 (南西から)



2. 6区6b面 P119 土層断面 (南から)



3. 6区6b面 P118,119 (西から)



4. 6区6b面 P125 (南から)



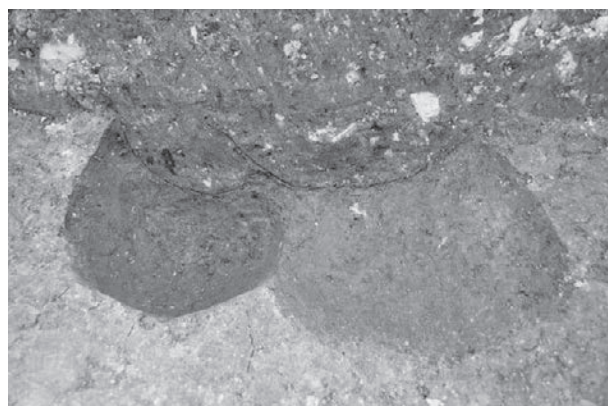
5. 6区6b面 P126 土層断面 (南から)



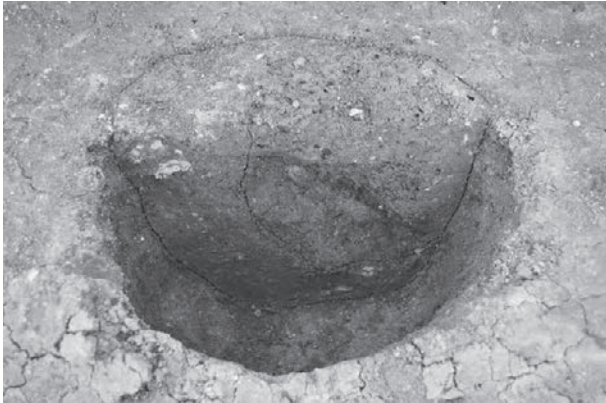
6. 6区6b面 P127 土層断面 (西から)



7. 6区6b面 P128 土層断面 (西から)



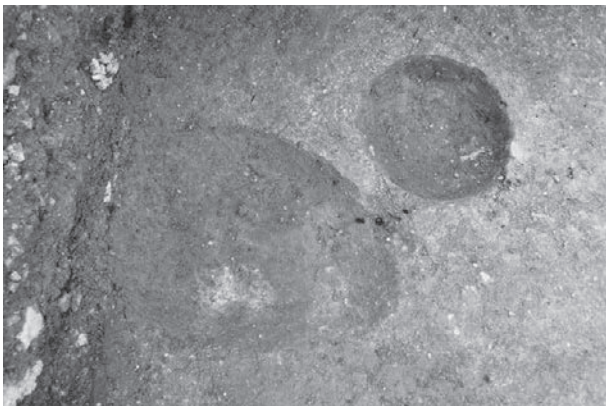
8. 6区6b面 P132>131 (西から)



1. 6区6b面P133土層断面(西から)



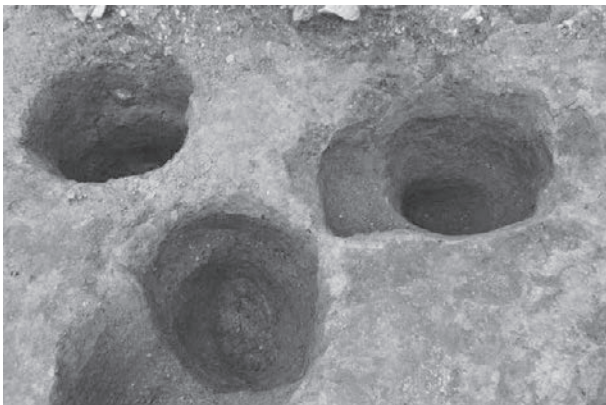
2. 6区6b面P133(西から)



3. 6区6b面P135,134(北から)



4. 5区6b面柱穴列(西から)



5. 5区6b面柱穴列(東から)



6. 5区6b面柱穴列(西から)



7. 6区6b面SD2土層断面(西から)



8. 5区6b面P86>SK2(西から)



1. 5区6b面SX1<P52 (北から)



2. 5区6b面SX1 (北から)



3. 6区7面 (北西から)



4. 6区7面 (南西から)



5. 4区8面石列 (北から)



6. 4区8面石列 (東から)



7. 4区8面SD1と石列 (南から)



1. 4区8面SD1 (北から)



2. 6区8面全景 (南から)



3. 6区8面 (南西から)



4. 6区8面踏み抜き痕 (南西から)



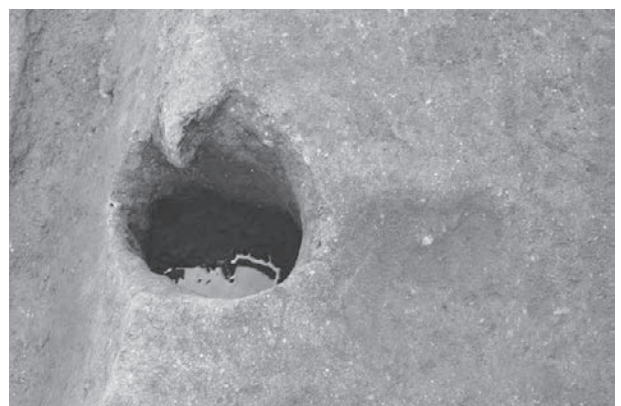
5. 6区8面 (東から)



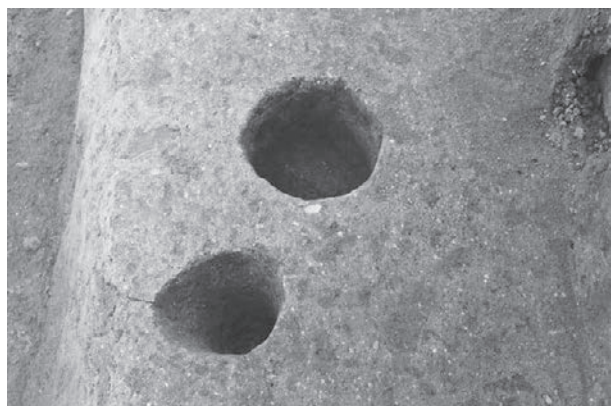
6. 6区8面P1土層断面 (南西から)



7. 6区8面P2土層断面 (南西から)



8. 6区8面P2 (南から)



1. 6区8面P3,4 (南から)



2. 6区8面SD1土層断面 (南から)



3. 6区東壁堆積土層 (6-9面 西から)



4. 6区9面 (南西から)



5. 6区9面 (北西から)



6. 4区南側10面全景 (北から)



7. 10面整地面と近世後半の自然流路 (北から)



8. 4区南側 近世後半自然流路土層断面 (北から)



1. 4区南10面下SR1>SR2土層断面（北から）



2. 4区南10面下SR1>SR2土層断面（南から）



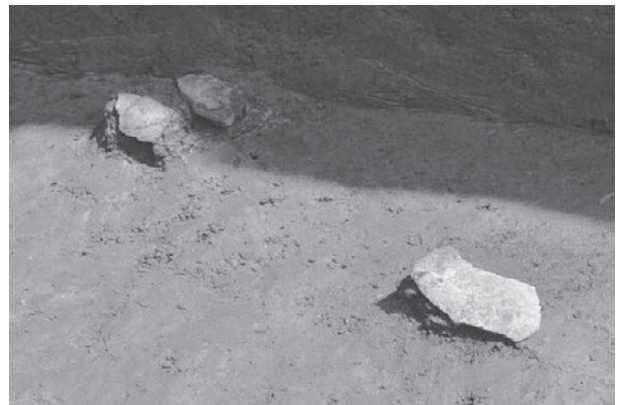
3. 6区10面全景（南西から）



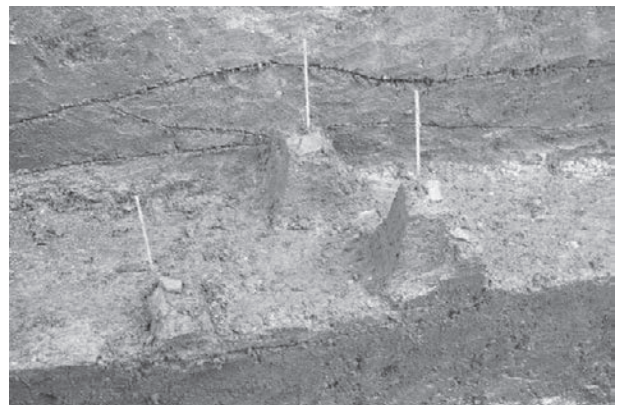
4. 6区東壁堆積土層（6-10面，北西から）



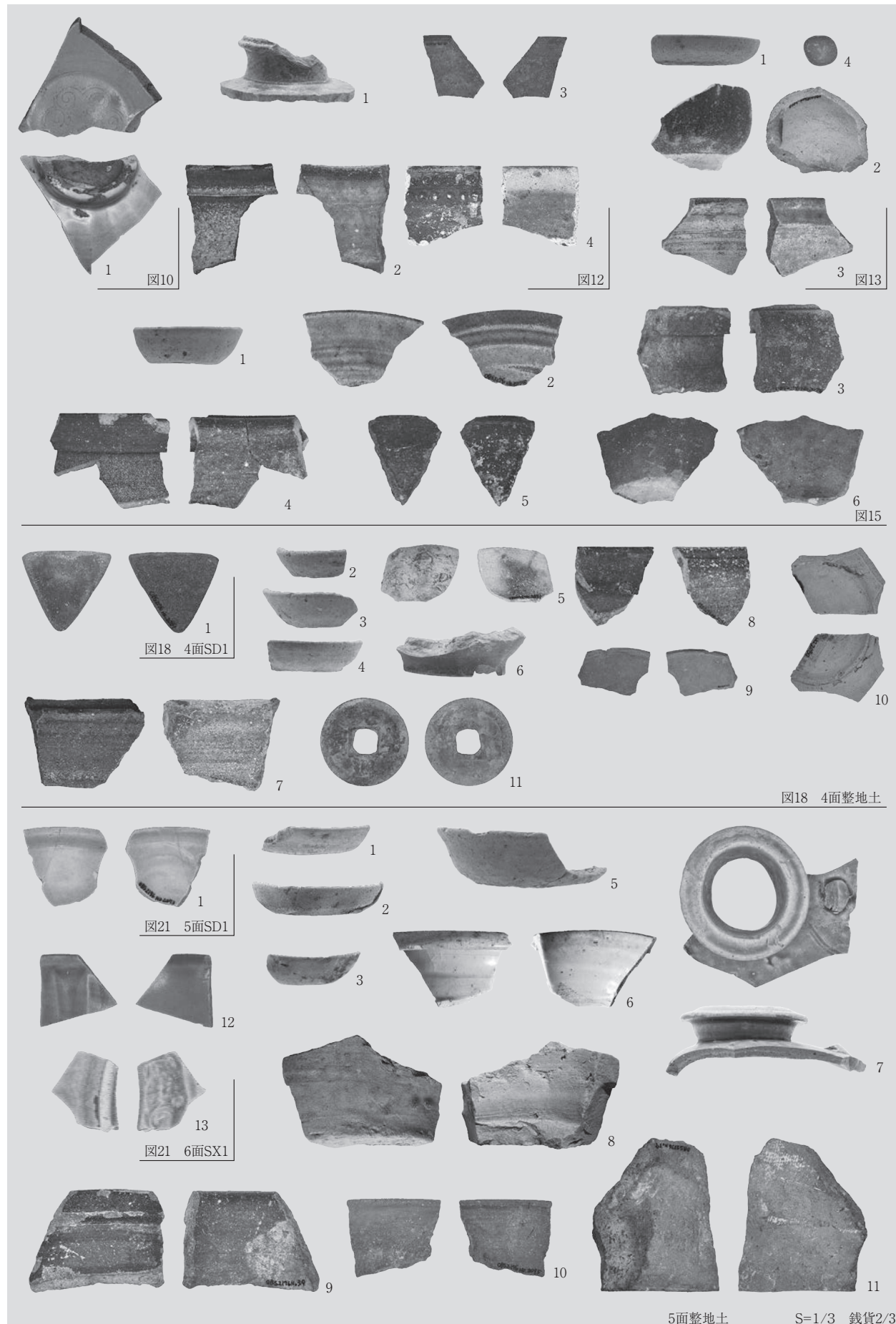
5. 降雨により水没した調査区（4区10面 北から）



6. 6区10面上で出土した弥生土器（南西から）



7. 6区10面基盤層で出土した弥生土器（西から）



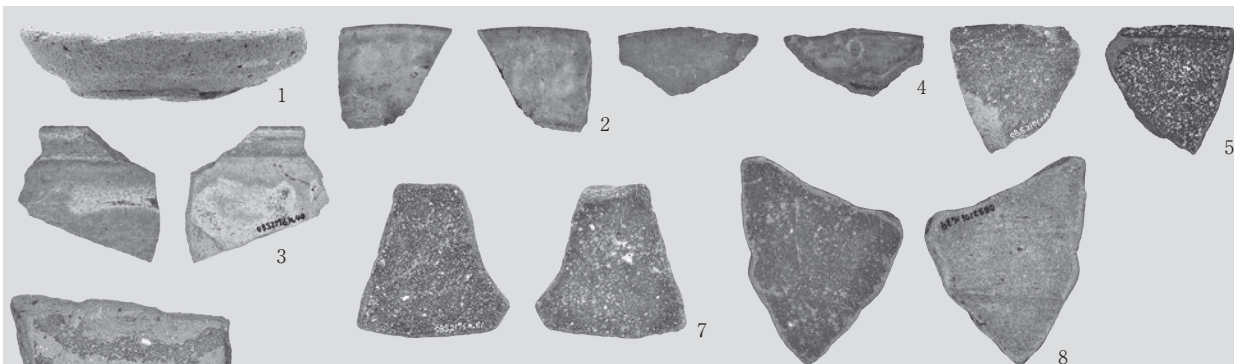


図24 1・2区6面上



図25 1・2区6面整地土

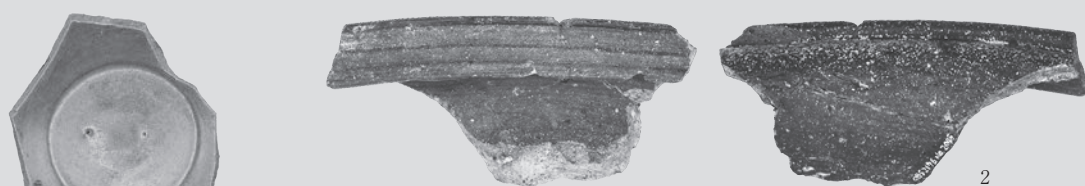


図29 1・2区7面上

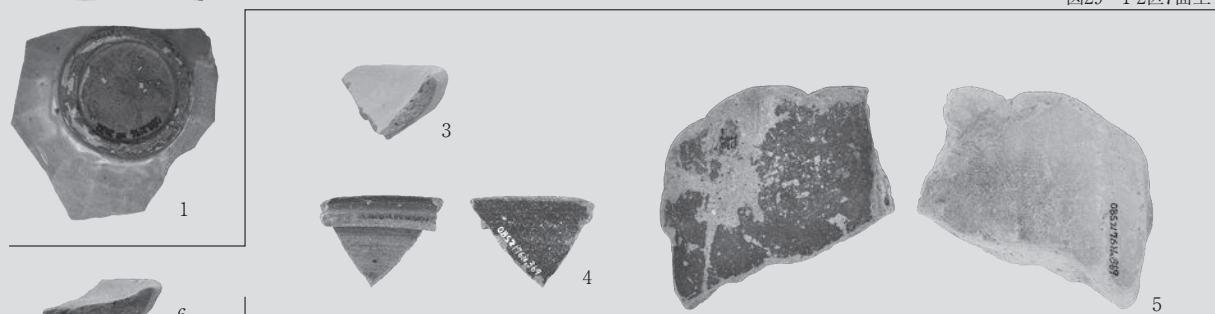


図29 1・2区7面SX1

図29 1・2区7面SD1

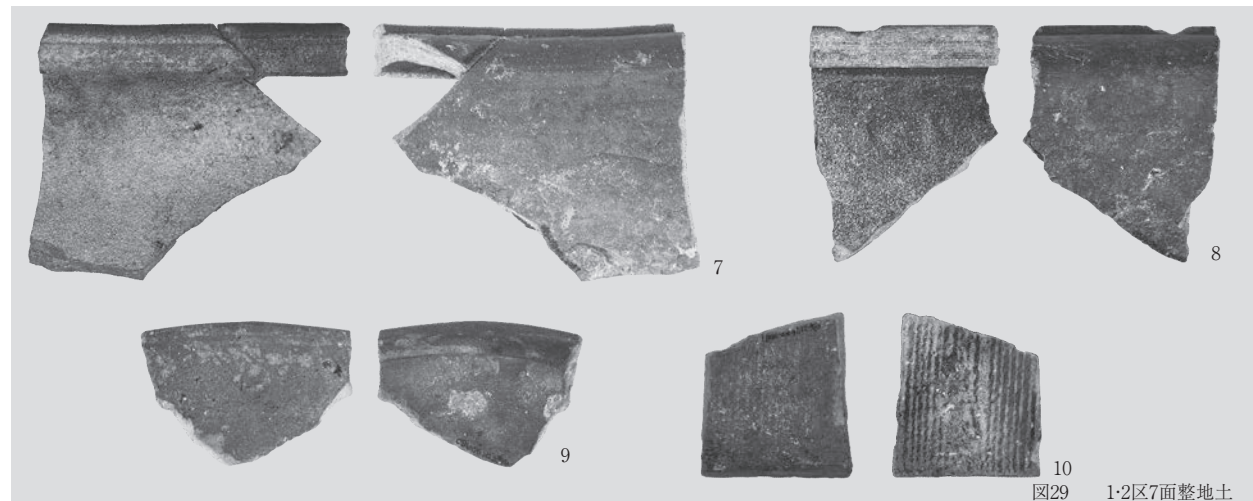


図29 1・2区7面整地土

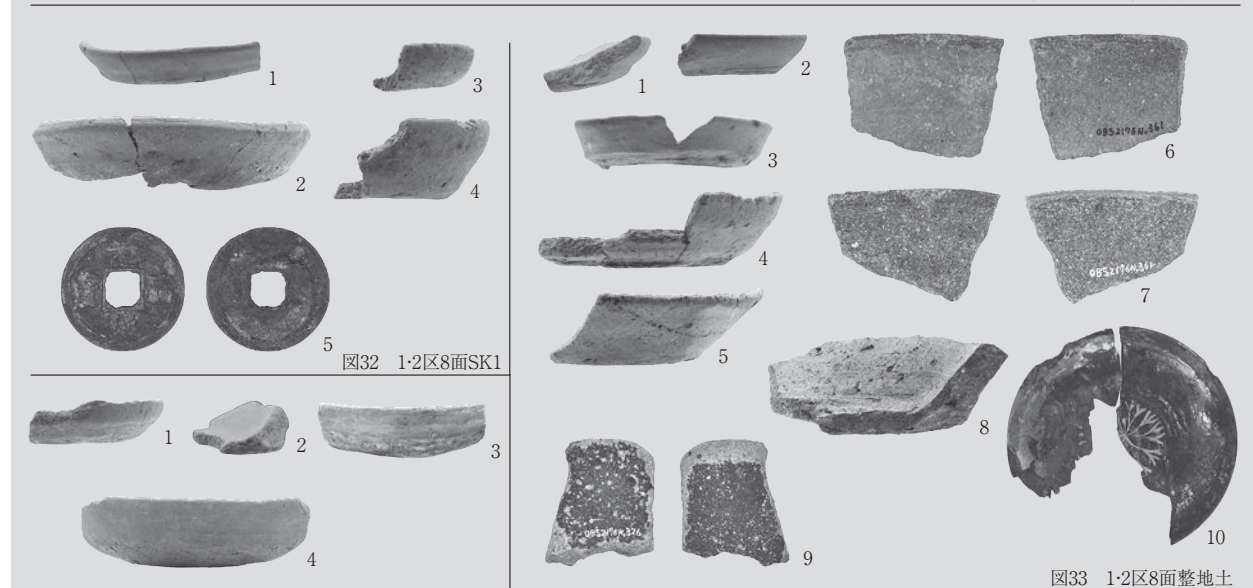


図32 1・2区8面SK1

図33 1・2区8面整地土



図36 1・2区9面整地土



図39 1・2区10面上
S=1/3 銭貨2/3

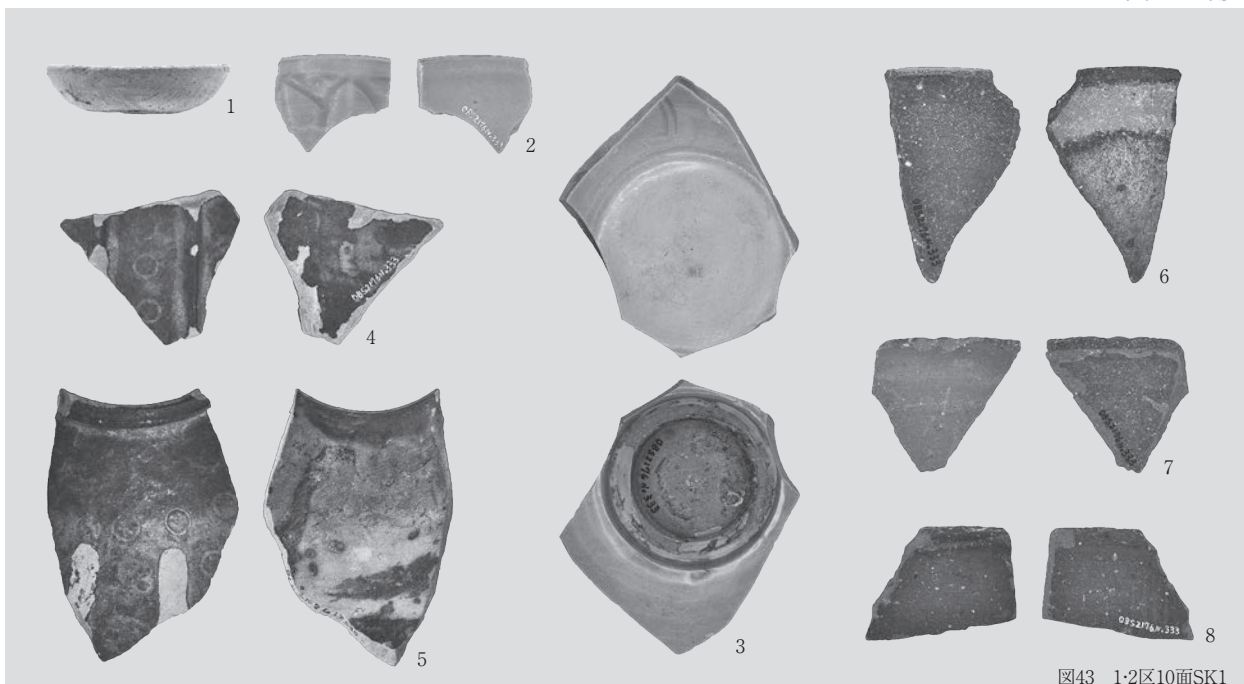


图43 1·2区10面SK1

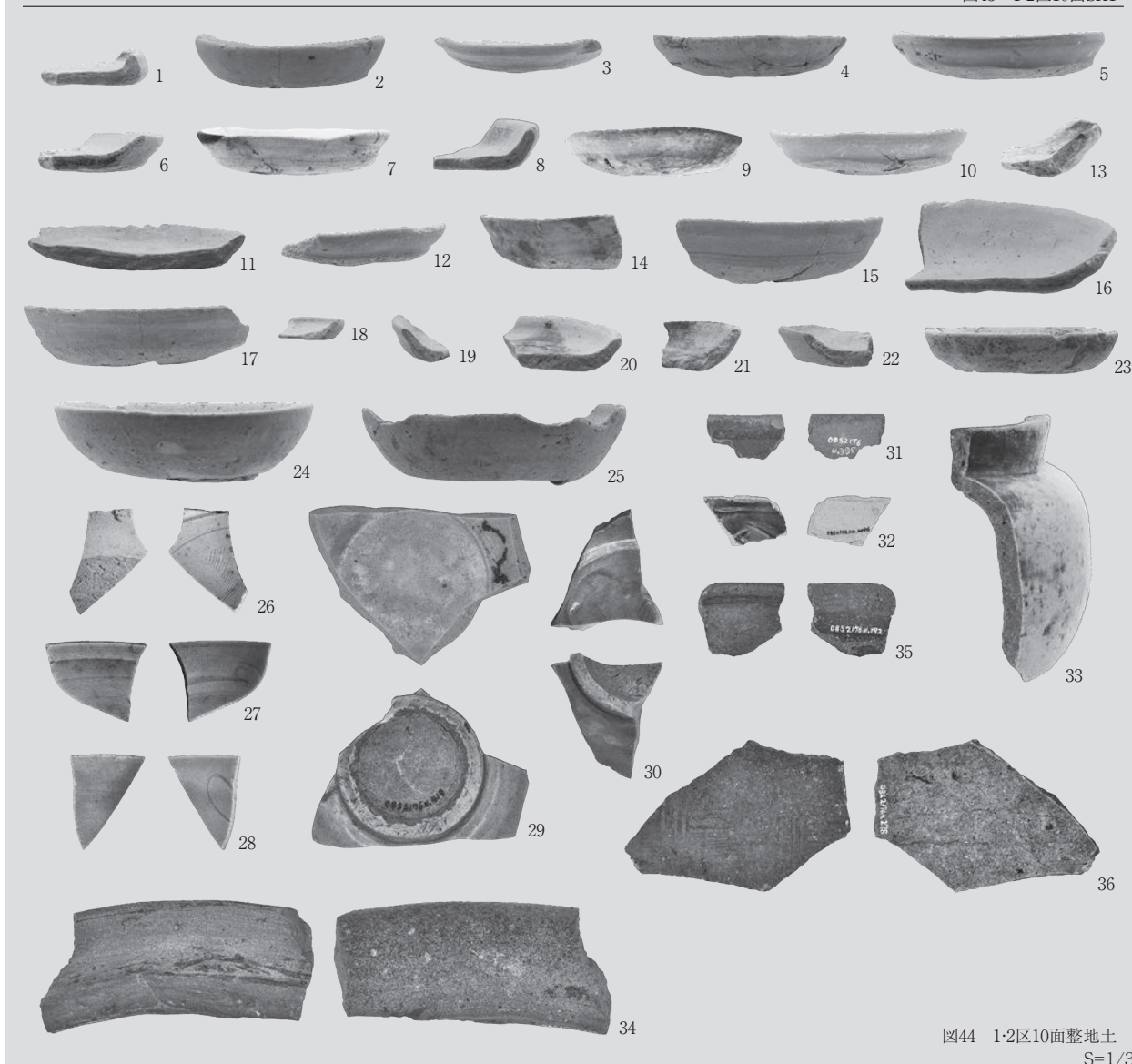


图44 1·2区10面整地土

S=1/3

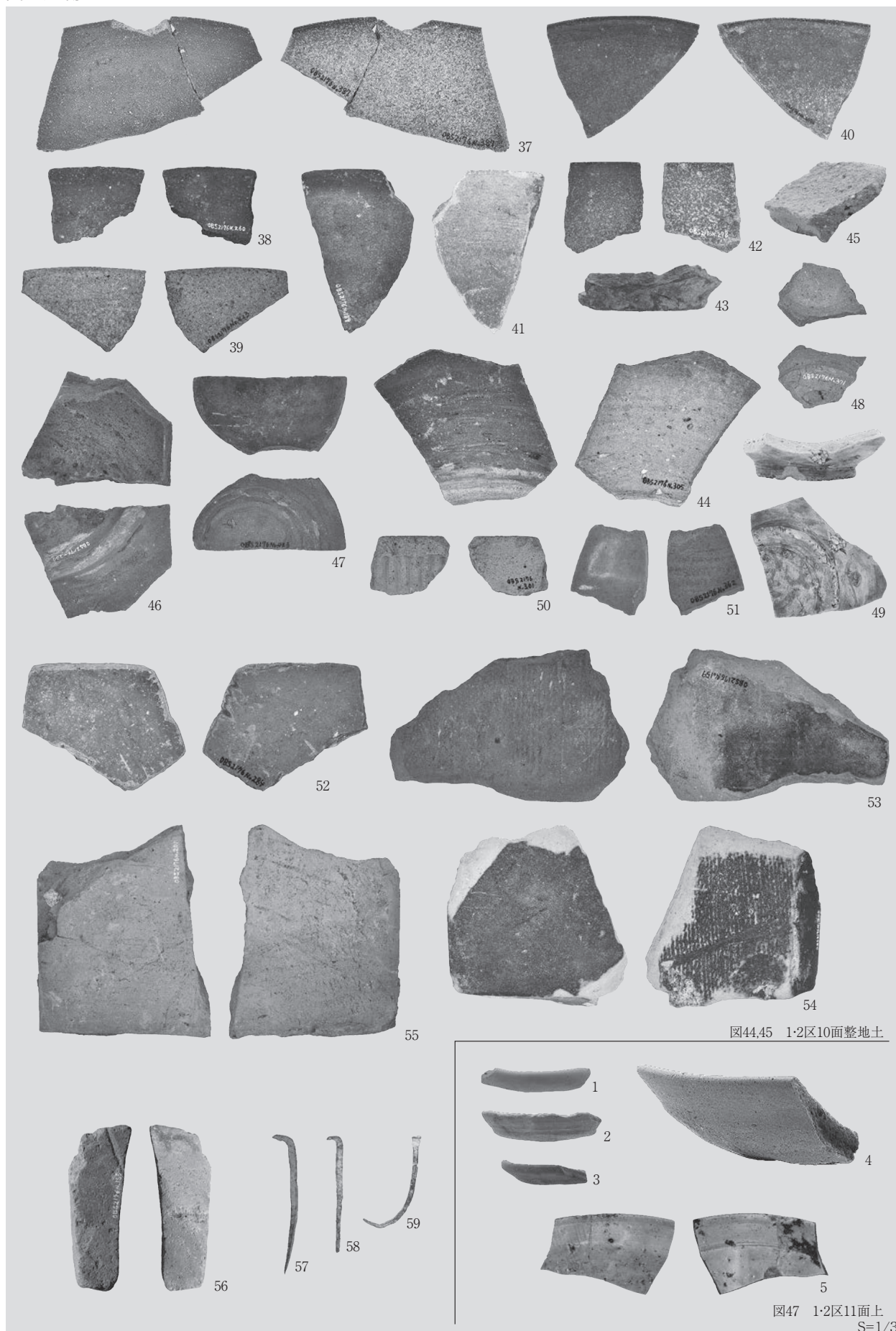


図44,45 1・2区10面整地土

図47 1・2区11面上
S=1/3

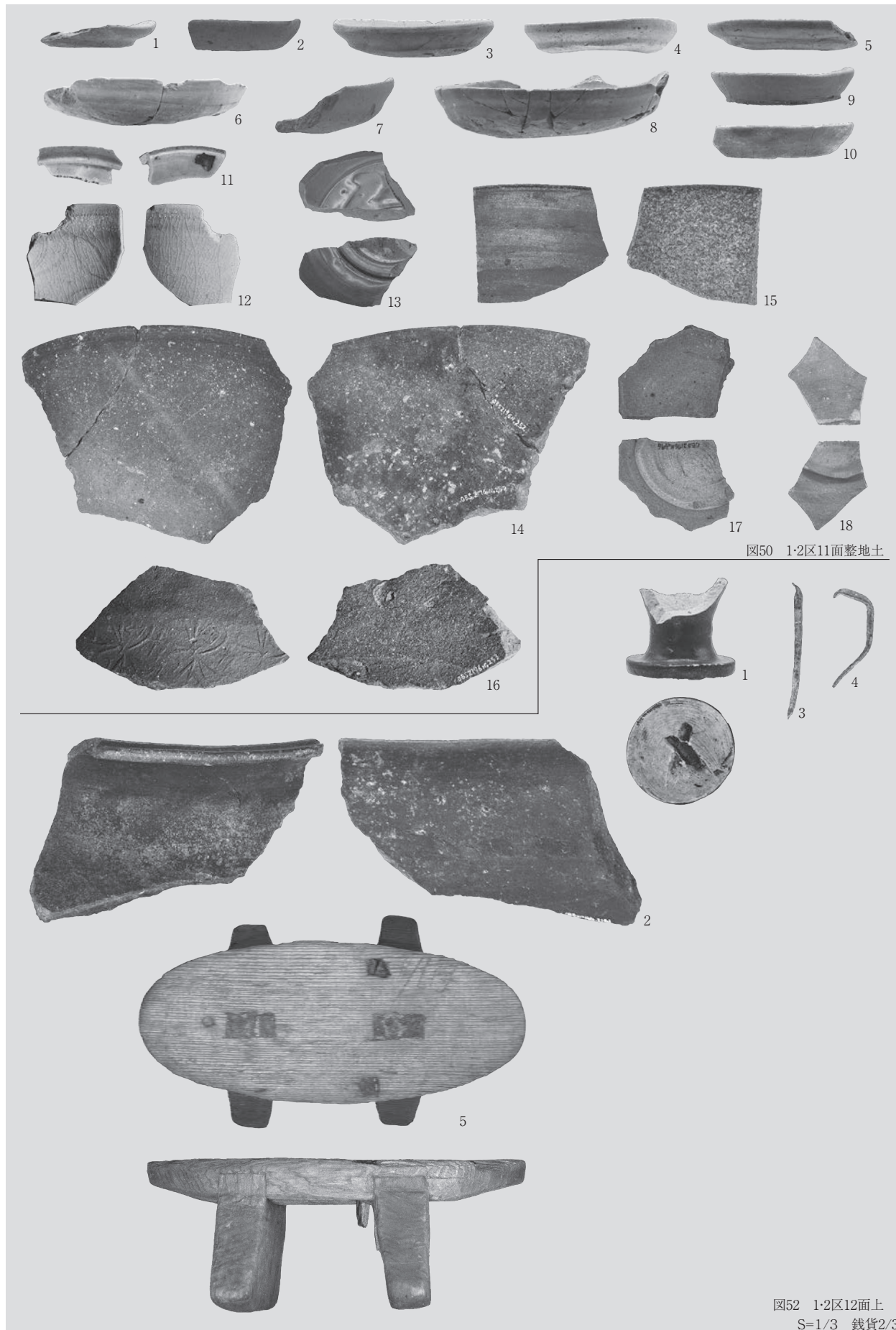


图50 1·2区11面整地土

图52 1·2区12面上
S=1/3 錢貨2/3



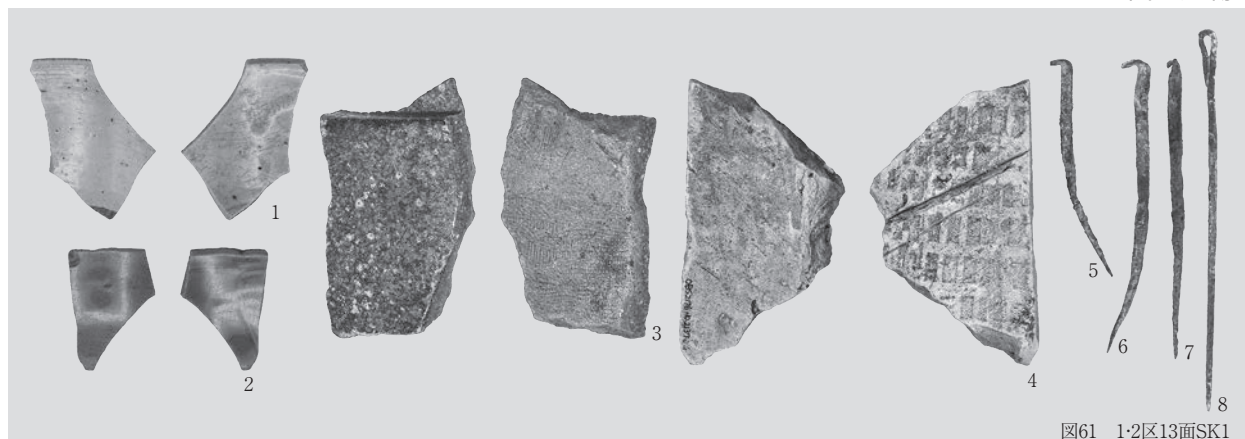


図61 1-2区13面SK1

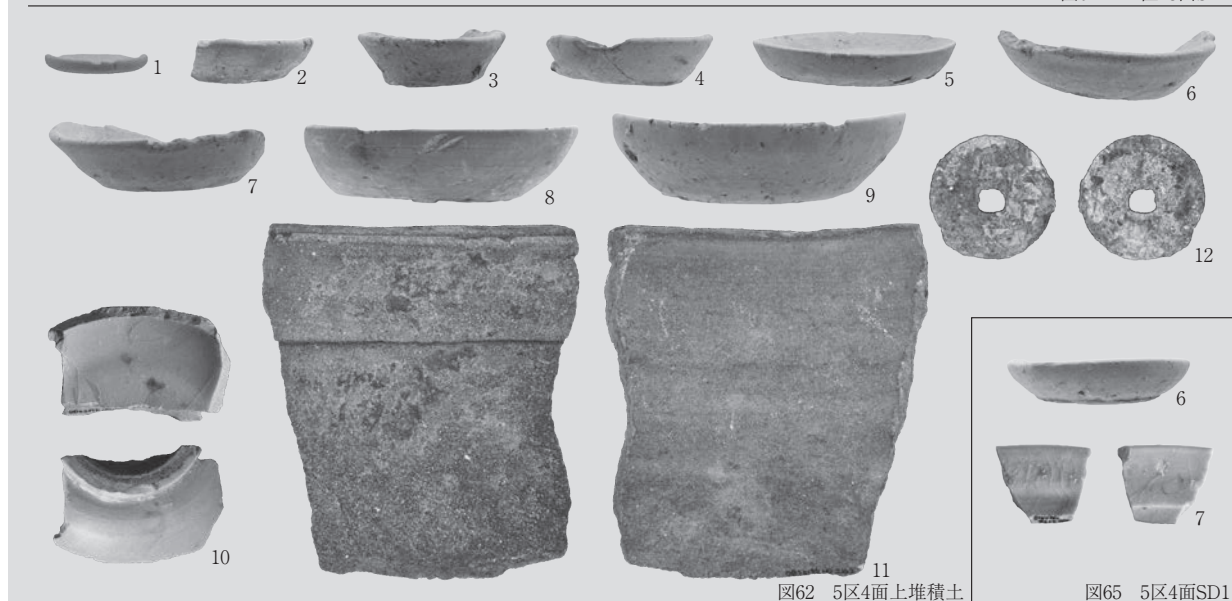


図62 5区4面上堆積土



図65 5区4面SD1

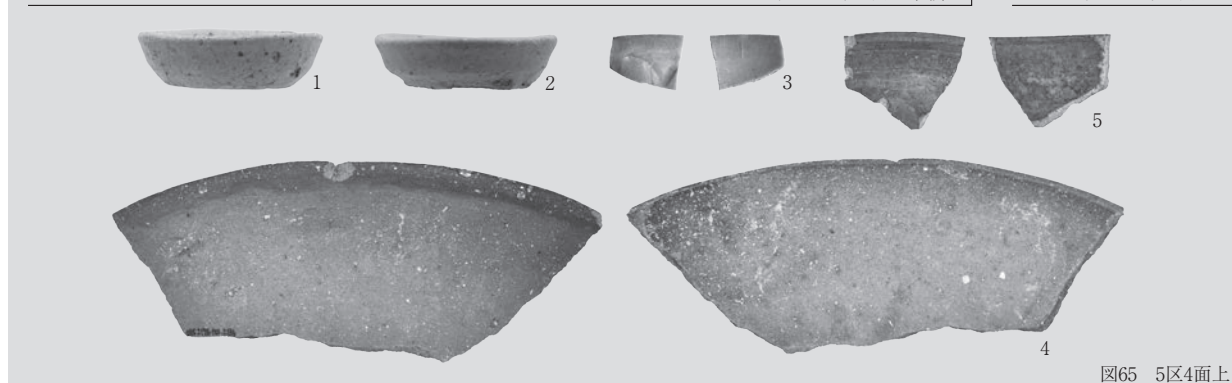


図65 5区4面上

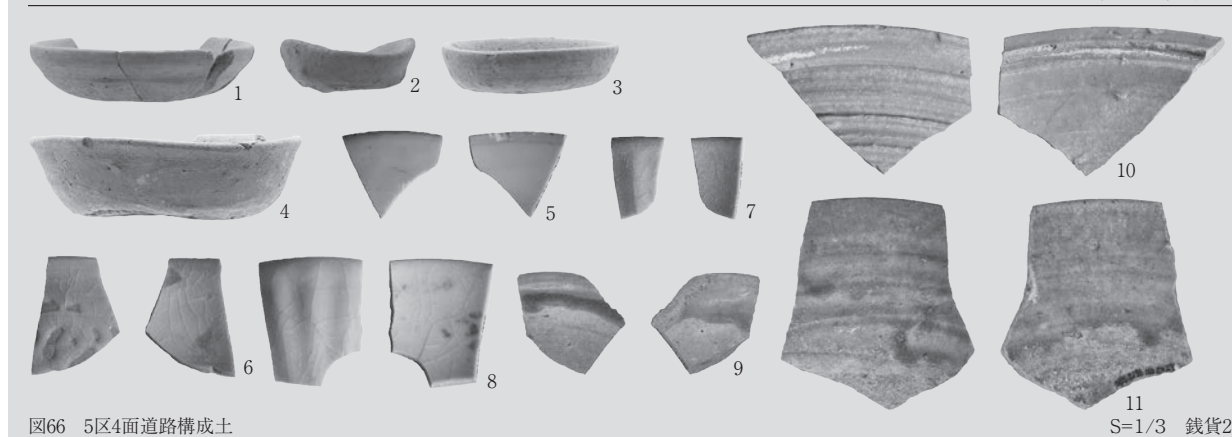


図66 5区4面道路構成土

S=1/3 銭貨2/3

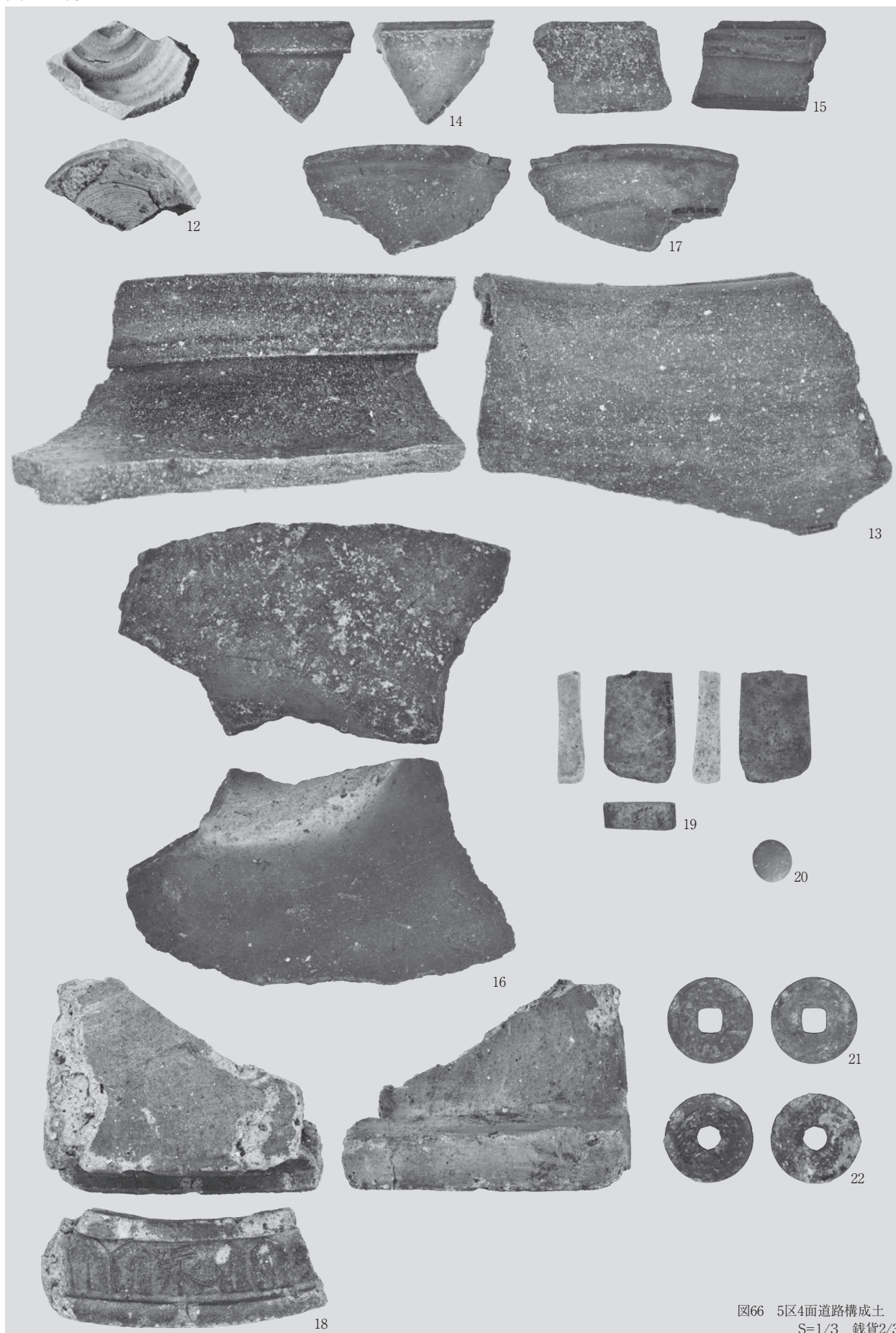
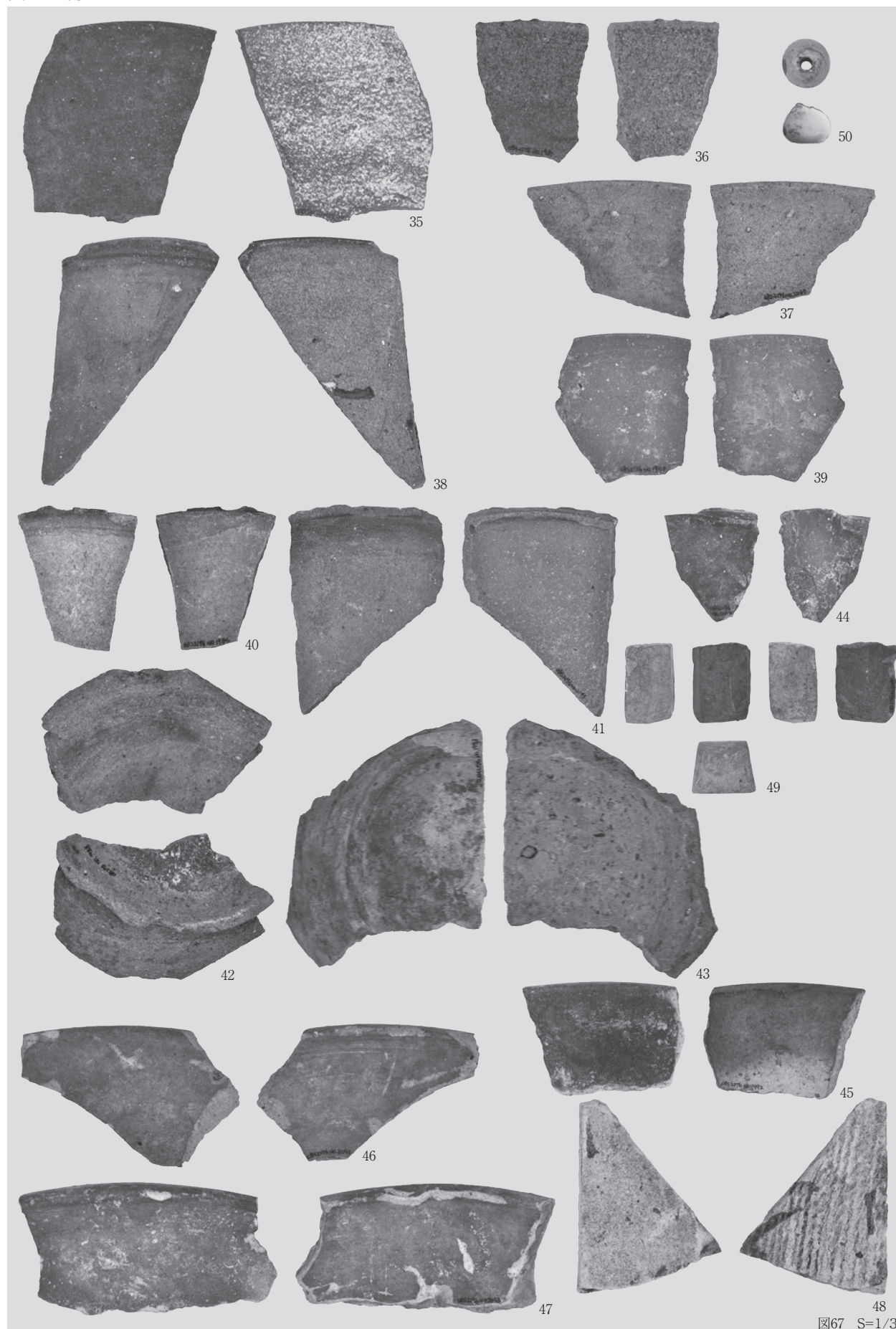
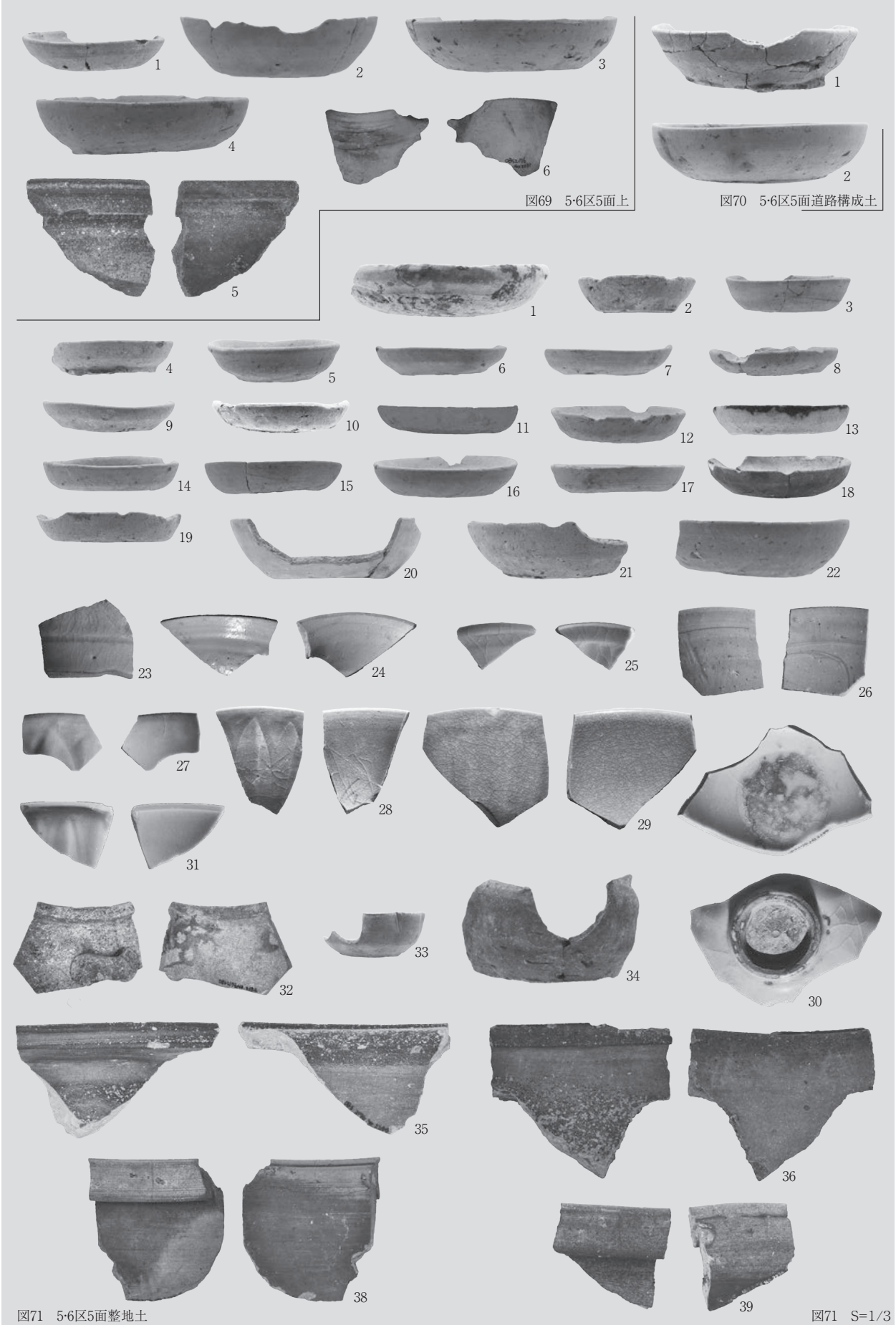


図66 5区4面道路構成土
S=1/3 銭貨2/3



図67
S=1/3





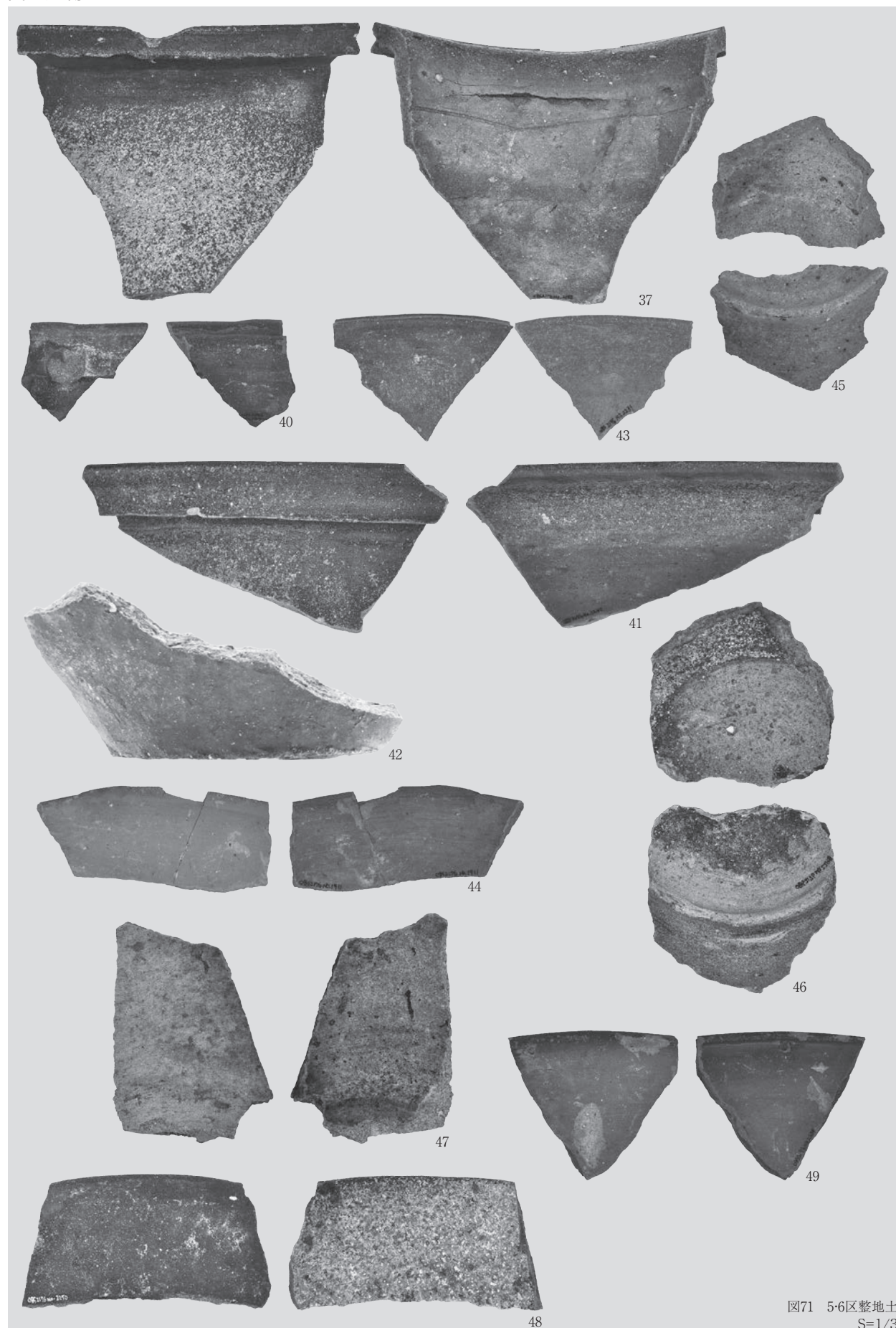


図71 5-6区整地土
S=1/3

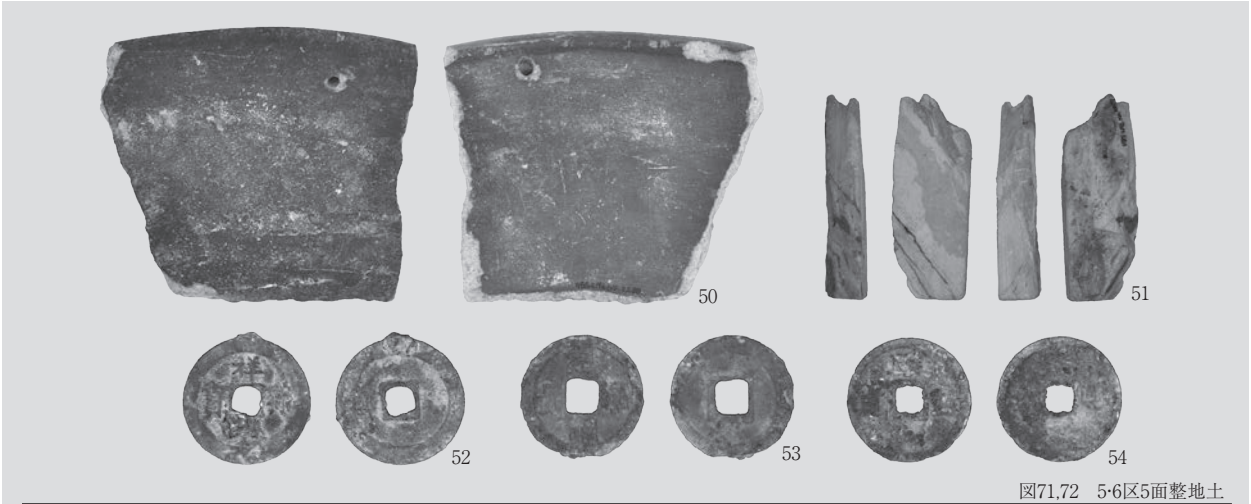
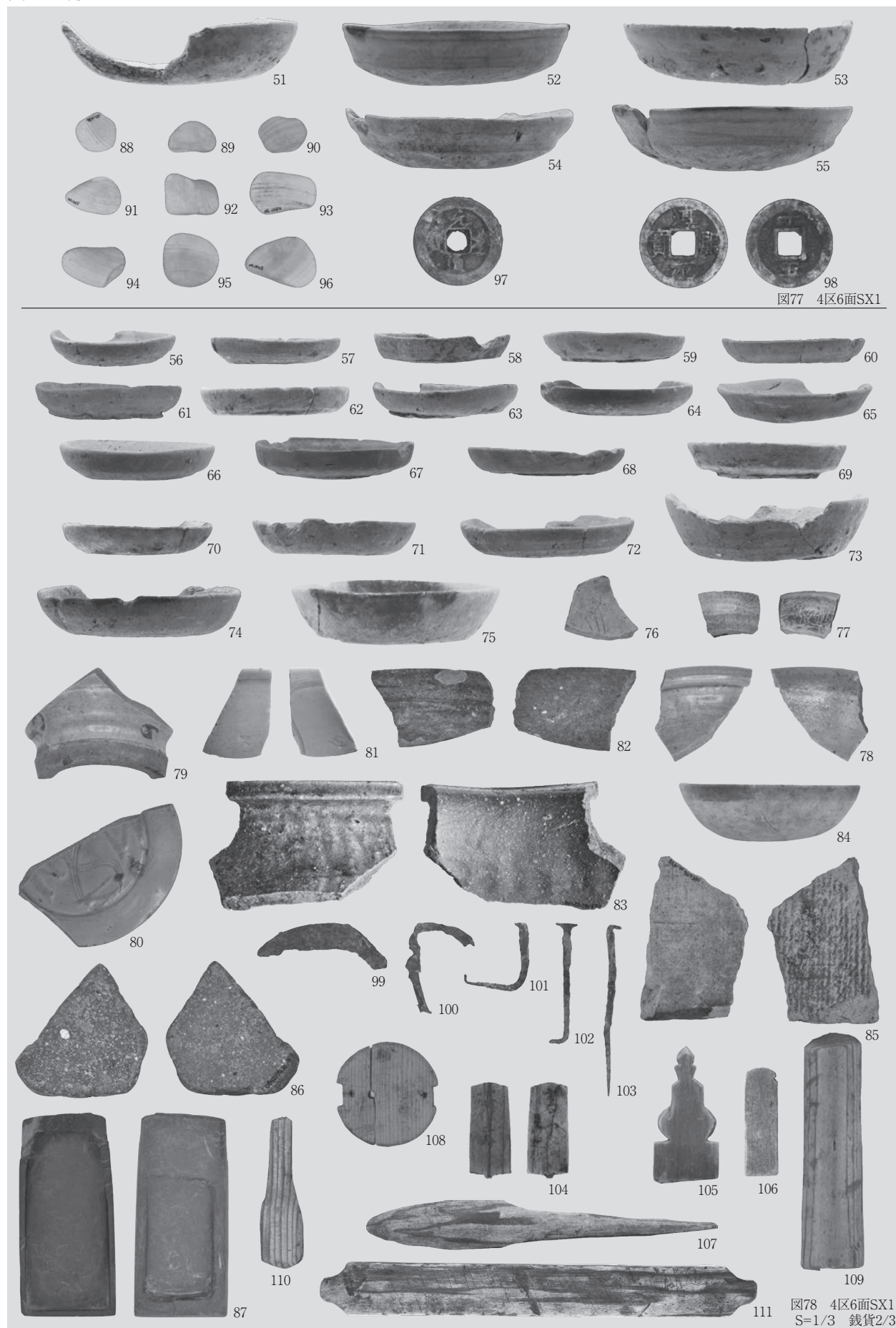


図71,72 5・6区5面整地土



図77 4区6面SX1

S=1/3 銭貨2/3



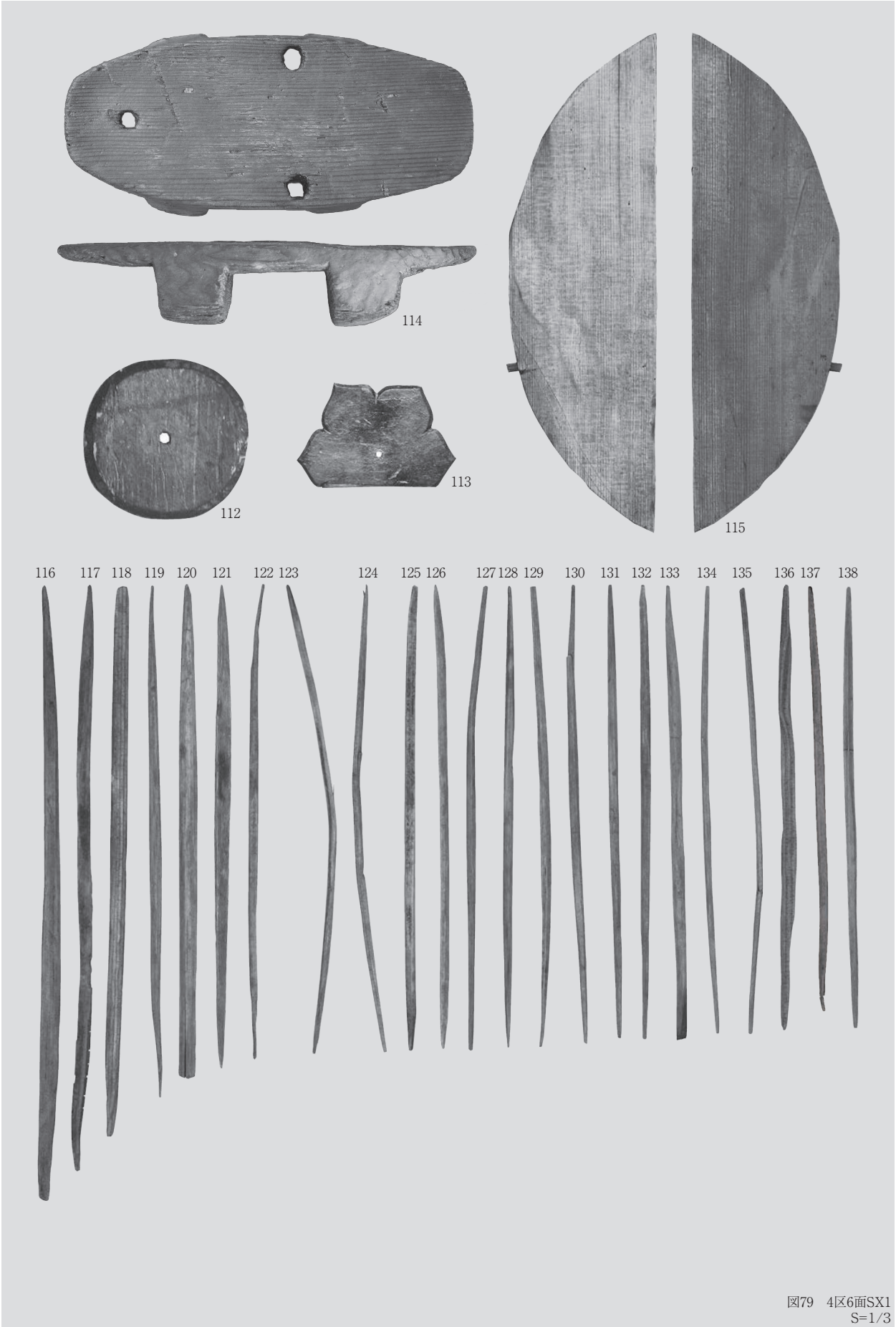
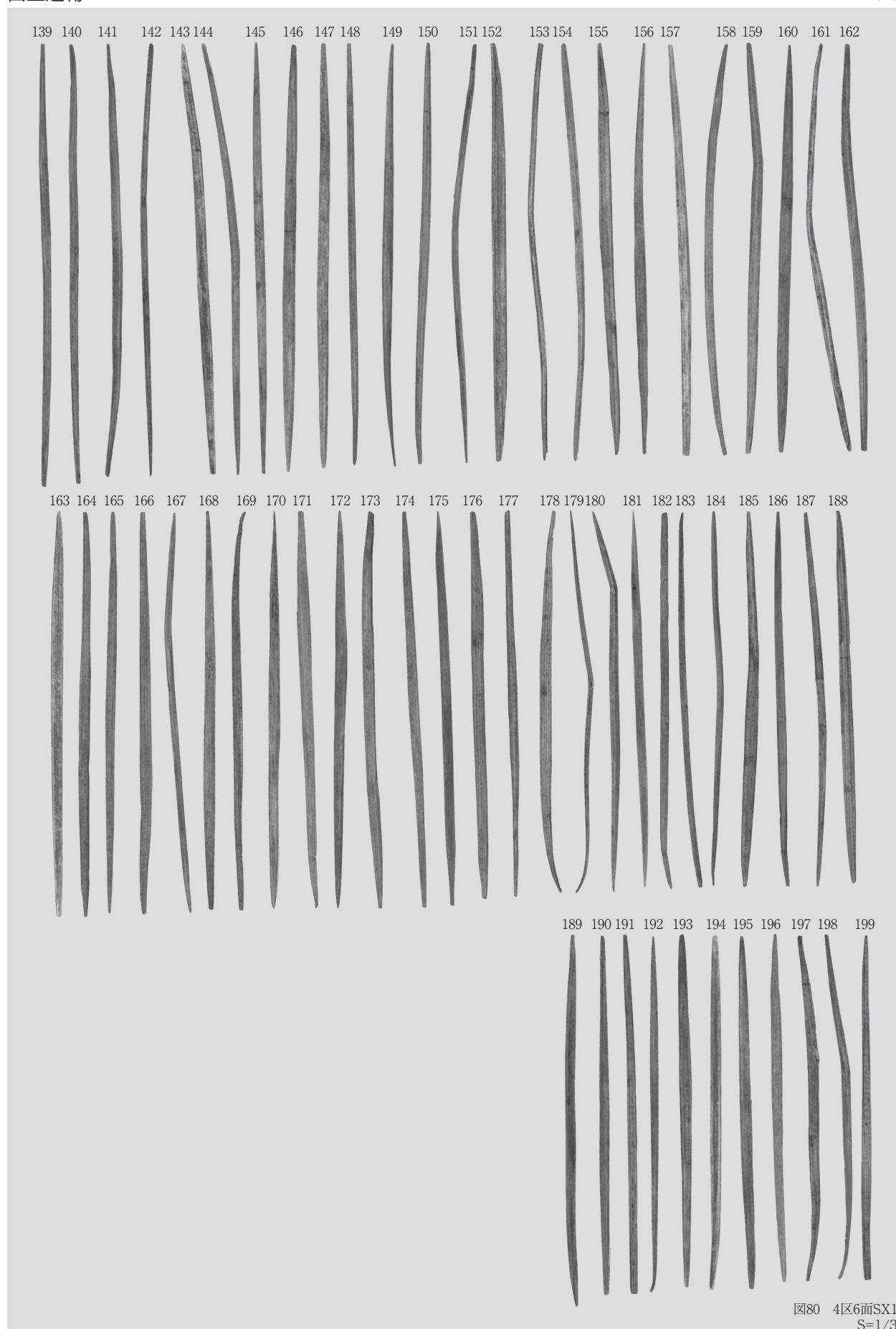


図79 4区6面SX1
S=1/3



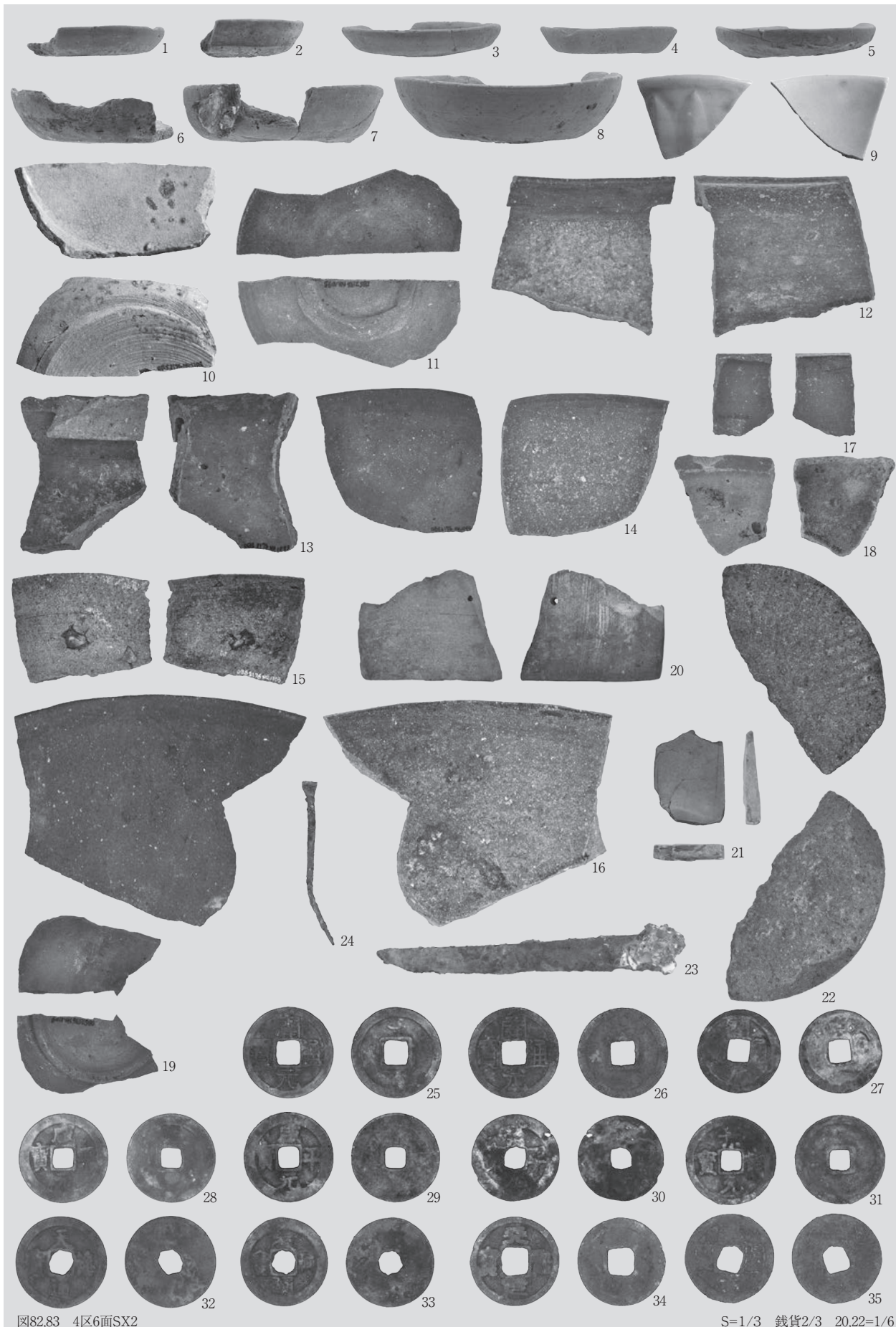
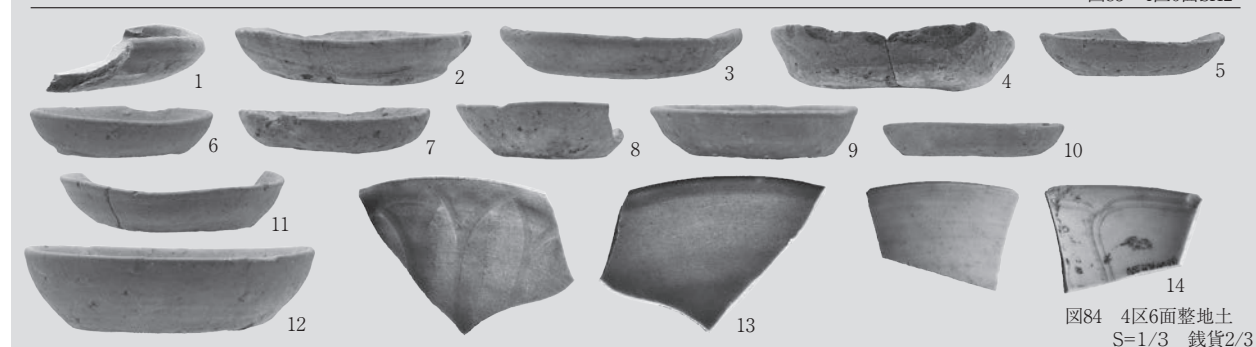
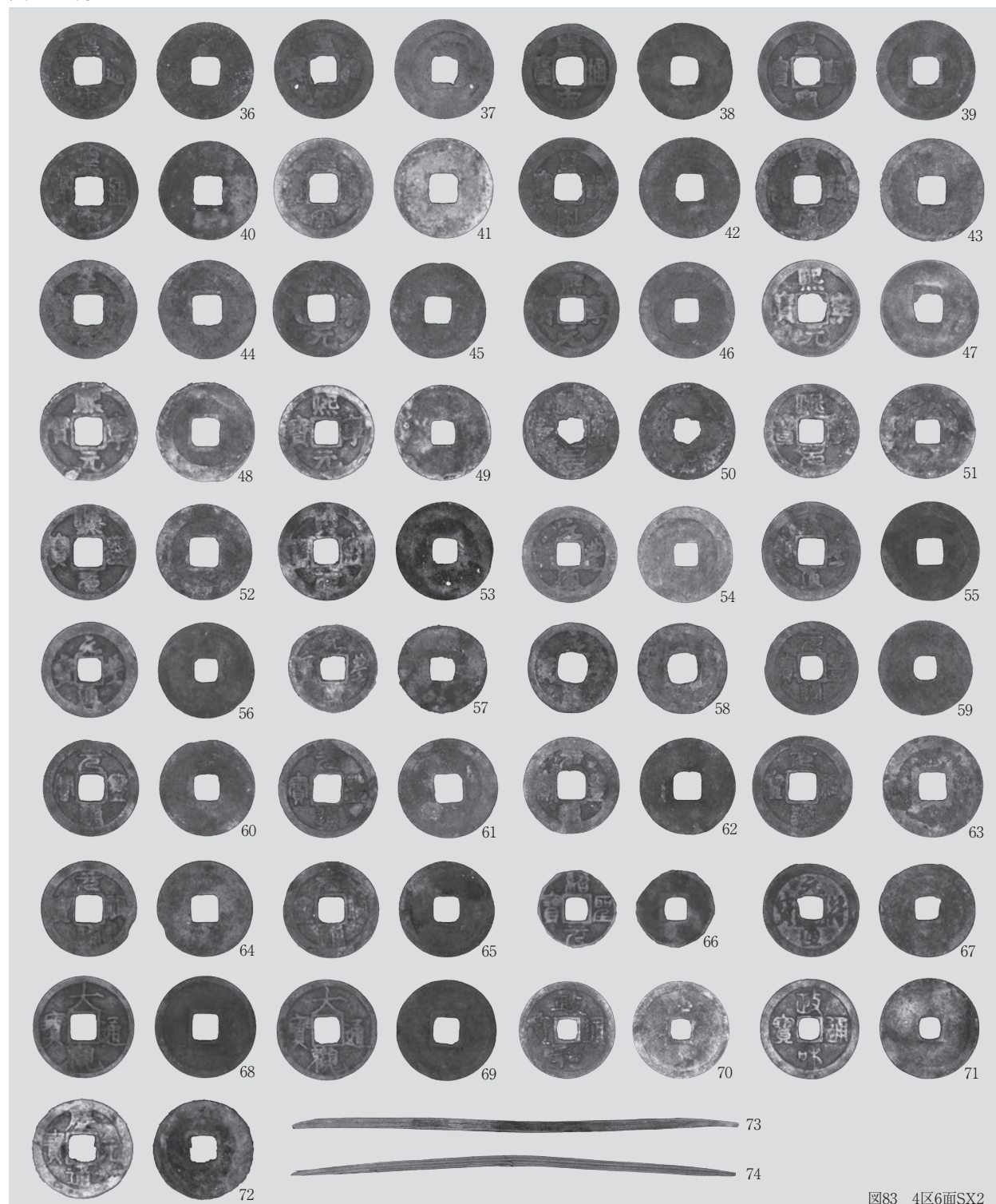


図82.83 4区6面SX2

S=1/3 錢貨2/3 20,22=1/6



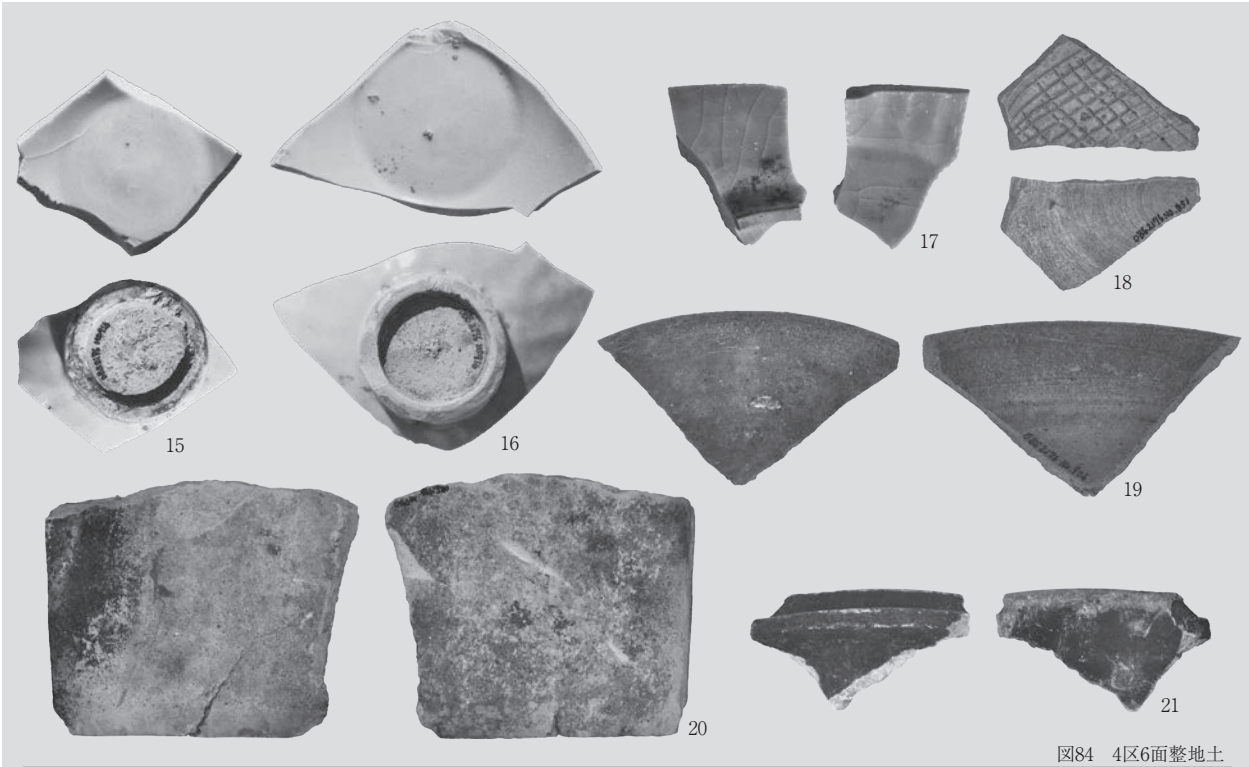


図84 4区6面整地土

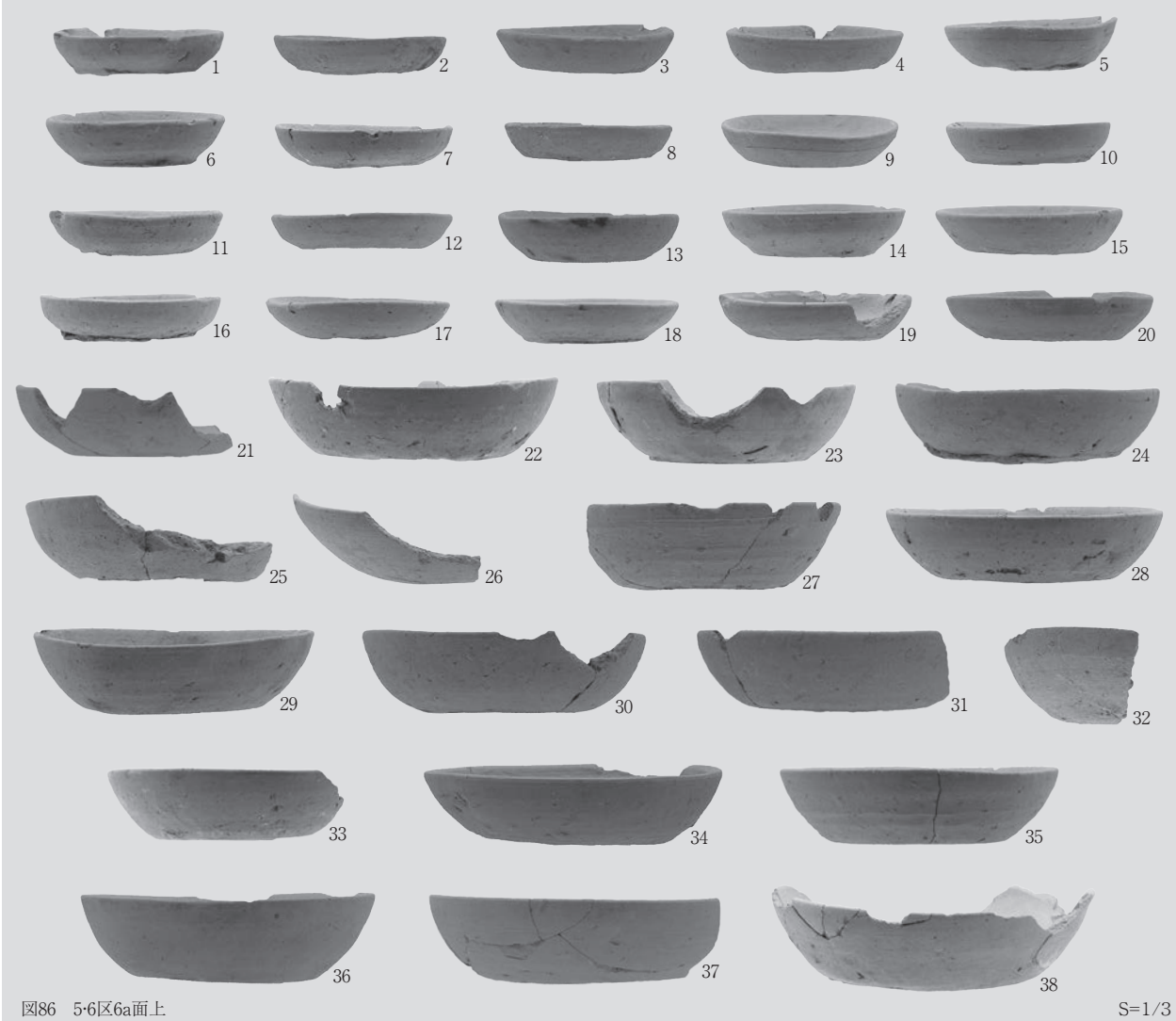


図86 5-6区6a面上

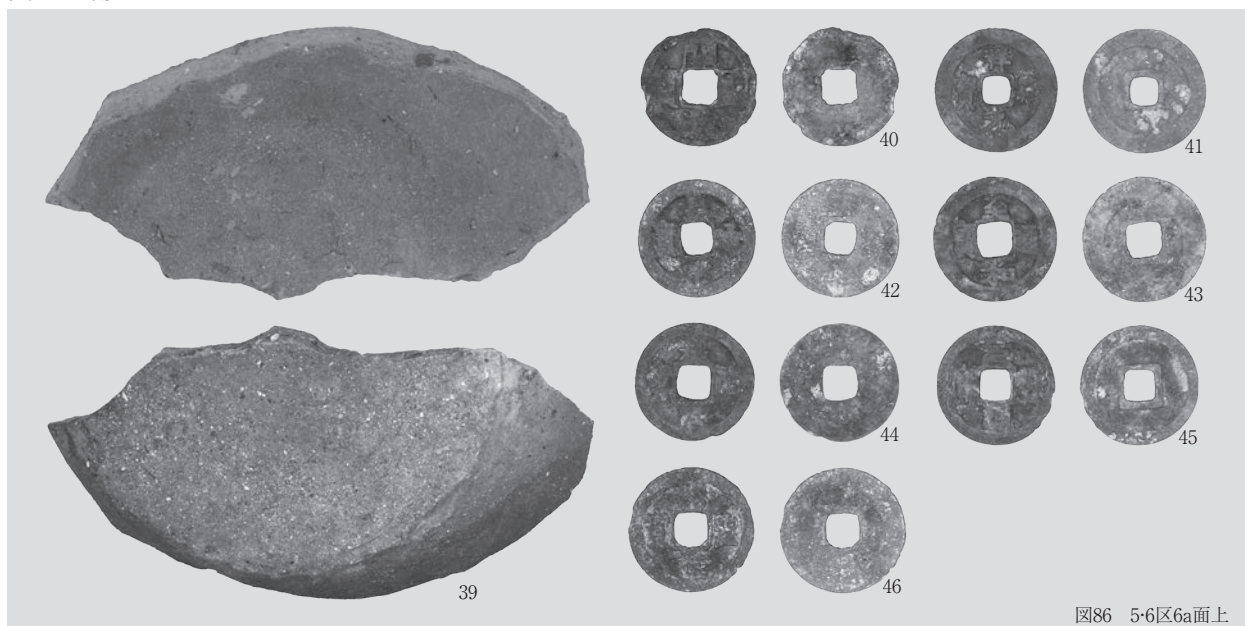


図86 5-6区6a面上

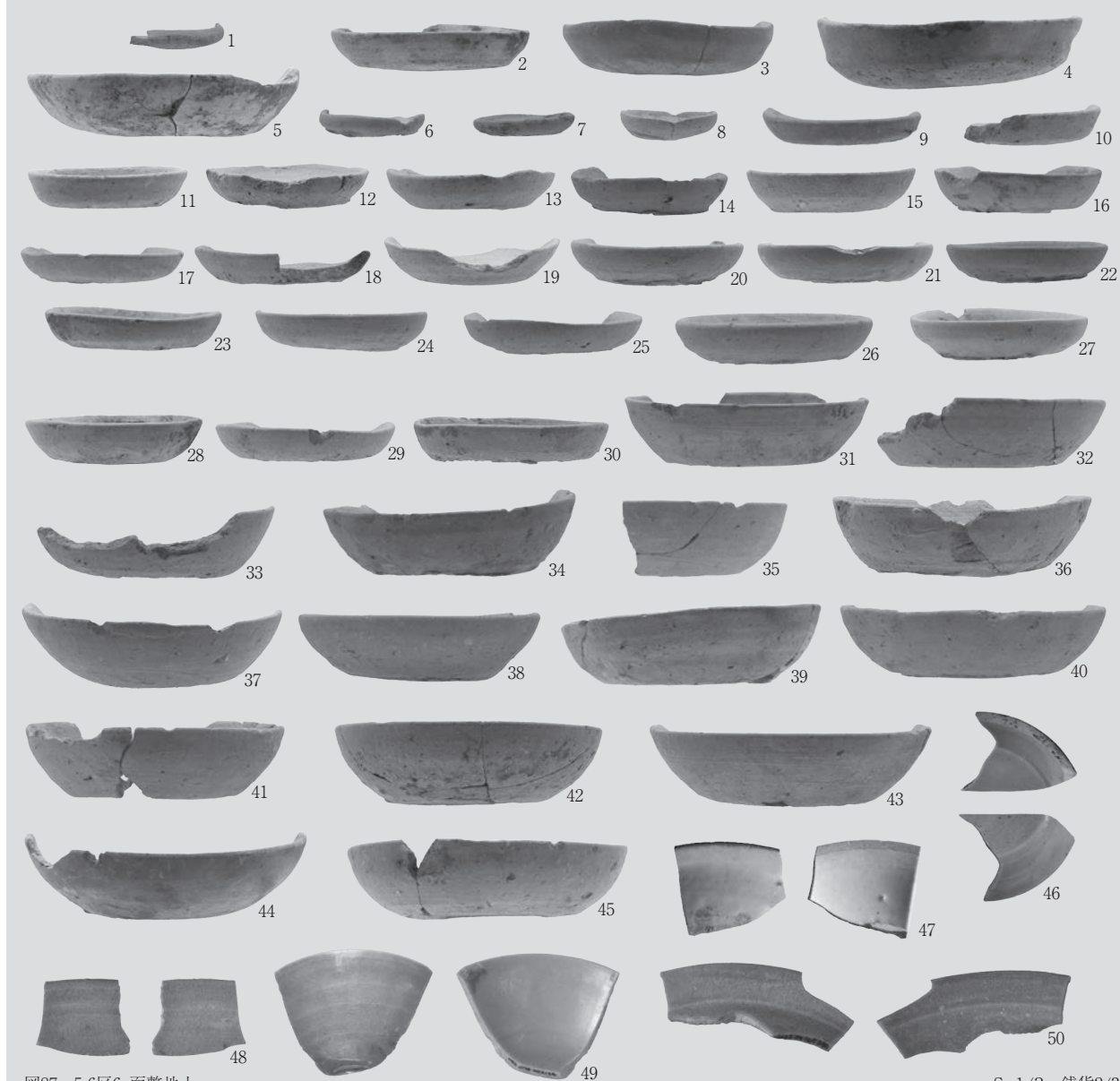
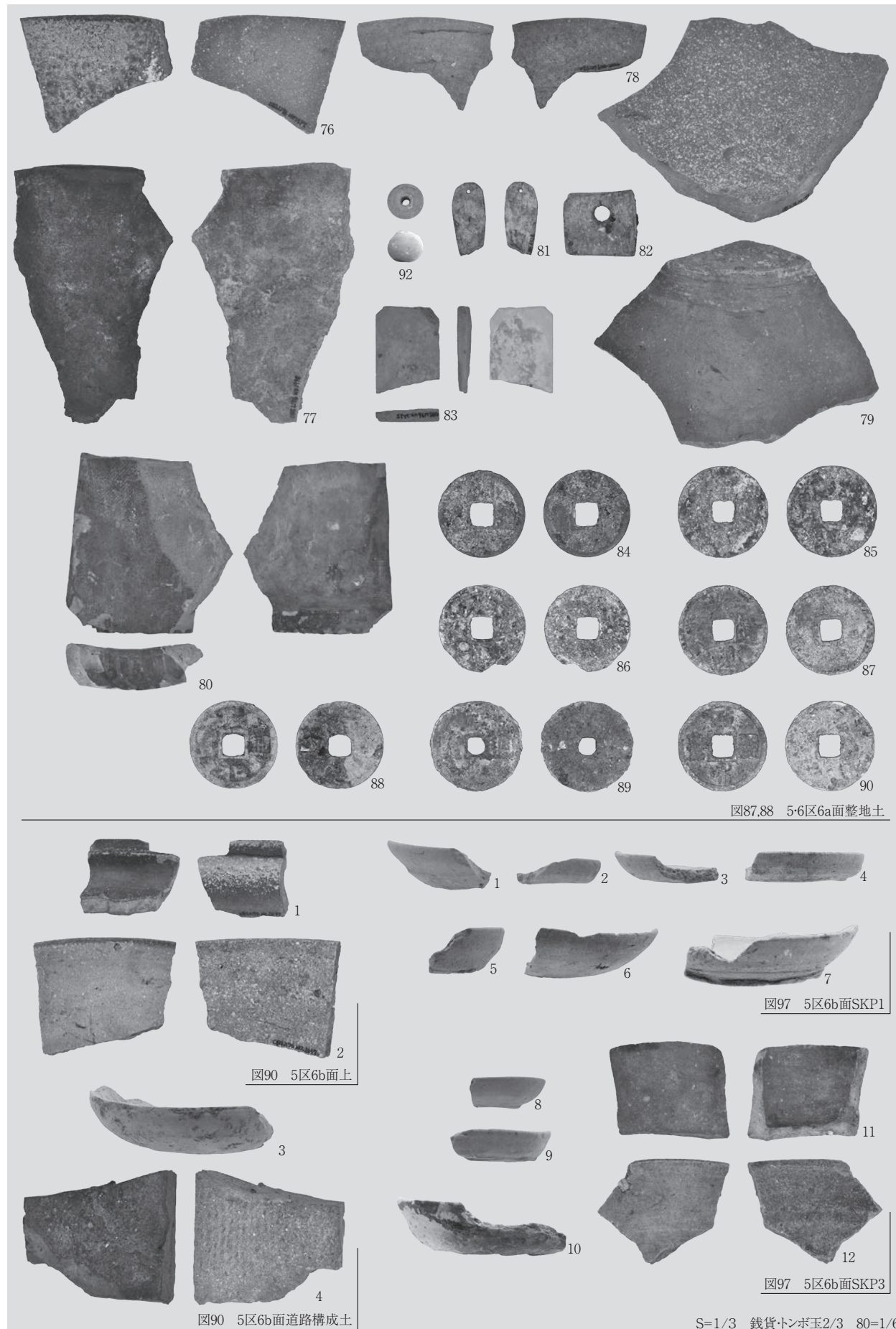


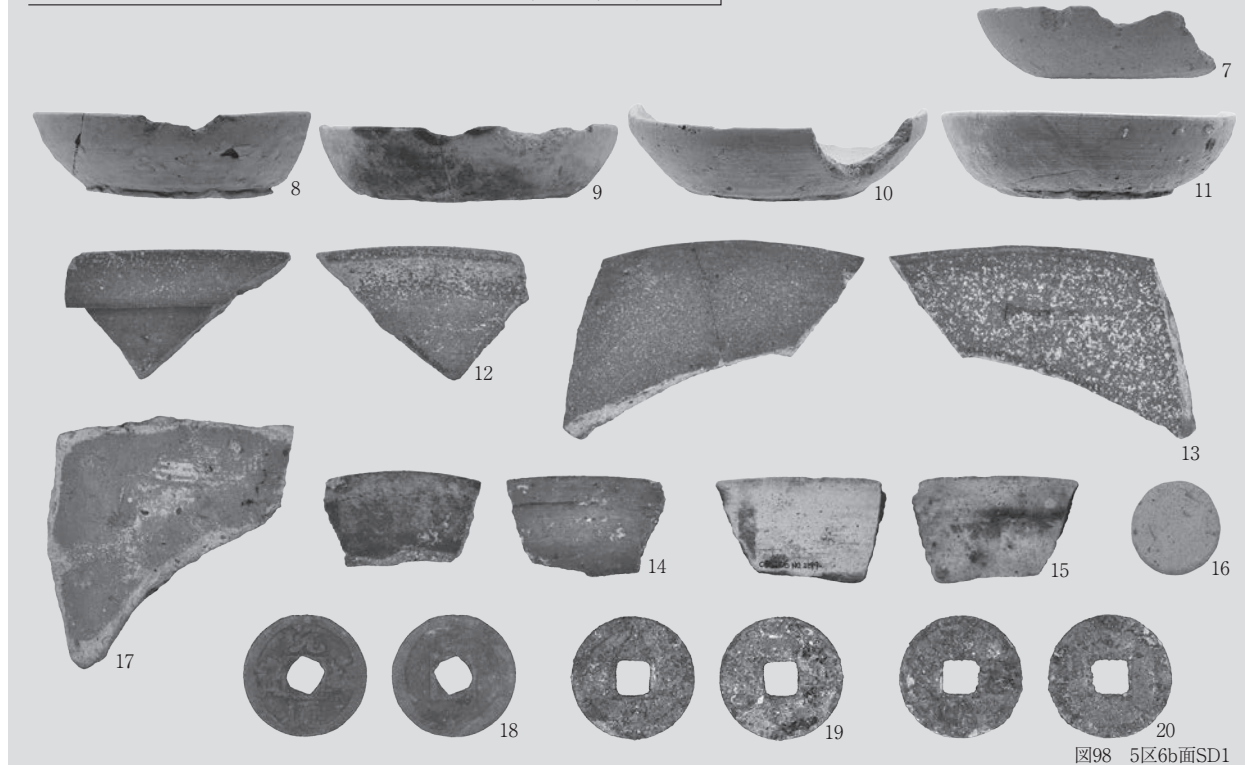
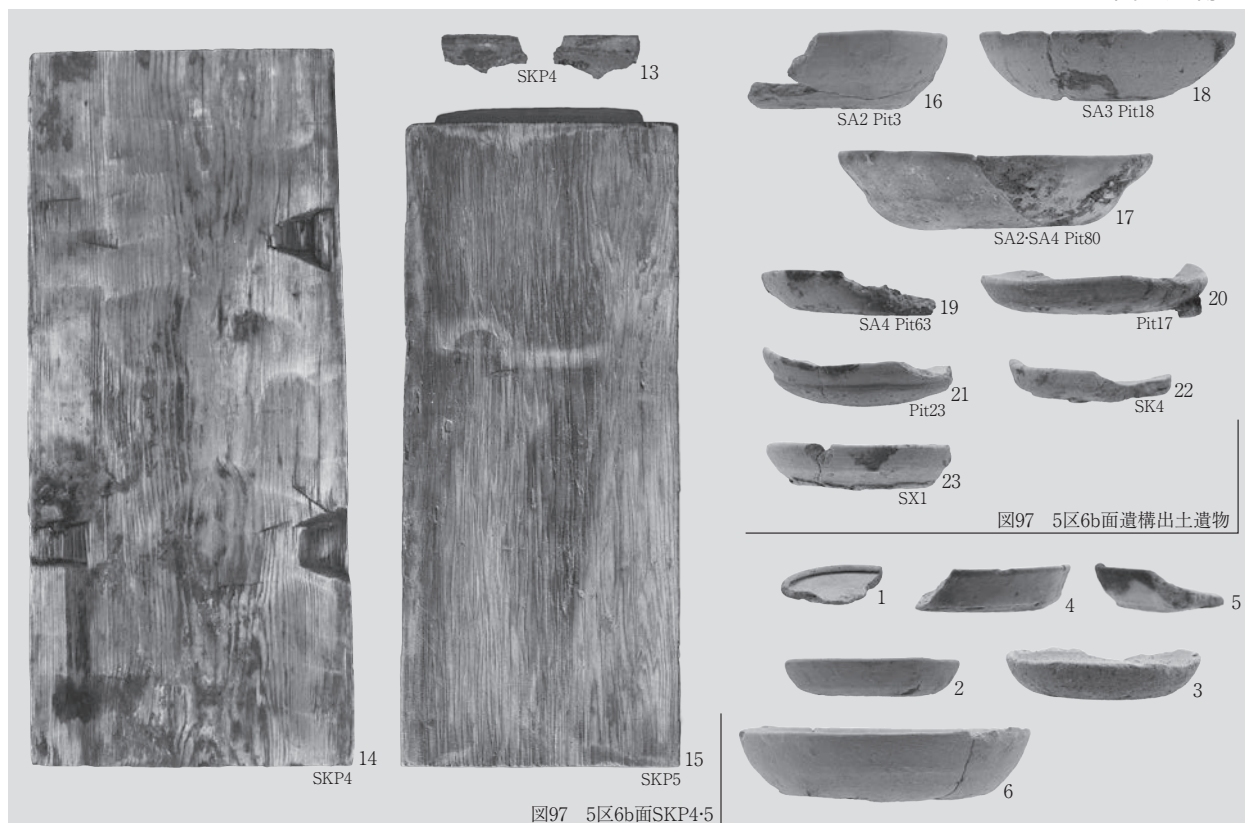
図87 5-6区6a面整地土

S=1/3 錢貨2/3



図87 5・6区6a面整地土





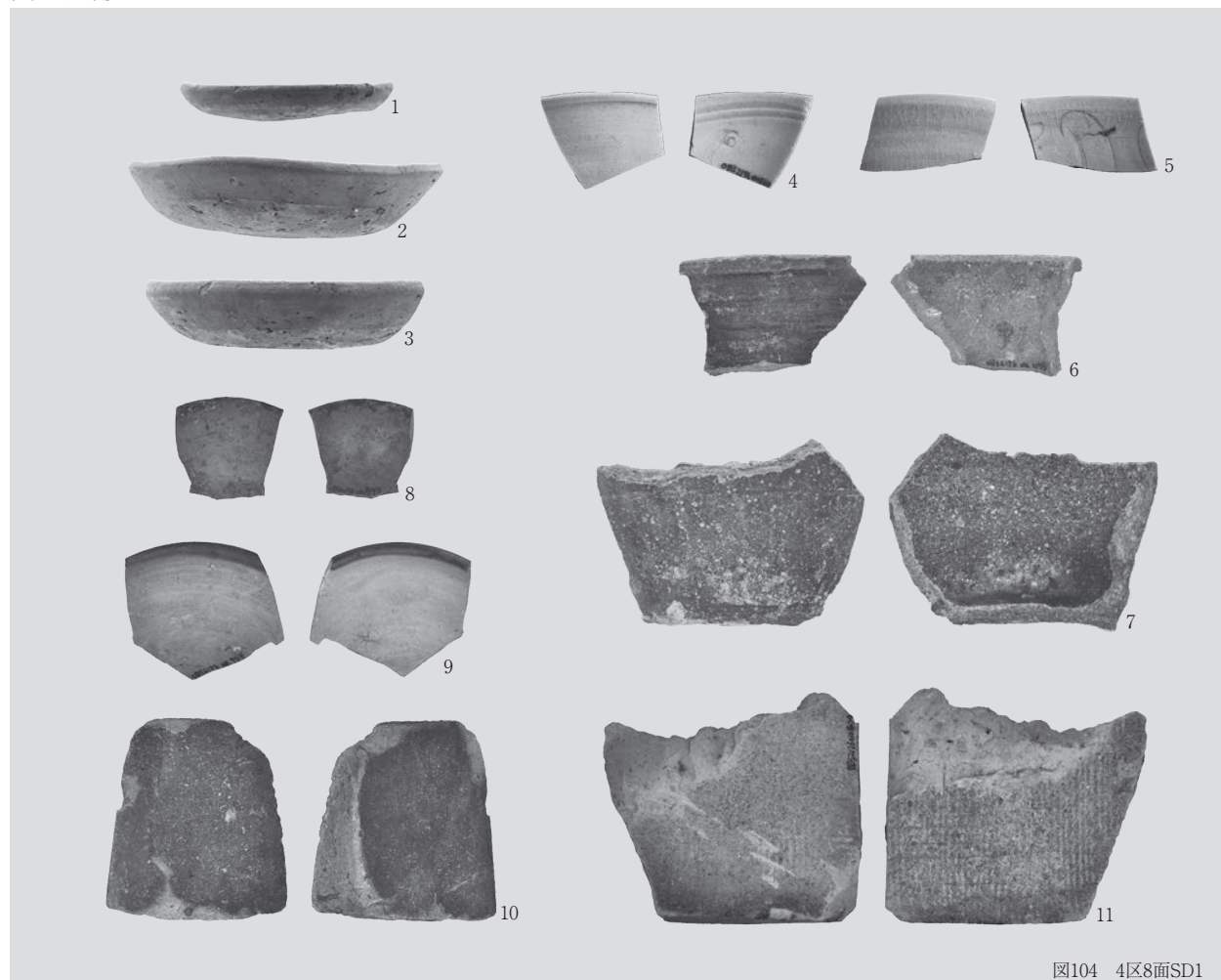


図104 4区8面SD1



図106 6区8面基盤層



図106 6区10面上

図111 4区10面下流路

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおくらばくふしゅうへんいせきぐん はつくつちょうさほうこくしょ							
書名	大倉幕府周辺遺跡群 発掘調査報告書							
副書名	雪ノ下三丁目660番3外9筆, 660番3先地点							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	継 実							
編集機関	株式会社 斉藤建設 (埋蔵文化財調査部)							
所在地	〒248-0027 神奈川県鎌倉市笛田1-10-1							
発行年月日	西暦2024年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		緯度 ° ' "	経度 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
おおくらばくふしゅうへん 大倉幕府周辺 いせきぐん 遺跡	かながわけんかまくらしゆきのした 神奈川県鎌倉市雪ノ下 さんちようめ ばん ほか ひつ 三丁目660番3外9筆, ばん さき 660番3先	14204	49	35° 19' 22"	139° 33' 32"	20220207 ～ 20230904	2022年度 516.9㎡ 2023年度 123.6㎡	西御門川雨水 幹線改修工事
所収遺跡	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
おおくらばくふしゅうへん 大倉幕府周辺 いせきぐん 遺跡群	城館跡 都市遺跡	中 世 (12世紀末 ～ 15世紀後半)	中世 大型柱穴列 1列 柱穴列 6列 柱穴 157口 道路遺構 3面 溝 7条 土坑 9基 不整形遺構 7基 中世もしくはそれ以前 自然流路 2条		近世：陶磁器、銭貨 中世：かわらけ 輸入陶磁器 国産陶器 金属製品、輸入銭貨 木製品 自然遺物 奈良・平安時代：土師器、須恵器 弥生時代後期：土器		・13世紀前半の大型土坑から、大量のかわらけ、箸などと共に出土した「建保三年」銘の記された題箋軸木簡。 ・13世紀前葉頃の整地面に伴う門と考えられる大型柱穴列。	
要 約	<p>本調査地は「大倉幕府跡」遺跡として登録されている範囲の西側に位置している。調査原因となった老朽化した暗渠は、西御門川を明治時代後期～大正時代に暗渠化したもので、この川を大倉幕府の西端と考える研究者は多い。</p> <p>調査では、鎌倉時代から室町時代にわたる生活面13面を検出した。調査範囲の南半部分にあたる4～6区では、道路に沿って設けた門と考えられる大型柱穴列とそれに伴う柱穴列、かわらけと箸を多量含む13世紀前半代の大型土坑といった遺構群を検出した。前者は区画に関わるもので、時期的にみても大倉幕府西端の遺構群ではないかと推測する。</p> <p>大型土坑からは「建保三年」（1215年）の銘が記された題箋軸木簡が出土し、こちらも大変重要な記年銘資料として注目される。</p>							

本書は長期間保存を考慮し、すべて中性紙を使用しています。

〔紙質〕	表紙	レザック 66 ホワイトグレー	215kg
	見返し	色上質紙特厚口白	
	本文	上質紙	44.5kg
	写真図版	コート紙	57.5kg

〔印刷〕 電算写植によるオフセット印刷
刷色は黒色
写真図版はモノトーン印刷

○文化財保護・教育普及・学術研究を目的とする場合は、著作権者の承諾なく、この報告書の一部を複製して利用できます。
なお、利用にあたっては出典を明記してください。

○この報告書に係る記録図面類（写真類を含む）を利用する場合は、鎌倉市教育委員会に連絡して、必要な手続きをとってください。

神奈川県鎌倉市

大倉幕府周辺遺跡群 発掘調査報告書

—雪ノ下三丁目 660 番 3 外 9 筆、660 番 3 先地点—

発 行 日 2024 （令和 6）年 3 月 31 日

編集・発行 株式会社 斉藤建設

神奈川県鎌倉市笛田 1－10－1

印 刷 所 有限会社 平電子印刷所

